

福岡県の戦争遺跡

福岡県文化財調査報告書 第274集

2020

福岡県教育委員会

序

明治維新以降の日本は、富国強兵・殖産興業を旗印に近代国家としての体制を整えていく中で、日清・日露戦争を経験し、さらに第一次世界大戦への参戦やシベリア出兵、そして満洲事変から太平洋戦争へと多くの戦争を経験しました。

近年、それらの戦争のために造られた施設などをはじめとした戦争の痕跡が、「戦争遺跡」として認識され、調査研究されるようになってきています。その一方で、戦争を経験された方々が少なくなっており、「戦争遺跡」は適切な把握と評価がされないまま、戦後70余年が経過して消滅したものも多くあります。

このような状況の中、福岡県教育委員会では、県内の戦争遺跡の適切な保護の推進を図るため、平成29年度から3年間調査を行いました。

このたび、その成果として県内の「戦争遺跡」の体系的な整理と評価を行い、報告書として取りまとめることができました。

本報告書が戦争の記憶・記録を次代に継承していくための一助となるとともに、今後、遺跡の周知化や保存活用など、広く御活用いただければ幸いです。

最後に、調査の実施及び報告書の作成にあたり、調査指導委員会委員及び調査員の皆様、市町村をはじめ多くの方々に御支援・御協力いただきましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 城戸 秀明

例 言

1. 本書は、平成29～31年度（令和元年度）（2017年4月～2020年3月）に文化庁からの国庫補助をうけて福岡県教育委員会が実施した福岡県内の戦争遺跡（軍事に関する遺跡）にかかる調査報告書である。
2. 調査にあたっては福岡県戦争遺跡調査指導委員会を設置し、また調査員を委嘱し、その指導及び連携のもとに現地調査や資料作成等を行った。3か年の戦争遺跡に関する調査において、指導委員会委員・調査員をはじめ、市町村の文化財担当者や関係諸機関、その他多くの方々に御協力・御支援をいただいた。深く感謝いたします。
3. この報告書における「戦争遺跡」は、戦争に直接的に関わる構造物や痕跡並びにそれらが埋蔵されていると想定される場所を指しており、今回把握した物件を【遺跡等】として巻末に一覧表として示した。それは未だ十分なものではなく、「遺跡」の中には位置や内容が未詳の所もあり、各所在地とした地点の全てを地図上に示しているものではない。【碑等】とした慰霊碑や忠魂碑・忠霊塔などについては、同じく巻末に一覧表を示したが、遺跡という扱いはしていない。
4. この報告書において、「聯隊」を「連隊」としたように、用語の旧字体を新字体に改めたものがある。また、師団・連隊等の号数は漢数字表記が正式であるが、本文中や一覧表ではアラビア数字に改めたものがある。
5. 各種文献で「掩体壕」とする表記を多く見るが、この報告書では文化財指定名称以外は「掩体」とした。また、「加農砲（カノン砲）」も陸軍の制式呼称として「加農」とした。
6. 第二次調査（詳細・重点調査）については、原則的に所在市町村の担当者とともに調査を行った。
7. Ⅲ-5.「各遺跡の詳細」および第14～26図「戦争遺跡分布図」で使用した地図は、国土地理院の1/25,000・1/50,000地形図、1/200,000地勢図を使用し、編集・加工して掲載した。
8. Ⅲ-5.「各遺跡の詳細」に挿入した遺構配置図の中には前藺廣幸氏作成のものがあり、また、第12・13図は宗像市文化財課及び草場啓一氏から提供を受けた。
9. 本報告書の本文中に示した参考文献は「Ⅵ おわりに」の末尾に掲載した。
10. 自治体史誌等をもとにした史料調査の集成については諸原真樹が担当し、渡部邦昭が補筆・編集して、伊崎俊秋・森井啓次が監修した。
11. 本書の執筆は小川泰樹・森井・渡部・伊崎が分担し、目次に示した。編集は伊崎・小川が担当した。

本文目次

〔用語解説〕	iv
I はじめに (伊崎・渡部)	1
1. 調査に至る経過	2
2. 調査の経過	2
3. 調査の組織	8
4. 福岡県における部隊等変遷史	10
II 福岡県の近代遺跡・戦争遺跡に関する調査 (伊崎)	15
1. 福岡県の近代遺跡の調査	15
2. 全国の戦争遺跡に関する動向	16
3. 福岡県の埋蔵文化財と戦争遺跡	21
4. 戦争遺跡の史跡指定等	25
III 福岡県の戦争遺跡 (森井・小川・渡部・伊崎)	27
1. 概要	27
2. 第一次調査(悉皆調査)	27
3. 第二次調査(詳細・重点調査)	28
4. 史料調査	29
5. 各遺跡の詳細	30
1 古城山砲台・堡塁〈北九州市門司区〉	31
3 矢筈山堡塁(砲台)〈北九州市門司区〉	33
4 手向山(田向山)砲台〈北九州市小倉北区〉	35
7 笹尾山砲台〈北九州市小倉北区・門司区〉	37
8 富野堡塁〈北九州市小倉北区〉	38
9 高蔵山(高倉)堡塁〈北九州市小倉南区〉	39
91 西照空陣地〈北九州市小倉南区〉	41
127 石峰山高射砲陣地(7cm砲)〈北九州市若松区〉	42
129 総牟田(灘山)高射砲陣地〈北九州市若松区〉	43
130 石峰山照空分隊(水上越北側陣地)〈北九州市若松区〉	44
228 垂見峠砲台(湯川山砲兵陣地)〈遠賀郡岡垣町〉	45
257 大島砲台〈宗像市〉	46
260 津和瀬砲台〈宗像市〉	48
262 沖ノ島砲台〈宗像市〉	49
310 歩兵第三百三十二連隊陣地〈糟屋郡粕屋町〉	51
322 西戸崎飛行場〈福岡市東区〉	53
345・346 陸軍福岡第二十四連隊・西部軍司令部庁舎〈福岡市中央区〉	54
377 小呂島砲台〈福岡市西区〉	56

389	海軍玄界航空基地〈糸島市〉	58
435	第十六方面軍（西部軍）司令部（地下壕）〈筑紫野市〉	60
444	大刀洗飛行場〈三井郡大刀洗町・朝倉市・朝倉郡筑前町・小郡市〉	62
459	大刀洗北飛行場〈朝倉郡筑前町〉	64
466	大刀洗北飛行場掩体〈朝倉郡筑前町〉	65
478	大刀洗飛行場関係射撃場（陸軍射撃訓練場）〈小郡市〉	66
512-514	陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地〈久留米市〉	67
515-517	陸軍久留米歩兵第四十八連隊〈久留米市〉	69
532	岡山飛行場（筑後飛行場）〈八女市〉	71
543	大牟田市役所の防空監視哨・防空障壁・高射機関銃台座〈大牟田市〉	72
544	三井化学（株）大牟田工場〔旧三池石油合成（株）〕〈大牟田市〉	73
546	三井金属鉱業（株）三池事務所〔旧三井軽金属（株）〕〈大牟田市〉	74
593	（築城基地）広末弾薬庫〈築上郡築上町〉	75
596	稲童1号掩体壕（掩体群）〈行橋市〉	76
IV	遺跡の特徴	（森井） 78
1.	陸軍連隊（師団）の設置	78
2.	下関要塞	78
3.	陸海軍の飛行場	79
4.	本土決戦に向けた陣地構築	81
5.	工場など	81
V	総括	（伊崎・渡部） 84
1.	福岡県における戦争遺跡調査の課題	84
2.	福岡県の戦争遺跡の保存・活用	86
3.	文献史料調査の成果と課題	88
VI	おわりに	（小川） 89
○	参考文献	90
○	日本の軍事にかかる年表：福岡県関係	93
○	戦争遺跡分布図	〔折込〕 94-95
○	福岡県戦争遺跡等一覧表・史料調査表について	107
○	福岡県戦争遺跡等一覧表	108
○	福岡県戦争遺跡等一覧表関係文献	188
○	史料調査表1：福岡県内自治体史等戦争関連記事集成	192
○	史料調査表2：福岡県関連部隊等記事集成	212

挿図目次

第1図	第1回戦争遺跡調査指導委員会	4
第2図	第2回戦争遺跡調査指導委員会	4
第3図	第3回戦争遺跡調査指導委員会	4
第4図	第3回戦争遺跡調査指導委員会	4
第5図	第二次調査状況（北九州・白島）	5
第6図	第二次調査状況（北九州・藍島）	5
第7図	第二次調査状況（宗像・津和瀬）	5
第8図	第二次調査状況（糸島・玄界基地）	5
第9図	福岡県内所在主要部隊の変遷（1）	11
第10図	福岡県内所在主要部隊の変遷（2）	12
第11図	北九州所在の陸軍工廠組織の推移	13
第12図	大島砲台配置図（1/750）	83
第13図	大刀洗北飛行場平面復元図（1/20,000）	83
第14図	戦争遺跡分布図〔福岡県全域〕（1/400,000）	〔折込〕 94-95
第15図	戦争遺跡分布図〔北九州地区1〕（1/50,000）	95
第16図	戦争遺跡分布図〔北九州地区2〕（1/50,000）	96
第17図	戦争遺跡分布図〔北九州地区3〕（1/50,000）	97
第18図	戦争遺跡分布図〔宗像地区〕（1/50,000）	98
第19図	戦争遺跡分布図〔福津地区〕（1/50,000）	99
第20図	戦争遺跡分布図〔大島・海の中道地区〕（1/50,000）	100
第21図	戦争遺跡分布図〔糟屋・福岡地区〕（1/50,000）	101
第22図	戦争遺跡分布図〔糸島地区〕（1/50,000）	102
第23図	戦争遺跡分布図〔大刀洗地区〕（1/50,000）	103
第24図	戦争遺跡分布図〔久留米・八女地区〕（1/50,000）	104
第25図	戦争遺跡分布図〔大牟田地区〕（1/50,000）	105
第26図	戦争遺跡分布図〔築城地区〕（1/50,000）	106

表目次

第1表	福岡県戦争遺跡等一覧表	108-187
第2表	福岡県戦争遺跡等一覧表関係文献	188-191
第3表	史料調査表1：福岡県内自治体史等戦争関連記事集成	192-211
第4表	史料調査表2：福岡県関連部隊等記事集成	212-232

【用語解説】

次の文献等を参照し、または一部引用して、報告書に使用した用語の説明を行う。

- ・『兵旅の賦 第1巻』(案浦照彦 1976.8 西日本新聞社)
- ・『事典 昭和戦前期の日本—制度と実態—』(百瀬孝 1990.2 吉川弘文館)
- ・『広辞苑 第四版 (第三刷)』(1993.9 [1955.5 第一版第一刷] 岩波書店)
- ・『嗚呼帝國陸海軍』(暁教育図書 1980.11) ・『戦時用語の基礎知識』(北村恒信 2002.9 光人社NF文庫)
- ・『日本陸軍の火砲 高射砲』(佐山二郎 2010.11 光人社NF文庫)

- 総軍・方面軍・軍……戦時中及び外地に置かれた陸軍部隊で、複数の師団等を隷下に置き作戦を行う戦略単位。
- 師団……陸軍部隊の一つで、司令部を有し、独立して作戦する戦略単位である。平時は天皇直隷。歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などの諸兵科(兵種)からなるが、大戦末期には戦車師団や飛行師団もあった。
- 旅団……連隊の上位、師団の下位。多くの場合は2個の歩兵連隊から成る歩兵旅団だが、騎兵旅団や砲兵旅団、また諸兵科混合で、師団の編成に入らない独立混成旅団などもあった。
- 連隊(聯隊)……師団・旅団の下位、大隊の上位にある。兵科(兵種)ごとに編成される独立団隊であり、平時は一つの兵営に駐屯し、教育訓練、警備等に任ずる。歩兵連隊と騎兵連隊では、天皇から軍旗が授与された。
- 大隊……連隊の下で、中隊の上。指揮官が直接指揮できる最大の部隊で、戦術単位とされた。小規模兵科では師団直屬。
- 中隊……軍隊編成の一。大隊または連隊の構成単位である。平時の最小単位で、訓練や兵営生活における基本単位となった。戦時等には小隊、分隊に分割される。
- 輜重〔しちょう〕……軍隊に付属する糧食・被服・武器・弾薬など軍需品の総称、またはその輸送に任ずる兵科を指す。
- 要塞……1895(明治28) 3.30の「要塞司令部條例」で「永久ノ防禦工事ヲ以テ守備スル地ヲ要塞」とした。
- 衛戍〔えいじゅ〕……軍隊が永く一つの土地に駐屯することをいう。衛戍病院・衛戍監獄などの語にも使われた。
- 造兵廠・工廠……陸海軍の兵器等製造工場。また、それを管轄する機関の総称である。実際の現業機関の名称は各種ある。
- 陣地……戦闘部隊が敵と交戦する目的で拠点を設置し、攻撃・防御の準備・配置をした場所をいう。
- 烹炊所〔ほうすいしょ〕……煮たり炊いたりした場所で、炊事場のこと。
- 砲台……火砲発射位置に設置し、砲などを敵弾から守り、自軍の砲撃を有利にする設備を整えた構築物。仮設のものから煉瓦組み、コンクリート造のものまでがあり、火薬庫や兵舎などを併設したものもある。
- 堡壘……敵の襲撃を防ぐため、石・土・砂・コンクリートなどでかためた堅固な構築物(とりで)に横牆、側牆を設けて近接戦闘用の小口径火砲を備え、砲台等の背面防御を行うことを目的としたものをいう。
- 高射砲……飛行機を射撃するための中小口径砲である。発射速度が速く射界が広い。海軍では高角砲という。
- 火砲……口径の比較的大きい火器・大砲のことをいう。
 - 白砲……火砲の一。砲身が口径に比べて短く、射角の大きい砲をいう。垂直威力を目的とし、曲射(射角45度以上)を主務とする射撃のための砲。ただし、擲射を行う場合もある。
 - 榴弾砲……弾体内に炸薬を詰め、到着点で炸裂する装置の砲弾のこと。掩体後方の人馬材料を射撃するため弾道を湾曲し、擲射(射角45度以下)を主務とする。曲射を行う場合もある。
 - 加農(砲)……砲身が長く、多量の火薬を用い、主に射角45度以下の低弾道による遠距離射撃に適した砲。カノン砲。
- 掩体〔えんたい〕……敵弾に対して射手や航空機を擁護する諸設備をいう。個人用塹壕は通称タコツボ。
- 防空壕……空襲の際に退避するため、地面や崖面を掘って作った穴や構築物。内務省は昭和15年12月以降構築に関する通牒を発し、昭和18年6月の防空退避施設の整備強化通達の頃から防空壕掘りが盛んとなった。
- 照空灯……サーチライトのこと。アーク灯を光源とし、反射鏡で遠距離を照射する。探照灯、照空灯、探海灯ともいう。
- 防空監視哨……全国各地の海岸線や山岳地帯に設置して、敵機を早期発見して各機関に通報するための見張り所。運営は当該警察署が管掌した。防空監視隊は昭和12年(1937)4月の「防空法」制定後に組織化された。
- 聴音壕……接近してくる飛行機の爆音で、敵味方の区別、数、距離などを聞き分けるための壕で、直径3m、深さ2m前後の円筒形やラッパ形をなし、煉瓦やコンクリートで造られた。
- 秘匿飛行場……本土決戦のため整備された特攻部隊の発進基地で、飛行場そのものが秘匿された。1945年4月から全国約40か所に設定する計画で、津屋崎・福島・甘木などがあつた。
- 奉安殿……戦前、学校で御真影や教育勅語を不敬のないように保管するために校舎から離して設けた特別の建物。
- 軍用道路……軍事上の目的で設置、使用された道路。砲台等への道路には石垣や転落防止設備が施されたものもある。
- 三角兵舎……半地下式で切妻形式の屋根を架けた兵舎。横断形が三角形をなす。
- 忠魂碑……戦死者の魂を祀るもので、遺骨はない。忠霊碑・尽忠碑・碧血碑などともいう。
- 忠霊塔……戦死者の遺骨を納めるもの(墳墓)をいう。

I はじめに

明治新政府は明治2年(1869)7月、太政官制を採用し、二官六省の中に兵部省を設置した。ここからを日本の近代軍政の始まりと捉える見解があり、概ね妥当と考えられる。

その後、政府は「富国強兵」の一環として明治4年(1871)8月に全国に4鎮台を設置する。同5年(1872)11月には徴兵が告諭される。

福岡県では明治8年(1875)4月、小倉に歩兵第14連隊が設立された。その後同19年(1886)に福岡に歩兵第24連隊本部、さらに同30年(1897)4月に久留米に歩兵第48連隊が設置された。同31年(1898)11月に小倉第12師団、同40年(1907)12月には久留米第18師団が開庁し、ここに軍都としての小倉及び久留米の基礎が築かれた。

明治20年(1887)に関門海峡守備の砲台が下関と小倉に建設され、下関要塞地帯へ発展していく。大正8年(1919)10月には陸軍大刀洗飛行場が完成し、北部九州一帯は軍事の要衝となる。

昭和6年(1931)9月以降、日本は大規模な戦争へと傾斜していくが、本土防衛のために同10年頃から玄界灘・響灘沿岸や島嶼に砲台を設置する。同16年(1941)12月からの太平洋戦争も末期に近くなると福岡県八幡製鐵所への爆撃をはじめ、直接日本本土へ空襲が行われるようになる。

昭和20年(1945)4月1日に米軍が沖縄に上陸し、いよいよ本土決戦に向けた対応がなされていくことになる。連合軍による日本本土上陸作戦は南九州方面に対する「オリンピック作戦」と関東方面への「コロネット作戦」が同年5月に指令されていたが、日本の第十六方面軍は米軍が北九州に上陸することも想定し、響灘・玄界灘沿岸に陣地構築を行った。また、急造の秘匿飛行場を各地に建設し、本土防衛に備えた。

このような戦争に関係する施設は、とくに太平洋戦争に関係する物件にしても、戦後70余年を経てまだ各地に遺存しているが、さまざまな要因で滅失していく危機にさらされているものもある。こういった「戦争遺跡」について、埋蔵文化財の範疇での位置づけを考えようと、福岡県としての取組みを始めることとした。

「戦争遺跡」に係る定義は難しいところがある。文化庁は「近代遺跡(軍事に関する遺跡)」という表現をしており、正式に「戦争遺跡」の用語を用いているわけではない。この報告書においては「戦争遺跡」として明治維新以降、太平洋戦争が終結するまでの戦争(戦い)に直接的に関わる構造物や痕跡を取り上げることとした。具体的には、旧陸軍・海軍に係る官衙や病院、要塞における砲台・堡壘、陣地、飛行場、退避壕、防空壕といったもので、地上・地下を問わず遺存しているものである。戦時中においては、当然ながら一般の道路・鉄道も、市役所・役場も、また各種生産工場もその多くは軍事に関わるものであったが、それらのほとんどについて戦争遺跡とはしていない。ここでは直接的な関わりを重視したものを取り上げている。また、慰霊碑や忠魂碑といった碑についても、戦争に直接関わりがあったものを取り上げて一覧表の作成を行ったが、遺跡という扱いはしていない。

巻末の戦争遺跡及び碑等の一覧表については、さまざまな情報をもとに、当該市町村に照会するなどして作成したが、まだ十分なものではなく、今後において、加除を含めた集成がなされるべきものであることをお断りしておきたい。

1. 調査に至る経緯

文化庁（建造物課・現文化財第二課）は平成2年度から「日本近代化遺産総合調査」を開始した。これに関して、福岡県教育委員会では平成3～4年度に調査を行い、同5年3月に報告書を刊行した。

また、文化庁では、平成6年（1994）9月に「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」を発足させ、その報告が同8年（1996）7月になされると、平成8年度から8か年計画で全国調査を行うこととした。その中の政治分野の中に「軍事に関する遺跡」があった。

その所在調査完了後、近代の軍事遺跡（戦争遺跡）については、文化庁は平成14年（2002）8月に全国50件を詳細調査の対象に選定した。福岡県は「大刀洗飛行場関係遺跡」及び「旧陸軍歩兵第五十六連隊関係遺跡」の2か所であった。

こういった推移の中で、福岡県教育委員会では、平成20年（2008）12月の福岡県文化財保護審議会史跡部会に県指定史跡案件として久留米市の「旧陸軍墓地」を提案した。現地調査を行った専門委員の評価は決して低くなかったが、県内全域での戦争関連遺跡の実態が未解明であり、その時点での判断が保留された。

そのため、福岡県下の戦争に関する遺跡の現状把握を行うことが課題としてあったこと、そして戦争に関係する施設はまだ各地に遺存してはいるものの、開発等により記録されることなく消滅の危機にさらされているものもあることに鑑み、その「戦争遺跡」にかかる周知の埋蔵文化財包蔵地化の取組みの一環として調査を進めることとした。

2. 調査の経過

a. 福岡県戦争遺跡調査基本方針

まず、戦争遺跡を調査するにあたり、その基本方針を次のとおり定め、それに則って実施していくこととした。

〔福岡県戦争遺跡調査基本方針〕

1 必要性と目的

戦争の記憶・記録を次代に継承していくことは、第二次世界大戦後、平和国家として再出発した我が国に課せられた非常に重要な使命である。

しかしながら、戦争に関する遺構と遺構に含まれる遺物であって、歴史上又は学術上重要であるもの（以下「戦争遺跡」という。）があるにもかかわらず、その認識・評価がいまだ定まっていないうという面もあることから、大戦終結後70年以上が経過した今日、その多くが開発や経年劣化の進行により破壊や滅失の危険にさらされている。

このため、福岡県教育委員会において、県内の戦争遺跡について悉皆調査を行い、戦争遺跡の適切な保護の推進に資するものとする。

2 対象・範囲

調査の対象は、明治元年（1868）から、第二次世界大戦終結時の昭和20年（1945）までの間に、土地（海域を含む。）に形成された構築物等のうち、次に掲げるものとする。

- ①政治・行政関係：陸軍省、海軍省などの地方官衙、師団司令部、連隊本部その他の部隊関連施設、陸軍病院、陸軍学校、研究所など
- ②軍事・防衛関係：要塞（堡壘・砲台）、高射砲陣地、飛行場、陸軍演習場、練兵場、通信所、軍港、洞窟陣地、特攻基地、退避壕、試射場など
- ③生産関係：陸軍造兵廠、航空機製作工場その他の軍需工場など
- ④戦闘地・戦場関係：空襲被災地、被災痕跡（弾痕・爆弾穴）など
- ⑤居住関係：防空壕、俘虜収容所など
- ⑥埋葬関係：陸軍墓地、海軍墓地、捕虜墓地など
- ⑦交通関係：軍用鉄道軌道、軍用道路など
- ⑧その他：航空機の墜落跡、記念碑、慰霊碑、忠霊塔、忠魂碑、戦没者記念碑、奉安殿、軍馬塚、境界標など

※上記に関連して、通常の発掘調査による遺構・遺物の事例も取り上げる。

3 組織・体制

- ・調査は、文化財保護課と九州歴史資料館が連携して実施する。文化財保護課は事務手続と事業の統括を、九州歴史資料館は調査をそれぞれ主たる任務とする。
- ・調査の対象、方針やスケジュール、遺跡の評価に関して、学識経験者から指導・助言を受けるため「福岡県戦争遺跡調査指導委員会」を設置する。

4 スケジュール（詳細は別表のとおり）〔*別表省略〕

平成29年度：既存情報の把握、整理

平成30年度：一次調査（基礎的な情報収集と整理）

二次調査（重要遺跡の詳細調査）

平成31年度：二次調査（補足調査）

総括（調査成果の分析と評価）

調査内容に基づく成果報告書の作成

5 国庫補助等

埋蔵文化財緊急調査費国庫補助（遺跡詳細分布調査 補助率50%）を適用。

6 調査結果の取扱い

- ・調査の成果は調査報告書として刊行し、県内の文化財関係機関や図書館に送付して幅広く閲覧に供する。
- ・地域にとって特に重要なものについては、文化財保護法第95条に基づき「埋蔵文化財包蔵地」に決定して保護の対象とし、周知の徹底を図る。
- ・特に重要な遺跡については、国、県又は市町村による史跡指定や登録文化財選定による保護を推進する。

b. 第一次調査（悉皆調査）と調査指導委員会

平成29年度は、事務局内部で10月までに種々の打合せを行うとともに、まず「福岡県戦争遺跡調査基本方針」を定め、同時並行して既存情報を集めた「福岡県戦争遺跡調査表」（以下、「調査表」）を作成した。また、その間にも各地の戦争遺跡たる所や慰霊碑・忠魂碑等についての現地調査を随



第1図 第1回戦争遺跡調査指導委員会



第2図 第2回戦争遺跡調査指導委員会



第3・4図 第3回戦争遺跡調査指導委員会

時行った。

そして、10月に第1回福岡県戦争遺跡調査指導委員会（以下、委員会）を開催し、「福岡県戦争遺跡調査基本方針」の説明を行い、調査の進め方やスケジュール等について承認を得た。その後、委員からの意見・指導のもと、県内60の市町村宛てに「調査表」を添えて「戦争遺跡に係る既存情報の整理について（照会）」の文書を発出した。この段階でのリストは遺跡とするもの291件、慰霊碑など613件の合計904件であった。

これに対して平成30年（2018）1月26日を締切りとして回答が寄せられ、その総数は遺跡520、慰霊碑等900の総数1,420件（但し、複数市町村に及ぶものもあるため実数は1,401件）にのぼった。

なお、各市町村史誌における戦争に関する記述を取りまとめる作業も併せて行った。

第2回委員会は平成30年（2018）4月に行橋市で開催し、行橋市指定史跡の「稲童1号掩体壕」などの視察とともに照会結果を報告した。また、委員会に各市町村史誌における戦争関連記述を取りまとめた「自治体史調査結果概要」も示した。委員からは「調査表」の表記の統一や精査、修正後の市町村への再確認、重点調査への取組について等の意見・指摘があった。

第2回委員会での指摘を踏まえて修正した「調査表」について、同年7月、市町村へ再照会の文書を発出した。締切りを8月31日とし、回答を得て追補訂正等を行った結果は遺跡560件、慰霊碑等908件の合計1,468件となった。

第3回委員会は同年10月に小郡市埋蔵文化財調査センターで開催し、筑前町の掩体や大刀洗平和記念館、小郡市の射撃場などの視察とともに第2回照会結果を報告した。また、自治体史調査結果集計表、戦争遺跡発掘調査事例、福岡県の軍事関連年表のほか、重点調査の対象案、報告書目次案・重点調査結果個別票案などを提

示した。委員からは用語の整理や空襲記録の調査のことなどについて意見・指摘があった。

なお、同年6～7月には、粕屋町歴史資料館・久山町で兵事関係文書等を閲覧・調査した。

c. 第二次調査（詳細・重点調査）

重点調査については、一部は第2回委員会の前後から取組み、平成29年（2017）11月～同30年（2018）1月に福岡市西区小呂島の砲台、北九州市若松区白島の砲台等を調査した。

平成30年度に入り、第2回委員会の際に行橋市・築上町の築城飛行場関連遺構、第3回委員会時に筑前町・大刀洗町・小郡市の関連遺構を委員とともに視察・調査した。

6月に八女市の「岡山飛行場跡」など、7月には粕屋町大隈の監視哨・退避壕などを調査した。12月には大牟田市の企業や宮浦高射砲陣地跡・大牟田市役所防空監視哨や、久留米市の陸上自衛隊久留米駐屯地・旧陸軍墓地（野外講堂・遙拝台など）・南町陸軍関係記念碑（明治天皇観兵之迹）などを調査した。

翌31年（2019）1月には 福津市、宗像大島の砲台及び糸島市の玄界基地関係地、北九州市の下関要塞関係として富野堡壘・田向山砲台・矢筈山堡壘・古城山砲台などを調査した。

2月になって、同じく北九州市の下関要塞関係で数か所の照空陣地・高射砲陣地、藍島砲台や福岡市の西戸崎飛行場（博多海軍航空隊）など、3月には再び北九州市の下関要塞関係で高蔵（高倉）山堡壘を調査した。

なお、同年2月に久留米の自衛隊幹部学校を訪ねて意見交換を行った。

平成31年度は5月から令和元年に元号が変わったが、6月には第4回委員会を北九州市立埋蔵文化財センターで開催し、富野堡壘の現地視察も行った。11月には第5回委員会を九州歴史資料館で開催し、久留米市内について視察していただいた。



第5～8図 第二次調査状況
(5：北九州・白島、6：北九州・藍島、7：宗像・津和瀬、8：糸島・玄界基地)

d. 史料調査

福岡県の平成の大合併以前における市町村は97を数え、その多くで市町村史誌類が刊行されていた。その史誌類の近現代を扱った部分には少なからず戦争に関わる記述が見られるが、その内容にはかなりの濃淡があるというのが実態である。総じて、近年の刊行分は記述の密なものが多い傾向にある。今回は、平成29～31年度にわたって、既刊の史誌類からそのような記述を抽出するとともに、そこから読み取れる陸海軍の部隊等の動向をも把握しようと試みた。また、防衛庁の防衛研修所（現防衛研究所）が刊行した『戦史叢書』のうち福岡県関連部隊に関する記述が多く含まれる二巻も調査の対象とし巻末に一覧を示した。

e. 調査経過一覧

平成29～31（令和元）年度の3年間の調査経過について、前述したことも含めて列記する。

【平成29年度】

- 5.31 九州歴史資料館にて「福岡県戦争遺跡調査基本方針（案）」など協議
- 9. 3 糸島市の調査1・・・旧志摩町船越の海軍航空隊玄界基地（烹炊所など）
- 10. 7 【第1回福岡県戦争遺跡調査指導委員会】 於：福岡県吉塚合同庁舎
- 10.31 「戦争遺跡に係る既存情報の整理について（照会）」[29教文第2189号]
福岡県教育庁総務部文化財保護課長 → 各市町村教育委員会埋蔵文化財主幹課長
- 11. 1 福津市の調査1・・・新原奴山「戦没者慰霊碑」、渡・大峰山の「日本海海戦記念碑」「陸軍監視哨之跡」碑・東郷神社
- 11. 2 八女市の調査1・・・岡山公園の「史跡明治天皇岡山御野立所」碑・「征露記念碑」、八女公園の「慰霊碑」「シベリア抑留の碑」「奉公碑」
- 11.21 福岡市の調査1・・・西区小呂島の砲台4基・弾薬庫など
- 12.14 福津市の調査2・・・上西郷の大坂陸軍航空廠福岡出張所黄色薬格納庫等
- H30. 1.17 北九州市の調査1・・・若松区白島（男島）の砲台4基、観測所・防空壕など
- 1.19 うきは市・久留米市・大刀洗町の調査・・・旧浮羽町大石小学校「忠魂碑」、旧田主丸町石垣神社の「日露戦役記念」「明治三十七八年戦利品」、三井郡大刀洗町下高橋神社の「忠魂碑」・個人墓碑
- 2.14 うきは市・久留米市の調査・・・旧吉井町福富小学校南側の「征清記念碑」・若宮神社の「慰霊塔」、旧田主丸町森部天満神社の「日露戦役従軍記念敷石寄進」碑、矢倉八幡宮の「明治三十七八年戦役記念」標柱ほか
- 3.16 行橋市・築上町の調査1・・・行橋市安浦神社・稲童1号掩体壕・松原展望広場、築上町広末地区弾薬庫壕

【平成30年度】

- 4.14 【第2回福岡県戦争遺跡調査指導委員会】 於：行橋市教育委員会文化課会議室
行橋市安浦神社・稲童1号掩体壕・松原展望広場、築上町広末地区弾薬庫壕
- 6.14 粕屋町の調査1・・・粕屋町歴史資料館の大隈区有文書調査
- 6.28 八女市の調査2・・・旧立花町の谷川梅林地下格納庫跡・今田良三陸軍中尉慰霊碑、岡山飛行場跡・運輸通信省境界標・筑後航空機乗員養成所記念碑・開拓碑

- 7.19 「戦争遺跡に係る既存情報の整理について（照会）」 [30教文第972号]
 福岡県教育庁教育総務部文化財保護課長 → 各市町村教育委員会埋蔵文化財主幹課長
 * 「同（通知）」 → 各福岡県文化財保護指導委員あて
- 7.19 粕屋町の調査2・・・大隈丸山の監視哨・退避壕・一人用掩体・機関銃用掩体など
- 7.20 久山町の調査・・・「旧久原村・山田村役場文書目録」の兵事関係文書調査
8. 9 朝倉市の調査1・・・烏集院・上ノ原の滑走路、陸軍大刀洗東飛行場・大刀洗飛行場関係
 飛行学校生徒隊正門跡・甘木（丸山）公園の忠霊塔ほか
- 10.27 【第3回福岡県戦争遺跡調査指導委員会】 於：小郡市埋蔵文化財センター
 筑前町大刀洗北飛行場・掩体・大刀洗平和記念館、大刀洗町菊池武光像、小郡市陸軍射
 撃場
11. 6 宗像市の調査1（～11.8）・・・沖ノ島の弾薬支庫、第1・2砲台と関連施設
12. 6 大牟田市の調査1・・・三井化学・宮浦高射砲陣地跡・大牟田市役所防空監視哨・三井金
 属・旧デンカ社宅（大牟田俘虜収容所）・石炭産業科学館
- 12.20 久留米市の調査1・・・陸上自衛隊久留米駐屯地（48連隊関係建物など）・九州沖縄農業
 研究センター（三勇士記念塔跡）・久留米競輪場（旧陸軍墓地；野外講堂・遥拝台な
 ど）・山川招魂社・南町陸軍関係記念碑（明治天皇観兵之迹）・久留米師団司令部跡
- H31. 1. 8 福津市の調査3・・・旧福岡町高宮山陣地・上西郷の大阪陸軍航空廠福岡出張所跡地倉庫
 など、旧津屋崎町緑町松林の松脂採取跡の松・東郷公園（日本海海戦記念碑・津屋崎陣
 地など）・津屋崎飛行場
- 1.21 宗像市の調査2・・・大島砲台（照光灯格納庫・照明座・聴音壕）、津和瀬砲台
- 1.25 糸島市の調査2・・・志摩船越・久家周辺の玄界基地関係の烹炊所跡・貯蔵庫、竹ノ越山
 の防空監視哨・北山神社（境界標）・松末基地・大入ドック
- 1.28 北九州市の調査2・・・下関要塞関係；小倉北区富野堡壘・手向山砲台（探照灯台座・発
 電所）、門司区笹尾山砲台・矢筈山堡壘・古城山砲台
2. 5 北九州市の調査3・・・小倉南区の西照空陣地・合馬照空陣地、若松区の石峰山8糎高射
 砲陣地・照空陣地、石峰山7糎高射砲陣地、惣牟田〔灘山〕高射砲陣地、水上越北側陣地
- 2.15 北九州市の調査4・・・小倉北区藍島の砲台砲座・船入り・コンクリート構造物・軍用道
 路・将棋の駒
- 2.19 福岡市の調査2・・・東区雁ノ巣福岡第一飛行場のスリップ跡地・石碑など、西戸崎飛行
 場（博多海軍航空隊）の門柱・掩体など
- 3.14 北九州市の調査5・・・下関要塞関係；小倉南区高蔵（高倉）山堡壘
- 【令和元年度】**
6. 9 【第4回福岡県戦争遺跡調査指導委員会】 於：北九州市立埋蔵文化財センター
11. 2 【第5回福岡県戦争遺跡調査指導委員会】 於：九州歴史資料館
 久留米市明善高校（久留米大本営跡碑）・旧陸軍墓地
- R 2. 3.31 『福岡県の戦争遺跡』報告書（本書）刊行

3. 調査の組織

福岡県教育委員会は本調査を実施するにあたり、福岡県戦争遺跡調査指導委員会を設置して委員5人を委嘱するとともに、戦争遺跡に造詣が深く、これまでに調査を行ってきた経験のある人に調査員を委嘱した。

○福岡県戦争遺跡調査指導委員会

委員長：有馬 学 日本近代史 福岡市博物館長・九州大学名誉教授
 委員：三輪宗弘 日本近代史 九州大学附属図書館教授
 土田宏成 日本近代史 神田外語大学教授〔令和元年度：聖心女子大学教授〕
 齋藤達志 戦史 陸上自衛隊幹部学校教官
 〔平成30年～令和元年度：防衛研究所戦史研究センター所員〕
 伊藤慎二 考古学 西南学院大学国際文化学部准教授
 調査員：前藺廣幸 (特定非営利活動法人 北九州市の文化財を守る会 理事長)
 池田 拓 (宗像市市民協働環境部郷土文化課文化財係)
 〔令和元年度：宗像市市民協働環境部文化財課文化財係〕

○文化庁

山下信一郎 文化財部記念物課史跡部門 主任文化財調査官
 〔平成30年度～：文化財第二課史跡部門 主任文化財調査官〕

〔関係者〕	平成29年度	平成30年度	令和元年度
福岡県教育委員会			
教育長	城戸秀明	城戸秀明	城戸秀明
教育次長 (平成30年度から副教育長)	吉田法稔	吉田法稔	吉田法稔
理事 (平成30年度から教育監)	松尾圭子	長 俊一	中島良博
総務部長 (平成30年度から教育総務部長)	辰田一郎(本理事)	辰田一郎(本理事)	木原 茂(本理事)
文化財保護課 課長	井手優二	河口靖志	河口靖志
同 参事	岩崎千鶴子		
同 参事兼課長技術補佐		田上 稔	田上 稔
同 課長補佐	市村智子	市村智子	市村智子
同 課長技術補佐	田上 稔		
同 管理係長	市村智子	松本親典	堺 崇文
同 企画係長	吉田東明(本参事補佐)		
同 企画・埋蔵文化財係長		杉原敏之(本参事補佐)	杉原敏之(本参事補佐)
同 企画係	入佐友一郎	飛野博文	
(平成30年度から	宮地聡一郎	宮地聡一郎	宮地聡一郎
企画・埋蔵文化財係)	坂本真一		坂元雄紀
	城門義廣	城門義廣	城門義廣

九州歴史資料館

館長	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
副館長	飛野博文	東 良	安永千里
総務室 室長	田嶋朋子	尾籠哲弥	中村満喜子
同 総務班長	中村満喜子	中村満喜子	畑山 智
学芸調査室 室長	小田和利	小田和利(参事)	小田和利(参事)
同 学芸研究班	渡部邦昭		
同 広報普及班		渡部邦昭	渡部邦昭
文化財調査室 室長	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
同 室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
同 文化財調査班長	秦 憲二	森井啓次	森井啓次
同 文化財調査班	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹
同	坂元雄紀	坂元雄紀	進村真之
同	梶佐古幸謙	岡田 諭	飛野博文
同	岡田 諭	梶佐古幸謙	梶佐古幸謙
同 整理指導員 [写真担当]		北岡伸一	

【史料調査集成】 諸原真樹（福岡大学非常勤講師）

【現地調査その他でお世話になった方々（敬称略：順不同）】

中田健吉（玄界航空基地記念碑事務局）、梶原康弘（JF北九州市副組合長理事・脇之浦地区代表理事）、本田義人（ひびき灘漁業協同組合代表理事組合長）、黒崎 隆（白島石油備蓄株式会社北九州事業所）、新井貴之（三井化学株式会社大牟田工場）、杉浦裕史（三井金属鉱業株式会社三池事務所）、伊藤荘一郎（福岡市雁の巣レクリエーションセンター）、本村幹（本村製作所）、工藤洋三（「空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会実行委員会」）、高谷和生（くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク）、中嶋光秋（大牟田の空襲を記録する会）、玉城夏子（読売新聞西部本社）、松尾正夫（宗像市）、今村けい子（小郡市）、坂井秀弥（奈良大学）、今井良二・吉田康一・廣瀬進・見岡一（陸上自衛隊）、瀬戸哲也・宮城淳一（沖縄県立埋蔵文化財センター）、山下和秀（大牟田市立史料館学芸員）、白木英敏（宗像市郷土文化課[文化財課]）、関川 妥・原田真祐子・松本治二・江藤誠浩・原田智也・小南裕一（北九州市文化企画課）、小川秀樹・天野正太郎（行橋市文化課）、高尾栄市・馬場克幸（築上町生涯学習課）、柏原孝俊・杉本岳史・西江幸子（小郡市文化財課）、山内亮平（筑前町教育課）、山本孝・藤上利美（大刀洗平和記念館）、赤川正秀（大刀洗町生涯学習課）、西垣彰博・福島日出海（粕屋町社会教育課）、江上智恵・阿部悠理（久山町教育課）、山田元樹（大牟田市市史編さん室）、坂井義哉（大牟田市石炭産業科学館）、中村渉・宮本博喜（大牟田市世界遺産文化財室）、中川寿賀子（八女市文化振興課）、本田岳秋・西拓巳（久留米市文化財保護課）、崎野祐太郎（福津市文化財課）、本田浩二郎（福岡市埋蔵文化財課）、村上敦・河村裕一郎（糸島市文化課）、草場啓一（筑紫野市文化財課）、森弘子（福岡県文化財保護審議会委員）、山田菜の花（朝日新聞社）

4. 福岡県における部隊等変遷史

日本の陸海軍が建軍された明治4年（1871）、福岡県では小倉に西海道鎮台が設置された。西海道鎮台は同年の内に鎮西鎮台と改称されるが、所在地は小倉ではなく熊本とされ、後に熊本第六師団へと発展していく。

明治8年（1875）、小倉で歩兵第十四連隊が編成され、秋月の乱や西南戦争に出動した。歩兵第十四連隊は小倉のほか、福岡にも断続的に一個大隊を駐屯させている。明治19年（1886）には、福岡にも歩兵第二十四連隊が設置された。前後して歩兵第十四連隊と歩兵第二十四連隊による歩兵第十二旅団も小倉に編成され、第六師団に属して日清戦争に出動している。また関門海峡防衛のため、明治20年（1887）には下関要塞が起工され、明治33年（1900）に完成した。下関要塞は九州の門司側にも多数の砲台や保塁を設置している。そのため、周囲の北九州地域は要塞地帯法に基づく要塞地帯に指定され、地図作成や写真撮影などに規制が加えられることになる。

日清戦争は日本の勝利に終わったが、日本は三国干渉などで関係が悪化したロシアとの戦争に備えて軍備拡張を進め、福岡県内には小倉に歩兵第四十七連隊、久留米に歩兵第四十八連隊が編成される。四個連隊が設置された福岡県には、新たに師団が設置されることになり、明治30年（1897）には小倉に第十二師団が設置された。師団司令部が置かれた小倉には、歩兵第十四・四十七連隊に加え、特科として騎兵第十二連隊、野戦砲兵第十二連隊、工兵第十二大隊、輜重兵第十二大隊なども置かれ、軍都としての色彩を強めていった。また小倉における兵営は、当初は小倉城内に置かれたが、軍拡の中で狭い城内では部隊を収容しきれなくなり、やがて郊外の北方に建設されるようになる。

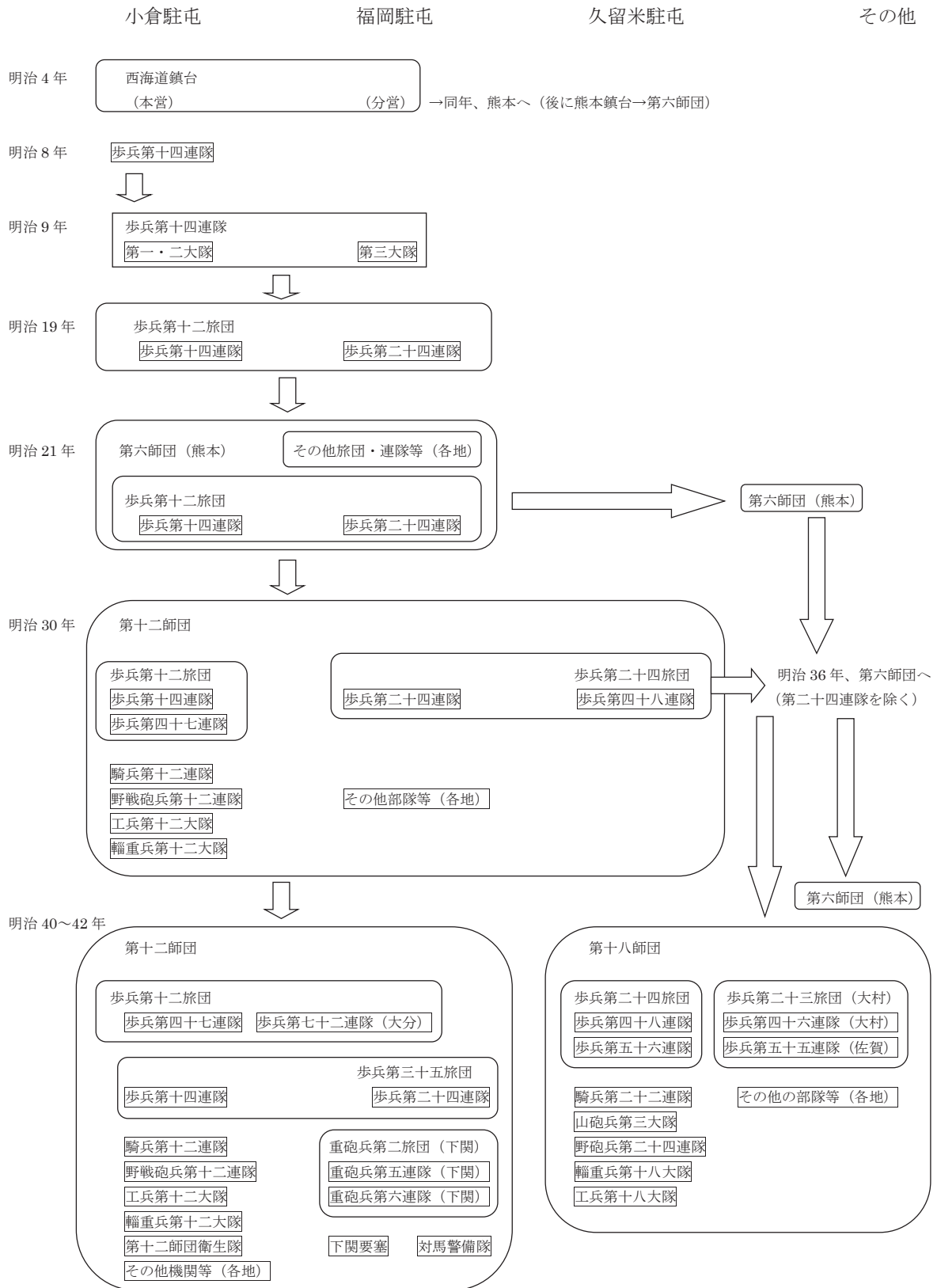
第十二師団はその後、第六師団と隷下部隊の一部を交換し、明治37年（1904）から日露戦争に臨んだ。なお第十二師団の出征中は、小倉に留守第十二師団が設置され、各連隊や大隊には補充隊が編成された。留守師団や補充隊は、本来師団が担う内地の警備や兵事事務を行うとともに、新たな部隊を動員編成して戦地へ送り出す役割も果たしている。

日露戦争後も、日本は陸海軍ともにさらなる軍備拡張を打ち出した。そのような中で明治40年（1907）、久留米に第十八師団が設置される。結果、福岡県には小倉の第十二師団と久留米の第十八師団と、二つの師団が置かれた。両師団の所属部隊は第9・10図のとおりである。当時、師団の数は外地を含めて約20個程度であり、一県に二個師団が置かれた福岡県は、当時全国有数の軍事拠点であったといえよう。第十八師団の設置に伴い、久留米も軍都としての性格を強めていく。なお、久留米の軍事施設は当初より市街地ではなく、広大な郊外に設置されており、軍都となった時期の違いに応じて、軍事施設の立地にも差異が見られるようになった。

大正3年（1914）、第一次世界大戦がはじまると日本はドイツに宣戦布告する。この戦いでは、第十八師団を中心とする部隊が中国山東省のドイツの根拠地・青島に出兵、ドイツ軍を降伏させた。この時、降伏したドイツ兵は後に捕虜として日本に送られ、久留米や福岡には捕虜収容所が開設されている。

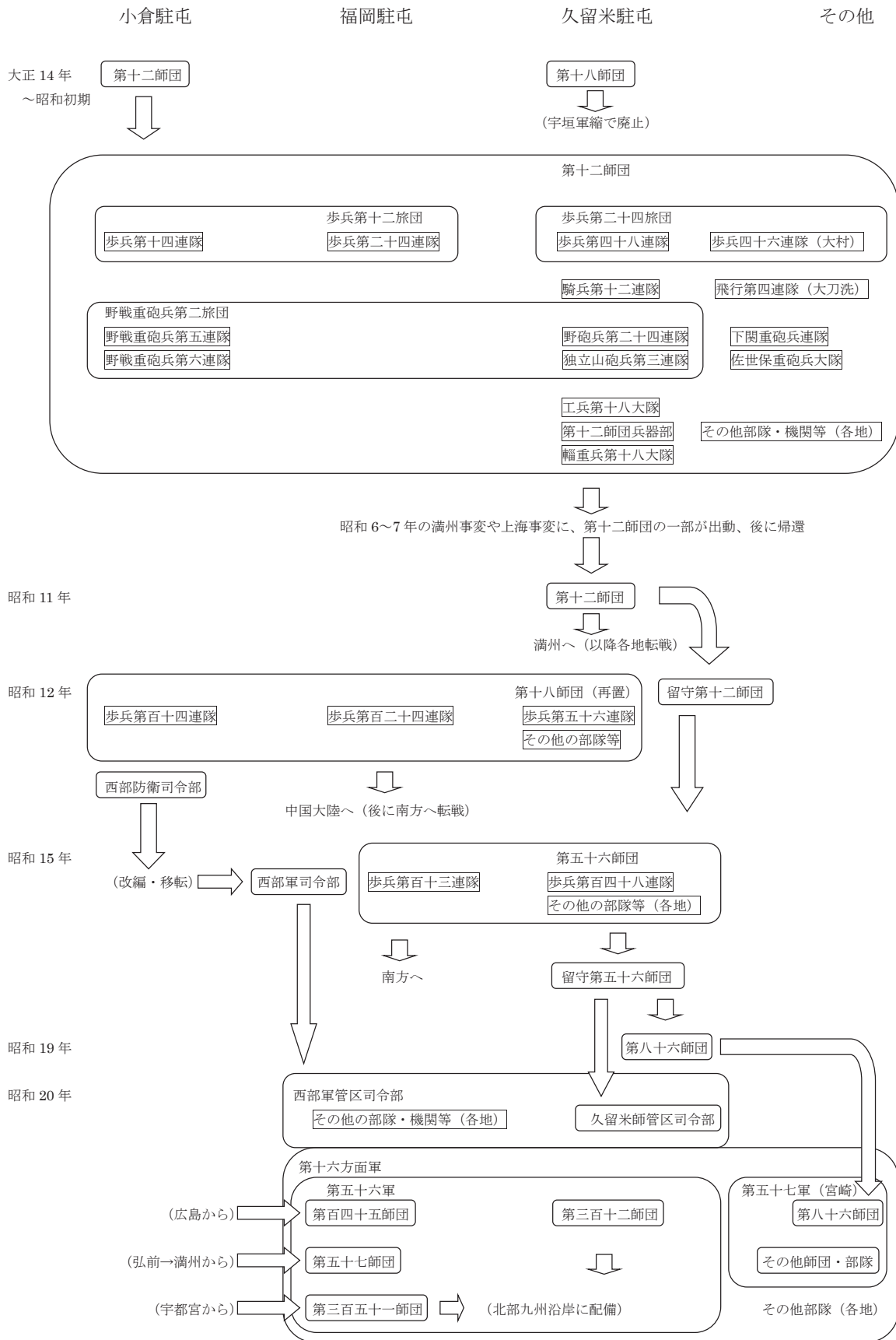
第一次世界大戦後、世界的な軍備縮小の中、まず海軍が軍縮を行い、次いで陸軍も二度にわたる軍縮を行った。大正13年（1924）、宇垣軍縮と呼ばれた軍縮では、久留米の第十八師団が廃止される。ただし廃止にあわせて、小倉の第十二師団が久留米に移転したため、実際には小倉から師団が

福岡県駐屯日本陸軍主要部隊変遷（明治）

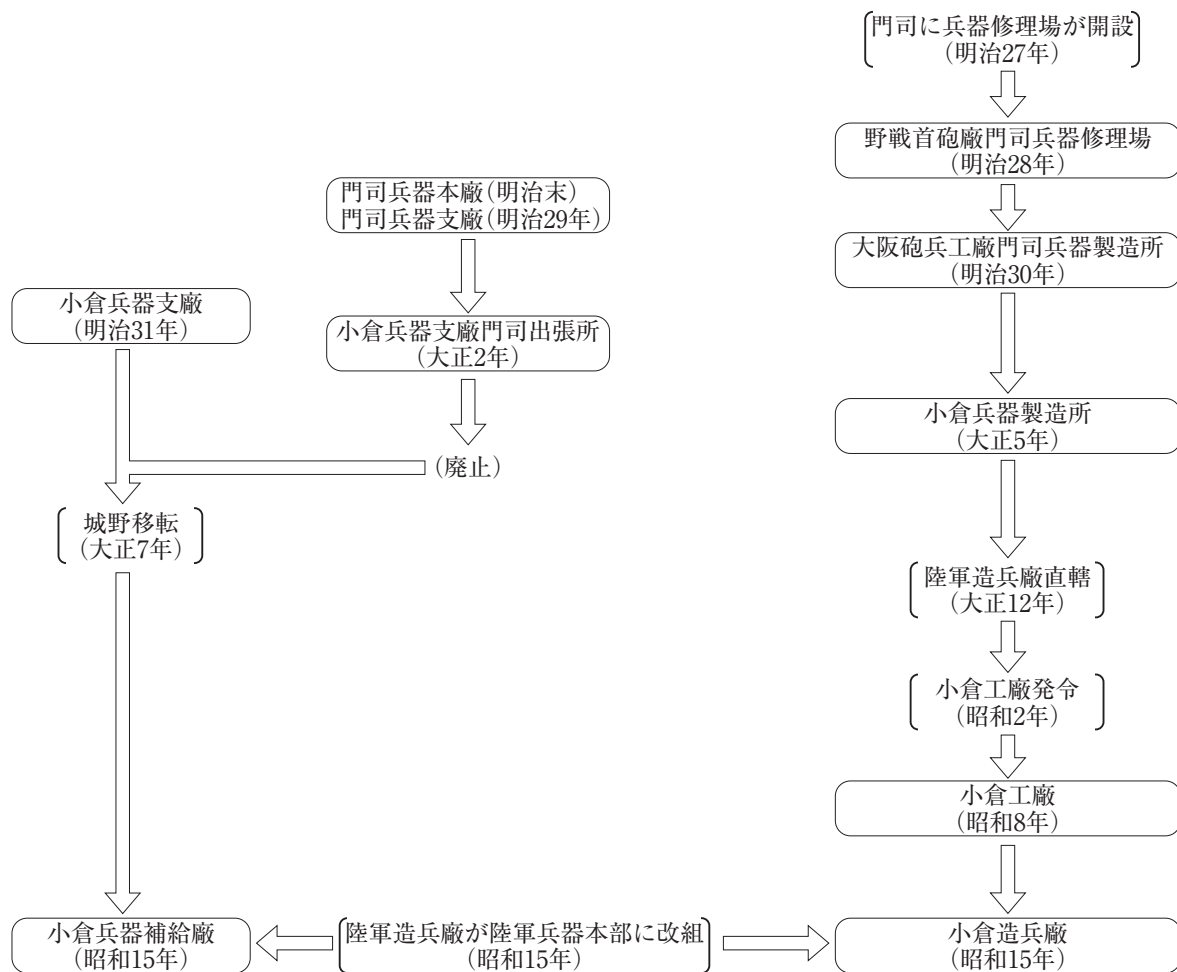


第 9 図 福岡県内所在主要部隊の変遷（1）

福岡県駐屯日本陸軍主要部隊変遷（大正～昭和）



第10図 福岡県内所在主要部隊の変遷 (2)



第11図 北九州所在の陸軍工廠組織の推移

消えることになった。この時、旅団・連隊以下の部隊についても、多くの統廃合が行われている。

さて福岡県にはこうした連隊や師団、要塞の他にも、さまざまな軍事施設があった。日清戦争が始まった明治27年（1894）には、門司に兵器修理場が開設されている。この施設はその後、大阪砲兵工廠門司兵器製造所を経て、小倉兵器製造所となる。さらに関東大震災の後、被災した東京の砲兵工廠が小倉に移転することになり、小倉兵器製造所と統合、陸軍小倉工廠、小倉造兵廠へと発展していく。また明治31年（1898）には、第十二師団の施設として小倉兵器支廠も設置、大正7年（1918）に郊外の城野の移転し、後に小倉兵器補給廠となっている。これら工廠関係の推移は第11図にまとめた。

海軍も明治22年（1889）、石炭供給のため糟屋郡に新原採炭所を開坑し、明治33年（1900）に海軍採炭所と改称した。この海軍炭鉱は後に新原から志免に中心を移し、改称を繰り返しつつ、敗戦まで存続した。

大正8年（1919）には、陸軍が朝倉郡と三井郡にまたがる用地に大刀洗飛行場を完成させた。同年、所沢から航空第四中隊が移駐、西日本初の飛行部隊となる。この部隊は後に航空第四大隊、飛

行第四大隊、飛行第四連隊、飛行第四戦隊と、改称と拡張を繰り返していった。それに伴い大刀洗は西日本有数の航空基地に発展し、一時は民間機の発着にも用いられた。

昭和に入ると日本は戦争の時代に突入し、福岡県でも部隊の増設が繰り返されていく。昭和7年(1932)の第一次上海事変では、第十二師団の一部が出動した。昭和11年(1936)には、第十二師団は満州に駐屯することになり、隷下の歩兵第十四連隊、歩兵第二十四連隊、歩兵第四十八連隊などを引き連れて、大陸に渡った。第十二師団はその後、昭和19年(1944)まで満州に駐屯し、同年主力は台湾に移駐、終戦を迎えている(歩兵第十四連隊は途中で第二十五師団に編入され、宮崎で終戦)。

第十二師団出征後は、留守第十二師団などが編成管理を担う形で、多くの部隊が編成された。昭和12年(1937)には、新たに編成された歩兵第百十四連隊(小倉)、歩兵第百二十四連隊(福岡)などを基幹に、第十八師団が再編成される。第十八師団は杭州湾、上海、マレー半島、ビルマなどに転戦し、コタバル上陸作戦やインパール作戦にも参加した。特に歩兵第百二十四連隊はガダルカナル島の戦いに参加した後、第三十一師団に転属してインパール作戦にも参加している。昭和14年(1939)には第三十七師団が久留米で編成され、翌年には留守第十二師団を基幹に第五十六師団が編成された。両師団とも、後に南方に送られている(留守部隊として留守第五十六師団も発足)。

なお昭和10年(1935)には、航空機の脅威に対処するため、広域の防空計画を担当する西部防衛司令部が小倉に開設された。西部防衛司令部は昭和15年(1940)、西部軍司令部と改称の上で福岡に移転し、防空に加え治安警備や動員編成も担うようになる。また大刀洗に駐屯していた飛行第四戦隊も同年、熊本県の菊池に移駐するが、後に山口県の小月に移り、北九州の防空を担当している。

昭和16年(1941)、太平洋戦争が始まると、部隊の増設はさらに行われ、昭和19年(1944)には留守第五十六師団を母体に第八十六師団が編成された。飛行場も従来の大刀洗や雁ノ巣に加え、現八女市の岡山飛行場などが各地で設営されている。しかし日本の航空戦力は米軍に十分対抗できるものではなく、昭和19年(1944)以降、北九州や福岡、久留米、大刀洗などは激しい空襲に見舞われることになった。

さらに昭和20年(1945)、本土決戦が想定されるようになると、福岡では西部軍司令部を改組する形で、西部軍管区司令部と第十六方面軍司令部が置かれる。この二つの司令部は事実上一体で、後に現筑紫野市内の山家の地下壕への移転が図られた。第十六方面軍の下には、北部九州の防衛を担う第五十六軍が設置され、桂川に司令部を置く。第五十六軍には前後して第五十七師団、第百四十五師団、第三百十二師団、第三百五十一師団などが配属された。そして連合軍の九州上陸に備えて玄界灘沿岸で陣地構築を行っている状態で、終戦を迎えた。

II 福岡県の近代遺跡・戦争遺跡に関する調査

1. 福岡県の近代遺跡の調査

a. 近代化遺産の調査

文化庁（建造物課：現文化財第二課）は平成2年度から、都道府県による国庫補助事業として、江戸時代末期から第二次世界大戦終結時までの間に造られた産業・交通・土木の分野にかかる構造物・工作物を対象として「日本近代化遺産総合調査」を開始した。

それについて、福岡県では、平成3～4年度に調査を行ったが、予備・第一次の悉皆調査においては、近代遺跡を大きく産業と公共に分類し、それぞれを細分して1,120件を把握した。そして、第二次・第三次の調査を経て平成5年3月に83件について詳細を報告する際の分類には、製鉄・交通・酒造・鉱業・工業・行政・通信・教育・金融・軍事などが示された（福岡県1993）。このとき、軍事としての分類で挙げられたのは「陸上自衛隊久留米駐屯地兼第四特科連隊」の施設1件のみであったが、この調査で最も重きを占めた八幡製鐵所やそのほかの鉱業・交通にかかる物件にしても、少なからず軍事との関連が伺える遺産であった。

b. 近代遺跡の調査

文化庁では、平成6年（1994）9月1日に「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」を発足させ、その中に記念物、建造物、美術・歴史資料、生活文化・技術の4分科会が設置された。その分科会の報告については次のとおりである。

- ・平成7年（1995）1月20日 記念物分科会関係報告
- ・ 10月16日 建造物分科会関係報告
- ・平成8年（1996）7月8日 美術・歴史資料分科会関係報告
- ・ 7月8日 生活文化・技術分科会関係報告
- ・ 7月8日 「近代の文化遺産の保存と活用について（報告）」

記念物分科会では4回の検討を踏まえて報告がなされたが、その「2 近代の遺跡の保護の指針等」において、対象とすべき時期については“当面、第二次世界大戦終結頃までとするのが適当と考えられる”としている。ちなみに、建造物分科会関係報告では「2 近代の建造物の保護の指針」において、対象とすべき時代範囲を“「建設後50年の経過」とすることが適当と考えられる”としている。

4分科会の報告をもとに、平成8年（1996）7月8日になされた全体にかかる「近代の文化遺産の保存と活用について（報告）」が近代の文化遺産に関する調査実施の基礎となり、同年7月18日には文化財保護部長の決裁による「近代遺跡調査実施要項」が定められた。

そして、記念物課が所管する近代遺跡については「近代遺跡の調査等に関する検討会」（会長：鳥海信中央大学教授）を設置して平成8年度から8か年計画で全国調査を行うこととし、その要項において、分野区分は鉱山、エネルギー産業、重工業、軽工業、交通・運輸・通信業、商業・金融業、農林水産業、社会、政治、文化、その他の11項目に及び、政治分野の中に「軍事に関する遺跡」が取り上げられていた。それをもとに、同年8月13日に「近代遺跡の調査の実施について（依

頼)」の文書が文化庁記念物課長から各都道府県教育委員会文化財主管課長宛てに発出されている〔8 保記第39号〕。

その所在調査は平成10年度に完了し、その後は詳細調査について年次を追って順次実施することとなったが、文化庁は近代の軍事遺跡（戦争遺跡）については、平成14年（2002）8月に全国50件を詳細調査の対象に選定した。

福岡県については、「大刀洗飛行場関係遺跡（三井郡大刀洗町ほか）」及び「旧陸軍歩兵第五十六連隊関係遺跡（久留米市）」の2か所であり、これについて平成15年（2003）6月13日付で「近代遺跡（軍事に関する遺跡）の詳細調査について（依頼）」〔15財記念第17号〕の文書が記念物課長から福岡県文化財保護課長宛てに出され、神田外語大学講師の土田宏成氏を調査員として示された。

それらの実際の現地調査は、「大刀洗飛行場関係遺跡」が平成15年（2003）9月8日～9月10日、「旧陸軍歩兵第五十六連隊関係遺跡」が同年10月23日～10月24日に行われた。

2. 全国の戦争遺跡に関する動向

a. 戦跡考古学の提唱と戦争遺跡

沖縄県は、太平洋戦争において、昭和20年（1945）4月1日の米軍上陸後に激戦地となり、戦後はアメリカの施政下におかれてのち、昭和47年（1972）5月15日に本土復帰を果たした。その沖縄県において、當眞嗣一氏が「戦跡考古学」を提唱したのは、戦後40年近くになろうとする昭和59年（1984）のことであった（當眞1984・2015）。當眞氏はその後に幾度も「戦跡考古学」を発信していき（當眞1997・2000・2001・2015）、その論考において「……このガラビ壕は、先史時代の遺跡としてだけでなく、現代をも雄弁に物語ってくれる戦争遺跡であって、沖縄の歴史を理解するための生きた資料である……」「沖縄戦における戦争遺跡や戦争遺物のあれこれを対象に考究していく分野を私は当面戦跡考古学と呼称し……」（當眞2015：P36～P37）というように「戦争遺跡」という文言を用いられている。

その「戦争遺跡」という用語自体については、沖縄県において「沖縄戦終結から33年目にあたる1977年5月15日『沖縄戦を考える会』が発足し、その発足総会で同会は、『沖縄県戦争遺跡・遺物の保存について』を決議して沖縄県文化課課長へ要請している」（當眞2015：P33；註1）とあるので、あるいはこれが最も早い「戦争遺跡」の使用事例であろうか（註2）。

その後、平成9年（1997）7月には「戦争遺跡保存全国ネットワーク」が結成され、第1回戦争遺跡保存全国シンポジウムが長野市で開催されたことから、その頃にはほぼ定着したと言ってよいように思われる。一方で、文化庁は、近代遺跡の中の「軍事に関する遺跡」という表現をしており、「戦争遺跡」の用語は用いていない。

なお、坂本悠一氏は「近代軍事遺産」の用語を提唱し、戦争遺跡は近代文化遺産を構成する産業・土木・軍事の各遺産の中に含まれるものとする（坂本2006）。また、小田康徳氏は、戦争遺跡ではなくて「軍と戦争に関する遺跡」と改称してはどうかと提案している（小田2011）。

b. 考古学界等の近現代の取扱い

昭和41年（1966）10月に「考古学界の動きを、迅速にそして確実に報道することを主眼として」

創刊号が発行された『考古学ジャーナル』誌における戦争遺跡の取扱いを見てみる。

『考古学ジャーナル』誌は、いざなぎ景気の真ただ中で、日本列島改造に向けた開発によって文化財の保存が危機に瀕した時期に月刊誌として創刊号が発行されたが、その翌年からほぼ毎年度の4～6月頃に、前年度の考古学界の動向について時代ごとに各々の論者がまとめを行っている。旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代と続くが、新しい時代については昭和42年（1967）～同53年（1978）の間の報告は基本的に「歴史時代」で括られていた。

そのような中で、昭和62年（1987）6月発行の『考古学ジャーナル』278号は「現代史と考古学」を特集した。そこでは、東京都町田市が多摩送信所（法政大学構内；昭和51～59年度調査）や沖縄県西原村の旧役場壕（昭和60年9月調査）、東京都町田市田中谷戸遺跡の一人用退避壕（通称タコツボ；昭和49年6～8月調査）などについて紹介されている。そこで取り上げられた田中谷戸遺跡の退避壕などは、近代の戦争に係る遺構を考古学的に調査報告した最初の事例と思われる。

この特集は画期的なものであったが、別の視点で見れば、結局のところ、同誌の昭和41年（1966）10月の創刊号から278号までの約20年間に戦争遺跡が取り上げられることはなかった、ということであり、その昭和40～60年頃の時代背景が未だ「戦争遺跡」を遺跡として取り上げるまでに熟していなかったことの反映ということができよう。

平成18年（2006）あたりからは「近世」の枠内であってもその説明の中に近現代の調査成果も盛り込まれるようになった。小川望・中野高久氏は2008年の「近世」の動向を記す中で「2008年は近現代を対象とする考古学的調査やその報告、論文集、展示会などが印象的な一年であった。……もはや近現代が本誌の動向の一項目となる日もさほど遠いことではないと期待するものである。」と述べている（註3）。しかし、平成から令和に代わる段階においても、まだ近現代は独立してはいない。独立項目として動向を論じるだけの調査・報告事例がまだ十分ではない、ということなのであろう。なお、平成28年（2016）10月発刊の『考古学ジャーナル』689号は「戦跡考古学—沖縄・本土の防衛—」を特集している。

考古学の世界において、昭和50年代に戦争遺跡の調査事例もありはしたが、まだ機が熟していなかったということであろうか、戦争に関する近現代の“遺跡”が大きく取りざたされるようになるのは、やはり、「戦跡考古学」が提唱されてのちの昭和60年（1985）頃より以降とってよいように思われる。

「戦跡考古学」が提唱された翌年、すなわち戦後40年の区切りとなった昭和60年（1985）は、そういった意味では転換期にあったともいえる。同年4月21日に開催された岡山での考古学研究会第31回総会及び同年4月28日～29日開催の東京での日本考古学協会第51回総会において、「核兵器の廃絶に対する宣言文」が採択されている（日本考古学協会1987）。その後、考古学研究会では、平成7年（1995）7月に「戦争と考古学」の統一テーマで講演・研究報告が行われ、その内容が機関誌の『考古学研究』167号で示された（西川1995・田中1995）。

平成10年（1998）10月に開催された日本考古学協会沖縄大会においては分科会で「戦争・戦跡の考古学」が取り上げられている。この前後になると、全国的に戦争に関する遺跡を埋蔵文化財として捉える気運・方向性が出てきたと言えよう。

c. 文化庁などの動向

我が国が明治維新100年を迎えた際に「明治の史跡」にも注目が集まった昭和44年（1969）、文化庁主任調査官の平野邦雄氏は史跡指定の視角として「第一に、明治の国家は、“文明開化”“富国強兵”という線にそって経営され、何よりも日本の西欧化と政府による中央化が、そのいちじるしい特徴をなしていたのであるから、政治・経済・軍事・教育・文化の各分野にわたって、ひろくこのような意味をもつ史跡をとりあげる必要があるだろう」と述べている（平野1969）。すでに後の「近代遺跡の調査」につながる視点が示されているとあってよいだろう（註4）。

その後、行政としての取組みということでは、平成2年（1990）6月に沖縄県南風原町が黄金森の壕群について「南風原陸軍病院壕跡（第1外科壕群・第2外科壕群）〔沖縄陸軍病院南風原壕群〕」として町の史跡に指定したことが特筆される。これが戦争遺跡として全国初の指定事例とされている（上地2000・瀬戸2016・沖縄県2015）。

そのような流れの中で、近現代の遺跡としての取扱いには難しい側面もありながら、文化庁においては、平成6年（1994）7月に文化財保護企画特別委員会が「時代の変化に対応した文化財保護施策の改善充実について－報告－」を行い、その中で特に、「(一)文化財保護の対象・保護措置の拡大」が指摘されたのであった。そして、前述のように同年9月には文化庁において「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」が発足、翌7年（1995）1月20日には記念物分科会が4回の検討を踏まえて、近代の遺跡の保護に関する調査研究報告をとりまとめて報告した。

また、それをうけて、同年3月6日には「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」の改正が行われ、史跡における指定基準9項目のうち1～8項目の文言に変更が施された。総じて、例示の一般化が図られるとともに「戦跡」のような新たな項目が加えられた。これによって、世界文化遺産登録を目指す広島市の原爆ドームの史跡指定が可能となり、同年6月27日、「原爆ドーム（旧広島県産業奨励館）」は史跡に指定され、平成8年（1996）12月6日には世界遺産一覧表に「広島市の平和記念碑（原爆ドーム）」として記載・登録された。

さらに、文化庁の「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」は平成8年（1996）7月に「近代の文化遺産の保存と活用について（全体報告）」の報告を行って、近代遺跡の調査が行われるようになる。

一方で、平成6年（1994）10月に設置された文化庁の「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」が同9年（1997）2月から審議してきた事案である「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取扱いについて」が同10年（1998）6月に報告された。これは文化庁記念物課の埋蔵文化財部門が所管するものであるが、この中で、埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲は、「全国に共通する原則としては、当面、次のとおりとするのが適切と考えられる」として以下のように示された。

- ①おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。
- ②近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができること。
- ③近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること。

この報告は同年9月29日付で「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」として各都道府県教育委員会等に通知され、周知されることとなった。

このいわゆる「平成10年通知」をもって、近現代の遺跡についても、条件付きではあるが調査対

象として把握されることとなり、その意義は大変に大きいものであった。

ただ、その近現代の遺跡についての「地域において特に重要なもの」とは、どのような基準で捉えるべきか、個別の地域における判断が難しいものもあり、ひいては、それを一般に周知しうるかという極めて重い課題もあって、全体としてはやや曖昧な側面を有していたのも事実であった。

しかし、ともかくも、行政において、近現代の遺跡も発掘調査の俎上に乗る場合があることが確定した意義は大きいと言わねばならない。その前後から戦争遺跡を含む近現代考古学が学界の内外でかなり取り上げられるようになってきた。

そして、文化庁記念物課が監修した『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』（2010.5）において、「埋蔵文化財は、……文字や記録のない先史時代はもとより、古代や中・近世さらには近・現代においても、文献史料だけからでは知ることのできない歴史や文化を明らかにする手がかりとなるのである（P2）」とし、さらに「各地方公共団体では、今日的な観点から、埋蔵文化財として扱う範囲について再検討し、適切な保護措置をとることが求められる（P51）」とする（註5）。

そもそも考古学の定義としては、著名な濱田耕作氏の「考古学は過去人類の物質的遺物（に抛り人類の過去）を研究するの学なり」とするものがあり（濱田1922）、それを現代風に言い換えた「考古学が取り扱う時代は、人類が地球上に出現してから、現在のこの瞬間にいたるすべての時代にまたがる」（横山1978）とする文言からしても、人類の過去を研究する中で直近の過去も対象となりうるものであった（註6）。しかし、考古学の対象とはなっても、埋蔵文化財としての対象となるのには、やはりハードルが高いというのが実情であったといえよう。

平成8年（1996）9月の五十嵐彰・阪本宏児「近現代考古学の現状と課題—「新しい時代」の考古学をめぐって—」（『考古学研究』170）においては、「近現代考古学」を確立させる作業が必要であることを述べる中で「戦跡考古学」・「産業考古学」などについて多角的に触れている。

ところで、前述のように「広島市の平和記念碑（原爆ドーム）」は世界遺産に登録されたが、文化庁は平成27年（2015）度から「日本遺産」の認定に取り組み始めた。平成28年（2016）4月に認定された日本遺産として「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」があり、この4市はかつての軍港都市であることから、その構成文化財は旧海軍関係の戦争関連施設が占めている。そのコンセプトには「往時の姿を残す旧軍港四市は、どこか懐かしくも逞しく、今も訪れる人々を惹きつけてやまない」とされている。これは文化庁が進める文化財の総合的な把握と保存・活用の一側面でもあるが、そこに戦争関連遺構も含まれてきているのである。

d. 大学の動向

大学においては、戦跡考古学が提唱される以前から取り組んでいた事例が見られる。

最も早い例は、先にも触れた東京都町田市の法政大学多摩校地造成に伴う事前調査（昭和51～59年度）であろう。調査は当事者である法政大学多摩校地遺跡調査団によって行われ、旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺構のほかに、昭和20年（1945）4月竣工の「多摩送信所」の関連遺構が報告されている。A地区（昭和56年〔1981〕6月～57年10月調査；法政大学1986）とC・R地区（同59年〔1984〕1月～60年4月調査；法政大学1988）では送信塔基部やタブレット空中線支線基部、局舎遺構などが調査され、担当者の同大学伊藤玄三教授は、この調査について「考古学の取扱う範囲が物質的遺物・遺跡である点では、まさに現代史に関わるものでも例外ではないことを明示する

もの」(法政大学1988；p259)であるとしている。

福岡県においては、九州大学が平成元年(1989)8～9月に調査した朝倉郡三輪町(現筑前町)大字山隈の山隈窯跡群において、後述のように弾薬庫跡と思われる遺構が確認されている。古墳時代の窯跡群に重複して営まれた遺構について戦争関連遺構として実測等を行い報告したものであった。所期の調査目的とは異なる遺構であったが、その報告の意義は大きい(九州大学1990)。

沖縄においては、先に触れた「南風原陸軍病院壕」(1990年6月南風原町指定史跡。2007年に「沖縄陸軍病院南風原壕」と改称)について、同5年(1993)に南風原町は「南風原陸軍病院壕保存活用調査委員会」を発足させ、翌6年(1994)から琉球大学の学生も参加して病院壕の発掘調査が開始され、同10年度まで行われた。琉球大学の池田榮史教授はこの調査に絡めて平成9～11年度の科学研究費補助金による成果も上梓している(池田2000)。沖縄戦を経験した地元の大学として大変重要な取り組みであったといえよう。

近年では、奈良大学が、平成27年(2015)7月に「戦後70年 考古学から見た戦争遺跡」の講演会を奈良大学オープンキャンパス文化財学科特別企画として実施している。この中で報告された「水中の戦争遺跡—米艦エモンズと特攻機—」などは水中考古学とも連動する内容といえる。

e. 市民団体・マスコミ等の動向

文化遺産を守る全国的な市民団体として昭和45年(1970)に結成された「文化財保存全国協議会(文全協)」は会として長い歴史を刻んでいるが、平成8年(1996)にはその機関誌である『明日への文化財』第38号において「特集 戦後50年—戦争遺跡」を特集した。

昭和46年(1971)8月には「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」の第1回全国大会が東京で開催されている。50回に及ぼうとする全国大会は第10回が昭和56年(1981)8月に沖縄県那覇市で、第41回が平成23年(2011)8月に福岡県大牟田市で開催されている。

平成9年(1997)7月に長野市松代で開催された「第1回 戦争遺跡保存全国シンポジウム」により「戦争遺跡保存全国ネットワーク」が結成され、規約が施行された。その第2条に「日本近代史における戦争の実相を調査研究して記録し、戦争遺跡を史跡、文化財として保存し、もって平和の実現に寄与しようとする団体・個人の連絡・協議を推進することを目的とする」とうたっている。ネットワーク結成の翌平成10年(1998)6月には第2回戦争遺跡保存全国シンポジウムが沖縄県南風原町で開催された(中谷・菊池1998)。

次に、マスコミ関係では、戦争の記憶を風化させないようにとの趣旨で、「戦後〇〇年」などの節目のときにさまざまな特集記事を掲載・報道したりしてきたといえる。それは戦争体験者の記憶や聞き取り内容をもとに構成された記事が多かったように思うが、遺構を「遺跡」として取り上げたのが何時であるのか、正確にはわからない。いま手もとにある資料では、平成17年(2005)8月の戦後60年には確実に「戦跡」・「戦争遺跡」の言葉が新聞紙面に現れており、その後はよく見かけるようになった。戦後70年余りを経た最近においても、折に触れて戦争遺跡に関する記事を多く目にするし、また一方で戦争をテーマにした投稿を募集して連載したり、「戦争を語り継ぐ」とした体験者の意見・投稿を継続的に掲載している新聞もある(註7)。

なお、カメラマンや軍事ジャーナリストが戦跡を扱った書籍を発行している事例も多い。

さらに、各地の戦争遺跡を調べ、その成果をウェブサイト上に公開している市井の方々もかなり

見受けられる。戦争遺跡（戦争遺構）を探訪し、あるいは渉猟して、写真撮影等を行って公開するといった「戦争遺跡データベース」を構築しているサイトもある。これらを見ると、その所在地を含めて参考になる情報が大変に多く含まれている。

3. 福岡県の埋蔵文化財と戦争遺跡

a. 埋蔵文化財の把握

福岡県では、昭和51～55年度（1977.3～1981.3）に『福岡県遺跡等分布地図』16冊を刊行した。それは北九州市・福岡市の両政令市を除く地域に所在していた福岡県教育庁の16か所の教育出張所の管轄範囲ごとに取りまとめたものであり、この時にリストアップされた遺跡数は、一部に天然記念物や社寺等を含む17,169か所であった。

周知の遺跡の把握は埋蔵文化財の保護の基本であり、地方自治体の根幹である市町村が主体となって、その後も鋭意周知の遺跡の把握に努めてきた中で、当然のことながら遺跡数は一般的に年を追って少しずつ増える傾向にある。毎年度の調査事案として行われる埋蔵文化財遺跡数の調査では、平成28年度の福岡県の埋蔵文化財遺跡数は23,758か所を数えている。

ただ、これらの遺跡数は、その大半が旧石器時代以降、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世までの遺跡等であり、現状で近現代の遺跡は殆んど取り上げられていないと言ってよい。

そうした中で、戦後70年余を経た現在、近現代の戦争に関わる遺跡について周知の埋蔵文化財包蔵地として位置づけられた福岡県の遺跡は、令和元年（2019）10月現在で、行橋市の市指定史跡「稲童1号掩体壕」とその周辺の稲童地区の「掩体壕群」・「誘導路跡」・「地下通信司令部壕」「掩体壕群建設関連施設跡」など9件（行橋市2010）、みやこ町の「海軍犀川補助飛行場跡」（みやこ町2010）、久留米市国分町「久留米俘虜収容所跡」（註8）、宗像市大島の「大島砲台跡」・「津和瀬砲台跡」、築上町「広末壕跡」（築上町2019）、そして糟屋郡志免町の重要文化財「堅坑櫓」や第八坑関連施設等の志免炭鉱跡関係の遺構などがある（註9）〔補註〕。

b. 埋蔵文化財としての調査

そのような中であって、これまでも近現代の戦争に関する遺跡として埋蔵文化財の調査対象となった事例は幾つかあった。それらの多くは、より以前の時代、例えば弥生時代や古墳時代の遺構の上面に近現代の遺構があったことから、それらを掘り上げて（片付けて）のちに目標とする弥生時代や古墳時代等の遺構に調査が及んだというものなどであり、当初から近代の戦争に関わる遺跡をも調査対象としたとはいえないものであった。従って、それらの近現代の遺構についての考古学的な対応、つまり個別の遺構実測図の作成や写真撮影がなされていないものも多く、多くがむしろ遺構というよりは攪乱などとして捉える傾向にあったことは否めない。それらは報告書において「戦時中の攪乱」というような表現がなされていることで知られるものであった。

福岡県において、戦争関連遺構について個別実測等が行われ、報告において説明記述がなされるようになったのは、管見の限りでは、前述した平成元年（1989）8～9月の朝倉郡三輪町（現筑前町）山隈窯跡群の調査の際に確認された弾薬庫跡が最初と思われる（九州大学1990）。そのような遺構としての記録がなされたのは、それが大学の考古学研究室が行った調査であったということも

大きな要因と言ってよいのかもしれない。

福岡県において、戦争に関する遺構等の図化がなされ、報告書等での説明がなされている事例を調査順に示しておく。

なお、朝倉市（旧甘木市）の大刀洗飛行場地下司令部については、平成10年（1998）11月に、航空灯台跡は同11年（1999）に当時の甘木市教育委員会が実測及び測量調査を行っている。

- ・朝倉郡三輪町（筑前町）山隈窯跡群 弾薬庫跡 1989年調査（九州大学1990）
- ・宗像市 平等寺原遺跡 探照灯跡 1990年調査（宗像市1991；註10）
- ・北九州市小倉北区小倉城跡 明治石垣・材料庫 1991.5～10月調査（北九州市1997）
- ・久留米市城南町 両替町遺跡 防空壕跡 1991.9～1992.10月調査（久留米市1996）
- ・甘木市（朝倉市）屋永西原遺跡 塹壕・掩体壕 1998.4～5月調査（甘木市1998）
- ・糟屋郡志免町別府 中山遺跡 防空壕跡 1998.4～8月調査（志免町2000）
- ・福岡市中央区域内 鴻臚館跡17次 1999.4～2000.3月調査（福岡市2001）
- ・福岡市中央区域内 鴻臚館跡18次 2000.4～2001.3月調査（福岡市2002）
- ・筑紫野市山家 長道遺跡 聴音防空監視哨跡 2000.11～2001.1月調査（筑紫野市2006）
- ・福岡市中央区域内 鴻臚館跡19次 2001.5～2002.3月調査（福岡市2003）
- ・小郡市三沢北中尾遺跡 4地点 防空壕跡 2002.8～2003.1月調査（小郡市2007）
- ・京都郡豊津町〔みやこ町〕徳永 徳永宮地遺跡 2003.1～3月調査（福岡県2004）
- ・大野城市上大利 野添遺跡第6次 洞窟壕陣地跡 2003.5～8月調査（大野城市2006）
- ・福岡市中央区域内 鴻臚館跡21次 2003.5～2004.3月調査（福岡市2006）
- ・行橋市大字稲童 稲童豊後塚遺跡1次 2004.3～2004.5月調査（行橋市2007）
- ・小郡市吹上二ツ塚遺跡 防空壕跡 2005.10月調査（小郡市2006）
- ・うきは市吉井町生葉竹重遺跡 軍需工場跡 2005.1～2006.3月調査（福岡県2008/2010）
- ・八女市亀甲後田遺跡（4次）溝跡 2006.4～2007.3月調査（八女市2009）
- ・三井郡大刀洗町大字山隈 大刀洗飛行場関連暗渠水路 2007.6.12調査（大刀洗町2008）
- ・北九州市小倉北区小倉城三ノ丸7地点 地下通信施設 2007.9月調査（北九州市2010）
- ・北九州市小倉北区小倉城三ノ丸8地点 地下道 2009.1月調査（北九州市2011）
- ・大野城市乙金 原口遺跡第4次 防空壕跡 2010.5～2011.5月調査（大野城市2013）
- ・大野城市乙金 古野遺跡第3次 防空壕跡 2010.2～7月調査（大野城市2015）
- ・大野城市乙金 古野遺跡第4次 防空壕跡 2011.4～2013.3月調査（大野城市2017）
- ・大野城市乙金 王城山遺跡第2次 防空壕跡 2012.7～2014.1月調査（大野城市2016）
- ・久留米市国分町 久留米俘虜収容所跡 2016.4～2017.7月調査（註8）
- ・小郡市寺福童 寺福童開遺跡 防空壕跡 2017.3～5月調査（小郡市2019）
- ・北九州市小倉北区 小倉城御用屋敷跡 弾薬庫跡・土塁跡 2017.11～2019.1調査（北九州市2019）

糟屋郡志免町の志免鋳業所遺跡については、明治22年（1889）7月の海軍省予備炭山である須恵村・新原第一坑が開坑してから、同39年（1906）9月に志免村に海軍新原採炭所第五坑が開坑したのを始まりとするが、その後も昭和20年の終戦までは海軍炭鋳として稼働した。海軍が関与したという意味で戦争に関連する遺跡ということで取り上げている。

その志免鋳業所の炭坑跡に町道や福祉施設、広場の建設が平成12年（2000）4月から同14年までに行われた際に、志免町教育委員会は事前に当該地の発掘調査を行った。志免町としては、この近代の志免鋳業所遺跡について、先述の文化庁による「平成10年通知」の中の「地域において特に重要なもの」という位置づけで発掘調査の対象としたのであり、それは志免町の歴史を考えれば当然といえることでもあった。町は平成17年（2005）に大部の報告書を作成した（志免町2005）。

c. 建造物等の調査報告例

上記の遺跡のほかに、施設の文献的調査や建造物としての調査、聞き取り結果などをまとめた報告書も刊行されている。さらに、文化財部局が関与して調査した戦役関係碑や伝承等文化資源調査の報告書も刊行されており、以下に示すような事例がある（註11）。

- ・久留米市 久留米俘虜収容所 1991・1999年聞き取り調査（久留米市1999）
- ・三井郡大刀洗町 大刀洗飛行場燃料庫 1998年12月調査（大刀洗町2000）
- ・久留米市野中町 円形野外講堂 2003年8～9月調査（久留米市2004）
- ・筑紫野市内の戦役関係碑の調査 2015年3～2016年3月調査（筑紫野市2016）
- ・小郡市の伝承等文化資源調査 2011年度/2012～2014年度調査（小郡市2012/2015）

d. 戦争関連遺物出土報告例

戦争に関連した遺物の出土例は、攪乱等からの出土といった取扱いで、これまで報告されていないものが無数にあったものと思われるが、遺構としての遺跡と同じく、やはり機が熟して後に報告例が増えてきたという傾向にある。それらのうち多いのは茶碗や銃弾等であり、報告書にて知り得た福岡県内の事例を以下に列挙するが、未報告事例も含めて多くが埋もれているであろう。

磁器カップや統制陶磁器などについては「金属類回収令」（昭和16年9月施行、同18年・20年に改正）により、金属類に代わる陶磁器製品の生産が推進されて食器や手榴弾などが作られた。そのほかに陶貨幣もあったが、陶貨幣は結局は使われることがなかったという（森田1996）。

なお、白川遺跡で出土し、また北九州市高蔵山堡塁で採集されたサクラビールは、北九州の門司で大正2年（1913）に誕生したビールである。

- ・行橋市大字稲童渡築紫古墳群（渡築紫遺跡A区・B区 爆弾の尾翼部7点（行橋市2019）
- ・筑後市大字久富 久富市ノ玉遺跡；日章旗等を描いた赤絵磁器碗（福岡県1993）
- ・筑紫野市大字西小田 宗原遺跡；葉莢（福岡県1994）
- ・豊前市大字今市 下原遺跡；銃弾（福岡県1998）
- ・直方市山部 中原田遺跡；碗や統制磁器（直方市2000）
- ・福岡市早良区西新 西新町遺跡第12次；磁器製ボタン（福岡県2001）
- ・福岡市早良区西新 西新町遺跡第13次；葉莢・砲弾（福岡県2003）
- ・福岡市中央区城内 鴻臚館跡19次（福岡城跡47次）；碗、銃弾、葉莢など（福岡市2003）
- ・直方市津田町 津田町遺跡；「征露記念」、日章旗、旭日旗等を描いた碗（直方市2003）
- ・久留米市田主丸町豊城 日詰遺跡2次（Ⅱ区）；爆弾三勇士を描いたガラス容器（福岡県2005）
- ・行橋市大字稲童 稲童1号掩体壕；弾丸片、煉瓦片、金属片など（行橋市2007）
- ・行橋市大字稲童 稲童豊後塚遺跡1次；弾丸と爆弾の尾部破片など（行橋市2007）

- ・小郡市吹上 吹上二ツ塚遺跡2；鉄製鏝、貨幣、葉莢、陶磁器小片（小郡市2006）
- ・八女市室岡 後田遺跡4次；統制陶磁器、ガラス瓶、歯ブラシなど（八女市2009）
- ・北九州市小倉北区小倉城三ノ丸第7地点；机・電話機・火鉢・算盤など（北九州市2010）
- ・久留米市 筑後国府跡222次（「三反野地区」）；九九式二十耗機銃（久留米市2010）
- ・うきは市吉井町 竹重遺跡2次（浮羽究真館高校）；配管（福岡県2010）
- ・北九州市小倉北区小倉城三ノ丸第8地点；陶器碗・電灯笠・碇子など（北九州市2011）
- ・北九州市小倉北区小倉城三ノ丸第6地点5；「工場用磁器カップなど」（北九州市2012）
- ・小郡市力武 三国小学校遺跡4；統制陶磁器碗・皿（小郡市2015）
- ・大野城市乙金 古野遺跡4次（乙金地区遺跡群21）；統制陶器・鉄製鏝など（大野城市2017）
- ・大野城市乙金 王城山遺跡2次（乙金地区遺跡群15）；磁器・鉄製鏝など（大野城市2016）
- ・久留米市国分町 白川遺跡6次（久留米俘虜収容所跡）；サクラビール瓶（久留米市2017）
- ・久留米市国分町 白川遺跡7・8次（久留米俘虜収容所跡）；サクラビール瓶（久留米市2018）
- ・久留米市国分町 白川遺跡11次（久留米俘虜収容所跡）；サクラビール瓶（久留米市2017）
- ・久留米市国分町 白川遺跡14次（久留米俘虜収容所跡）；サクラビール瓶など（久留米市2018）

上記に取り上げていないが、直方市内ヶ磯窯跡で採集された下関要塞地区域標のような資料については、土地から遊離したのものとして戦争関連遺物と捉えることは可能ではあるが、本来は土地とともに存するものであり、その圍繞する範囲に意味がある。

なお、出土品ではないが、福岡県では戦時資料の蒐集を昭和63年（1988）から始め、その収集された資料をもとに翌平成元年（1989）から県内各地を巡回して毎年8月頃に「福岡県戦時資料展」を開催しており、令和元年（2019）で第31回を数えている。

e. 福岡県が受けた空襲

日本が最初に受けた本土空襲は昭和17年（1942）4月18日のドーリットル空襲である。これは航空母艦ホーネットから発進したB25が東京や川崎、名古屋、四日市、神戸などを空爆したというものである。

その後2年以上の間をおいて、同19年（1944）6月16日に中国の成都基地を発進したB29が北九州の八幡製鐵所を中心として小倉・戸畑などを空爆した。同年7月7日にマリアナ諸島のサイパンで日本軍が全滅すると、同年11月24日にはサイパンの飛行場から日本本土に向けて発進したB29が東京空襲を行った。昭和20年になると空襲はいよいよ激化する。福岡県内では、特に大きな空襲として、3月27日と同31日の大刀洗飛行場周辺（旧甘木市や大刀洗町、小郡市を含む）、6月19日の福岡、同29日の門司、7月27日の大牟田、8月8日の八幡、戸畑、筑紫、8月11日の久留米などがあつた。いずれも大きな被害が生じているが、それ以外にも県内各地で空爆や機銃掃射を受けた所は多い。

爆弾投下や機銃掃射等による空襲被害を受けた痕跡が今に残るものとして、筑紫野市「西鉄旧筑紫駅待合所」、大刀洗町「菊池武光銅像の弾痕」、久留米市「祇園神社の被爆狛犬」・「栗島神社の被爆鳥居」、大牟田市「宮浦公園墓地の被弾墓石」や行橋市「安浦神社の被弾石造物」（鳥居・狛犬など）、豊前市「吉木の被災墓石」などといった物件がある。これらも戦争を物語る重要な物証である。

4. 戦争遺跡の史跡指定等

a. 県内の事例

先述のように、福岡県では平成14年（2002）12月に行橋市の「稲童1号掩体壕」が市の史跡に指定された。福岡県内における戦争遺跡指定の第1号である。これを踏まえたうえで、行橋市教育委員会は平成23年（2011）7～8月に「周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡写真展」を開催している。

福岡県では、直接的に戦争に関わる物件としては、これ以外に今のところ指定事例はない。ただ、海軍が運営していた「旧志免鋳業所堅坑槽」やその周辺の「志免鋳業所跡堅坑槽および第八坑関連地区」なども含めて取り上げると、重要文化財（建造物）や県指定史跡が存することとなる。

なお、この2件については今回の一覧表にも掲載した。

b. 全国的事例

さて、全国的に指定事例を挙げるとなると、「戦争遺跡」の定義として、その対象年代をいつからとするか、また対外戦争に関わるもののみとするか否か、北海道の屯田兵関連も含めるか否か、などの捉え方により、その対象は異なってくることとなる。

史跡指定としては、「幸畑陸軍墓地」が青森市指定史跡として昭和38年（1963）7月19日に指定されており、屯田兵関係を除く中では最も古い事例かと思われる。

沖縄戦に関するものとしては、沖縄県伊江村の「公益質屋跡」が昭和52年（1977）12月14日に村指定史跡に指定されている。また平成2年（1990）6月27日に同県南風原町の「南風原陸軍病院壕跡」が町指定史跡に指定されているが（2007年に「沖縄陸軍病院南風原壕」と改称）、戦争遺跡の指定としてはこれが全国初であると捉えられている（上地2000・瀬戸2016・沖縄県2015）。

建造物や遺跡等としてこれまでに国・県・市区町村の指定・登録等にかかる措置の執られた全国の事例と傾向を概観すると、次のようになろう。

- ・昭和30年代半ば以降の昭和の時代、概ね1955～1988年の間には、北海道の屯田兵関係の指定が多く、一部に青森や沖縄、広島、東京、鹿児島、群馬などでの指定が見られる。
- ・平成の時代に入って、平成2年（1990）に文化庁は近代化遺産（建造物等）の総合調査を開始する。また同年6月には沖縄県南風原町の「南風原陸軍病院壕跡」が町指定史跡となった。
- ・文化庁は平成7年（1995）3月に史跡等の指定基準の改正を行い、そこに「戦跡」が位置づけられて同年6月には広島の「原爆ドーム」が史跡に指定された。
- ・さらに平成8年（1996）6月には文化財保護法が改正され、50年以上を経過した建造物が登録文化財として登録できるようになった。また、この年から文化庁は近代遺跡の調査を開始した。
- ・平成9年度以降、戦争に関わる建造物についても登録文化財が一挙に増加し、ほぼ毎年登録されるという状況となった。併せて建造物の重要文化財指定や史跡指定も増えていった。
- ・文化庁は近代の軍事遺跡（戦争遺跡）については、平成14年（2002）8月に全国50件を詳細調査の対象に選定した。
- ・平成28年（2016）には日本遺産（第2回）として「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」が認定された。

註

- 1 沖縄県教育委員会が発刊した『沖縄県の戦争遺跡—平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書一』〔沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第75集〕(2015.3)の「第3章 戦争遺跡の考古学的調査および研究史」及び「第7章 総括」の「第2節 戦争遺跡の保存・活用の現状と方向性」においても触れられている。
 - 2 名古屋市見晴台遺跡の調査において、「1974（昭和49）年7月25日発行の『見晴台発掘ニュース12-1（No.44）』には、「今年の発掘地点は、旧帝国陸軍の高射砲陣地跡（昭和の戦争の遺跡？）を調査します。」とあり、・・・」（伊藤2011）とされており、「戦争の遺跡」という表現ではあるが、すでに「戦争遺跡」という把握がなされているとみてよいのかもしれない。
 - 3 小川望・中野高久 2009.5「近世」考古学ジャーナル586の p129
 - 4 佐藤2017がこのことを指摘している。
 - 5 奈良文化財研究所編2010に記載され、佐藤2017でも触れている。
 - 6 横山浩一氏は、新しい時期を取り扱う例として、「ヨーロッパでは産業革命期を取り扱う産業考古学という分野が開拓されつつあるし、日本でも江戸時代の陶磁窯跡はいうに及ばず、明治時代につくられた北海道の官営工場のような新しい遺跡さえ発掘の対象になっている。」(p3)と述べるが、このとき戦争遺跡にはまだ言及されていない。その後、平成10年（1998）段階では戦跡を取り上げていることに触れている（横山1998）。
 - 7 全ての新聞等の取組みを把握していないが、例えば福岡県を主体とした新聞である西日本新聞では、平成23年（2011）1月から「こだま」（その後「オピニオン」と改称）の欄で「戦争一次の世代への伝言」が掲載されてきている。なお、歴史ものを扱う雑誌においても「戦争遺跡」が取り上げられるようになるが、それがいつからであるかはまだ把握しきれていない。いま、手もとにあるものとして2004年6月発行の『歴史群像65号』（学習研究社）には「戦争遺跡情報」のコーナーが設けられている。
 - 8 久留米市白川（しらごう）遺跡については、平成13年（2001）10月に宅地造成に伴う発掘調査が始まったが（久留米市2002；183集）、同28年（2016）4～7月の第6次調査において「久留米俘虜収容所跡」及び久留米衛戍病院時代の遺構が確認された（久留米市2017；377集）。それ以降の7～17次調査でも俘虜収容所の下士卒用建物跡や土坑などが確認されている（久留米市2017・2018；382・400集）。
 - 9 福岡県の近現代の遺跡等で文化財として指定されたものは、行橋市指定史跡の「稲童1号掩体壕」が平成14年（2002）12月2日指定。志免町の「旧志免鋳業所竪坑槽」は同19年（2007）に登録有形文化財に登録されたのち同21年（2009）12月8日に重要文化財（建造物）に指定された。また、その隣接する「志免鋳業所跡竪坑槽および第八坑関連地区」は同22年（2010）3月24日に県指定史跡となった。
なお、久留米市「久留米俘虜収容所跡」は同28年（2016）12月12日、宗像市「大島砲台跡・津和瀬砲台跡」は平成30年（2018）9月10日、築上町「広末壕跡」は平成31年3月末までに周知の埋蔵文化財保護地に登録された。
 - 10 行政が主体の調査では、遺物については早くから報告されている事例もあるが、遺構としては、この宗像市平等寺原遺跡が最初と思われる。
 - 11 志免町では志免鋳業所に関連する舎宅についての調査を有明高専とともに平成13年～14年と17年に行い、その翌年に報告書を刊行している（志免町2006）。近代遺跡の調査に係る成果である。
- [補註] 遠賀郡芦屋町の遺跡詳細分布調査において「浜口陣跡遺跡」とされている遺跡は、陣地の退避・司令部壕であったとされるので、これも含めておきたい。
- 芦屋町教育委員会 1998.3『芦屋町遺跡詳細分布調査報告書』芦屋町文化財調査報告書 第9集

Ⅲ 福岡県の戦争遺跡

1. 概要

戦争に関する遺跡を見る場合、各地においてどのような組織や施設があったか、空襲がどうであったか、などについて考慮しなければならないだろう。

福岡県では、前述のように師団・連隊関係として、小倉歩兵第十四連隊、福岡歩兵第二十四連隊、久留米歩兵第四十八連隊、第十六方面軍司令部・第五十六軍関係などがあった。

要塞・砲台関係としては、下関要塞関係や玄界灘・響灘周辺砲台などがある。

航空隊・飛行場関係としては、陸軍では大刀洗飛行場、芦屋飛行場、岡山飛行場、曾根飛行場、席田飛行場、大刀洗北飛行場など、海軍では博多航空隊（西戸崎飛行場）、築城航空隊、元岡飛行場、玄界基地関係などがあり、ほかにも秘匿飛行場などがあったとされる。

生産関係としては、小倉陸軍工廠、春日市周辺の小倉陸軍造兵廠春日製造所・九州兵器・九州飛行機、大牟田周辺の化学工業、海軍志免炭鉱などについてを見ることができる。

各市町村史誌における戦争に関する記述についても上記のことを踏まえて触れられており、今回まとめた「福岡県戦争遺跡等一覧表」のうちの遺跡・遺構についてもこれらに関するものとなる。

2. 第一次調査（悉皆調査）

I章の2の調査の経過とも重複するところがあるが、再説しつつ見ておきたい。調査第一年次の平成29年（2017）10月7日（土）開催の第1回福岡県戦争遺跡調査指導委員会（以下、委員会）で提示した「福岡県戦争遺跡調査表」においては、市町村史誌類やその他のさまざまな情報を収集して、遺跡としうるもの291件、慰霊碑など613件の合計904件を取り上げた。

これを県内の60市町村に照会し、追加情報とともに提示した各物件の内容確認をお願いした。平成30年（2018）1月26日締切りとして、追加・補正を含めた回答をもとにした総数は遺跡520、慰霊碑等900の総数1,420件となり、500件余りが増えた。

第2回委員会後に再度市町村へ照会を行い、平成30年（2018）8月31日締切りの回答により遺跡560件、慰霊碑など908件の合計1,468件となり、さらに40件ほどが増加した。その後、さらに文献等の調査結果をも加えて追補訂正し、令和元年（2019）6月9日開催の第4回委員会に提示したのは遺跡634件、慰霊碑など984件の合計1,618件となった。

そして、報告書刊行に向けて、最後の内容確認、追補訂正について各市町村へ再々の照会を行い、最終的にはこの報告書の巻末一覧表のとおり、遺跡624件（戦後の13件を含む）、慰霊碑など1,025件の合計1,649件となった。もとより、この数は今後のさらなる調査等により増加していくものと思われる。

なお、今回は文化庁が示したような評価のA～Cランクといったランク分けは行わなかった。

ここで、遺跡の位置づけをしていない忠霊塔・忠魂碑・記念碑、絵馬等について、一覧に集めた結果をみておきたい。

名称としては、忠霊塔・慰霊塔・招魂塔・靖国塔・平和塔・慰霊碑・忠魂碑・鎮魂碑・旌忠碑・

英霊碑・記（紀）念碑・戦没碑等があり、多様である。これらは戦争に関わる物件ではあるが、当報告書において所謂「戦争遺跡」としては扱わなかった。ただ、近現代史における地方（地域）の社会的背景等をうかがう資料にはなるであろう。以下に若干の分析をしておきたい。

忠霊塔は戦死者の遺骨を納めるもの（墳墓）であり、忠魂碑は戦死者の魂を祀るもので遺骨はないとされる（今井2008）。上記の塔や碑における実際の対応が如何ようであったかは聞知しえないが、各地において戦役の戦没者を慰霊するために建てられたことは確かであり、とくに忠霊塔や忠魂碑は複数の戦役の戦没者を慰霊したものともなっている。一方で記念碑としたものには、日清戦争や日露戦争などの記念としたものが多い。

地域として多くの碑・塔が建立されている所もあれば、町内に1基しか見られない所（小竹町・久山町・志免町・宇美町）もある。昭和21年（1946）11月27日にGHQのもと日本政府が出した「忠霊塔、忠魂碑等の措置について」などの影響があるのであろうか。いま巻末に掲示した1,000件を越す碑・塔において、ある戦役に特化したものとしては日露戦争が最も多く見られ、次いで満州事変から太平洋戦争に至るものとなる。

また、こういった碑や塔は各地の神社境内に建立されている事例が多いが、その神社には絵馬を掲額したものもある。福岡県博物館協議会は、平成2年度から数年をかけて県内の絵馬の悉皆調査を行い、その前の昭和61年度から調査されていた福岡市分を含めて、『福岡県の絵馬』として4冊の報告書を刊行した。そこに収録された絵馬は1,479の神社等の11,561点であった。それらの絵馬には「西南戦争図」や「日清戦争図」・「日露戦争図」・「日中戦争図」といった戦争に関わる画題のものに加えて、画題は別だが添えられた銘文に戦争に係る標題や軍隊関係者が見られるものが少なからず含まれており、それらを抽出してみたところ530件ほどが数えられた。それらの中で最も多いのは日清戦争及び日露戦争に関するものでともに150件ほどである。

碑・塔については日清戦争関係はあまり多くないが、日露戦争関係はとても多い。絵馬は日清・日露戦争ともに画題としては断然多くを占めている。碑・塔も絵馬も建立や掲額されたのは日露戦争が終わって間もない明治40年前後の時期が多い。日本の近現代史を見ていく上で、これらの様相を分析することも重要であろう。

3. 第二次調査（詳細・重点調査）

第一次調査のリストを踏まえ、また各種情報をもとに、重点的に調査すべき所を選定して、その全ての箇所について原則的に地元市町村の文化財担当者とともに現地を確認した。一部はI章の2の調査の経過に述べたとおりであるが、一部補足しておく。

平成29年（2017）12月以降、同31年（2019）2月までの間に、福岡市西区小呂島、北九州市若松区白島（男島）、宗像の沖ノ島・大島、北九州市小倉北区藍島という離島における砲台等を調査した。これらの島では戦後の大きな開発がほとんど及ばなかったこともあり、砲台等の軍関係の施設が廃棄された状態で、一部が埋もれつつ深い藪の中に残っている状況が窺われた。今回は、渡船の時刻に制約されて十分な調査時間が確保できなかったこともあり、今後のより詳細な調査が望まれる場所であろう。

北九州市の下関要塞関係では、富野堡壘・手向山砲台・笹尾山砲台・矢筈山堡壘・古城山砲台・

高蔵（高倉）山堡壘などを、また、西・合馬の照空陣地・石峰山陣地・惣牟田〔灘山〕高射砲陣地・水上越北側陣地を調査した。これらのうち、いくつかは市の公園内にあり、特に矢筈山堡壘などは良好に遺存していて市営キャンプ場として利活用されている。

飛行場関係では、第2・3回委員会の際に、行橋市・築上町の築城飛行場関係掩体、筑前町・大刀洗町・小郡市の大刀洗飛行場関係掩体等を委員とともに視察・調査した。また、それ以外に八女市の蒲原・亀甲・室岡・龍ヶ原一帯にあった岡山飛行場、福岡市の雁ノ巣飛行場、西戸崎飛行場（博多海軍航空隊）の跡地を調査した。自衛隊使用の基地以外の飛行場そのものは残りが良いとは言えないが、西戸崎飛行場の掩体は青少年海の家敷地内で松林の中によく残っている。

本土決戦に向けた陣地等では、福津市の高宮山陣地・上西郷の大阪陸軍航空廠福岡出張所跡地倉庫、大島の津和瀬砲台、岡垣町の垂見峠砲台、粕屋町大隈丸山の監視哨・退避壕（トンネル）など、これまでにほとんど知られていないものの遺存状況のよいものもあった。また、糸島市の志摩船越の玄界基地関係烹炊所や二丈福井の大入ドックなども調査した。

軍需工場関係では、大牟田市の企業内に残る遺構を見せていただいた。そのほか、大牟田市役所の防空監視哨・防空障壁などや久留米市の陸上自衛隊久留米駐屯地、旧陸軍墓地（野外講堂・遙拝台など）も調査した。

4. 史料調査

戦争遺跡は、軍事に関する遺跡という性格上、軍隊や軍工廠の所在地等で形成されることが多い。もちろん、近代戦とは一般市民も巻き込んだ総力戦であり、軍需物資を生産していた民間工場や、空襲で被災した場所も戦争遺跡となるが、やはり軍隊が自ら形成した遺跡も多く、軍の所在地が戦争遺跡を生み出す中心地といえる。そのため、陸海軍の各部隊が、県内のどの位置に所在していたのかという点は、戦争遺跡について解明していくための、重要な基礎情報となる。

今回の調査においては、この軍の動向を把握するため、文献史料調査も行った。調査の対象としたのは、福岡県内で編纂された自治体史と、防衛庁防衛研修所戦史部が公刊した『戦史叢書』である。なお『戦史叢書』については時間の制約上、福岡県内の部隊に最も関連が深いと推定される「本土決戦準備 九州の防衛」と、建軍から敗戦までの全期間の陸軍の編成等を網羅した「陸軍軍戦備」の2巻のみを、調査の対象とした。また2巻とも、付表については省略している。自治体史については、調査開始時点で九州歴史資料館及び福岡県立図書館に収蔵されている全自治体史を対象とした。なお、上記のほかに福岡県立図書館が収蔵する連隊史・部隊史等も調査を行ったが、部隊の概要等に関しては自治体史と重複していることが多く、さらに多くの部隊史では記述の大半が外地での戦闘に関するものであったため、本書では掲載していない。

文献史料調査においては、まず「自治体史等集成」として、これらの文献の中で、戦争・軍事に関する記述の集成を作成した。集成の対象としたのは

- ①福岡県内における陸海軍部隊の編成、移駐、出征に関する記述
- ②陸海軍の官衙、学校、軍工廠等の設置・変遷に関する記述
- ③従軍者・戦没者の記述
- ④アジア太平洋戦争中の空襲に関する記述

である。自治体史においてはこの他に在郷軍人会、警防団等の銃後団体、青年会・処女会等の国策団体に関する記述も豊富に見られるが、これらに関しては原則省略した。また戦時中の教育や暮らしに関するものは、軍工廠への勤労奉仕・学徒動員等に関するもの、および空襲等に関するものは記載し、それ以外は適宜省略しているものがある。記事作成の対象とする時期は昭和20年（1945）8月15日の終戦までとし、その後の占領・進駐、引き揚げ、自衛隊の施設使用等は適宜省略した。ただし戦争に関する慰霊行事等は収録している。

さらに、これらの文献から各部隊等の記事を抽出し、各部隊等の動向をまとめた集成も作成した。集成作成の対象としたのは

- ①福岡県内で編成された部隊・官衙等
- ②他府県等で編成後、福岡県内に駐屯したことがある部隊等（移動途中の一時滞在は除く）
- ③県外駐屯だが、福岡県と関連が深い部隊等（山口県内の飛行場に駐屯し、北九州の防空に当たった飛行部隊等）

である。部隊・官衙等とあるように、純粋な部隊の他に陸海軍官衙、学校、軍工廠等も含んでいるが、純粋な民間軍需工場は一部を除き含んでいない。部隊名については部隊名の欄では漢数字による正式表記、本文中においては紙幅の関係から数字表記とした。通称号については、文献に記載が見られたものを部隊名の欄で併記したが、本文中で適宜触れたものもある。

集成記事作成では、「概要」欄にこれらの県内における動向を主に記載した。海外への出征や県内駐屯以前の動向についても、概略を記載した。ただし②・③の内、飛行部隊で昭和19年以降に福岡県の防衛に当たった部隊については、福岡県移駐前の経歴が煩雑なものも多いため、県移動前は原則省略している。集成の作成に当たっては、部隊等動向に関する記事とともに、出典として典拠（略称を記載）とページ数を「自治体史①」の欄に記載している。出典の中で、特に詳細な記載があるものについては太字、また年表中に登場するものは斜字で記載した。また部隊・官衙等の存続期間が長期間に渡ったものについては、適宜時期を分けて分割した。この場合、典拠となった文献の中で、記述が長期にわたるものやその部隊等の記述がどの時期のものか不明なもの、また部隊について軽微な記述に留まっているものは、「自治体史②」の欄に一括して記載している。

5. 各遺跡の詳細

第二次調査（詳細・重点調査）の対象とした遺跡は第I章の2のeの調査経過一覧に示したが、そのうち32件について詳細を次ページ以降に掲載した。それぞれの遺跡は1ページないし2ページのシート形式とし、名称、所在地、立地、種別、築造者、所有者、現状を列記したあと、当該遺跡の概要を述べ、最後に参考文献を記すとともに、位置図（原則1/25,000）、測量図・実測図・略図など参考となるもの、写真の掲示という構成をとっている。各遺跡の名称の冒頭に示した数字は巻末の第1表「福岡県戦争遺跡等一覧表」の番号、参考文献は第2表「福岡県戦争遺跡等一覧表関係文献」の番号と同じである。

なお、重点調査を行ったもののこの項に掲示していない遺跡については、第1表「福岡県戦争遺跡等一覧表」においてやや詳しい説明を行った。

1 古^こ城^{じょう}山^{さん}砲^ほ台^う・堡^ほ塁^{るい}

所在地：北九州市門司区門司

立地：古城山の七合目～山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現 状：めかり公園内に現存

概要

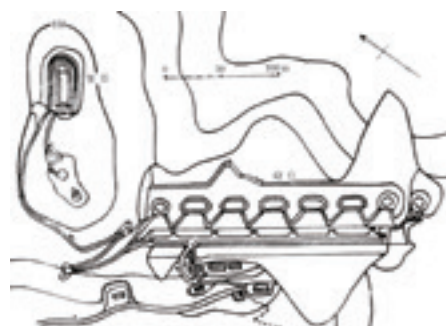
古城山砲台は、標高175mの古城山の7合目、標高100m付近に、下関要塞地帯の一部として周防灘、関門海峡の両海面を制圧する役目で、明治21年（1888）2月起工、同23年（1890）6月竣工。砲台は24年10月～25年4月の間に24糎臼砲（文献5・46は榴弾砲とする）5砲座10門を設置していた。明治末期に廃止。現在は和布刈公園となり埋もれている。

観測所は山頂部にあり、コンクリート構造物と階段が残る。山頂手前の標高160mの尾根上には明治27年（1894）10月起工、同28年（1895）10月竣工の堡塁があり、機関砲4門を備砲したとされる。赤煉瓦造り半地下式倉庫が石造り胸牆とともに残る。

なお、砲台は一度廃止されたが、太平洋戦争中には改めて高射砲陣地が設置され、北九州の防空を担った。

参考文献

- ・ 5『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 45『北九州の近代化遺産』
- ・ 46『北九州の戦争遺跡』
- ・ 111『明治期国土防衛史』
- ・ 556『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



古城山砲台図（『日本築城史』）



砲台群跡地



観測所登り口



堡壘の赤レンガ倉庫

観測所



石造り胸牆が巡る堡壘

観測所出入口

3 やはずやま ほるい 矢筈山堡壘 (砲台)

所在地：北九州市門司区大里

立地：標高266mの矢筈山山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現状：市営キャンプ場として要塞施設を活用している。良好に遺存する。

概要

関門海峡・大瀬戸の大里の後方及び周防灘方面防禦のため矢筈山山頂（標高266m）に明治28年（1895）8月から構築される。同31年3月竣工〔文献5は同20年2月の起工で竣工年不明とする〕。大里方面（関門海峡）は第4砲座、周防灘方面は第1・2・3砲座で対応した。9糎臼砲4門、15糎榴弾砲6門が据えられていた。明治末期に廃止。倉庫・井戸・地下壕・弾薬庫・営庭などが良好に残り、現在は青少年キャンプ場に再利用されており、倉庫の内部なども見学ができる。砲座に使用した煉瓦に「イヨミツ」・「いよみつ」の刻印を有するものがあり、手向山砲台などでも同じ煉瓦が使われた。

* 「イヨミツ」・「いよみつ」は伊予（愛媛県）松山の三津濱煉瓦株式会社（創業明治18年）の製品。逆から読むと「つみよい＝積み良い」となる。

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 46 『北九州の戦争遺跡』
- ・ 111 『明治期国土防衛史』
- ・ 556 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



略測図（前藺氏作成）



地下倉庫入口



倉庫（下：一室）

倉庫（下：内部）



第3砲座

第2砲座



第3砲座

営庭入口

4 ^{たむけやま}手向山（田向山）砲台

所在地：北九州市小倉北区赤坂4丁目

立地：標高76mの山頂から少し下った位置

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現状：公園内に現存

概要

関門海峡がS字状に湾曲したうちの最南部の独立小丘上・標高76m付近にあり、大瀬戸を護る役目で明治20年（1887）9月から砲台構築が始まり、同22年（1889）3月竣工（または1888年9月か）、同24年（1891）6～12月には24糎臼砲（文献5・46は榴弾砲とする）6砲座12門が北向きに据えられた。各砲座間に半地下式の倉庫（第1～5号）が設けられ、第4号倉庫には「明治二十年九月起工 同二十一年竣工 工役長 陸軍工兵大尉南部雅枝」と刻まれた銘板が埋め込まれている。観測所は東西に1基ずつ設置される。下関側の田の首・筋山砲台と呼応したものである。明治末期に廃止。昭和に入っても小倉造兵廠防備のための砲陣地として利用されていたとされ〔文献45〕、太平洋戦争中は山頂を平らに造成して7糎高射砲4門を設置し高射砲陣地とした。部隊編成は昭和16年12月に防空第22連隊・高射砲第2中隊、19年6月に高



測量図（前菌氏作成）



探照灯台座



発電所の煉瓦銘

射砲第132連隊・高射砲第10中隊、同年11月には同連隊・高射砲第12中隊が配備された。田向山とも表記。

〔探照灯台座〕山頂に向かう途中にある。明治22年（1889）構築。台座の上に可搬式の90糎探照灯が設置されていたという。半円形の壁面上部のセメントで固めた部分には「田ノ首」・「鳴瀬燈台」・「火ノ山」・「古城山」・「藍ノ島西端」などの各方向を示す地名15か所が刻まれている。また、通路の赤煉瓦に「いよみつ」・「イヨミツ」の刻印を有するものがある。

〔発電所〕手向山の丘陵裾部に明治22年（1889）に建てられた赤煉瓦造りの発電所で、夜間に関門海峡に侵入した敵艦を捕捉する探照灯用の電源として建造された。電灯所とも呼ばれ、背後に煙突や井戸も残る。煉瓦には「イヨミツ」の刻印を有するものがある。

砲台から観測所、探照灯と一連のシステムがセットで良好に現存している。

*「イヨミツ」・「いよみつ」は伊予（愛媛県）松山の三津濱煉瓦株式会社（創業明治18年）の製品。逆から読むと「つみよい＝積み良い」となる。

参考文献

- ・ 5『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 45『北九州の近代化遺産』
- ・ 46『北九州の戦争遺跡』
- ・ 556『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



左観測所



倉庫



発電所（外観）



発電所（内部）

7 ささおやま 笹尾山砲台

所在地：北九州市小倉北区、門司区

立地：標高120mの丘陵尾根上

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：不明

現状：山林内に現存

概要

大瀬戸を護る役目で明治20年（1887）10月に起工し、同22年（1889）9月に竣工した。手向山の東南約500mの丘陵尾根上にあり、標高は約120m。同21年10月～24年8月の間、5砲座に28榴弾砲各2門、計10門を据えた。そのうちの2門（または6門）は同37年（1904）の日露戦争時に対馬要塞に移動した。明治末期に廃止。現在は倉庫らしきフランス積赤煉瓦造建造物2棟（4号・5号）や半地下式の井戸、観測所等が残る。

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 45 『北九州の近代化遺産』
- ・ 46 『北九州の戦争遺跡』
- ・ 556 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



煉瓦造建造物



倉庫（上：4号 / 中：5号 / 下：内部）

とみのほるい 8 富野堡壘

所在地：北九州市小倉北区小文字1丁目

立地：標高120mの独立丘陵山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地、私有地

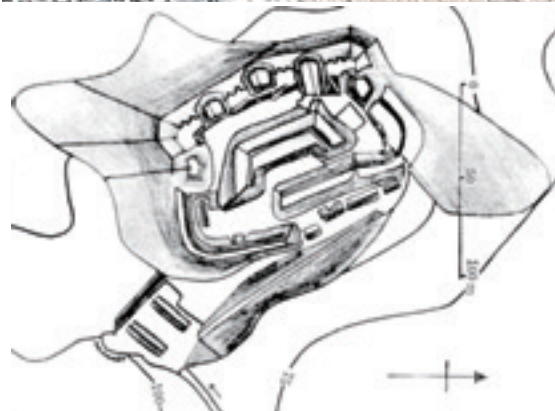
現状：一部は公園化

概要

下関要塞地帯の一部として、小倉北区の小文字山から北へ延びる尾根筋の標高120mの独立丘陵上に明治26年（1893）3月起工、同28年（1895）10月に竣工した〔案浦1976はM21年2月起工、M22年2月竣工とする〕。小倉からの対上陸戦用で、12糎加農8門（又は15糎臼砲8門）が据えられていた。手向山・笹尾の側防にあたった。明治末期に廃止。赤煉瓦造り倉庫は東向きに5基と南北両方向に開口する2基の計7基があり、入口は塞がれている。砲座は展望広場や老人ホームにより失われている。

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 46 『北九州の戦争遺跡』
- ・ 111 『明治期国土防衛史』
- ・ 556 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



配置図（『日本築城史』）



砲台跡地



倉庫

9 たかくらやま ほるい 高蔵山（高倉） 堡壘

所在地：北九州市小倉南区足原

立地：高蔵山の八合目、標高270mの尾根上

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：不明

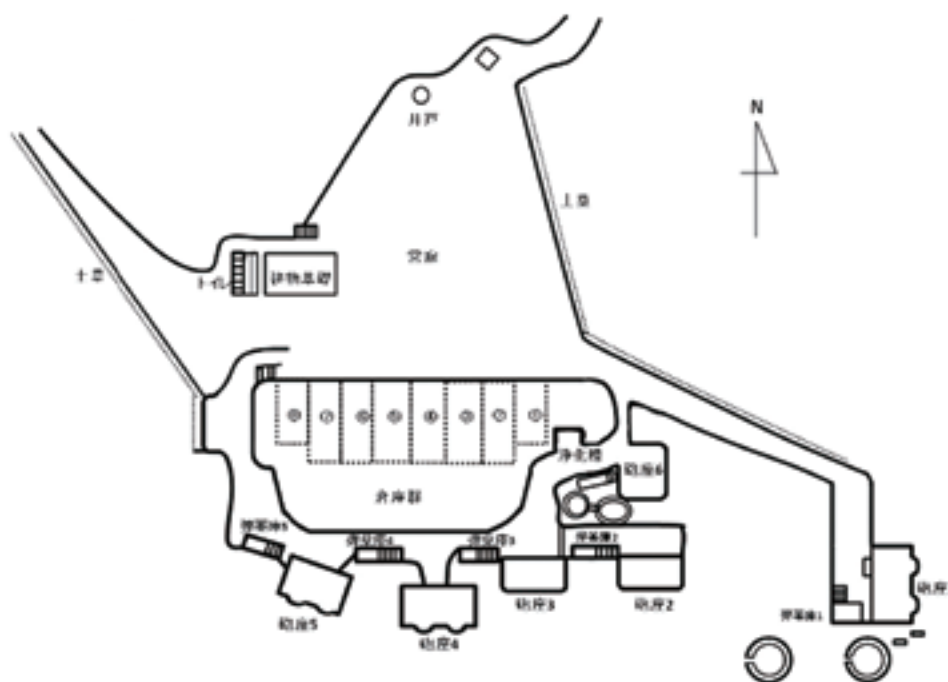
現状：山林内に現存

概要

下関要塞地帯として周防灘方面から上陸する敵に対して吉田・曾根・葛原・苅田方向を射撃する陣地で、日清戦争後の明治32年（1899）2月起工、同33年（1900）12月に竣工した。標高357mの高蔵山の八合目、山頂南側の尾根上の標高270m付近に築かれる。12糎加農6門、15糎臼砲6門、機関砲4門が配備された（文献5は12糎加農4門、15糎臼砲8門とするが6門ずつであろう）。横幅12mほどの砲台跡（砲座）6基のうち5基が南向きにほぼ一列に並び、もう1基は北の営庭側に造られている。それを含む東側の砲座3基の周辺部には窪地を有する高



倉庫（外観）



配置図（前菌氏作成）

台があり、指揮所もしくは機関砲設置場所らしい。砲座には弾薬庫が付随する。また、明治末期に廃止後、太平洋戦争中に一時使用された可能性があり、よく残る赤煉瓦倉庫8基のうち西端から二つ目の7号の開口部が壊されているのは昭和17年4月に山頂に設置された高蔵照空分隊用の保管庫に利用されたためと思われる。ほかに兵舎・弾薬庫、トイレ、営庭、地下貯水槽、井戸等が残る。また、堡壘建設のため小倉北区富野から現在自衛隊が管理する富野弾薬庫を通り、企救遊歩道を横断する壮大な軍用道路（幅約3～3.6m）を建設しており、途中に自然石及び花崗岩製の転落防止のガードを設置したり、軍馬へ水を補給する煉瓦製の水飲み場を設けている。また花崗岩製の下関要塞地帯標や陸軍省の境界杭等がある。「高倉堡壘跡」の碑が昭和49年3月14日に有志により建立されている。サクラビールの瓶や「東陶」銘のある軍用食器が採集されている。



倉庫（内部）



第1砲座

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 45 『北九州の近代化遺産』
- ・ 46 『北九州の戦争遺跡』
- ・ 556 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』



倉庫（下段：7号）



弾薬庫・弾薬庫（内部）

91 ^{にし}西照空陣地

所在地：北九州市小倉南区大字木下

立地：標高136mの丘陵山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

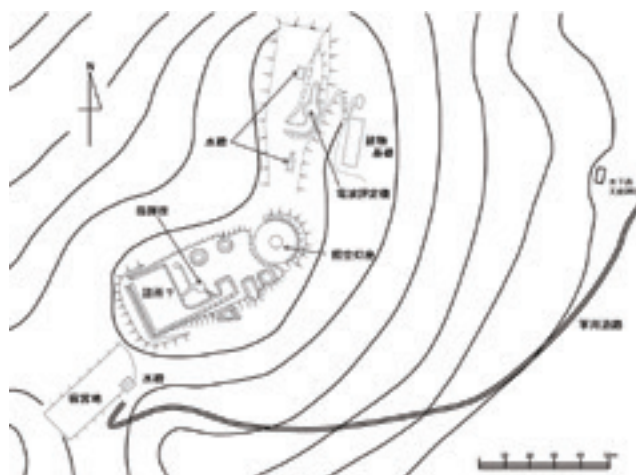
所有者：不明

現状：藪の中に現存



概要

昭和19年（1944）6月の防空隊配置図に記載され、東谷資料館の地図にも記載されている。軍道を登り詰めると宿営地らしき平場があり、そこから東の高い尾根上には索道で器材を運んだものと思われる。尾根上には詰所らしき区画と指揮所であろうコンクリート造り構築物がある。更に東側に照空灯座と思しき径3mの窪地があり、周辺にコンクリート片が散在している。これより更に北東側の丘陵先端部近くに電波標定機を据え付けたと思われる構築物が見られ、コンクリート壁の基礎部分が遺存する。



略測図（前藺氏作成）

参考文献

- ・ A 「北九州市まちかど探検」

指揮所



照空灯座



コンクリート構築物

いしみねやま
127 石峰山高射砲陣地 (7cm砲)

所在地：北九州市若松区大字藤木

立地：標高280mの尾根頂部

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

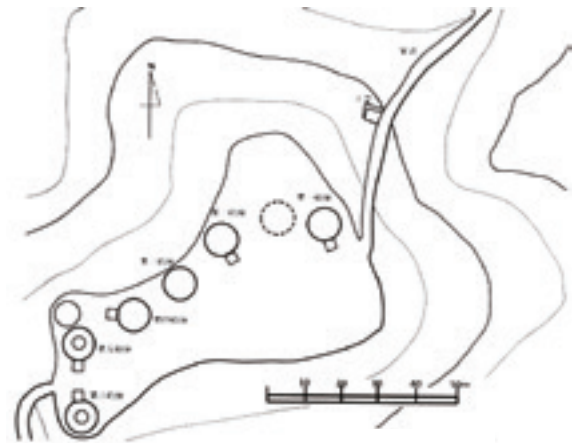
所有者：公有地？

現状：現存



概要

昭和16年(1941)12月設置の高射第4連隊の陣地で、石峰山(標高302.4m)の西南側尾根頂部(標高280m)に築かれる。径8mの土堰堤の中の幅3.3mの八角形コンクリート土台の上に径1.1mの円形コンクリートを載せ、そこに7糎高射砲を載せていた。円形座には固定用の12個のボルト穴があり、中心部は深さ10cmほどが窪んでいる。この陣地の砲座はほぼ東西に6基が並び、西端部の3基にはボルト穴が明確に確認され、第5砲座のボルト穴には円筒形に鉄が遺存している。各砲座には内法で幅1.78m、高さ1.7m、奥行2mのコンクリート製砲側弾薬庫が付随する。



配置図 (前菌氏作成)

参考文献

- ・46『北九州の戦争遺跡』



5号砲座砲側弾薬庫



6号砲座



5号砲座

129 そうむた　なだやま 惣牟田（灘山）高射砲陣地

所在地：北九州市若松区大字小石

立地：標高220mの山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：私有地

現状：現存



概要

北九州地区防空のため、昭和19年（1944）11月に、高射砲第131連隊高射砲第6中隊が編成され、12輜高射砲6門が設置された。「高射砲陣地築設要領」に則り、標高220mの山頂を造成し、直径5mのコンクリート砲座6か所が約18m間隔で、中央の指揮所を取り囲むように配置されている。砲座の周囲には土塁も遺存する。軍道、陸軍境界石等が残っている。12輜高射砲の陣地としては市内唯一のものである。私有地牧場の一角であり、砲座のある所に行く途中には「戦跡の有る！灘山牧場」と書かれた看板がある。惣牟田とも表記する。



配置図（前藺氏作成）

参考文献

- ・ A 「北九州市まちかど探検」



第2砲座



第4砲座



第1砲座

130 石峰山照空分隊

みずかみごえきたがわ (水上越北側陣地)

所在地：北九州市若松区大字小石

立地：標高232mの丘陵山頂

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：不詳

現状：現存

概要

北九州地区の防空を担うため、昭和19年11月、石峰山の西側、灘山高射砲陣地の南にある標高232mの尾根頂部を造成し、レーダー装置（電波標定機）が設置された。コンクリート基礎（送信機・受信機）2か所が約70mの距離で作られ、両基礎間は埋設ケーブルで連結していたらしく溝状の窪みが残る。送信機・受信機の基礎コンクリート構造物は内径4mの円形部分を中心に南北に突出部があり、全長約9.2mを測る。深さは約1.8m。北側の受信機の周囲は一辺が約40mの土塁状の土堤で囲んでいる。北海道の室蘭に配備されていた「タチ3号」電波標定機設置の陣地も同様の構造であったらしく、本陣地にも「タチ3号」電波標定機が設置されていたと考えられる。「タチ3号」電波標定機は英国GL Mk. IIレーダーのコピーで、約150台が製造されている。

周辺には山頂に至る軍用道路や防空壕、営所基礎等が残っている。

参考文献

- ・ A 「北九州市まちかど探検」

コンクリート構造物(レーダー基礎、北・受信機)



略測図（前藺氏作成）



コンクリート構造物(レーダー基礎、南・送信機)



たる み とうげ
228 垂見 峠 砲台

(湯川山砲兵陣地)

所在地：遠賀郡岡垣町内浦垂水峠
立地：四塚連山の垂水峠北側斜面
種別：軍事・防衛関係
築造者：陸軍
所有者：不詳
現状：現存



概要

本土決戦に備え、宗像・遠賀間の四塚連山のうちの湯川山（ゆがわやま；標高471.4m）と孔大寺山（こだいしやま；標高499m）のあいだにある垂水峠の北西部、稜線より東のやや下った所に2基のコンクリート盤洞窟砲台が築かれた。迷彩を施した砲台で、本土上陸を阻止するため三里松原海岸に向けて設置されたが、大島から移転された45式15糎加農2門の備砲直前に終戦となった、とされている。昭和20年5月以降の構築であろう。東側斜面下方の谷筋に軍道があるらしい。

参考文献

- ・ 109 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』
- ・ 532 『岡垣町史』



1号砲台



2号砲台（右、上）



おおしま
257 大島砲台

所在地：宗像市大島

立地：大島北部の台地上

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現状：現存

概要

島の北岸、岩瀬の南西約700m、標高120mの所にあり、昭和10年（1935）5月着工、同11年（1936）11月に竣工した。45式15糎加農の砲座4基、弾薬庫4基、観測所、連絡壕、軍道、井戸、電灯所（発電所）、掩灯所（射光機格納庫）、射光機座などがかなり良好な状態で遺存する。円弧状に配置された砲座は4基とも径7.9m、中央部径4.2mの円形で、深さは1.5m。対称の位置に階段が付く。観測所は砲座4基の近くにあり、北側に視界が開けた指揮室中央に98式砲台鏡を設置していた円柱が残る。観測所の下部には東西に出入り口を有する2・3号砲側弾薬庫がある。その東側には一辺10cmの「樹高整理杭」がある。照明所（照明座）には150糎射光機が配備されるが、台地突端部の跡地には「小呂」・「沖ノ島」の方向を示す標柱がある。当地には下関重砲兵連隊第2大隊第6中隊がいた。なお、現在、砲台周辺は公園化され、駐車場広場には「日本海海戦・戦死者慰霊碑」がある。

砲台群から西南に少し離れて聴音壕がある。

また、遥拝所下の海岸部には潮位測定用のコンクリート製水尺がある。

参考文献

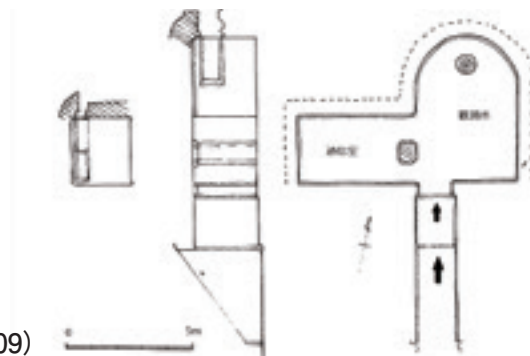
- ・109 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』
- ・519 『大島村史』



観測所（指揮室・通信室）



観測所指揮室内部



観測所実測図（文献109）



観測所と沖ノ島望見



2・3号砲側弾薬庫



2・3号砲座（整備状況）



2・3号砲側弾薬庫（内部）



2号砲座（整備状況）



大島砲台の45式15糎加農（文献109）



掩灯所（射光機格納庫）



聴音壕

260 つわせ 津和瀬砲台

所在地：宗像市大島

立地：大島の南西部の山中

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現状：遺構の保存状態良好

概要

大島の西沿岸部にある洞窟砲台である。地下式穹窿砲台2基、附属地下壕2基、作業場跡等が遺存する。洞窟式の砲台1基は残りがよく、コンクリートの厚さ50cm。他の1基は落石が多く、開口部の隣にコンクリート造りの枡がある。本土決戦準備のため昭和20年（1945）に構築された。45式15糎加農2門は大島砲台から移設したが、試射直前に終戦となった。洞窟の入口側の谷頭部分に構築段階に作業場としたらしい広場があり、セメントの塊や玉砂利などが残る。遺構の保存状態は全体としてはほぼ良好で、砲台の構築過程が分かる。なお、津和瀬集落の南方、耳鐘鼻に近い方の丘陵上において、この砲台を構築する前に最初に工事を行ってのち放棄した洞窟が遺存するという。

参考文献

・109 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』



1号砲座



2号砲座地下壕

262 おきのしま 沖ノ島砲台

所在地：宗像市沖ノ島

立地：沖ノ島の山中

種別：軍事・防衛関係

建造者：陸軍・海軍

所有者：宗像大社

現況：現存

概要

沖ノ島では、陸軍が昭和12年（1937）6月に砲台築城に着手、同15年（1940）3月竣工し、下関重砲兵第6連隊第7中隊が配備されたとされる。第1砲座は島の東北部、白岳の尾根上に構築され、砲座は外径6.6m、コの字形突出部2か所が対称配置される。砲側弾薬庫は砲座の西側斜面に構築される。第2砲座は島西部の高台に構築し、第1砲座と同じく、砲座外径6.6mで、コの字形突出部2か所が対称配置される。この第1・第2砲座には試製15糎連装加農2基が設置された。観測所は第1砲座の西側尾根上と第2砲座の東側尾根上にそれぞれ構築され、内径4.1mの円形基礎が残る。他に弾薬支庫（地下式鉄筋コンクリート造で、幅7m、奥行き18m、高さ4.75mの蒲葺形天井の空間に、幅2.7m、長さ7.7mの入口部が取り付く。空間内部には3部屋に区画された内室がある）、兵舎らしき建物群（基礎コンクリートと石垣が残る）、掩灯所（島の北西側と北東側にあり、地下式鉄筋コンクリート造で幅5m、奥行き6.55mの空間に、幅3m、奥行き4mの部屋を構築している）が確認されている。軍道は黄金谷の西側を北に伸び、黄金谷側には石垣を組んで、その上に木製電柱の基礎が残る。照明所（射光機座）と思われる場所には「大島西端方向」・「対馬南



遺構配置図（文献109）



第1砲座

端方向」などと刻まれた標柱4本がある。

昭和20年8月上旬、本土決戦準備に伴う備砲転用のため撤収し、火砲・弾薬とも博多港に到着した時に終戦となった。また、沖ノ島には、陸軍の砲台のほかに海軍の防備衛所が設けられた。

参考文献

- ・ 33 「沖ノ島の戦時遺構」
- ・ 109 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』



第2砲座



観測所 (通路)



第1砲座砲側弾薬庫 (内部)



第2砲座砲側弾薬庫



第2砲座砲側弾薬庫 (内部)



軍道

310 歩兵第三百三十二連隊陣地

所在地：糟屋郡粕屋町大隈

立地：独立小丘陵

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：私有地

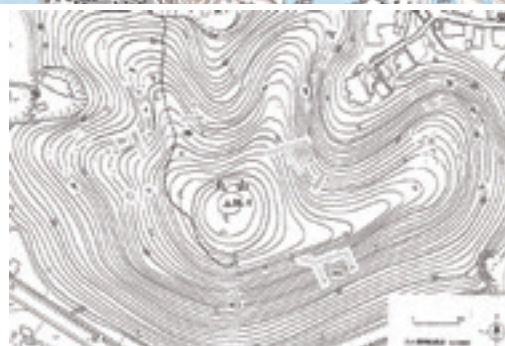
現況：現存

概要

昭和20年（1945）3月31日に内地に転進してきた第57師団歩兵第132連隊（昭和16年7月に秋田で臨時編成）の陣地跡で、粕屋町北東部の丸山（標高86.4m）・西尾山（標高約50m）・焼地山（標高約70m）の3山に、地下壕、個人用掩体、監視哨などの遺構が残る。この3山を調査した池田拓氏によると、丸山で73基、西尾山で25基、焼地山で22基の土坑や横穴を確認した。これらは丸山・西尾山の南、焼地山の北を西流する多々良川の谷筋を防御するもので、丸山の南斜面にはコンクリート製の監視哨が残る。太平洋戦争末期の構築で、地元の大隈区有文書に記載がある（複写文書は粕屋町歴史資料館保管）。

参考文献

- ・10「第57師団の本土決戦準備」



上：丸山遺構配置図
中：西尾山遺構配置図
下：焼地山遺構配置図
(文献10)



丸山（左）と焼地山（右）；西から



監視哨



監視哨窓



地下壕



遺構？



一人用掩体？

322 さいとざき 西戸崎飛行場

所在地：福岡市東区西戸崎
立地：平地（海浜部）
種別：軍事・防衛関係
築造者：海軍
所有者：公有地（市）
現状：山林内に現存

概要

博多海軍航空隊は、昭和15年（1940）11月15日に水上機、及び陸上機の両方を運用する部隊として開隊する。海の中道海浜公園管理センター本館ビル東側に昭和60年（1985）12月建立の記念碑があり、また水上機用斜路が海の中道渡船場の東100mの所にある。さらに東側300mほどの所にあるヨットハーバー防波堤の一部が軍時代のものであるという。さらにJR海ノ中道駅の前には航空隊敷地の外壁や境界柱が残る。また、海の中道海浜公園内には門柱や当時の建物基礎の一部が認められる。

当初、博多海軍航空隊での陸上機は陸軍の雁ノ巣飛行場を共用し運用していたが、編成替により九州飛行機の専用飛行場であった西戸崎飛行場へと移り、終戦まで使用された。滑走路についてはすでに痕跡は失われているが、海の中道青少年海の家敷地内の松林の中には無蓋掩体30数基と誘導路が現存する。掩体には一部半壊状態のものもあるが、多くは良好な状態で遺存しており、これほどの数の掩体が現存しているのは珍しく、大変重要である。また、現在の園路は当時の誘導路を利用している。地下指揮所若しくは通信所は、福岡市が防災のために発砲セメントを注入して埋めたとされる。

参考文献

- ・ 30『九州の戦争遺跡』
- ・ 44『福岡の戦争遺跡を歩く』



西戸崎飛行場（1948年米軍撮影）



無蓋掩体

345 陸軍福岡第二十四連隊

346 西部軍司令部庁舎

所在地：福岡市中央区内

立地：平地

種別：政治・行政関係

築造者：陸軍

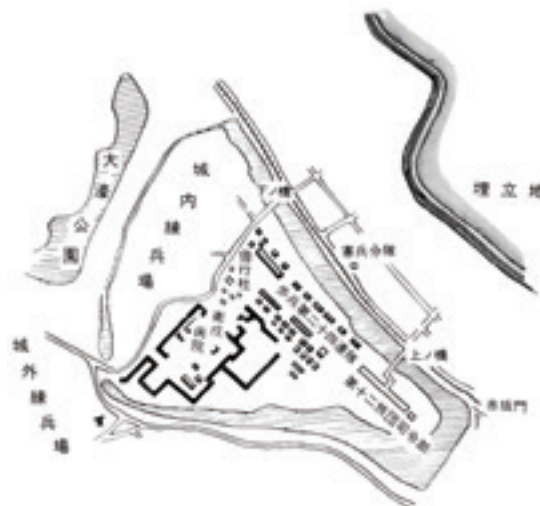
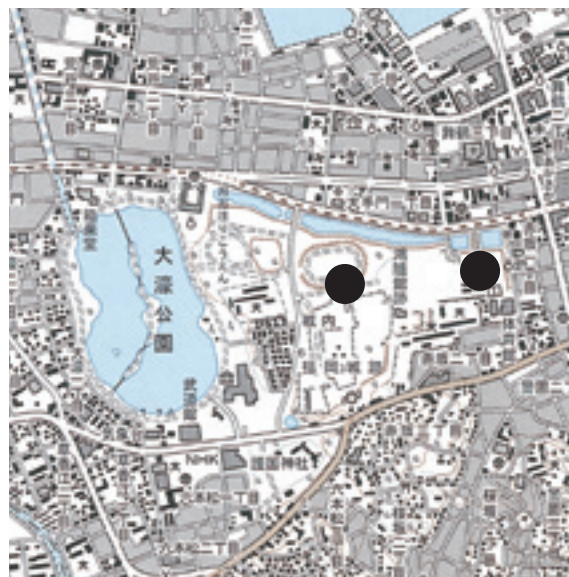
所有者：公有地

現況：一部が現存

概要

〔二十四連隊〕明治19年（1886）6月、福岡城内三の丸に陸軍歩兵第24連隊本部が設置された。同17年7月に小倉城内の歩兵第14連隊内に新設されていた24連隊第1大隊が移転してきたものである。同21年12月には3個大隊が揃って連隊編制を完了する。三の丸東部には兵営が置かれ、西部は練兵場となった。本丸には同20年2月に連隊内の重病室が移ってきていたが、衛戍病院としての建物は同31年以降らしい。同41年（1908）2月には新設された第35旅団司令部庁舎が福岡城内に新築された。また昭和2年（1927）2月には福岡連隊区司令部庁舎が新築された。なお、福岡城跡の下の橋御門の虎口内部石垣に接して長さ3mほどのコンクリート堀があり、福岡24連隊などがあった時の敷地西縁を区切る堀の一部かもしれない。

〔西部軍司令部〕明治40年（1907）、第35旅団司令部設置。大正14年（1925）、第12旅団司令部設置、師団傘下に2個歩兵連隊を指揮。昭和15年（1940）8月、西部軍司令部設置。昭和17年（1942）頃、地下1階、地上2階の鉄筋コンクリート造の防空作戦室が完成する。その地下基礎が残る。俘虜収容所もこの地にあった。同20年（1945）1月、西部軍管区司令部、第16方面軍設置。同年6月20日に第16方面軍は筑紫郡山家村（筑紫野市）に避難する。昭和38～39年に



福岡在営部隊配置図（文献5）



コンクリート基礎（文献647）

福岡高等裁判所庁舎改築に伴う事前調査が行われ、トレンチ内で溝やコンクリート基礎などが確認された。またその後の鴻臚館跡の3次(S62～63)・17次(H11～12)・18次(H12～13)・19次(H13～14)・21次(H15～16)の調査においても建物基礎や兵舎跡・焼土などが確認されている。

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻 明治・大正編』
- ・ 44 『福岡の戦争遺跡を歩く』
- ・ 647 『史跡福岡城跡 1963秋・1964春』
- ・ 663 『新修福岡市史 特別編 福岡城』



「福岡聯隊の跡」碑



コンクリート塀



コンクリート塀



井戸



境界標

377 おろのしまほうだい 小呂島砲台

所在地：福岡市西区小呂島

立地：島の北側丘陵尾根上ほか

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍・海軍

所有者：不詳

現状：現存

概要

壱岐要塞の範疇で、島の北端に陸海軍共同の大要塞が築かれた。昭和10年（1935）4月着工、同12年（1937）3月に竣工。壱岐要塞司令部と下関要塞大島砲台間には海底線が敷設され朝鮮海峡要塞系として連携できるようになっていた。旧海軍の「小呂島派遣隊」（アジア歴史資料センター C08011400500）によると、「発動機室（揚水）、兵舎、烹炊所・浴室・倉庫、水槽、発電機室、燃料庫、見張所・聴音室・電信室」等があげられている。陸軍の砲台跡4か所や弾薬庫跡、防空壕跡などが残るが、砲台跡・弾薬庫跡などの遺存状態はよい。山間部にはまだほかにも戦時遺構が存するものと思われるが、現状は藪が深くて確認が難しいものもある。各砲台には45式15糎加農1門ずつが据えられていたが、北崎、宮ノ浦砲台建設のため移転したまま終戦となった。砲台があったため島の集落も空襲を受けた。

参考文献

・109 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』



4号砲台



3号砲台



2号砲台



3・4号砲台砲側弾薬庫



軍道



弾薬支庫
(第2弾薬庫)

389 げんかい 海軍玄界航空基地

所在地：糸島市志摩船越、二丈松末

〈志摩岐志は不明〉

立地：船越湾と引津湾間の岬頸部の集落内

種別：軍事・防衛関係

築造者：海軍

所有者：個人等

現状：基地全体は不明

概要

昭和20年（1945）2月末～3月初頃に玄界基地の開設が始まる。当初は小富士基地、小富士水上基地と呼ばれ、やがて玄界基地、玄界航空基地、玄界水上基地と呼ばれて第634海軍航空隊（六三四空；昭和19年〔1944〕5月に岩国で編成）の主基地として水上機の最大の秘匿海軍航空基地となった。634空のもとには、昭和19年10月22日に偵察301飛行隊（7月に横須賀で編成）の瑞雲隊が、そして20年（1945）3月頃には偵察302飛行隊（19年12月に横浜で編成）が入ってきた。20年5月上旬には634空本体が置かれ、その後20年7月1日には偵察302飛行隊全員が所属し、瑞雲隊（爆撃）と水偵隊（雷撃）を結集した最大の水上機攻撃部隊となった。本部主要施設は久家（くが）・船越にあり、決号作戦に備えた。生松天神社近くの山裾に残る現状14基のカマド（烹炊所）は搭乗員たちが生活していた痕跡をよく伝えている。

〔船越^{ほうすい}烹炊所〕第634海軍航空隊は昭和20年5月上旬に玄界基地を主基地として本体を置いたが、生松天神社近くの山裾には約20基のカマドを設置して烹炊所とした。今もその14基が残る。2基のカマドが一セットとなり、共有の煙突が付されている。カマド焚口の幅は75cm。カマド群の西側にはコンクリート製の食糧貯蔵庫とされる構造物がある。

引津湾対岸の松末海岸には、玄界基地におけ



軍事建造物位置表示図(アジア歴史資料センター)



海軍航空隊玄界基地之跡碑

る水上機の陸揚げ装置としての2本のレールが遺存しており、海岸から海中へと続き、現状最長10mを測る

参考文献

- ・ 119 「第六三四海軍航空隊玄界基地の遺品」
- ・ 594 『新修志摩町史 上巻』
- ・ 635 『二丈町誌（平成版）』



食糧貯蔵庫



レール（水上機陸揚用）



龍門ノ浜（レール設置場所）



烹炊所のカマド



レール（文献119・635）

435 第十六方面軍（西部軍） 司令部（地下壕）

所在地：筑紫野市山家、筑前町二

立地：宮地岳南麓

種別：政治・行政関係

築造者：陸軍

所有者：私有地

現状：現存

概要

本土決戦準備にともない、昭和20（1945）年1月から筑紫野市山家・天山、夜須町二（ふた）にまたがる宮地岳南麓に、全長約4kmに及ぶ地下壕を建設し疎開することとした。計画では出入口は山家側4か所、二側と天山側に各1か所の計6か所であった。同年6月には司令部が移駐したが、地下壕は完成を見ないまま終戦を迎えた。地下壕周辺には、三角兵舎などの関係施設が散在。南壕入口に通じる道路は、軍用道路として設置された。

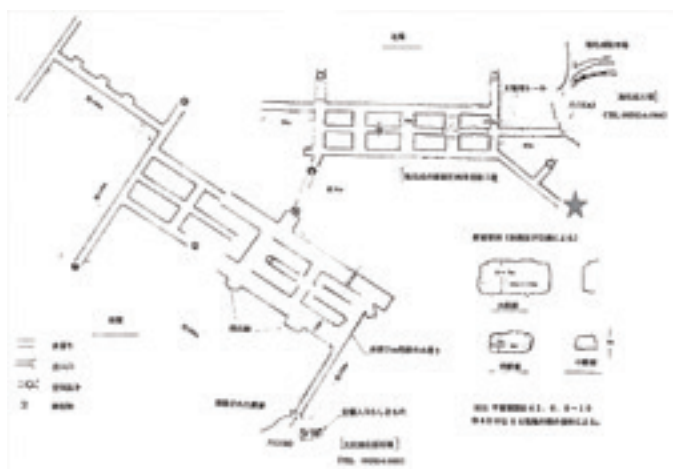
なお、ここからそれほど遠くない西鉄筑紫駅付近で、昭和20年8月8日に西鉄電車が米軍機の機銃掃射を受けて200人近い死傷者がでた。銃撃を受け弾痕の見られる待合所は現地近くに移設し公開されている。

参考文献

- ・ 53 「現地見学会資料」
- ・ 619 『西部軍司令部跡』ちくしの散歩68
- ・ 622 『筑紫野市史 下巻』



司令部周辺図（文献53）



司令部地下壕略測図（文献53）



宮地嶽南麓（文献53）



地下壕入口（文献619）



西部軍司令部周辺兵舎跡？



地下壕内部（文献53）



記念碑



地下壕内部（文献53）



弾痕の残る西鉄筑紫駅待合所

444 大刀洗飛行場

所在地：三井郡大刀洗町、朝倉市
朝倉郡筑前町、小郡市

立地：低台地

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地、私有地

現状：一部現存

概要

大正7年（1918）5月に軍部は飛行場建設のために朝倉郡三輪村・馬田村、三井郡大刀洗村に対して用地買収の申し入れを行った。同8年（1919）10月に陸軍大刀洗飛行場が国内4番目の飛行場として完成し、11月3日に埼玉県所沢陸軍飛行場で編成された大刀洗航空隊第4中隊の総勢104人（第一中隊87人ともいう）が赴任し、12月26日には航空第4大隊に昇格し、12月末にはモ式6型飛行機の初飛行が行われた。周辺には航空廠、第五航空教育隊、航空機製造会社などが設置されていった。同14年（1925）4月に飛行第4連隊へ昇格し、昭和13年（1938）8月15日に飛行第4戦隊となる。同4～11年（1929～1936）には民間航空会社が設置され、貨物や旅客輸送も担う国際空港としても利用された。

昭和12年（1937）には航空機製作所ができ、同13年（1938）に航空教育隊が発足した。同15年（1940）2月、材料廠が設置され、7月には大刀洗航空廠に昇格した。陸軍飛行学校も設置されるなど、東洋一の航空基地になっていったが、同20年（1945）3月のB29による空襲でほぼ壊滅した。陸軍練兵場は甘木鉄道より北側の山隈駅より西側を中心に存在した。昭和12年頃に陸軍省がもとは桑畑であったところを強制収用して造ったものである。練兵場として使用していたころには、ショベルで穴を掘り、そこに



飛行第四連隊の門柱（2003年撮影）



飛行場の排水路（2003年撮影）

入って身を守る塹壕訓練も行われていたそうである。昭和23年（1948）にアメリカ軍が撮影した航空写真には練兵場建物の跡がはっきりと写っている。甘木鉄道山隈駅西側・筑前町及び大刀洗町山隈にいくつかの陸軍境界標が残っている。

参考文献

- ・ 44 『福岡の戦争遺跡を歩く』
- ・ 56 『太刀洗飛行場物語』
- ・ 543 『小郡市史 第2巻 通史編』
- ・ 613 『大刀洗町史』
- ・ 683 『三輪町史』



地下司令部壕（2003年撮影）



第四連隊の井戸（2003年撮影）



筑前町立大刀洗平和記念館



監的壕〔タコ坊主〕（2003年撮影）



第五航空教育隊正門（2003年撮影）



大刀洗憲兵分憲隊（2003年撮影）

459 たちあらいきた 大刀洗北飛行場

所在地：朝倉郡筑前町福島、篠隈、四三島、下高場

立地：平地

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地、私有地

現状：滑走路は道路・民有地として現存

概要

昭和18年（1943）2月、福島・篠隈・四三島・下高場地区にまたがる安野原の林野・耕地160町歩を買収し、約2年をかけて昭和20年（1945）2月にはほぼ飛行場が完成した。3月の空襲により大刀洗飛行場が壊滅的な打撃を受けた中、5月25日には4式重爆撃機を改造した「桜弾機」による特攻隊も出撃した。東西1,800×（幅）300m、南北2,000×（幅）400mの平面T字形の滑走地区に長さ1,500m、幅60mの舗装された南北方向の滑走路があった。これまで滑走路西側に長さ1,600m、幅30mの補助滑走路があったという説も流布していたが滑走路は1本であったとみられる。格納庫はなく、約40～50基の駐機場と高射砲陣地がつくられた。現道も滑走路の痕跡であり、また民家の庭にコンクリート舗装の名残りとどめている所がある。

参考文献

- ・ 44 『福岡の戦争遺跡を歩く』
- ・ 56 『大刀洗飛行場物語』
- ・ 690 『夜須町史』



大刀洗北飛行場（1948年米軍撮影）



滑走路を利用した道路（2003年撮影）



コンクリート舗装（2003年撮影）

466 たちあらいきた えんたい 大刀洗北飛行場掩体

所在地：朝倉郡筑前町高上

立地：平地

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地

現状：現存

概要

昭和20年（1945）2月頃、筑前町の上高場・大久保・高上・野町にかけての飛行機誘導路沿いには40～50基の掩体が造られ、飛行機や弾薬などを収容していた。高上に造られ現存する掩体は、コンクリート製の有蓋掩体で、戦後は個人所有となり、平成15年（2003）の調査時は農機具倉庫に利用されていたが、今は町が公有化している。戦闘機2機が入る大きさで、入り幅29m、後方口幅8.4m、幅44m、高さ7.3mを測る。当時の大刀洗北飛行場には隼、疾風、五式戦闘機等の駐留が大刀洗北飛行場監視隊「軍需品（航空兵器）引渡書」から読み取れる。保存状態はよいが、補強の必要な部分もある。

参考文献

- ・ 625 『筑前町史 下巻』
- ・ 683 『三輪町史』



掩体



掩体内部



倉庫として利用（2003年撮影）

478 大刀洗飛行場関係射撃場 (陸軍射撃訓練場)

所在地：小郡市^{ひかた}干潟
立地：山裾の台地上
種別：軍事・防衛関係
築造者：陸軍
所有者：個人
現状：畑地等で現存

概要

昭和18年（1943）頃の設置と思われる。大刀洗陸軍飛行学校訓練生や航空部隊兵士の射撃訓練に使用された。射撃区画、流れ弾防止用土塁、命中確認用のコンクリート監的壕、監的壕に至るトンネル及び進入路が残る。標的は東の花立山側に設置し、敷地の周囲を土塁で囲んでいたと想定される。射撃場の広さは、内側幅45m、長さ約300m、両側土手（土塁）の幅は25m、高さ5m程である。現状は畑地等であるが、全体の区画としてはよく残っている。用地を囲む境界標柱が数本残っている。

参考文献

・543『小郡市史 第2巻』



空中写真（1948年米軍撮影）



射撃場



監的壕へのトンネル（上、右）（2003年撮影）



512-514

陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地

所在地：久留米市野中町

立地：低丘陵上

種別：埋葬関係

築造者：陸軍

所有者：公有地（市）

現状：現存

概要

陸軍の墓地は、昭和14年（1939）7月に着工し、同17年（1942）4月に完成して竣工式・鎮霊式が行われた。敷地は約71,000㎡あり、忠霊塔を含めて幾つかの施設が残る。

〔遙拝台〕赤レンガ（ドイツ積みを基本とし一部にイギリス積み）を小口積みで積み上げて裾広がり円柱状をなし、高さ4.8m、底部径6m、屋上径5.8m。外面の曲線が美しい。塔内部の螺旋階段を登ると屋上中央に遙拝塔が設置されている。西面した方形の花崗岩標柱に「宮城遙拝」がてん書の字体で刻まれており、東方（皇居）に向かって参拝することになる。

〔円形野外講堂〕直径22mの円形野外講堂で、500人を収容する規模。ステージとベンチ（座席）が円形（扇形）に配置され、ベンチ後方の周囲は土塁で囲まれている。ステージ背面の壁面には中央上部に「養其神」の揮毫の入った石板の扁額が、その下に黒板が設置される。壁本体は鉄筋を使用せず、背面で見るとセメントレンガをドイツ積みと思われる積み方や長手積みなどを併用して積んでいるようである。表面をモルタル仕上げとする。ステージ背後には楽屋もあった。座席はステージを扇の要にして配置され、座席脚部は2種類のアーチ煉瓦で造られている。座席全体はステージに向かって低くなっていくように3列があり、上下2ブロック



遥拝台



円形野外講堂

あるので計6ブロックの配列となる。極めて特徴的な構造を有する施設である。久留米市教育委員会が平成15年（2003）8～9月に調査した。〔陸軍橋〕旧陸軍墓地に付随する放生池に架けられた橋で、高さ15m、幅8m、長さ21m。外観は石造りのように見えるが、鉄筋の入らないコンクリート造のアーチ橋である。欄干の親柱に「陸軍橋」「昭和17年4月竣工」の銘がある。〔ドイツ兵俘虜墓（慰霊碑）〕大正3年（1914）8月に参戦した第一次大戦における青島攻略で俘虜としたドイツ兵の一部が、同年10月に設置された久留米俘虜収容所に収容されたが、そのうち11人が死亡した。その墓は当初は山川陸軍墓地にあったが、のちに当地に移され、戦後になってさらに移転した後、平成9年（1997）4月に正源寺池畔の現在地に移転整備された。〔忠霊塔〕正源寺山陸軍新墓地は昭和14年（1939）7月～17年（1942）4月に造成・整備され、その地に昭和18年（1943）3月に忠霊塔が建立されて、4月10日に竣工式及び鎮霊式が挙行された。基壇からの塔の高さ17m、幅3mの徳山産花崗岩に渡辺正夫中将が揮毫した「忠霊塔」の文字がある。納骨所には5,048柱が安置されている。

参考文献

- ・ 55 『久留米碑誌』
- ・ 570 『円形野外講堂』
- ・ 572 『歴史散歩 No.23』
- ・ 575 『久留米市史 第3巻』



円形野外講堂扁額



陸軍橋（文献572）



ドイツ兵俘虜慰霊碑



忠霊塔

515-517

陸軍久留米歩兵第四十八連隊

所在地：久留米市国分町100

立地：現在の陸上自衛隊久留米駐屯地・西部
方面混成団……平地

種別：政治・行政関係

築造者：陸軍

所有者：公有地（陸上自衛隊）

現状：一部の建物等が現存



概要

久留米市国分町に建設された兵営（現国分町陸上自衛隊久留米駐屯地）に、福岡の仮兵舎から明治30年（1897）4月22日に移転した。通称「久留米の四八」と呼ばれて親しまれていた。

現在の構内には本部営舎（広報資料館）や倉庫・講堂・教場などの昭和20年（1945）以前の施設8棟が残存する。赤レンガの基礎を有するものも多い。また「戦車之碑」がある。高良内町の現久留米聾学校の地も含めて歩兵第56連隊や戦車第56連隊、西部第48部隊（歩兵第148連隊補充隊）、西部第49部隊（戦車第1・18連隊補充隊）なども駐屯した。

〔本部営舎〕明治30年（1897）に建築されたもの。現在は二階部が陸上自衛隊久留米駐屯地広報資料館（歴史資料館）として資料3,000点を収蔵・展示している。赤煉瓦の基礎がある。

〔映写室〕明治30年（1897）に建築されたもの。現在は映写室、教育講堂、音楽の練習場として使用されている。



本部営舎（現広報資料館）

〔教場〕明治30年（1897）に建築されたもの。
現在は倉庫として使用している。

参考文献

- ・ 5 『兵旅の賦 第1巻』
- ・ 571 『歴史散歩 no.22』
- ・ 575 『久留米市史 第3巻』



「歩兵第四十八聯隊址」碑



慰霊之塔



教場



映写室



倉庫



戦車之碑

532 岡山飛行場（筑後飛行場）

所在地：八女市蒲原、亀甲、今福、室岡
龍ヶ原

立地：平地

種別：軍事・防衛関係

築造者：陸軍

所有者：公有地、私有地

現状：区画として残存

概要

昭和16年（1941）4月の「航空機乗員養成所官制」を受けて逓信省の筑後航空機乗員養成所（岡山飛行場）が設置されることとなり、同17年（1942）に計画され、同18年（1943）測量開始。後に陸軍に引き継がれて整地造成され、同7月頃には勤労働員作業等で建設工事に拍車がかかり、同19年（1944）4月10日に開所式・入所式が挙行された。完成は昭和20年（1945）4月とされる。戦後、敷地内は大陸から引き揚げてきた人達の入植が始まり、宅地や農地となった。また、外郭については県道が建設され、一部消滅している。国道442号バイパス工事に際し一部発掘調査が平成18～19年（2006～2007）に行われた。

地図上で八角形の区画がよくわかる。

参考文献

・695『八女市史 下巻』



区画溝・道路



建物コンクリート基礎



筑後航空隊乗員養成所跡碑

543 大牟田市役所の防空監視哨・ぼうくうかんししょう

ぼうくうしょうへき 防空障壁・こうしゃきかんじゅうだいざ 高射機関銃台座

所在地：大牟田市有明町2-3

立地：市役所の屋上

種別：軍事・防衛関係

築造者：大牟田市

所有者：公有地

現状：遺存



概要

3件とも昭和11年（1936）竣工の大牟田市役所の屋上に設置されている。監視哨はコンクリート製の円筒形で、高さ約2.2m、直径約2m。窓が5個ある。戦時中の空襲の時、市職員が中に入り、敵機を確認したら「敵機襲来」など伝声管に向かって叫び、1階の防空本部に連絡していた。監視哨のすぐ東側の本館壁に密着して防空障壁があり、監視窓2個がある。これらから少し離れてコンクリート建物の上に機関銃台座がある。「大牟田市役所本庁舎旧館」は平成17年（2005）12月26日に国の登録有形文化財に登録された。



大牟田市役所庁舎と防空監視哨

参考文献

- ・31 『大牟田の宝もの100選』
- ・32 『大牟田・荒尾の戦争遺跡ガイド』



防空監視哨



機関銃台座



防空障壁

544 三井化学(株)大牟田工場

〔旧三池石油合成(株)〕

所在地：大牟田市大浦

立地：丘陵部

種別：軍事・防衛関係

築造者：三井化学？

所有者：私有地

現況：稼働中の工場内に現存



概要

石油合成工場の地下に、炭鉱の廃坑道を利用して2,000人を収容できる大防空壕が構築されていたとされ、その地下壕入口（奥の方はアーチ状となる）にはトーチカのような高さ6mほどのコンクリートの塔がそびえている。排気塔らしく見えるが、入口のすぐ近くに排気塔があるのは不自然であり、果たして防空壕であるのか否か不明。工場内にあり、中に入ることはできない。また、工場内の別地点にトンネル状の構造物（底辺幅6.4m、高さ4.7m）が3基ある。石油貯蔵の倉庫であったものらしい。長さは300mほどあり、双方に開口するという。

近年まで防空監視哨が工場外堀に密着した状態で存在していたが、現在は外壁工事に伴い撤去されている。市役所屋上に設置されたものよりやや小さい規模であった。

防空壕・倉庫の築造時期は明確でないが、昭和18～19年頃であろうか。



防空壕？



倉庫

参考文献

・32『大牟田・荒尾の戦争遺跡ガイド』

546 三井金属鉱業(株)三池事務所

〔旧三井軽金属(株)〕

所在地：大牟田市手鎌

立地：干拓地上

種別：軍事・防衛関係

築造者：三井金属（旧三井軽金属）？

所有者：私有地

現状：敷地内に遺存する



概要

三井金属鉱業三池事務所は、戦時中軍需工場として飛行機の胴体などのアルミ板を製造していた。防空監視哨は旧軽金属工場の構内に残り、高さ2.3m、裾周りは6mを測る。厚さ30cmほどのコンクリート製で西向きに開口する。市役所のものよりやや小さい。防空壕はコンクリート製の地下構造であるが、南北7m、東西18mの長方形で、高さ1.5m程が東西の出入口とともに地上に現れている。天井部には排気口が3個ある。防空監視哨・防空壕ともに昭和18～19年（1943～44）頃の築造であろうか。

参考文献

・32『大牟田・荒尾の戦争遺跡ガイド』



防空監視哨



防空壕



防空壕内部



防空壕出入口

593 ついき (築城基地) 広末弾薬庫

所在地：築上郡築上町広末

立地：標高120mの丘陵尾根に立地

種別：軍事・防衛関係

築造者：海軍

所有者：個人

現状：現存

概要

昭和19年（1944）9月中頃より測量・設計を始めて工事に着手した。広末の弾薬庫の壕跡は本道250m、脇道の洞穴15か所で、丘陵の北と西の裾に15個の入口があった。洞窟の幅は3～3.5m、高さは2～2.5mであり、全長は1,200mに及ぶ、きわめて大規模な施設であった。航空機用の機関砲弾や爆弾、照明弾などが収納されていた。昭和20年（1945）8月7日には築城基地と周辺の施設が空襲を受けて多くの被害がでた。終戦後、昭和20年（1945）12月上旬には、占領軍の監視の下で大量の弾薬等を搬出したという。

参考文献

- ・ 54『郷土誌ついき』 35
- ・ 629『築城町誌 上巻』



弾薬庫壕の前面



配置図（文献54）



弾薬庫とその内部

596 いなどう 稲童1号掩体壕（掩体群）

所在地：行橋市大字稲童字大山
立地：周防灘沿岸の小丘陵縁辺部
種別：軍事・防衛関係（掩体）
築造者：海軍
所有者：公有地（市）
現況：史跡公園内に現存
* 市指定史跡



概要

「稲童1号掩体壕」を含む築城飛行場の掩体群は、飛行場の北側に位置し、昭和19年（1944）3月に開隊した二代目築城海軍航空隊の周辺に、同8月頃に設置された。かつてはコンクリート製でトンネル状天井のある有蓋掩体やコ字状の土手で囲まれた天井の無い無蓋掩体併せて30基以上が造られていた事が米軍撮影の空中写真から確認されるが、現在では工業団地造成などにより当該1号掩体壕の鉄筋コンクリート製を含めて数基が残るのみである。

1号掩体壕は、陸上爆撃機「銀河」や「一式陸上攻撃機」などの大型機を格納するために造られた大規模なもので、盛土幅42m、同高さ8.5m、奥行き23.5m、入口幅26.8m、同高さ5.5m。海軍の有蓋掩体で良くみられる開口部が翼形状をした形式のものである。内部の壁面には、コンクリート打設時に使用した板材やその痕跡、丘陵を掘り下げた土の形跡が明瞭に残り、築造工法がうかがえる。昭和20年（1945）8月7日の空襲で、格納されていた夜間戦闘機「月光」が炎上したとされる。昭和20年8月31日付の「引渡目録 築城基地」「築城基地明細目録（C08011421100）」内の格納品明細表に、「月光（掩体）」損品1の記載が見られ、この機体が8月7日の空襲で被災した月光なのかもしれない。

掩体正面の壁面や周囲には機関銃の弾痕や投



誘導路と掩体群（文献699）



掩体

下された爆弾の跡が残り、整備のために実施された発掘調査では米軍のものと見られる機銃弾が出土しており、空襲の事実を出土資料からも裏付けている。平成14年（2002）12月12日に行橋市指定史跡となり、発掘調査、補修工事を経て、平成23年（2011）に史跡公園として整備・公開されている。

稲童地区には他にも数基の有蓋掩体と無蓋掩体が現存する。平成16年（2004）、稲童工業団地造成に先立ち実施された発掘調査（稲童豊後塚遺跡第1次調査）において、無蓋掩体1基が調査された。右袖部が調査前に削平されていたが、残りの状況から入口部幅約28m、後背部幅約23m、奥行き約24mを測る奥が狭まった台形状を呈している。盛土高は3.1～3.4m程度であり、大型爆撃機なら1基、小型の戦闘機であれば2基は格納することが可能な大きさである。また、機体を格納する土塁内面に沿って幅30～60cmの素掘りの排水溝を巡らせていることが確認された。この調査時にも米軍機が空襲で銃撃を行ったものと考えられる機銃弾2発及び投下された爆弾の破片が出土している。

行橋市では1号掩体壕を市指定史跡としている他、周辺の時遺構についても文化財包蔵地として周知化し、文化財保護の枠組みに取り入れている。

参考文献

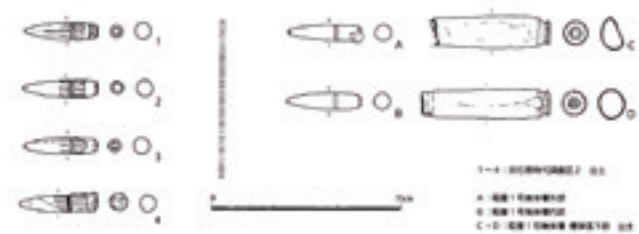
- ・ 698 『行橋市史 下巻』
- ・ 699 『周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡写真展』
- ・ 700 『稲童豊後塚遺跡1』



史跡公園に移築された機銃掃射痕が残る煉瓦塀



安浦神社に残る機銃掃射痕



稲童地区で出土した米軍機の機銃弾（文献700）

IV 遺跡の特徴

福岡県は古来より半島・大陸との玄関口であり、文化交流の拠点であった。常に対外交渉の接点であり、古代から対外的な軍事拠点が築かれた。古くは水城や大野城、基肆城といった大宰府を守る防衛線や実際に戦火を交えた元寇防塁、江戸幕府末期には海外の植民地化を進める欧米との緊張関係が高まる中、黒田藩により博多湾周辺に台場が造られるなど、軍事的にも重要な地域であった。

明治期以後は、小倉、福岡、久留米と主要都市には陸軍の連隊が置かれ、交通の要衝である関門海峡を守るために設けられた下関要塞、日本で4番目の飛行場として建設、一時期は民間の国際航路も置かれ「東洋一の飛行場」と呼ばれた大刀洗飛行場など、軍事的に重要な施設が次々と設けられた。太平洋戦争の末期には本土防空の高射砲、照空陣地や本土決戦に向けての陣地、特別攻撃の秘匿飛行場が数多く作られた。戦後、博多港には多くの人々が引き揚げてきた。

以下、明治期以後の福岡県の軍事に関する遺構の特徴及び現況について概観する。

1. 陸軍連隊（師団）の設置

福岡県における近代の軍事体制は明治8年（1875）、小倉に歩兵第十四連隊が設置されたことが端緒と言える。明治9年（1876）に勃発した秋月の乱・萩の乱の鎮圧に従事した後、国内最後の内戦、明治10年（1877）の西南戦争に参加、終結をもって日本は明治政府による統一的な軍事体制となる。小倉で新設された歩兵第24連隊第一大隊が明治19年（1886）に福岡舞鶴城に移駐し、その後太平洋戦争終結時まで連隊本部として継続する。明治29年（1896）に福岡城内で事務を開始した歩兵第48連隊が同30年（1897）4月に久留米に移転した。同31年（1898）11月には小倉第12師団が、同40年（1907）12月には久留米に第18師団が開庁、軍都として小倉及び久留米の基礎が築かれるとともに、福岡県が二つの有力師団司令部を有する、軍事的にも重要な位置を占めることとなる。これら師団、連隊に関する施設については、歩兵第48連隊の跡は現在、陸上自衛隊久留米駐屯地であり、一部の建物も継続利用されて現存する。小倉、福岡はいずれも小倉城、福岡城内に位置し、何れも公園化しており、遺構として一部の地上構造物が現存するものの、目に見える形での遺存状況は良いとは言えない。ただ、遺跡として地下構造が現存すると考えられる。

2. 下関要塞

陸軍省は明治19年（1886）に沿岸防備計画を策定し、要衝に砲台等の築造を行った。関門海峡という交通の要衝がある福岡では、関門海峡及び周辺の防御のために砲台、堡壘を備えた下関要塞を構築した。明治20年（1887）、北九州市の手向山砲台及び対岸の山口県下関市の田の首砲台から築造を開始し、順次下関側と門司側にそれぞれ設けられ、関門海峡を通過する船舶等を迎え撃つ砲台と、陸上戦に備えた堡壘が計15か所築かれた。日露戦争終結後は一部の砲台が廃止される等、規模の縮小や見直しが行われるが、一帯は下関要塞地帯として継続し、図面の作成や写真の撮影などに様々な制限が設けられた。太平洋戦争が起こり、戦火が本土へと拡大する中、小倉陸軍造兵廠や八幡製鐵所などの大規模な工場群を空襲から守るため、下関要塞地帯内の丘陵地には多くの高射砲陣

地や照空陣地が置かれ防空にあたった。中でも灘山高射砲陣地や石峰山高射砲陣地は高射砲台座や関連施設が良好に残っている。これらの砲台や堡塁は多くが丘陵の高所部に築かれており、後の開発行為に及ぶ箇所が少ない事から遺存状況が良好である。特に明治期に築かれた倉庫等の建造物については安全面を考慮し出入り口が閉塞されている箇所が多いものの、大半が良好な形で現存するほか、砲座や機銃台座などは地下遺構として現存している可能性がある。また、広大な要塞地帯の境界を示す証左として、北九州市から中間市、直方市など周辺市町にかけて区域標、地帯標が数多く残されている。

玄界灘にある主だった離島には各所で砲台が築造されている。沖ノ島砲台や大島砲台のほか、藍島、白島など、数多くの砲台が下関要塞地帯の一角として設置された。

3. 陸海軍の飛行場

第一次世界大戦は、航空機を軍事兵器として運用する契機となった。日本では大正4年(1915)、所沢で陸軍の航空大隊が設置されて以後、徐々に航空機運用の拡大を行っていった。福岡には陸軍、海軍または民間利用と多くの飛行場が作られ、また、水上機用の飛行場も設けられた。民間利用として作られた後に軍が利用することとなった飛行場や、航空機製作所に付随するための飛行場も存在する。本土防空では陸軍が工場や重要都市、拠点の防空、海軍が軍港や港湾の防空を任としていた。福岡県は北九州地域に工場群が集中する一方、軍港をもたない。このことからか飛行場は陸軍が多く、太平洋戦争開戦前夜の福岡では、陸軍、海軍ともに新しく飛行場の建設が行われ、戦争末期には特別攻撃のための秘匿飛行場も作られた。

大正8年(1919)、国内4番目となる飛行場(埼玉県所沢、岐阜県各務原、滋賀県八日市に次ぐ)として、陸軍によって大刀洗飛行場が建設された。飛行場を中心として周辺施設や学校、軍需工場が次々と設置され、大刀洗飛行場周辺は一大軍事拠点としての整備がなされていく。現在の第三セクター甘木鉄道も国鉄甘木線として、大刀洗飛行場関連施設への物資輸送を目的に敷設された鉄道である。大戦末期には大刀洗北飛行場も建設され、本土防衛に加え特別攻撃隊の中継基地としての役割も担う。大刀洗飛行場は昭和20年(1945)3月の空襲により周辺施設とともに壊滅的な被害を受けた。航空廠跡に隣接する大刀洗公園に立つ菊池武光像及び台座には、空襲による機銃掃射痕が残っている。飛行場の跡地は、工場や農地、住宅地となり、一部施設の門柱や外構、外壁などが点在する。花立山の麓に作られた射撃場跡は一部が土取りや工場建設で失われているものの遺存状況は良好である。北飛行場に関しては滑走路、誘導路は道路として利用されており、かつての面影を残している。また、数多く造られた掩体の内、有蓋掩体1基が現存している。

昭和11年(1936)には雁ノ巣飛行場(福岡第一飛行場)が建設され、大刀洗飛行場の機能の一部が雁ノ巣へと移された。民間飛行場として開設された雁ノ巣飛行場は陸上機用の飛行場と水上機用の海上飛行場が設置され、陸海軍共用の飛行場となる。戦後は米軍に接收され、整備され、朝鮮戦争時の前線となった。現在は雁ノ巣レクリエーションとして公園化されているが、米軍が整備した際の滑走路の痕跡が随所で認められる。

玄界灘に面した岡垣～芦屋では、昭和15年(1940)、北九州地域の工場群を防衛するため陸軍芦屋飛行場が造られ、大戦末期には飛行五十九戦隊が駐留し本土決戦に備えた。また、特別攻撃隊の

中継基地としての役割も担った。戦後米軍に接收された後、返還後は航空自衛隊芦屋基地として現在も使用されている。

九州の東岸部には海軍の飛行場が多く造られた。福岡県内では周防灘に面した行橋市～築上町の海岸沿いに昭和16年（1941）、築城飛行場が建設される。築城海軍航空隊は空母艦載機塔上要員錬成の部隊として設立し、戦争末期には防空や本土決戦に備えた基地としての役割と、特別攻撃隊の中間基地としての役割も担った。飛行場は現在の航空自衛隊築城基地として使用されているが、周囲には昭和19年（1944）以後に造られた掩体が複数現存する。行橋市指定文化財として保存された「1号掩体（壕）」には機銃掃射痕が残るほか、発掘調査で爆弾が投下された痕跡も検出されている。築上町（旧椎田町）には航空母艦の発着練習の施設が設けられ、訓練にあたった。福岡県内に造られた海軍の飛行場としては最大規模であり、大戦末期には本土決戦準備として周辺に司令部、通信、弾薬庫など多くの地下壕が開削され、機能を分散させていた。一部閉塞されているが、多くが現存する。みやこ町には補助飛行場も作られたが、明確な遺構は現存しない。

岡山（筑後）飛行場は筑後地方航空機乗員養成所として建設されたが、後に本土防衛用の飛行場として陸軍が利用した。施設はほぼ失われたが、独特の地割りや側溝の一部が現存し、現在の地図上でその独特の形状が確認できる。

海に面した福岡県では、複数の水上機の飛行場も設置された。福岡第一飛行場は博多海軍航空隊が水上機運用のため使用した。九州飛行機株式会社では零式水上偵察機を多数生産しており、水上機の保守運用が可能な飛行場が必要であったため、和白飛行場を使用した。

西戸崎飛行場は博多海軍航空隊及び九州飛行機株式会社で生産した陸上機の試験にも利用された。西戸崎飛行場にも数多くの掩体が築かれたが、無蓋掩体及び誘導路は現在「海ノ中道青少年自然の家」敷地内に非常に良好な形で残されている。

玄界基地（玄界海軍航空隊）は大戦末期の秘匿基地の一つとして設置され、水上偵察機による爆撃任務にあたった。爆撃には瑞雲、雷撃には改造された零式水上偵察機が用いられたとされる。宿舎などを新たに建設することはなく、近隣の民家を借り上げて利用していた。現存する遺構は少ないが、烹炊所跡の竈や倉庫が残るほか、海浜には水上機牽引用のレールが現存する。

本土決戦に備え、特別攻撃を任務とする急造の秘匿飛行場が作られた。県内に数箇所あったとされ、陸軍の津屋崎、甘木（大刀洗南）、海軍の春日（原）、直方などの存在が確認されているが、実際に使用された記録はない。30m×600mの滑走路を基本とし、いくつかのバリエーションが存在する。津屋崎飛行場に関しては米軍の空中写真からおおよその場所が知られ、現在は道路として区画の名残が見られる。甘木、春日、直方について、現状では目に見える遺構は全く残っていない。

これら上述の飛行場の内、芦屋飛行場と築城飛行場は航空自衛隊が使用し、昭和20年（1945）完成の陸軍芦屋（福岡）飛行場は福岡空港として民間、航空自衛隊、海上保安庁などに共同利用されている。また、昭和19年（1944）建設の陸軍曾根飛行場も戦後米軍の接收・返還を経て北九州空港として民間により利用されていたが、地形的な制約により滑走路の延伸が難しく新型航空機への対応が困難である事から新空港へ移行され、廃止された。

4. 本土決戦に向けた陣地構築

日本軍が想定した本土決戦に際し、北部九州における連合軍の上陸地点として福岡海岸周辺が想定されたことから、玄界灘沿岸地域では急造の陣地構築が行われる。「帝国陸海軍作戦計画大綱」を元に九州方面を作戰地域とした第16方面軍が編成された。昭和20年（1945）6月には司令部が筑紫野市山家に掘削された地下壕へと移り、玄界灘沿岸には第16方面軍隷下の第57師団、第351師団、第145師団に関連する数多くの急造陣地が構築される。多くは半地下、地下や崖を掘削した壕で、現存する施設も多いが自然に崩落したものも多い。岡垣町の湯川山砲兵陣地や、粕屋町や福岡市東区の歩兵第132連隊陣地跡などが現存する。海上特攻の基地として、福岡市能古島には震洋、北九州市蕪島には四式連絡艇を秘匿する隧道が築かれた。

本土防空には高射砲部隊が設置された。これらは軍事施設（飛行場など）、生産施設（工場）、交通インフラ（橋梁、機関車庫等）を空襲から防御するために各地に設置された。特に八幡製鐵所や小倉陸軍造兵廠が立地する北九州地域には高射第4師団の主力が置かれ、防空に注力する。

第6航空軍司令部は現在の福岡中央高校を接收して置かれた。同敷地内には特別攻撃隊として出撃しながら、何等かの理由により帰還した兵が収容されたとされる振武寮があった。その振武寮は現存しないが、近隣に陸軍の境界石柱が現存する。

大牟田市では三池炭鉱を背景に石炭化学コンビナートが形成されたが、これら工場施設を空襲から守るために独立高射砲第21大隊が置かれ、市内各地には高射砲陣地が築かれた。宮浦高射砲陣地は公園化され、解説板も設置されている。また、大牟田市庁舎屋上には防空監視哨と高射機銃台座が残されている。

5. 工場など

軍事体制においては、軍が設置した工場のほか、多くの民間工場も軍の協力工場や秘匿工場として軍需に関係した。軍需工場として県内で最も規模が大きい施設は、小倉陸軍造兵廠である。関東大震災で被災した東京砲兵工廠が集約移転し、大正5年（1916）、小倉兵器製造所と統合され成立した。陸軍の主要兵器の生産を行っており、風船爆弾などの生産も行った。そのため、広島に次ぐ原子爆弾2箇所目の投下目標とされた施設であるが、諸条件により次の目標地点であった長崎が被爆した。造兵廠関連の施設は、その大半は取り壊されたが一部地上の建物が現存し利用されている他、地下に作られた施設が民間工場の敷地内に現存する。

春日市には銃器製造所として小倉陸軍造兵廠春日製造所が設置された。小倉陸軍造兵廠春日製造所跡地は現在の県営春日公園及び航空自衛隊春日基地となっており、基地の敷地境界には陸軍標柱が数本現存するが、施設はほとんど現存しない。

渡辺鉄工所は飛行機製造部門として九州飛行機株式会社、兵器製造部門として九州兵器株式会社を分社化し、陸軍飛行機の修理を担当する大刀洗製作所を別会社として発足させ、大刀洗飛行場に近接した箇所に設置した。九州飛行機株式会社では雑餉隈、板付、香椎の主力三工場を設置、自社設計の機上作業練習機「白菊」を生産した他、零式水上偵察機のライセンス生産を実施。哨戒機「東海」は福岡市東区香椎に「九州飛行機株式会社東海製作工場」を新設して生産を行った。

また、九州飛行機株式会社は局地戦闘機「震電」を開発したことで有名で、試作機の試験飛行は席田飛行場で行っている。戦争末期には疎開工場として分散され、大野城市乙金、筑紫野市原田、福岡市西区今津など複数が文献に見られるが、現在では所在が明らかでない箇所も多い。その中でうきは市の県立浮羽究真館高校校舎建替えに伴う発掘調査において確認された遺構は、九州飛行機の分工場（施設）ではないかと考えられているが、記述された文献資料がないため詳細は不明である。大川市内では木工技術を生かし、航空機生産の一部を担ったとされる工場や、大村海軍工場の協力工場として航空機の増槽を生産した民間工場もある。

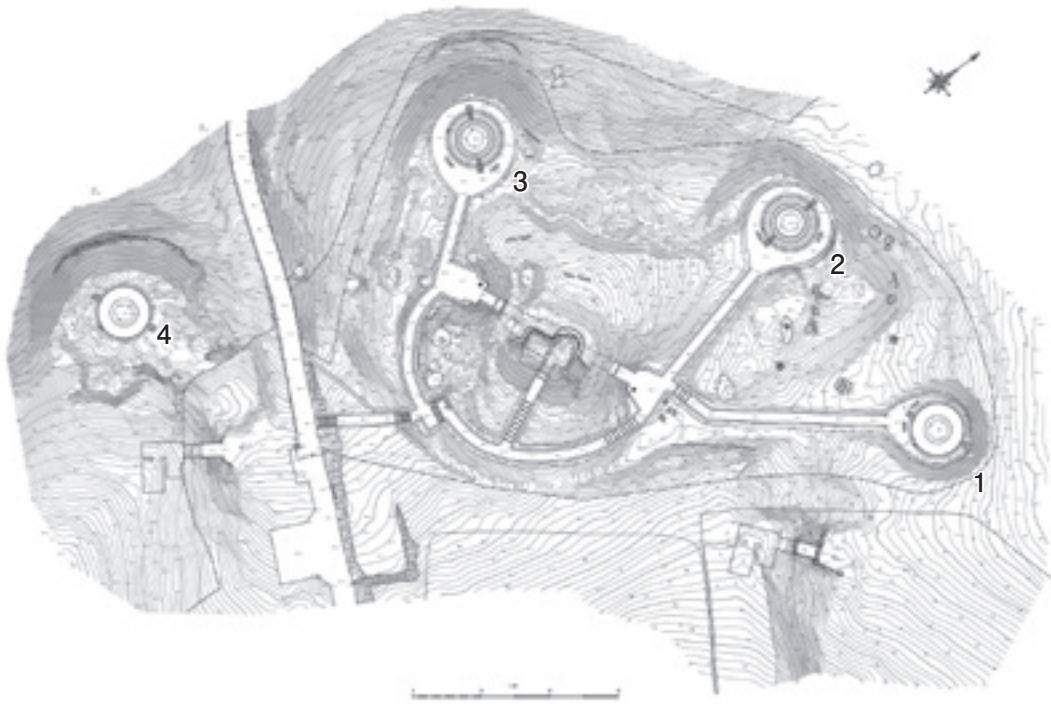
全国でも有数の石炭産出県である福岡県は、燃料基地としての側面も有していた。豊富な石炭を埋蔵する筑豊炭田では、海軍により予備炭田として多くが封鎖を受けたが、選定坑区とそれに続く海軍予備炭田の開放により中央資本の流入や地元有力坑主の開発を受け、大中小多くの坑口が乱立する状況となる。そのような中、軍直営の炭鉱として海軍により開削されたのが糟屋炭田の志免炭鉱である。明治期の艦船は石炭によっていたが、重油と比べ発生熱量が少なく、効率が悪い。そこで石炭専焼缶から混焼缶、もしくは重油専焼缶への転換が図られ、それまで混焼缶を使用していた艦船も昭和期には重油専焼缶へと近代化改装が図られる。8箇所設置された海軍燃料廠の内、第四海軍燃料廠は海軍炭田であった志免に設置された。国内で唯一石炭の生産と石炭ボタの乾溜が行われた。戦後は国鉄が利用したが閉山。堅坑槽は国内で現存する唯一のワインディングタワー型の槽として国重要文化財に指定されているほか、「志免炭業所跡堅坑及び第八坑関連地区」は県史跡に指定され、文化財としての保護措置がとられている。大牟田市には一大炭田の三池炭鉱があり、石炭産業から派生した石炭化学コンビナートが形成されたが、エネルギー源の石炭採掘だけでなく、戦時中は軍の協力工場として軍需品の製造にあたった。これらの炭鉱や工場などで作業に従事し、落命した国内外の人々を慰霊する碑が、戦後県内の各地で建てられている。

様々な資源が枯渇し、航空燃料も不足したことから、代替燃料として松根油や松脂の採取が各地でなされたが、県内ではこれらの採取の痕跡が玄界灘から響灘にかけての松林で未だに残っている。中でも宗像市さつき松原では看板を設置して松脂採取のことを紹介している。砲台や陣地、飛行場だけではなく、直接的、間接的に戦争に関わる痕跡は随所に残されており、戦時に関わる遺構については幅広い視野をもって見ることが重要である。

その他、戦没者の墓地や慰霊碑等が県内の各地で築かれている。軍直轄の陸軍墓地としては久留米師団管轄の久留米陸軍墓地、福岡陸軍墓地、大刀洗陸軍墓地、西部軍司令部管轄の小倉陸軍墓地があった。いずれも現在では公園化され、市民の憩いの場となっているが、久留米陸軍墓地には忠霊塔の他、遙拝台や円形野外劇場など、現存例が少ない、特殊な施設が現存している。

戦後、進駐軍により軍事施設や使用可能な器材などは接収を受けた。利用可能な軍事施設は米軍基地として再整備され、使用されるとともに、周辺には進駐軍向けの施設が建設された。福岡市から春日市、大野城市にかけては板付基地の駐留米軍向けの住宅（米軍ハウス）が多数建設され、現在も複数棟が現存し、住居として利用されている。

終戦時に現存していた艦艇は、戦後賠償として連合国に引き渡されたり、資材を再利用するため解体されたが、数隻は船体を防波堤として再利用された（軍艦防波堤）。若松港には駆逐艦冬月、涼月、柳の三隻が沈められ、荒波から港を守り続けた。その後の港湾整備により、現在見ることができるのは柳一隻だけであるが、解説板が設置され、保護措置がとられている。



第12図 大島砲台配置図 (1/750)



第13図 大刀洗北飛行場平面復元図 (1/20,000)

V 総括

1. 福岡県における戦争遺跡調査の課題

a. 戦争遺跡に関する現状

Ⅱ章でも触れたが、近代遺跡としての「戦争遺跡」に関する行政の対応の流れを再度概観しつつまとめておきたい。

文化庁では、平成7年（1995）3月6日に「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」を改正し、史跡における指定基準の文言に「戦跡」が加えられた。これによって広島市の「原爆ドーム（旧広島県産業奨励館）」は同年6月に史跡指定され、平成8年（1996）12月に世界遺産「広島市の平和記念碑（原爆ドーム）」となった。

また、平成8年（1996）に「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」（平成6年（1994）9月発足）の各分科会報告がなされ、記念物分科会では、近代の遺跡の保護の指針として、対象とすべき時期について「当面、第二次世界大戦終結頃までとするのが適当」とした。

そして、同年7月に「近代遺跡調査実施要項」が定められ、近代遺跡の政治分野の中に「軍事に関する遺跡」が取り上げられて所在調査が行われ、その結果をもとに平成14年（2002）8月には、近代の軍事遺跡（戦争遺跡）について全国50件を詳細調査の対象に選定した。福岡県については、「大刀洗飛行場関係遺跡（三井郡大刀洗町ほか）」及び「旧陸軍歩兵第五十六連隊関係遺跡（久留米市）」の2か所で、これらの現地調査は平成15年（2003）9～10月に行われた。

平成10年（1998）6月、文化庁の「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」（平成6年（1994）10月設置）は「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取扱いについて」を報告した。その中で、埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲について、「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる」とした。

この報告は同年9月29日付で「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」として各都道府県教育委員会等に通知され、このいわゆる「平成10年通知」をもって、近現代の遺跡についても、条件付きではあるが調査対象として把握されることとなった。

そして、文化庁記念物課（現文化財第二課）では、「埋蔵文化財の意義とその保護」として、埋蔵文化財は「文字や記録のない先史時代はもとより、古代や中・近世さらには近・現代においても、文献史料だけからは知ることのできない歴史や文化を明らかにする手がかりとなるものである」とし、さらに「近世以降の遺跡の扱い」として、「各地方公共団体では、今日的な観点から、埋蔵文化財として扱う範囲について再検討し、適切な保護措置をとることが求められる」というように、従前よりも深く踏み込んで言及している。（奈良文化財研究所2010）

その近現代の遺跡として「地域において特に重要なもの」について、「埋蔵文化財として扱う範囲について再検討し、適切な保護措置をとる」ためには、まずは遺跡として「周知の埋蔵文化財包蔵地化」を図ることが重要である。その前提としての地域における重要性は、その地域が持つ歴史性に拠ることになる。

例えば、糟屋郡志免町は糟屋炭田の海軍志免炭鉱にかかる炭鉱の町であった。町の発展の歴史は炭鉱を抜きにしては語れないだろう。従って、海軍志免炭鉱に関するもの（物件）は志免町にとっ

て「特に重要なもの」といってよい。その判断のもと、志免町の遺跡等分布地図には近代の遺跡も網羅され、発掘調査の対象ともされてきた。

ほかの自治体においても、それぞれの地域性を考慮した同様な取組みが肝要であろう。特に近世以降における各自治体（地域）の歴史、成り立ちについては文献等をもとに内容がかなり把握されていると思われる。その歴史性を反映した遺跡が存するのではないかと考えたとき、それは「地域において特に重要なもの」として位置づけることができるのではないか、それを考えていきたいところである。

b. 戦争遺跡に関する課題

福岡県では、戦争に関する遺跡について、埋蔵文化財としての報告を伴った調査が平成元年（1889）年には朝倉郡三輪町（筑前町）山隈窯跡群で行われた。本来の調査主眼である須恵器窯跡を切り込んだ弾薬庫跡ではあったが、図化し報告されている。その後も、北九州市小倉、久留米市の軍都とされた地域や福岡市、甘木市（朝倉市）、筑紫野市、大野城市、小郡市、行橋市などで主に記録保存としての調査報告がなされている。今後も記録を進めていく必要がある。

埋蔵文化財としての周知の遺跡としては、現在のところ、県内の行橋市、みやこ町、築上町、宗像市、久留米市、芦屋町においては、近現代の遺跡の一部について周知の遺跡と位置づけられている。「地域において特に重要なもの」として位置づけるべき遺跡は他にも多々存するであろう。

ところで、2009年1月に発効のユネスコの「水中文化遺産保護条約」では、100年を経過したものが水中文化遺産と捉えられている。この条約と水中の戦争遺構に関しての問題を岩淵聡文氏が次のように指摘している（岩淵2012）。

『水中考古学者の間では、2045年問題というものが話題となっている。すなわち、太平洋戦争中に沈没した日本の軍艦や輸送船の遺構が、ユネスコの「水中文化遺産保護条約」の適用を受けるのがこの時期であるからである。日本人にとって、太平洋戦争中に沈没した船舶は水中文化遺産には決してなり得ない。それは墓標であり、過去に我々の諸先輩が流した血の跡を今に伝える碑でもある。しかしながら、2045年以降になると、日本国政府がそこで遺骨収集などを独自に行おうとしても、それはすべてユネスコの「水中文化遺産保護条約」違反の行為と認定されてしまう。』戦争遺跡に関しては、陸上のみでなく、このような問題も関わっている。

2045年は「戦後100年」の節目であり、その頃には、戦争に関する遺跡＝戦争遺跡については、現在以上に調査が進捗するとともに、指定等の措置も図られているであろうと予測する。一方で、記録保存の対象として消滅していった「遺跡」もまた、多く認められるであろう。

また、戦争に関する「遺跡」も含めた事象の次世代・後世への継承についても課題である。よく言われるように、戦争を経験した、若しくは記憶にあるという世代の方々が高齢化しているという現実がある。そうした中で、令和元年（2019）で13回を数える全国の高校生による「全国高校生歴史フォーラム」（奈良大学・奈良県主催）を見ると、多数の歴史上の出来事等がテーマに選ばれている中で、戦争に関連する事象についての研究もほぼ毎回見られ、例えば「学校が軍需工場になったとき」（第5回優秀賞）のような成果も発表されている。若い世代も戦争という事象に問題意識を持っていることが伺える事例であるといえよう（奈良大学ホームページほか）。

2. 福岡県の戦争遺跡の保存・活用

a. 現状

福岡県では、今回の調査で戦争遺跡624件を一覧にしたが、この数字は当然ながら、今後において増減がありうるものである。

全国的には、沖縄県が平成22～26年度に現地調査等を行い、総数1,076遺跡を把握して『沖縄県の戦争遺跡』の大部の報告書を平成27年（2015）3月にまとめた（沖縄県2015）。

沖縄県のほかには、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課が平成23年（2011）12月に「長崎県の戦争遺跡と戦没者慰霊碑」をまとめ、戦争遺跡・遺構として55か所、戦没者追悼施設として142か所を取り上げるとともに、巻末に資料として「事変・戦争略史」と「郷土部隊の略歴（旧陸軍）」を添えている（長崎県2011）。また、滋賀県平和祈念館が滋賀県立大学に委託して平成30年（2018）3月に30か所の遺跡についてまとめている（滋賀県2018）。神奈川県は国際文化観光局観光部観光企画課が「かながわの戦争遺跡（戦跡）」として県内の見学可能な10か所について平成30年（2018）5月18日にホームページに掲載し紹介している。碑や塔は含まれていない（神奈川県2018）。高知県教育委員会文化財課は「平成30年度高知県内戦争遺跡に関する現状等把握調査の結果について」として令和元年（2019）8月9日にとりまとめ結果を公表している。遺跡と碑塔などを含めた13市町の92か所について、現状把握の結果を提示している（高知県2019）。

以上のうち、特に沖縄県の取組み、成果はすばらしいものである。今回の私たちの取組みはそこまで及ばなかったが、今後ともデータの修正・補完、追加を行っていく必要があるだろう。

福岡県内各地に遺存している戦争関連遺跡については、遺跡の特徴の項でも触れているが、内容ごとに時期的に振り返っておく。

部隊・施設関係では、陸軍歩兵連隊、陸軍師団、陸軍造兵廠など、これらは都市部に存することもあって、そのほとんどが残りは良くない。

下関要塞関係（明治20～30年代の北九州市の砲台・堡壘等）は、総じて残りの良いものは、公園内に遺存する手向山、古城山、富野、矢筈山（市営キャンプ場）である。

飛行場関係では、現在でも地図上で範囲・輪郭のわかるものは大刀洗北・岡山・曾根である。大刀洗関係の掩体、西戸崎関係の掩体群、玄界基地関係の烹炊所カマドは良く残っている。また、現役で使用されている所として芦屋・席田（板付＝福岡）・築城がある。

玄界灘・響灘の砲台群については、島嶼に構築された砲台群は全てにおいて残りが良い。

本土決戦に向けて構築された陣地関係では、遺構がよく残る所としては、岡垣町垂見峠砲台〔湯川山砲兵陣地〕・筑紫野市山家の西部軍地下司令部壕跡・福津市上西郷航空廠の倉庫などがある。

b. 活用

平成29年（2017）5月19日、文部科学大臣は文化審議会に対して「これからの文化財の保存と活用の在り方について」諮問し、同審議会文化財分科会企画調査会が審議を重ねて同年12月8日に「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について」の第一次答申が出された。これを受けて、「文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」が平成30年（2018）6月8日に公布され、翌年4月1日から施行された。

この文化財保護制度の見直しにおける大きな眼目は4項目があるが、そのうち、(1) 地域における文化財の総合的な保存・活用、(2) 個々の文化財の確実な継承に向けた保存活用制度の見直し、(3) 地方における文化財保護行政に係る制度の見直し、とあるように、文化財の保存・活用が大きく取り上げられているのである。

これからの文化財行政においては、十分な保存対策の上に立った活用が求められることになる。さて、沖縄県は『沖縄県の戦争遺跡』において、一章をさいて「戦争遺跡の利活用の現状」として全国の事例を引いている。1. 広島・長崎の被爆遺構、2. 沖縄陸軍病院南風原壕群、3. 松代大本営壕の保存と活用、4. 日吉・帝国海軍地下壕、5. 館山まるごと博物館の取り組み、という5件である。先行事例を今後の利活用の参考に供するというで掲示されたものである。

その中の館山市では平成16年(2004)に館山海軍航空隊赤山地下壕跡が整備され、一般公開された。また、翌年には赤山地下壕跡が市の史跡に指定されている。その後も館山市の基本計画において、戦争遺跡を活用した地域文化の発信・観光振興のために保存と活用に努めていく方向性が示されている(長谷川2014)。現在ではNPO法人を主体に地域住民が主役となって、多くの協働パートナーとともに「館山まるごと博物館」のまちづくりが進められているという。戦争遺跡を含めた活用の在り方として大変参考になる取り組みといえよう。

熊本県球磨郡錦町の「山の中の海軍の町 にしき ひみつ基地ミュージアム(人吉海軍航空基地資料館)」のような展開のあり方も活用の一例であろう。

次に、観光という側面をみてみよう。

平成25年(2013)12月、文化審議会文化財分科会企画調査会は「今後の文化財保護行政の在り方について」の報告をまとめた。その中のⅥの「情報発信・活用方法の在り方の見直し」において、「近年、文化財が地域振興、観光振興などに資するものとの認識が高まってきており、文化財に期待される効果や役割が拡大している。しかしながら、観光資源としての国内外への発信が必ずしも十分ではなく、我が国の文化財の魅力を分かりやすく伝えることが出来ていない」とした。また、平成28年(2016)3月には観光庁の「明日の日本を支える観光ビジョン」においては、「文化財」を、「保存優先」から観光客目線での「理解促進」、そして「活用」へ、としている。

これらは、先の文化財保護法改正に伴う文化財保護制度の見直しにも反映されていることであり、観光行政を所管する首長部局で文化財行政も担当出来ることとなった。

戦争遺跡を観光という側面で捉えた場合、いわゆるダークツーリズムのことも考慮する必要があるだろう。井出明氏は、学びの手段としてのダークツーリズムをカテゴライズする試案の中で、戦争について、①市民と戦争(例:沖縄、広島、長崎)、②多面的な視点(例:知覧・大和ミュージアム)に分けている(井出2012)。

戦跡を巡る場合には学習又は慰霊の要素が強いという側面もあるので、それを「ダークツーリズム」という呼称で一括りに捉えることでよいのかどうか、といった議論ももう少し必要なのかもしれない。

なお、観光を含めた文化財の活用について議論する場合、文化財そのものが基本的に地球上で唯一無二のものであることからすれば、それらを毀損することなくよりよい状態で後世に伝えていくことを前提に活用を考える必要があることは論を俟たない。

3. 文献史料調査の成果と課題

今回の文献史料調査では、『戦史叢書』と県内の自治体史を調査し、これらの文献における福岡県の軍事関係の記述と、福岡県関連部隊等の動向をまとめた集成を作成した。

まず最大の成果は、福岡県内における自治体史の軍事関連の記述の集成を作成できたことにある。これにより、どの自治体史にどのような記載があるか、一目で把握できるようになった。さらに、自治体史による戦争・軍事関連の記述の傾向も把握できる。個々の自治体史によって戦争・軍事関連の記述に濃淡があるのは当然だが、やはり北九州市や久留米市など、軍事拠点であった自治体の文献は記載が充実している。さらに、純粋な戦争・軍事関係の記述の他に、教育史の記事における学徒動員や、在郷軍人会、青年会、処女会など国策とも関連する団体について詳しく紹介している自治体史も多かった。

県関連部隊の集成では、福岡県内で編成、または福岡県に所在したことのある陸海軍の部隊、官衙、学校等で、現在判明したすべてのものの略歴と典拠を記載した。そもそも戦争遺跡とは、部隊をはじめ何らかの軍事機関が生み出すものが多く、何処にどの部隊が所在していたかという情報は、個別の戦争遺跡の発生を探求する上で、最初の作業といえる。これまでの自治体史では、主にその自治体と関連する部隊のみが記載されることが主で（『福岡県史』には軍事関連の記述はほぼない）、全県にわたる部隊のデータベースは存在しなかったが、これにより福岡県内の部隊や軍事施設について、網羅的に把握可能となった。特に歩兵連隊以外の特科部隊、また本土決戦に備えて急造され、極めて短期間のみ存在した部隊については、自治体史でも取り上げられないことが多いが（『戦史叢書』では記載はされているものの、逆に他県も含めた膨大な情報の中から探す必要があった）、今回はこうした戦争末期の部隊も可能な限り収録した。このデータベースは、戦争遺跡研究はもちろん、今後の福岡県における軍事史研究の、第一級の基礎資料となるものである。

一方、課題として残された点も少なくない。最大の課題は、国機関等が所蔵する原文書等の調査が、時間と予算の制約によりほとんど実施できなかった点である。特に防衛省防衛研究所戦史研究センター、福岡共同公文書館等には、戦争末期も含め福岡県に駐屯した部隊や官衙に関する膨大な文書が所蔵されている。今後これを解明していくことで、戦争遺跡のもととなる軍事施設等の配置も判明する可能性が大である。今後においては、この面の調査が必須といえよう。また『戦史叢書』の調査についても、関連度の深い『本土決戦準備2 九州の防衛』と『陸軍軍戦備』の2巻のみにとどまった。他の巻にも、本土防空作戦や海軍作戦に関しては多少なりとも福岡県に関する記述があることが予想できるものであり、部隊動向集成の精度を上げるためには、『戦史叢書』の他の巻の調査も必要といえる。

そして今回の調査では、駐屯地内の施設配置や陣地構築の具体的な姿に関しては、不十分な把握しか行うことができなかった。これは前述の原文書調査が未実施であることに負うところが大きい。今後はこれらの調査を通して、県内戦争遺跡が軍事施設として実際に使用されたいたときの姿に近づき、戦争遺跡の性格についてより明確な意義付けを行うことが、残された大きな課題であるといえる。

VI おわりに

本報告書において、平成29年度（2017）～令和元年度（2019）の3か年で福岡県教育委員会が実施した「福岡県の戦争遺跡」調査の記録をまとめた。

調査は、まず「福岡県戦争遺跡調査方針」を作成し、「福岡県戦争遺跡調査指導委員会」を設置して、指導・助言を受けながら進めた。

一次調査（基礎的な情報収集と整理）として、県内市町村史誌を中心とした既存の資料を基に「福岡県戦争遺跡調査表」を作成した。当初集めた件数は、遺跡291件、慰霊碑など613件の合計904件であったが、その後の追補訂正と、合計3回の県内60市町村への照会を経て、最終的に遺跡624件、慰霊碑等1,025件の、総数1,649件を本書に掲載した。また同時に、各市町村史誌における戦争関連の記述を詳細に取りまとめる作業を行い「史料調査表」として掲載した。

二次調査（重要遺跡の詳細調査）は、一次調査の結果を基に重要と考えられる遺跡について、地元市町村の担当者と共に現地に赴いて実施した。そのうちの32件について本書に掲載した。

調査においては、市町村史誌その他の書籍、記録、ウェブサイト等も参照して、県内に残る戦争遺跡の網羅に努めたが、それでも不十分な部分が多々あることは否めない。市町村史誌では各々が戦争関連の記事を取り扱う分量、内容に疎密がある上に、合計3回実施した市町村への照会でもそれぞれの回答の精度、内容は一様ではなかった。例えば「防空壕」は今回の「福岡県戦争遺跡等一覧表」に57件を掲載したが、「日本各地が空襲に遭い、さらに激しくなると予想されたころ、防空壕を各戸に一つ、町内には大型のものを一つ以上造るよう達しが出された。学校、事業所、工場なども同様である。」（川口・首藤2010）とすれば、実数は遥かに多いものとしてよいであろう。既に滅失したようであっても、地形が大きく改変されていないのであれば、地下に残存している可能性は低くない。程度の差こそあれ他種の遺跡についても同様と考えられる。また、記録に残っていないながら場所を特定できなかった遺跡も相当数存在する。本書の刊行後に追加の事例が多数明らかになるものと思われる。また二次調査は、主に時間的な制約のため、現地で遺跡の現状を確認して記録写真を撮影したという程度の内容であり、考古学的な手法による測量や発掘といった調査までは実施できていない。

ただ、今回の調査では、一次調査での照会から二次調査の現地まで、地元市町村担当者には協力を依頼し、情報を共有し、行動を共にした。これは、地域に密着した市町村でないと把握しきれない情報が多くあるためであったが、結果的には、この3年間で戦争遺跡に対する認識を地元で強くする効果もあったように感じられた。

今回調査の対象とした近現代の戦争遺跡については、平成10年の文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」以来、埋蔵文化財として取り扱うことが条件付きではあるが認められた。今後、調査をした遺跡のうち重要なものについては「埋蔵文化財包蔵地」として法的な根拠を与えて保護の対象とし、さらに重要なものについては史跡指定や登録文化財への登録を目指すことが、今回の事業の大きな目標でもある。しかしながらそのためには「地域において特に重要なもの」であることを提示することが求められる。本報告書が、そうした作業のための基礎資料となれば幸いである。

【参考文献】

- 甘木市教育委員会 1998.9『屋永西原遺跡Ⅱ』甘木市文化財調査報告書 第45集
- 池田榮史 2000.3『戦争遺跡に対する考古学的調査及び研究方法の検討（課題番号09410105）』
〔平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書〕
- 井出 明 2012.3「日本におけるダークツーリズム研究の可能性」進化経済学会論集16
- 伊藤厚史 2011.3「見晴台遺跡の高射砲陣地跡」名古屋市見晴台考古資料館研究紀要 第13号
- 今井昭彦 2008.12「忠霊塔建設に関する考察—その敗戦までの経緯—」国立歴史民俗博物館研究報告 第147集
〔関沢まゆみ編「[共同研究]戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」〕
- 岩淵聡文 2012.3『文化遺産の眠る海—水中考古学入門—』DOJIN 選書045 化学同人
- 上地克哉 2000.3「沖縄県南風原町陸軍病院壕跡—沖縄県第2次世界大戦・沖縄戦—」考古学研究184
- 大野城市教育委員会 2006.3『牛頸野添遺跡群Ⅲ～第6・8次調査～』大野城市文化財調査報告書 第69集
- 大野城市教育委員会 2013.3『乙金地区遺跡群7～原口遺跡第1～4次調査～』
大野城市文化財調査報告書 第110集
- 大野城市教育委員会 2015.3『乙金地区遺跡群12～古野遺跡第2・3・5次調査～』
大野城市文化財調査報告書 第123集
- 大野城市教育委員会 2016.3『乙金地区遺跡群15～王城山遺跡第1・2次調査～』
大野城市文化財調査報告書 第139集
- 大野城市教育委員会 2017.10『乙金地区遺跡群21～古野遺跡第4次調査～』大野城市文化財調査報告書 第157集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015.3『沖縄県の戦争遺跡—平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第75集
- 小郡市教育委員会 2006.3『吹上二ツ塚遺跡2』小郡市文化財調査報告書 第228集
- 小郡市教育委員会 2007.3『三沢北中尾遺跡4地点』小郡市文化財調査報告書 第216集
- 小郡市教育委員会 2012.3『小郡市内伝承調査活用事業報告書』小郡市文化財調査報告書 第267集
- 小郡市教育委員会 2015.3『埋蔵文化財調査報告書6』小郡市文化財調査報告書 第287集
- 小郡市教育委員会 2015.3『伝承等文化資源調査報告書』小郡市文化財調査報告書 第297集
- 小郡市教育委員会 2019.3『寺福童開遺跡1』小郡市文化財調査報告書 第322集
- 小田康德 2011.3「〔戦争遺跡を問い直す(4)〕近代戦争遺跡の歴史性と現代性」考古学研究228
- 神奈川県2018 <http://www.pref.kanagawa.jp/docs/ya3/cnt/f80022/p1041916.html>
- 川口勝彦・首藤卓茂 2010.8『福岡の戦争遺跡を歩く』海鳥社
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997.3『小倉城跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書 第197集
(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2010.3『小倉城三ノ丸跡第7地点』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第428集
- (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2011.3『小倉城三ノ丸跡第8地点』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第452集
- (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2012.3『小倉城三ノ丸跡第6地点5（4区と5区の調査）』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第473集
- (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2019.3『小倉城御用屋敷跡』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第586集

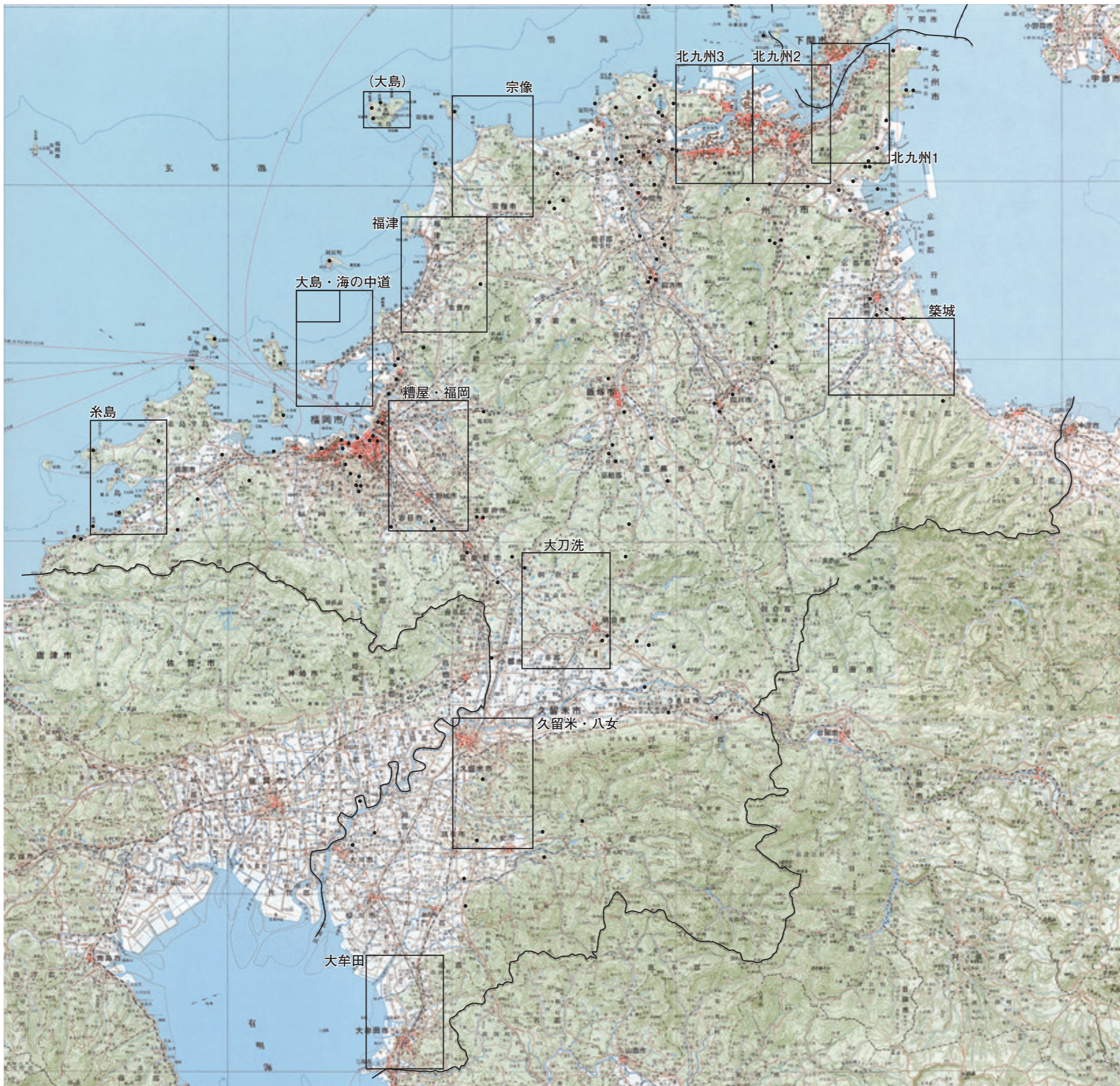
- 九州大学考古学研究室 1990.11「山隈窯跡群の調査」九州考古学65
- 久留米市教育委員会 1996.3『久留米城下町 両替町遺跡』 久留米市文化財調査報告書第116集
- 久留米市教育委員会 1999.3『久留米俘虜収容所1914～1920』 久留米市文化財調査報告書第153集
- 久留米市教育委員会 2002.3『平成28年度 久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第183集
- 久留米市教育委員会 2004.3『円形野外講堂』 久留米市文化財調査報告書 第202集
- 久留米市教育委員会 2010.9『筑後国府跡―第222・229・233次調査報告―』 久留米市文化財調査報告書第295集
- 久留米市教育委員会 2017.3『白川遺跡―第6次発掘調査報告―』 久留米市文化財調査報告書第377集
- 久留米市教育委員会 2017.3『平成28年度 久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第382集
- 久留米市教育委員会 2018.3『平成29年度 久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第400集
- 高知県2019 <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310701/2019080200222.html>
- 坂本悠一 2006.11「北九州の「近代軍事遺産」『北九州の近代化遺産』 弦書房
- 佐藤正知 2017.5「近代の記念物の保護」月刊文化財644
- 滋賀県平和祈念館・滋賀県立大学中井研究室 2018.3『滋賀県戦争遺跡分布調査報告書』
- 志免町教育委員会 2000.3『中山遺跡』 志免町文化財調査報告書 第10集
- 志免町教育委員会 2005.3『志免鉱業所遺跡』 志免町文化財調査報告書 第15集
- 志免町教育委員会 2006.3『志免鉱業所舎宅調査報告書』 志免町文化財調査報告書 第16集
- 瀬戸哲也 2016.10「沖縄戦の戦争遺跡」日本歴史821
- 大刀洗町教育委員会 2000.3『大刀洗飛行場 燃料庫』 大刀洗飛行場関係文化財調査報告書 第1集
- 大刀洗町教育委員会 2008.3『大刀洗町内確認・試掘調査等報告書』 大刀洗町文化財調査報告書 第45集
- 田中 琢 1995.12「戦争と考古学」考古学研究42-3 (167)
- 筑紫野市教育委員会 2006.3『長道遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書 第87集
- 筑紫野市歴史博物館 2016.3『筑紫野市の戦役関係碑』
- 築上町教育委員会 2019.3『築上町内遺跡等分布地図』 築上町文化財調査報告書 第16集
- (助)地方自治研究機構・館山市 2003.3『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究―館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究―』(館山市企画部企画課)
- 當眞嗣一 1984.「戦跡考古学のすすめ」南島考古だより 第30号
- 當眞嗣一 1997.「戦跡考古学」AERA Mook No.26『考古学がわかる』
- 當眞嗣一 2000.8「戦跡考古学提唱の背景」季刊考古学 第72号「特集 近・現代の考古学」
- 當眞嗣一 2001.7「《“世紀の発見”は何を明らかにしたか》近現代・沖縄から発信する戦跡考古学」
歴史評論 No.615「特集 20世紀の日本考古学」
- 當眞嗣一 2015.3『沖縄 近・現代の考古学』琉球書房
- 長崎県2011 <https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-oken/genbaku/isekitoireihi/91843.html>
- 中谷俊吾・菊池実 1998.9「第2回戦争遺跡保存全国シンポジウムから」考古学研究178
- 奈良大学 2007.11『全国高校生歴史フォーラム2007発表資料集』
- 奈良大学 <http://www.nara-u.ac.jp/forum/history/index.html>
- 奈良文化財研究所編 2010.5『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』
〔独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所編 文化庁文化財部記念物課監修〕

- 日本考古学協会 1987.4『日本考古学年報38(1985年度版)』
- 西川 宏 1995.12「統一テーマ「戦争と考古学」をなぜかかげたか」 考古学研究42-3(167)
- 直方市教育委員会 2000.3『直方市内遺跡群Ⅰ』 直方市文化財調査報告書 第21集
- 直方市教育委員会 2003.3『津田町遺跡』 直方市文化財調査報告書 第26集
- 長谷川曾乃江 2014.3「戦争遺跡を活かした館山のエコミュージアム」
NPO法人 安房文化遺産フォーラム『ヘリテージまちづくりのあゆみ』
- 濱田耕作 1922.7『通論考古学』大鑑閣〔1984.2雄山閣出版の復刻〕
- 平野邦雄 1969.2「明治史跡への観点」月刊文化財65
〔『史跡保存の軌跡—その苦闘の記録—』吉川弘文館(2004.11)〕所収
- 福岡県教育委員会 1993.3『久富市ノ玉遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第108集
- 福岡県教育委員会 1993.3『福岡県の近代化遺産』 福岡県文化財調査報告書 第113集
- 福岡県教育委員会 1994.3『宗原遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第116集
- 福岡県教育委員会 1998.3『下原遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第134集
- 福岡県教育委員会 2001.3『西新町遺跡Ⅲ』 福岡県文化財調査報告書 第157集
- 福岡県教育委員会 2003.3『西新町遺跡Ⅴ』 福岡県文化財調査報告書 第178集
- 福岡県教育委員会 2004.3『徳永宮地遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第191集
- 福岡県教育委員会 2005.3『日詰遺跡Ⅱ』(一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第22集)
- 福岡県教育委員会 2008.3『竹重遺跡2』 福岡県文化財調査報告書 第217集
- 福岡県教育委員会 2010.3『竹重遺跡3』 福岡県文化財調査報告書 第227集
- 福岡市教育委員会 2001.3『鴻臚館跡11—平成11年度発掘調査報告書—』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第695集
- 福岡市教育委員会 2002.3『鴻臚館跡12—平成11・12年度発掘調査報告書—』
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第733集
- 福岡市教育委員会 2003.3『鴻臚館跡13—平成13年度発掘調査報告書—』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第745集
- 福岡市教育委員会 2006.3『鴻臚館—鴻臚館跡16；平成15年度発掘調査報告書—』
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第875集
- 福岡市史編集委員会 2013.3『新修「福岡市史」特別編 福岡城—築城から現代まで—』
- 法政大学多摩校地遺跡調査団(伊藤玄三・峯岸章夫)1986.3『法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ-A地区-』
- 法政大学多摩校地遺跡調査団(伊藤玄三・阿部朝衛)1988.4『法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ-C・R地区-』
- みやこ町教育委員会 2010.3『みやこ町内遺跡等分布地図』 みやこ町文化財調査報告書 第6集
- 宗像市教育委員会 1991.1.13『平等寺原遺跡』 埋蔵文化財発掘調査説明会資料A-13
- 森田一雄 1996.4「奇妙なやきもの—戦争の谷間を生きた有田窯業界—」 西日本文化320
- 八女市教育委員会 2009.3『一般国道442号八女筑後バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
八女市文化財調査報告書 第84集
- 行橋市教育委員会 2007.3『稲童豊後塚遺跡—第1次発掘調査報告—』 行橋市文化財調査報告書 第34集
- 行橋市教育委員会 2010.3『行橋市内遺跡等分布地図』 行橋市文化財調査報告書 第37集
- 行橋市教育委員会 2019.3『渡築紫遺跡B区』 行橋市文化財調査報告書 第64集
- 横山浩一 1978.11「考古学とはどんな学問か」『日本考古学を学ぶ(1)日本考古学の基礎』有斐閣選書840
- 横山浩一 1998.12「戦後50年の日本考古学をふりかえる」『日本考古学』第6号

日本の軍事にかかる年表：福岡県関係

- 1869 (明治 2) 7. 8 太政官制 (二官六省制) → 兵部省が設置される (兵部大輔：大村益次郎)
- 1870 (明治 3) 10月 海陸軍の制度が定められ、海軍は英国に、陸軍は仏国 (のちに独国に変更) に範をとる
- 1871 (明治 4) 4.23 鎮台が設置される → 西海道鎮台を小倉に置き、分営を博多・日田に置く
7月 兵部省の改革が行われ、陸軍部、海軍部が置かれて陸軍参謀局も設けられる
8.20 東京など4鎮台を置く。鎮西鎮台本営は小倉ながらも当分熊本とし、広島・鹿児島に分営
- 1872 (明治 5) 2.28 兵部省を廃止して、陸軍省・海軍省を設置する
- 1873 (明治 6) 1.10 「徴兵令」公布 → 2鎮台 (名古屋・広島) 追加で全国6鎮台に分け、営所14を置く
- 1874 (明治 7) 2.16 佐賀の乱
5月 西郷従道らが台湾出兵
- 1877 (明治 8) 4. 1 小倉に歩兵第14連隊が設立される (9.28に軍旗授与)
- 1876 (明治 9) 10.27 秋月の乱 (~11.13)
- 1877 (明治10) 2.15 西南戦争が始まる (~1877.9.24)
3.28 福岡の変 (~4.5) → 西南戦争に呼応してこの日に挙兵したが失敗
- 1878 (明治11) 12. 5 参謀本部が設置される (陸軍省参謀局の廃止)
- 1885 (明治18) 5. 5 小倉城内に歩兵第12旅団本部が創設される
- 1886 (明治19) 6.14 福岡舞鶴城内に歩兵第24連隊本部設立 (8.17に軍旗授与) [M17.7に小倉で大隊創設]
- 1887 (明治20) 9月 関門海峡守備のため、下関・田の首砲台、小倉・手向山砲台 (M22.3竣工) が着工する
10月 北九州の小倉・門司に笹尾山砲台の建設が着工する (M22.9竣工)
- 1888 (明治21) 2月 北九州の門司に古城山砲台・堡塁の建設が着工する (M23.6竣工)
5.14 師団司令部条例により全国の6鎮台を6師団に改編。第6師団の衛戍地は熊本
- 1889 (明治22) 7月 海軍省所管の糟屋郡須恵村の新原第一坑が開坑する
- 1890 (明治23) 5.16 下関要塞の要塞砲兵第4連隊が創設される
- 1893 (明治26) 3月 北九州の小倉南に富野堡塁の建設が着工する (M28.10竣工)
- 1894 (明治27) 8. 1 日清戦争 (~1895.4.27) ; 7.25に戦端が開かれる
- 1895 (明治28) 4. 6 下関要塞司令部が設置される → 1899に要塞地帯法により「下関要塞地帯」
8月 北九州の門司に矢筈山堡塁の建設が着工する (M31.3竣工)
- 1897 (明治30) 4.22 歩兵第48連隊が久留米に移転する (M29.11に福岡城で事務開始)
- 1898 (明治31) 11.21 小倉の第12師団が小倉城内本丸の庁舎に入り、正式に開庁する
- 1899 (明治32) 2月 北九州の小倉南に高蔵山堡塁の建設が着工する (M33.12竣工)
7.15 「要塞地帯法」(法律第105号)
- 1900 (明治33) 8月 糟屋郡新原採炭所が海軍採炭所と改称し、海軍艦政本部に所属する
- 1901 (明治34) 2月 北九州・八幡の官営八幡製鐵所が操業を開始する
- 1904 (明治37) 2.10 日露戦争 (~1905.9.5) → 1905 (明治38) 5.27~5.28に日本海海戦
- 1905 (明治38) 歩兵第56連隊が久留米で編成される
- 1907 (明治40) 10. 9 歩兵第35旅団司令部が福岡に設置される (歩兵第12・24連隊はその所管に入る)
12.21 久留米第18師団の開庁式典が歩兵第48連隊で挙行される
- 1911 (明治44) 11.11 日本陸軍が久留米で特別大演習を実施する (~11.15)
- 1914 (大正 3) 7.28 第一次世界大戦が勃発する (~1918.11) → 日本は8.23に参戦する
- 1916 (大正 5) 4月 大阪砲兵工廠小倉武器製造所が開設される
11.11 陸軍特別大演習が筑前・筑後・肥前に展開して実施される (~11.14)
- 1918 (大正 7) 8. 2 シベリア出兵の宣言がなされる (~1922.10月)
- 1919 (大正 8) 10月 陸軍大刀洗飛行場が国内4番目の飛行場として完成
- 1922 (大正11) 2月 ワシントン海軍軍縮条約調印
- 1925 (大正14) 5. 1 小倉の第12師団が久留米に、歩兵第12旅団が福岡に、歩兵第47連隊が大分に移転
- 1927 (昭和 2) 4. 1 徴兵令改め兵役法 (法律第47号) が公布される [12.1施行]
- 1929 (昭和 4) 4月 日本航空輸送会社大刀洗支所が大刀洗飛行場の一隅に設置される
- 1930 (昭和 5) 4月 ロンドン海軍軍縮条約 → 日本は昭和11年1月に脱退
- 1931 (昭和 6) 9.18 柳条湖事件 → 満州事変が始まる → 満洲国の誕生へ (1932.3)

- 1933 (昭和 8) 3.27 日本が国際連盟を脱退する
 11. 1 陸軍造兵廠小倉工廠が設置される → 昭和15年4月に小倉陸軍造兵廠と改称
 11. 2 明治天皇聖蹟86件の史跡指定告示 (文部省告示第313号)
- 1935 (昭和10) 1月 雁ノ巣 (福岡第一) 飛行場の工事着工 (S11.6月開場)
 4.15 壱岐要塞の小呂島砲台が着工する (S12.3月竣工)
 5. 1 宗像郡の大島砲台の建設が着工する (S11.11月竣工)
 5月 糟屋郡志免町志免鉱業所第五坑構内に海軍燃料廠採炭部第八坑が開坑する
- 1936 (昭和11) 2.26 2・26事件
 7月 北九州の白島砲台が着工する (S12.10月竣工)
- 1937 (昭和12) 6. 1 宗像・沖ノ島で砲台工事が着工する (S15.2.25竣工)
 7. 7 盧溝橋事件 → 8.13に第二次上海事変が起こり、日中戦争が始まる
 9月 久留米で第18師団が再編される
- 1939 (昭和14) 7月 久留米の陸軍墓地在着工する (S17.4月完成)
 9. 1 第二次世界大戦開始 (ドイツ軍によるポーランド侵攻)
 11.13 陸軍芦屋飛行場の建設が始まる (S17.12月開庁式)
 12月 大刀洗飛行学校の第五航空教育隊 (西部第百部隊) が開隊する
 12月 築城海軍航空隊飛行場の建設が始まる
- 1940 (昭和15) 7.10 陸軍大刀洗航空支廠が大刀洗陸軍航空廠に昇格する
 11.15 海軍博多航空隊・西戸崎飛行場が開隊する
- 1941 (昭和16) 7月 北九州・藍島砲台が着工する (S16.12月竣工)
 12. 8 ハワイ真珠湾攻撃。マレー半島上陸開始。 → 太平洋戦争開始
- 1942 (昭和17) 4.18 アメリカ軍による日本初空襲 (東洋・名古屋・神戸など) [ドーリットル空襲]
 6. 5 ミッドウェー海戦 (日本の敗北)
 8. 7 ガダルカナル島の戦い (~ S18.2.7)
- 1943 (昭和18) 4月 北九州小倉南の曾根飛行場が着工する (S20.8月までには未完成)
 5.10 糟屋郡志免町に第四海軍燃料廠の志免鉱業所堅坑槽が完成する
 7月 八女郡岡山村 (八女市) の岡山飛行場建設工事が、この頃に拍車がかかる
 8月 上西郷航空隊 (大阪陸軍航空補給廠福岡支廠福岡出張所) の工事が始まる
- 1944 (昭和19) 2.25 「決戦非常措置要綱」が定められる
 2月 福岡市の席田飛行場が着工する (S20.8月の終戦時には1本の滑走路が完成)
 6.16 北九州八幡 (八幡製鐵所) がB29の空襲を受ける
 7. 1 福岡海軍航空隊小富士分遣隊が糸島郡元岡村に開隊する
 7. 7 サイパン島陥落。このあとサイパンの基地からの日本本土空襲が激しくなる
- 1945 (昭和20) 1.20 最高戦争指導会議で、本土決戦等を盛り込んだ「今後採るべき戦争指導の大綱」決定
 2月中旬 大刀洗北飛行場がほぼ完成する
 2.29 硫黄島の戦い (~3.26)
 2月末 海軍玄界航空基地の開設が始まる
 3.10 東京大空襲
 3.27 大刀洗空襲 [頓田の森事件]
 3.31 粕屋町大隈の丸山などに、第57師団歩兵第132連隊が陣地を構築する
 4. 1 連合軍が沖縄に上陸し、沖縄決戦が始まる (~6.23)
 4月 大本営は本土決戦のため第一総軍、第二総軍、航空総軍を創設 [九州は第16方面軍]
 6.19 福岡大空襲
 6.25 筑紫野市及び夜須町の宮地岳西部軍地下壕司令部に十六方面軍司令部が移転
 7.27 大牟田・荒尾が空襲を受ける
 8. 6 広島に原爆が投下される
 8. 8 筑紫郡筑紫村の西鉄筑紫駅付近で、西鉄電車が米軍機の機銃掃射を受ける
 8. 9 長崎に原爆が投下される [当初の第一目標は小倉であったが、天候不良で長崎へ]
 8.15 終戦 * 12:00に玉音放送



第14図 戦争遺跡分布図〔福岡県全域〕(1/400,000)



第15図 戦争遺跡分布図〔北九州地区1〕(1/50,000)



第16図 戦争遺跡分布図〔北九州地区2〕(1/50,000)



第17図 戦争遺跡分布図〔北九州地区3〕(1/50,000)



第18図 戦争遺跡分布図〔宗像地区〕(1/50,000)



第19図 戦争遺跡分布図〔福津地区〕(1/50,000)



第20図 戦争遺跡分布図〔大島・海の中道地区〕(1/50,000)



第21図 戦争遺跡分布図
〔糟屋・福岡地区〕(1/50,000)



第22図 戦争遺跡分布図〔糸島地区〕(1/50,000)



第23図 戦争遺跡分布図〔大刀洗地区〕(1/50,000)



第24図 戦争遺跡分布図
〔久留米・八女地区〕 (1/50,000)



第25図 戦争遺跡分布図〔大牟田地区〕(1/50,000)



第26図 戦争遺跡分布図〔築城地区〕(1/50,000)

福岡県戦争遺跡等一覧表・史料調査表について

〔福岡県戦争遺跡等一覧表〕

- 1 遺跡として捉えられるものを1～999の3桁番号とし、碑等については1001からの4桁番号とした。戦後の事象にかかる物件は斜体字で示し、3桁のもの（遺跡）はその最後にまとめ、4桁のもの（碑等）は当該自治体の中に入れた。それらは、文献ほかのさまざまな情報をもとに、当該市町村に照会を行って記載したが、聞き取りによる情報や伝聞情報などもあり、見落としもあると思われる、十分であるとはいえない。今後において、さらなる検証がなされ、その結果として、加除を含めた一覧表の集成がなされるべきものである。
- 2 市区町村の配列は、北九州市から始まり、概ね中間市・遠賀郡、直方市・鞍手郡・宮若市、宗像市・福津市、古賀市・糟屋郡、福岡市、糸島市、春日市、大野城市、太宰府市、那珂川市、筑紫野市、朝倉郡・朝倉市、三井郡・小郡市、うきは市、久留米市、三潞郡、八女郡、筑後市、八女市、みやま市、大川市、柳川市、大牟田市、飯塚市・嘉穂郡、嘉麻市、田川市、田川郡、京都郡・行橋市、豊前市・築上郡の順とした。北九州市においては区を越えて配置したものがある。
- 3 掲載した物件には、「私有地」にあつて非公開のものもある。また、たとえ見学可能な場所でも、その場所の環境や季節によっては、蛇や蜂、イノシシの出没など、危険性の高い所もある。
- 4 「名称」については、基本的に当該物件にかかる文献や実地検分等をもとに、また地元自治体から提示されたものを示しているが、必ずしも当該遺構のことを正しく表した名称であるかどうか明確に示えないものもある。また、同じ物件でありながら報告者によって異なる名称が使われている場合もある。その場合は事務局の判断で掲示した。
- 5 「現状」欄で「不明」もしくは空欄とした中には、各種文献に記載されているものの、現状が確認できなかったものが含まれる。
- 6 「文献」として挙げたものの中には、事務局として実見できていないものがある。
- 7 「種別」は、十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』（2002.6 柏書房）に依拠しつつ便宜的に分けたものである。

〔史料調査表〕

- 8 史料調査表は「福岡県内自治体史等戦争関連記事集成」と「福岡県関連部隊等記事集成」よりなる。市町村の配列は、総務省が設定した市区町村コード順とした。
- 9 【資料】は原資料の掲載、【年表】は年表中の掲載を表す。
- 10 「福岡県関連部隊等記事集成」では、各部隊記事の出典を自治体史等の略号とページ番号で示した。太字は記述詳細、斜字は各自治体史の年表で記載されたものである。略号は巻末を参照。
- 11 「福岡県関連部隊等記事集成」では、原則として連隊を有する兵科は連隊、それ以外は大隊以上を採録対象とした。歩兵（特設警備隊等を含む）、騎兵、砲兵、工兵（船舶兵等を含む）、輜重兵、飛行兵の兵科ごとに大隊～旅団を採録した後、師団以上の部隊、要塞、演習場、飛行場、軍工廠、航空施設、病院、官衙・学校等、海軍部隊の順に記載している。
- 12 一つの部隊ごとに一つの欄を設定したが、規模改変（大隊 → 連隊等）で名称が替わった部隊については、同じ部隊の欄に連続して記載している場合もある。

第1表 福岡県戦争遺跡等一覧表

【遺跡等】

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
	下関要塞地帯(明治期)の砲台・堡塁	北九州市	門司区・小倉北区・小倉南区			
1	(1)古城山砲台・堡塁	北九州市	門司区大字門司(めかり公園)	公有地	2軍事・防衛	砲座は、公園整備で埋められている。山頂部に観測所の基礎部が残存
2	(2)和布刈(めかり)砲台	北九州市	門司区大字門司(めかり公園)	公有地、私有地	2軍事・防衛	道路建設及び公園整備で撤去
3	(3)矢筈山堡塁(砲台)	北九州市	門司区(矢筈山山頂)	公有地	2軍事・防衛	市営キャンプ場として要塞施設を活用している。良好に遺存する
4	(4)手向山(田向山)砲台	北九州市	小倉北区赤坂4丁目	公有地	2軍事・防衛	公園内に、良好に現存する
5	(5)手向山旧発電所(電灯所)	北九州市	小倉北区赤坂	公有地	2軍事・防衛	公園内に現存
6	(6)手向山探照灯台座	北九州市	小倉北区赤坂	公有地	2軍事・防衛	公園内に現存
7	(7)笹尾山砲台	北九州市	小倉北区・門司区	不明	2軍事・防衛	現存
8	(8)富野堡塁	北九州市	小倉北区小文字1丁目	公有地、私有地	2軍事・防衛	地下壕は良好に遺存する
9	(9)高蔵(高倉)山堡塁	北九州市	小倉南区足原	不明	2軍事・防衛	現存。遺存状況はかなりよい
10	長谷弾薬庫・軍用倉庫	北九州市	門司区丸山町	公有地、私有地	2軍事・防衛	門司中学校、市営丸山団地及び個人住宅地
11	軍道通り	北九州市	門司区	公有地	7交通	地元の有志による説明板あり
12	渡航者監視所	北九州市	門司区(門司港駅)	私有地(JR)	2軍事・防衛	説明板あり
13	門司港西岸壁	北九州市	門司区	公有地	7交通	旧大連航路上屋として保存整備されている
14	砂利山榎舎(きょうしゃ)・軍用道路	北九州市	門司区大字黒川・長谷2丁目	公有地	2軍事・防衛 7交通	現存
15	風師山榎舎(きょうしゃ)	北九州市	門司区大字門司	公有地	2軍事・防衛	現存
16	部崎照空陣地	北九州市	門司区大字白野江	私有地	2軍事・防衛	採石により消滅
17	田野浦照空陣地	北九州市	門司区田野浦2丁目	公有地	2軍事・防衛	軍用道路が現存
18	伊川照空陣地	北九州市	門司区伊川		2軍事・防衛	
19	小原照空陣地	北九州市	門司区猿喰		2軍事・防衛	
20	不老園照空陣地	北九州市	門司区不老町		2軍事・防衛	
21	蕪崎(蕪島)照空陣地	北九州市	門司区大字喜多久		2軍事・防衛	
22	風師山高射砲陣地	北九州市	門司区大字門司		2軍事・防衛	
23	防空監視哨、聴音壕	北九州市	門司区風師1丁目	私有地	2軍事・防衛	平成20年(2008)に解体撤去され、更地となっている
24	蕪島水上特攻基地	北九州市	門司区喜多久	私有地	2軍事・防衛	周囲は採石により削られているが、格納横穴は当時のまま現存
25	恒見防空監視哨(照空陣地)	北九州市	門司区恒見(吉志)	不明	2軍事・防衛	不明

内容(年代・由来等)	文献
明治期の日本の国防重要地点として、東京湾・大阪湾・紀淡海峡に次いで関門海峡が定められたことをうけて、明治20年(1887)から関門の両側に砲台・堡壘などが構築された。これが下関要塞であり、関門両側で19か所が築かれた。日清・日露戦争での防御に対応する予定であったが、実戦に使用されることはなく明治末期には一部を除いて廃止された。要塞地帯は明治32年(1899)7月の「要塞地帯法」第7条により、許可なく「要塞地帯内水陸ノ形状ヲ測量、撮影、模写、録取スルコト」が禁じられた。また、同法第28条に第1～3区及び3区外方の「区域ヲ表示スル標石、標本若ハ標札ノ類ヲ建設スルヲニ要スル敷地ノ買取及使用」のことが規定されており、境界標が設置されたことがわかる	5・45・46・A・Bほか
標高175mの古城山の7合目、標高100m付近に、下関要塞地帯の一部として周防灘、関門海峡の両海面を制圧する役目で、明治21年(1888)2月竣工、同23年(1890)6月竣工。砲台は24年10月～25年4月の間に24種臼砲(文獻5・46は榴弾砲とする)10門5砲座を設置していた。明治末期に廃止。現在は和布刈公園となり埋もれている。文獻5のp92に標柱の写真あり。観測所は山頂部にあり、コンクリート構造物と階段が残る。山頂手前の標高160mの尾根上には明治27年(1894)10月竣工、同28年(1895)10月竣工の堡壘があり、機関砲4門を備砲したとされる。赤煉瓦造り半地下式倉庫が石造り胸牆とともに残る。なお、太平洋戦争中には高射砲陣地が設置された	5・45・46・72・77・111・556・699・前蘭氏
下関要塞地帯の一部として明治26年(1893)11月竣工、同28年(1895)7月竣工。門司の北端部、和布刈神社の北側、関門海峡が最も狭い早瀬ノ瀬戸を護るため、そこに面する海岸に造られた。敵艦を真横から砲撃するもの。アームストロング式27種(または24種)加農2門の隠顕砲が据えられた。現在は石碑のみ残る。門司砲台とも称する(文獻72)。文獻5のp93に標柱の写真あり	5・72・77・111・555・556・前蘭氏
関門海峡・大瀬戸の大里の後方及び周防灘方面防禦のため矢筈山山頂(標高266m)に明治28年(1895)8月から構築される。同31年3月竣工(文獻5は同20年2月の竣工で竣工年不明とする)。大里方面(関門海峡)は第4砲座、周防灘方面は第1・2・3砲座に対応した。9種臼砲4門、15種榴弾砲6門が据えられていた。明治末期に廃止。倉庫・井戸・地下壕・弾薬庫・営庭などが良好に残り、現在は青少年キャンプ場に再利用されており、倉庫の内部なども見学ができる。砲座に使用した煉瓦に「イヨミツ」・「いよみつ」の刻印を有するものがある	5・46・77・111・555・556・前蘭氏
関門海峡がS字状に湾曲したうちの最南部の独立小丘上・標高76m付近にあり、大瀬戸を護る役目で明治20年(1887)9月から砲台構築が始まり、同22年(1889)3月竣工(または1888年9月か)、同24年(1891)16～12月には24種臼砲(文獻5・46は榴弾砲とする)6砲座12門が北向きに据えられた。各砲座間に半地下式の倉庫(第1～5号)が設けられ、第4号倉庫には「明治二十年九月竣工 同二十一年竣工 工役長 陸軍工兵大尉南郷雅枝」と刻まれた銘板が嵌め込まれている。観測所は東西に1基ずつ設置された。下関側の田の首・箭山砲台と呼びたものである。明治末期に廃止。昭和に入っても小倉造兵廠防備のための砲陣地として利用されていたとされ(文獻45)、太平洋戦争中は山頂を平らに造成して2種高射砲4門を設置し高射砲陣地とした。部隊編成は昭和16年12月に防空第22連隊・高射砲第2中隊、19年6月に高射砲第132連隊・高射砲第10中隊、同年11月には同連隊・高射砲第12中隊が配備された。田向山とも表記。(文獻556には「手向山砲台跡」の標柱のある巻頭カラー図版あり)	5・45・46・72・111・555・556・699・前蘭氏
手向山の丘陵裾部に明治22年(1889)に建てられた赤煉瓦造りの発電所で、夜間に関門海峡に侵入した敵艦を捕捉する探照灯用の電源として建造された。電灯所とも呼ばれ、背後に煙突や井戸も残る。煉瓦には「イヨミツ」の刻印を有するものがある	46・556
山頂に向かう途中にある。明治22年(1889)構築。台座の上に可搬式の90種探照灯が設置されていたという。半円形の壁面上部のセメントで固めた部分には「田ノ首」「鳴瀬燈台」「火ノ山」「古城山」「藍ノ島西端」などの各方向を示す地名15か所が刻まれている。また、通路の赤煉瓦に「いよみつ」・「イヨミツ」の刻印を有するものがある	46
下関要塞地帯として大瀬戸を護る役目で明治20年(1887)10月に起工し、同22年(1889)9月に竣工した。手向山の東南約500mの丘陵尾根上にあり、標高は約120m。明治21年10月～24年8月の間に28種榴弾砲10門5砲座を据えた。そのうちの2門(または6門)は明治37年(1904)の日露戦争時に対馬要塞に移動した。明治末期に廃止。現在は赤煉瓦造の兵舎若しくは倉庫らしき建造物2棟(4号・5号)や半地下式の井戸、観測所等が残る。昭和49年(1974)建立の標柱あり	5・45・46・72・111・555・556・前蘭氏
下関要塞地帯の一部として、小倉北区の小文字山から北へ延びる尾根筋の標高120mの独立丘陵上に明治26年(1893)3月竣工、同28年10月に竣工した(文獻5は明治21年2月竣工、明治22年2月竣工とする)。小倉からの対上陸戦用で、12種加農8門及び15種臼砲2門が据えられていた。手向山・笹尾の側防にあたった。明治末期に廃止。赤煉瓦造り倉庫は東向きに5基と南北両方向に開口する2基の計7基があり、入口は塞がれている。砲座は展望広場や老人ホームにより破壊されているとみられる	5・46・72・111・556・前蘭氏
下関要塞地帯として周防灘方面から上陸する敵に対して吉田・曾根・葛原・菊田方向を射撃する陣地で、明治32年(1899)2月竣工、同33年(1900)12月に竣工した。標高357mの高蔵山の八合目、山頂南側の尾根上の標高270m付近に築かれる。12種加農6門、15種臼砲6門、機関砲4が配備された(文獻5は12種加農4門、15種臼砲8門とするが6門ずつであろう)。横幅12mほどの砲台跡(砲座)6基のうち5基が南向きに一列に並び、もう1基は北の営庭側に造られている。それを含む東側の砲座3基の周辺部には窪地を有する高台があり、指揮所もしくは機関砲設置場所らしい。砲座には弾薬庫が付随する。また、明治末期に廃止後、太平洋戦争中に一時使用された可能性があり、とてもよく残っている赤煉瓦倉庫8基のうち西端から二つ目の開口部が壊されているのは昭和17年4月に山頂に設置された高蔵照空分隊用の保管庫に利用されたためと思われる。ほかに兵舎・弾薬庫、トイレ、営庭、地下貯水槽、井戸等が残る。高倉堡壘ともいう。また、堡壘建設のため小倉北区富野から現在自衛隊が管理する富野弾薬庫を通り、企救遊歩道を横断する壮大な軍用道路(幅約3～3.6m)を建設しており、途中に自然石及び花崗岩製の転落防止のガードを設置したり、車馬へ水を補給する煉瓦製の水飲み場を設けている。また花崗岩製の下関要塞地帯標や陸軍省の境界杭等がある。「高倉堡壘跡」の碑が昭和49年3.14に有志により建立されている。サクラビールの瓶や「東陶」銘のある軍用食器が採集されている	5・45・46・72・111・556・699・前蘭氏
明治28年(1895)3月に設立される。倉庫は1万坪であった。門司中学校、市営丸山団地及び個人住宅地となっているが、道路区画は旧倉庫群を意識して建設されている	556・明治30年版陸地測量部地図・門司
丸山町の倉庫群から庭球場の赤煉瓦倉庫(弾薬庫)までの約700mが軍道通りと呼ばれ、「下関要塞第一地帯標 明治32年9月1日」の標石が建つ(明治32年=1899)	46
門司港駅構内の関門連絡船通利用通路跡の入口にある監視口の付いた部屋で、乗船者の確認用とされる。トンネルの完成(昭和17年[1942]11月)以前であろう	46・555
太平洋戦争時に中国大陸や南方島嶼への玄関口となっていた岸壁で、乗船待合室(1号上屋)や繫留ピットが「海峡ドラマシップ」(平成15年[2003]4月開業)の際に12～20年(1937～1945)の間に出兵した陸軍将兵は6,954,700人とされる	46
関門霊園入口から砂利山9合目まで、軍用道路を築いているが山頂部の框舎は無く、工事は中断されたまま廃止されている。関門霊園入口付近で100m程軍用道路は切れているが、山中には軍用道路、石垣、側溝、集水溝等が残っている。伯翠庵から関門霊園への道が軍道跡で道路法面に「防」と刻まれた花崗岩の標石あり	A
清滝から風師山に続く自動車道路が軍用道路の跡である。太平洋戦争中には、高射砲が1門設置されていた	67・670・A
昭和19年6月の防空隊配置図に記載	670
米軍撮影の航空写真に聖山公園の山頂に円形土塁が写っている	A
	A
	A
	A
	A
	A
太平洋セメント(旧日本セメント)門司事業所跡の南隣の工場建屋(仕上げ粉砕室)屋上にある。昭和18年(1943)2月の軍需会社法の施行前であるか後の設置であるかは不明	46
陸軍海上挺進隊の基地であり、この周辺の自然洞窟に「四式肉薄攻撃艇(連絡艇、マルレ)」を格納していた。大積の浄光寺に部隊本部があった。周防灘に侵攻してきた敵艦への特攻攻撃を任務とする。大戦末期に水上特攻がなされたのでその頃であろう。燕(かぶ)鳥に洞窟が残る	46・A
昭和13年(1938)の4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
26	門司(大里)捕虜収容所	北九州市	門司区大里	不明	5居住	神鋼メタルプロダクツ株式会社付近にあったと云われているが詳細不明
27	福岡俘虜収容所第4分所:門司楠町	北九州市	門司区老松町		5居住	
28	軍用道路	北九州市	門司区大字大里	公有地	7交通	現存
29	門司港駅(洗面所・帰り水)	北九州市	門司区西海岸1丁目	私有地	8その他	現存
30	軍馬の水飲み場	北九州市	門司区西海岸1丁目	公有地	8その他	説明板あり。現存
	陸軍第十二師団司令部・連隊本部等	北九州市	小倉北区城内		1政治・行政	
31	(1)陸軍師団司令部門柱・第十二師団碑・第十四連隊碑	北九州市	小倉北区城内	公有地	1政治・行政	現存。正門前のスロープは、鉄門復元の為埋められている
32	(2)小倉営所病院	北九州市	小倉北区城内三の丸	公有地	1政治・行政	小倉北警察署新築で消滅。なお事前発掘調査により煉瓦基礎を検出
33	(3)歩兵第十二旅団司令部、小倉連隊区司令部(碑、正門/石垣、建物等)	北九州市	小倉北区城内	公有地	1政治・行政	地下に基礎部が残っている可能性あり(一部は発掘調査後消滅)
34	(4)西部都督部庁舎	北九州市	小倉北区城内	公有地	1政治・行政	1992年の発掘調査で赤煉瓦積みの基礎部が検出されたが、そのまま埋め戻されている。
35	(5)小倉陸軍借行社	北九州市	小倉北区	私有地	5居住	地下工事によって遺構は消滅
36	(6)小倉衛戍病院(小倉陸軍病院)	北九州市	小倉南区北方	公有地	1政治・行政	基礎部が残っている可能性あり
37	(7)歩兵第四十七連隊将校集会所	北九州市	小倉南区北方5丁目	公有地	1政治・行政	現存
38	小倉陸軍造兵廠	北九州市	小倉北区城内ほか	公有地、私有地	3生産	安川電機の工場以外は消滅。地下道は道路下に残り、現在も水道管が配管され使用されている。勝山公園内に建物基礎部や地下室が残る
39	(1)野戦首砲廠門司兵器修理場(製造所)	北九州市	門司区(古城山西麓)	公有地	3生産	ノーフォーク広場として公園整備。但し、積み下しに使用の岸壁が残存か
40	(2)門司兵器支廠(小倉兵器支廠門司出張所)	北九州市	門司区門司	公有地、私有地	3生産	敷地の殆どが老松公園となっていて基礎部が残存している可能性が高い
41	(3)小倉陸軍兵器支廠	北九州市	小倉北区城内(小倉城東側)	公有地	3生産	市役所及び地下駐車場建設により消滅
42	(4)小倉陸軍兵器製造所	北九州市	小倉北区城内(小倉城東側)	公有地、私有地	3生産	小倉北区役所や民間マンションが建設されている
43	(5)(小倉陸軍造兵廠)地下施設・電話通信室	北九州市	小倉北区城内4(勝山公園・児童公園内)	公有地	2軍事・防衛	現存
44	(6)陸軍造兵廠地下入り口・地下道	北九州市	小倉北区城内5番 小倉城跡三ノ丸跡第8地点	公有地	3生産	発掘調査後消滅
45	(7)陸軍造兵廠・大手町防空監視哨	北九州市	小倉北区大手町	公有地	2軍事・防衛	現存
46	(8)陸軍造兵廠小銃・機関銃試射場	北九州市	小倉北区	私有地	2軍事・防衛	壁が一部残る
47	(9)陸軍造兵廠・職工社宅	北九州市	小倉北区黒住町	私有地	5居住	現存
48	(10)小倉兵器補給廠	北九州市	小倉北区片野新町、東城野町	公有地、私有地	3生産	城野駅北土地区画整理事業により消滅。なお事前発掘調査によりコンクリート基礎杭等が検出されている
49	(11)小倉陸軍兵器支廠・兵器庫	北九州市	小倉北区片野新町	公有地	2軍事・防衛	県警第二機動隊の敷地には基礎部が残っている可能性あり
50	(12)陸軍造兵廠・山田弾薬庫(山田填薬所)	北九州市	小倉北区篠崎小熊野	公有地	2軍事・防衛	現存
51	(13)陸軍造兵廠南小倉火薬庫線	北九州市	小倉北区	公有地	7交通	線路敷は道路敷として残存

内容(年代・由来等)	文献
日露戦争にかかる捕虜収容所で、明治38年(1905)1月10日に開所する。定員は2,000人とされた。同年10月29日に閉鎖	556
昭和17年(1942)11月28日に八幡倅虜取所門司派遣所として門司市楠町に開設。昭和18年(1943)1月1日に福岡倅虜取所門司分所に改編。同3月1日に第4分所と改称。終戦時収容人員は305人	C
富野弾薬庫への軍用道路で陸軍省の境界杭が2か所残っている	A
復員軍人や引揚者の人たちが、帰国できた喜びをかみしめながら水を飲んだということから、この名(帰水)で呼ばれるようになった	A
関門渡船場の手前道路沿いに15年戦争時に戦地に送られた軍馬(70~100万頭とされる)用の水飲み場が保存される。数箇所あった水のみ場は、1基のみ残存	46・555
明治4年(1871)4月に小倉城跡に西海道鎮台設置。同8年(1875)4月、歩兵第14連隊設置。同18年(1885)に小倉歩兵第14連隊と福岡歩兵第24連隊を統括する歩兵第12旅団本部開設。同31年(1898)に第12師団司令部庁舎建設。昭和12年(1937)上海事変時に第114連隊を編成。同15年(1940)7月の師団改編で新設の第25師団に転属。司令部正門の門柱(1898年)・「歩兵第14聯隊之跡」碑・「第12師団司令部跡」碑がある	
明治4年(1871)西海道鎮台設置。同8年(1875)歩兵第14連隊設置。同18年(1885)歩兵第12旅団本部開設。同31年(1898)第12師団司令部庁舎建設。昭和12年(1937)第114連隊編成。司令部正門の門柱(1898年)・「歩兵第14聯隊之跡」碑・「第12師団司令部跡」碑がある(碑の設置年不明;文献5のp120に写真)。森嶋外が明治32年(1899)6月~明治35年(1902)3月に第12師団軍医部長としてこの門を通った。文献5のp83に「小倉歩兵第12旅団司令部(本部跡)の碑(標柱)あり	5・46・77・555・699
明治8年(1875)に歩兵第14連隊の医療機関として城内三の丸に開設された病院である。その後同21年(1888)5月12日制定の衛戍(えいじゅ)条例により「小倉衛戍病院」と改称。そして同32年(1899)4月1日に北方に移転して「小倉陸軍病院」(現国立小倉病院)と通称されるようになった	556
明治18年(1885)に開設された庁舎があった。勝山公園地下駐車場工事に先立って平成3年に一部が調査され、第12旅団司令部設置時期(明治18年)に築造された石垣、建物、溝、土坑、欄干、石敷などを検出。石垣や裏ごめに使用された石材には明治10年の墓石が使用されていた。墓石には山口県出身の6名が同地で病死した事が刻まれており、死因はコレラであった可能性が指摘されている	95
小倉城松の丸に、明治31年(1898)には西部都督部があった(文献95)。ただ、実態のよく分からないところもあるようである。 ※明治29年(1896)8月、「天皇ニ直隷シ所管内ノ防禦計画並ニ所管内各師団共同作戦ノ計画ニ任セシム」という「都督部条例」により、都督部が東京、大阪、小倉に設置されることになり、小倉は同年12月に小倉城内に西部都督部が開庁したとされる(文献5のp118、文献673のp34)。都督は戦時の軍司令官の役割も担ったという。その後、都督部条例は明治31年1月に改正され、教育・軍政・人事と防禦等計画について陸軍大臣と参謀総長の区処を受けることになったという。小倉城松ノ丸には明治31年6月に移転したらしい。さらに条例は同33年(1900)4月に全面改正され、3都督部は全て東京に置かれることとなり、同37年1月には都督部そのものが廃止された。明治31年作成の陸軍陸地測量部地図には旧小倉城松ノ丸の所に「(西部)都督部」と記されている(文献95、文献557のp16、文献562のp65)	5・95・557・562・673
日露戦争におけるロシアの将校捕虜が収容された。明治38年(1905)11月28日に閉鎖される。リバーウォーク北九州の敷地内で旧小倉北区役所があった位置にあったが、地下工事によって遺構は消滅	556
明治8年(1875)に歩兵第14連隊の医療機関として城内三の丸に開設され、同21年(1888)5月12日制定の衛戍条例で「小倉衛戍病院」と改称。それが同32年(1899)4月2日に北方に移転して「小倉陸軍病院」(現独立行政法人国立病院機構小倉医療センター)と通称されるようになった	556
陸上自衛隊西部方面隊第4師団第40普通科連隊(陸上自衛隊小倉駐屯地)となっている敷地内に明治30年(1897)頃に建てられた「歩兵第47連隊将校集会所」が資料館として残されている。館内には、西南戦争の従軍日記、ヒットラーとムッソリーニの署名も残っている。前庭には、第2代連隊長乃木希典と元帥杉山元の胸像がある	A
陸軍造兵廠所管の大阪砲兵工廠小倉兵器製造所として大正5年(1916)に開設される。その後昭和2年(1927)10月24日に小倉城内に工廠設置が決定し発令される。小倉城本丸地域以南の旧城内と隣接地の176,581坪の敷地に建設された。昭和3年(1928)夏に工事着手、同5年3月竣工して小倉兵器製造所を合併して同8年(1933)10月1日に正式に陸軍造兵廠小倉工廠が設置される。同15年(1940)4月に「小倉陸軍造兵廠」と改称する。同17年(1942)10月の機構改正で東京第二陸軍造兵廠に統括される。同19年(1944)9月からは風船爆弾が製造された。敷地内に約300棟の兵器製造屋舎があり、11か所で地下道や石垣の一部が残るが、マンション建設などにより屋舎は安川電機工場以外は消滅した。なお、昭和7年(1932)3月に竣工した暗渠型地下道(本線は長さ約1km、幅1.8m、高さ2.3m)は支線もあり、電気・水道などのインフラが中にある。また、勝山公園内に建物基礎部や地下道が残っている	46
砲の修理と捕獲兵器の解体を主業務とするもので、明治27年(1894)11月に開設され、同28年5.21に正式命名された。同30年(1897)に大阪砲兵工廠門司兵器製造所と改称する。大正5年(1916)4月に小倉城内東側に移転し大阪砲兵工廠小倉兵器製造所と改組される	556・明治30年版陸地測量部地図・明治41年門司新市街図
明治28年(1895)1月8日に門司砲兵第三方面本署が開設され、同29年9月門司兵器支廠と改称した。大正2年(1913)3月27日に廃止して小倉兵器支廠門司出張所と改組されたが、大正5年(1916)4月に廃止される	556・明治41年門司新市街図
明治31年(1898)11月の小倉第12師団司令部設置とともに小倉城東側割川沿いの地に設置される。城野には兵器庫を設置した。大正7年(1918)8月に城野へ移転した	556
大正5年(1916)4月に小倉城内東側に開設され、門司兵器製造所が移転してきて大阪砲兵工廠小倉兵器製造所と改組する。同7年(1918)8月に城野へ移転した。現状の地下に基礎部が一部残っている可能性がある	556
平成19年(2007)6~9月に(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室が小倉城三ノ丸跡7地点として調査した。約5×3mの長方形の室には机や長椅子、電話機などが設置されていた。電話通信施設と考えられる。他にはヘルメット、土瓶、そろばん、磁器碗、皿、ガラス製瓶、鍬、木製のハンガーなどが出土した	558
平成19年(2007)6~9月に(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室が調査した。小倉陸軍造兵廠の地下道につながる階段と地下道の一部を確認した。階段は19段で地上と地下の高差は3.13mある。地下の天井部は黒と黄色の警戒色が塗られ、通路部は階段下から傾斜をつけながら東向きに延びる。地下道からは、磁器製の電灯笠や信楽陶器の碗、瀬戸美濃系の皿が出土した	559
造兵廠の第一旋盤工場倉庫は平成9年(1997)3月に解体されたが、その前に屋上に残っていた監視哨(昭和19年[1944]頃設置か)は「北九州平和資料館をつくる会」が引き取り、平成8年(1996)3月7日に健和会大手町病院付属看護学院の前庭に移した	46・555・699
厚生年金会館の近く、約70mにわたり壁とコンクリート枠が残る。陸軍造兵廠小倉工廠設置時のものであれば昭和18年(1933)11月である。マンション建設に伴う擁壁改修により消滅したが、壁が一部残る。なお事前発掘調査によりコンクリート基礎が検出されている	46
昭和10年(1935)頃、小倉陸軍造兵廠の社宅として建てられた。木造平屋建て6畳、4畳半、3畳の部屋と台所がある	563
明治31年(1898)11月設置の小倉陸軍兵器支廠が大正7年(1918)8月に城野へ移転し、昭和15年(1940)に小倉兵器補給廠と改称した。同17年(1942)10月に陸軍兵器行政本部長に直属したが、同20年(1945)2月28日以降は第16方面軍の兵器廠として山門郡瀬高町に移転準備中に終戦を迎えた(現陸上自衛隊九州地区補給処城野補給支処)。分廠が小倉・山田・桂川など7か所に、出張所が門司・福岡に、集積所が小富士・羽犬塚・豊津・八屋など12か所にあった	556
明治31年(1898)11月の小倉第12師団司令部設置とともに小倉城東側割川沿いの地に陸軍兵器支廠が置かれ、城野(現城野駅北土地区画整理地及び県警第二機動隊)には兵器庫を設置した	556
昭和14年(1939)に小倉陸軍造兵廠の弾薬庫として着工、敗戦直前に竣工する。小倉兵器支廠山田分廠として開設した。造兵廠で造られた各種砲弾は鉄道引込線(昭和16年[1941]敷設の南小倉火薬庫線)で搬送し、火薬を充填して一時保管後に富野弾薬庫に貯蔵した。熊谷町交差点近く引込線の枕木が現存する。この弾薬庫跡地は昭和47年(1972)に米軍より日本(大蔵省)へ返還され、その後一部について平成7年(1995)5月開闢の「山田緑地」として整備された。敷地内に弾薬庫の一部や貯水槽、貯水池などがある。また、敷地境界には陸軍省の境界杭が100本以上残っているが、杭には次の杭ごとの方向にあるか矢印で標記されており、市内では珍しい手の込んだ杭となっている。また、弾薬庫は昭和21年5月21日午後7時15分頃、一の谷第四号倉庫が大爆発し、炭探りやマキの材料として弾薬の箱を取りに行っていた住民等百余名の死傷者が出た。なお、弾薬庫の爆発で犠牲になった高槻小学校の児童の両親が寄贈した銀杏の木が、旧校舎のあった槻田中学校の校庭にある	46・555
山田弾薬庫専用線として南小倉・山田弾薬庫間が昭和16年(1941)に敷設された。昭和45年(1970)に使用中、同48年(1973)に廃止となった。山田弾薬庫跡地は、米軍からの返還後一部について「山田緑地」として整備された	555

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
52	足立高射砲中隊(砲台山高射砲陣地)	北九州市	小倉北区大字足原・小倉南区湯川	不明	2軍事・防衛	現存
53	高射砲陣地(三萩野陣地か)	北九州市	小倉北区東篠崎3丁目	私有地	2軍事・防衛	駐車場となっている
54	旧かねやす百貨店防空監視哨	北九州市	小倉北区魚町3丁目1番	私有地	2軍事・防衛	現存
55	白洲照空小隊、コンクリート構造物	北九州市	小倉北区大字藍島	不明	2軍事・防衛	現存
56	浅野照空陣地	北九州市	小倉北区浅野2丁目	私有地	2軍事・防衛	小倉駅北口の開発によって消滅
57	日明照空陣地	北九州市	小倉北区高峰町6番	私有地	2軍事・防衛	不明
58	藍島砲台・照空陣地	北九州市	小倉北区藍島	不明	2軍事・防衛	現存
59	馬島照空陣地	北九州市	小倉北区馬島		2軍事・防衛	火薬庫は敷の中に現存
60	篠崎高射砲陣地	北九州市	小倉北区東篠崎3丁目		2軍事・防衛	
61	三萩野高射砲陣地	北九州市	小倉北区三萩野2丁目		2軍事・防衛	
62	山田(?)照空陣地	北九州市	小倉北区篠崎		2軍事・防衛	
63	小倉埋立地高射砲陣地	北九州市	小倉北区東港2丁目		2軍事・防衛	
64	中井照空陣地	北九州市	小倉北区中井2丁目		2軍事・防衛	
65	田向山高射砲陣地	北九州市	小倉北区赤坂4丁目		2軍事・防衛	
66	板櫃照空陣地	北九州市	小倉北区高峰町		2軍事・防衛	
67	御用屋敷跡 [弾薬庫跡]	北九州市	小倉北区城内4番	公有地	2軍事・防衛	発掘調査後消滅
68	富野弾薬本庫	北九州市	小倉北区富野	公有地	2軍事・防衛	現役の弾薬庫として現存
69	笹尾照空陣地	北九州市	小倉北区大字富野・門司区		2軍事・防衛	
70	福岡俘虜収容所第3分所:小倉矢倉下	北九州市	小倉北区大字中井矢倉下	私有地	5居住	木造建物は、撤去され工場やマンションが建っている
71	小倉日明捕虜収容所	北九州市	小倉北区日明	不明	5居住	県立小倉高校付近?
72	衛戍監獄	北九州市	小倉北区田町	私有地	5居住	教会敷地内に基礎部が残っている可能性がある
73	鉄道「小倉裏線」「大蔵線」	北九州市	小倉北区・八幡東区	公有地、私有地	7交通	大蔵川橋梁は河川拡幅によって西側橋台を除いて消滅。また、中央二丁目の線路敷法面もビル建築のため消滅。他は、現存
74	足立停車場	北九州市	小倉北区萩崎町	公有地、私有地	7交通	敷地は、足立中学校、郵便局、ハロワーク、商業地域となっている
75	錦春稲荷神社・反橋	北九州市	小倉北区上到津1丁目到津(八幡社社内)	私有地	8その他	現存
76	本就寺	北九州市	小倉北区清水5丁目	私有地	8その他	現存
77	西南女学院口講堂	北九州市	小倉北区上到津1丁目(西南女学院中等学校)	私有地	8その他	現存
78	防空壕	北九州市	小倉北区室町1丁目	私有地	5居住	リバーウォーク建設により消滅
79	防空壕(愛宕神社)	北九州市	小倉北区菜園場2丁目	私有地	5居住	現存
80	防空壕	北九州市	小倉北区上到津1丁目		5居住	
81	防空壕(愛宕山)	北九州市	小倉北区菜園場2丁目8番	公有地	5居住	発掘調査後消滅
82	輻重兵第十二大隊	北九州市	小倉南区若園5丁目	公有地	1政治・行政	現存
83	工兵第十二大隊	北九州市	小倉南区南若園町	不明	1政治・行政	現存
84	火薬庫(弾薬庫)(土手・建物)	北九州市	小倉南区若園4丁目	私有地	2軍事・防衛	現存
85	火薬庫(弾薬庫)(土手・建物)	北九州市	小倉南区若園4丁目	私有地	2軍事・防衛	現存
86	旧陸軍火薬庫(弾薬庫)(建物)	北九州市	小倉南区若園4丁目	私有地	2軍事・防衛	現存
87	女子挺身隊寄宿舎門柱	北九州市	小倉南区富士見3丁目	公有地	5居住	現存
88	竹下高射砲陣地	北九州市	小倉南区横代東町1丁目	公有地	2軍事・防衛	基礎部が残っている可能性あり。確認中

内容(年代・由来等)	文献
標高442mの通称砲台山は、第二次世界大戦中、軍用小倉の市街地と昭和19年(1944)9月1日に開港した旧陸軍の曾根飛行場(戦闘機基地)を敵機から守るため、同年6月に高射砲陣地が築かれた。砲座跡、宿舍基礎の煉瓦積、弾薬庫、貯水槽、トイレ・軍道等が残っている	670・A
米軍撮影の航空写真に円形砲座1門が写っている。貴船在住者からの証言もあり。基礎部が残存している可能性あり	67
昭和11年(1936)に建設された鉄筋コンクリート7階建て小倉ワシントンビルの屋上に設置されている	A
海岸にコンクリート構造物が残っている	A
米軍撮影の航空写真に円形土塁1基が写っている	67
昭和19年(1944)6月の防空隊配置図に記載	670
照空陣地は、南北に細長い島の北部、千畳敷という所にある。昭和16年(1941)12月設置。深い藪の中にあつて全容をつかみにくいが、照空灯は径10mの円形土塁の中央が径3.6m前後の窪みとなっている。砲台は、照空陣地の西側道路の反対側海岸沿いに昭和16年7月に三八式野砲2門を設置していたが、昭和18年(1943)6月に撤去して蓋井島に移設し、中隊は角島へ移動した。現地には、砲座のほか、塹壕、貯水槽、排水溝、連絡壕(溝)、軍道、船入場等が残っている	A・B
馬島の北西端に近い場所にある。火薬庫(弾薬庫)らしき構造物が4棟ほど存在する	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
(仮称)平和資料館建設事業に伴う発掘調査(2017.11.22～2018.1.19)で、明治時代の歩兵第14連隊の弾薬庫跡の建物布基礎や入口部敷石遺構のほか、埋瓦、土坑、溝、井戸、土塁状遺構などが検出された。絵図や基礎構造の検討から、明治8年(1875)～同10年(1877)頃に建造され、同31年(1898)まで改修・改築等が行われた建物であったと思われる	562
手向山砲台南方1.5kmの標高291mの山麓に、下関砲台用と朝鮮海峽系要塞の総予備として洞窟式弾薬庫7本(当初計画は10本)が昭和9年(1934)5月着工、同16年(1941)5月に竣工した(現陸上自衛隊九州地区補給処富野弾薬支処)。門司区上藤松の谷に軍道及び旧入口と営門跡、トイレが残っている。また、北東の尾根に円形土塁が残っている	67
昭和17年4月設置。円形土塁や軍用道路が残る	A
昭和18年(1943)12月15日に八幡市中町から移転してきた(1944年12.15の可能性もある)。戦終時収容人員は1,195人。昭和20年(1945)9月14日米軍撮影の写真あり	A
日露戦争にかかる捕虜収容所で、明治38年(1905)4月24日に竣工。定員は1,000人。同年11月28日に閉鎖される。詳細は不明	556
軍律に違反して被告人となった軍人等を拘禁し、軍法会議の判決で受刑者となった者を収容する機関で、明治15年(1882)12月に小倉田町に設置された。その後大正11年(1922)に城野に移転し、同12年4月1日に小倉衛戍刑務所と改称した。リバーウォーク・西日本工大小倉キャンパス・金光教小倉教会の一部にあつたもので、教会敷地内に基礎部が残っている可能性がある	556
軍事上の必要から九州鉄道小倉裏線は明治37年(1904)2月に開通し、大正5年(1916)に廃止されたが、線路敷の一部は道路となって小倉北区砂津及び木町に残っている。同大蔵線は明治24年(1891)開通、明治44年(1911)9月に廃線となったが、線路敷は道路となって小倉北区清水、八幡東区東鉄町・祝町・末広町・中央町・尾倉町に残っている他、八幡東区の茶屋町橋梁と尾倉町橋梁・大蔵川橋梁が現存する。現存橋梁の下流側には、将来の複線化の工事をを行う際に、この道出し部に煉瓦を組込むことによって橋梁全体の強度を図るための下駄歯の煉瓦組が残されている。当初、九州鉄道は単線で営業を開始しており、この茶屋町を始め多くの煉瓦造橋梁は単線設計であるが、大蔵川に残る大蔵鉄橋は、明治31年(1898)大蔵停車場開業に併せて複線で橋台が造られている。また、小倉北区真鶴及び八幡東区尾倉に線路敷法面と八幡東区中央2丁目公園横には赤煉瓦橋梁の外形が残っている	46・555
明治36年(1903)旧東小倉駅付近から三萩野交差点を通り、紫川を渡り、南小倉駅までが開通し、日露戦争が始まった2日後の翌37年2月12日には、九州南科大学辺りを通り、後の大蔵線に接続し小倉裏線は全線開通した。また、この路線の駅として、中間地点に当たる三萩野交差点付近に「足立停車場」が設置された。この停車場は、国の要所により、駅地35,000坪、駅前広場180坪など小倉停車場をはるかにうまわる規模で、現在もその広大な敷地からその大きさが伺える。しかし、大蔵線が明治44年(1911)廃止になったため、順次路線は部分廃止され、大正5年(1916)には全線廃線になった。なお、全線開業日の翌日、日露戦争に出征する小倉城内の第12師団は、本線の小倉停車場より規模の大きかったこの停車場から長崎へ出征することとなり、本線及び豊州線の各列車は総て足立停車場からの乗降となった。しかし、兵員輸送が一段落した2月19日、一般乗客の乗降は行わないようになり、その後、もう二度と賑わうこともなく足立停車場はひっそりと姿を消した	A
元禄15年(1702)、水戸家江戸屋敷内後楽園の錦春園内の台地に、兜を埋めて稲荷神社を建立したのが始まり。大正12年、関東大震災の際、東京の殆どが焼失したが、稲荷神社だけ延焼を免れた。その後、神社敷地は東京砲兵工廠となり、昭和8年(1933)には小倉へ移転。移転に伴い神社も、鳥居等も含めて小倉工廠内(現在の中央図書館北側の森)に遷座。戦後の昭和20年(1945)9月勅定稲荷神社に合祀された。反橋は、水戸家江戸屋敷内の後楽園の池に架かっていた石橋で、錦春稲荷神社とともに小倉に移されたものである	A
昭和19年(1944)、戦時中の強制疎開により現在地へ移転	A
ポーリス氏が設計した建物である。昭和14年(1939)北九州空軍司令部に強制徴用され白亜の講堂は迷彩色に塗られる。屋上に高射砲2基が設置されていたが、今は指揮台と煙突が残る。老朽化のため全体的に改修されているが、入口の煉瓦積みやタイル、内部の窓、床の一部(赤松)、シャンデリア、階段、机などは当時のまま残されている。講堂南東側には迷彩の一部と考えられる黒色(コールタールか)の瓦礫が落ちている	A
小倉市役所跡地の発掘調査で遺構検出	
愛宕神社参道脇に「防空壕」の碑があり、菜園場寮との間の山裾に防空壕が数箇所掘られているが、現在は入口をブロックで塞がれている。碑には、第一町内会三組の銘が刻まれている。また、小倉高校庭球場横の斜面にも大規模な防空壕が掘られているが、入口は塞がれている	A
	A
道路肩部の崩落による道路の補修工事に伴う発掘調査で、当初横穴群として発掘を行ったところ防空壕であることが判明した。入口より約12m西へ直線的に掘られたのち直角に北方向へ曲がり約60m直線的に掘られていた	561
輻重兵第12大隊があった場所に、昭和49年(1974)有志によって記念碑が公園内に建てられている。また、公園内の塀や門はその当時のものか	A
工兵第12大隊は明治30年(1897)6月に熊本工兵第6大隊一個中隊が小倉に移駐し、同10月に大隊編成となる。大正14年(1925)廃止。割竹状天井の壕が残り、車馬にかかる施設又は資材倉庫などの可能性がある	46
土塁と木造の火薬庫がある。	A
土塁と木造の火薬庫がある。火薬庫はリフォームされていた[上記84とは別]	A
火薬庫を住宅に使用	A
城野小学校、城南中学校及び小倉商業高校一帯には、戦前小倉陸軍造兵廠に動員された女子生徒を中心とする女子挺身隊の寄宿舎があった。その門柱が、現代の寄宿舎「ひびき寮」の塀の中に片方のみ保存されている	A
市立農事センターの丘陵上に7糎高射砲が設置されていた	670

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
89	元倉照空陣地	北九州市	小倉南区大字吉田	不明	2軍事・防衛	不明。確認中
90	間島照空陣地	北九州市	小倉南区大字曾根	私有地	2軍事・防衛	ブッシュの中に現存している
91	西照空陣地	北九州市	小倉南区大字木下	不明	2軍事・防衛	ある程度よく残っている
92	臨時火薬庫：櫛ヶ峠トンネル	北九州市	小倉南区大字木下	公有地	2軍事・防衛	現存
93	防空監視所	北九州市	小倉南区大字木下		2軍事・防衛	不明
94	葛原照空陣地	北九州市	小倉南区湯川新町		2軍事・防衛	
95	高津尾照空陣地	北九州市	小倉南区大字高津尾		2軍事・防衛	
96	合馬照空陣地	北九州市	小倉南区大字合馬		2軍事・防衛	
97	山田照空陣地	北九州市	小倉南区高野1丁目		2軍事・防衛	
98	志井照空陣地	北九州市	小倉南区大字志井		2軍事・防衛	
99	須川滝照空陣地	北九州市	小倉南区大字合馬		2軍事・防衛	
100	石坂照空陣地	北九州市	小倉南区大字辻三		2軍事・防衛	
101	石田照空陣地	北九州市	小倉南区蛭田若園1丁目		2軍事・防衛	
102	田原照空陣地	北九州市	小倉南区田原		2軍事・防衛	
103	道原照空陣地	北九州市	小倉南区大字道原		2軍事・防衛	
104	馬場照空陣地	北九州市	小倉南区大字朽網西		2軍事・防衛	
105	母原照空陣地	北九州市	小倉南区大字母原		2軍事・防衛	
106	陸軍演習場	北九州市	小倉南区平尾台 (大平山)	公有地、私有地	2軍事・防衛	現存
107	曾根飛行場	北九州市	小倉南区曾根北町	私有地	2軍事・防衛	北九州空港開設により廃止
108	鷲峰山高射砲陣地	北九州市	小倉南区・小倉北区南丘3丁目	公有地	2軍事・防衛	現存
109	高蔵山照空陣地	北九州市	小倉南区大字沼		2軍事・防衛	
110	曾根弾薬庫	北九州市	小倉南区田原	公有地	2軍事・防衛	土塁の一部が現存
111	北方防空監視哨	北九州市	小倉南区北方	不明	2軍事・防衛	
112	鷲峰山南高射砲陣地	北九州市	小倉南区	不明	2軍事・防衛	軍用道路等が残っているらしい
113	陸軍池	北九州市	小倉南区吉田	不明	3生産	現存
114	曾根製造所(旧曾根毒ガス工場)	北九州市	小倉南区下吉田	公有地	3生産	現存
115	小倉衛戍刑務所	北九州市	小倉南区城野	私有地	5居住	宅地造成により消滅
116	足立高射砲中隊への軍用道路	北九州市	小倉南区大字湯川	不明	7交通	殆ど残存
117	防空壕(下吉田古墳)	北九州市	小倉南区大字吉田	私有地	5居住	現存
118	牧山高射砲陣地	北九州市	戸畑区牧山～椎木町の丘陵 尾根	公有地、私有地	2軍事・防衛	コンクリート基礎が残存。また、20m西側に 指標石が残存
119	金毘羅高射砲陣地	北九州市	戸畑区金毘羅町	公有地	2軍事・防衛	
120	戸畑市役所高射機関銃	北九州市	戸畑区新池1丁目	公有地	2軍事・防衛	
121	名護屋岬高射砲陣地	北九州市	戸畑区大字中原	私有地	2軍事・防衛	新日鉄住金の工場内
122	宮田高射砲陣地	北九州市	戸畑区椎ノ木町		2軍事・防衛	
123	中原照空陣地	北九州市	戸畑区中原東3丁目		2軍事・防衛	
124	戸畑市内の貯水槽	北九州市	戸畑区内	不明	8その他	不明
125	防空壕	北九州市	戸畑区内	不明	5居住関係	不明
126	椎牟田照空陣地	北九州市	若松区大字乙丸	私有地	2軍事・防衛	不明

内容(年代・由来等)	文献
門司区大字恒見小井藤峠付近から西側丘陵174mの山頂に昭和19年6月に設置され、そこまでの軍用道路が築かれている。照空灯座も残る	64・670・前齒氏
古墳群西側平場に竈や、船入れ場等がある。昭和19年11月設置	A
昭和19年(1944)6月の防空隊配置図に記載され、東谷資料館の地図にも記載されている。軍道を登り始めると宿営地らしき平場があり、そこから東の高い尾根上には索道で器材を運んだものと思われる。尾根上には詰所らしき区画と指揮所であろうコンクリート造り構築物がある。更に東側に照空灯座と思しき径3mの窪地があり、周辺にコンクリート片が散在している。これより更に北東側の丘陵先端部近くに電波標定機を据え付けたとと思われる構築物が見られ、コンクリート壁の基礎部分が遺存する	670・A
道原と石原町を最短で結ぶ峠道に、昭和6年(1931)隧道が竣工。この隧道は、煉瓦からコンクリートへと変わる昭和初期の山岳トンネルで、入口は馬蹄形だが内部は素掘りで壁面はコンクリートの吹付となっている。幅3.7mで、長さ約280m。地元の方からの聞きとりによると、戦時中この隧道は弾薬庫として使われていたという	A
東谷資料館の地図(東谷市民センターが20年ほど前の情報のもと作成?)に記載。跡地とされる所には何も痕跡がなく詳細は不明	
	A
	A
北九州市内の照空陣地は、昭和16年12月以降18か所が設置され、同17年4月には計41か所となり、さらに同19年6月以降には計69か所になったとされ、この合馬の陣地は昭和19年11月の設置とされる。標高166mの尾根上の樹林及び竹藪の中に照空灯座、電波標定機据え付け跡、指揮所と思われる構築物があるが、もとはコンクリート造りであったか否かは不明。軍用磁器片が落ちていた。これらの所より北側の下方にあたる所には便所も遺存する	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
陸軍は、小倉衛戍諸隊の戦闘射撃場を平尾台に設置するため、明治45年(1912)7月から予算3万円で購入に入った。近隣で行われていた小倉鉄道敷地、小倉水道用地買収の影響により、用地価格が高騰し難航したが、予算を5千円増額し大正元年(1912)12月までに用地買収を完了。そして、大正10年(1921)に演習場の庁舎とするため、久留米にあった捕虜収容所の建物を移転して、旧山頂バス停付近に建設。また、大正12年(1923)には、演習場の給水地を敷地内に求めたが石灰層のため適地が見つからず、泉水を運ぶこととなり、そのための人馬の集合場所として用地購入を行っている。なお、集落の水源地となっていた帰り水の場所に軍は風呂を設置していた。さらに、昭和2年(1927)には兵舎を新築しているが、その工事において、兵舎兵卒室の中央には補強間仕切を一ヶ所設置することや、兵舎には挟方杖を設けることが指示されていた。天然記念物との関係では、昭和10年(1935)に文部省が演習場敷地内に指定を掛けようと陸軍省に照会したが、指定予定地は何れも演習場の主要な場所であるため、教育訓練に支障あるため指定しないよう回答している。しかし、これらの天然物に対しては、指定の如何に係らず演習土大なる支障無き限り尊重保存に留意することを併せて回答している。現在、演習場の面影を残すものは、用地の境界石と水源地の水槽ぐらい。なお、境界石は昭和57年(1982)の調査では76本確認されている	A
昭和18年(1943)4月、陸軍は周防灘に面してかつて塩田があった所に、本土決戦に備えた戦闘機基地建設に着工した。昭和20年2月以降は第170独立整備隊や第82飛行中隊が学徒動員の支援を得て設営にあたったが、終戦時にも完成に至らなかった。戦後は、米軍によって接収された	A
昭和16年12月に7糎高射砲6門が据えてあったとされる。現在は市の公園で、水槽かと思しきコンクリート構築物がある。標高136.1mの山頂に野戦重砲兵第20連隊(満州第938部隊)の戦死者を慰霊し平和を希求する「平和之礎」が昭和47年(1972)に建立された	46・A
昭和17年4月設置。円形土塁や軍用道路が残る。要塞施設を転用している	A
昭和17年(1942)に建設される。昭和54年(1979)に小倉東高校建設のための発掘調査が行われた際に砲弾10数発が出土したとされる(ただ、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室の『小倉東高校遺跡』[北九州市埋蔵文化財調査報告第7集]には爆弾の探査のことには触れるが砲弾が出土したとは書かれていない)。昭和21年(1946)5月4日、弾薬処理中に大爆発を起こし死傷者多数が出たと言われている	46
昭和13年(1938)4〜7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
米軍撮影の航空写真に鷲峰山高射砲陣地南側の尾根山頂に陣地が写っている	A
曾根毒ガス工場(昭和12年[1937]開所)用の水源としてつくられた。同じ時の築堤であれば1937年頃のもの	46
昭和12年(1937)に開所する。表向きは火薬製造であったが、広島県大久野島でつくられた毒ガスを94式迫撃砲や野砲弾に充填して、秘密裏に毒ガス弾を製造していた。毒ガス砲弾は山田弾薬庫にも運ばれた。現在は陸上自衛隊小倉駐屯地曾根訓練場となった中に、そのときの建物が残る。正式名称は東京第二陸軍造兵廠曾根製造所である。ここにあった毒ガス弾等が戦後に菊田港周辺に投棄され、昭和29年(1954)以降にイバレット弾や爆弾が多数発見されている	46
明治15年(1882)12月に小倉田町に設置された衛戍監獄が大正11年(1922)に城野に移転したものである。同12年(1913)4月1日に小倉衛戍刑務所と改称した。なお事前発掘調査により煉瓦基礎が検出されている	555
安部山公園から砲台山への資材運搬に設置された軍用道路が残る。観光道路により中断され、現在車を上げることは出来ないが、殆ど残存	A
下吉田古墳群の横穴式石室を、空襲の際に防空壕として使用	
(牧山展望公園)7糎高射砲6砲座のほか広範囲に陣地が築かれていたとの証言あり。昭和16年12月設置。砲座の基礎が残る	A
米軍撮影の航空写真に円形土塁1が写っている	A
屋上に設置されていたと思われるが不明	67
昭和19年(1944)6月の防空隊配置図に記載。8糎高射砲6門が2か所	670
	A
昭和19年(1944)6月の防空隊配置図に記載	670・A
昭和17年(1942)2月〜同20年(1945)6月の間に、小型・大型の貯水槽を市内各所に構築した(文献631のp770に一覧あり、110数か所ありか)	631
昭和17〜18年(1942〜1943)に各戸分を含めて床下や道路側等に防空壕が造られたが、昭和19年(1944)6月16日の空襲後は掩蓋を嚴重にしたものや横穴式のものが構築されるようになり、同19〜20年(1944〜1945)で70か所ほどの防空壕が新設された(文献631のp771に一覧あり)	631
昭和19年(1944)6月の防空隊配置図に記載	670

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
127	石峰山高射砲陣地(7センチ砲)	北九州市	若松区大字藤木	公有地?	2軍事・防衛	一部は破壊されているが概ね現存
128	石峰山高射砲陣地(8センチ砲)・照空陣地	北九州市	若松区大字藤木	公有地?	2軍事・防衛	一部は破壊されているが概ね現存
129	総牟田(灘山)高射砲陣地	北九州市	若松区大字小石	私有地	2軍事・防衛	個人造成などで消滅が危惧される。説明版が立っている
130	石峰山照空分隊(水上越(みずかみごえ)北側陣地)	北九州市	若松区大字小石	不明	2軍事・防衛	現存
131	弥勒山防空(高射砲)陣地	北九州市	若松区小竹	私有地	2軍事・防衛	砲座6基、指揮所1基の痕跡、陸軍の境界杭5
132	高塔山砲兵陣地(高射砲陣地)	北九州市	若松区	公有地?	2軍事・防衛	現存
133	浜埋立地高射砲陣地	北九州市	若松区大字安瀬	私有地	2軍事・防衛	消滅
134	鴨生田(穴蔵)高射砲陣地	北九州市	若松区鴨生田3丁目	私有地	2軍事・防衛	消滅
135	白鳥砲台・(照空灯)・海岸監視哨	北九州市	若松区白鳥	私有地	2軍事・防衛	現存
136	八幡岬砲台	北九州市	若松区安屋		2軍事・防衛	八幡宮敷地内を踏査したが、詳細は不明
137	安屋高射砲陣地	北九州市	若松区安屋		2軍事・防衛	
138	沖田高射砲陣地	北九州市	若松区深町1丁目		2軍事・防衛	
139	猿住高射砲陣地	北九州市	若松区大字猿住		2軍事・防衛	
140	安瀬照空陣地	北九州市	若松区大字安瀬		2軍事・防衛	
141	逆水照空陣地	北九州市	若松区大字安屋		2軍事・防衛	
142	原照空陣地	北九州市	若松区原町		2軍事・防衛	
143	菖蒲谷照空陣地	北九州市	若松区大字小石		2軍事・防衛	
144	頓田(草場)照空陣地	北九州市	若松区大字頓田		2軍事・防衛	
145	脇田照空陣地	北九州市	若松区大字小竹		2軍事・防衛	
146	若松気球隊陣地	北九州市	若松区二島		2軍事・防衛	
147	脇ノ浦の海岸監視哨	北九州市	若松区脇ノ浦	不明	2軍事・防衛	
148	栃木高射機関銃	北九州市	若松区本町1丁目	私有地	2軍事・防衛	不明
149	大蔵高射砲陣地	北九州市	八幡東区羽衣町	公有地	2軍事・防衛	現存
150	猪倉(高射砲)予備陣地	北九州市	八幡東区大字猪倉	公有地?	2軍事・防衛	現存
151	葛島高射砲陣地	北九州市	八幡東区前田	私有地	2軍事・防衛	不明
152	八幡製鐵所防空壕、高射機関銃	北九州市	八幡東区(製鉄所構内)	私有地	2軍事・防衛	撤去されていると思われる
153	八幡防空監視哨	北九州市	八幡東区	不明	2軍事・防衛	
154	皿倉山高射砲陣地・馬塚	北九州市	八幡東区大字大蔵		2軍事・防衛	
155	枝光機関砲隊	北九州市	八幡東区大宮町		2軍事・防衛	
156	田代照空分隊・陣地	北九州市	八幡東区大字田代 八幡西区大字畑		2軍事・防衛	現存
157	福岡俘虜収容所 / 有営館	北九州市	八幡東区帆柱3丁目	公有地	5居住	建物は破却され、現在市営住宅となっている
158	福岡俘虜収容所第3分所:八幡中町	北九州市	八幡東区中町		5居住	
159	八幡大空襲被害者茶毘地	北九州市	八幡東区高見5丁目	公有地	6埋葬	現在は、埋め立てられ公園の駐車場となっている
160	軍用道路	北九州市	八幡東区田代、八幡西区畑	公有地?	7交通	現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和16年(1941)12月設置の高射第4連隊の陣地で、石峰山(標高302.4m)の西南側尾根頂部(標高280m)に築かれる。径8mの土堰堤の中の幅3.3mの八角形コンクリート土台の上に径1.1mの円形コンクリートを載せ、そこに7種高射砲を載せていた。円形座には固定用の12個のボルト穴あり、中心部は深さ10cmほどが窪んでいる。この陣地の砲座はほぼ東西に6基が並び、西端部の3基にはボルト穴が明確に確認され、第5砲座のボルト穴には円筒形に鉄が遺存していた。各砲座には内法で幅1.78m、高さ1.7m、奥行2mのコンクリート製砲側庫が付随する	46・704・A
昭和16年(1941)12月設置の高射第4連隊の陣地で、標高302.4mの石峰山山頂に平坦地を造成して8種高射砲6基が配置されていたが、電波塔などにより大半は破壊されている。頂部の東南部に土堰堤を巡らしたような窪地2基があり、高射砲陣地(第一・第二砲座)基部の残骸と思われる。その東南方向尾根上や斜面には造成後に設置された倉庫等のコンクリート構造物の残骸が見られる。また南西方向の尾根上に築かれた照空陣地には、軍用道路から入って平坦部があり、その一段上の平坦面東側に円形の大きな土坑2基がある。また階段を経て東の方に行くと呼指所を左に見てその先に径約20mの円形土塁がある。灯座としてはかなり大きい。最下段の平坦部で白磁片が採集された。これらの周囲には施設等を繋ぐ軍用道路が整備されている	46・704・A
昭和19年(1944)11月に、高射砲第131連隊高射砲第6中隊が編成され、12種高射砲6門が設置された。標高220mの山頂部を造成し、直径5mのコンクリート砲座6か所が約18m間隔で、中央の指揮所を取り囲むように配置されている。砲座の周囲には土塁も遺存する。軍道、陸軍境界石等が残っている。12種高射砲の陣地としては市内唯一のものである。私有地牧場の一角であり、砲座のある所に行く途中には「戦跡の有る! 灘山牧場」と書かれた看板がある	A
石峰山(標高302.4m)の西側、灘山高射砲陣地の南にある標高234mの尾根頂部を造成し、レーダー装置(電波標定機)のコンクリート基礎(送信機・受信機)2か所が約70mの距離を置いて、昭和19年11月に設置された。両基礎間は埋設ケーブルのようなもので連結されていたらしく溝状の窪みが残る。送信機・受信機の基礎コンクリート構造物は内径4mの円形部分を中心に南北に突出部があり、全長約9.2mを測る。深さは約1.8m。北側の受信機の周囲は一边が約40mの土塁状の土堤で囲んでいるらしい。北海道室蘭の「タチ3号」送信機が同様の構造であったという。また、山頂に至る軍用道路、防空壕、営所基礎等が残っている	A
昭和16年(1941)9月から同17年(1942)5月の間に構築されたと思われる(昭和19年11月か)。1,709坪の広さがある。弥勒山頂上に高射砲座(直径8m)が6基、指揮所1基の痕跡がある。また、付近で陸軍の指標杭を5つ確認できた	704・A
昭和12年(1937)に構築され、10種砲6門が配備された。陣地は久留米師団工兵第18大隊が構築したので山頂公園に三勇士記念碑があり、その碑のみが残る。また山中の墓地区内に「国土防衛戦士之碑」(昭和17年[1942]10月建立)がある	46
米軍撮影の航空写真に砲座等が写っている。現在のトーカイ若松工場内にあった	704
	704
下関要塞にかかる砲台で、男島に昭和11年(1936)7月着工、同12年(1937)10月竣工した。11年式7種加農4門があった。位置的には、東北方にある蓋井島砲台(15種加農)と、西北西の女界灘にある大島砲台(15種加農)の中間にあり、白島砲台の7種加農からの砲撃により両砲台の射界の中間海面をカバーし、これら3砲台で響灘から女界灘までの海面を制圧することができた。また、備砲の11年式7種加農は高射砲兼用であり、関門海峡入口に侵入する敵航空機に対する高射砲陣地としての役割も担っていた。現地には、砲座、砲基、塹壕、竈、トイレ、管庭、眼鏡台座、地下水槽、井戸、標石、電柱、防空壕、石垣に囲まれた建物基礎、軍用道路、水尺等が割に良好な状態で残っている。昭和20年(1945)5月21日に火砲移管命令があり、津屋崎の渡に移設した。海岸監視哨は第56軍の担任部隊(第145師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置されたものの一つ。主に蓋井島及び磯崎鼻方向を監視した	5・67・72・109・A・B
下関要塞として、昭和17年(1942)以降に15種加農4門の砲台を構築した	67
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
昭和17年4月設置。照空灯座、指揮所、軍道が残る	A
	A
	A
第56軍の担任部隊(第145師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置されたものの一つ。主に六連島方向を監視した	109
屋上に設置されていたと思われるが不明	67
勝田公園が陣地跡で、砲座のコンクリート基礎が残っている。昭和17年4月に設置され、同年7月に牧山部隊の少尉が八幡市役所を訪れ、陣地内の軍施設見取り図を残している	83・670
照空陣地とか予備陣地と言われている平地があり、八幡市の境界杭と鉦滓煉瓦の水槽が残っている。昭和19年11月設置	83
1960年代の航空写真に円形砲座2か所が写っている	704
構内の各工場ごとに設置	67・129
昭和13年(1938)4〜7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
皿倉山は標高622m。戦時中は要塞地帯のため登山できなかったが、昭和21年に登山解除となってから皿倉山で高射砲の砲台を見た、とされる(2019年6月4日付西日本新聞オピニオン欄)	A
	A
九州自然遊歩道から八幡西区畑観音と八幡東区田代への分岐点である観音越の北側に隣接する音滝山、標高417mの山頂に第二次世界大戦中設けられていた高射砲第131連隊に係る陣地跡が残っている。昭和19年11月設置。時の脇に平場を整理し宿舎などが設置されていたようで、陣地は北側の尾根を整理し土堰を円形に巡らした陣地跡や塹壕跡、排水枡等が残っている。また、円形陣地の中心には円形軸を穿ったコンクリート基礎が残っているが、現在は厚くたい積した腐葉土で見ることが出来ない。なお、弾薬庫の遺構が残っていないことから、照空灯か聴音機を設置していたのではないかと考えられる	A
昭和20年(1945)9月14日米軍撮影の写真有	「読谷村史」
昭和17年(1942)9月23日に八幡仮停虜収容所として八幡市中町に開設。翌年1月1日に福岡停虜収容所八幡分所に改編。同3月1日に第3分所と改称。12月15日に小倉市大字中井に移転した	C
八幡大空襲後、犠牲者の遺体は、焼け残った小学校の講堂や教室等に安置され、翌日には町内毎に高見にあった八王寺火葬場横の畑に大八車やリヤカー等で運ばれ、野天での火葬が終戦後の8月18日頃まで行われたと言われている。そして、残骨や身元不明者の遺骨は、そのまま畑の中に埋められ、木製の墓標が建てられた。しかし、数年後には省みる人もなく夏草の中に埋もれていた。それを見かねた地元の方々の陳情によって、昭和30年8月8日建てられたのが谷口霊園内の碑である	A
高射砲陣地の築造や物資の運搬用車両などのために開設された軍用道路跡が尺岳平まで残っており、現在は林道及び登山道として活用されている	A

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
161	くろがね線	北九州市	八幡東区・戸畑区	私有地	7交通	現存
162	八幡総合授産所	北九州市	八幡東区西本町1丁目	公有地	8その他	現存
163	防空壕(八幡市役所)	北九州市	八幡東区中央1丁目	公有地	5居住	入口2か所現存
164	防空壕	北九州市	八幡東区未広町	私有地	5居住	現存
165	防空壕	北九州市	八幡東区宮の町1丁目	私有地	5居住	埋め戻されている
166	防空壕	北九州市	八幡東区1丁目(尾倉)	私有地	5居住	現存
167	皇后崎高射砲中隊・大隊本部(高射砲陣地)	北九州市	八幡西区青山1・2丁目	私有地、公有地	2軍事・防衛	皇后崎公園内には建物基礎部が残っている可能性がある
168	黒崎陣山高射砲陣地	北九州市	八幡西区屋敷1丁目?	不明	2軍事・防衛	
169	権現山高射砲陣地	北九州市	八幡西区・八幡東区	公有地	2軍事・防衛	現存。構築物は現存しない
170	折尾防空監視哨	北九州市	八幡西区折尾	不明	2軍事・防衛	
171	割子川防空監視哨	北九州市	八幡西区割子川	不明	2軍事・防衛	
172	割子川高射砲陣地	北九州市	八幡西区割子川2丁目付近		2軍事・防衛関係	
173	聖塚高射砲陣地	北九州市	八幡西区本城東6丁目		2軍事・防衛	
174	小原照空陣地	北九州市	八幡西区浅川2丁目		2軍事・防衛	
175	浅川照空陣地	北九州市	八幡西区大字本城		2軍事・防衛	
176	深田照空陣地	北九州市	八幡西区野面2丁目		2軍事・防衛	
177	則松照空陣地	北九州市	八幡西区則松4丁目		2軍事・防衛	
178	田屋照空陣地	北九州市	八幡西区小嶺1丁目		2軍事・防衛	
179	藤田照空陣地	北九州市	八幡西区東鳴水1丁目		2軍事・防衛	
180	木屋瀬照空陣地	北九州市	八幡西区大字木屋瀬		2軍事・防衛	
181	里中照空陣地	北九州市	八幡西区永犬丸4丁目付近		2軍事・防衛	
182	折尾俘虜収容所(第6分所)	北九州市	八幡西区		5居住	
183	防空壕(皇后崎公園)	北九州市	八幡西区青山2丁目	公有地	5居住	現存
184	防空壕(香月市民の森)	北九州市	八幡西区船越3丁目	公有地	5居住	現存
185	防空壕(畑貯水池・西区)	北九州市	八幡西区大字畑	公有地	5居住	現存
	要塞地帯標・境界石					
186	(1)下関要塞第一地帯標石	北九州市	門司区長谷	公有地	2軍事・防衛	説明板あり
187	(2)下関要塞地帯標	北九州市	門司区大字門司	公有地?	2軍事・防衛	現存(企救自然歩道)
188	(3)下関要塞地帯標	北九州市	門司区大字大里	公有地	2軍事・防衛	現存
189	(4)下関要塞地帯標	北九州市	門司区伊川		2軍事・防衛	
190	(5)下関要塞地帯標(足立縦走路)	北九州市	小倉北区大字足原	公有地?	2軍事・防衛	現存
191	(6)下関要塞地帯標(石峰山)	北九州市	若松区(石峰山)	私有地	2軍事・防衛	現存
192	(7)下関要塞地帯標(ひびきの)	北九州市	若松区大字小敷	私有地	2軍事・防衛	所在不明
193	(8)下関要塞地帯標	北九州市	若松区白鳥	私有地	2軍事・防衛	現存
194	(9)下関要塞地帯標(九州自然遊歩道)	北九州市	八幡東区大字大蔵	不明	2軍事・防衛	現存
195	(10)下関要塞地帯標(九州自然遊歩道)	北九州市	八幡東区大字田代	不明	2軍事・防衛	現存
196	(11)下関要塞地帯標(九州自然遊歩道)	北九州市	八幡東区大字田代	不明	2軍事・防衛	現存
197	(12)下関要塞地帯標(九州自然遊歩道)	北九州市	八幡東区大字田代	不明	2軍事・防衛	現存
198	(13)下関要塞地帯標	北九州市	八幡東区田代町	公有地	2軍事・防衛	現存
199	(14)下関要塞第二地帯標・第12号	北九州市	八幡東区(双伍山山頂)		2軍事・防衛	現存
200	(15)下関要塞地帯標	北九州市	八幡西区市瀬1丁目9番付近	公有地	2軍事・防衛	常設展示されている
201	(16)下関要塞第一地帯標・第4号	北九州市	八幡西区(健郷山登山口)		2軍事・防衛	現存
202	(17)下関要塞地帯標	北九州市	八幡西区京長城町	公有地?	8その他	現存
203	(18)陸軍境界石(企救自然歩道)	北九州市	門司区伊川		2軍事・防衛	
204	(19)陸軍境界石	北九州市	小倉南区城野		2軍事・防衛	
205	「護州部隊」駐屯	中間市	(中間小学校、底井野小学校)	公有地	1政治・行政	消滅
206	中間防空監視哨	中間市		私有地	2軍事・防衛	消滅
207	福岡俘虜収容所第21分所:中間市中鶴(大正鉱業中鶴捕虜収容所分所)	中間市	中鶴	私有地	5居住	消滅
208	防空壕	中間市	底井野天神山	私有地	5居住	

内容(年代・由来等)	文献
戦中戦後の一時期、一枝と鞘ヶ谷にホームが造られ、通勤電車としても活用されていた。八幡製鐵所から出る大量のスラグ、炭滓等を戸畑、日明地区に埋立てるため建設された「炭滓運搬鉄道線」で、延長5.2キロの専用鉄道。昭和47年、社員からの公募で名称を「くろがね線」に変更	A
昭和7年(1932)頃建築された中本呉服店の建物で、昭和18年(1943)には八幡製鐵所が所有。昭和20年(1945)8月8日の空襲に焼残り、税務署を経て授産所となったが、平成14年に廃止された	
防空壕は全長約150m、幅と高さは2.4m あったとされる。入口4か所の内、現存2か所(公園下の道路沿い、八幡東区役所公用車駐車場脇)の入口は塞がれている。「(昭和20年)八月八日大空襲手記」(八幡信用金庫専務理事 M 氏)に「水曜日晴天午前8時頃、警戒警報が発令、午前10時頃突如として敵弾の炸裂する音が耳に強く響いて来た。女子職員を市役所の防空壕へ退避させる。壕は幾条にも分かれて広く、深く、出入口は四箇所もあった。壕内本部に市長であり信用組合長であった内田隆も居た。午後5時半頃、枝光方面の煙はまだ取まっていなかったが、空は本来の快晴に戻っていた。」とある	A
旧線路の南側斜面の石垣積みの中に入口部分が残っている	
斜面に8ヵ所掘られていた	83
個人住宅の道路側石垣積みの中に入口部分が残っている	
8機高射砲が6門設置されていたことが、米軍撮影の航空写真に写っている。砲座があったところは、宅地となり消滅している	A
米軍撮影の航空写真に円形土塁2が写っている	67
8機高射砲6門が備えられていたとされる。現状は構築物は見られない	46
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
	A
遠賀郡水巻町の日炭高松炭鉱の採掘労働力として、昭和18年(1943)4月から数回に分けて1,200人の俘虜が送られてきた。ここの俘虜殺害に関して戦後に裁判があった[文庫4の p90][水巻町牟田の俘虜収容所と同じと思われるが、分けておく]	44
皇后崎公園内の陸橋横の斜面に入口が空いていた	
公園内の斜面に入口があいている	
貯水池周回道の脇に入口があいている	
明治32年(1899)9月1日の設置にかかる標石	699
風師山頂通信アンテナの横にある。正面に「下関要塞第一地帯標」、右側に「明治32年9月1日」、左側に「第二号」、裏に「陸軍省」と刻まれる	A
自衛隊敷地境界。昭和10年(1935)4月、第一地帯標、第一号が残っている	
企救自然歩道	A
昭和10年(1935)2月16日付第一地帯標、第62号が残っている	
石峯神社二の鳥居をくぐった所にある。「SMI 西 Z 下関要塞第一地帯標」第一號」と刻む。要塞地帯法による設置であれば明治32年(1899)か	46
第54号、学園都市開発前の遺跡分布調査時に発見	
「昭和10年2月16日 / 下関要塞第一区地帯標 / 第4号外方350米以内 /」が残っている	
市瀬峠から権現山の途中にある。正面「下関要塞第二地帯標」、右側「明治〇年〇月〇日」、左側「第八号」、裏「陸軍省」と刻まれる	A
八幡西区畑の白木谷への分岐点である田床峠に、下関要塞第一地帯標がある。正面「下関要塞第一地帯標」、右側「明治32年9月1日」、左側「第四号」、裏「陸軍省」と刻まれる	A
双伍山山頂に下関要塞第二地帯標あり。正面「下関要塞第二地帯標」、右側「明治32年9月1日」、左側「第12号」、裏「陸軍省」と刻む	A
八幡西区畑観音と八幡東区田代への分岐点である観音越に、下関要塞第三地帯標がある。正面「下関要塞第三地帯標」、右側「明治32年9月1日」、左側「第22号」、裏「陸軍省」と刻まれる。なお、この道は田代側に下ると境ヶ谷の国境石に繋がっており、新道が出来るまでは田代から畑観音へ通ずる峠道であった	A
「明治32年9月1日」「下関要塞第三地帯標」第19号の地帯標が、田代公民館前の道路脇にある	
明治32年(1899)の「要塞地帯法」により建立された第一地帯標の第12号。明治32年の設置か	652
帆柱新四国第85番札所境内に明治32年9月1日に陸軍省設置の下関要塞地帯標があったが、河川改修により現在は「黒崎歴史ふれあい館」で展示中	A
明治32年(1899)の「要塞地帯法」により建立された第一地帯標の第4号。明治32年の設置か	652
道路脇に第一地帯標、第一号が残っている	
	A
	A
昭和20年(1945)5月に中間小学校の北5棟と公会堂、底井野小学校の保健室、裁縫室北側講堂教室、中央校舎が接取され、兵舎となった	634-p1002
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
昭和19年(1944)6月15日に開設。福岡俘虜収容所第21分所として、福岡県遠賀郡中間町(現・中間市)中鶴の中鶴炭鉱に開設。終戦時収容人員588人(蘭311、豪175、英99、米3)、収容中の死者5人	634-p1058・C
天神山下に昭和20年(1945)4月からトンネル式の防空壕を掘り始め、終戦後の同年12月3日に完成したとされる	634-p1001

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
209	下関要塞地区域標・第65号	中間市	中底井野(八剣神社)	私有地	2軍事・防衛	
210	芦屋飛行場(三里松原飛行場)	遠賀郡芦屋町	三里松原	公有地(国)	2軍事・防衛	基地として稼働中
211	芦屋海岸防空監視哨	遠賀郡芦屋町	柏原	調査中	2軍事・防衛	原形を留めているものはない
212	下関要塞第二区地帯標	遠賀郡芦屋町	柏原	公有地(町)	2軍事・防衛	現存
213	水巻高射砲陣地	遠賀郡水巻町	頃末北3丁目、?(えぶり)1丁目	公有地(町)	2軍事・防衛	1基残存、北山麓に石積残存
214	芦屋航空隊所属栗根機墜落之地と碑	遠賀郡水巻町	古賀1丁目(久我神社)	私有地	4戦闘地・戦場	現存
215	福岡俘虜収容所第6分所:水巻町牟田(折尾俘虜収容所)	遠賀郡水巻町	牟田	私有地	5居住	
216	防空壕	遠賀郡水巻町	頃末北2丁目	私有地	5居住	
217	防空壕	遠賀郡水巻町	頃末北3丁目	私有地	5居住	
218	防空壕	遠賀郡水巻町	?1丁目地内	私有地	5居住	
219	爆弾穴?	遠賀郡遠賀町	大字若松	私有地	4戦闘地・戦場	
220	防空壕	遠賀郡遠賀町	大字若松(横穴墓)	私有地	5居住	
221	防空壕	遠賀郡遠賀町	大字尾崎	私有地	5居住	
222	吉木海岸防空監視哨	遠賀郡岡垣町	吉木波津城		2軍事・防衛	消滅
223	海老津防空監視哨	遠賀郡岡垣町	海老津		2軍事・防衛	消滅
224	海老津照空陣地	遠賀郡岡垣町	海老津		2軍事・防衛	残存
225	吉木防空監視哨	遠賀郡岡垣町	吉木稗田		2軍事・防衛	消滅
226	孔大寺山等の複郭陣地壕	遠賀郡岡垣町	(孔大寺山北麓等)		2軍事・防衛	消滅
227	早崎高射砲陣地	遠賀郡岡垣町	早崎		2軍事・防衛	消滅
228	垂見峠砲台(湯川山砲兵陣地)	遠賀郡岡垣町	内浦垂水峠		2軍事・防衛	現存
229	波津崎防備衛所	遠賀郡岡垣町	波津		2軍事・防衛	消滅
230	尺岳照空中隊(高射砲小隊照空隊陣地)	直方市 北九州市	直方市上頼野 八幡西区大字畑 小倉南区道原	公有地?	2軍事・防衛	照空灯設置のために平らにならされた平坦地や軍用道路跡が現存
231	本谷照空分隊	直方市	大字上頼野	私有地	2軍事・防衛	現在は空き地となっている
232	堂山高射砲陣地	直方市	大字上頼野	私有地	2軍事・防衛	現在は私有地となっている
233	直方高射砲陣地	直方市	大字山部	私有地	2軍事・防衛	現在は空き地となっている
234	感田(直方)飛行場	直方市	大字知古、感田、日吉町	公有地	2軍事・防衛	飛行場跡は現在河川敷である
235	植木 B29墜落地跡	直方市	大字植木	公有地	4戦闘地・戦場	河川敷は現存
236	中原田遺跡	直方市	大字山部	公有地	8その他	ユメニティのおがた建設のため消失。遺物は直方市文化財収蔵施設に保管
237	津田町遺跡	直方市	津田町	私有地	8その他	病院建設のため消失。遺物は直方市文化財収蔵施設に保管
238	防空壕	直方市	大字植木	私有地	5居住	現存
239	防空壕	直方市	大字頼野	公有地	5居住	現存し、開口している
240	下関要塞地区域標	直方市	大字頼野 (内ヶ磯ダム建設地)	公有地(県)	2軍事・防衛	採集品は県が保管
241	海軍炭田境界標	直方市	大字下境、中泉	公有地	3生産	里道沿いに現存も、直下は大きく削られ、赤土むき出しの法面となる
242	宮永戦車壕(掩体壕)	宮若市	宮永	私有地	2軍事・防衛	現存
243	福岡俘虜収容所第9分所:宮田町松尾	宮若市	松尾		5居住	原野になっている。宮若市石炭記念館に当時の写真有
244	自動車置場・馬繋場	宗像市	吉留(八所宮)	私有地	2軍事・防衛	一部現存
245	防空監視哨	宗像市	吉留(戸田山山頂)	公有地	2軍事・防衛	消滅
246	第四百四十五師団吉武集積所	宗像市	吉武	不明	2軍事・防衛	所在地不明

内容(年代・由来等)	文献
明治32年(1899)の「要塞地帯法」により建立された区域標の第65号。明治32年5月1日の設置	652
遠賀川河口の三里松原北端の松林の所に39万坪の土地を確保し、昭和14年(1939)に着工、同17年(1942)に一応の完成をみたが引き続いて拡張工事がなされていった。三里松原飛行場とも呼ばれ防空専用であり、福岡県が建設して完成後は陸軍に献納した。陸軍時代の掩体壕が残っている。同17年12月に芦屋飛行隊第124部隊が入った。終戦後は米空軍が入り、米軍時代の兵舎、教会が残っている。昭和35年(1960)12月の米軍撤退後は航空自衛隊が使用している	531
第56軍の担任部隊(第145師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ。主に波津城方向を監視した	109・646
陸軍省第60号。昭和10年(1935)2月16日、洞山の北西の先端に建立。軍事上の機密地帯であったことを示すもの	
サイパン島の日本軍全滅(昭和19年[1944]7月)以降に6基が構築された(文献109のp214写真)。1基は明神ヶ辻山頂公園内に残存、北山麓には兵舎跡に伴う石積が残存する	109・679・680
昭和19年(1944)8月20日夜、北九州上空で米軍のB29を迎撃しようとして日本軍の戦闘機が墜落した場所。碑は平成4年(1992)建立	679
1943年4月22日に福岡俘虜収容所第15分所として遠賀郡水巻町牟田に開設、同12月1日に第9派遣所と改称。1945年8月に第6分所と改称(通称は折尾分所)。終戦時収容人員は1,062人。戦後の戦犯裁判で本所長・分所長らが死刑となった。建物などは撤去され消滅。現在はコンビニストアと建機レンタル敷地内にあり	138・680・C
古墳時代の横穴墓を防空壕に転用したとの記載あり(文献679のp25)。農協の金庫としても使われていた。ゴミ穴となっていた。入口は閉鎖。現段階では地権者が特定できず	679
平成24年(2012)年宅地造成時に発見、簡易測量。全長6m、入口から入って、4m奥から左方向にクランク状に曲がる。入口部幅0.8m四方、高さ0.95mを測る。マンション建設のため消滅	
平成4年(1992)の遺跡詳細分布調査にて4基ほどを確認。戦前から開口していたという。古墳時代の横穴墓もしくは炭炭の狸堀りを転用した可能性があるが、ゴミ穴となっている。現段階では地権者が特定できず	679
栄宗寺西の鳥見山丘陵上に陥没穴あり。聞き取りによると第二次大戦中に戦闘機により投下された爆弾の穴とのこと	なし
栄宗寺駐車場沿いにあり。3基の横穴墓の墓室を防空壕に転用したもの。聞き取りにより第二次大戦中のものとのこと	なし
山林の中にあり。平成23年度(2011)遺跡詳細分布調査時に確認。詳細不明	なし
第56軍の担任部隊(第145師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ。主に粕原方向を監視した	109・646
昭和6年(1931)7月16日～18日の関門北九州大防空演習の際に海老津駅近くの白谷巡査駐在所(東海老津)内に設置した。青年訓練所生徒に依頼して築造した。県内18か所に開設された監視哨の一つ	531・646
海老津小学校南側の丘陵上2か所に軍道らしき道と円形壕・方形壕などがあるとされる	松尾氏
昭和17年(1942)7月19日に岡垣町吉木区稗田に新築し業務を開始したが、同年9月30日に廃止した	531
米軍の三里松原海岸上陸作戦に備えて、大戦末期に岡垣町の波津・原・内浦・手野・三吉・吉木・高倉・野間・上畑の周辺と孔大寺山麓地帯の山かげに各種の砲を構え、複郭陣地の構築を行った	531
米軍の上陸に備えて、大戦末期に対空聴音機隊がいて、高射砲陣地が設置された。什王堂聴音陣地とする所も同じか?	531
宗像・遠賀間の四塚連山のうちの湯川山(ゆがわやま;標高471.4m)と孔大寺山(このだいしやま;標高499m)の間にある垂水峠の北西部、稜線より東のやや下った所に2基の洞窟砲台が築かれた。迷彩を施した砲台で、三里松原海岸に向けて設置されたが、大島から移転された45式15種加農2門の備砲直前に終戦となった、とされている。昭和20年5月以降の構築であろう。東側斜面下方の谷筋に軍道があるらしい	11・531・B・松尾氏
波津漁港の西北丘陵上にあり、旧海軍の「兵器引渡目録 下関防備隊波津崎防備衛所」(アジア歴史資料センター C08011058600)の図によると「兵舎、炊炊所及便所、自力発電所、油庫、便所、防備衛所、変圧所」等が図示される。現地では竹藪、雑木林の中に変圧所や防備衛所などに関するコンクリート構造物等が遺存する	松尾氏
直方市と北九州市にまたがる尺岳山頂に、第二次世界大戦中、小倉にあった高射第4師団、高射砲第132連隊、第15空隊、照空小隊の照空灯があった。尺岳平当時整地された宮庭跡で、福智へ向かう登山道の両側に、照空小隊に係る土塚を円形に巡らした陣地跡や土塚に囲まれた長方形の窪地等が残っている	62・A
第二次世界大戦中、直方市上頓野の安入寺集落に高射砲第132連隊、照空第18中隊・照空分隊の駐屯地があった。敷地は1990年代にパラボラアンテナが設置された箇所と思われる	62
第二次世界大戦中、高射砲部隊の陣地があったらしいが、年代・経緯等不明	
第二次世界大戦中、直方機関区と直方駅防衛のため、直方市山部の高台に高射砲第132連隊、独立高射砲第24大隊、高射砲第2中隊による99式8種高射砲6門を備えた高射砲陣地があった	62
昭和20年(1945)6月、筑豊地方の軍事輸送確保と警備のため、直方地区に千葉鉄道隊一個中隊が派遣され、九州日満鉱業学校と直方高等女学校に駐屯した。同年7月には、日満学校1年生も学徒動員されて海軍特攻基地の作業に従事した。文献671のp489にある「特攻基地配置図機密佐世保鎮守府命令作第90号別図(昭和20年7月25日)」の中に「直方」が中練・機練特攻基地として挙げられている。駐屯地の日満学校は直方市立直方第三中学校、直方高等女学校は大和青藍高校となっている	62・638・671
昭和20年(1945)3月27日、八幡大空襲に参加した米軍B29の1機が高射砲に被弾し直方市大字植木の遠賀川河川敷に墜落した	590
戦時輸送の増大に対応するため、昭和17～18年(1942～43)に行われた直方駅操車場拡張工事の際埋められた山部川の遺構を平成10年(1998)に発掘調査した。兵隊や軍歌、戦車、旭日旗、飛行機が描かれた磁器碗、第2次大戦中の窯場統合の際の登録番号を記した磁器が出土	636
津田町遺跡は江戸期の武家屋敷跡だが、城下町廃絶後の江戸後期～近代の町家に関する遺構も調査している。ピットから出土した染付碗に「征露記念」と記されたものがある。平成13～14年(2001～2002)に調査	637
現在開口している防空壕である。年代・経緯等不明。サツマイモ保存用に活用されている	
現在開口している防空壕である。年代・経緯等不明	
明治32年(1899)の「要塞地帯法」により建設された区域標。平成10年の内ヶ磯遺跡調査中に採集された。欠損した残存部に「明治三」が見えるので、明治32年の設置であろう。近隣でさらに3本が採集または確認された	652
明治18年(1885)政府は海軍予備炭田として、御徳村を含む約110ヶ村を仮指定した。明治24年には御徳村と糟屋郡新原村を除くすべての鉱区が開放された。この境界標は海軍炭田の境界を示すためのものとみられるが、直方市の大字下境と中泉の境界となる里道上に所在する	610
太平洋戦争中のもので、戦車を格納するため傾斜地をコの字形に削った跡がある	26
昭和18年(1943)12月4日に福岡俘虜収容所第20分所として鞍手郡宮田町松尾に開設。同19年4月10日に第12派遣所と改称。20年8月に第9分所と改称。終戦時収容人員は792人	C
昭和20年4月以降の第145師団関連か。八所宮境内に塹壕、掩体が残る。「馬撃場」とあるが「馬撃場」のことか	140
昭和20年(1945)4月以降か。吉留東蓮寺遺跡の試掘の際に記述された「戦争遺跡」の関連か	140
本土決戦に向けた師団配置において、宗像地域周辺を担当する第145師団の後方兵器補給計画にかかる集積所であるが、所在地不明。宮ノ尾と高六に物資格納のための隧道を掘削していたという記述が「平山天満宮祭田記」にあるが、地元住民への聞き取りでも確認できなかった。同じく安部造酒場倉庫が物資の貯蔵所だったという記述もある。吉留東蓮寺遺跡の試掘の際に記述された「戦争遺跡」の関連か	109

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
247	第四百十五師団司令部(地下壕)	宗像市	赤間	私有地	2軍事・防衛	消滅か？
248	赤間防空監視哨	宗像市	赤間	不明	2軍事・防衛	所在地不明
249	平等寺原遺跡	宗像市	平等寺	私有地	2軍事・防衛	調査後消滅
250	平等寺照空陣地	宗像市	平等寺	不明	2軍事・防衛	現存
251	武丸中ノ坪遺跡	宗像市	武丸	不明	2軍事・防衛	現存
252	畑照空陣地	宗像市	池田・畑	不明	2軍事・防衛	現存
253	浦ヶ谷照空陣地。聴測陣地	宗像市	武丸・浦ヶ谷	不明	2軍事・防衛	現存
254	田野照空陣地	宗像市	田野	不明	2軍事・防衛	現存
255	草崎(神湊)砲台	宗像市	神湊	不明	2軍事・防衛	現存
256	鐘崎高射砲実弾射撃場・兵舎	宗像市	鐘崎	公有地	2軍事・防衛	消滅
257	大島砲台	宗像市	大島	公有地	2軍事・防衛	現存。「大島砲台跡」として2018.9.10に埋蔵文化財包蔵地とした
258	大島対空監視哨(聴音壕)	宗像市	大島	公有地	2軍事・防衛	藪の中に現存
259	筑前大島防備衛所	宗像市	大島	不明	2軍事・防衛	
260	津和瀬砲台	宗像市	大島	公有地	2軍事・防衛	遺構の保存状態良好。「津和瀬砲台跡」として2018.9.10に埋蔵文化財包蔵地とした
261	地島砲台	宗像市	地島	確認中	2軍事・防衛	現存
262	沖ノ島砲台	宗像市	沖ノ島	私有地	2軍事・防衛	現存
263	沖ノ島防備衛所	宗像市	沖ノ島	私有地	2軍事・防衛	
264	沖ノ島対空監視哨	宗像市	沖ノ島	私有地	2軍事・防衛	未確認
265	野坂の凱旋門	宗像市	野坂(野坂神社)	私有地	8その他	参道を挟み2本の門柱が現存
266	国民勤労訓練所	宗像市	江口沖ノ原	公・私有地	1政治・行政	市立玄海小中学校
267	防空壕	宗像市	鐘崎	公有地	5居住	消滅
268	さつき松原の松脂採取の松	宗像市	田野・上八	公有地	3生産	現存
269	上西郷航空廠	福津市	上西郷	私有地	1政治・行政	西郷川沿いに、かつて架けられていた引込線のコンクリート部が一部現存している
270	福岡対空監視哨	福津市	福岡手光冠	公・私有地	2軍事・防衛	詳細位置不明
271	高宮山の竪穴陣地	福津市	畦町	私有地	2軍事・防衛	横穴2基、竪穴1基の遺構が現存
272	津屋崎飛行場	福津市	津屋崎	公・私有地	2軍事・防衛	飛行場の形が、現在の区画に一部残る
273	東郷公園海岸防空監視哨	福津市	(渡半島)	不明	2軍事・防衛	詳細位置不明
274	渡の津屋崎陣地	福津市	渡	私有地	2軍事・防衛	横穴数基の遺構が現存
275	津屋崎の陸軍海岸監視哨	福津市	津屋崎		2軍事・防衛	
276	緑町松林の松脂採取の松	福津市	西福岡	公有地	3生産	「養生ヶ浦」の碑の近くに「松脂採取跡の傷」と書いた木標がある
277	第三百三十連隊本部	古賀市	新久保1丁目	公有地(市)	1政治・行政	現在は文化財収蔵庫
278	第三百五十一師団司令部	古賀市	米多比	公有地(市)	1政治・行政	現在小野小学校

内容(年代・由来等)	文献
昭和20年(1945)4～5月に若松から福岡に至る海岸防備のために師団が展開され、宗像市赤間陵敵寺の正法寺に師団司令部を置き、近くの高樹山に大規模な地下壕を掘って作戦を練った	686
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
照空陣地跡。平成2～3年に圃場整備事業に先立って調査された	109
無線塔や配水池等の北西丘陵上に、軍道らしき跡と円形や方形の壕及び交通壕とされる掘り込みが見られる	松尾氏
過去の聞き取りで、軍部隊が訓練で陣地を構築したという話があった。丘陵上に直径約2mの円形土坑と、そこから約100m離れた位置で斜面を造成して造られた土塁に囲まれた平地があり、この二つの遺構を結ぶ交通壕がある。防空関連の遺構か	
東西方向の尾根及びその南斜面に円形や方形の壕及び交通壕らしき掘り込みが見られる	松尾氏
昭和17年4月に聴測陣地、同19年6月に照空陣地が構築された。JR城山トンネルの南にあり、軍道や円形壕が遺存する	松尾氏
田野の妙見バス停南側丘陵上に、円形・方形の壕などが残る	松尾氏
神湊の港の西側にある丘陵上の一の岳周辺に壕がいくつか存する	B・松尾氏
旧岬村鐘崎の深浜海岸一帯が高射砲実弾射撃場となり、連日訓練が行われた。北九州地区へ飛来した米軍機に射撃していた。兵舎もあったが、戦後にそれを改造して住居にしたものもあった	581
島の北側、岩瀬の南西約700m、標高120m付近にあり、昭和10年(1935)5月着工、同11年(1936)11月に竣工。45式15糎加農の砲座4基、弾薬庫4基、観測所、連絡壕、軍道、井戸、電灯所(発電所)、掩灯所(射光機格納庫)、射光機座などがかなり良好な状態で遺存する。円弧状に配置された砲座は4基とも径7.9m、中央部径4.2mの円形で、深さは1.5m。対称の位置に階段が付く。観測所は砲座4基の近くにあり、北側に視界が開けた指揮室中央に98式砲台鏡を設置していた円柱が残る。観測所の下部には東西に出入り口を有する2・3号砲台弾薬庫がある。その東側には一辺10cmの「樹高整理杭」がある。照明所(照明座)には150糎射光機が配備されるが、台地突端部の跡地には「小島」・「沖ノ島」の方向を示す標柱がある。当地には下関重砲兵連隊第2大隊第6中隊がいた。なお、現在、砲台周辺は公園化され、駐車場広場には「日本海海戦・戦死者慰霊碑」がある。砲台群から西南に少し離れて聴音壕がある。また、宗像神社境内の一部である遺構下の海岸部には潮位測定用のコンクリート製水尺があり、付近に海底線設備も想定される。さらに、島東部の海上保安庁の電波塔が設置された山には補助観測所の井戸等の遺構がある	72・109・519
第56軍の担任部隊(第145師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。大島砲台に向かう軍道の途中にあり、主に地島及び京泊方向を監視した(敵機の早期発見のために直轄対空監視哨が設置される)。近くには「防四〇」の境界標がある。コンクリート造りで外径393cm、内径316cm、深さは現状で200cmを測り、長道遺跡(筑紫野市)で記録されたものと同一タイプである	109
島の西北部、大島灯台の南側丘陵上に防備衛所があった。旧海軍の「筑前大島派遣隊」(アジア歴史資料センター C08011400600)によると「見張所・聴音室、電信室、洞窟、炊事所・浴室、糧食庫、兵舎、発電機室(揚水)」等が図示されるが、現地ではコンクリート構造物やコンクリート基礎、窪地などが残っている。対馬警備隊筑前大島派遣隊が配置され、水中聴音機3基を装備した	松尾氏
大島の西沿岸部にある洞窟砲台である。地下式穹窿砲台2基、附属地下壕2基、作業場跡等が遺存する。洞窟式の砲台は1基は残りがよく、コンクリートの厚さ50cm。他の1基は落石が多く、開口部の隣にコンクリート造りの枒がある。本土決戦準備のため昭和20年(1945)に構築された。45式15糎加農2門は大島砲台から移設したが、試射直前に終戦となった。洞窟の入口側の谷頭部分に構築段階に作業場としたらしい広場があり、セメントの塊や玉砂利などが残る。遺構の保存状態は全体としてはほぼ良好で、砲台の構築過程が分かる。なお、津和瀬集落の南方、耳鐘鼻に近い方の丘陵上において、この砲台を構築する前に最初に工事を行ってのち放棄した洞窟が遺存するという	109・池田氏・松尾氏
遠見山山腹に地島守備隊(砲兵隊)の陣地跡あり。水槽、地下壕跡あり。昭和20年2月に大島の15糎加農2門を移設しようとして工事を開始したが、地質不良により工事中止。その後、野砲2門が配備された	B・池田氏
沖ノ島では、陸軍が昭和12年(1937)6月に砲台築城に着工、同15年(1940)3月竣工し、下関重砲兵第6連隊第7中隊が配備されたとされる。第1砲座は島の東北部、白岳の尾根上に構築され、砲座は外径6.6m、コの字形突出部2か所が対称配置される。砲台弾薬庫は砲座の西側斜面に構築される。第2砲座は島西部の高台に構築し、第1砲座と同じく砲座は外径6.6mで、コの字形突出部2か所が対称配置される。この第1・第2砲座には試製15糎連装加農2基が設置された。観測所は第1砲座の西側尾根上と第2砲座の東側尾根上にそれぞれ構築され、内径4.1mの円形基礎が残る。他に弾薬支庫(地下式鉄筋コンクリート造で、幅7m、奥行き18m、高さ4.75mの蒲鉾形天井の空間に、幅2.7m、長さ7.7mの入口部が取り付く。空間内部には3部屋に区画された区画がある)、兵舎らしき建物群(基礎コンクリートと石垣が残る)、掩灯所(島の北西側と北東側にあり、地下式鉄筋コンクリート造で幅5m、奥行き6.55mの空間に、幅3m、奥行き4mの部屋を構築している)が確認されている。軍道は黄金谷の西側を北に伸び、黄金谷側には石垣を組んで、その上に木製電柱の基礎が残る。照明所(射光機座)と思われる場所には「大島西端方向」・「対馬南端方向」などと刻まれた標柱4本がある。昭和20年8月上旬、本土決戦準備に伴う備砲転用のため撤収し、火砲・弾薬とも博多港に到着した時に終戦となった。また、沖ノ島には、陸軍の砲台のほかに海軍の防備衛所が設けられた	33・67・72・109・111
「沖ノ島派遣隊」(アジア歴史資料センター C08011400400)によると、島の南側に衛所、兵員室、発電機室等が建設され、潜水艦探知のため水中聴音機6基を装備した。対馬警備隊沖ノ島派遣隊が配置された。遺構は未確認で所在不明	
敵機の早期発見のために直轄対空監視哨が設置される	109
野坂神社境内にあり。石柱2本が残る	池田氏
厚生省の外郭団体により神ノ原地区の桑園33haが強制買収されて建設された。終戦後は労働省所管の職業補導協会となり、県営に移管されてのち昭和27年(1952)に福岡県職業補導所として香椎に移転した	580
昭和20年(1945)8月、岬公民館講堂横にコ字形の全長100mに及ぶ大防空壕が掘られた。壕内は頑丈な松材が組まれた	42
さつき松原の松林の中に、松脂を採取したと思われる痕跡を有するクロマツが5本ほど見られる。周辺はやや若い松が多い中で老木が疎らにある	
陸軍航空隊大刀洗航空補給廠の支所(大阪陸軍航空補給福岡支廠福岡出張所)が昭和18年(1943)8月から同19年(1944)春の間に造られた。田・畑・山林の約100町歩が買収され、弾薬庫・作業舎・隊舎・事務所・従業員宿舎が建設された。その跡地は現在の福岡町総合運動公園(なまずの郷)の南側一帯の田畑で、引込線終点のプラットフォームの一部が残されている(文献666のP691写真)。さらに物資貯蔵庫(黄色塗料庫)の一部が農業用倉庫として3棟残る。また陸軍用地の境界標石が残る	109・652・666
第56軍の担任部隊(第351師団)の警備地域に設置され、主に福岡・古賀方向を監視した(敵機早期発見のために直轄対空監視哨が設置される)	109
昭和20年5月23日の第三次兵備により第351師団が編成され、古賀の小野村付近を司令部とし、隷下の歩兵第328連隊は西郷川の北側に配置された。高宮陣地を構築したのはこの連隊と思われる。高宮山(標高111m)の中腹に南～東を向いた横穴(地下壕)3基が築かれており、そのうち1基の上方には排気口と思われる堅穴が穿たれている。15糎榴弾砲配備地の一つとされる(福津市高宮陣地)	109
国防訓練場としての陸軍の特設の簡易な飛行場。特攻基地でもあった。昭和19年(1944)12月に開場した[文献44のp103]	42-p267, 44・109
第56軍の担任部隊(第351師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。主に磯崎鼻方向を監視した	109
7糎加農(砲)配備地の一つとされる(福津市津屋崎陣地)。東郷公園の所在する渡半島大峰山山腹に設置された。	109
日露戦争に際して陸軍が第12師団に設置したもの	111
「ふくつの海岸通り」の海側にある緑町松林の中に、松脂を採取した痕跡を有する松が5本ほど見られる。そのうちの1本にはX状交差の傷が残っている	
昭和20年7月に久保に置かれた。「古賀町誌」によると古賀国民学校とある(文献109)。「赤城兵団の師団司令部が小野国民学校に、第1大隊が福岡国民学校、第3大隊が古賀国民学校、噴射推進部隊(ロケット)が青柳国民学校におかれた。」(文献585)	109-p251, 585-p459
第351師団司令部は米多比の小野国民学校に置かれ、後に山麓部に移動予定であった。他には清滝岩が谷・小谷の登り口・清滝飼育所・清滝寺・石原陽徳山・天降宮・購買店裏倉庫、そのほか各家の納屋や倉庫に駐屯した(文献60)。師団長の宿舎は上米多比の香山園(現興山園)にあった(文献123)。8月15日、福岡国民学校で師団の兵棋演習がありここで終戦を迎え、11月まで福岡で残務整理を行う(文献109)	60・109-p251, 123-4章 p4～5・6章 p43

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
279	第三百五十一師団特別噴進砲部隊本部	古賀市	青柳	公有地(市)	1政治・行政	現在青柳小学校
280	傷痍軍人福岡療養所	古賀市	千鳥1丁目	未確認	1政治・行政	現国立病院機構福岡東医療センターほか
281	小倉陸軍造兵廠古賀射撃場	古賀市	天神7丁目	公有地	2軍事・防衛	古賀中学校ののち古賀西小学校となる
282	砲兵陣地	古賀市	筵内	未確認	2軍事・防衛	範囲不明
283	飛行場	古賀市	前田橋(JR鉄橋下)	未確認	2軍事・防衛	範囲不明 現在宅地化が進む
284	第三百五十一師団特別噴進砲部隊観測所	古賀市	青柳	未確認	2軍事・防衛	詳細位置不明
285	九州電波監視所	古賀市	筵内	未確認	2軍事・防衛	範囲不明
286	野砲陣地	古賀市	谷山	未確認	2軍事・防衛	詳細位置不明
287	高射砲陣地	古賀市	天神(古賀西小学校隣地・玄海国定公園内)	未確認	2軍事・防衛	詳細位置不明
288	射撃訓練場	古賀市	小山田	未確認	2軍事・防衛	詳細位置不明
289	射撃訓練場	古賀市	薦野(山ノ神堤)	未確認	2軍事・防衛	
290	射撃訓練場	古賀市	米多比(飛池付近)	未確認	2軍事・防衛	詳細位置不明
291	高千穂製紙	古賀市	(詳細地番不明)	私有地	3生産	現在廃業、跡地は宅地化
292	戦闘機墜落跡	古賀市	薦野898-1	未確認	4戦闘地・戦場	未確認
293	兵舎	古賀市	米多比	未確認	5居住	詳細位置不明
294	季節保育所	古賀市	薦野(清滝寺)	私有地	8その他	寺院は同地に現存
295	季節保育所	古賀市	米多比	未確認	8その他	詳細位置不明
296	防空壕(小野小学校?)	古賀市	薦野	未確認	5居住	詳細位置不明
297	防空壕(城ノ山)	古賀市	薦野	未確認	5居住	詳細位置不明
298	防空壕(石原区)	古賀市	薦野	未確認	5居住	詳細位置不明
299	防空壕(座頭転し)	古賀市	葉王寺	未確認	5居住	詳細位置不明
300	松脂採取地	古賀市		未確認	3生産	
301	松脂採取地	古賀市		未確認	3生産	
302	松脂採取地	古賀市		未確認	3生産	
303	相島陣地	糟屋郡新宮町	大字相島内	公有地	2軍事・防衛	野砲等の設置痕などは現地未確認で不明。 島内の古老からの聞き取りでは文献の記載とはほぼ一致する
304	磯崎鼻海岸防空監視哨	糟屋郡新宮町	磯崎鼻	私有地	2軍事・防衛	未確認
305	久原砲兵陣地	糟屋郡久山町	久原	不明	2軍事・防衛	所在地不明
306	山田砲兵陣地	糟屋郡久山町	山田藤河	不明	2軍事・防衛	所在地不明
307	第五十七師団司令部	糟屋郡篠栗町	大字篠栗5026	公有地	1政治・行政	消滅
308	野砲兵第五十七連隊第二中隊陣地	糟屋郡篠栗町	乙犬	不明	2軍事・防衛	所在地不明
309	第五十七師団関係陣地	糟屋郡篠栗町	高田	不明	2軍事・防衛	所在地不明。工業団地開発により、消滅か
310	歩兵第百三十二連隊陣地	糟屋郡粕屋町	大隈	私有地	2軍事・防衛	現存
311	御用水(井戸)	糟屋郡粕屋町	長者原	私有地	8その他	現存
312	海軍燃料廠採炭部 新原採炭所本部(新原公園) 附 萩尾善次郎銅像、海軍燃料廠第四坑表札、海軍炭鉱創業記念碑道標	糟屋郡須恵町	大字新原170番地1	公有地(町)	3生産	平成25年(2013)4月1日、町史跡に指定
313	博多湾鉄道	糟屋郡須恵町	ほか	私有地	7交通	JR香椎線として現存
314	旧志免鉱業所堅坑槽	糟屋郡志免町	志免495-3	公有地	3生産	総合福祉施設(シーメイト)内に現存

内容(年代・由来等)	文献
青柳には師団の特別噴進砲部隊(Fu)の本部が青柳国民学校に置かれた(53)。赤城兵団の師団司令部が小野国民学校に、第1大隊が福岡国民学校、第3大隊が古賀国民学校、噴射推進部隊(ロケット)が青柳国民学校におかれた。(文献585)	109-p252、585-p459
昭和13年(1938)12月開設。戦後は福岡療養所と改称。昭和37年(1962)、福岡療養所・清光園・福寿園合併により福岡東病院となる	585-p300/p806
小倉造兵廠の射撃場が古賀にできた(文献585の巻末「古賀町歴史年表」の昭和19年[1944]の項に記載あり)	585-p810
今の浄水場の東一帯の山を茶屋の山という。明治・大正時代には、ここが軍隊の大演習の砲兵陣地になった	586
大正5年(1916)11月に陸軍特別大演習が行われた。大正天皇は粕屋町長者原より視察、糟屋農学校で講評を行った。このため、前田橋南側に北軍飛行場が作られ、立川飛行場から飛んできた複葉飛行機が参加している	588
青柳尾東山には砲兵の観測所の記載がある	109-p252
茶屋の山の西側道路脇にあり、九州全域の電波を調べていた。鉄塔電線が張り巡らされ所員の住宅も立並んでいたが、戦後素早く取り壊された	587
	123
古賀西小学校横の松林に高射砲陣地が作られた。砲台跡地は海水浴場の中央部付近で、戦時中は防空監視哨もあった。戦後は留学生寮が作られたが、今は鉄線で囲まれている	588-p182/p184
現役、除隊の軍人が当時30~40人ほどいたので小山田の瀬戸で訓練場を作った。在郷軍人会の会長・副会長は平和台の連隊本部に赴き1人3発宛の実弾をもらいうけた。訓練当日は連隊本部から納富中佐が来賓で来られた。訓練後は空弾を数えて連隊本部まで返品に行った	60-p414
赤城部隊により山ノ神の堤で鉄砲の実弾訓練を受けた	60-p442
在郷軍人により、地下約6尺掘ってコンクリートを張り、3か所ほど射場が作られた。戦後しばらくはそのままだとされていたが、壊されて畑に戻された	123-4章 p36
昭和12年(1937)操業開始。古賀国民学校の男子生徒が学徒挺身隊として送られる	585-p458
昭和12年(1937)11月30日、訓練飛行のため福岡方面に向かっていた大分県佐伯基地所属の九〇式艦上戦闘機の編隊のうち1機が墜落。軍からは事故後の手当てなどはなかったという	60-p432
兵舎は立木を柱とした簡便なもの。戦後は夏ミカの植栽が行われている	123
文献60のp407	60
建物を夜学校に利用。建物は買収され個人宅になる	123-4章 p37
空襲警報が出れば学校用に掘られた防空壕(今の林田のところに掘られていた)に避難していた	60-p434
赤城部隊が城ノ山の裏側に防空壕を掘っていた	60-p442
防空壕は区民広場・小路小路・田中の阿部政夫宅にあったという	60-p447
葉王寺の座頭転しの所で竹山に防空壕を掘りに出向いた	60-p457
文献60のp434	60
文献58のp187	58
文献59のp133	59
第56軍の担任部隊(第351師団)の作戦計画において、敵上陸を水際で阻止するとともに将来の海上攻勢のための拠点とされた。主に福岡及び志賀島方向の敵を砲撃するため砲兵小隊2、工兵小隊、師団分隊が置かれ、15種加農2門が設置予定されていたが、第351師団戦史資料(防衛庁防衛研究所資料)には「築城作業進捗状況表」に「野砲(相島)」(2)とあり、計画変更で10.5種野砲に変更になったようである	109・(防衛庁防衛研究所資料)
第56軍の担任部隊(第351師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。主に津屋崎及び志賀島方向を監視した。砲兵隊と加農が置かれていたようである。湊区在住者から、子どもの頃防空壕跡で遊んだことがある、という話を聞いた	109・「続宗像郡誌第19巻 宗像考古刊行会」
重砲陣地で、地下式穹窿であつたらしい。久山町久原の下久原地区にあるらしい	671
重砲陣地	639
篠栗小学校に置かれた。昭和20年(1945)5月~終戦直後	聞き取り調査 / 戦史資料
丘陵地に地下壕あり。大隈区有文書に部隊名が記載される	池田氏教示
九大演習林内にあり。地下壕跡。兵站関係か。演習林内に存在する炭坑の坑道を利用したものか	池田氏・福島日出海氏教示
昭和20年3月31日に内地に転進してきた第57師団歩兵第132連隊(昭和16年7月に秋田で臨時編成)の陣地跡で、粕屋町北東部の丸山(標高86.4m)、西尾山(同約50m)・焼地山(同約70m)の3山に、地下壕、個人用掩体、監視哨などの遺構が残る。ここを調査した池田拓氏によると、丸山で73基、西尾山で25基、焼地山で22基の土坑や横穴を確認した。これらは丸山・西尾山の南、焼地山の北を西流する多々良川の谷筋を防御するもので、丸山の南斜面にはコンクリート製監視哨が残る。太平洋戦争末期の構築で、地元区有文書(複写は粕屋町歴史資料館保管)に記載あり	池田氏教示
大正5年(1916)11月11~14日に行われた陸軍特別大演習で大正天皇の飲用に供した井戸。「御用水」の碑が建つ	548-p93
明治21年(1888)に海軍予備炭山に指定されてから、昭和39年(1964)に志免炭業所が閉山するまで、開坑から閉山まで唯一国営の炭鉱がこの地にあった。国内で良質の石炭を探していた海軍は、有事の際に採掘する炭山として、新原の炭鉱を明治21年に海軍予備炭山に指定し新原採炭所を置いた。のち海軍探炭所、海軍燃料廠探炭部、戦後は国鉄志免炭業所と名称を変更しながら採炭を続けた。新原公園には海軍炭鉱に関する資料が集められており、海軍炭鉱の資料が現存する唯一の場所となっている。 ①海軍炭鉱創業記念碑(昭和13年[1938])：海軍炭鉱の創業50周年を記念するもので、須恵村、宇美村、志免村、仲原村の有志が発起人となり建立した。中央の文字は、当時の海軍大臣米内光政によるものである。山野石材の施工で、石材は徳山石(花崗岩)である。 ②海軍炭鉱創業記念史碑(昭和13年[1938])：海軍炭坑の沿革や歴代役員を記した石碑である。 ③第三坑の坑口柵(明治25年[1892])：宇美町桜原にあった海軍炭鉱第3坑の坑口柵(花崗岩製)を移設している。 ④海軍技師萩尾善次郎像：海軍技師萩尾善次郎氏の像。現在は上半身コンクリート、顔の部分のみ鉄製の像となっている。 ⑤海軍炭鉱第2坑堅坑址の道標(昭和27年[1952])：新原の昭元町に位置していた海軍炭鉱第2坑の堅坑付近に建てられた道標。現在は公園内に移築。 ⑥海軍炭鉱創業記念碑誘導標識(昭和13年[1938])：新原公園入口に立てられた石碑。 ⑦鎮魂碑(大正2年[1913])：公務殉難者の慰霊碑。昭和13年(1938)に移設。 ⑧男鳥新瀧池記念碑 ⑨石碑 ⑩井戸：レンガ積の井戸柵が保存されている。詳細は不明。 その他、信仰の対象となっているものに、⑪山神社：海軍炭鉱第三坑(宇美町桜原)で祀っていたものを昭和40年[1965]に合祀。⑫鳥居：(大正8年[1919])あり。 【附】 ① 萩尾善次郎銅像は、本来、公園内に設置されていたものであるが、戦争供出の際にコンクリート(顔面鉄製)像に替えられている。個人で大事に保管されており、現在は歴史民俗資料館で寄託を受けている。 ②海軍燃料廠第四坑表札は、第四坑本部に設置されていたものである。 ③道標は、新原の4つ角に現在立っており、創業記念碑への道標となっている	14・550・598・605
明治21年(1888)に開坑した海軍炭鉱から採掘された石炭を西戸崎港まで運んだ鉄道。博多湾鉄道からのちに国鉄、JRとなる	
旧海軍が艦船の燃料にする石炭を採掘するため昭和16~18年(1941~1943)に建てた。地上47.6mを測る。設計者は猪俣昇。戦後は国鉄志免炭業所となり、昭和39年(1964)に閉山した。平成21年(2009)12月8日に重要文化財指定	98・597・671

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
315	志免鉱業所跡堅坑および第八坑関連地区	糟屋郡志免町	大字志免715番12他	公有地	3生産	総合福祉施設(シーメイト)内に現存
316	立花山対空監視哨	新宮町、福岡市、久山町		公有地	2軍事・防衛	未確認
317	香椎軍需品集積所松原倉庫	福岡市	東区土井・香椎ほか		2軍事・防衛	
318	香住ヶ丘航空情報隊	福岡市	東区香住ヶ丘2丁目(向山公園)		2軍事・防衛	公園頂部の展望台
319	御島崎地下壕	福岡市	東区香椎御島崎		2軍事・防衛	
320	雁ノ巣(福岡第一)飛行場	福岡市	東区奈多 雁ノ巣レクリエーションセンター		2軍事・防衛	
321	西戸崎防空監視哨	福岡市	東区西戸崎		2軍事・防衛	
322	西戸崎飛行場〔博多航空隊〕	福岡市	東区西戸崎	公有地(市)	2軍事・防衛	
323	西戸崎炭坑	福岡市	東区西戸崎(ゴルフ場)	私有地	3生産	
324	歩兵第三百二十二連隊陣地	福岡市	東区松崎		2軍事・防衛	
325	志賀島砲兵隊陣地(?)	福岡市	東区志賀島		2軍事・防衛	
326	志賀島海岸防空監視哨	福岡市	東区志賀島		2軍事・防衛	
327	九州飛行機香椎工場	福岡市	東区千早2・3・6丁目(香椎団地)		3生産	
328	海軍名島(多々良)水上飛行場(福岡第二飛行場)	福岡市	東区名島		2軍事・防衛	
329	福岡俘虜収容所第1分所:福岡箱崎	福岡市	東区箱崎新建		5居住	
330	福岡俘虜収容所第1分所:福岡多々良	福岡市	東区多々良		5居住	
331	箱崎捕虜収容所	福岡市	東区宮松4丁目(箱崎中学校)	公有地(市)	5居住	
332	福岡市立動物園	福岡市	東区馬出1丁目(馬出小学校)	公有地(市)	8その他	
333	称名寺博多大仏	福岡市	東区馬出4丁目		8その他	
334	席田飛行場	福岡市	博多区席田、月隈(福岡空港)		2軍事・防衛	
335	席田飛行場高射砲陣地	福岡市	博多区東平尾2丁目		2軍事・防衛	消滅
336	東平尾公園弾薬庫	福岡市	博多区東平尾公園2丁目		2軍事・防衛	
337	陸軍席田飛行場弾薬庫(米軍倉庫)	福岡市	博多区下月隈		2軍事・防衛	
338	九州兵器・九州飛行機〔渡辺鉄工所工場〕	福岡市	博多区相生町1丁目・春日市日の出町・大和町		3生産	現在、陸上自衛隊福岡駐屯地第四師団司令部。敷地内には九州飛行機当時の建物(鉄骨スレート鋸屋根)が1棟残る
339	福岡俘虜収容所第1分所:福岡席田	福岡市	博多区席田		5居住	
340	席田飛行場捕虜収容所	福岡市	博多区東平尾3丁目		5居住	現存しない
341	十五銀行福岡支店	福岡市	博多区川端町3丁目博多座		5居住	消滅
342	博多小学校平和祈念室	福岡市	博多区奈良屋町1丁目	公有地(市)	8その他	
343	防空壕(立石額縁店)	福岡市	博多区大博町4	私有地	5居住	
344	防空壕(深見かもがねビル)	福岡市	博多区冷泉町8	私有地	5居住	
345	福岡歩兵第二十四連隊・衛戍病院(陸軍病院)	福岡市	中央区城内	公有地(市)	1政治・行政	
346	陸軍西部軍司令部庁舎	福岡市	中央区城内(裁判所合同庁舎周辺)	公有地(市)	1政治・行政	

内容(年代・由来等)	文献
旧海軍が艦船の燃料にする石炭を採掘するため、明治22年(1889)～昭和39年(1964)に操業した。上部施設は失われているが、堅坑と斜坑という当時の採炭方式と、採掘から選炭までの一連の流れを伝える良好な遺構である。平成22年(2010)3月24日県史跡に指定された	51・596・597
第56軍の担任部隊(第351師団)の警備地域において設置された。主に古賀・新宮及び志賀島方向を監視した	109
昭和17年(1942)7月に博多臨港線が開通し、香椎西部操車場・多々良信号所・博多港駅などができ、18年12月に香椎西部前に松原倉庫ができて使用を開始した、とされる。若宮・舞松原に需品倉庫、土井と八田に糧秣廠・衛生材料廠倉庫があった。敗戦後は米軍が接収した。現在は衛生材料廠倉庫1棟が残る	44
戦争末期(昭和19年[1944]11月にはあった)、香住ヶ丘の向山公園の所にレーダー探知の部隊である航空情報隊(電波探知隊)があった。丘陵頂部にある展望台の基礎コンクリートはあるいは情報隊の時のものかもしれない	44
丘陵地に数か所の地下壕跡あり。1基は残存する	池田氏
昭和10年(1935)1月に着工、翌昭和11年(1936)6月に民間航空路の本格的飛行場として開場した。長さ600m、幅30mの滑走路があり、昭和16年(1941)8月には陸軍の施設となっていたらしい。雁ノ巣レクリエーションセンターの旧正門の所に記念碑があり、水上飛行機用の80mの斜路が残る。戦後はアメリカ空軍のプアディ基地と名付けられて使用されていたが、昭和47年に全面返還されて後、雁ノ巣レクリエーションセンターほかの施設として利用されている	30・44・671
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
博多航空隊は、昭和15年(1940)11月15日に水陸両用機を用いる部隊として開隊する。海ノ中道海浜公園管理センター本館ビル東側に昭和60年(1985)12月建立の記念碑があり、また水上飛行機用斜路が海の中道渡船場の東100mの所にある。さらに東側300mほどの所にあるヨットハーバー防波堤の一部が旧軍時代のものであるという。さらにJR海ノ中道駅の前に航空隊敷地の外壁が残る。そして、海の中道青少年海の家の敷地内の松林の中には無蓋の掩体30数基があり、一部半壊状態のものもあるもの、多くはかなり良好な状態で遺存している。現在の園路は当時の誘導路を利用していると思われる。地下指揮所若しくは通信所は福岡市が防災のために発泡セメントを注入して埋めた	30・44
海軍炭鉱として昭和12年(1937)に操業開始し、同39年(1964)に閉山した。ゴルフ場内に「西戸崎炭硯卸坑口跡」石柱と採炭殉職者慰霊碑が建つ(昭和39年[1964]建立)	44
歩兵第132連隊で、陣ノ越山一帯に野戦陣地跡	池田氏
志賀島小学校の裏手の山腹に兵舎跡がある	池田氏
第56軍の担任部隊(第57師団)の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。主に磯崎鼻及び西浦崎方向を監視した	109
海軍指定工場として昭和17年(1942)創業の軍需工場で、対潜哨戒機「東海」を生産した。現在は工場と海を隔っていた岸壁の一部が残る。昭和20年(1945)には疎開して松崎に覆土工半地下工場5か所、香椎にトンネル式工場12か所、下和白に丘斜面トンネル式工場2か所が設置された	44
名島飛行場は昭和4年に日本航空輸送(株)の福岡支所として開設されたもの。現地に飛行場跡の碑がある。その後の海軍の特設の簡易な飛行場としての多々良飛行場は特攻基地で、こちらが第一飛行場となったことから、名島は福岡第二飛行場となった。[文献44のp103]。1930年撮影の写真あり。『戦史叢書57』(文献671)のp489にある「特攻基地配置図(機密佐世保鎮守府命令作第90号別図(昭和20年7月25日))」の中に「多々良」が中練・機練特攻基地として挙げられている	44・671
昭和20年(1945)1月21日に福岡市大字席田から移転してくる。終戦時の収容人員は381人	C
昭和18年(1943)11月20日に熊本市健軍町字三郎塚から移転してくる。同19年4月17日に福岡市大字席田に移転する	C
太平洋戦争末期に現在の箱崎中学校の所に収容所があった。記録としては見られないとのこと(福岡俘虜収容所第1分所と同一の可能性あり)	44
昭和18年(1933)8月に昭和天皇即位記念として東公園に開園した旧御大典記念福岡市動物園の正門が、馬出小学校裏門に保存されている。門柱は象の頭鼻をかたどった像が埋め込まれている。旧動物園は広さ5,096坪。アメリカ軍の空襲を懸念して昭和19年(1944)5月29日に廃園し、猛獣類は射殺された	44
明治45年(1912)、称名寺門徒衆の協力のもと古鏡・古銭を集めて土居町の磯野七平鑄工所で大仏が鑄造された。原型は博多仏師の高田又七郎であったが、昭和17年(1942)7月、金属類回収令により陸軍に供出された(大仏は現存しないが、その台座と白毫のみが残る)	44
昭和19年(1944)2月、席田耕地と呼ぶ福岡市田屋・菰田・青木新屋・久保田・東平尾新屋の5集落、137戸の強制収用と疎開を伴って約254万㎡を接収し建設される。同20年(1945)8月の終戦時には2本の滑走路のうち1本が舗装して完成、周囲に兵舎5棟、整備工場が完成、兵員5,000人が配置されていた。戦後、同20年(1945)11月29日にアメリカ軍に接収され、九州飛行機工場、小倉造兵廠春日製造所とともに板付基地として再編された。同47年(1972)に西側の米軍専用部分を除いて滑走路などは日米共同使用となる	44
席田会館が建つ天王山公園にあった	44
現在の東平尾公園の博多の森陸上競技場近くにある坂瀬池湖畔に地下壕があり、弾薬庫として使用された	池田氏
コンクリート造りの巨大なもので、北九州小倉の山田弾薬庫から弾薬が運ばれ、ここで弾薬の充填作業や保管がなされていたと思われる。戦後は1972年まで米軍に接収されていた。現在は農林水産省の倉庫の奥に位置する	671
明治36年(1903)創業の渡辺鉄工が母体。昭和5年(1930)に航空機工場を雑餉隈に新設して生産開始。昭和9年(1934)に本社を福岡市千代町から雑餉隈に移す(雑餉隈工場)。同12年(1937)大刀洗製作所を分離独立。同18年(1943)10月に飛行機部門を九州飛行機(約12万坪)、水中兵器部門を九州兵器(約4万坪)と改称。同19年(1944)4月1日に軍需省の福岡軍需管理部の管理下に入る(近くの小倉陸軍造兵廠春日製造所は約18万坪)。「震電」を生産したが実戦に使用されることはなかった。同20年4月には春日村小倉・大土居、大野村乙金、筑紫郡原田のセメント工場・筑紫神社務、三笠村吉木国民学校、糟屋郡須恵の多々良製作所、福岡市今津の三菱電機工場、山門郡瀬高町などへ疎開した。戦後、アメリカ軍が接収する	44・547・671ほか
1944年4月17日に福岡市東区多々良から移転してくる。1945年1月20日に福岡市東区箱崎へ移転する	C
長屋の兵舎で、500～600人の捕虜がいて、滑走路建設などに従事させていたらしい[昭和19年(1944)前後か。軍の記録には見えない]	44
昭和20年(1945)6月19日の福岡空襲の際に、地下室に避難した63人が焼死した。現地は博多座ビルの一部となり何も残らない(文献116巻末資料写真・拓本)	44・116
昭和20年(1945)6月19日の福岡空襲で焼け残ったもの奈良屋国民学校の工作室を切り取って平和祈念室とし、平成10年(1998)に統廃合で新設された博多小学校の一面に保存されている	44
約8畳の広さ。入口は49×63cm。今は1mほどが埋めてある。昭和16～20年(1941～1945)頃の構築か	44
壕は168×181cmで高さ145cm。入口は60×100cm。昭和16～20年(1941～1945)頃の構築か	44
明治19年(1886)6月、福岡城内三の丸に陸軍歩兵第24連隊本部が設置された。同17年7月に小倉城内の歩兵第14連隊内に新設されていた24連隊第1大隊が移転してきたものである。同21年12月には3個大隊が揃って連隊編制を完了する。三の丸東部には兵官が置かれ、西部は練兵場となった。本丸には同20年2月に連隊内の重病室が移ってきていたが、衛戍病院としての建物は同31年以降らしい。同41年(1908)2月には新設された第35旅団司令部庁舎が福岡城内に新築された。また昭和2年(1927)2月には福岡連隊区司令部庁舎が新築された。なお、福岡城跡の下の橋御門の虎口内部石垣に接して長さ3mほどのコンクリート塀があり、福岡24連隊などがあった時の敷地西縁を区切る塀の一部かもしれない	5・44・663、伊藤慎二氏教示
明治40年(1907)、第35旅団司令部設置。大正14年(1925)、第12旅団司令部設置、師団傘下に2個歩兵連隊を指揮。昭和15年(1940)8月、西部軍司令部設置。昭和17年(1942)頃、地下1階、地上2階の鉄筋コンクリート造の防空作戦室が完成する。その地下基礎が残る。俘虜収容所もこの地にあった。同20年(1945)1月、西部軍管区司令部、第16方面軍設置。同年6.20に第16方面軍は筑紫郡山家村(筑紫野市)に避難する。昭和38～39年に福岡高等裁判所庁舎改築に伴う事前調査が行われ、トレンチ内で溝やコンクリート基礎などが確認された。その後の鴻臚館跡の3次(S62～63)・17次(H11～12)・18次(H12～13)・19次(H13～14)・21次(H15～16)の調査において建物基礎や兵舎跡・焼土などが確認されている	44

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
347	福岡俘虜収容所本部事務所	福岡市	中央区城内		5居住	
348	浄念寺	福岡市	中央区大手門2丁目		5居住	
349	陸軍第6航空軍司令部 石垣・井戸	福岡市	中央区薬院・平尾		1政治・行政	現存
350	振武寮	福岡市	中央区薬院4丁目		5居住	消滅
351	陸軍省管轄地標石	福岡市	中央区薬院4丁目		1政治・行政	
352	西部軍司令部関係? マンホール蓋	福岡市	中央区警固1-1-7		1政治・行政	現存
353	営外練兵場	福岡市	中央区六本松草香江		2軍事・防衛	
354	輝国高射砲陣地	福岡市	中央区輝国1丁目		2軍事・防衛	消滅
355	小笹陣地	福岡市	中央区小笹2丁目		2軍事・防衛	
356	陸軍用地標柱石	福岡市	中央区小笹		2軍事・防衛	
357	鴻巣山射撃場	福岡市	中央区・南区(鴻巣山)		2軍事・防衛	
358	歩兵第百十七連隊陣地	福岡市	中央区・南区(鴻巣山)		2軍事・防衛	
359	鴻巣山対空監視哨	福岡市	中央区・南区(鴻巣山)		2軍事・防衛	
360	旧簗子小学校の赤レンガ塀	福岡市	中央区		4戦闘地・戦場	
361	福岡俘虜収容所本所	福岡市	中央区長浜		5居住	
362	赤坂俘虜収容所	福岡市	中央区赤坂		5居住	消滅
363	西南学院大学構内の松々に採取の松	福岡市	早良区西新6丁目	私有地	3生産	
364	長住東公園の境界標	福岡市	南区西長住1丁目		2軍事・防衛	
365	鹿助公園の境界標	福岡市	南区西長住2丁目		2軍事・防衛	
366	長住中央公園の境界標	福岡市	南区西長住5丁目		2軍事・防衛	
367	九大演習林内の松脂採取の松	福岡市	西区生の松原		3生産	
368	元寇防塁生の松原地区の陣地	福岡市	西区小戸5丁目(生の松原)		2軍事・防衛	
369	長垂のベグマタイト採掘地	福岡市	西区今宿		3生産	
370	横穴	福岡市	西区高祖山	私有地	2軍事・防衛	
371	飛行機格納庫外壁基礎	福岡市	西区周船寺	私有地	2軍事・防衛	
372	能古島の震洋基地	福岡市	西区能古島北浦		2軍事・防衛	
373	元岡飛行場 (福岡飛行訓練所)	福岡市	西区元岡、周船寺		2軍事・防衛	
374	福岡航空隊	福岡市	西区元岡、泉3丁目		2軍事・防衛	
375	西浦ノ崎海岸防空監視哨	福岡市	西区西浦		2軍事・防衛	
376	玄界島砲台	福岡市	西区玄界島		2軍事・防衛	
377	小呂島砲台	福岡市	西区小呂島		2軍事・防衛	現存
378	小呂島防空監視哨	福岡市	西区小呂島		2軍事・防衛	
379	福岡湾の陸軍海岸監視哨	福岡市			2軍事・防衛	
380	第三百十二師団本部	糸島市	志摩稲留(蓮照寺)		1政治・行政	
381	海上挺進隊特設五十二戦隊	糸島市	二丈深江、二丈吉井 (福吉小学校)	公有地(市)	2軍事・防衛	
382	グライダー滑走路	糸島市	長野字駒ノ頭		2軍事・防衛	
383	ベニヤボート集積場	糸島市	川付(長糸小学校)		2軍事・防衛	
384	深江監視所	糸島市	二丈松末		2軍事・防衛	不明
385	小富士海軍航空隊	糸島市	(旧志摩町)		2軍事・防衛	
386	工兵第十八大隊船舶部演習場	糸島市	志摩久家寺山地区		2軍事・防衛	不明

内容(年代・由来等)	文献
昭和18年(1943)1月に福岡城内の西部軍司令部内に開設される。その後、福岡俘虜収容所本所と改称され、同20年(1945)4月に中央高等青年学校(現福岡市中央区長浜)に移転した	663
境内防空壕において、昭和20年(1945)6月19日の空襲で11人が焼け死んだ	44
福岡中央高校敷地北側の石垣は第6航空軍駐留当時と同じもの。振武寮(特攻隊員収容)や仮設兵舎があったと思われる付近の九電記念体育館南側＝同弓道場西側に井戸枠と考えられるコンクリート管あり	伊藤慎二氏教示
特別攻撃隊員として出撃したものの、目的を達することができずに帰還した兵士を軟禁状態で収容した施設。境界標が残る。もと福岡女学校寄宿舎。旧九電記念体育館付近	44
西鉄南薬院バス停近くに「陸軍」と陰刻した標石9本を確認している	19.2012.11.28朝日新聞
志のぶビル前の路上のマンホール蓋は、おそらく西部軍司令部関係のものである	伊藤慎二氏教示
国道道路に沿う護国神社付近で、歩兵第24連隊が小規模集団での訓練のために使用した。広大な草原で約17万㎡あったという	44
現在は山の上ホテル手前の公園となり、何も無い。軍の記録には見えないとのこと	44
地下式掩蔽壕だが、詳細は不明	池田氏教示
平和中央公園にあり。陸軍用地の境界杭として設置されたもの	652
陸軍射撃場跡。境界石17基あり。一部敷地は復元可能か	池田氏教示
鴻巣山上に交通壕、掩壕等の遺構あり	池田氏教示
第56軍の担任部隊(第57師団)の警備地域において設置された。主に福岡市一円を監視した。鴻巣山は標高100.5m	109
24mを残して、平成29年(2017)6月に取り壊された。平成30年10月敷地内を試掘調査	
昭和18年(1943)1月に福岡城内の西部軍司令部内に開設された福岡俘虜収容所本部事務所が収容所本所と改称されてのち、同20年(1945)4月に中央高等青年学校(現福岡市中央区長浜)に移転した	663
読売福岡ビル敷地に俘虜収容所があった[現存しない][文献44のp89]	44
西南学院大学キャンパス内にあり。太平洋戦争末期に、軍用機の燃料用として松やにが採取されたが、その傷ついた松が約20本残っている。もとは黒田長政の命で植えられた百道松原の一画である。文献20によると10本がある	20.2017.8.16西日本新聞
陸軍二十四連隊の練兵場を区画していた境界標の石柱あり。	2018.12.5西日本新聞
「陸軍」と刻まれた石柱4本あり。陸軍二十四連隊の練兵場を区画していた境界標	2018.12.5西日本新聞
石柱15本あり。別の場所から移動したものらしい。	2018.12.5西日本新聞
2009年時点で28本、2018年現在で8本は確認(伊藤氏)	20
「元寇防塁」石塁の石積み背面に、スギ丸太にワイヤーをかけ大きな重石をしたアンカー状施設があり、これは第2次世界大戦終戦直前に、敵の上陸に備えた陣地の一部であろうとされる。当時の第57師団独立工兵第123大隊長の回想では、博多湾防備に際して石塁は対戦車壕として十分に通用するものであったことから石塁の補強を行うことになったという	112-662
明確な時期は不詳だが、戦時中に陸軍がリチウムを含む「含紅雲母ベグマタイト」を採掘していたといわれる。「長垂の含紅雲母ベグマタイト」岩脈は昭和9年(1934)1.22に国の天然記念物に指定された。また「長垂の含紅雲母ベグマタイト」鉱物標本311点は平成19年(2007)3.15に福岡市指定天然記念物に指定された	
頂上付近丘陵東側斜面(登山道沿い)に横穴が複数残存。軍施設と伝えられる	590
戦争末期の海軍基地であり、特攻艇を格納した壕から斜道を経て発進する斜路の遺構が、大潮の際に姿を現す。「戦史叢書57」(文獻671)のp489にある「特攻基地配置図(機密佐世保鎮守府命令作第90号別図(昭和20年7月25日))」の中に「残島」が震洋基地として挙げられている	44-671
昭和16年(1941)6月に完成した海軍の訓練飛行場で、本部事務所、寄宿舎、格納庫などがあった。飛行場は南北600m、東西500m。現在の元岡中学校の所に本部事務所があった	44-671
海軍福岡航空隊は、昭和18年(1943)11月より建設開始、同19年(1944)6月1日に泉地区に開隊する。今宿前原間の県道以北、瑞梅寺川を境として東は今宿横浜間の県道より西の地であった。滑走路はやや南北方向と東西方向のもの2本を持ち、各1,000mを超す長さであったが、戦争末期であり十分な整備はされなかったらしい。泉公園に昭和57年(1982)6月10日建立の「福岡海軍航空隊記念碑」がある。今山の西麓には飛行機格納庫の基礎の一部が残る。昭和20年(1945)8月に航空隊は解散となり、跡地も開拓されることとなった	44-688
第56軍の担任部隊の警備地域において、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。主に志賀島及び三瀬崎方向を監視した	109
昭和20年2月下旬に15cm加農2門を設置する工事が始まったものの、地質不良で別の場所に構築しようとしたが、5月下旬には神湊や波津へ移動したらしい。現地はあまり明確ではない、とのこと	B
壱岐要塞の範疇で、島の北端に陸海軍共同の主要塞が築かれた。昭和10年(1935)4月着工、同12年(1937)3月に竣工。壱岐要塞司令部と下関要塞大島砲台間には海底線が敷設され朝鮮海峡要塞系として連携できるようになっていた。旧海軍の「小呂島派遣隊」(アジア歴史資料センター C08011400500)によると、「発動機室(揚水)、兵舎、炊炊所・浴室・倉庫、水槽、発電機室、燃料庫、見張所・聴音室・電信室」等があげられている。陸軍の砲台跡4か所や弾薬庫跡、防空壕跡などが残り、砲台跡・弾薬庫跡などは遺存状態はよい。山間部にはまだほかにも戦時遺構が存するものと思われるが、現状は敷が深く確認が難しいものもある。砲台には45式15糎加農4門が据えられていたが、北崎、宮ノ浦砲台建設のため移転したまま終戦となった。砲台があったため島の集落も空襲を受けた	44-72-109-124
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	594-646
日露戦争に際して陸軍が第12師団に設置したもの	111
昭和20年(1945)5月23日の第三次兵備下命により、第16方面軍の第56軍に第312師団が久留米で編成され、前原地区隊は7月10日で一応の編成を終わった。その本部は火山(標高245m)山麓の蓮照寺であったと思われる(文献593のp965写真)	593
当初は深江の民家に分宿、後に福吉国民学校に移動する。講堂、裁縫室などを宿舎として利用する。隊長・川崎大尉は吉井下の奈良崎家、龍能中尉は長田家、石田少尉は内場家(福吉病院)に分宿。この隊所属の宇都宮少尉は戦後に福吉病院の娘と結婚し、後に二丈町長となる	137-p203
戦時中にグライダーの滑走路として切り開かれたものの、実際に飛ぶことはなかった	136-p99
100隻程度のベニヤボートが集積されていたとの証言あり。四式肉薄攻撃艇(マルレ)か?	77
日清・日露戦役の際に、深江片山の鼻にあった	676
昭和19年(1944)5.15に鹿児島海軍航空隊小富士分遣隊として発足、同年7.1に福岡航空隊(昭和19年6.1に糸島郡元岡村に開隊)の小富士分遣隊となる。同10.1に独立して小富士海軍航空隊となり第19練習連合航空隊に編入される。昭和20年(1945)3月1日に第22練習連合航空隊に編成替えとなる。花崗岩の境界標があり、いくつかは原位置で遺存し、遊離したものは地元(志摩小富士)の北山神社周辺に立て並べられている	21-44-594
陸軍第12師団工兵第18大隊が昭和8年(1933)以前に舟艇による上陸演習を行っていた。番宅(出張所)などの施設もあったと思われる。昭和16年(1941)初め頃、小浜に兵器集積所が開設された	594

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
387	竹ノ越山防空監視哨・聴音壕	糸島市	志摩岐志竹ノ越山山頂		2軍事・防衛	
388	小倉兵器補給廠小富士常駐班 (コンクリート基礎)	糸島市	志摩久家寺山地区		2軍事・防衛	
389	海軍玄界航空基地	糸島市	志摩船越、志摩岐志、二丈松末、(志摩岐志は不明)		2軍事・防衛	
390	同上 (船越)烹炊(ほうすい)所	糸島市	志摩久家		2軍事・防衛	現存
391	同上 (船越)食料貯蔵庫	糸島市	志摩久家		2軍事・防衛	
392	同上 関連機銃施設	糸島市	志摩久家字切嶽		2軍事・防衛	消滅
393	船越の陸軍海岸監視哨	糸島市	志摩船越		2軍事・防衛	
394	立石山海岸防空監視哨	糸島市	志摩芥屋立石山		2軍事・防衛	
395	海軍玄界航空基地((松末)レール)	糸島市	二丈松末		2軍事・防衛	現存
396	福吉防空監視哨	糸島市	二丈福井字水付		2軍事・防衛	
397	大入ドック(大入漁港)	糸島市	二丈福井(大入漁港)	公有地(市)	3生産	元々は12の区画(ドック)があったが、現在でも3枚の隔壁が残存する
398	雷山被災地	糸島市	蔵持、香力、有田		4戦闘地・戦場	
399	一貴山山中海軍機墜落地点	糸島市	二丈一貴山、二丈満吉山中		4戦闘地・戦場	詳細な場所は不明
400	防空壕(開古墳)	糸島市	志摩井田原		5居住	現存
401	防空壕(雷山国民学校裏山)	糸島市	香力		5居住	
402	防空壕(雷山村役場)	糸島市	蔵持		5居住	
403	防空壕	糸島市			5居住	
404	防空壕(香力)	糸島市			5居住	
405	防空壕(防空監視所)(高祖山)	糸島市	高祖字高祖城 国有無番地		5居住	現存
406	春日原飛行場	春日市			2軍事・防衛	
407	小倉陸軍造兵廠春日製造所	春日市	春日字駿河	公有地	3生産	基地及び公園内にコンクリート造の試射壕・弾薬壕が残る
408	陸軍用地境界標	春日市	原町3丁目	公有地	3生産	航空自衛隊に隣接する歩道上に現存
409	防空壕	春日市	春日原東町2丁目	私有地	5居住	未確認
410	防空壕	春日市	小倉1丁目	私有地	5居住	
411	大野村歩兵第十七連隊本部戦闘壕	大野城市	上大利字梅頭、春日字平田山		2軍事・防衛	消滅か?
412	大野村歩兵第十七連隊本部戦闘壕築造隊(烹炊所)	大野城市	牛頭花無尾		2軍事・防衛	消滅か?
413	野砲兵第五十七連隊	大野城市	大字上大利梅頭、谷蟹、釜蓋など		2軍事・防衛	消滅か?
414	独立照空第二十一大隊	大野城市	大字釜蓋字雉子ヶ尾		2軍事・防衛	消滅か?
415	戦車九十二部隊	大野城市	大字釜蓋		2軍事・防衛	消滅か?
416	野添遺跡6次調査(洞窟壕)	大野城市	大字上大利字梅頭		2軍事・防衛	消滅
417	本堂遺跡7次調査(洞窟壕)	大野城市	大字上大利字本堂		2軍事・防衛	消滅

内容(年代・由来等)	文献
県内18か所に開設された監視哨の一つは、昭和13年(1938)4~7月頃に竹ノ越山頂に設置されたと思われる。また、同18年(1943)には直径約3m、深さ約2mの円筒形の聴音壕が掘られた。現在の竹ノ越山頂(標高163m)には径3.5mほどの窪地があり、周囲に鉱滓煉瓦・セメント煉瓦の破片が散乱している。聴音壕の痕跡らしく思われる。文献646では監視哨の設置を前原署管内では芥屋・福吉・小呂島としている	21・109・119・594・646
寺山補給廠(小富士集積所)とも称し、昭和15年(1940)頃に大林組により建設が進められ、同16年(1941)初め頃には完成していたと思われる。寺山地区の補給廠の正門を入ると、事務所、衛兵所、守衛所、官舎、防火水槽(5か所?)、運動場があり、広い敷地内の山蔭には油を入れる倉庫が24号くらいまであった。小浜には石油荷揚げ用棧橋のコンクリート基礎が残っている(文献594のp950写真)。また廠内の小高い山の上には2か所に機関銃座があった。昭和20年(1945)1月には倉庫貯蔵の燃料・モービルドラム缶を空爆から守るために壕を掘って貯蔵した(20号まで)。そして同8月には壕内残余のドラム缶を移転準備中の山門郡瀬高町付近へ移転した	119・594
昭和20年(1945)2月末~3月初頃に玄界基地の開設が始まる。当初は小富士基地、小富士水上基地と呼ばれ、やがて玄界基地・玄界航空基地・玄界水上基地と呼ばれて第634海軍航空隊(634空;昭和19年[1944]5月に岩国で編成)の主基地として水上機の最大の秘匿海軍航空基地となった。634空のもとには、昭和19年10月22日に偵察301飛行隊(7月に横須賀で編成)の瑞雲隊が、そして20年(1945)3月頃には偵302飛行隊(19年12月に横浜で編成)が入ってきた。20年5月上旬には634空本体が置かれ、その後20年7月1日には偵302全員が所属し、水上爆撃機瑞雲隊と水上雷撃機水偵隊を結集した最大の水上機攻撃部隊となった。本部主要施設は久家(くが)・船越(ふねこし)にあり、洪号作戦に備えた。生松天神社近くの山裾に残る現状14基のカマド(烹炊所)は搭乗員たちが生活していた痕跡をよく伝えている。なお、「海軍航空隊玄界基地之跡」碑の横には水上機?留礎と陸揚げレールが置かれている	21・44・594
634海軍航空隊は昭和20年(1945)5月上旬に玄界基地を主基地として本体を置き、7月1日には偵302全員が所属したが、生松天神社近くの山裾には約20基のカマドを設置して烹炊所とした。今もその14基が残る。2基のカマドが一セットとなり、共有の煙突が付されている(文献119のp28・文献594のp956)	21・119・594
烹炊所の西にある。コークス煉瓦を積上げ、コンクリートで補強される。背後の丘陵突端部を削り取って造られる。縦2m、横2.25m、奥行き2.4m	119
平成11年(1999)度に志摩町教育委員会が発掘調査を行った。1号遺構は、5.2×5.9mの楕円形トーチカ状の内部に0.8×0.8mの方形のコンクリート製銃座がある。2号遺構は、径4.5mの円形トーチカ状で、内部に0.8×0.8mの方形のコンクリート製銃座がある。調査終了後に消滅した	119
日露戦争に際して陸軍が第12師団に設置したものの	111
第56軍担任部隊(第312師団)の警備地域で、海岸に突出する岬や海岸に近い山頂に設置された。主に三瀬崎及び神集島方向を監視した	109
昭和20年(1945)2月末以降に開設された玄界基地(第六三四航空隊)における瑞雲や水上偵察機の陸揚げ装置としての2本のレールである。海岸から海中へと続き、現状最長10mを測る	119・635
昭和13年(1938)4~7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	594・646
大入漁港は古くから天然の良港であったが、明治35年に福吉漁業会が発足するとその傘下に入り、昭和17年に防波堤を築造した。そして、戦時中には軍が造船所を建設することとなり、防波堤とともに昭和18年(1943)4月から19年にかけて、1号護岸、2号護岸、3号護岸などの港湾施設が竣工した。軍用の造船所として完成前に終戦を迎えるが、設計ミスにより潮位が隔壁の高さを越えたため、ドックとしての機能を果たせなかったとも言われる。現在でも、「ドック」と通称され、隔壁の一部が残存する。大入駅付近から直線的に伸びる里道は、港湾施設及び造船所の建築に供したものである。戦後の漁港指定は昭和27年6月である	大入漁港台帳
昭和20年6月19日 23時30分頃、福岡を空襲したB29の編隊のうちの1機が飛来し、焼夷弾を投下、8人が死亡。住宅全焼24戸、物置全焼13戸、門全焼2戸、薪小屋全焼2戸、雷山国民学校(本館・北校舎・2階校舎)全焼、農協(事務所・米倉庫)全焼、興福寺本堂全焼、三社神社全焼	133
海軍機が北側から山地を越えようとして山中に墜落炎上。海軍中尉 志水春正以下7人が死亡。一貫山行政区納骨堂内に位牌がある。事故直後は一貫山集落の人々が救援に向かい、火傷を負った搭乗員を選び出した。子どもたちは飛行機の部品を拾っておもちゃにしていたという	地元民からの聞き取り
	134
	134
井手自転車店退避用	134
	133
高祖山の山頂付近に北西方向に開口する2基の防空壕状の横穴があり、玄界灘方向からの音を監視する施設であったと思われる。麓の棚集落の民家には通信施設があり、また、兵士の食事を用意する大釜があったという。なお、雷山空襲時には少量であるが爆弾が投下されたという	地元の人からの聞き取り
陸軍の特設の簡易な飛行場。特攻基地でもあった[文献44のp103]。昭和20年7月建設。同基地を離着陸した飛行機の確認はなく、未完成のまま終戦となったようである(文献547のp314)。「戦史叢書57」(文献671)のp489にある「特攻基地配置図(機密佐佐木鎮守府命令作第90号別図(昭和20年7月25日))」の中に「春日原」が中練・機練特攻基地として挙げられている	44・547-p313・671
昭和17年(1942)10月に春日村の春日原競馬場及びその付近に開設され、稼動する。主に航空機関砲、小銃を製造した。同20年(1945)4月に日田へ疎開した。現在、航空自衛隊春日基地及び県営春日公園となる。春日基地内にはコンクリート造の試射壕(または弾薬壕)が残る	547・556
小倉陸軍造兵廠春日製造所の境界標(石製。「陸軍用地」と刻字あり)が、原町3丁目1番の境界線上のうち北辺及び西辺の5ヶ所に現存する	
昭和19年末頃以降の築造か。厚さ1mのコンクリート壕を自宅の庭に築造	547-p235/p236
平成30年の仁王手B遺跡3次調査にて検出。記録保存のみ。	
歩兵第117連隊は昭和15年(1940)8月に秋田市で編成されて第57師団に編入。同16年(1941)満州に渡ってのち同20年(1945)3月31日の本土防衛のため移動を命じられ、博多港に上陸後連隊本部を筑紫郡日佐村の日佐国民学校に置いた	529
大野城市(大野村)上大利字梅頭及び春日字平田山に築造された戦闘壕をつくる際の烹炊所	529
野砲兵第57連隊(通称「奥」7221部隊)は青森県弘前市で昭和15年(1940)に編成され、同16年にソ連国境警備に配置されたが、同20年に本土決戦へむけて内地に移駐され、上陸後連隊本部を久山町久原においた。大野村には、第2大隊第5中隊が大字上大利、字梅頭の三池周辺に兵舎を作り、南北両岸に洞穴壕を築造した。また大字上大利字谷蟹にも洞穴壕を築造した。その後、昭和20年(1945)5月20日に連隊本部は大野村瓦田の大野国民学校に移駐し、1個中隊は大野村釜蓋の四王寺山山腹に観測所を設け、その下方に砲座を設けた。野添遺跡6次調査で検出された洞窟壕はその一部かもしれない	529
昭和16年に広島で編成された部隊(通称「慧」8079部隊)は、昭和20年(1945)5月11日に遠賀から移動し、村民50人とともに陣地構築を行った。陣地は沖坂池東南側の松山と北側の桃畑を拓いて照空灯、聴音機、対空双眼鏡、発電搭載車などを配置し、周辺に兵舎を配置した。戦後の検分によれば、沖坂池の周りに衛兵所・炊事場・事務所・将校宿舎・兵舎などが残っていた	529
水城村境に戦車壕が造られていた。また、大字上大利船頭ヶ浦池東側や大字上大利字梅頭、谷蟹の丘陵地帯に道路を造るときに戦車を往復させていた。『山上高太郎日記』には、昭和20年(1945)7月に92部隊副官他1名が上大利・平田に来るらしいこと、また同年8月には釜蓋県道に戦車壕を造るから関連工作物や材材、人夫協力を依頼されたことが書かれている	529
野添遺跡6次調査地において確認した。幅1.5~1.7mの横穴を丘陵腹に水平に掘りこんでいる。約16.5mまで奥に掘り込んだが、完掘できなかった。高さは約3mほどであった。『大野城市史』の記載より、野砲第57連隊による洞窟壕と考えた。なお、上大利在住の古老から、秋田から来た兵隊が現在の南ヶ丘周辺の松を切り出して坑木に使い、戦後坑材に使われた坑木を洞窟壕から引き出して博多に売りに行っていたかかなりの現金収入を得たとの聞き取りがあった	523
本堂遺跡7次調査において確認したが、調査地に面した北側丘陵斜面に位置し、未調査のまま調査を終了。なお、上大利北土地区画整理地内では、この他に梅頭遺跡第4次調査地東側丘陵上に兵舎の跡と思しき土坑を確認したが、正確な情報が得られず、調査を断念した	524

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
418	株式会社福岡精工所	大野城市	白木原		3生産	消滅
419	福岡精工所洞窟工場	大野城市	大字乙金字沖坂		3生産	消滅か？
420	王城山遺跡2次調査洞窟壕	大野城市	大字乙金字王城山		3生産	発掘調査後消滅
421	九州飛行機雑餉隈工場唐山疎開工場	大野城市	大字乙金字唐山		3生産	消滅か？
422	中央兵器株式会社	大野城市	錦町		3生産	消滅か？
423	古野遺跡4次調査(洞窟壕)	大野城市	大字乙金字古野		3生産	発掘調査後消滅
424	古野遺跡3次調査(洞窟壕)	大野城市	大字乙金字古野		3生産	発掘調査後消滅
425	原口遺跡4次調査(A区洞窟壕)	大野城市	大字乙金字原口		3生産	発掘調査後消滅
426	原口遺跡4次調査(C区洞窟壕)	大野城市	大字乙金字原口		3生産	発掘調査後消滅
427	高射砲陣地	太宰府市	吉松3丁目	公有地	2軍事・防衛	丘陵上の窪地として残る
428	福岡俘虜収容所本所	太宰府市	連歌屋1丁目(旧太宰府国民学校)		5居住	消滅。現太宰府小学校
429	定遠館	太宰府市	宰府2丁目	私有地	8その他	現存。平成26年度に修復
430	セメント工場	那珂川市	炭焼	私有地	3生産	消滅。資材置き場となっている
431	被災地	那珂川市	瀬戸	私有地	4戦闘地・戦場	
432	防空壕(ウソの谷)	那珂川市	安德	私有地	5居住	かなり崩れている
433	防空壕	那珂川市	成竹寺倉	私有地	5居住	入口はブルーシートが掛けられている
434	日吉神社裏の淵	那珂川市	市ノ瀬	公有地	8その他	現在は腰の高さぐらいの深さである
435	第十六方面軍(西部軍)司令部跡(地下壕)	筑紫野市	山家、筑前町二(ふた)	私有地	1政治・行政	現在、地下壕跡の一部は旭化成工業の工場として稼働
436	二日市保養所	筑紫野市	湯町		1政治・行政	敷地内に水子供養碑が建立されている
437	山家対空監視哨	筑紫野市	山家		2軍事・防衛	調査終了後、消滅
438	西鉄旧筑紫駅待合所	筑紫野市	筑紫(ふれあい公園)		4戦闘地・戦場	「筑紫平和祈念館」内に移築保存、一般公開
439	第十六方面軍司令部跡に係る陸軍標識	朝倉郡筑前町	二	公有地	1政治・行政	不明
440	山隈弾薬庫	朝倉郡筑前町	山隈字城山	私有地	2軍事・防衛	現存
441	頓田の森	朝倉市	大字一木頓田	公有地	4戦闘地・戦場	現存
442	屋永西原の塹壕・タコツボ	朝倉市	屋永西原	私有地	5居住	発掘調査後消滅
443	防空壕	朝倉市	馬田	私有地	5居住	発掘調査後消滅
444	大刀洗飛行場(航空廠)	三井郡大刀洗町、朝倉市、朝倉郡筑前町、小郡市		公有地、私有地	2軍事・防衛	現在は田畑や宅地などになっている。また、筑前と筑後の境界となる道路が区画整理のため狭くなっていることから現状では確認が困難である
445	(1)大刀洗飛行場(排水路、溝)	三井郡大刀洗町、朝倉郡筑前町、朝倉市		公有地、私有地	2軍事・防衛	暗渠水路の一部確認。用悪水路
446	(2)航空路部大刀洗保安区(通信所、無線送信所)	三井郡大刀洗町山隈・本郷、小郡市干潟			2軍事・防衛	送信所の施設などは消滅
447	(3)(大刀洗飛行場)久留米陸軍病院大刀洗分院	三井郡大刀洗町	大刀洗町外か？	不明	1政治・行政	不明
448	(4)大刀洗飛行場(東門)	三井郡大刀洗町	大字山隈	公有地(道路)	2軍事・防衛	2016年北側門柱が破損、復元修理

内容(年代・由来等)	文献
昭和16年(1941)に海軍管理工場の指定を受け、水上飛行機のフロートを主とした飛行機部品や魚雷の製造に着手した。現在の大野中学校や福岡県筑紫総合庁舎、西鉄天神大牟田線までの一帯が工場用地になった	529
大野村白木原にあった福岡精工所は、昭和19年(1944)初めごろから工場疎開を開始、第一次疎開工場として大字乙金字沖坂の北方丘陵地帯に洞窟工場を作り、同20年8月中旬ごろには一部作業を開始していた。第二次疎開工場は、終戦後整地が終わった程度であった。王城山遺跡2次調査で検出された洞窟壕は第一次疎開工場の一部かもしれない	529
大野城市教育委員会による平成24～26年(2014～2016)の王城山遺跡2次調査地において確認した。東西50m、南北35mほどの平面コの字形を呈する。壁面には板材が見られ、コンクリート土台もある。磁器・ガラス瓶や合板なども出土した。出土遺物等の状況から、福岡精工所の洞窟工場と考えられる。なお、乙金地区の洞窟壕については、池田拓氏の論文(文献528所収)に詳しい	527・528
九州飛行機は、昭和19年初めごろから疎開を始めた。昭和20年(1945)1月に九州飛行機より工場疎開の申し入れがあり、2月に建設を始めた。現在の唐山池周辺に洞窟工場があり、古老の記憶をもとに書き起こし地図が掲載されている	529
昭和18年(1943)に、現在の王城山イオンの所に整備され、魚雷関係の部品製造などを行った	529
太平洋戦争末期の防空壕跡を確認。大野城市教育委員会による平成23～25年(2011～2013)の調査で土師器小皿(燈明皿として使用か。「敵國降伏」の型押し、「官幣大社 宮崎宮」博「平」(「平」は文字判別不能)などが押印される)、陶磁器、ガラス製品、鉄製品が出土	528
大野城市教育委員会が平成22年(2010)に調査。平面コの字型に巡る。幅1.9～2.6mで鉄器・木材・陶磁器・瓦が出土。疎開工場と考えられる	526
大野城市教育委員会が平成22～23年(2010～2011)に調査した。幅3.5～3.6mで、長さは35m以上延びる。板材と横木の痕跡が確認された	525
大野城市教育委員会が平成22～23年に調査した。幅最大3.4m、残存長22m。柱穴列を側壁沿いに確認した。板材・柱材・釘金などが出土した	525
太平洋戦争末期に造成開始。周辺に戦車壕、防空壕も施工。高射砲陣地は未完成のまま終戦となる	612
昭和17年(1942)11月26日の八幡坂俘虜収容所を起源とする。18年1月1日に本部事務所は福岡市の西部軍司令部構内に開設され、20年4月に中央区長浜の長浜青年学校に移転するが、6月19日の空襲で焼失、太宰府町太宰府国民学校に移転する。捕虜は収容せず事務所のみであった	C
小野隆助により建てられた。日清戦争時の威海衛の戦いで沈んだ清国北洋艦隊の旗艦「定遠」の部材を利用して建てられた建物や門が所在する	28
那珂川市炭焼にある。太平洋戦争末期に国内の窮乏のために代用セメントが作られた	633
昭和20年(1945)6月19日の夜、瀬戸の白水氏の母屋・納屋などが爆撃を受けた。松木山の採石場が軍需工場と見なされそれを爆撃しようとしてそれたものではないかと言われている	633
那珂川市安徳ウソの谷の水路のトンネルの出口に向かった崖にある横穴で「筑前国統風土記拾遺」にも記載がある。戦時中は防空壕として使用され、戦後はみかんの貯蔵所として利用されていたという	632・「統風土記拾遺」
那珂川市成竹寺倉区公民館の裏側にあり、防空壕1基が確認できる	
那珂川市市ノ瀬中ノ島公園日吉神社の裏、天然記念物ヤマモモの付近にあり。日支事変、第二次世界大戦中に婦人会が戦勝祈願のために視を行った場所である。文献633では、当時は既に浅くなっていると記載がある	633
本土決戦準備に伴い、昭和20(1945)年1月から筑紫野市山家・天山、夜須町二にまたがる宮地岳南麓に、全長約4kmに及ぶ地下壕を建設し疎開することとした。計画では出入口は山家側4か所、二側と天山側に各1か所の計6か所であった。同年6月に司令部が移駐したが、地下壕は完成を見ないまま終戦を迎えた。地下壕周辺には、三角兵舎跡などの関係施設跡が散在。南壕入口に通じる道路は、軍用道路として設置された	53・61・619・622・671
昭和8年(1933)、旧陸軍が久留米陸軍病院武蔵保養所として開設。その後、愛国婦人会運営の戦傷者用保養所として運営されていたが、敗戦にともない満洲・朝鮮半島からの引揚者のため、昭和21年(1946)に「厚生省博多引揚援護局保養所」が設置され、多くの婦女子の救済にあたった。保養所は昭和22(1947)年に閉鎖。現在、保養所建物は取り壊され、跡地は済生会二日市医療センターとして使用している	水子の譜
昭和18年(1943)4月上旬に大刀洗飛行場のための直轄防空監視哨が置かれた(文献56)。なお、同17年(1942)5月頃に墳丘上に聴音防空監視哨設置工事が行われた古墳(長道1号墳か)があり、その古墳は平成12年(2000)11月～同13年1月に調査された	56・620
昭和20(1945)年8月8日、西鉄大牟田線筑紫駅付近で、上り下り各2両編成の電車が米軍戦闘機の機銃掃射を受け、即死者64人、負傷者100余人の犠牲者が出た。このときの機銃掃射による弾痕が残る駅待合所については、現在は筑紫野市ふれあい公園に建設した「筑紫平和祈念館」内に移築保存し、一般公開している	61・621・622
池の所に標識がある	84
城山山麓にある初期須恵器窯跡群である山隈窯跡群(1～4号窯)の所に築かれている。昭和20年(1945)3月の空襲以後に陸軍により設置されたこと、弾薬庫以外の用途であった可能性もある。平面形がF字形をなし、幅22mで、出入口が2か所に取り付く。南側には軍用道路と称する平坦面がある。九大考古学研究室が平成元年(1989)8月1日～31日に調査した	52・626
昭和20年(1945)3月27日の大刀洗空襲で、立石国民学校児童が爆撃を受け31人が死亡した場所を整備したもの。昭和15年(1981)11月に甘木朝倉青年会議所が看板を設置した。ここにあったシイの木は平成5年(1993)に枯れたのち朝倉市図書館にモニユメントとして展示されている	506
宅地造成に先立つ平成10年(1998)の屋水西原遺跡第5次調査で、壘壕5カ所、タコツボ(個人用壘壕)19基を検出した。壘壕は全て大分県方面を向っており、人員が横一列になって対空防備をしたものと考えられる。壘壕床面からスレート片、タコツボから陶磁器片・ガラス片・布・靴・スレート等が出土。西へ500mほどのところに大刀洗飛行場関係の高射砲隊が駐屯したことから、高射砲隊と関連があるものと考えられる	504
福祉施設(ひばりが丘学園)の運動場角で、東斜面に向かって開口していたものが降雨で崩落したため緊急調査を実施した。壘壕の形は平面L字形で、規模は屈曲部からの奥行7.52m、幅1.5m、床からの高さ1.4～1.6mである。中央部脇に長さ20cm程の鉄製錠(かすがい)が出土し、木製の扉が付いていた可能性がある。遺物は崩落の危険があり未確認。大刀洗飛行場関連施設であろう	505
大正7年(1918)5月に軍部は飛行場建設のために朝倉郡三輪村・馬田村、三井郡大刀洗村に対して用地買収の申し入れを行った。大正8年(1919)10月に陸軍大刀洗飛行場が国内4番目の飛行場として完成し、11月3日に埼玉原所沢陸軍飛行場で編成された大刀洗航空隊第4中隊の総勢104人(第一中隊87人ともいう)が赴任し、12月26日には航空第4大隊に昇格し、12月末にはモ式6型飛行機の初飛行が行われた。その後周辺には航空廠、第五航空教育隊、航空機製造会社などが設置されていく。大正14年(1925)4月に飛行第4連隊へ昇格し、昭和13年(1938)8月15日に飛行第4戦隊となる。昭和4～11年(1929～1936)には民間航空の国際空港としても利用された。同12年(1937)には航空機製作所ができ、13年(1938)に航空教育隊が発足した。同15年(1940)には大刀洗航空廠に昇格し、陸軍飛行学校も設置されるなど、東洋一の航空基地になっていった。同20年(1945)3月のB29による空襲でほぼ壊滅した。陸軍練兵場跡は甘木鉄道より北側の山隈駅より西側を中心に存在した。昭和12年頃に陸軍省がもとは桑畑であったところを強制収容して造ったものの練兵場として使用していたころには、シヨベルで穴を掘り、そこに入って身を守る壘壕訓練も行われていたそうである。昭和23年にアメリカ軍が撮影した航空写真には練兵場建物の跡がはっきりと写っている。甘木鉄道山隈駅西側・筑前町及び大刀洗町山隈にいくつかの陸軍境界標が残っている	44・56・97・543・612・613・614・652・682・683
三井郡大刀洗町山隈、朝倉郡筑前町原地蔵、朝倉市馬田・中原下浦にわたる。排水路・溝は、現在は用悪水路として使用しているが、当時のものはごく一部の残存と思われる。飛行場を区画していたもの。当時の図面が残存せず、排水路の位置不明。流末開口部は朝倉市に3、大刀洗町に1あり。水が流れている。平成19年(2007)、試掘調査で、コンクリート製暗渠及びコンクリート製蓋を確認。地籍図には遺存する。平成15年(2003)調査(文献683のp390写真はこれであろうか?)	615-p19, 669・683
航空廠正門入口近くにあったが、昭和20年(1945)3月の空襲以前に本郷や山隈に分厚いコンクリート造りの地下通信所を構築して移転した。送信所は干潟に移転した。跡地の近隣の古老の話では、「1944(昭和19)年に設置され終戦までの1年余りあったと思う。設備は壁のないテントのようなものを設置し、杉の柱を無線塔として何十本も立てて線を渡していた。兵隊が何人か詰めていた」そうである。1945(昭和20)年3月のアメリカ軍の爆撃を受けるも送信所には当たらず、近くの民家や赤松医院が被害を受けて火災や死者・負傷者が出ている	87・88・90・625
大正8年(1919)10月の飛行場開隊とともに久留米陸軍病院大刀洗分院が開院した。昭和15年(1940)には朝倉郡立石村(甘木市)来春に新築移転し大刀洗陸軍病院へ昇格した。同20年3月の大刀洗空襲ののち朝倉郡大福国民学校へ疎開した	84・625
昭和13年(1938)7月に飛行第四連隊内に航空技術に関する訓練中隊が開隊されて訓練を開始する。翌年12月に連隊本部の北西側に兵舎を建てて正式に第五航空教育隊として発足する。東門は門柱が道路の両脇に残る。平成15年(2003)調査	84

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
449	(5)大刀洗飛行場(北門)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	2軍事・防衛	門柱前に標示板設置(2012年)
450	(6)大刀洗飛行場(格納庫)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	2軍事・防衛	コンクリート基礎のみ現存
451	(7)大刀洗飛行場(燃料庫)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	2軍事・防衛	消滅
452	(8)大刀洗飛行場(航空廠の倉庫)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	2軍事・防衛	2011年消滅
453	(9)大刀洗飛行場(プラットホーム)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	2軍事・防衛	
454	(10)大刀洗飛行場(技能者養成所の井戸)	三井郡大刀洗町	大字鶴木	私有地	2軍事・防衛	現存。フェンスで囲う
455	(11)大刀洗飛行場(防火用水槽)	三井郡大刀洗町	大字鶴木	私有地	2軍事・防衛	現存。一部破損
456	(12)大刀洗飛行場(焼却炉)	三井郡大刀洗町	大字鶴木	私有地	2軍事・防衛	現存
457	(13)飛行場構内鉄道(国鉄甘木線引込線)	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地、公有地	7交通	跡地の多くは、町道等に痕跡が見られる
458	(14)大刀洗航空機製作所本郷工場	三井郡大刀洗町	不明	不明	3生産	所在位置不明
459	(15)大刀洗北(北大刀洗)飛行場〔夜須飛行場〕	朝倉郡筑前町	(旧夜須町四三島ほか)	私有地	2軍事・防衛	滑走路は道路として現存
460	(16)久留米憲兵隊甘木分遣所、大刀洗分憲隊	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	1政治・行政	
461	(17)大刀洗飛行場(営門)	朝倉郡筑前町	原地蔵	公有地	2軍事・防衛	移設
462	(18)大刀洗飛行場(監的壕)	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	2軍事・防衛	現存
463	(19)大刀洗飛行場(飛行第四連隊の井戸)	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	2軍事・防衛	現存
464	(20)大刀洗航空隊第5教育隊(西部第百部隊)正門跡	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	2軍事・防衛	
465	(21)大刀洗航空機製作所(株)	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	3生産	未確認
466	(22)大刀洗飛行場・掩体	朝倉郡筑前町	高上	公有地、私有地	2軍事・防衛	現存
467	(23)大刀洗飛行場関係高射砲隊、飛行学校生徒隊(正門)	朝倉市	大字一木	公有地(市)	1政治・行政	正門が現存
468	(24)大刀洗飛行場(地下司令部)	朝倉市	大字馬田	私有地	2軍事・防衛	現存
469	(25)大刀洗飛行場(防空壕)	朝倉市	大字馬田	未確認	2軍事・防衛	未確認
470	(26)大刀洗飛行場(裏門)	朝倉市	大字馬田	未確認	2軍事・防衛	未確認
471	(27)大刀洗東(甘木)飛行場	朝倉市	三奈木	未確認	2軍事・防衛	現地確認したが不明
472	(28)烏巣院・上ノ原滑走路	朝倉市	烏巣院・上ノ原	未確認	2軍事・防衛	現地確認したが、圃場整備が完了しており不明
473	(29)上寺演習場	朝倉市	上寺	未確認	2軍事・防衛	不明
474	(30)比良松対空監視哨	朝倉市	比良松	未確認	2軍事・防衛	不明
475	(31)大刀洗航空機製作所下湖工場	朝倉市	下湖	未確認	3生産	不明
476	(32)大刀洗航空機製作所山後工場	朝倉市	山後	未確認	3生産	不明
477	(33)八丁峠灯台(航空灯台)	朝倉市	秋月(陣屋山)	未確認	8その他	
478	(34)大刀洗飛行場関係射撃場(陸軍射撃訓練場)	小郡市	干潟	私有地(個人5人)	2軍事・防衛	現在、土塁は北側と東側がかなり残っている。内側平地部分は農園や民家となっている。土砂によるトンネルの埋没が進行中
479	(35)花立山高射砲陣地	朝倉郡筑前町、小郡市		私有地	2軍事・防衛	不明
480	菊池武光銅像の弾痕	三井郡大刀洗町	大字山隈	公有地(町)	4戦闘地・戦場	大刀洗公園内に現存。一部改変
481	地下式通路	小郡市	干潟字城山	私有地	2軍事・防衛	花立山山中に現存
482	軍用防空壕	小郡市	干潟字城山	私有地	2軍事・防衛	花立山山中に現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和14年(1939)2月に発足した第五航空教育隊の北門は門柱が道路わきに1基残っている	84
平成15年(2003)に調査したが、構造の詳細は不明であった。コンクリートの基礎のみ所在	668
平成10年(1998)12月に調査される(文献614)。調査後に解体され消滅した。大正8年(1919)に完成した大刀洗飛行場と同じ時期か、同14年(1925)頃までの間に建設されたものと考えられる	613・668
平成15年(2003)調査時には倉庫跡は物置に使用されていた	668
コンクリートの基礎が残る、370cmと610cmの間隔がある。構造の詳細は不明。平成15年(2003)調査	668
技能者養成所は昭和17年(1942)4月に航空廠内に正式に発足した。田の中に径6mの円形の井戸が残る。深さは8mとのこと。平成15年調査	84
技能者養成所は昭和17年(1942)4月に航空廠内に正式に発足した。円形の防火用水槽が田の中に残る。平成15年(2003)調査	669
技能者養成所は昭和17年(1942)4月に正式発足した。コンクリート造りの施設が残る。平成15年(2003)調査	
昭和14年(1939)4月に、鹿児島本線基山駅から甘木駅まで14.7kmの国鉄甘木線が開通する。各所に引込線が設けられた	84・625・669
昭和19年(1944)2.23の「工場緊急疎開要綱」に則り、この頃から工場の疎開のために新しい工場をつくり、同20年(1945)3.28に大半の工作機械が疎開した。本郷工場は資材置場であった	56
昭和18年(1943)2月、福島・篠隈・四三島・下高場地区にまたがる安野原の林野・耕地160町歩を買収し、約2年をかけて昭和20年(1945)2月にはほぼ飛行場が完成したが、十分な活動もなく終戦となった。ただ5.25には重爆撃機「さくら弾機」による特攻隊も出撃したという。東西1,800×(幅)300m、南北2,000×(幅)400mの平面T字形の滑走路に長さ1,500m、幅60mの舗装された南北方向の滑走路があった。これまで滑走路西側に長さ1,600m、幅30mの補助滑走路があったという説も流布していたが滑走路は1本であったとみられる。格納庫はなく、掩体壕約40～50基と高射砲陣地がつけられた。現道も滑走路の痕跡であり、また民家の庭にコンクリート舗装の名残りをとどめている所がある[文献690のp675写真]	44・55・690
大正8年(1919)12月10日開所。ホレンガ造りの壁が現在も残る(文献683のp380写真)。外周に境界標柱あり。平成15年(2003)調査	683
大刀洗飛行場は国内4番目の飛行場であり、その営門である。昭和15年(1940)からは大刀洗陸軍飛行学校・本校の正門として使われた	56・84・625・683
軍用機による射撃訓練時の観測用として使用されていたもので、戦闘機や練習機の着弾を中にいる観測員が双眼鏡で確認していた。飛行場の南側の池のほとりに設置されていたが、戦後に移動された	
飛行第4連隊が使用し、その後、飛行学校本校生徒隊や分校操縦訓練生などが炊事・洗濯・風呂などの営内生活に使用した大井戸である。コンクリートの枠が残り、内径5.8m。平成15年(2003)調査	
昭和13年(1938)7月に飛行第4聯隊内に航空技術に関する訓練中隊が開設されて訓練を開始する。翌年12月に聯隊本部の北西側に兵舎を建てて正式に第五航空教育隊として発足する。日本陸軍最大規模で常時4,000人、最大では6,000人が在籍した。通用口は床にレール溝あり。平成15年(2003)調査。平成22年1月に大刀洗平和祈念館前に移設された	84・625
昭和11年(1936)12月上旬に福岡の民間航空機メーカー渡辺鉄工所が大刀洗陸軍飛行場の北(三輪村野町)に工場を建設し、「渡辺鉄工所(株)野町工場」とする。同12年(1937)10月から部品製造を始め、12月12日には「大刀洗航空機製作所(株)」として独立する。昭和20年(1945)3月31日の空襲でほぼ壊滅した	84・625
昭和20年(1945)2月頃、筑前町の上高場・大久保・高上・野町にかけての飛行機誘導路沿いには40～50基の掩体壕が造られ、飛行機や弾薬などを収容していた。高上の方は現存し、個人の農機具倉庫となっていた際の平成15年(2003)に調査した。その後には町が公有化している。戦闘機2機が入る大きさで、入り幅29m、後方幅48.4m、幅44m、高さ7.3mを測る。保存状態はよいが、補強の必要部分もある	625・669・683
昭和13年(1938)7月に高射砲第4連隊が開隊。同18年(1943)10月に第4連隊転出跡地に甘木生徒隊が発足する。現状は甘木児童公園となっており、正面に門柱が残る。管理者は朝倉市。平成15年(2003)調査(文献625のp272写真)。柏市教育委員会の調査で、1975年まで鉄筋コンクリート製の航空演習室が存在したことを確認	84・546・625
3筆にわたる。平成10年(1998)11月に甘木市教育委員会が調査した。内部の天井高は2.7m。平成15年(2003)にも調査	84
大刀洗航空廠本部防空壕跡。大刀洗町所在か?	84
大刀洗航空廠裏門跡。大刀洗町所在か?	84
昭和20年(1945)春頃から、現在の十文字中学校の東側に急勾配の1,500m程の滑走路1本を学徒動員などで造ったが、完成と同時に終戦となった。周辺の山麓には横穴式掩体が複数造られていた。陸軍特設の簡易な飛行場で、特攻基地でもあった。(文献625のp103)	44・625
昭和20年(1945)3月の大刀洗空襲で大刀洗飛行場の部隊・航空廠は甚大な被害を受けた。4月頃から朝倉町の鳥屋院・上ノ原では飛行機を隠すための滑走路(誘導路)建設工事が急がれたが、完成しないうちに終戦となった(文献502のp542写真)	502
昭和2年(1927)6月13日に大刀洗陸軍飛行隊が大隊ごとに演習を行う(文献56)とされるので、この頃には演習場があった。明治36年、工兵の架橋演習場として筑後川河畔に兵舎あり。昭和6年まで稼働。昭和12年解体	56
昭和18年(1943)4月上旬に大刀洗飛行場のための直轄防空監視哨が置かれた	56・109
昭和19年(1944)2月23日の「工場緊急疎開要綱」に則り、この頃から工場の疎開のために新しい工場をつくり、同20年(1945)3月28日に大半の工作機械が疎開した。下湖工場は31棟で部品を製造した	56
昭和19年(1944)2月23日の「工場緊急疎開要綱」に則り、この頃から工場の疎開のために新しい工場をつくり、同20年(1945)3月28日に大半の工作機械が疎開した。山後工場は組立てにあたった	56
日本航空輸送株式会社(大刀洗支所)が夜間飛行使用のために昭和7年(1932)6月1日から秋月村陣屋山(標高584m)に建設を始め、同11月1日に完成した。同8年(1933)7月からは軍部の反対もあって常時点灯ではなく限定点灯となる。同11年(1936)5月には会社が福岡市雁ノ巣へ移転したため使用されなくなった。戦後しばらくは広場となっている現地に建っていたというが、現在は確認できない	56
昭和18年(1943)頃の設置と思われる。大刀洗陸軍飛行学校訓練生や航空部隊兵士の射撃訓練に使用された。射撃区画、流れ弾防止用土塁、命中確認用のコンクリート監視壕、監視壕に至るトンネル及び進入路が残る。標的は東の花立山側に設置し、敷地の周囲を土塁で囲んでいたと想定される。射撃場の広さは、内側幅45m、長さ約300m、両側土手(土塁)の幅は25m、高さ5m程である。現状は畑地等であるが、全体の区画としてはよく残っている。平成15年(2003)に調査。用地を囲む境界標柱があり、5本を確認した(9本の確認とするものあり)	87・88・543・669
昭和20年(1945)2月頃、花立山麓に構築される。大刀洗飛行場と同北飛行場を護るための高射砲陣地。平成26年度(2014)にこの付近の悉皆調査を行ったが、小郡市側では高射砲陣地の痕跡を確認できていない	55・625
昭和20年(1945)3月(27日 or 31日)のアメリカ軍の空襲による機関砲の弾痕80個が台座等に残る。銅像は昭和12年(1937)11月3日落成、佐賀大学緒方敏雄の作品とされ、木下謙太郎撰、上田難東書の碑文あり(文献613のp331写真)	613
花立山山中に旧陸軍が掘ったもの。堅穴の底から横方向に花立山穴観音古墳付近までトンネルが続いていて、24連隊(砲兵隊のことと推測される)が兵器を隠していたとされている。文献110には、礼所の小山を金山といい、穴をゴトゴト穴と呼んでいると記されている。40～50年位前に穴に入った人の話では、四角の横穴があったが途中で埋もれていたとのことである	110
兵器を隠す目的で造られたと考えられるトンネル型の防空壕の跡である。城山公園の西堤に面して入口があり、斜面を登るような形で3本のトンネルが掘られている。現在はトンネル上部は落下して筋状のくぼみがあるのみであるが、堤側から登る3本とそれをつなぐ1本の防空壕跡が確認できる。この3本を横切るように現在は山道が通っている	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
483	B29墜落地跡	小郡市	小郡	私有地	4戦闘地・戦場	現在では名残はない
484	被災樹木	小郡市	山隈	私有地	4戦闘地・戦場	樹木は現存
485	花立西内畑観音堂	小郡市	山隈字西内畑	私有地	4戦闘地・戦場	現存
486	とびうめ爆撃跡	小郡市	干潟	私有地	4戦闘地・戦場	一部現存
487	タコツボ(個人用塹壕)	小郡市	吹上(小郡市立立石小学校)	公有地(市)	5居住	現在は、コンクリートの観覧席が設けられており、名残は見られない
488	タコツボ(個人用塹壕)群	小郡市	干潟(干潟城山)	私有地	5居住	現存
489	防空壕	小郡市	干潟	私有地	5居住	花立山山中に現存
490	タコツボ(個人用塹壕)	小郡市	横隈	私有地	5居住	現存
491	三沢北中尾遺跡1地点(防空壕・待避壕)	小郡市	美鈴の杜	私有地	5居住	宅地開発により消滅
492	三沢北中尾遺跡4地点(防空壕)	小郡市	美鈴の杜	私有地	5居住	宅地開発により消滅
493	力武前畑遺跡(防空壕)	小郡市	力武	私有地	5居住	共同住宅開発により消滅
494	吹上二ツ塚遺跡2(防空壕)	小郡市	吹上	公有地	5居住	道路改良工事により消滅
495	寺福童開遺跡1(防空壕)	小郡市	寺福童	私有地	5居住	開発により消滅
496	軍用道路	小郡市	干潟	公有地(市)	7交通	現存
497	赤松病院	小郡市	干潟	私有地	8その他	建物が一部現存
498	陸軍境界標	小郡市	干潟	公有地、私有地	2軍事・防衛	小郡市内に5本現存
499	楠名・重定古墳(弾薬庫)	うきは市	浮羽町朝田		2軍事・防衛	「楠名・重定古墳」大正11年(1922)3.8国指定史跡
500	竹重遺跡2次調査	うきは市	吉井町生葉	公有地	3生産	発掘調査後消滅
501	明治天皇久留米大本営・行在所	久留米市	城南町9-12(明善高校)	公有地(県)	2軍事・防衛	大本営自体は消滅、行在所のみ現存
502	久留米防空監視哨	久留米市	城南町旧久留米市庁舎屋上	公有地(市)	2軍事・防衛	庁舎建て替えに伴い消滅
503	祇園神社の被爆狛犬	久留米市	城南町21-4	私有地	4戦闘地・戦場	現存
504	粟島神社の被爆鳥居	久留米市	日吉町19-13粟島神社	私有地	4戦闘地・戦場	現存
505	久留米偕行社	久留米市	東町	私有地	1政治・行政	消滅
506	久留米師団司令部(第十八師団・第十二師団・第五十六師団等)	久留米市	諏訪野町	国有地	1政治・行政	消滅
507	久留米師団被服庫	久留米市	諏訪野町	公有地(市)	1政治・行政	消滅
508	小倉陸軍兵器支廠の久留米陸軍兵器分廠	久留米市	諏訪野町	市・私有地	3生産	消滅
509	師団長官舎	久留米市	諏訪野町2028-2	公有地(市)	5居住	現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和19年(1944)4月18日未明、マリアナ基地を發進した約100機のB29が二手に分かれて南九州と大刀洗を襲い爆弾を投下した。大刀洗へは約30機が飛来、編隊による4度目の大刀洗空襲であった。午前8時前、久留米上空で反転した11機のB29編隊が小郡上空に来たとき、山本三男三郎少尉(山口県小月基地第4飛行隊)の二式複座戦闘機、尾龍が三機編隊の後尾機に体当たりした。B29は機体から火を噴き、小郡市下町に墜落・炎上した。大破した山本少尉機は大保の陸軍被服廠福岡支所の建物に突き刺さるよう不時着した。重傷の山本少尉は移送先の久留米陸軍病院で約4時間後に死亡した。B29は小郡下町蒲池病院と国道500号を挟んだ民家の畑に落ち、黒煙を上げ、くすぶり続けた。畑の物置下の防空壕に避難中の朝鮮人家族7人(6人の説もある)は直撃を受け即死した。B29の搭乗員11人も全員死亡した。うち1人は女性通信兵であったとされる。遺体は、三王山の裏が墓地になっていたため、そこに運んで埋めたとされている	543
昭和20年(1945)3月31日の大刀洗空襲の際に花立集落の住民5人がなくなり、民家16戸と薬師堂が全焼、近隣の個人宅では樹木も被弾した	
昭和20年(1945)3月31日の大刀洗空襲の際、観音堂東側に落ちた爆弾の爆風によって観音堂内に祀られている観音菩薩立像の首が折れ、釈迦如来立像の光背が一部欠けた。また、観音堂そばにある「城山四国第十三番札所」の石柱も同日の爆撃で欠損したと言われている。後日、観音菩薩立像の首は戻され、現在に至る	
当時、松岡酒造所として酒を造っていた。昭和20年(1945)7月28日にロケット弾が命中した。ロケット弾は天井の太い梁に突き刺さって止まり、わら積みが増え出した。近所の人の懸命の消火作業で火災は免れた。お座敷2部屋が崩れたが、柱は残った。また、爆弾が落ちたところの3部屋先の白壁を爆弾の破片が内側から突き抜けた跡が残っている。また、酒の貯蔵庫まで爆弾の破片が飛び、その跡が残っている。松岡酒造所の方は、屋根裏に避難しており、死者はいなかった	87
小郡市立立石小学校内の運動場へと降りる斜面は、現在コンクリートの観覧席が設けられているが、戦時中はここに兵隊によって造られたいくつものタコツボ(個人用塹壕)があったという。当時は、芝生を植えていて段々になっており、そこに兵隊が食べられるものを作っていたという。戦後、爆撃の跡の穴などと同じく埋めたとのことである	87・88
花立山山中にタコツボ群が現存する。形状が比較的はっきり残っているもので、現状、深さ約90cm、直径約150cmであった	
横穴墓を転用したものである。入口に対し、内部は横に広い	
この辺りは土地が高く、当時は今より木が多く山の様であったそうである。タコツボは空襲の時に自分たちが避難するためのもので、一人一基ずつ掘ったそうである	539
平成11～12年(1999～2000)に小郡市教育委員会が調査した。旧福岡県種畜場の本館が建てられていた丘陵の上で、防空壕1基と退避壕1基が発見されている。防空壕は本館玄関の約15m 西南西の地点に、地山を掘り込んで作られている。形は非常に整った長方形であった。長さは南北約3.3m、幅は東西約1.4m で、深さは調査時で約1.1m 程度である。壕への昇降には階段が利用されていた。段数は3段で、北東隅に接続している。退避壕は本館玄関より南東へ約30mの地点に作られていた。東西に長い凹形で、長さは約6.5m である。東端・西端それぞれが北側に屈曲し、階段を設けている。段数は東側が4段で、西側が2段であった。削平により残りが悪く、深さは最大で0.7m 程度である	
平成14～15年(2002～2003)に小郡市教育委員会が調査した。2基(51号土壕・54号土壕)の防空壕が並んで存在していた。51号土壕は、南北に細長い長方形を呈する防空壕本体の部分と、南側から北側へ下る階段部分とに分かれる。本体部分の上端の大きさは長軸上が2.82m、短軸上が2.12m、南側が2.00m とやや北側に広い。北壁側は丸味を帯びている。下端の大きさは長軸上が2.34m、短軸上の北側が2.17m、南側が2.06m とやや北側が広い。深さは最大1.59m を測る。壁面は東西両壁はほぼ直立し、北壁は崩落により現状ではやや開きながら立ち上がる。床面に4基のピットがあり、上屋構造の存在を表すと考えられる。54号土壕も南北に細長い長方形を呈する防空壕本体の部分と、南側から北側へ下る階段部分とに分かれる。本体部分の上端の大きさは、長軸上が2.95m、短軸上の北側が1.90m、南側が2.04m とやや南側が広い。なお北壁側は丸味を帯びている。下端の大きさは、長軸上が2.37m、短軸上の北側が1.88m、南側が2.24m と南側が広い。深さは最大1.90m を測る。壁面は東西両壁はほぼ直立している。土層堆積状より本来は上端付近がやや内湾して立ち上がっているものと考えられる。床面に4基の大型ピットと2基の小型ピットがあり、上屋構造の存在を表すと考えられる	537
平成16年(2004)に小郡市教育委員会が調査した。調査区中央東側階で検出されている。詳細な記録は残っていないが、調査区区構配置図より、南北方向8.4m、東西方向2.9m 以上の方形プランと推測できる	535
平成17年(2005)に小郡市教育委員会が調査した。平面は長方形プランを呈し、東西に長軸方向をとる。床面はほぼ平坦に成形され、壁面もほぼ垂直で平坦に成形されている。南東角から東方向と南西角から南方向に階段が地山整形により造られている。検出した階段は各2段である。検出した上端の規模は、南北方向2.27～2.36m、東西方向3.32～3.34m であり、床面は南北方向2.17～2.31m、東西方向3.27～3.34m であり、深さは1～1.08m で、西に向かい緩やかに傾斜している	536
平成29年(2017)に小郡市教育委員会が調査。南北3.92m、東西3.82m、深さ1.35m の長方形に階段がつく規格の防空壕跡が発見された	540
千湯児童遊園から花立山へ続く道として現存する。道路際には「陸軍」と刻まれた石柱などが数個残っている	543
戦時中、院長赤松琢磨氏は大刀洗航空廠・大刀洗飛行学校・大刀洗製作所の嘱託医をしており、その関係で毎日のように手術患者・外傷患者がいた。1945(昭和20)年3月27日の空襲で立石小学校の生徒が三軒屋付近に落ちた爆弾で負傷し赤松病院で治療した記録がある。同年3月31日午前9時頃に病院内に爆弾が落ち、亡くなられた方がいる。戦時中は医薬品・衛生材料が不足し、かつ負傷者が多数おり満足にベッドも確保できなかった。医療に当たっていた医師は野戦病院のような状況だったと語る	36・542
小郡市、大刀洗町、筑前町、朝倉市などで計47本の標石が確認されている。小郡市内では、計12本が「大刀洗空襲をたどる」に記載されている。しかし、2014年の調査で確認できたのは旧軍用道路沿い4本、射撃場跡角に1本の計5本である。内3本は、旧軍用道路沿いの納骨堂敷地境の石と共に横倒しに置かれている。5本の標石は背面側は彫りが浅くなっていて読みづらい。射撃場跡東側など未調査地もあり、まだ現存するものがあると思われる。なお、正面には「陸軍」、背面には番号が刻まれており、確認できている番号は、「第50号」「第47号」「第56号」がある	87・88
昭和20年(1945)6月、久留米師団管区司令部から御幸村長あてに、戦時下の非常時における弾薬貯蔵について史跡補名・重定古墳の石室内を使用したい旨の申し入れがあった。実際に使用されたか否か不明であったが、下記の聞きとりにより、弾薬貯蔵がなされた可能性が高い。 ・重定古墳土地所有者の話「後室に弾があって前室が防空壕だった気がするが幼くきちんと覚えていない。弾は見た記憶がある。」 ・重定古墳近くの郷土史会会員の話し「戦争から帰って来たとき(昭和20年8月末)には弾薬は撤去された後だったが、両親から重定古墳が弾薬庫として使用されていた話を聞いた。最初は防空壕として利用されていたが、後で弾薬庫になったようだ。近所の酒蔵には落下傘が保管されていたと聞いた。」	
浮羽実直館高校校舎建替に伴う竹重遺跡2次調査(平成17～18年[2005～2006])において強固なコンクリート基礎群が検出され、戦時中の軍需工場跡であることが判明した。建設は終戦間近で稼働していない可能性もある	653
明治44年(1911)11月11～15日に行われた陸軍特別大演習の際に中学明善校に大本営が置かれ、明治天皇の行在所となった。これが昭和8年(1933)11月2日に明治天皇聖蹟として史跡に指定されたが、戦後の昭和23年(1948)6月29日に指定は解除された(文献644のp111写真)	644
昭和13年(1938)4～7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
素戔嗚神社にあり。戦時中の爆撃で、狛犬のうちの阿形の顔の半分が欠失している	
鳥居は明治30年の建立か	573
現在の久留米学園高等学校の地にあった	571
三井郡国分村大字西野中(久留米市諏訪野町の現久留米税務署敷地)に司令部建物が明治41年(1908)2月に竣工する。(司令部開庁式は明治40年(1907)12月21日に第48連隊で挙行し、第18師団が設置された。)大正14年には宇垣軍縮により第18師団は廃止されるが、小倉から第12師団が移駐してきて、軍都久留米は存続し、その後昭和12年9月に第18師団が再編成され、同15年7月には第56師団が編成される。「久留米師団司令部」門柱が久留米税務署内に残り、また昭和36年2月建立の記念碑がある。さらに諏訪野公園堂女木池の所には大正14年4月建立の「第十八師団記念碑」がある(文献5のp189に門柱・p269に碑の写真あり)	5・571・575
師団被服庫は現在の市立諏訪中学校にあった	571
明治31年(1898)11月設置の小倉陸軍兵器工廠の分廠として明治33年(1900)に設置される	556
旧師団長官舎で、現在は高牟礼会館。建造物調査は平成7年(1995)に終了し、文献568に記載。平成15年(2003)調査	568-p32～33

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
510	工兵第十八大隊・工兵隊作業場	久留米市	御井町	私有地・公有地(国)	1政治・行政	消滅
511	工兵隊作業場	久留米市	御井町	公有地	1政治・行政	消滅
512	旧陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地遙拝台	久留米市	野中町	公有地(市)	1政治・行政	現存
513	旧陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地円形野外講堂	久留米市	野中町	公有地(市)	1政治・行政	現存
514	旧陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地陸軍橋	久留米市	野中町	公有地(市)	1政治・行政	現存
	歩兵第四十八連隊	久留米市	国分町(陸上自衛隊久留米駐屯地・西部方面混成団)	公有地(陸上自衛隊)	1政治・行政	一部現存
515	(1)本部宮舎	久留米市	〃	公有地	1政治・行政	現存
516	(2)映写室	久留米市	〃	公有地	1政治・行政	現存
517	(3)教場	久留米市	〃	公有地	1政治・行政	現存
518	歩兵第二十四旅団(司令部庁舎)	久留米市	国分町	私有地	1政治・行政	消滅
519	久留米衛戍病院(陸軍病院)	久留米市	国分町	私有地(久留米大学)	1政治・行政	消滅
520	久留米俘虜収容所(白川(しらごう)遺跡)	久留米市	国分町	私有地	5居住	消滅。平成28年度に発掘調査(12次)を実施した。2016.12.12に周知の遺跡とした
521	歩兵第五十六連隊	久留米市	高良内町	陸自、福岡県)	1政治・行政	消滅
522	騎兵第二十二連隊・騎兵第十二連隊	久留米市	南2丁目	市公有地、私有地	1政治・行政	消滅
523	輜重兵第十八大隊	久留米市	南2丁目	私有地	1政治・行政	消滅
524	野砲兵第二十四連隊	久留米市	南1丁目(福教大学附属久留米中・小学校)	私有地	1政治・行政	消滅
525	旧久留米第二陸軍予備士官学校裏門	久留米市	南1丁目(南校区コミュニティセンター)	公有地(市)	1政治・行政	現存
526	独立山砲兵第三大隊	久留米市	南1丁目(久留米市立久留米商業高等学校)	公有地(市)	1政治・行政	石碑のみ現存
527	高良台演習場	久留米市	上津・藤山・藤光町(陸上自衛隊高良台演習場)	公有地(陸上自衛隊)	2軍事・防衛	消滅
528	工兵隊	久留米市	城島町浮島	私有地	1政治・行政	消滅
529	石人山古墳後円部壘壕	八女郡広川町	一條	公有地	2軍事・防衛	
530	小倉兵器補給廠羽犬塚集積所	筑後市	羽犬塚		2軍事・防衛	不明
531	船小屋秘匿飛行場	筑後市	船小屋	不明	2軍事・防衛	不詳
532	岡山飛行場(運輸通信省航空局筑後地方航空機乗員養成所、陸軍航空本部熊本出張所岡山飛行場)	八女市	蒲原、亀甲、今福、室岡、龍ヶ原	公有地、私有地	2軍事・防衛	一部消滅
533	福島飛行場	八女市	福島	不明	2軍事・防衛	
534	谷川格納庫トンネル	八女市	立花町谷川	公有地	2軍事・防衛	
535	山内の三角兵舎	八女市	山内	私有地	5居住	
536	豊福火山灰製造所・防空壕	八女市	豊福	私有地	5居住	現存
537	北川内トンネル・長野トンネル	八女市	上陽町北川内・八女市長野		8その他	現存
538	旭航空機製作所	大川市	酒見中原		3生産関係	
539	本村航空工業株式会社	大川市	下白垣	私有地	3生産関係	

内容(年代・由来等)	文献
第18師団隷下として明治40年(1907)10月20日、小倉工兵第12大隊内に大隊本部、第1中隊が創設され、同42年に三井郡御井町(現久留米市御井町久留米大学御井学舎、九州沖縄農業研究センター)に移駐した。大正14年5月に第18師団が廃止されて第12師団に属することとなる。農業研究センター内には工兵隊作業場があったが、そこには「爆弾三勇士」碑(耕心園碑)と「久留米工兵隊之跡」碑がある。	5・571・574・575
現九州沖縄農業研究センターで、「耕心園碑」や「久留米工兵隊之跡碑」がある	
赤レンガ(ドイツ積み)を基本とし一部にイギリス積み)を小口積みで積み上げて裾広がり、門柱状をなし、高さ4.8m、底部径6m、屋上径5.8m。外面の曲線が美しい。塔内部の螺旋階段を登ると屋上中央に遙拝塔が設置されている。西面した方形の花崗岩標柱に「宮城遙拝」がてん書の字体で刻まれており、東方(皇居)に向かって参拝することになる	570・572
昭和14年7月～17年4月に造営された陸軍墓地における構築物の一つである。直径22mの円形野外講堂で、500人を収容する規模。ステージとベンチ(座席)が円形(扇形)に配置され、ベンチ後方の周囲は土塁で囲まれている。ステージ背面の壁面には中央上部に「義其神」の揮毫の入った石板の扁額が、その下に黒板が設置される。壁本体は鉄筋を使用せず、背面で見るとセメントレンガをドイツ積みと思われる積み方や長手積みなどを併用しているようである。表面をモルタル仕上げとする。ステージ背後には楽屋もあった。座席はステージを扇の要にして配置され、座席脚部は2種類のアーチ煉瓦で造られている。座席全体はステージに向かって低く3列があり、上下2ブロックあるので計6ブロックの配列となる。極めて特徴的な構造を有する施設である。久留米市教育委員会が平成15年(2003)8～9月に調査した。	570・572
昭和14年(1939)7月着工、17年(1942)4月完成の旧陸軍墓地に付随する放生池に架けられた橋で、高さ15m、幅8m、長さ21m。外観は石造りのように見えるが、鉄筋の入らないコンクリート造のアーチ橋である。欄干の親柱に「陸軍橋」昭和17年4月竣工の銘がある	570・572
久留米市国分町に建設された兵営(現国分町陸上自衛隊久留米駐屯地)に、福岡の仮兵舎から明治30年(1897)4月22日に移転した。通称「久留米の四八」と呼ばれて親しまれていた。現在の構内には本部官舎(広報史料館)や倉庫・講堂・教場などの1945年以前の施設8棟が残存する。赤レンガの基礎を有するものも多い。また「戦車之碑」がある。高良内町の現久留米聿学校の地も含めて歩兵第56連隊や戦車第56連隊、西部第48部隊(歩兵第148連隊補充隊)、西部第49部隊(戦車第1・18連隊補充隊)なども駐屯した	5・571・575・669
明治30年(1897)に建築されたもの。現在は二階部が陸上自衛隊久留米駐屯地広報史料館(歴史資料館)として資料3,000点を収蔵・展示している。赤煉瓦の基礎がある	久留米駐屯地問合せ
明治30年(1897)に建築されたもの。現在は映写室、教育講堂、音楽の練習場として使用されている	久留米駐屯地問合せ
明治30年(1897)に建築されたもの。現在は久留米駐屯地の倉庫として使用している	久留米駐屯地問合せ
国分町の第48連隊南側(久留米大学医療センター入口付近)に明治30年(1897)9.28創設、同10.19に開庁する。文献5の p126に写真あり	5・575
明治30年(1897)5月4日に久留米第48連隊医務室の一部に開設され、同11月14日に第24旅団司令部の南に移転した。明治36年に12師団から6師団に、同40年に18師団に、大正14年には再び12師団にと帰属が変遷する。昭和20年には朝倉中学校に疎開した。久留米大学医療センター駐車場内に記念碑が残る	575
第一次世界大戦のドイツ兵捕虜の収容施設として大正3年(1914)10月6日に全国16か所の収容所のうち最初に設置される。当初は京町梅林寺、日吉町大谷派久留米教務所に収容され、11月以降に篠山町香霞園、上津荒木村高良台演習廠舎が加わり、同4年(1915)6月に国分町の久留米衛戍病院横に新俘虜収容所を造って1,319人の俘虜を収容した。同8年(1919)6月28日のベルサイユ条約を経て、同9年(1920)3月12日に閉鎖された。この収容所で死亡した11人の墓碑は野中町正源寺公園にある。この国分町の白川遺跡の調査で収容所跡の遺構が検出された	569・575
第18師団隷下として明治41年(1908)10月、三井郡高良内村(現久留米市高良内町下川原)に姫路より移駐する	575
第18師団隷下として明治41年(1908)2月、三井郡国分村(現久留米市南町南小学校・幸田山中学校)に東京・習志野より移駐する。西部第50部隊(捜索第56連隊補充隊等)も駐屯した	575
第18師団隷下として明治41年(1908)3月、三井郡国分村(現久留米市宮花園住宅)に小倉より移駐。西部第54部隊(輜重兵第56連隊補充隊等)も駐屯した	575
第18師団隷下として明治41年(1908)2月、三井郡国分村(現久留米市福岡教育大学附属小・中学校)に熊本より移駐する。西部第51部隊(野砲兵第56連隊補充隊等)も駐屯した	575
昭和14年に久留米予備士官学校が発足、同16年に久留米第二陸軍予備士官学校と改称した。表門は久留米商業の正門西寄りであったという	571
第18師団隷下として明治40年(1907)10月22日創設。翌41年3.12に三井郡国分村(現久留米市南町久留米商業高校)に小倉より移駐する。後に独立山砲兵第3連隊となる。文献5の p190に碑の写真あり	5・575
三井郡上津荒木村(現久留米市上津町・藤山町・藤光町)一帯の山地約100万坪を陸軍省が買収し、明治44年(1911)8月に第18師団諸部隊の演習地とした	575
昭和12年(1937)に浮島に工兵隊の兵舎ができて演習を行っていた。終戦後は兵舎は民間に払い下げられ、西ノ島集落となった	599
梅原末治氏の報告に「其の(大正11年)前後陸軍の演習に当って後円上に二段の壘壕を設けた跡を其の儘に放棄した事」という表現がある。後円部の段築平坦部に掘削された溝状のものがそれであるらしい	28
昭和15年(1940)以降に小倉兵器補給廠の集積所が設置された	556
昭和20年(1945)6月陸軍秘匿。矢部川河川敷内の特攻用飛行場。中ノ島から沈下橋を設置	高谷氏情報
昭和16年(1941)4月の「航空機乗員養成所官制」を受けて通信省の筑後航空機乗員養成所(岡山飛行場)が設置されることとなり、同17年に計画され、同18年測量開始。整地造成され、同7月頃には動員員作業等で建設工事に拍車がかかり、同19年(1944)4月10日に開所式・入所式が挙行された。完成は昭和20年4月とされる。戦後、敷地内は大陸から引き揚げてきた人達の入植が始まり、宅地や農地となった。また、外郭については県道が建設され、一部消滅している。国道442号線バイパス工事に際し一部発掘調査が平成18～19年(2006～2007)に行われた	642・693・694・695
詳細不明	
金比羅宮の近くの山腹に昭和20年(1945)4月頃に掘って造られたが、未完成のまま終戦となった。阿蘇凝灰岩の岩盤を削りぬいて造られる。2本あり、1号は全長120m、幅約4m、高さ4～4.5mほどで枝道が4本ある。司令部壕のような機能であったかもしれない。正面入口の左横に防空壕がある。当初は土(岩盤)がむき出しであったが、現在は床面は煉瓦敷き、壁面はモルタル吹きつけとなり、観光協会が立花ワインセラーほかの用途で活用している。1号の南にある2号トンネルは壁面むき出しのままである	694
昭和20年(1945)6月頃に造る。現状では該当箇所に痕跡は見えない	694
明治40年から昭和18～19年頃まで、凝灰岩質セメント代用土が豊福において生産されていた。火山灰を採掘し、円筒形の炉で焼成したのち、製品を北九州の小倉城兵器庫等へ納入していたとされる。火山灰の採掘穴は戦時中は防空壕としても使われていた	100
国鉄矢部線は終戦後間もない昭和20年(1945)12月26日に開業した。その建設は1936年以降と思われるので、北川内トンネル・長野トンネルは終戦までの間に完成していたのであろう。両トンネル内には軍服や軍備品等が保管されていたとされ、八女市に寄贈された一部の軍服は新品であることから、トンネル完成後、開通までの間に軍の備蓄施設に転用されていたとみられる	2019.8.15西日本新聞(筑後版)
昭和18年の初め頃、大川の江頭木材株式会社・江頭伊三郎が木製飛行機の製作を計画し、同年12月に春日原の九州飛行機製作所に従業員を派遣して技術の習得に当たらせ、19年初めには大川で飛行機製作工場を立ち上げ、3.15には1号機が完成した。その後量産体制に入り、月産120機という成果をあげるまでになった。終戦時までに工場を25棟増築したが、やがて終戦となった。ほかに大川航空機株式会社と古賀・八木・勤労の各航空機製作所があった	
会社の創業は大正11年(1922)に遡り、醸造容器を主製品としてきたが、昭和16年(1941)の太平洋戦争勃発と同時に海軍大村航空廠の軍需(協力)工場となる。同17年以降、主として航空燃料タンク専門工場となって、終戦時には従業員は2,000人を数えたが、終戦と同時に会社は解散した。その後、平和産業として新発足した	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
540	小倉兵器補給廠瀬高疎開地	みやま市	瀬高町本吉(聞き取りによる)	私有地	3生産関係	
541	柳河防空監視哨	柳川市	不明		2軍事・防衛	不明
542	宮浦高射砲陣地	大牟田市	一本町(宮浦公園)	公有地	2軍事・防衛4戦闘地・戦場	上部はすでに撤去されたが、基礎部分(5基)は宮浦公園内に現存
543	大牟田市役所の防空監視哨、防空障壁、高射機関銃台座	大牟田市	有明町	公有地	2軍事・防衛	いずれも現存
544	三井化学(株)大牟田工場(旧三池石油合成(株))	大牟田市	大浦	私有地	2軍事・防衛	塔・トンネルは現存
545	三井化学(株)大牟田工場(旧東洋高圧工業(株))	大牟田市	大浦	私有地	4戦闘地・戦場	被弾したコンクリート壁は現存
546	三井金属鉱業(株)の銀水工場	大牟田市	手鎌	私有地	2軍事・防衛	現存
547	延命公園の高射砲陣地	大牟田市	昭和町(延命公園)	公有地	2軍事・防衛	以前までコンクリートの痕跡が残っていたが、消滅
548	藤田町毘沙門堂	大牟田市	藤田町	私有地	4戦闘地・戦場	いずれも現存
549	藤田町護福寺跡の石造物	大牟田市	藤田町	私有地	4戦闘地・戦場	石造物は確認できなかった
550	一浦墓地の被爆墓石	大牟田市	一浦町	私有地	4戦闘地・戦場	未確認
551	円福寺の被爆地蔵菩薩像	大牟田市	佐古町(円福寺)	私有地	4戦闘地・戦場	現存
552	宮浦公園墓地の被爆墓石	大牟田市	一本町(宮浦公園)	私有地	4戦闘地・戦場	現存。墓石は14基確認
553	乙宮神社下の被爆壁	大牟田市	宮坂町	私有地	4戦闘地・戦場	壁の一部が保存
554	福岡俘虜収容所第17分所:大牟田三池(大牟田俘虜収容所)	大牟田市	新港町	私有地	5居住	消滅
555	大牟田俘虜収容所 第25分所(大牟田俘虜収容所)	大牟田市	小浜町	私有地	5居住	消滅(門は遺存)
556	防空壕	大牟田市	一浦町	私有地	5居住	消滅
557	防空壕	大牟田市	教楽来	私有地	5居住	消滅
558	飯塚防空監視哨	飯塚市		不明	2軍事・防衛	
559	福岡俘虜収容所第22分所:穂波忠隈	飯塚市	忠隈		5居住	
560	福岡俘虜収容所第7分所:飯塚二瀬	飯塚市	二瀬町		5居住	
561	飯塚市の防空壕	飯塚市		不明	5居住	
562	大隈防空監視哨	嘉麻市	嘉徳町宮園(須佐神社)		2軍事・防衛	消滅
563	福岡俘虜収容所第8分所:稲葉町平	嘉麻市	平		5居住	消滅
564	大カイチョウ	嘉麻市	大カ(個人宅)	私有地	8その他	現存
565	小倉兵器補給廠桂川分廠	嘉穂郡桂川町			3生産	不明
566	福岡俘虜収容所第23分所:桂川町平山	嘉穂郡桂川町	土師字新楠町	私有地	5居住	宅地造成により消滅
567	福岡俘虜収容所第26分所:桂川町吉隈	嘉穂郡桂川町	吉隈	私有地	5居住	宅地造成により消滅
568	福岡俘虜収容所第27分所:田川奈良	田川市	大字伊田	私有地	5居住	建物の一部が残存か
569	旧福岡県立田川女子高等学校内防火水槽跡(上本町遺跡)	田川市	上本町	県有地	8その他	記録保存
570	鏡山防空監視哨	田川郡香春町	鏡山	私有地	2軍事・防衛	基礎部分は現存
571	牛斬山の航空灯台	田川郡香春町		不明	2軍事・防衛	不明
572	防空壕	田川郡香春町	高野(鶴ヶ岡八幡宮脇)	公有地	5居住	現存
573	福岡俘虜収容所第5分所:大峰分所	田川郡川崎町	大峰炭鉱宝町		5居住	
574	筑豊鉱山地帯特別警備部隊本部	田川郡添田町	添田(添田郵便局)	私有地	1政治・行政	消滅

内容(年代・由来等)	文献
小倉兵器補給廠が昭和20年(1945)2月28日以降に第16方面軍の兵器廠として山門郡瀬高町に移転準備中に終戦を迎えたとされ、糸島の寺山補給廠(小富士集積所)についても昭和20年(1945)8月には壕内残余のドラム缶を、移転準備中の山門郡瀬高町付近へ移転したという	556・594
昭和13年(1938)4~7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ。柳河防空監視哨の所在地との直接的な関連は不明であるが、関連事項として、昭和9年(1934)10月1日~2日に福岡県全域で行われた夜間の防空演習は、山門郡柳河町においては「京町の川村病院屋上に」監視哨を設けに行い、また「敵機来襲毎に柳河病院屋上より機関銃小銃等発射して応戦した」(「」は柳河新報; 昭和9年(1934)10月6日より引用。資料は柳川古文書館蔵)	646
大牟田の石炭化学コンビナートでは軍需用品も生産されていたため市内に高射砲部隊が駐在するとともに、各地に対空砲が設置された。そのうちの一つである。昭和15年(1940)頃の築造か。大牟田市が平成10年(1998)に整備し、現在は宮浦公園の中に組み込まれて説明板が設置されている。近接して5基あり。高射砲陣地の南側には三井化学工業(株)の検査課があり、昭和20年(1945)8月7日の米軍による空襲で29人が亡くなった。現地には殉戦者之碑が建つ	31・32・669
大牟田市役所屋上にある。監視哨はコンクリート製の円筒形で、高さ約2.2m、直径約2m。窓が5個ある。戦時中の空襲の時、市職員が中に入り、敵機を確認したら「敵機襲来」など伝声管に向かって呼び1階の防空本部に連絡していた。監視哨のすぐ東側の本館壁に密着して防空障壁があり、監視窓2個がある。これらから少し離れてコンクリート建物の上に機関銃台座がある	31・32
石油合成工場の地下に、炭鉱の廃坑道を利用して2,000人を収容できる大防空壕が構築されていたとされ、その地下壕入口(奥の方はアーチ状となる)にはトーチカのような高さ6mほどのコンクリートの塔がそびえている。排気塔らしく見えるが、入口のすぐ近くに排気塔があるのは不自然で、果たして防空壕であるか否か不明。工場内にあり、中に入ることはできない。また、工場内の別地点にトンネル状の構造物(底辺幅6.4m、高さ4.7m)が3基ある。石油貯蔵の倉庫であったものらしい。長さ300mほどで双方に開口するという。防空監視哨は三井化学大浦工場の塀に密着した状態で残っていたが、現存しない。市役所のものよりやや小さかった。防空壕・倉庫の築造時期は明確でないが、昭和18~19年頃か	31・32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲の工場地帯爆撃の際に、東正門の向かい側の崖が被弾した。また2か所の防空壕は入口を塞いだ	32
防空監視哨は、軍需工場として飛行機の胴体などのアルミ板を製造していた旧軽金属工場の構内に残る。高さ2.3m、裾回りは6mを測る。厚さ30cmほどのコンクリート製で西向きに開口する。市役所のものよりやや小さい。防空壕はコンクリート製の地下構造であるが、南北7m、東西18mの長方形で、高さ1.5m程が東西の出入口とともに地上に現れている。天井部には排気口が3個ある。	31・32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲の際、この延命公園の高射砲によりB24爆撃機が撃墜されたという証言がある。戦後に解体され、慰霊塔の近くの現地は痕跡があるのみである	32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田市への4回目空襲で藤田町地域が被爆したが、日本軍が発射した高射砲弾の1発が米軍機の1機に命中、その飛行機が空中分解して藤田町に墜落、積載していた爆弾の爆発で100人近くが被爆死した。毘沙門堂の社殿前にある一対の石製狛犬のうち左側の狛犬が下半身のみを残して破損していたり、石の手水鉢や鳥居が破壊されているのはこの時の空襲によるものである	31・32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田市への4回目空襲の際に、高射砲で撃墜された米軍爆撃機の1機が藤田町に墜落、搭載していた爆弾も藤田町一円に落下、護国寺近くにも2発が落下、爆発した。石造物もその際に散乱した。現在はそのあとに整理された状態である	32
正面の文字が「墓」の一字のみ残る	32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲の際、円福寺の西南10m位の所に爆弾が落ち、境内の延命地藏菩薩像が被弾した。その後セメントで修復されて継ぎ目が見えている	32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲の際、円福寺の東側にあった墓地が投下された爆弾や機銃掃射で被弾し、墓石の中に損壊したものがあつた。墓地はのちに現在地(円福寺の東南)に移転した	32
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲で、三井の東圧や染料の工場群が爆撃された際に、その西側の宮坂町も爆弾が落とされた。その時、西念寺のコンクリート壁や西隣の壁が被弾して無数の穴があいた。既に撤去されている	32
昭和18年(1943)8月10日に福岡俘虜収容所第17分所として大牟田市新港町に開設。三井三池炭鉱の坑内労働に就労する俘虜を収容していた。終戦時収容人員は1,737人。戦後に由利敬裁判が行われた。(文獻44のp90)	32・44・C
昭和19年(1944)9月29日に福岡俘虜収容所第25分所として大牟田市新開町に開設。終戦時収容人員は390人。現在のデンカ小浜集会所の場所にあった。門柱とそれに接続する塀が遺存している	75
崖の下に1基が残る	32
教楽来橋の西から北へ入った所に数基の防空壕が残っている。阿蘇溶結凝灰岩の崖に掘り込まれており、入口は高さ1.8m、幅1m程である	32
昭和13年(1938)4~7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つ	646
昭和20年(1945)1月15日に福岡俘虜収容所第22分所として嘉穂郡穂波村(飯塚市)忠隈に開設。終戦時収容人員は302人	C
昭和18年(1943)5月15日に福岡俘虜収容所第16分所として嘉穂郡二瀬町に労働者クラブを利用して開設する。同12月1日に第10派遣所と改称。同20年(1945)8月に第7分所と改称。終戦時収容人員は547人	C
市内18か所に47本の横穴式防空壕を掘った。観音寺山、八ッ瀬、鯉田の黒岩、堤田、立岩の浦谷、高尾山、下三緒の城屋敷、上三緒の城尾、菘田の五穀神山などで全長851.5mであった	507
昭和13年(1938)4~7月頃に設置されたと思われる。県内18か所に開設された監視哨の一つで、旧大隈警察署内の火の見櫓と考えられる	646
昭和18年(1943)10月3日に福岡俘虜収容所第19分所として嘉穂郡稲葉町平山に開設。同19年(1944)4月19日に第11派遣所と改称。20年8月に第8分所と改称。終戦時収容人員は573人	C
飛行機の搭乗員の目印になっていたとされ、八丁トンネルの嘉麻市側口の個人宅にある	池田氏
昭和16年(1941)以降に小倉兵器補給廠の分廠が設置された。昭和19年(1944)に「宗」軍司令部が桂川国民学校を接収し兵舎にしたとの記述があるが、小倉兵器補給廠桂川分廠と合致するかは不明である	556・580
昭和19年(1944)8月4日に福岡俘虜収容所第23分所として嘉穂郡桂川町平山に開設。終戦時収容人員は194人。捕虜は新楠町の高所にある乙社宅に住み、周囲は高い塀と有利鉄線が張られ、出入り口には軍の分遣隊、衛兵、監視兵を勤務させ、常時警戒する状態であった	580・C
昭和20年(1945)5月10日に、福岡俘虜収容所第26分所として開設。終戦時収容人員は300人。社宅に捕虜を収容した	580・C
昭和20年(1945)5月10日に福岡俘虜収容所第27分所として田川市大字奈良に開設。終戦時収容人員は398人	C
田川市教育委員会が平成29年(2017)に発掘調査を実施した。旧福岡県立田川女子高等学校(現福岡県立西田川高等学校)敷地内に、空襲に備えて昭和18~19年(1943~1944)頃に設置した防火水糟跡であろう	610
昭和18年(1943)に鏡山の寺川内に小倉第14連隊の一班(伍長以下10人)が駐屯し、飛行機の監視所が設置された。当初は寺川内945-2に設置されたが、約1年後に寺川内903-2に移転した。施設は昭和20年(1945)に撤去された	554、『激動の昭和展』冊子
牛斬山(標高580m)の山頂に、昭和18年(1943)、航空機の航路標識のために木製で高さ10mの電柱を建てて自動点滅方式の灯台を設置した。実際の使用はなかったという。昭和21年(1946)7月に撤去した	554
大峰炭鉱へ連行された西欧諸国の捕虜を収容していた施設。昭和18年(1943)1月22日、福岡俘虜収容所大峰分所として川崎町古河炭業所大峰炭鉱宝町に、当時の炭鉱従業員独身寮(千秋寮)を改造してつくられた。同3月1日に第5分所と改称。同12月1日に第8派遣所と改称。1945年8月に第5分所と改称。終戦時収容人員は688人。終戦後に撤去開始。昭和32年(1957)の閉山後、完全撤去。現在は雑草の茂る広場となる	553-p553・C
昭和19年(1944)の初めから終戦まで、添田警察署道場(現添田郵便局)2階の1室に西部第6799部隊が駐在した	607

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
575	小倉陸軍病院 田川分室添田病棟	田川郡添田町	添田小学校	公有地	1政治・行政	消滅
576	赤小学校上赤分校の柱の空襲による弾痕	田川郡赤村	赤村大字赤(上赤分校)	公有地(村)	4戦闘地・戦場	赤小学校上赤分校校舎内に柱の一部を保存
577	防空壕	田川郡赤村	油須原		5居住	
578	防空壕	田川郡赤村	峰岡		5居住	
579	松山城 航空灯台	京都府菟田町	大字松山(松山神社)	私有地	2軍事・防衛	基礎のみ現存
580	平尾台演習場「陸軍用地」標石	京都府菟田町	大字山口	未確認	2軍事・防衛	未確認
581	防空壕	京都府菟田町	神田町2丁目	私有地	5居住	現存
582	菟田港への毒ガス廃棄	京都府菟田町	(菟田港周辺)		8その他	
583	「陸軍用地」標石	京都府みやこ町	勝山上矢山	私有地	2軍事・防衛	現存
584	小倉兵器補給廠豊津集積所	京都府みやこ町	豊津(育徳館高校・中学校地内)	公有地(県)	3生産	戦後の改修工事で消滅。戦前の校舎配置図で想定域は見出し得るか
585	高瀬兵舎炊事場	行橋市	大字高瀬(蓮池堤防西)	私有地	2軍事・防衛	現存
586	高瀬発電機壕	行橋市	大字高瀬(蓮池堤防西)	私有地	2軍事・防衛	コンクリート壁が一部現存
587	岡野バルブ行橋工場	行橋市	西泉4丁目	私有地	3生産	継続して操業中。当初の建物等が残っているかは未確認
588	安川航空電機行橋工場	行橋市	西宮市2丁目	私有地	3生産	安川電機行橋工場として操業中
589	小倉工機部新田原分工場跡	行橋市	大字道場寺	私有地	3生産	2016年閉鎖
590	安浦神社の被弾石造物	行橋市	大字稲童	私有地	4戦闘地・戦場	現存
591	稲童戦災レンガ塀	行橋市	大字稲童727-10 稲童1号掩体壕史跡広場	公有地(市)	4戦闘地・戦場	稲童1号掩体壕前に一部移設
592	築城飛行場(築城海軍航空隊基地)	築上郡築上町、行橋市、京都府みやこ町	築上町西八田、行橋市松原	公有地(防衛省)	2軍事・防衛	航空自衛隊築城基地として現役で使用
593	(1) (築城航空隊)弾薬庫	築上郡築上町	広末	私有地	2軍事・防衛	現存
594	(2) (築城航空隊)通信壕	築上郡築上町	広末		2軍事・防衛	
595	(3) (築城飛行場)発電室、補給倉庫壕	築上郡築上町	赤幡	私有地	2軍事・防衛	現存
596	(4) (築城飛行場)「稲童1号掩体壕」	行橋市	大字稲童字大山1095-24ほか	公有地(市)	2軍事・防衛	市指定史跡 史跡公園内に現存
597	(5) (築城飛行場)稲童地区掩体群	行橋市	大字稲童	私有地	2軍事・防衛	周知の埋蔵文化財包蔵地 一部現存
598	(6) (築城飛行場)誘導路	行橋市	大字稲童	私有地	2軍事・防衛	周知の埋蔵文化財包蔵地、高低差としておおむね現存
599	(7) (築城飛行場)稲童地下通信司令部壕	行橋市	大字稲童ほか	私有地	2軍事・防衛	周知の埋蔵文化財包蔵地、現存。私有地内に開口し立入禁止
600	(8) (築城飛行場)稲童補給壕	行橋市	大字稲童	私有地	2軍事・防衛	埋没
601	(9) (築城飛行場)通信施設(送信所)	行橋市	北泉3丁目ほか	私有地	2軍事・防衛	現存
602	(10) (築城飛行場)水道貯水施設	行橋市	大字道場寺	私有地	2軍事・防衛	現存
603	(11) (築城飛行場)厚川補助飛行場	京都府みやこ町	木山、花熊	私有地	2軍事・防衛	圃場整備により消滅。地域のみ現存
604	(12) (築城飛行場)哨戒塔	京都府みやこ町	未江	私有地	2軍事・防衛	採土により消滅
605	局地戦闘機「紫電改」墜落地	築上郡築上町	小原の山中	私有地	4戦闘地・戦場	機銃による弾痕のある紫電改のプロペラ1枚が小原公民館にて保存
606	小倉兵器補給廠八屋集積所	豊前市	八屋		3生産	不明
607	吉木の被災墓石	豊前市	吉木		4戦闘地・戦場	墓地
608	小松宮親王御成間(おなりのま)	豊前市	宇島	私有地	8その他	民家の一室として現存
609	旧宇島港埠頭	豊前市	宇島(公園)	公有地	8その他	公園

内容(年代・由来等)	文献
昭和20年(1945)6月28日に県立田川中学校(現田川高校)にて開院式が行われた。疎開としての分院設置。添田国民学校(現添田小学校)にも病棟が設置されたが、同日夜全焼	607
昭和20年(1945)8月7日昼頃、アメリカ軍のB29爆撃機が数機あらわれ、赤小学校上赤分校付近に爆弾を投下。その時の爆弾の破片が柱を貫通した跡が残っている	「赤村史」ほか
昭和11年(1936)「史跡松山城址調査二関スル件」のうち、「松山城跡の図」より、本丸(主郭)に航空燈台、旧練兵場の文字が認められる。航空燈台の基礎は現在も残っている	654
明治時代末から昭和20年(1945)まで「下関要塞地帯」の一部で陸軍演習場となり、一般人の立入りは禁止された。標石が台地上に点在する	699
個人宅の庭にある	
東京第2陸軍造兵廠曾根兵器製造所(曾根毒ガス工場)に存した毒ガス弾等が、終戦後に刈田港周辺に投棄された。昭和29・36・41年、平成12・15年などにイペリット弾など多数が発見されている	
みやこ町勝山上矢山から小倉南区にかけての山中に「陸軍用地」の標記がある花崗岩製の標石が散見される。下関要塞関連か?	551
昭和15年(1940)以降に小倉兵器補給廠の集積所が設置された。もともと県東部の代表的県立中学校で現役将校の配属校でもあった故か、戦局の逼迫に伴い造兵廠の兵器や資材等の疎開地に選ばれ、校舎の一部や地内が利用されたとされている	651
蓮池堤防西側の兵舎敷地跡に竈、井戸が現存する	701
蓮池堤防西側の高瀬山に建設された発電所跡。詳細不明。文献132は旧海軍航空隊築城基地発電機施設とする	132-583
昭和16年、陸軍は航空燃料精製設備に必要な高温高圧パルプ生産のため、岡野パルプに行橋工場の建設を命じた(文献697)。昭和19年に操業を開始すると、軍需工場の指定を受けた(文献698)	697-698
明治紡績行橋工場、福島紡績行橋工場を経て昭和19年から安川航空電気株式会社。航空基地用の発電機や飛行機搭載用のスイッチ等を製造	698
小倉工機部の疎開工場で、ふくおか県酪農協行橋事業所跡地にあった	698
昭和20年(1945)の3月18日および8月7日の米軍の空襲により、安浦神社の鳥居・燈籠・狛犬・石段・拝殿などに銃撃の弾痕が残っている	699
昭和20年(1945)8月7日の空襲で機銃掃射を受けた民家の塀。大字稲童山字ノ中ノに所在していたが、道路拡幅により撤去されることとなり、平成29年に一部を稲童1号掩体壕史跡広場に移設した	699
仲津村・築城村・八津田村の1帯145万㎡に昭和14年(1939)12月に飛行場建設が開始され、同17年(1942)10月1日には初代築城海軍航空隊が宮崎県日向市富高において活動を開始した(初代の開隊)。同18年(1943)4月頃には零戦約20機が築城に移動して訓練が始まった。そして筑波航空隊が移動してきて同19年(1944)3月15日をもって第二代航空隊の開隊とする。その8月頃から周辺に掩体壕その他が築造された。飛行場は長さ1800m、幅50mであった	592-629-698-699
昭和19年(1944)9月中頃より測量・設計を始めて工事に着手した。広末の弾薬庫の壕跡は本道250m、脇道の洞穴15か所、丘陵の北と西の裾に15個の入口があった。洞窟の幅は3~3.5m、高さは2~2.5mであり、全長は1,200mに及ぶ、きわめて大規模な施設であった。昭和20年(1945)8月7日には築城基地と周辺の施設が空襲を受けて多くの被害がでた。終戦後、昭和20年12月上旬には、占領軍の監視の下で大量の弾薬等を搬出したという。築上町は2019年に周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡等分布地図に掲載した(文献629のp646図46、45(写真のキャプション「発電室跡」は「弾薬庫跡」が正しい))	54-624-629
広末集落の西側、赤幡に近い所にある。入口はコンクリートで閉鎖されている。昭和13~15年頃に設置か	131-699
壕の跡が残る(文献629のp646図48写真(町誌の「旧海軍弾薬庫跡」のキャプションは「発電室跡」が正しい)。文献699は食料や衣類などを隠していた壕跡とする。どちらも入口は確認できるが、鉄柵およびコンクリートブロックで閉鎖されており、内部の立ち入りは不可	629-699
稲童地区は海軍築城飛行場の北側に位置し、昭和19年(1944)3月に開隊した二代目築城海軍航空隊の周辺に、軍用機を護るための格納庫である掩体が同8月頃に設置された。コンクリート製でトンネル状天井のあるもの7基ほど、コ字状土手で囲まれた天井の無いもの約13基が造られ、鉄筋コンクリート製は4基が残る。「稲童1号掩体壕」は、陸上爆撃機「銀河」「一式陸上攻撃機」「九六式陸上攻撃機」などの大型機を格納するために造られた大規模なもので、盛土幅42m、同高さ8.5m、奥行き23.5m、入口幅26.8m、同高さ5.5m。内部の壁面には、コンクリート打設時に使用した板材やその痕跡、丘陵を掘り下げた土の形跡が明瞭に残り、築造工法がうかがえる。昭和20年(1945)8月7日の空襲で、格納されていた夜間戦闘機「月光」が炎上し、掩体壕正面の壁面や周囲には機関銃の弾痕や投下された爆弾の跡が残る。平成14年(2002)12月12日に行橋市指定史跡となり、発掘調査、補修工事を経て、平成23年(2011)に史跡公園として整備・公開されている	128-132-583-698-699-700-701-702-703
昭和19年(1944)3月に開隊した二代目築城海軍航空隊の周辺に飛行機を護るための掩体が同年8月頃に設置された。コンクリート製でトンネル状天井のあるもの7基ほど、コ字状土手で囲まれた天井のないもの約13基が造られ、鉄筋コンクリート製は4基が残る。「稲童1号掩体壕」と同時期に作られたと見られる掩体(1号と同規模または小型)約30基のうち数基が残る	583-700-701-702-703
築城海軍航空隊の飛行場から掩体壕へ軍用機を避難させるための幅30~40mの誘導路が縦横に造られた。現在は工業団地の道路等になっている	583-699
昭和19年(1944)3月開隊の築城海軍航空隊周辺に、同20年(1945)3月に設置された。地下壕内部には幅3m、天井高2.5mの鉄筋コンクリート造のトンネル状の部屋が5室ある	698-699
昭和19年(1944)3月に開隊した築城海軍航空隊の周辺に設置された施設。立山大師の南側にある	698-699
標高5m前後の微高地に立地し、羽根木地区側と今井地区側の2か所に門があった。施設は土壁で囲まれ、内部には巨大な鉄塔2基、その他建物があった。広大な施設を巡るコンクリート区画や門柱の1部が残る	699
道場寺山(標高71.3m)の山頂付近に4つに仕切られたコンクリート製の貯水槽があった。蔵川から汲み上げられた水が築城基地へ供給された	583-699
昭和17年(1942)開設の築城海軍航空隊の補助飛行場として、昭和20年(1945)に犀川町木山・花熊に設置された。本土決戦に備えて米軍上陸用舟艇を攻撃するための飛行場であったとされる。600×30mの滑走路のほかに着艦訓練塔があり、その基礎コンクリートが今も畑の中に残る(文献591のp547の図)	591-696-699
昭和15年以降20年まで(おそらく18年以降の後半期)。海軍築城飛行場の哨戒のため基地周辺に設けられた哨戒設備の一つで、小規模な監視塔(施設概要は不明だが、木造の火見やぐら程度のものらしい)があったとされる。山麓の末江集落に複数の軍人が寄留して駐在、哨戒任務にあったと地元で語り伝えられている	
昭和20年(1945)8月9日、築城飛行場周辺が空襲を受けた際、防空のため飛び立った局地戦闘機「紫電改」は米軍機との激しい戦闘の上、小原山中に墜落。搭乗員の横堀嘉衛門上飛曹は戦死した	
昭和15年(1940)以降に小倉兵器補給廠の集積所が設置された	556
昭和20年(1945)4月26日の空襲で墓石が損傷した(『豊前市史下巻』[文献667]p258写真)	667
明治18年(1885)4月に宇島一行橋間で行われた日本陸軍初の大演習「明治拾八年四月 広島熊本両鎮台諸兵大演習」に明治天皇名代の小松宮彰仁親王が台覧した際に休憩所として新築された部屋	43
明治18年(1885)の大演習で広島鎮台が演習地に上陸した港であり、また演習はこの地で放たれた一発の砲声より始った。〔※ 陸軍の特別大演習は正式に法制化されたのが明治25年(1892)であるため、同年に行われた近衛、第一、第二の3個師団参加の下に宇都宮で行われたものが最初とされているが、明治18年に豊前地方で行われた演習は天皇統監など特別大演習と諸条件が同じ内容であり、陸軍特別大演習の先駆けと位置づけようかと思われる〕	43

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
610	下原遺跡	豊前市	今市	公有地	8その他	発掘調査後消滅
611	鉄供出痕の残るレンガ塀	豊前市	三楽	私有地	8その他	現存
612	駐留米軍小倉チャペル	北九州市	小倉南区北方5丁目	公有地	1政治・行政	陸上自衛隊小倉駐屯地内に残存している
613	朝鮮戦争の屍体処理所	北九州市	小倉南区	公有地・私有地	1政治・行政	区画整理事業により消滅
614	旧松本家住宅	北九州市	戸畑区一枝1丁目	私有地	5居住関係	現存
615	若松北湊朝鮮人引揚者倉庫	北九州市	若松区北浜		5居住	
616	軍艦防波堤	北九州市	若松区響灘1丁目	公有地	8その他	現存
617	接収住宅	北九州市	八幡東区東鉄町	公・私有地	5居住	建物は建て替わっている
618	接収住宅	北九州市	八幡東区高見1丁目	私有地	5居住	建物は建て替わっている
619	軍需品集積所	古賀市		未確認	8その他	詳細位置不明
620	赤根橋	古賀市	薦野	未確認	8その他	昭和58年コンクリートに架替え
621	花見開拓事業	古賀市		未確認	8その他	現在大半が宅地化
622	聖福病院・聖福寮	福岡市	博多区御供所6(聖福寺)		8その他	
623	GHQ 第118陸軍病院	福岡市	中央区大濠公園		8その他	
624	米軍ハウス	春日市	春日公園7丁目	私有地	5居住	

【碑等】

1001	「軍馬塚」・「日支事変殉難軍馬之碑」	北九州市	門司区清見1丁目	私有地	8その他	境内に現存
1002	フランス水兵戦死者の慰霊碑(唐人墓)	北九州市	門司区大字門司・和布刈公園	公有地	8その他	公園内に現存
1003	門司世界平和パゴダ	北九州市	門司区大字門司・和布刈公園	公有地	8その他	公園内に現存
1004	殉職船員無縁塚	北九州市	門司区大字門司・和布刈公園		8その他	
1005	老松公園と慰霊碑	北九州市	門司区老松町	公有地	8その他	公園内に現存
1006	小倉歩兵第百十四聯隊第七中隊慰霊碑	北九州市	門司区旧門司1丁目	私有地	8その他	境内に現存
1007	清年神社の砲弾	北九州市	門司区清滝4丁目		8その他	
1008	明治天皇上陸碑	北九州市	門司区大里本町2丁目	私有地	8その他	場所は移転したが現存
1009	陸軍大尉香月則久の墓	北九州市	小倉北区清水4丁目(円応寺)	私有地	6埋葬	現存
1010	常陸丸・佐渡丸の碑	北九州市	小倉北区新高田1丁目	公有地	8その他	学校内に現存
1011	足立公園の忠霊塔	北九州市	小倉北区黒原・足立公園	公有地	8その他	公園内に現存
1012	満州事変・上海事変戦病死者合同碑、ロシア兵墓石	北九州市	小倉北区黒原・足立公園	公有地	8その他	公園内に現存
1013	勅諭下賜五十周年記念碑	北九州市	小倉北区黒原		8その他	
1014	「被爆殉難の地」碑	北九州市	小倉北区三郎丸3丁目	公有地	8その他	現存
1015	小倉陸軍造兵廠給水塔(レプリカ)	北九州市	小倉北区・大手町公園	公有地	8その他	現存
1016	旧小倉陸軍造兵廠空襲犠牲者之碑	北九州市	小倉北区・永照寺	私有地	8その他	現存
1017	メモリアル・クロス	北九州市	小倉北区小文字羅漢山	公有地	8その他	現存
1018	第十二旅団司令部跡碑	北九州市	小倉北区城内	公有地	8その他	現存
1019	小倉城の四年式十五榴弾砲	北九州市	小倉北区城内	公有地	8その他	本丸整備に伴い、鉄門付近に移転しているが現存
1020	貴布弥神社の奉納砲弾	北九州市	小倉北区長浜町	私有地	8その他	現存
1021	歩兵第十四連隊碑	北九州市	小倉北区城内	公有地	8その他	現存
1022	軍馬忠霊塔	北九州市	小倉北区城内	公有地	8その他	公園内に現存
1023	第十二師団忠魂碑	北九州市	小倉北区城内(八坂神社横)	公有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
県道建設に伴う平成8年(1996)の発掘調査で、B29から発射された銃弾が出土	651
個人邸宅のレンガ塀の格子窓に鉄格子が切り取られた痕跡が残る	
米占領軍北方キャンプの教会として建設されたもの	
朝鮮戦争(1950.6.25～)で戦死した米軍将兵の遺体(約6万人といわれる)を処理した建物が現在の陸上自衛隊城野補給所にあった。昭和25年(1950)頃の建築か	46
第二次大戦後昭和27年まで進駐米軍に接収され、独身将校宿舎に使用された。洋館は辰野金吾の設計。昭和47年(1972)5.15重要文化財指定	45・104
	30
廃船となった日本海軍駆逐艦3隻(冬月・涼月・柳)を昭和23年(1948)9月に防波堤として海岸に沈めた。3艦の戦没者慰霊碑と「柳」の双?柱が若松区の高塔山にある。「冬月」「涼月」は昭和20年4月7日に鹿児島県坊津津で撃沈された戦艦「大和」の護衛艦として随行していったのちに帰還した艦であった。防波堤に設置後、船体鋼材が持ち去られたり潮で腐食してきたため、昭和37年には「冬月」「涼月」はコンクリートで完全に被覆され護岸の中に埋没した。現在は「柳」の船体の一部を見ることができているのみである。	45・46・555・699
洋館づくりの個人住宅3軒が接収され番号が付けられていた。29号から31号	83
八幡製鐵所旧高等官舎	
終戦後、古賀町役場・農業倉庫、小野村役場・農業倉庫、青柳村役場・学校が、第351師団が保有する軍需品の1次集積所として利用された	109-p274
終戦後、赤城連隊の根本部隊が清滝住民へのお礼として架橋。橋の名も部隊名に由来する	60-p421
昭和21～28年に入植。入植者は引揚者および自作農を目指す近隣住民。しかし砂地のため開拓はうまくいかず、後年工場や住宅地となる	80-p453/p117
戦後、引揚者を支援するための在外同胞援護会救療部本部(昭和23年[1948]解散)、聖福病院(昭和25年[1950]8月非現業共済組合連合会[国家公務員共済組合]聖福病院[千早病院])、聖福寮(昭和27年[1952]いずみ保育園に改称、昭和40年[1965]5月閉鎖)が聖福寺の敷地を借りて設けられた	44
旧通信省福岡簡易保険支局倉舎として昭和9年(1934)3月竣工し、簡易生命保険制度を所管する支局として開設された。終戦後、昭和20年(1945)10.23に米軍が接収、第118陸軍病院として使用された。昭和31年(1956)8.31に接収解除、同32年(1957)3.15に改修工事が竣工し保険支局として再度使われた。同59年(1984)7月に福岡簡易保険事務センターに改組、現在はかんぽ生命保険福岡サービスセンターとして使用	

清見町正蓮寺境内の「軍馬塚」は明治28年(1895)6月28日に沈没した門司丸で亡くなった軍馬57頭を弔うために翌29年(1896)建立された慰霊碑(建立年については文献46は明治29年とし、文献135では明治39年[1906]とする)。「日支事変殉難軍馬之碑」は熱河作戦で死亡した軍馬の慰霊碑で昭和9年(1934)5月に正蓮寺仏教婦人会が建立	45・46・135・555
和布刈公園にあり。元治元年(1864)8月の英米仏蘭四国連合艦隊の下関攻撃の際に戦死したフランス水兵の冥福を祈って明治28年(1895)にフランス人宣教師ピリオン神父により建立された。その後1971年に移設された	45・555
和布刈公園にあり。昭和33年(1958)9月9日ピルマ仏教会・門司市建立	45・117
和布刈公園にあり。関門海峡で遭難した海員の慰霊碑。海事関係者(日本殉職船員顕彰会)が1946.1月に建立し、2000.3月に移設した	45
老松公園は門司港西岸壁の近くにある公園であるが、陸軍の軍需品集積場及び戦死・戦病死者の遺骨や遺品の受取場でもあった。昭和7年(1932)10月23日に門司市は忠魂碑を建立した(文献45は1940.12月建立とする)が、北九州市になって慰霊碑に変わった	45・46・117
甲宗神社境内にある慰霊碑で、第二次上海事変後の戦闘に従軍した第114連隊の生き残った隊員有志が建立したもの。火野葦平の「杭州西湖の思い出」に「が刻まれる(文献46のp42写真;設置年:1968.5)	45・46
境内に砲弾あり。径23.9cm、長約92cm。明治27～28年戦役の際に威海衛砲臺にあったものを記念として取り寄せた旨が台座に刻まれる	E
明治35年(1902)熊本で行われた陸軍大演習を統監するため、明治天皇が大里の浜に上陸したことを記念して、馬車に乗った辺りに松を植え「明治天皇記念之松」の石碑が建てられた	A
満州国とソ連・外蒙との間の国境紛争で最大のものとなったノモンハン事件は、日本陸軍が経験した初めて本格的な近代戦で、昭和14年5月に始まった。この、戦闘で戦死した八幡東区大蔵出身の香月大尉の墓	A
南小倉小学校内(旧陸軍墓地跡)にあり、日露戦争中の明治37年(1904)6月15日に沖ノ島付近でロシア艦隊の攻撃を受け沈没・漂流した陸軍輸送船(日本郵船貨物船)の常陸丸と佐渡丸の死者を追悼した碑。明治38年(1905)11月に第12師団将校が建立。文献5のp181に写真あり	5・45・46・77
南小倉小学校の所の千堂陸軍墓地を改葬、その霊が昭和17年(1942)3月25日建立の足立公園(黒原森林公園)の忠霊塔に移された	45・46・117
昭和8年(1933)に千堂墓地(南小倉小学校内)に建立されたが、昭和34年(1959)7月に小倉遺族会によりこの地に移設される。この碑の両脇にロシア兵墓石及び歩兵第14連隊第8中隊兵士の墓石がある。昭和7年(1932)に建立された小倉出身陸軍元帥杉山元の手による「満州及上海事変戦病死者合同碑」があり、昭和6年の満州事変と、昭和7年の上海事変に出兵し、北方の陸軍病院で亡くなった人を祀っている。そして、碑の両脇に明治44年(1911)、日露戦争で亡くなった日本人兵士と、「露国□貝加爾□胡薩克(コザック)チルチヤンスキー第一連隊」陸軍兵卒ホ□□スワリスキー之墓」と刻まれたロシア人戦死者の墓石がある	46
平和公園にあり。小倉衛戍地現役在郷軍人一同が1932年?に建立	45
昭和19年(1944)6月16日の米軍機 B29による八幡製鐵所等の爆撃により小倉園芸学校生徒が犠牲になったことに関する慰霊碑で、市立三郎丸小学校校庭にある。昭和51年(1976)11月建立(文献45は1977.11月とする)	45・46
昭和8年(1933)11月に開庁した小倉陸軍造兵廠の給水塔で、西側に隣接する高台にあったが、平成7年(1995)11月に解体された。その保存を求めた給水塔保存推進会議を「北九州平和資料館をつくる会」が引き継いで、市当局と折衝した結果、1/6サイズのレプリカで平成13年(2001)8月に大手町公園に復元された。隣接の「小倉陸軍造兵廠跡」碑は平成2年(1990)10月の建立である	45・46・555・699
平成21年(2009)年4月5日に建立された	
朝鮮戦争(1950年6月25日～)で亡くなった米軍兵士を慰霊するために米軍小倉師団 KGD 司令官等により建てられたジュラルミンの十字架で、昭和27年(1952)9月に改築された。「国際連合軍記念十字架」碑もある	45・46
昭和49年3月10日有志によって建立	
大正13年(1924)大阪工廠で製造された野戦砲で、製造番号は251と刻まれている。昭和51年(1976)7月有志による復元記念碑がある。併せて、榴弾も一緒に野外展示されている。榴弾には昭和57年(1982)12月の説明碑文がある	E
明治39年(1906)10月、利島清七が奉納した砲弾がある。径30.2cm、長約64cm	E
昭和8年(1933)3月建立の「歩兵第十四連隊碑」と脇には昭和9年9月小倉教育支会で建立した「奥元帥生誕之地」そして「昭和40年4月1日移転・歩兵第十四連隊関係有志一同」の碑がある	45
八坂神社東門前広場にある昭和17年(1942)10月建立の軍馬の座像。坪根金一による建立。同広場には「日清戦役記念之碑」や忠霊塔もある	45・46・699
大正12年(1923)11月竣工。歩兵第14連隊開設以来の戦没者の忠魂碑で、第12師団長が建立した	45

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1024	廿七八年戦役記念之碑	北九州市	小倉北区城内		8その他	
1025	忠霊塔	北九州市	小倉北区城内		8その他	
1026	長崎の鐘(平和祈念碑)	北九州市	小倉北区城内(勝山公園内)	公有地	8その他	現存
1027	錦秋稲荷神社鳥居	北九州市	小倉北区上到津1丁目	私有地	8その他	現存
1028	砲弾	北九州市	小倉北区妙見町	私有地	8その他	現存
1029	鷲峰山平和観音	北九州市	小倉北区鷲峰山山頂		8その他	
1030	平和之碑	北九州市	小倉北区鷲峰山山頂		8その他	
1031	陸軍兵曹長榛(くぬぎ)哲造の墓	北九州市	小倉南区城野4丁目	私有地	6埋葬	現存
1032	小倉衛戍病院(陸軍)跡の碑	北九州市	小倉南区春ヶ丘	公有地	8その他	現存
1033	野戦重砲第5聯隊跡の碑	北九州市	小倉南区南若園町		8その他	
1034	歩兵第四十七連隊跡の碑(標柱)	北九州市	小倉南区北方		8その他	
1035	騎兵第十二連隊跡の碑(標柱)	北九州市	小倉南区北方		8その他	
1036	西川砲兵中隊戦没碑	北九州市	小倉南区北方		8その他	
1037	忠魂碑	北九州市	小倉南区北方2丁目	公有地?	8その他	現存
1038	勅諭下賜五十周年記念碑	北九州市	小倉南区(陸自小倉)		8その他	
1039	「嗚呼忠烈ユフタ之戦士」石碑	北九州市	小倉南区(陸自小倉)		8その他	
1040	乃木希典像	北九州市	小倉南区(陸自小倉)		8その他	
1041	元帥杉山元之像	北九州市	小倉南区(陸自小倉)		8その他	
1042	勅諭の碑	北九州市	小倉南区(陸自小倉)		8その他	
1043	長尾長行の忠魂碑	北九州市	小倉南区長尾6丁目(長行)		8その他	
1044	徳吉兩谷の戦没者慰霊碑	北九州市	小倉南区徳吉南1丁目	公有地	8その他	現存
1045	朽網の支那事変・大東亜戦争戦没者慰霊平和祈念之塔	北九州市	小倉南区朽網東1丁目	私有地	8その他	現存
1046	曾根新田の忠霊塔	北九州市	小倉南区曾根新田北3丁目		8その他	現存
1047	葛原の慰霊	北九州市	小倉南区葛原4丁目	私有地	8その他	現存
1048	開拓碑	北九州市	小倉南区平尾台	不明	8その他	現存
1049	日露戦役記念碑	北九州市	小倉南区曾根新田南二丁目	私有地	8その他	現存
1050	坪根吉太郎碑	北九州市	小倉南区大字井手浦(林道入口、井手浦)	私有地	8その他	現存
1051	日露戦役記念碑	北九州市	小倉南区大字木下	私有地?	8その他	現存
1052	日露戦争での捕獲弾	北九州市	小倉南区朽網東	私有地	8その他	現存
1053	戸畑の戦没者慰霊塔	北九州市	戸畑区夜宮1丁目1番(夜宮公園)	公有地	8その他	現存
1054	皇太子殿下乗船地碑	北九州市	戸畑区烏旗町	公有地?	8その他	現存
1055	鞘ヶ谷戦災死三十一柱之碑	北九州市	戸畑区西鞘ヶ谷		8その他	現存
1056	高塔山の忠霊塔	北九州市	若松区白山3丁目・高塔山公園	公有地	8その他	現存
1057	駆逐艦戦没者慰霊碑・「柳」の双?柱	北九州市	若松区・高塔山公園		8その他	現存
1058	「肉弾三勇士」記念碑	北九州市	若松区・高塔山公園		8その他	現存
1059	朝鮮人遭難慰霊碑(若松沖遭難者慰霊碑)	北九州市	若松区小田山墓地	公有地	8その他	現存
1060	日露戦役記念	北九州市	若松区大字安屋脇田	私有地	8その他	
1061	戦没者無縁仏投身者霊供養	北九州市	若松区大字小竹	私有地	8その他	現存
1062	国土防衛戦士之碑	北九州市	若松区修多羅		8その他	
1063	小伊藤山公園慰霊碑	北九州市	八幡東区尾倉	公有地	8その他	現存
1064	小伊藤山復興平和記念像	北九州市	八幡東区尾倉		8その他	現存
1065	戦災殉難者之碑	北九州市	八幡東区高見(谷口公園)	公有地	8その他	現存
1066	皿倉山高射砲中隊碑、馬塚	北九州市	八幡東区大字尾倉	公有地	8その他	軍道と馬塚のみ現存

内容(年代・由来等)	文献
八坂神社前にあり。建立年月日、建立者不明	45
八坂神社前にあり。昭和13年(1938)10月建立	45
被爆地長崎市から、当日の原爆第一投下予定地であった小倉へ昭和51年(1976)8月に贈られた鐘	
小倉陸軍造兵廠内に奉られていた錦秋稲荷神社の鳥居が、戦後に津八幡神社境内に移転されている	
妙見神社内にあり。富野区の中村作次郎、福永松次郎、横内寅吉、椎木竹蔵によって寄進	
昭和41年(1966)3月建立	45
野戦重砲兵第20連隊戦没者慰霊の碑で、昭和47年(1972)9月に九州奨徳会が建立	45
明治10年(1877年)西南戦争に従軍した小倉駐屯の熊本鎮台歩兵第14連隊(連隊長乃木希典少佐)は、2月22日熊本へ前進中、植木南方の向坂で薩摩軍の攻撃をうけ、連隊旗を奪われた。責任を感じた乃木少佐は自決しようとしたが、これを止めたのが樺兵曹長であった。この兵曹長の行動を称え、在郷軍人会がこの墓を建てた	A
現在の国立病院の正門に入って右手にある。もとは衛戍(えいじゅ)病院で、後の陸軍病院である(碑の設置年:1985.6月)	45・46
企救中学校敷地内にある(設置年不詳)	46
歩兵第47連隊は、明治29年(1896)9月に歩兵第12旅団に編入、連隊本部を同年11月歩兵第14連隊内に開設、11月11日に編成が完結した。同30年7月20日に北方の新築兵舎に移動。軍縮により大正14年(1925)5月1日に大分へ移動、昭和15年11月30日に第48師団(海)に属する(文献5のp121に標柱写真あり)。昭和40年(1965)4月建立	5・45・77
騎兵第12連隊は、明治29年(1896)11月11日に第6師団馬調教所において第1中隊創設、同30年9月1日に第12師団隷下となり9月15日に小倉北方東葉村兵舎に移動。軍縮により大正14年(1925)5月1日に久留米へ移動、昭和15年8月5日に廃止される(文献5のp122に標柱写真あり)	5・77
シベリア出兵の際の大正8年(1919)2月26日、黒竜江省ユフタ附近で、西川達次郎大尉指揮の野砲兵第12連隊第5中隊の36人が過激派軍と戦闘の末に全滅した。その戦没碑である。文献5のp254に写真あり	5・77
昭和3年(1928)11月に帝国在郷軍人会企救町分会によって建てられた忠魂碑	A
陸上自衛隊小倉駐屯地にあり。昭和7年(1932)4月建立	45
陸上自衛隊小倉駐屯地にあり。シベリア出兵戦死者35人の慰霊のために野戦重砲兵第6連隊が1921年に建立したものを昭和38年(1963)2月に再建した	45
陸上自衛隊小倉駐屯地にあり。歩兵第14連隊関係有志が昭和40年(1965)4月建立	45
陸上自衛隊小倉駐屯地にあり。顕彰会が昭和42年(1967)9月に再建した	45
陸上自衛隊小倉駐屯地にあり。野戦重砲兵第5連隊の戦友会が昭和47年(1972)1月に再建した	45
大正4年(1915)11月建立。阿弥陀寺が管理する	117
両谷公民館(市民センター)横にある。昭和41年(1966)8月建立	117
支那事変・大東亜戦争戦没者慰霊平和祈念之塔。朽網貴船神社境内にある。昭和52年(1977)4月建立	117
龍王寺境内にある。昭和32年(1957)1月建立。日清・日露戦争以降の戦没者の慰霊	117
葛原八幡神社境内にある。昭和45年(1970)9月建立	117
第二次世界大戦後の食糧不足に対処するため、昭和22年(1947)より陸軍演習場用地を海外からの引揚者や戦災者に払い下げを行った。その結果、55世帯が開拓者として入植したが、生活苦や体力の限界などで下山する人々もあいつぎ、開拓の苦勞は想像を絶するものであった。これら開拓の苦勞を回顧し開拓者37人によって記念碑が建立された	A
綿津見神社境内に明治39年(1906)新田区が建立した「日露戦役記念碑」がある	
軍艦瀬瀬は、明治34年(1901)イギリスの造船所で建造され、同37年(1904)日露戦争に於いて第1戦隊の旗艦として参戦したが、旅順港外を哨戒中、ロシア軍が敷設した機雷に触れ沈没した。その時、乗員834名中493名が死亡。この碑は亡くなった坪根吉太郎を偲んで日露戦友軍人によって明治39年(1906)に建立されたもの	A
旧国道322号脇にある。碑の石材は石灰岩か	
(貴船神社)明治39年(1906)9月出征軍人によって献納された日露戦争での捕獲弾の碑がある	A
戸畑市社会福祉協議会(慰霊塔建設期成会)により昭和33年(1958)8月27日不起工、同34年1月19日完工、同2月13日に竣工式を行った。370柱の英霊を祀る(文献631のp1123写真)	45・117・631
明治33年(1900年)10月、当時の皇太子殿下(後の大正天皇)が、中原で行われた小倉12師団の演習をご覧の後、船で八幡製鉄所方面を視察された時の「乗船地」を記念して建てられた碑。題字は、黒田家13代の黒田長成の書	A
新日鉄住金社宅集会所横にあり。1945年8月の八幡空襲の死者を悼み、鞘ヶ谷運営協議会(日本製鐵鞘ヶ谷住宅)が昭和29年(1954)8月建立	45・A
昭和30年(1955)12月20日に「若松市忠霊塔建設期成会」が結成され、同32年(1957)4月15日に起工、同9月15日に竣工した。塔の設計は安永良徳、題字は靖国神社宮司の筑波藤麿が揮毫した(文献704のp1042写真)	45・117・704
若松海友会により駆逐艦「涼月」「冬月」「柳」乗組員の戦死者を慰霊するために昭和51年4.7に建立された。また、慰霊碑横に「柳」の双?柱が設置されているが、鉄製の腐食が著しい	45・E
昭和7年(1932)の建立か? 碑文は撤去される	45
昭和20年(1945)9月17日の台風後に若松海岸一帯に百数十人の朝鮮人遺体が打ち上げられた。遺体は小田山墓地の一角に埋葬されたが、のち平成2年(1990)12月に慰霊碑が建立された。碑の裏面に「1945年、第二次世界大戦の終結のときに、強制連行などにより日本に在住していた朝鮮人が、祖国をめざして帰郷を急ぐ途中若松沖で遭難されました。その遺体がこの地に眠っています。慰霊の意を込めて、この碑を建立するものです。」と刻まれる(文献46のp101)。米軍の機雷による沈没との説もある	30・46
八幡神社参道入口に記念碑が建っている	
妙見神社境内に、昭和63年(1988)孟蘭盆に上野正廣によって建立	
1938年2月の高射砲発射事故で死亡した兵士4人の慰霊のため国防婦人会若松支部が建立	45
昭和27年(1952)8月に建立。昭和20年(1945)8月8日の米空軍による焼夷弾攻撃で小伊藤山周辺に造られていた6か所ほどの防空壕に避難した約300人が死亡した。その慰霊碑である	46・555
サンフランシスコ講和条約(昭和26年9月8日)の締結をうけて、「再生日本としての画期的なこの講和を永遠に記念するため」に設置され、昭和28年5月3日に除幕式が行われた。像の製作者は樽谷清太郎	
昭和20年(1945)8月8日の八幡大空襲による死傷者は2,780人、罹災戸数は14,380戸であった。この空襲犠牲者の慰霊碑が市立谷口霊園に昭和25年(1950)8月8日に建立された。文献41では昭和30年(1955)8月8日建立(同60年3月改修)とされる	41・46
第二次世界大戦中、山頂に設けられていた高射砲陣地で使役されていた軍馬の墓で、昭和19年(1944)9月15日戦死と記され、碑は昭和59年(1984)9月再建となっている	A

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1067	大正七・八年戦役記念碑	北九州市	八幡東区諏訪2丁目(枝光)	私有地	8その他	現存
1068	忠魂碑	北九州市	八幡東区諏訪2丁目(枝光)	私有地	8その他	現存
1069	戦争犠牲者の碑	北九州市	八幡東区山王3丁目	公有地	8その他	現存
1070	戦没者慰霊碑	北九州市	八幡東区祇園原町(龍潜寺)	私有地	8その他	現存
1071	満州国承認記念碑	北九州市	八幡東区勝山1丁目(大蔵)	公有地?	8その他	現存
1072	B29体当たり撃墜の碑	北九州市	八幡西区大膳1丁目	不明	8その他	現存
1073	奉安殿	北九州市	八幡西区楠橋上方	私有地	8その他	現存
1074	木屋瀬の慰霊の碑	北九州市	八幡西区木屋瀬3丁目	私有地	8その他	現存
1075	香月の慰霊碑	北九州市	八幡西区香月中央	公有地	8その他	
1076	折尾鷹見神社の水雷	北九州市	八幡西区南鷹見町	私有地	8その他	現存
1077	戦役従軍記念碑	北九州市	八幡西区南鷹見町	私有地	8その他	現存
1078	北亜凱旋記念	北九州市	八幡西区南鷹見町	私有地	8その他	現存
1079	戦捷(せんしょう)記念	北九州市	八幡西区陣原5丁目	私有地	8その他	現存
1080	春日艦備砲	北九州市	八幡西区本城2丁目(八剣神社)	私有地	8その他	現存
1081	大正七八年出征記念碑・日清戦争凱旋記念碑	北九州市	八幡西区上上津役1丁目(熊野神社)	私有地	8その他	現存
1082	大東亜戦争醸出記念コンクリート製梵鐘	北九州市	八幡西区木屋瀬3丁目(西元寺)	私有地	8その他	現存している
1083	ニコルソン中尉碑	北九州市	八幡西区西曲里町	公有地	8その他	設置場所と碑は新しくなったが、熊西緑道内に建っている
1084	慰霊碑・戦役記念	北九州市	八幡西区穴生2丁目	私有地	8その他	現存
1085	垣生公園の慰霊塔	中間市	(垣生公園)	公有地	8その他	現存
1086	忠魂碑(平和碑)	中間市	御座ノ瀬山	公有地	8その他	現存
1087	常陸丸殉難勇士之碑	遠賀郡芦屋町	西浜	公有地(町)	8その他	現存
1088	芦屋町戦没者慰霊塔	遠賀郡芦屋町	船頭町区8番(中央公園)	公有地(町)	8その他	現存
1089	十字架の塔	遠賀郡水巻町	古賀3丁目	公有地(町)	8その他	十字架の塔として整備されている
1090	水巻町戦没者慰霊塔	遠賀郡水巻町	頃末北4丁目	公有地(町)	8その他	現存
1091	戦捷記念碑	遠賀郡水巻町	頃末北2丁目	私有地	8その他	現存
1092	明治三十七・八年戦役記念碑	遠賀郡水巻町	二西4丁目	私有地	8その他	現存
1093	明治卅七八年日露戦役従軍記念	遠賀郡水巻町	立屋敷3丁目	私有地	8その他	現存
1094	戦捷記念碑	遠賀郡水巻町	吉田東4丁目	私有地	8その他	現存
1095	戦捷記念碑	遠賀郡水巻町	猪熊4丁目	私有地	8その他	現存
1096	故海軍少佐・軍神古野繁實墓(従六位勲五等功三級)	遠賀郡遠賀町	大字虫生津	私有地	6埋葬	山林内に所在。父母の墓と隣接
1097	戦没者慰霊塔	遠賀郡遠賀町	大字別府	公有地	8その他	
1098	吉岡禪寺洞句碑	遠賀郡遠賀町	大字虫生津(高田神社)	私有地	8その他	
1099	故海軍機関兵 吉田秀之碑	遠賀郡遠賀町	大字虫生津	私有地	8その他	山林内に所在
1100	陸軍中尉 縄手可夫・縄手恒實之墓	遠賀郡遠賀町	大字虫生津	私有地	8その他	山林内に所在
1101	日清日露戦争従軍記念神門一対	遠賀郡遠賀町	大字別府(今泉神社)	私有地	8その他	
1102	明治三十七・八年戦没記念石燈籠	遠賀郡遠賀町	大字別府(貴船神社)	私有地	8その他	
1103	明治三十七、三十八年戦勝記念石燈籠一対	遠賀郡遠賀町	大字尾崎(牟田神社)	私有地	8その他	
1104	大東亜戦忠魂碑	遠賀郡遠賀町	大字尾崎(牟田神社)	私有地	8その他	
1105	西伯利亚出征記念手洗盤	遠賀郡遠賀町	大字鬼津(貴船神社)	私有地	8その他	
1106	日露戦役記念碑	遠賀郡遠賀町	大字鬼津(貴船神社)	私有地	8その他	北側・東側のマメツが著しい
1107	日露交戦々勝祈願石灯籠一対	遠賀郡遠賀町	大字鬼津(地主神社)	私有地	8その他	
1108	明治三十七・八年戦役凱旋記念狛犬一対	遠賀郡遠賀町	浅木(浅木神社)	私有地	8その他	
1109	日露戦役凱旋記念神門一対	遠賀郡遠賀町	大字若松(宗宗寺)	私有地	8その他	隣接して所在

内容(年代・由来等)	文献
大正9年(1920)7月26日に建立された大正7・8年戦役記念碑	A
大正15年(1926)10月、帝国在郷軍人会枝光分会によって建立	
昭和19年(1944)8月20日16時頃、八幡空襲のため来襲した米軍爆撃機との戦闘により、被弾した日本軍戦闘機がこの地にあった民家に墜落し、住民4～5人が犠牲となった。このため、この地を公園とし、慰霊碑を建て永く犠牲者の霊を弔うこととなった	A
昭和20年(1945)8月8日の空襲で亡くなった俳林商会八幡工場の被害者の慰霊のため、昭和42年(1967)に建立	
昭和7年(1932)9月15日に建立された旗柱台	
昭和19年(1944)8月20日に B29約80機が北九州を爆撃した。これらの B29 に対して小月基地から迎撃に出た「屠龍」の1機が体当たりを行い2機の B29 が墜落した。その体当たり勇士を顕彰する碑である(設置年:1944年10月)	45・46
もと楠橋小学校にあった奉安殿が旗原八幡宮境内に昭和22年(1947)頃に移設されて「招魂社(元楠橋小奉安殿)」として現存する	46
昭和30年(1955)4月建立	117
昭和38年(1963)に香月遺族会が建立	117
鷹見神社にあり。日露戦争で使用された海軍の水雷であり、説明板には出光万兵衛海軍中將と古野縫之助陸軍中將が奉納したとされる。径約106cm。なお、第二次大戦中の鉄製品供出の際には、軍からの奉納品であることを理由に拒否した	A
鷹見神社境内に大正3年(1914)ないし9年(1920)の戦役従軍記念碑あり	
鷹見神社にあり。大正8年(1919)8月3日、出征軍人によって建立	A
旗頭神社にあり。明治39年(1906)3月建立の「戦捷記念」に平成3年(1991)11月に平成修築記念の修築物が載っている	
軍艦「春日」の砲を奉納していた台座で、大正12年(1923)8月産子によって建立。砲は、海軍省より下附。砲は、戦時中に供出されたものか。その他、「明治二十七八役戦勝記念」と「征清之祈凱旋安全依以建之」と刻まれた明治28年(1895)9月10日建立の鳥居がある	A
大正8年(1919)10月に建立された出征記念碑と日清戦争の凱旋記念碑	A
第二次世界大戦中に梵鐘を供出した記念として、コンクリート製の梵鐘がある	A
昭和22年(1947年)11月、米軍のニコルソン中尉が乗っていた飛行機が黒崎上空で故障。住宅地に墜落することを避けるため、最後まで操縦して亡くなった	
穴生鷹見神社境内に、穴生長生会連合が昭和55年(1980)5月建立した大東亜戦争戦没者を祀る慰霊碑がある。また、出征軍人によって建立された「明治三十七八年戦役記念」の土台石が残っている	
昭和44年(1969)10月1日建立	117
分会長 金子次郎七、分会副長 船津新三郎・岡部直敏・久野伊造・大八木保・長野正之・石井篤介・牧野喜一・齋田一道を建設委員として、八幡市黒崎の石工、一田孝雄によって、昭和35年(1960)4月17日に建立され、昭和46年(1971)4月に当該地に移転改築した。施工者は冷牟田建設株式会社である。ただ、どこから移転したのか詳細な資料はない	特になし
日露戦争中の明治37年(1904)6月15日に陸軍輸送船(日本郵船貨物船)の常陸丸と佐渡丸が玄界灘の沖ノ島付近を航行中、ロシア艦隊から攻撃を受け、常陸丸は沈没して近衛歩兵第一連隊の将兵742人が亡くなった。碑は若原町先賢顕彰会が浜崎海岸に建立し、竣工して昭和18年(1943)6月15日に慰霊祭が行われた(文献46の p51写真、文献503の p470写真・文献503の旧版 p458写真)	46・503
中央公園にある。昭和37年(1962)7月8日に着工し、同年12月10日に竣工して慰霊祭を行った。416柱をまつる(文献503の p501写真)	117・503
日本炭礦(株)遠賀鉱業所では連合国軍の外国人捕虜を労働者として受け入れ、強制労働をさせた。終戦直後の昭和20年9月、会社は収容所の南の丘の中腹に木製の十字架を建て、捕虜を手厚く葬っていることを示そうとした(実際には埋葬はされていない)。その後、1985年に地元の「水巻町十字架の墓標・文化と平和を育む会」によりオランダ兵捕虜を慰霊する「十字架の塔」が建てられた	118・679・680
頃末小学校内にあり。昭和38年(1963)3月建立。525名の戦没者芳名あり。管理者は水巻町遺族会。靖国神社宮司筑波藤磨筆	117
伊豆神社にあり。大正2年(1913)3月建立。文献680の p572	680
八所神社にあり。明治42年(1909)5月、日露戦争の戦勝を記念して建立。文献680の p573	680
八剣神社にあり。建立年不詳。明治37・38年日露戦争の従軍を記念して陸軍砲兵曹長熟一等功七級 入江耕造が建立	
貴船神社にあり。大正10年(1921)9月建立。文献680の p573	680
明治43年(1910)1月、日露戦争(1904～1905)戦勝記念として建立。文献680の p572	680
日本の海軍軍人で、特殊潜航艇「甲標的」艇長として昭和16年(1941)12月8日の真珠湾攻撃に参加し、戦死した九軍神の一人の墓。昭和17年5月6日に遠賀村葬が行われる。墓碑銘は艦隊司令長官・海軍中將清水光美が揮毫し、右側面には辞世の句「君がため何か惜まぬ若櫻 散って甲斐ある命なりせば」と「昭和十六年十二月八日ハワイ真珠湾特別攻撃隊に参加し戦死す 彦市三男 行年二十四歳」の銘文がある。昭和28年(1953)12月8日建立	40・68・69・106
遠賀中学校内にあり。昭和39年(1964)5月、町制施行を機に建立(文献544の p960写真・文献117の p41写真は同じ)	117・544
昭和18年(1943)1月、明治・大正・昭和にわたり俳句の革新に志した俳人・吉岡禪寺洞が虫生津の軍神古野少佐の霊を拝し、作句した四句中の一句を刻んだ碑。この句碑は禪寺洞のものとして第六番目のもの。「野の果に貝塚はあり 虫生津春日 禪寺洞」裏面には「一九六八・四」とある	40-p89～91、544-p713～715
建立年不明。熟八等。日露戦争時に日本海軍の敷島型戦艦の3番艦として参加した「初瀬」の機関兵として乗務し、明治37年(1904年)2月9日からの旅順口攻撃の際に20才で戦死	
建立年不明。墓の銘文によると、繩手可夫は大正3年(1914)11月、繩手恒實は昭和17年2月に戦死と記される	
神門西側 南銘文「神威振八紘」、東銘文「上段：日清戦役従軍、下段：[5人の名前]」、北銘文「上段：日露戦役従軍、下段：[4人の名前]」、南銘文「上段：[マメツ不明]、下段：[4人の名前]」 / 神門東側 南銘文「聖徳輝四海」、北銘文「上段：明治四十年十一月建之、下段：[マメツ不明]」、東銘文「[5人の名前]」、西銘文「[5人の名前]」	
建立年不明。「明治三十七・八年戦没記念」、「永田伊八郎」、「原田熊吉」	
建立年不明	
碑の裏面の銘文に昭和31年3月に尾崎遺族一同・在郷軍人会が建立したこと、台石に20人の軍人名と石工名を刻む	
大正10年(1921)2月建立。個人名を年令順に3人と石工名を刻む	
碑南側銘文「明治四十年一月凱旋軍人建●」、碑東側銘文「従六位熟四等 西谷●●」。台石北側銘文「凱旋軍人●順、[13氏名あり]」	
吉浦兼蔵「献 明治三十七年 日露交戦」燈 三月吉日 戦勝祈願	
明治40年(1907)3月建立。寄附者17人の名を刻む	
明治40年(1907)8月建立。神門の南側に「日露戦役」、北側に「凱旋記念」と、それぞれ2人ずつの名を刻む	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1110	大東亜戦忠霊塔	遠賀郡遠賀町	大字若松(宗栄寺)	私有地	8その他	隣接して所在
1111	岡垣町戦没者忠霊塔	遠賀郡岡垣町	野間697-1	公有地	8その他	戦没者慰霊祭時に塔の清掃等を行う
1112	藤村千太郎墓碑	直方市	大字中泉	公有地	6埋葬	現存
1113	阿部積次墓碑	直方市	大字感田	公有地	6埋葬	現存
1114	福地村(上境)忠魂碑	直方市	(鞍手郡福地村)上境(上境公民館)	私有地	8その他	現存
1115	多賀公園忠魂塔	直方市	直方770(多賀公園)	公有地	8その他	現存
1116	上境御霊宮	直方市	上境(福地神社)	私有地	8その他	現存
1117	頓野戦没者之碑	直方市	頓野(近津神社)	私有地	8その他	現存
1118	植木招魂社	直方市	植木	私有地	8その他	現存
1119	上頓野殉国英霊之碑	直方市	上頓野(安入寺公民館)	私有地	8その他	現存
1120	上頓野忠霊塔	直方市	上頓野藤田丸	私有地	8その他	現存
1121	袴着福松碑	直方市	大字下境	私有地	8その他	移設現存
1122	室木六嶽神社日露戦役記念碑	鞍手郡鞍手町	大字室木	私有地	8その他	現存
1123	木月剣神社戦没従軍記念之碑	鞍手郡鞍手町	大字木月	私有地	8その他	現存
1124	木月剣神社戦没者慰霊碑	鞍手郡鞍手町	大字木月	私有地	8その他	現存
1125	六嶽神社日露戦争記念碑	鞍手郡鞍手町	大字八尋	私有地	8その他	現存
1126	室木区忠魂碑	鞍手郡鞍手町	室木	私有地	8その他	現存
1127	西川校忠魂碑	鞍手郡鞍手町	西川	公有地	8その他	不明
1128	新延剣神社忠魂碑	鞍手郡鞍手町	新延	私有地	8その他	現存
1129	剣町慰霊塔	鞍手郡鞍手町	大字中山上新橋	公有地	8その他	現存
1130	戦没者名簿	鞍手郡鞍手町	大字中山上新橋	公有地	8その他	
1131	西川村忠霊塔	鞍手郡鞍手町	大字新延島公園	公有地	8その他	現存
1132	戦没者名簿	鞍手郡鞍手町	大字新延島公園	公有地	8その他	
1133	古月村慰霊塔	鞍手郡鞍手町	大字木月松隈	公有地	8その他	現存
1134	戦没者名簿	鞍手郡鞍手町	大字木月松隈	公有地	8その他	
1135	忠魂碑	鞍手郡小竹町	大字御徳	公有地	8その他	現存
1136	太蔵西区慰霊塔	宮若市	太蔵西区	公有地	8その他	現存
1137	霊験寺忠魂碑	宮若市	下有木(霊験寺)	私有地	8その他	現存
1138	極楽寺忠魂碑	宮若市	太蔵中区(極楽寺)	私有地	8その他	現存
1139	福丸忠魂碑	宮若市	福丸・日吉神社	私有地	8その他	現存
1140	大東亜戦戦没者之霊	宮若市	脇田	公有地	8その他	現存
1141	平和の慰霊碑	宮若市	山口	公有地	8その他	現存
1142	殉難烈士山崎羔三郎君之碑	宮若市	山口	公有地	8その他	現存
1143	征露記念之楠	宗像市	日の里3丁目	私有地	8その他	碑の傍に楠が立つ
1144	日露戦役記念之楠	宗像市	東郷1丁目	私有地	8その他	碑の傍に楠が2本立つ
1145	日露戦役従軍祈念樹	宗像市	大徳	私有地	8その他	碑は抜かれて境内隅に放置状態
1146	日露戦役記念碑	宗像市	村山田	私有地	8その他	現存
1147	龍神社の記念碑	宗像市	大井	私有地	8その他	現存
1148	上海事変記念碑	宗像市	赤間6丁目	私有地	8その他	現存
1149	旅順開城記念樹	宗像市	赤間6丁目	私有地	8その他	現存
1150	赤間地区慰霊塔	宗像市	赤間6丁目	市有地	8その他	
1151	赤間須賀神社の砲弾	宗像市	赤間		8その他	
1152	宗像郡鎮魂碑	宗像市	東郷		8その他	消滅
1153	宗像郡彰忠碑	宗像市	東郷		8その他	消滅
1154	陵巖寺慰霊塔	宗像市	陵巖寺字寺田		8その他	消滅
1155	吉武慰霊塔	宗像市	吉武字吉留		8その他	現存
1156	須恵忠魂碑(河東地区慰霊塔)	宗像市	須恵1丁目	市有地	8その他	現存
1157	原町忠霊塔	宗像市	原町字松ヶ崎		8その他	現存
1158	田熊忠魂碑(東郷地区慰霊塔)	宗像市	田熊字中尾		8その他	現存
1159	尾降神社日露戦争戦捷記念碑	宗像市	三郎丸(尾降神社)		8その他	不明

内容(年代・由来等)	文献
裏面の銘文には「昭和三十年丙申五月十七日建之 遺族一同」とあり、台石の西側は上下段に8人の軍人とその遺族、同北側は上下段に7人の世話人と遺族の名が記される	
岡垣町役場内にあり。昭和39年(1964)5月建立。岡垣町の昭和6～20年(1931～1945)の戦没者は合計394人であった(文献532のp449写真)	117・532
日清戦争に従軍、明治27年(1894)11月23日、盛京省長領子の戦いで30歳で戦死した藤村千太郎の墓碑。同30年、時の通信大臣・末松謙澄が撰文した	65
日露戦争に従軍し、明治37年(1904)9月、遼陽で銃弾に倒れ27歳で戦死した阿部積次の墓碑	65
大正11年(1922)に上境公民館横に、福地村出身者で西南戦争から明治37～38年(1904～1905)の日露戦争までの戦死者5人の慰霊のために建立される。碑表題字は田中義一(文献65のp11絵)、碑文は武谷水城の撰・書〔文献117に大正3年再建とあるものは年代が違うが同一?〕	65・117・645
題字は東郷平八郎の筆になるが、設立年月日等は破損のため不明(文献117に多賀神社公園の忠魂碑が昭和14年[1939]建立、平成15年[2003]11月再建とあるが、同一か?)。平成5年(1993)改修「忠魂塔」の題字は再利用	65・117
昭和42年(1967)10月建立 御霊宮建設委員長 舌間信次郎。鳥居には「明治百年記念 上境氏子中 昭和43年10月建立」と刻まれている	117
昭和42年(1967)4月20日建立 福岡県知事 亀井光吉	117
上町天満宮境内にあり。大正9年(1920)9月建立	117
コミュニティバス竜王峡バス停終点にあり。昭和37年(1962)3月建立。遺族会長 上川兎吉謹書	117
昭和57年(1982)3月建立。宮近正書	117
明治33年(1900)台湾守備隊に従軍中に衛戍病院において24歳で戦病死亡した袴着福松の碑。同34年建立「友人 石川廣成識之」。当初境内の経蔵と大師堂の間にあったが、現在は光福寺南側の墓地に移設	
室木六嶽神社にあり。大正3年(1914)12月1日建立	
木月剣神社にあり。明治42年(1909)10月建立	
木月剣神社にあり。昭和57年(1982)8月15日建立	
六嶽神社にあり。明治35年(1902)10月建立	
室木区の六ヶ岳神社境内にあり。大正14年(1925)6月4日に落成式が行われた(文献578の巻頭グラビア写真)。大正4年の建立であり、落成式は14年ではなく4年の誤りかと思われる	578
昭和3年(1928)7月15日に除幕式が行われた。村が建設したもの。西川校内に碑があったかと思われる場所があったが、碑自体は確認できなかった。聞き取りをしたところ、昭和15年生まれの方の町民の方が幼少期に見たことがあるという回答があった	578
新延剣神社にあり。(文献578の巻頭グラビア写真)大正3年(1914)建立	578
昭和27年(1952)9月建立。剣南小学校敷地にある	117・578
平成8年(1996)5月	
昭和27年(1952)12月建立。新延字島の平和公園にある。塔の手に平成8年建立の戦没者芳名碑あり	117・578
平成8年(1996)5月	
昭和29年(1954)12月に鞍手分校の敷地に建立(文献578の巻頭グラビア写真)。塔の手に平成8年建立の戦没者芳名碑あり	117・578
平成8年(1996)7月	
昭和27年(1952)建立。揮毫は、衆議院議長 林譲治	117
旧宮田中学校にあり。昭和30年(1955)9月建立。内閣総理大臣 鳩山一郎書 宮田町建之	117
靈験寺境内にあり。明治42年(1909)7月30日建立。笠松村在郷軍人團建立 / 大正9年～大正13年 殉死 / 昭和6年～昭和20年 満州事変から大東亜戦争 戦病死者	117
極楽寺境内にあり。昭和5年(1930)2月11日建立。「宮田郷友会建之 陸軍中将正四位勲二等功四級金山久松書」	117
昭和5年(1930)4月建立。若宮村在郷軍人分會 陸軍大将 一戸兵衛書	117
ドリームホープ裏にあり。昭和33年(1958)4月建立	
山口コミュニティセンター内にあり。平成15年(2003)5月建立	
山口コミュニティセンター内にあり。平成15年(2003)5月建立。片山満 書	
矢房神社にあり。明治37年(1904)2月11日の記念銘あり	
摩利支神社にあり。明治37年(1904)2月7日の記念銘あり	
貴船神社にあり。明治38(1905)12月凱旋の記念銘と、加藤万太郎はか4名の氏名が刻書される	
的原神社にあり。明治40年(1907)3月10日の記念銘あり。多角形の石柱に石製模造砲弾が載る	
?神社にあり。「奉獻」明治三十七八年日露戦役出征軍人建立」の刻書がある。方形石柱に石製模造砲弾が載る	
須賀神社にあり。石碑の上に砲弾が載る	
須賀神社にあり。碑の傍にイチョウの木が立つ	
昭和28年(1953)9月	
境内に砲弾あり。径約12cm、長約39cm。昭和7年に牧正太郎から寄贈されたもので、同8年5月に建立	E
明治27～28年(1894～1895)の日清戦争における宗像郡の戦死・傷病死者17人に対する鎮魂碑が宗像高等学校前に建てられ、同29年(1896)11月28～29日に落成式・鎮魂祭が行われた	630
明治37～38年(1904～1905)の日露戦争における宗像郡の戦病死者64人に対する彰忠碑が大山巖元帥の揮毫で宗像高等学校の左側に建てられ、同39年(1906)7月10日に招魂祭が行われた	630
昭和28年(1953)9月建立。同58年(1983)11月再建	117
昭和45年(1970)3月建立	117
昭和29年(1954)6月建立	117
昭和38年(1963)10月建立	117
昭和28年(1953)3月建立	117
尾降神社境内にあり、頭頂部は砲弾を模した形をしている。日露戦争での三郎丸の従軍者15人の氏名が刻まれる。明治38年(1905)建立	130

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1160	宗像護国神社(田島地区慰霊塔)	宗像市	田島(宗像大社)		8その他	現存
1161	玄海町忠霊塔(池野地区慰霊塔)	宗像市	池田		8その他	現存
1162	神湊忠魂祠(神湊地区慰霊塔)	宗像市	神湊		8その他	現存
1163	鐘崎萬霊塔(鐘崎地区慰霊塔)	宗像市	鐘崎		8その他	現存
1164	田島忠魂社	宗像市	田島		8その他	現存
1165	大島忠霊塔(大島地区慰霊塔)	宗像市	大島(潮差1001)	市有地	8その他	現存
1166	日本海海戦・戦死者慰霊碑	宗像市	大島	市有地	8その他	
1167	故陸軍歩兵軍曹勲七等/功六級小畑治之墓	宗像市	吉田		6埋葬	
1168	日清日露役忠魂碑	宗像郡	[場所不明]		8その他	不明
1169	東郷神社	福津市	渡	私有地	8その他	現存
1170	東郷記念館	福津市	渡	不明	8その他	詳細位置不明
1171	日本海海戦記念碑	福津市	渡	私有地	8その他	現存。記念碑内外に落書きあり
1172	東郷公園の「陸軍監視哨之跡」碑	福津市	渡	私有地	8その他	現存
1173	渡の鎮魂碑	福津市	渡	私有地	8その他	現存
1174	梅津忠魂碑	福津市	渡	私有地	8その他	現存
1175	楯崎神社の三笠主砲十二吋砲弾	福津市	渡(楯崎神社)	私有地	8その他	現存
1176	天降神社の戦役記念の鳥居	福津市	須多田	私有地	8その他	現存
1177	須多田鎮靖英魂碑	福津市	須多田	私有地	8その他	現存
1178	津屋崎の鎮魂之碑	福津市	津屋崎3丁目	公有地	8その他	現存
1179	津屋崎の日露戦役記念碑	福津市	津屋崎3丁目	公有地	8その他	現存
1180	在自鎮魂之碑	福津市	在自	私有地	8その他	現存
1181	生家忠魂碑	福津市	生家	私有地	8その他	現存
1182	大石慰霊碑	福津市	大石	私有地	8その他	不明
1183	塩浜鎮魂廟	福津市	勝浦	私有地	8その他	現存
1184	勝浦浜忠魂塔	福津市	勝浦	私有地	8その他	勝浦浜区の納骨堂横に現存
1185	勝浦の忠霊塔	福津市	勝浦	私有地	8その他	現存
1186	奴山戦没者慰霊碑	福津市	新原奴山(古墳展望台の所)		8その他	現存(H29.11.1確認)
1187	故陸軍歩兵一等卒坂田豊吉 海軍三等機関兵伊東秋次郎碑	福津市	上西郷(大森神社前)	私有地	8その他	現存
1188	殉国之碑	福津市	宮司		8その他	
1189	内殿忠霊塔	福津市	内殿	公有地	8その他	現存
1190	福間忠魂碑	福津市	福間	公有地	8その他	現存
1191	津丸鎮魂堂	福津市	津丸	公有地	8その他	現存
1192	安部作右エ門碑	古賀市	薦野(薦野公民館北側)	未確認	8その他	
1193	日露戦役記念桜碑	古賀市	薦野	未確認	8その他	
1194	故井上市治君之碑	古賀市	薦野	未確認	8その他	
1195	天降神社奉納鳥居	古賀市	薦野	未確認	8その他	
1196	戦死者墓地道標(八尋徳兵右衛)	古賀市	薦野	未確認	8その他	
1197	戦死者墓地道標(尾塚徳右衛門)	古賀市	薦野	未確認	8その他	
1198	戦死者墓地道標(安部年三)	古賀市	薦野	未確認	8その他	現在傾斜
1199	征清記念碑	古賀市	米多比	未確認	8その他	
1200	日露戦役記念碑	古賀市	米多比	未確認	8その他	
1201	戦歿軍人之霊碑	古賀市	米多比上米多比	未確認	8その他	
1202	奉安殿	古賀市	米多比	公有地(市)	8その他	消滅、現在小野小学校
1203	征露記念碑	古賀市	小山田	未確認	8その他	詳細位置不明
1204	戦利兵器奉納記念碑	古賀市	谷山	未確認	8その他	
1205	日清日露戦役記念碑	古賀市	青柳	未確認	8その他	
1206	奉安殿	古賀市	青柳	公有地(市)	8その他	消滅、現在青柳小学校
1207	資材寄附碑	古賀市	青柳町	公有地(市)	8その他	大きく破損

内容(年代・由来等)	文献
日清・日露戦役から大東亜戦争に至るまでの各戦役に服し戦没された郡内出身2,321柱の英霊を祀って昭和38年(1963)10月に建立された。その後、社殿の老朽化に伴い、昭和57年(1982)8月15日再建された。境内に径約16.5cm、長約33cmの砲弾あり	117・589・E
昭和28年(1953)11月建立	117
大正13年(1924)3月建立	117
昭和24年(1949)10月建立	117
昭和28年(1953)建立	117
昭和27年(1952)9月建立	
平成25年(2013)11月建立	
鎮国寺北西の墓地群の一角にある。表記は「陸軍中将秋山義充書」、裏面に中国山西省平陸縣古王村西南方12kmにて25歳で戦死したことが記される	
「忠魂之碑」陸軍大将大勲位功二級彰仁親王書「明治三十九年五月建之」「彰忠之碑 元帥侯爵大山巖書」	685
昭和15年(1940)「S9.5.30?」に安部正弘が創建したもの。昭和10年(1935)3月には、東郷元帥が渡英の際に調髪した頭髪を大阪住之江護国神社から分与を受けて奉安した	630
大正10年(1921)に設置された東郷公園内に、東郷平八郎元帥や海軍将星の揮毫、元帥の遺品、指揮刀、砲身、魚雷、三笠の探照灯などを陳列する記念館が昭和9年(1934)12月に貝島太市の寄付で新築された。その外には三笠の主砲弾と主砲先端部が野外展示されている	630・671・E
渡半島の大峰山頂(114.5m)に東郷平八郎元帥揮毫の「日本海海戦記念碑」を安部正弘が建立、昭和9年(1934)6月27日に除幕式が行われる。基台部には大正12年5月の加藤友三郎内閣総理大臣・海軍大将撰、佐藤鉄太郎海軍中将書の銘板を入れる。碑の背面には支界灘に向かって三笠艦の副砲40口径阿姆斯特朗式15cm 砲身を設置(文献630のp832写真)。また台座部分には45口径30cm砲被帽型演習弾9個が据えられる。廃兵器の無償下付願いは昭和8年12.15に出され、23日に下付の通達があった。なお、山頂から南側に下った斜面には塚が遺存する	630・670・E
日本海海戦記念碑の背後北側にある。正面碑文は東郷平八郎書。左側面に「明治三十七年二月七日開設も平和克復と同時に閉鎖せり」と陸軍大将森岡守成書があり、右側面に「大正拾五年三月四日 財団法人日本海々戦偉蹟保存会設立記念之為メ建立之」とある。また裏面にも海軍大将某氏(文字不詳)の書がある。日露戦争にかかる監視明があったことの記念碑である(文献630のp742写真)	630
昭和24年(1949)3月吉日建立	
昭和28年(1953)9月建立	
榑崎神社境内にある。日本海海戦記念保存会より奉寄進。径約30.3cm、長約89.5cm、平成3年に再建か	E
神社境内の拝殿前にある。明治37ないし38年(1904・1905)建立	
昭和23年(1948)吉辰建立	
昭和26年(1951)3月建立	
明治39年(1906)5月建立	
昭和33年(1958)3月吉日建立	
昭和27年(1952)8月吉辰建立	
大石区の納骨堂内に据えられている。建立年月日は不明	
建立年月日は不明。日支事変、及び大東亜戦争戦没者を祀る	
昭和28年(1953)12月建立	
榑崎神社境内にある。昭和27年(1952)9月建立	117
平成8年(1996)8月に、終戦50年を記念して奴山区により建立された。花田洋之謹書。明治37年(1904)5月～昭和21年(1946)5月までの戦没者13人の名が刻まれる。周囲に奴山遺族会による横の木の植樹がある	
明治22年(1889)5月建立	
昭和26年(1951)10月	
福津市立上西郷小学校の敷地内にある。昭和27年(1952)〔37年?〕4月建立	117
福津市営納骨堂の敷地内にある。大正8年(1919)建立、昭和41年(1966)5月再建	117
福津市立神興小学校横にある。昭和49年(1974)9.20建立	117
西南の役の折、夫鎮(人夫)として従軍。碑はのちの薦野区長20年を務めあげた功績をたたえる内容が主。大正6年(1917)建立、川島澄之助選、北川信従書	57,60-p18
薦野・米多比両地区の日露戦役従軍者が天降神社境内に記念桜を植樹した時の記念碑。建立年不明	57,60-p27
井上家墓所にあり。日露戦争の際軍医として広島陸軍衛生病院に勤務。除隊後薦野で医院を開業し地域の福祉・健康増進に貢献。昭和2年(1927)建立、陸軍中将西川虎次郎	57,60-p36
天降神社境内の社殿側のもの。日露戦争に従軍した岸高重衛門(英夫)の凱旋を記念したもの。明治45年(1912)奉納	60-p434
清滝橋横にあり	60-p414
薦野公民館裏、仏堂の右手にある	60-p414
下の県道から貝地に入る入口、県道清滝古賀線を清滝側に向かい天降神社手前の右手耕作地角にある	60-p414
旧小野村役場にあり。日清戦争の折、小野村から20名が出征。碑文磨滅。明治31年(1898)建立	57,60-p21
旧小野村役場にあり日露戦争の折、小野村から69名が出征? 碑文磨滅。明治42年(1909)建立	57,60-p28
米多比児童館前にあり。昭和33年(1958)建立	
各学校では教育勅語や御真影を安置する奉安室が作られていったが、焼失を憂い鉄筋コンクリートによる奉安殿が建設された	60-p453
	588-p178
谷山八幡宮にあり。日清・日露戦争後、国威発揚のため政府が各地の学校・寺社・役所などに戦利品を配布しており、それに伴うものか。明治42年建立、陸軍大臣寺内正毅	57
五所八幡宮にあり。青柳村からの日清戦争従軍者は約15名、日露戦争従軍者は約70名。大正2年(1913)建立	57
各学校では教育勅語や御真影を安置する奉安室が作られていったが、焼失を憂い鉄筋コンクリートによる奉安殿が建設された	60-p453
グリーンパーク四季の丘にあり。「山林の松木を今在家〇〇塚資材〇〇用材と〇〇寄附す」	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1208	戦没軍人之霊碑	古賀市	新久保2丁目	未確認	8その他	
1209	日独戦歿碑	古賀市	新久保2丁目	未確認	8その他	
1210	戦没者慰霊塔	古賀市	中央1丁目		8その他	
1211	古賀慰霊塔	古賀市	駅東1丁目	未確認	8その他	
1212	青柳護国塔	古賀市	駅東1丁目	未確認	8その他	
1213	米多比殉国之塔	古賀市	駅東1丁目	未確認	8その他	
1214	戦没軍人之霊碑	古賀市	新久保2丁目	未確認	8その他	
1215	身施生類之碑	古賀市	千鳥1丁目(福岡東医療センター)	未確認	8その他	
1216	征露記念の藤棚	古賀市	旦ノ原(愛宕神社)		8その他	
1217	奉安殿	古賀市	新久保1丁目	公有地(市)	8その他	消滅。現在文化財収蔵庫
1218	立花区平和塔	糟屋郡新宮町	立花、原上	私有地	8その他	現存
1219	新宮校区慰霊塔	糟屋郡新宮町	緑ヶ浜4丁目	公有地	8その他	現存
1220	明治三七 八年戦役記念	糟屋郡新宮町	大字相島	公有地(区?)	8その他	現存
1221	相島区忠霊塔	糟屋郡新宮町	大字相島内	公有地(町?)	8その他	現存
1222	明治廿七 八季(?)日露戦役記念	糟屋郡新宮町	大字相島	私有地	8その他	現存
1223	村内出征記念碑	糟屋郡新宮町	大字的野	私有地	8その他	現存
1224	征清記念碑	糟屋郡新宮町	大字三代	私有地	8その他	現存
1225	明治三十七 八年戦役記念碑	糟屋郡新宮町	大字三代	私有地	8その他	現存
1226	下府(村)出征碑	糟屋郡新宮町	下府(新宮神社)	私有地	8その他	現存
1227	皇軍必勝祈願献灯	糟屋郡新宮町	大字湊	私有地	8その他	現存
1228	慰霊塔	糟屋郡新宮町	大字湊	私有地	8その他	現存
1229	久原の戦没者慰霊碑「忠霊之碑」	糟屋郡久山町	久原字井牟田3634-1	不明	8その他	現存
1230	篠栗の慰霊塔	糟屋郡篠栗町	金出	公有地	8その他	現存
1231	日露戦役記念碑	糟屋郡篠栗町	金出	公有地	8その他	
1232	大東亜戦争戦没者慰霊地蔵	糟屋郡須恵町	大字佐谷(佐谷建正寺)	私有地	8その他	平成21年(2009)の後、13仏とともに現位置に移設
1233	乙植木(本合)区出身者戦没者供養塔	糟屋郡須恵町	大字植木	私有地	8その他	現存
1234	忠魂碑	糟屋郡須恵町	大字須恵	私有地	8その他	現存
1235	須恵町忠霊塔	糟屋郡須恵町	上須恵	公有地(町)	8その他	
1236	須恵町の供養塔	糟屋郡須恵町	上須恵	公有地(町)	8その他	忠魂碑と同じ敷地内に祀られる
1237	宇美町慰霊塔	糟屋郡宇美町	宇美・公園山	私有地	8その他	現存
1238	志免町忠霊塔	糟屋郡志免町	片峰三丁目(志免地区[福祉]公園)	公有地(町)	8その他	現存
1239	長者原御野立所忠霊塔	糟屋郡粕屋町	長者原(葛葉山)	公有地	8その他	現存(公園内)
1240	大正天皇長者原御野立所碑	糟屋郡粕屋町	長者原(葛葉山)	公有地	8その他	現存(公園内)
1241	大正天皇大演習御講評之処碑	糟屋郡粕屋町	長者原(福岡魁誠高校)	私有地	8その他	現存
1242	地中海遠征記念碑	福岡市	東区箱崎1丁目		8その他	
1243	箱崎忠魂碑	福岡市	東区箱崎6丁目		8その他	
1244	宗玖寺洲崎地蔵尊	福岡市	東区馬出4丁目		8その他	
1245	志賀島供養塔	福岡市	東区志賀島勝山		8その他	
1246	陸軍雁ノ巣航空隊奉安殿	福岡市	東区志賀島		8その他	
1247	香椎宮の砲身	福岡市	東区香椎		8その他	
1248	奈多平和塔	福岡市	東区奈多2丁目		8その他	
1249	下原供養塔	福岡市	東区下原1丁目		8その他	
1250	西方寺地蔵尊	福岡市	博多区奈良屋町(西方寺)	私有地	8その他	
1251	沖浜神社戦災地蔵尊	福岡市	博多区古門戸町(沖浜神社)	私有地	8その他	
1252	黒田神社戦災地蔵尊	福岡市	博多区須崎町(黒田神社)	私有地	8その他	

内容(年代・由来等)	文献
若宮八幡宮にあり。大正5年(1916)建立	
若宮八幡宮にあり。	
古賀市役所駐車場;平成10年(1998)、護国塔・殉国ノ碑・戦没者芳名塔など、青柳・小野・古賀の慰霊塔を合祀建立	
古賀市役所;昭和27年(1952)4月建立。平成10年(1998)古賀市役所に合祀移設	117
古賀市役所;青柳小学校内にあった。昭和27年(1952)5月建立。平成10年(1998)古賀市役所に合祀移設	117
古賀市役所にあり	117
泉林寺南側にあり。日清・日露・太平洋戦争戦没者を慰霊。昭和32年(1957)建立	
「入所者栄養補給並医学研究用施設動物飼養為 傷痍軍人福岡療養所並関係有志」所長 小田定文 昭和拾九年十二月吉日	
愛宕神社境内に藤棚が設置され、藤棚記念碑も建てられた。記念碑には「征露記念」「征露記念藤棚柱建設」「明治39年11月」があり、裏面に且ノ原居住の戸主25人の名が刻まれる	60
各学校では教育勅語や御真影を安置する奉安室が作られていったが、焼失を憂い鉄筋コンクリートによる奉安殿が建設された	60-p453
昭和25年(1950)3月に立花小学校の近くに建立されたが、のちに川上神社境内に移転した。9月23日に校区での慰霊祭が行われている	117・601
昭和27年(1952)10月に粕屋新光園の横手(現:社会福祉センター前)に建立された。昭和30年の町村合併後、毎年春の彼岸(前後の日)に町と遺族会で合同追悼式を行っている。また、新宮校区は8月15日、立花校区は9月23日にそれぞれ慰霊祭を行っている	117・601
若宮神社鳥居のすぐ横、向かって左側に、日露戦役戦勝記念碑?が建立されている。「大正十年一月吉日建之」とある。台座に出征者(?)の氏名が刻印されている。揮毫者は不明	現地調査の結果
神宮寺前から町道を登ってすぐの所に新宮町遺族会の説明看板有。建立時期・揮毫者は未確認	現地調査の結果
若宮神社社殿廻りにあり。日露戦争戦勝祈願の奉納か? 社殿を取り囲む「石塔」に出征軍人であろう氏名が社殿側に刻印されている。建立時期・揮毫者は未確認	現地調査による
熊野神社にあり。日露戦争出征の碑。出征者の氏名が刻印されている。明治41年(1908)建立	現地調査の結果
太閤水横にあり。日清戦争出征の碑。出征者の氏名が刻印されている。明治29年(1896)建立。揮毫者 阿部季(李)徳?	現地調査の結果
太閤水横にあり。日露戦争出征の碑。出征者の氏名が刻印されている。明治41年(1908)建立。揮毫者 阿部季(李)徳?	現地調査の結果
日露戦争出征の碑。明治41年(1908)建立。出征者の氏名が刻印されている。風化により刻印文字が若干判別しにくい	現地調査による
綿津見神社にあり。燈籠一対。「皇軍必勝」「神光赫赫」の文字が刻印されている。日中戦争出征者名が記されたプレート有。奉獻者は当時の神社総代。昭和13年(1938)建立	現地調査による
湊区公民館前、大師堂[元西念寺]にあり。昭和36年(1961)建立。慰霊塔に並ぶように「戦没(没)者芳名塔」(建立時期不明)と「連名墓石」2柱(昭和19年[1944]3月建立)が建っている	現地調査による
明治維新から大東亜戦争までの間に戦陣に倒れた久山町出身の240余人を慰霊する碑が町により昭和46年(1971)3月に建立された	117・629
観音公園にあり。昭和41年(1966)12月建立	117
観音公園にあり。明治41年(1908)4月建立	
昭和57年(1982)12月建立。須恵小学校昭和10年度卒業生有志が建立。平成21年(2009)、大雨に伴う裏山のがけ崩れで被害を受けた。その後、十三仏とともに現位置に移設した	605
林松寺にあり。平成6年(1994)3月、乙植木老人クラブが建立。石碑の裏側に戦病死者の氏名・年・場所を記載	605
須恵宝満宮にあり。昭和32年(1957)、須恵区出身の戦没者を供養するために地元有志で建立した。裏面に陣没者の氏名・場所を記載	605
昭和15年(1940)の皇紀2,600年記念として建立された忠霊塔(健康広場駐車場)。陸軍大将松井石根による揮毫	604
須恵町遺族会が、昭和27年(1952)9月に建立。遺族会が建立した説明板あり	117
宇美町遺族会により神苑(公園山)に建設され昭和27年(1952)12月20日に除幕式が行われた。靖国神社宮司筑波藤磨の書(文献516のp542写真/文献27のp124写真)	27・117・516
太平洋戦争のとき志免町出身兵士の慰霊のため忠魂碑建設を町議会が可決。片峯山の下山(しもやま)頂上に建設することで石材を搬入する頃に敗戦となった。戦後しばらくして昭和26年(1951)に遺族会等の要望もあり碑建立の再議となって、福岡市蓮池の石材商(石松石材か)に建設してもらうこととした。題字は「忠霊塔」とし、大宰府の書家が筆を執った。昭和27年(1952)10月26日に除幕式。その後この碑を中心に公園化の計画があり、昭和42(1967)〔46年?〔1971〕〕年3月に公園が完成した(文献598のp514写真)	117・598
昭和29年(1954)2月建立。(文献101のp376写真)	101・117
大正5年(1916)11月11~14日に行われた陸軍特別大演習は筑前・筑後・肥前に展開され、14日は長者原御立所で大正天皇が観戦した。その記念の碑である(文献549のp332写真)	548・549
大正5年(1916)11月11~14日の陸軍特別大演習で、大正天皇が糟屋農学校校舎隣の御講評所で講評を行った記念碑(文献549のp332写真)	548・549
第一次世界大戦の時、特務艦隊を編成して軍艦明石・出雲などが地中海へ遠征した。大正6年(1917)に航出し、同8年(1919)7月に凱旋した。そのことについて「地中海遠征福岡縣出身海軍軍人中」が建碑した。高さ2丈、幅1丈。筑崎宮にあり	645
昭和3年(1928)11月建立。箱崎・宮松遺族会・宮松慰霊会による	117
昭和20年(1945)6月19日の空襲被災者及び戦没者慰霊のために、昭和25年(1950)6月に博多区須崎町1-5の須崎問屋御入口に建立されていた地藏尊が、平成7年(1995)に現在地の宗玖寺に移転したもの	44
「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」の碑。昭和43年(1968)5月建立	117
志賀海神社社社の印輪社となる。コンクリート造り	671
もと戦艦・摂津に搭載していた四一式四十口径安式十二糎砲身が境内にある。大正12年3.29に海軍省から佐世保鎮守府長官に出された訓令に記された物品の一つ。昭和天皇が皇太子時代の1924年に無事に渡欧し帰国したのち、翌11年に香椎宮を参拝されたことの記念に下付を願ひ出したもの。また、境内には巡洋艦「香椎」の顕彰碑もある	E
昭和30年(1955)3月1日建立。西福寺境内にあり	117
昭和22年(1947)3月建立	117
昭和25年(1950)建立の戦災地蔵尊。戦災死の無縁仏を供養するために祀る	44
沖浜稲荷神社は福岡空襲で焼失し、昭和21年(1946)5月に再建した。その一角に落石栄吉らが建立した戦災地蔵がある(地蔵尊も神社再建の時か?)(文献116巻末資料編写真・拓本)	44・116
旧下対馬小路町内で戦災死した15人と戦死者4人を祀る。台には16人の名が刻まれる。昭和25年に対馬小路の住民が建てた。この神社にはもう1体の30cm足らずの小さな地蔵があり、旧下対馬小路の白水庄左衛門が奉納したらしい(文献116巻末資料編写真・拓本)	44・116

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1253	恵比須神社戦災地藏菩薩像	福岡市	博多区須崎町(恵比須神社)	私有地	8その他	
1254	洲崎地藏(戦災地藏)	福岡市	博多区須崎町		8その他	
1255	戦災死没者慰霊塔	福岡市	博多区冷泉上川端町(冷泉公園)	公有地(市?)	8その他	
1256	川端飢人地藏尊	福岡市	博多区中洲2丁目		8その他	
1257	正定寺焼夷弾破片	福岡市	博多区中呉服町(正定寺)		8その他	
1258	博多港引揚記念碑	福岡市	博多区中央埠頭		8その他	
1259	下臼井御野立所	福岡市	博多区席田臼井		8その他	
1260	日清戦役死亡軍夫碑	福岡市	博多区東公園		8その他	
1261	諸岡の忠魂社	福岡市	博多区諸岡		8その他	
1262	上月隈の忠魂碑	福岡市	博多区上月隈		8その他	
1263	飛来神社の砲弾	福岡市	博多区吉塚3丁目		8その他	
1264	吉塚の慰霊塔	福岡市	博多区吉塚2丁目		8その他	
1265	福岡聯隊跡記念碑	福岡市	中央区城内 (平和台陸上競技場入口左)		8その他	
1266	福岡県護国神社	福岡市	中央区六本松1丁目		8その他	再建
1267	戦災復興記念群像	福岡市	中央区天神1丁目 (西中洲公園)		8その他	
1268	祝勝報塞奉納標柱	福岡市	中央区天神1丁目 水鏡神社		8その他	
1269	戦利兵器奉納之記	福岡市	中央区天神1丁目 水鏡神社		8その他	
1270	水鏡天満宮狛犬	福岡市	中央区天神1丁目 水鏡神社		8その他	
1271	箕子戦災死者供養塔	福岡市	中央区大手門3丁目		8その他	
1272	圓應寺無縁仏地藏尊	福岡市	中央区大手門3丁目		8その他	
1273	箕子の戦災地藏	福岡市	中央区荒戸3丁目		8その他	
1274	平和の像	福岡市	中央区六本松		8その他	
1275	六本松戦災地藏	福岡市	中央区六本松		8その他	
1276	谷墓地の墓・碑	福岡市	中央区(谷墓地)			
1277	(1)日露戦役戦病没者之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1278	(2)日清戦役戦病没者之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1279	(3)青島及西比利亜戦役戦病没者之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1280	(4)殉職将兵合葬之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1281	(5)満州及上海事変戦病没者之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1282	(6)支那事変戦病没者之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1283	(7)明治維新志士之墓	福岡市	中央区(谷墓地)		6埋葬	
1284	(8)大東亜戦争戦没者之碑	福岡市	中央区(谷墓地)		8その他	
1285	春吉の平和の碑	福岡市	中央区春吉1丁目		8その他	
1286	平和祈念の碑	福岡市	中央区西公園		8その他	
1287	有田忠魂碑	福岡市	早良区有田2丁目		8その他	
1288	高宮の戦没勇士の墓	福岡市	南区高宮1丁目		6埋葬	
1289	横手忠魂碑	福岡市	南区横手3丁目		8その他	
1290	栄昌寺地藏(じゅうご地藏)	福岡市	西区今宿町		8その他	
1291	今宿忠魂碑	福岡市	西区今宿		8その他	
1292	元岡忠霊塔(澄霊塔)	福岡市	西区元岡字山手		8その他	
1293	北崎忠霊塔	福岡市	西区北崎津上崎		8その他	
1294	今津忠魂碑	福岡市	西区今津		8その他	
1295	周船寺忠霊塔	福岡市	西区周船寺		8その他	
1296	日清戦役碑	福岡市	西区西公園		8その他	
1297	徳永忠魂碑	福岡市	西区大字徳永		8その他	
1298	橋本戦没者慰霊碑	福岡市	西区橋本2丁目		8その他	
1299	能古鎮魂碑	福岡市	西区能古		8その他	

内容(年代・由来等)	文献
旧下洲崎町婦人会が昭和26年(1951)6月19日に、下洲崎町内59人の慰霊のため建立した(文献116巻末資料編写真・拓本)	44・116
須崎町の須崎問屋街の入り口に戦災地蔵「洲崎地蔵」がある。石村萬盛堂の石村善若ら上洲崎町有志が昭和25年(1950)6月に建立した。旧上洲崎町で亡くなった37人の名を刻む(文献116巻末資料編写真・拓本)	116
昭和40年(1965)6月19日建立。福岡空襲20周年で慰霊のため建設委員会により建てられる。塔の中には空襲での死者744人の名簿が納められる。画家・伊藤研之による10人の裸像が刻まれる(文献116巻末資料編写真・拓本)	44・116
享保飢饉の時の飢人(うえにん)地蔵に、戦後戦死者・戦災死者も併せて供養するようになった	44
正定寺本堂の欄干の下に、昭和20年(1945)6月19日の福岡空襲の際の250キロ大型焼夷弾破片がある	44
彫刻家・豊福知徳作「那の津往還」。平成8年(1996)3月建立	44
席田村大字臼井字下臼井の小丘上で、大正5年(1916)の陸軍特別大演習の際に大正天皇が観戦した所。文献644のp44に碑の写真あり	644
明治32年(1899)6月、表記を高島駒之助、碑文を郡利撰、大内義映書で建立される。高さ3丈で礎を架す(石段をつくる)	645
昭和29年(1954)9月23日建立	117
昭和26年(1951)秋建立	117
境内に奉納された砲弾あり。径約23cm、長さ約55cm。横の石碑に「日露出征軍人記念「大正15年10月再工」とあり	E
明光寺内にあり。昭和36年(1961)9月建立	117
昭和38年(1963)5月3日「福岡聯隊跡記念碑建設会」により建立される。明治19年(1886)6月、歩兵第24連隊は第6師団(熊本)の下で小倉第14連隊第3大隊を基幹にして福岡城内に編成される。同27年(1894)、日清戦争で旅順攻撃に参加。同37年(1904)の日露戦争では新編成の小倉第12師団のもと奉天会戦を戦う。大正7年(1918)にロシア革命の時シベリアに英仏米との連合軍として出兵。同13年(1924)には軍縮により久留米に移駐した第12師団傘下に入る。昭和7年(1932)の第一次上海事変に出兵。同12年(1937)に第124連隊編成。同14年(1939)に第226連隊編成。同15年(1940)に第113連隊編成。同20年(1945)6月19日の福岡空襲で第146部隊営舎が全焼する	44
明治維新より大東亜戦争に至る福岡県出身の殉国の英霊120,000柱を祀る。昭和18年(1943)4.30に内務大臣指定護国神社として創建されるが、同20年(1945)6月19日の福岡大空襲で焼失。同38年(1963)5月に再建された	117・589
昭和通り西中島橋西端の西中洲公園内南側(赤煉瓦文化館の東側)に建つ、富永朝堂作「生きる」のブロンズ像。昭和47年(1972)7月18日に福岡都市計画復興土地区画整理事業の完了を記念して建立したもの	44
水鏡神社北側の鳥居の内側にある。「祝勝戦為報塞奉納」標柱。明治28年11月上旬に鍛冶町が奉納	44
神社内の狛犬の東側にあり、手前には力石3個、横には宝篋印塔がある。正面の碑文上端に星形マーク(星章・五芒星)があり、その下に「戦利兵器〜」の文章がある。末尾には「明治40年3月陸軍大臣寺内正毅」とあるが、側面に「明治44年11月21日建設」とされる	44
文化元年(1804)に奉獻された青銅製狛犬が金属類回収令で供出されたが、昭和51年(1976)10月に富永朝堂が制作して再建された。代表者4人。台座は当初のものが残る	44
養子公園の区画北壁に建てられた供養塔。昭和22年(1947)6月19日建立。裏面碑文に「176人戦災犠牲」と記される(文献116巻末資料編)	44・116
昭和20年(1945)6月19日空襲の養子校区の死者176人のうち、引き取り手のなかった遺体を茶毘に付したあと納めたもの	44
福岡58番札所に水子地蔵と並んで建つ。昭和26年6月29日に井上通が建立、32人と外5人が記載される(文献116のp348写真・巻末資料編写真・拓本)	116
護国神社にあり。昭和51年(1976)7月2日竣工。福岡県遺族連合会会長の野見山清蔵の書	117
	30
福岡陸軍墓地(谷墓地)では建立時期の異なる墓や碑がある。7基の墓と「ビルマ・タイ拉孟雲南地区戦役者之碑」「ガ島戦死之碑」を含む9基については平成17年の福岡西方沖地震で墓石のずれや骨壺の破損があったため修理を行い、平成20年12.6に落成式が行われた。ほかに「明治廿七八年之役歩兵第廿四聯隊下士忠死之碑」「満州及上海事変戦病死者合同碑」「ドイツ兵之墓」などがある	
昭和10年(1935)建立。福岡県郷友会・福岡市遺族会・谷町内会による(文献117は昭和15年建立とする) 林銃十郎大尉の揮毫	117・131
昭和10年(1935)建立。福岡県郷友会・福岡市遺族会・谷町内会による(文献117は昭和15年建立とする) 森部静夫少将の揮毫	117・131
昭和10年(1935)建立。福岡県郷友会・福岡市遺族会・谷町内会による(文献117は昭和15年建立とする) 西川虎次郎中将の揮毫	117・131
昭和10年(1935)建立。福岡県郷友会・谷町内会による。上村大佐の揮毫	
昭和15年(1940)建立。福岡県郷友会・福岡市遺族会・谷町内会による。中牟田辰六少将の揮毫	117
昭和15年(1940)建立。福岡県郷友会・福岡市遺族会・谷町内会による。長瀬武平中将の揮毫	117
昭和44年(1969)8.10建立。福岡県護国神社・福岡県郷友会・谷町内会による	
昭和57年(1982)5月30日竣工。福岡県遺族連合会会長の鯉木亨弘の書	117
春吉公園内にあり。昭和37年(1962)5月建立	117
福岡教育大学附属福岡中学校の校門横にあり。昭和42年3月5日建立。昭和以降の戦没者学友155人の留魂のために設置(文献38のp323写真)	38
昭和40年(1965)12月建立	117
昭和47年(1972)4月27日建立	117
昭和30年(1955)2月建立	117
博多下川端町にあった栄昌寺は昭和20年(1945)6月19日の空襲で焼失し、住職一家も十五銀行地下で亡くなった。戦後に寺は再建され、境内に慰霊の「じゅうご地蔵」が祀られた。「じゅうご」は十五銀行・銃後・自由御地蔵をかけたものとのこと。平成14年(2002)に現在地に移転した	44
今宿小学校にあり。昭和27年(1952)8月再建	117
昭和26年(1951)1月着工、同年9月竣工し、除幕式を挙げる。西南戦争〜大東亜戦争の165柱を祀る。瓜生溜池の近くにあり。京都大徳寺派の後藤瑞蔵師の揮毫(文献688のp171写真)	117・688
昭和27年(1952)11月1日に除幕式と慰霊祭を執り行う。241柱の英霊を祀る(文献565のp180写真)	565
大正15年(1926)6月再建。昭和56年(1981)10月移建。明治・大正・昭和の戦争で戦死した124柱の英霊を祀る(文献22のp239写真)	22・117
昭和28年(1953)3月建立。丸隈山古墳の東方200m、湯溜池を見下ろす高い丘の上にあり。日清・日露戦争から太平洋戦争の間の129柱を合祀する(文献606のp14写真)	606
明治30年(1897)9月に建立。長谷川好道撰で、巖谷修書。文献645及び「福岡市誌」1959に記載	645
昭和28年(1953)3月建立	117
昭和50年(1975)3月吉日建立	117
昭和54年(1979)10月建立	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1300	金武忠霊塔	福岡市	西区金武		8その他	
1301	笹山公園慰霊塔	糸島市	駅南二丁目		8その他	現存
1302	高祖忠霊塔	糸島市	高祖字御輿		8その他	現存
1303	川付忠魂碑	糸島市	川付字荒毛		8その他	現存
1304	蔵持慰霊塔	糸島市	蔵持		8その他	現存
1305	「小富士海軍航空隊之跡」碑	糸島市	(旧志摩町)		8その他	現存
1306	可也忠霊塔	糸島市	志摩初(可也)		8その他	
1307	桜井殉国之碑	糸島市	志摩桜井門		8その他	
1308	野北慰霊塔	糸島市	志摩野北字浦		8その他	
1309	野北須賀神社の砲弾	糸島市	志摩野北		8その他	
1310	稲留稲留神社の砲弾	糸島市	志摩稲留		8その他	
1311	小富士(御床)供養塔	糸島市	御床字徳房師		8その他	
1312	新町英霊塔	糸島市	新町		8その他	
1313	岐志英霊塔	糸島市	志摩岐志		8その他	
1314	岐志護国碑	糸島市	志摩岐志		8その他	
1315	岐志澄霊塔	糸島市	志摩岐志		8その他	
1316	芥屋英霊塔	糸島市	志摩芥屋		8その他	
1317	姫島英霊塔	糸島市	志摩姫島		8その他	
1318	姫島護国碑	糸島市	志摩姫島		8その他	
1319	テンマンサマ(天満神社)鳥居	糸島市	小富士字浜		8その他	
1320	一貴山日露戦役記念碑	糸島市	二丈石崎字口戸		8その他	現存
1321	一貴山の慰霊塔	糸島市	二丈石崎字口戸		8その他	現存
1322	深江の忠霊塔	糸島市	二丈深江字松原		8その他	現存
1323	福吉の忠霊塔	糸島市	二丈福井字水付		8その他	現存
1324	日露戦没出征軍人碑	糸島市	二丈鹿家字合谷		8その他	既存
1325	凱旋記念木	糸島市	二丈鹿家字合谷		8その他	
1326	忠魂碑	糸島市	二丈鹿家字合谷		8その他	現存
1327	凱旋記念碑	糸島市	二丈吉井字渡瀬		8その他	現存
1328	日露戦争従軍軍人名碑	糸島市	二丈吉井字渡瀬		8その他	現存
1329	欧州戦争出兵記念注連縄掛け石	糸島市	二丈吉井字渡瀬		8その他	現存
1330	日露戦役凱旋記念 社標	糸島市	二丈吉井字宮ノ上		8その他	現存
1331	天然石灯笼及び名寄石	糸島市	二丈福井字宮ノ上		8その他	現存
1332	社標 「村社 白山神社」	糸島市	二丈福井字宮ノ上		8その他	現存
1333	支那事変・大東亜戦 出征生存者之碑	糸島市	二丈福井字宮ノ上		8その他	現存
1334	日露戦争凱旋記念 社標	糸島市	二丈福井字白浜		8その他	現存
1335	将軍台	春日市	春日1丁目(春日神社)	私有地	8その他	現存
1336	大正七八年戦役出征記念碑	春日市	春日1丁目(春日神社)	私有地	8その他	現存
1337	日支事変大東亜戦従軍者名碑	春日市	春日1丁目(春日神社)	私有地	8その他	現存
1338	出兵記念碑	春日市	春日1丁目(春日神社)	私有地	8その他	現存
1339	戦没者留魂碑	春日市	須玖南7丁目	私有地	8その他	現存
1340	出征等記念碑	春日市	須玖北5丁目	公有地	8その他	現存
1341	戦没者芳名塔	春日市	岡本2丁目	公有地	8その他	
1342	春日市忠霊塔	春日市	岡本2丁目	公有地	8その他	現存
1343	戦没者留魂碑	春日市	弥生5丁目	私有地	8その他	
1344	慰霊塔	春日市	上白水7丁目	公有地	8その他	
1345	故陸軍砲兵 森山森墓	大野城市	大字牛頭	私有地	6埋葬	現存
1346	壮烈ビルマ戦場碑	大野城市	大字牛頭	私有地	8その他	現存
1347	牛頭戦没者忠魂社銘	大野城市	牛頭3丁目	私有地	8その他	現存
1348	故陸軍中尉 白水保之墓	大野城市	南ヶ丘5丁目	私有地	6埋葬	現存
1349	故看護婦長 白水アグリ之墓	大野城市	南ヶ丘5丁目	私有地	6埋葬	現存
1350	陸軍兵長浅川輝夫墓	大野城市	白木原3丁目	私有地	6埋葬	不明
1351	瓦田区忠魂碑	大野城市	白木原3丁目	私有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
金武小学校の隣にあり。昭和17年(1942)12.8建立	117
昭和26年(1951)4月建立	117
昭和27年(1952)8月建立	117
大正15(1926)3月建立、昭和25年(1950)5月移転	117
雷山小学校内にあり。昭和27年(1952)12月建立	117
昭和48年(1973)5月27日建立(文献594の p945写真)	594
昭和27年(1952)5月11日建立(文献593の p857写真)	117・593
昭和27年(1952)8月建立(文献593の p860写真)	117・593
昭和26年(1951)3月建立(文献593の p861写真)	117・593
境内に砲弾あり。径約15cm、長さ約39cm。台座に「奉獻」「従軍記念 安部三次」とあり	E
境内に砲弾2個あり。1は径約8.8cm、長さ約23.5cm。もう1つは径約11.9cm、長さ約36.5cm。台座に「奉獻」「陸軍砲兵」「大正4年11月吉日」、弾体に「○兵記念」「大正4年11月」とあり	E
昭和26年(1951)3月建立(文献594の p863写真)	117・594
(文献593の p866写真)	593
(文献593の p867写真)	593
昭和27年(1952)10月建立	117
昭和31年(1956)3月建立	117
昭和26年(1951)8月建立(文献593の p867写真)	117・593
(文献593の p868写真)	593
昭和41年(1966)12月建立	117
明治40年(1907)10月建立。日露戦役従軍凱旋記念	590
一貴山小学校西の京塚山頂上にある。明治40年(1907)3月10日に一貴山村尚武会が建立した	635
一貴山小学校西の京塚山頂上にある。昭和25年(1950)に一貴山村同志が建立した(文献635の p610写真)。文献117は、昭和25年(1950)10月建立で、管理者は一貴山校区遺族会とする	117・635
深江小学校校庭の西の丘、弥山に昭和28年(1953)5月20日に建立された(文献635の p610写真)	117・635
光ヶ丘(通称ガンガン山)の頂部に建立された。昭和27年(1952)11月竣工(文献635の p610写真)	117・635
白山宮にあり。明治39年(1906)9月建立	137-p91
白山宮にあり。上と同時期?(未確認)	137-p91
白山宮にあり。昭和20年(1945)8月建立	137-p91
浮嶽神社にあり	137-p93
浮嶽神社にあり	137-p95
浮嶽神社にあり	137-p95
白山宮にあり	137-p96
白山神社にあり。明治40年(1907)建立。日露戦役捷記念	137-p97
白山神社にあり。第1次世界大戦よりシベリア出兵の戦役凱旋記念として建立。「大正七・八年戦役為記念建之」	137-p97
白山神社にあり	137-p97
白山神社にあり	137-p99
記念碑。「乃木大将遺品収蔵の地」碑文あり。乃木大将の副官であった春日村出身の白水淡が乃木の遺品を贈られた。これを春日村在郷軍人会で春日の鶴我山に収蔵したが、戦後鶴我山米軍基地となったため、春日神社境内に移設された	39
春日神社にあり。大正14年(1925)2月11日建立。「白水繁喜君・池内勘四郎君 友達中」の銘あり。シベリア出兵をした2名に対する友人として慰労の気持ちを示した記念碑	39
春日神社にあり。昭和29年(1954)9月建立。日中戦争の戦死者19人、生還者105人の名前が刻まれている	39
春日神社にあり。白水金次郎・鎌田彌四郎・白水英道にかかるもの。昭和2年(1927)4月建立。側面に「大正十四滿州」「昭和二年上海」の字あり	39
古野墓地にあり。昭和31年(1956)8月建立	39
正面に「征獨凱旋」と出征軍人・応召軍人3人ずつの名前があり、側面には「大正7年〇月建立」とある	
岡本公園にあり。昭和31年(1956)10月建立。忠霊塔前にある	39
岡本の熊野神社隣接地に高さ約6.5mの忠霊塔を建立。昭和31年(1956)5月建立、同10月20日に除幕式が行われた(文献547の p714写真)	117・547
竹が本墓地にあり。小倉区により建立	39
上白水老人憩の家にあり。昭和35年(1960)建立	39
福岡中央霊園にあり。昭和47年(1972)に白木原1丁目から現在地に移された。明治40年(1907)に建立されている	522
福岡中央霊園にあり。昭和56年(1981)に建てられた。ビルマ派遣軍龍第6744部隊吉松軍蔵が建立した。周辺には、ビルマ戦場の地図や日本軍部隊ごとの人員・戦死者数一覧碑などがある。福岡中央霊園の最も奥の自由墓地内のバゴダの塔への階段上り口にある	522
平野神社本殿左側の楠板に日清・日露戦争から太平洋戦争にいたる牛頭出身戦没者の氏名が刻まれて安置されている。大正15年(1926)銘の石造り社殿は、旧牛頭小学校庭に建てられていた御真影奉安殿であり、空殿になっていたものを昭和24年(1949)に移設して忠魂社とした	522
戦車第一連隊第二中隊長としてシンガポール攻撃途上に戦死した。白水アグリと並んで立っている	522
昭和2年(1927)に日本赤十字社看護婦養成所を卒業し、小倉病院に勤務した。昭和18年(1943)に死亡。白水家の墓地にある	522
昭和23年(1948)に父浅川秀夫により建立された。瓦田区墓地内にあったが、昭和33年の納骨堂建立で現在は失われている。墓石は取り除かれ現在は無くなっている	522
瓦田区納骨堂前に昭和33年(1958)に建てられた。日露戦争・大東亜戦争の戦死者31人の名前が刻まれている	522

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1352	鎌田繁雄墓	大野城市	山田4丁目	私有地	6埋葬	不明
1353	征露記念之碑	大野城市	山田4丁目	私有地	8その他	現存
1354	大野城市忠魂碑	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	大野小学校西側に隣接した公園内に現存
1355	忠魂奉養碑	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	現存
1356	戦没者哀頌碑	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	現存
1357	日露戦役記念碑	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	現存
1358	戦没者墓碑銘	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	現存
1359	日露戦役従軍記念門柱	大野城市	瓦田3丁目	私有地	8その他	現存
1360	日露戦役記念碑	大野城市	仲畑4丁目	私有地	8その他	現存
1361	日支事変記念国旗掲揚台	大野城市	仲畑1丁目		8その他	不明
1362	征清記念碑	太宰府市	宰府4丁目	私有地	8その他	現存
1363	太宰府町忠霊塔	太宰府市	連歌屋1丁目	公有地	8その他	現存
1364	合祀者芳名板	太宰府市	連歌屋1丁目	公有地	8その他	現存
1365	水城村忠魂碑	太宰府市	観世音寺3丁目	公有地	8その他	現存
1366	明治三十七八年戦役記念碑	太宰府市	観世音寺3丁目	公有地	8その他	現存
1367	忠魂碑	太宰府市	大佐野3丁目	私有地	8その他	現存
1368	日露日独西伯利戦役記念碑	太宰府市	宰府4丁目	私有地	8その他	現存
1369	満州開拓殉難者之碑	太宰府市	梅香苑1丁目	私有地	8その他	現存
1370	不入道の魂碑	那珂川市	不入道	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1371	安徳村(松木)忠霊塔	那珂川市	松木2丁目	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1372	西隈忠魂碑	那珂川市	西隈	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1373	西隈明治三十七・八年戦役記念之碑	那珂川市	西隈	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1374	市ノ瀬忠魂碑	那珂川市	市ノ瀬・中ノ島公園内	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1375	市ノ瀬慰霊之碑	那珂川市	市ノ瀬・中ノ島公園内	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1376	埋金日支事変記念碑	那珂川市	埋金・埋金区公民館	公有地	8その他	掲揚台の柱の支えになっている
1377	後野日露戦争記念碑	那珂川市	後野4丁目	公有地	8その他	特に破損などは無く、丁寧に清掃されている。
1378	上松曹長生家の跡碑	那珂川市	那珂川町西畑大山	私有地	8その他	特に破損などは無い
1379	明治三十七、八年戦役従軍記念碑	那珂川市	仲3丁目・現人神社	公有地	8その他	特に破損など無く、丁寧に清掃されている
1380	岩戸尋常高等小学校奉安殿	那珂川市	西隈2丁目	公有地	8その他	現在は撤去され残存しない
1381	故陸軍歩兵曹長添田一郎君碑	那珂川市	埋金・南畑小学校	公有地	8その他	南畑小学校の校門に使用されている
1382	■露中明治三十八年三月十一日奉天附近戦死者碑	那珂川市	埋金・南畑小学校	公有地	8その他	南畑小学校の校門に使用されている
1383	二日市忠魂碑	筑紫野市	塔原東	公有地	8その他	
1384	二日市戦病死者芳名碑	筑紫野市	塔原東	公有地	8その他	
1385	二日市大東亜戦争軍人殉国銘碑	筑紫野市	塔原東	公有地	8その他	
1386	二日市太平洋戦争殉国銘碑	筑紫野市	塔原東	公有地	8その他	
1387	二日市戦没供養塔	筑紫野市	二日市南2丁目		8その他	
1388	二日市日露戦役彰功記念之碑	筑紫野市	二日市中央3丁目	私有地	8その他	
1389	二日市明治卅七八年戦役記念碑・砲弾	筑紫野市	二日市中央3丁目	私有地	8その他	
1390	紫忠霊塔	筑紫野市	紫3丁目		8その他	
1391	杉塚戦歿者慰霊碑	筑紫野市	杉塚6丁目		8その他	
1392	平等寺忠誠碑	筑紫野市	平等寺	私有地	8その他	
1393	平等寺日清日露戦役記念碑	筑紫野市	平等寺	私有地	8その他	
1394	山口区忠魂之碑	筑紫野市	山口	私有地	8その他	
1395	山口大東亜戦争献納碑	筑紫野市	山口	私有地	8その他	
1396	山口大正七八年戦役記念碑	筑紫野市	山口・大歳神社	私有地	8その他	水雷は不明。索進器プロペラは社殿の天井部にある
1397	山口凱旋記念鳥居	筑紫野市	山口	私有地	8その他	

内容(年代・由来等)	文献
もとは山田区墓地にあったが、昭和39年(1964)墓地改葬により墓石は行方不明になった。墓地跡は現山田区公民館となった。太平洋戦争の中戦線に従事、戦没している	522
山田宝満神社にあり。明治39年(1906)の建立。山田出身兵士3人の凱旋を祝って建てられた	522
昭和15年(1940)2月11日建立。林仙之陸軍大尉の揮毫による。明治以降の戦役における戦没者の冥福を祈って建立された。建設資金はすべて地域住民や戦没者遺族の奉賛金、戦場にある出征兵士からの送金や地元企業からの援助金により賄われた	117
大野城市忠魂碑前の左側にある。題字は、大野村村長山上高太郎の筆による	529
忠魂碑の前面右側に建てており、明治以降すべての戦役・事変に大野村から出征して戦病死され、あるいは現役兵として服務中に病死された241柱の芳名が刻まれている。昭和27年(1952)5月20日に大野小学校講堂において、白壁大野町長が祭主となって戦没者慰霊祭を行い、引き続き講和発効記念式典を挙行し、式後この戦没者哀頌碑の除幕式が行われた	529
大野城市忠魂碑左側にあり。明治39年(1906)に建立された。日露戦争に出征した大野村出身140人の名前が刻まれ、うち6人が戦病死であった。全村民からの寄付により建設された	522
大野城市忠魂碑の左側にある。西南戦争以来大東亜戦争までの墓碑銘。忠魂碑の階段を上った左右に戦没者哀頌碑と対になって建つ	522
大野小学校正門の所にある。明治39年(1906)に建立された。日露戦争に出征した3人により建立されている	522
仲島地祇神社にあり。長さ36cm、直径11.5cmの砲弾を据え付けている	522
昭和14年(1939)1月に建立された。昭和50年(1975)の工場建設の際に行方不明となった。	522
太宰府天満宮北神苑内の夫婦樟の東側に所在する。井上哲次郎撰、宮小路康文書。高さ8尺。明治28年(1895)建立	645
太宰府小学校内に、紀元2600年記念事業として建立された。昭和19年(1944)4月建立	117
太宰府小学校内の忠霊塔の横に所在。昭和27年(1952)7月8日落成	大宰府市史2004 年表
昭和27年(1952)5月建立	117
明治43年(1910)3月建立	
昭和55年(1980)建立。地祇神社境内に所在。御田水月(義清)書	86
太宰府天満宮東神苑に所在。大正10年(1921)12月建立	
井上道場内に、開拓団の団長を務めた個人が昭和43年(1968)12月1日に建立	
那珂川市不入道の中寺の池ノ谷にあり。昭和11年(1936)5月4日建立。福岡から大刀洗飛行場に向かう途中で昭和11年3月4日に天候不順の中で墜落遭難した3人の名を刻む(文献633のp154写真)	633
那珂川市松木の天神社の西側にあり。昭和30年(1955)3月建立。日露戦争から太平洋戦争までの93人の名を刻む(文献633のp361写真)	117・633
昭和27年(1952)10月建立。那珂川市西隈の西隈井堰の南西にあり。表には「忠魂」と刻み、基壇両側面(鉄板)に「日露戦争大東亜戦争戦病死者芳名」と共に戦死者、病死者148人について出身区ごとに名前を刻む	117・633
明治39年(1906)5月建立。那珂川市西隈の西隈井堰の南西にあり。表に「明治三十九年戦没記念碑」、裏に病死者4人、戦死者79人の名前を刻む	117・633
昭和3年(1928)11.10建立。那珂川市市ノ瀬の日吉神社の東側、中ノ島公園内にあり。表に忠魂碑と共に「陸軍將從三位勲一等功二級白木淡書」と刻む。裏には「大體記念昭和三年十一月十日帝國在郷軍人會南畑分會建之」と刻む	117・633
昭和50年(1975)9月建立。那珂川市市ノ瀬の日吉神社の東側、中ノ島公園内の市ノ瀬の忠魂碑の隣にあり。表に「慰霊碑」と刻み、その下段には戦死者93名について戦没者名、年月、戦死場所、年齢、出身区を刻む	117・633
那珂川市埋金の埋金区公民館にあり。表に「日支事変記念碑」と刻み、裏に「埋金 在郷軍人會 青年團 昭和十四年三月十日国防婦人会」と刻む。昭和14年(1939)3月10日建立	
那珂川市後野の那珂川市中央公民館横天神社内にあり。表に「日露戦争記念碑」と刻み、その下段には「発起後野■中」、左側面に寄贈者5人の名前を刻む。裏には明治27年戦没者名7人を陸軍、歩兵、要塞砲兵、騎兵とその役職ごとに刻む	633
那珂川市西畑大山にあり。大日堂と呼ばれる御堂の前にある。昭和7年(1932)2月22日上海事変で戦死した上松曹長の功績をたたえ、その冥福を祈るために、西畑軍人会と青年会が建てた碑。前面に「故上松曹長生家之跡 陸軍歩兵大佐佐五位 勲三等石川房三書」と刻む。裏に「昭和八年二月二十二日建之 西畑軍人会 青年會」と刻む	633
那珂川市の仲の現人神社の中にあり表に「明治三十七、八年戦役従軍記念碑」と刻み、左側面に「明治二十七年冒達之安德村尚武會」と刻む。出身区ごとに59人の従軍者の名を刻む	633
那珂川市岩戸尋常高等小学校(現:岩戸小学校)にあり。学校敷地内の東側に作られていた。昭和12年(1937)の写真では残っている	139
那珂川市立南畑小学校の校門にあり。表に福岡県筑紫郡那珂川町立南畑小学校と刻まれた木製の看板を貼り付け、裏側に「故陸軍歩兵曹長添田一郎君建之」と刻む。築造年代不明	
那珂川市立南畑小学校校門の故陸軍歩兵曹長添田一郎君碑の隣にあり。「■露中明治三八年三月十一日奉天附近戦死者」と刻む。築造年代不明	
二日市町軍人墓地・塔原公園にあり。昭和7年(1932)12月10日建立。第12師団長杉山元の手書	117・623
二日市町軍人墓地・塔原公園にあり。昭和18年(1943)4月の4~5日頃に建立式。29人の戦没者名を刻む	623
二日市町軍人墓地・塔原公園にあり。昭和17~18年(1942~1943)の戦没者26人の名を刻む	623
二日市町軍人墓地・塔原公園にあり。昭和31年(1956)11月建立。224人の戦没者名を刻む	623
六地藏にあり。昭和40年(1965)4月25日建立	623
二日市八幡宮にあり。明治41年(1908)3月建立か。2名の戦死者を含んで、日露戦役に功のあった111人の名を刻む。揮毫は奥保肇	623
二日市八幡宮にあり。碑は明治41年(1908)3月10日建立で、その頂部に砲弾あり。径約30cm、長さ約85cm。	623・E
4人の名を刻む	623
5人の名を刻む	623
平等寺日吉神社にあり。昭和42年(1967)9月建立。21人の名を刻む	623
平等寺日吉神社にあり。明治39年(1906)5月建立。20人の名を刻む	623
大歳神社にあり。昭和49年(1974)10月建立。40人の戦没者名を刻む	623
大歳神社にあり。日露戦争での戦利品(弾薬・車輛)を明治40年(1907)に、金品を昭和17年(1942)に寄附したことの碑	623
大正7~8年(1918~1919)のシベリア出兵記念で、昭和17年(1942)10月に金品を寄附したことの碑。白水淡の書。台石に「一、砲弾1個 / 一、魚形水雷1個 / 一、索進器1個」とあり、その上部石柱頂部に砲弾(径約25cm、長さ約87cm)あり。なお、大正14年10.19に「45種魚形水雷(頭部共)」「浮標水雷缶」「200馬力発動機用索進器」それぞれ1個が大歳神社と小学校に下付、同年11.10に「露式25種通常彈」1個が下付されたという	
大歳神社にあり。日露戦争の凱旋記念で、明治39年(1906)11月建立。鳥居の額「荒神社」	623

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1398	山口忠霊塔	筑紫野市	山口		8その他	
1399	山口合祀者碑	筑紫野市	山口		8その他	
1400	山口平和記念碑	筑紫野市	山口		8その他	
1401	石崎殉国之碑	筑紫野市	石崎2丁目	私有地	8その他	
1402	石崎明治三十七八年戦役記念碑	筑紫野市	石崎2丁目	私有地	8その他	
1403	吉木忠魂碑	筑紫野市	吉木(吉木小学校横)		8その他	
1404	岡田忠霊塔	筑紫野市	岡田		8その他	
1405	岡田戦役彰功記念之碑	筑紫野市	岡田	私有地	8その他	
1406	美咲忠魂碑	筑紫野市	下見		8その他	
1407	常松慰霊碑	筑紫野市	常松	私有地	8その他	
1408	永岡慰霊碑	筑紫野市	永岡	私有地	8その他	
1409	永岡征露記念碑	筑紫野市	永岡	私有地	8その他	
1410	諸田慰霊碑	筑紫野市	諸田		8その他	
1411	諸田日露戦役之碑	筑紫野市	諸田	私有地	8その他	
1412	城山慰霊碑	筑紫野市	筑紫		8その他	
1413	筑紫戦死者芳名碑	筑紫野市	筑紫	私有地	8その他	
1414	筑紫日露戦捷■彰紀念之碑	筑紫野市	筑紫	私有地	8その他	
1415	筑紫忠魂碑	筑紫野市	筑紫	私有地	8その他	
1416	筑紫忠魂銘碑	筑紫野市	筑紫	私有地	8その他	
1417	隈英霊碑	筑紫野市	隈	私有地	8その他	
1418	西小田大東亜戦争記念碑	筑紫野市	西小田	私有地	8その他	
1419	山家忠霊塔	筑紫野市	山家		8その他	山家地区遺族会が清掃している
1420	古賀平和記念之碑	筑紫野市	古賀	私有地	8その他	
1421	古賀日清日露戦役記念之碑	筑紫野市	古賀	私有地	8その他	
1422	牛島日露戦役記念碑	筑紫野市	牛島		8その他	
1423	馬市日露獨戦役記念碑	筑紫野市	西小田	私有地	8その他	
1424	萩原日露戦役凱旋記念石燈籠建立碑	筑紫野市	萩原	私有地	8その他	
1425	立明寺日露戦役石段奉納記念碑	筑紫野市	立明寺	私有地	8その他	
1426	原田忠魂碑	筑紫野市	原田		8その他	
1427	大刀洗飛行第4聯隊之跡碑	朝倉郡筑前町	原地蔵	公有地	8その他	未確認
1428	西日本航空発祥之地碑	朝倉郡筑前町	原地蔵	公有地	8その他	未確認
1429	原地蔵区慰霊碑(時計台跡)	朝倉郡筑前町	原地蔵	私有地	8その他	未確認
1430	弥永の日露戦役記念碑	朝倉郡筑前町	弥永・大己貴神社	私有地	8その他	未確認
1431	弥永の日露戦役記念碑	朝倉郡筑前町	弥永・大己貴神社	私有地	8その他	未確認
1432	栗田の日露戦役記念碑	朝倉郡筑前町	栗田	公有地	8その他	未確認
1433	依井の日露戦役記念碑	朝倉郡筑前町	依井	私有地	8その他	未確認
1434	依井二地区忠魂碑	朝倉郡筑前町	依井	私有地	8その他	未確認
1435	熊ヶ山平和の碑	朝倉郡筑前町	依井	私有地	8その他	未確認
1436	高田区忠魂碑	朝倉郡筑前町	高田	私有地	8その他	未確認
1437	栗田区忠魂碑	朝倉郡筑前町	栗田	私有地	8その他	未確認
1438	当所区忠魂碑	朝倉郡筑前町	当所	私有地	8その他	未確認
1439	上高場区忠魂碑	朝倉郡筑前町	上高場	私有地	8その他	未確認
1440	久光の忠魂碑	朝倉郡筑前町	久光	私有地	8その他	未確認
1441	夜須町の戦没者慰霊塔	朝倉郡筑前町	東小田	公有地	8その他	未確認
1442	夜須町下高場の日露戦役記念碑	朝倉郡筑前町	下高場(旧夜須町)	公有地	8その他	
1443	三奈木の殉国諸士の墓	朝倉市	三奈木	未確認	6埋葬	未確認
1444	延命地藏菩薩像	朝倉市	大字一木(一木神社)	未確認	8その他	未確認
1445	甘木公園忠霊塔ほか	朝倉市	菩提寺(甘木公園)	未確認	8その他	
1446	金刀比羅神社の砲弾	朝倉市	菩提寺(甘木公園)		8その他	
1447	馬田忠勇義烈碑	朝倉市	馬田	未確認	8その他	未確認

内容(年代・由来等)	文献
昭和18年(1943)9月竣工。陸軍大将鈴木孝雄の書	623
6段に分けて西南戦争～大東亜戦争の187人の名を刻む	623
昭和29年(1954)8.15建立。緒方竹虎の書。文字は判読不能が多い	623
松尾宮にあり。昭和45年(1970)11月建立。10人の戦没者名を刻む。井上繁の書	623
石崎松尾宮にあり。明治40年(1907)9月建立	623
日清日露戦役にかかる忠魂碑・通拝碑が竜ヶ城山嶺に大正4年(1915)11.10に建設されていたが、昭和27年(1952)10月、日支事変・大東亜戦争の戦没者英霊を合祀して吉木塚口に碑を移転。その後吉木小学校の拡張に伴い小学校横に移転し昭和56年(1981)9月竣工。163人の名を刻む	117-623
納骨堂前にあり。昭和37年(1962)1月建立。7人の名を刻む	623
岡田老松神社にあり。昭和6年(1931)11月建立。武谷水城の書。表には4人の名を刻む	623
納骨堂横にあり。昭和37年(1962)5月建立。平成12年(2000)3月改築。シベリア戦争～太平洋戦争の戦死者25人の名を刻む	623
三郎神社にあり。昭和59年(1984)12月建立。大東亜戦争の戦死者8人の名を刻む。三宅武雄の書	623
永岡八幡宮にあり。昭和51年(1976)12月建立。日中戦争以降の戦没者32人の名を刻む。浜島一男の書	623
永岡八幡宮にあり。明治39年(1906)3月建立	623
諸田公民館横にあり。平成12年(2000)3月竣工。太平洋戦争の戦没者10人の名を刻む	623
藤原八幡宮にあり。昭和10年(1935)10月建立。3人の出征者名を記す	623
平成7年(1995)11月建立。太平洋戦争の戦没者9人の名を刻む	623
筑紫神社裏参道付近にあり。昭和27年(1952)8月建立。戦死者236人の名を刻む	623
筑紫神社裏参道にあり。明治40年(1907)10月建立。桂太郎の書	623
筑紫神社裏参道付近にあり。昭和3年(1928)11月10日建立。白水淡の書	623
筑紫神社裏参道付近にあり。昭和16年(1941)3.10建立。西南戦争～支那事変の16人の名を刻む	623
日吉神社前にあり。昭和27年(1952)9月建立。大東亜戦争の戦没者29人の名を刻む	623
天満宮にあり。昭和63年(1988)12月建立。大東亜戦争の戦没者7人の名を刻む。藤井富太の書	623
丸山公園にあり。昭和18年(1943)12月(4月?)建立。西南戦役から大東亜戦争までの戦没者88人の名を刻む。揮毫は東條英機による	623
扇祇神社にあり。昭和31年(1956)4月建立	623
扇祇神社にあり。明治39年(1906)4月建立	623
牛島公園前にあり。明治43年(1910)4月建立。山本梯三郎の書	623
馬市天満宮にあり。大正9年(1920)1月建立。山本梯三郎の書	623
扇祇神社にあり。日露戦争の凱旋記念で石燈籠一対を明治40年(1907)3月に献納した記念碑	623
蔵鳥神社にあり。明治三十七八年の日露戦争の凱旋記念で石段を奉納した記念碑。明治40年(1907)9月改築	623
昭和6年(1931)3月10日建立。「筑紫魂銘碑」と混同の可能性もある(所在地は筑紫2550と原田2550、建立年は昭和16年3.10と6年3.10)	117
昭和61年(1986)9月7日に設置したが、のち、平成11年(1999)度に記念碑・門柱は原地蔵公民館敷地に移設(文献683のp380写真)	683
原地蔵公民館敷地内の慰霊碑右隣にあり。昭和61年(1986)9月7日に大刀洗会(飛行第四連隊・航空廠・飛行学校・第五航空教育隊)の発起で建立された。大刀洗には昭和4～11年(1929～1936)の間に日本航空輸送株式会社があり郵便、貨物輸送を行っていた(文献683のp413写真)	683
飛行第四連隊(昭和15年から飛行学校)の本部庁舎前庭に時計塔として設置されていたもので、昭和32年(1957)10月に原地蔵軍友会(軍人・軍属であった人たち50人会)が慰霊碑として建て替えた。それをもとに平成5年(1993)10月に大刀洗会(飛行第四連隊・航空廠・飛行学校・第五航空教育隊)の願望により慰霊碑合祀の行事が行われた。公民館敷地内にあり(文献683のp410写真)	56-683-684
明治41年(1908)6月に大三輪村尚武会の発起で建立する。黒田長成の書。大己貴神社入口にあり(文献683のp374写真)	683-684
戦利兵器奉納の記として明治40年(1907)3月の陸軍大臣寺内正毅書の碑で、台座は大正5年(1916)4月に氏子在郷軍人により作られた。戦利兵器の砲弾は太平洋戦争中に供出されて今はない。大己貴神社本殿裏にあり(文献683のp375写真)	683-684
明治42年(1909)4月、栗田村尚武会により建立される。大山巖元帥の書。栗田バス停留所前にあり(文献683のp375写真)	683-684
明治38年(1905)12月の建立。竹中重統の書。依井八幡宮境内にあり(文献683のp375写真)	683
昭和38年(1963)4月建立。納骨堂横にあり(文献683のp410写真)	683-684
大刀洗空襲戦没者の中で身元の分からない遺骨が熊ヶ山に埋葬された。その場所に平成7年(1995)3月に建立された碑	
昭和35年(1960)10月建立。納骨堂横にあり(文献683のp410写真)	683-684
昭和35年(1960)7月建立。納骨堂横にあり	683
昭和37年(1962)1月建立。納骨堂横にあり	683
昭和36年(1961)5月建立。妙蓮寺入口にあり	683
昭和31年(1956)11月24日建立。同32年(1957)3月10日に竣工除幕式を執り行う。三輪中学校正門左手前にあり。明治から太平洋戦争までの362柱の名が刻まれる(文献683のp413写真・文献625のp201写真)	117-625-683
昭和33年(1958)10月15日竣工。夜須中学校校庭にあり。日清・日露戦争～太平洋戦争の町出身者416柱の位牌を納める(文献690のp683写真)	117-690
下高場公民館の南側。県道脇にあり。明治44年(1911)10月建立。陸軍少将山本梯三郎の揮毫	
昭和27年(1952)9月建立	117
昭和20年(1945)11月建立。昭和20年3月27日の大刀洗空襲における爆撃で、立石国民学校児童31人が頓田の森で死亡した。のちに米軍爆撃で亡くなった1人を合わせて32人の冥福と平和を願って遺族により延命地藏菩薩像が建てられた	506
陸軍墓地を昭和13年(1938)建設。同年の忠霊塔の他に碑あり。講和記念の碑；昭和26年(1951)12月、殉国千秋芳魂の碑；昭和36年(1961)中秋、飛行第98戦隊戦没者の霊；昭和46年(1971)8月15日(文献683のp398写真・文献56のp346写真)、朋友の碑；昭和47年(1972)6月11日、南浜高射砲兵之碑；昭和53年(1978)9月23日、甘木女子挺身隊の碑；昭和59年(1984)9月、特幹の碑；平成10年(1998)6月など。境界標3本程あり	56-117-131-683
甘木(丸山)公園内にある神社の境内にある。径約24cm、長さ約94cm。弾体に「奉納委甘木水町池野近吉」の文字がある	E
馬田区の熊野神社境内にあり。明治37年(1904)の日露戦争に馬田区から56人が出征したこと及び日本の勝利を記念して明治39年(1906)に建立した(文献567のp792写真)	567

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1448	馬田忠魂碑	朝倉市	馬田	未確認	8その他	未確認
1449	上浦日露戦争記念碑	朝倉市	馬田上浦	未確認	8その他	未確認
1450	上浦報賽碑	朝倉市	馬田上浦	未確認	8その他	未確認
1451	上浦入営軍人芳名碑	朝倉市	馬田上浦	未確認	8その他	未確認
1452	下浦旌忠碑	朝倉市	馬田下浦・王子神社境内	未確認	8その他	未確認
1453	草水忠霊碑	朝倉市	馬田草水	未確認	8その他	未確認
1454	黒川高木神社凱旋軍人献納池碑	朝倉市	黒川(高木神社)	未確認	8その他	
1455	頼田慰霊塔	朝倉市	頼田	未確認	8その他	未確認
1456	千手忠魂碑	朝倉市	千手	未確認	8その他	未確認
1457	野鳥忠霊塔	朝倉市	大字野鳥	未確認	8その他	未確認
1458	上秋月忠魂碑	朝倉市	上秋月	未確認	8その他	未確認
1459	佐田忠霊塔	朝倉市	佐田	未確認	8その他	未確認
1460	屋永忠霊塔	朝倉市	屋永	未確認	8その他	未確認
1461	林田(美奈宜神社)忠霊塔(忠魂碑)	朝倉市	林田	未確認	8その他	未確認
1462	小隈忠霊塔	朝倉市	小隈	未確認	8その他	未確認
1463	美奈宜神社戦争記念碑	朝倉市	蟻城	未確認	8その他	未確認
1464	秋月杉の馬場の桜並木	朝倉市	秋月		8その他	
1465	朝倉町日露戦役碑	朝倉市		未確認	8その他	未確認
1466	朝倉町宮地嶽忠霊塔	朝倉市	宮野湯隈	未確認	8その他	現存
1467	上ノ原忠霊塔	朝倉市	大庭上ノ原	未確認	8その他	未確認
1468	上ノ原戦没者芳名碑	朝倉市	大庭上ノ原	未確認	8その他	未確認
1469	菱野慰霊塔	朝倉市	菱野字下ノ谷	未確認	8その他	未確認
1470	杷木池田慰霊塔	朝倉市	杷木池田	未確認	8その他	未確認
1471	杷木池田名鑑碑	朝倉市	杷木池田	未確認	8その他	未確認
1472	杷木松末英霊塔	朝倉市	杷木松末	未確認	8その他	未確認
1473	杷木久喜宮靖国社	朝倉市	杷木久喜宮(日吉神社境内)	私有地	8その他	
1474	杷木志波奉鎮祭英霊志波神社	朝倉市	杷木志波(志波宝満宮)	私有地	8その他	未確認
1475	小石原慰霊塔	朝倉郡東峰村	大字鼓2862-2	公有地	8その他	東峰村社協敷地内に現存。状態は良好
1476	宝珠山日露戦争戦捷記念碑	朝倉郡東峰村	大行司(高木神社)	私有地	8その他	破損等は見られない
1477	宝珠山高木神社忠魂社	朝倉郡東峰村	大行司(高木神社)	私有地	8その他	状態は良好
1478	宝珠山慰霊塔	朝倉郡東峰村	大字大行司	公有	8その他	現存。状態は良好
1479	宝珠山福井慰霊堂	朝倉郡東峰村	福井(西念寺)	私有地	8その他	現存。状態は良好
1480	高樋の軍人墓地	三井郡大刀洗町	大字高樋	私有地	6埋葬	5基の墓石
1481	今の戦没者の墓	三井郡大刀洗町	大字今	私有地	6埋葬	現存
1482	翔天菊水の園の忠魂碑	三井郡大刀洗町	大字山隈	私有地	8その他	現存
1483	大刀洗公園忠魂碑①	三井郡大刀洗町	大字山隈	公有地(町)	8その他	
1484	大刀洗公園忠魂碑②	三井郡大刀洗町	大字山隈	公有地(町)	8その他	①忠魂碑と並列
1485	大刀洗陸軍航空廠技能者養成所之跡碑	三井郡大刀洗町	北鶴木	公有地(町)	8その他	現存
1486	守部慰霊塔	三井郡大刀洗町	大字守部	公有地(町)	8その他	現存
1487	三川慰霊塔	三井郡大刀洗町	大字三川	私有地	8その他	現存
1488	富多忠魂碑1	三井郡大刀洗町	大字富多	私有地	8その他	現存
1489	富多忠魂碑2	三井郡大刀洗町	大字富多	私有地	8その他	現存
1490	菅野慰霊碑	三井郡大刀洗町	大字菅野	公有地(町)	8その他	現存
1491	中川忠魂碑	三井郡大刀洗町	大字中川	私有地	8その他	現存
1492	下高橋忠魂碑	三井郡大刀洗町	大字下高橋	私有地	8その他	現存。周囲は軍人墓地
1493	上高橋支那事変大東亜戦争忠魂碑	三井郡大刀洗町	大字上高橋	公有地(町)	8その他	現存
1494	浄蓮寺忠霊塔	三井郡大刀洗町	大字本郷	私有地(寺)	8その他	消滅(「兵戈無用」碑は現存)
1495	本郷慰霊塔	三井郡大刀洗町	大字本郷	公有地(町)	8その他	現存
1496	西光寺慰霊塔	三井郡大刀洗町	大字本郷	私有地(寺)	8その他	現存
1497	栄田日露戦役記念碑	三井郡大刀洗町	大字栄田	公有地(町)	8その他	現存
1498	平方の戦没者之墓(「戦死者之墓」)	小郡市	平方	私有地	6埋葬	現存

内容(年代・由来等)	文献
小石原川の東田橋より200m 下流の左岸堤防上にある。明治10年(1877)の西南戦争以降の戦没者をまつて大正13年(1924)10月に帝国在郷軍人会馬田分会により建立される。文字は蟻城出身の陸軍大将尾野実信の揮毫による。昭和30年(1955)4月24日に戦没者芳名を円筒柱に刻み、入魂式・除幕式を行った(文献567の p804写真)	117・567
明治37年(1904)の日露戦争に上浦から20人が出征し、勝利した記念に明治39年(1906)3月1日に建立。上浦にある(文献567の p801写真)	567
明治27年(1894)の日清戦争に上浦から4人が従軍して勝利した記念に明治30年(1897)1月に建立した(文献567の p804写真)	567
上浦から明治～大正期に軍隊に入営した人の芳名を刻み、記念した碑で、51人が記される(文献567の p804写真)	567
明治37年(1904)の日露戦争に下浦区より30人が出征し、勝利した記念に明治39年(1906)3月に建立された(文献567の p810写真)	567
日清・日露・日中・第二次世界大戦で草水の13柱の英霊が国に殉じた、その冥福を祈る碑(文献567の p810写真)	567
黒川高木神社の鳥居をくぐった所に池がある。右側の池の中に明治40年(1907)6月建立の碑、左側の池に砲弾形の碑あり	
昭和40年(1965)10月建立	117
昭和27年(1952)4月建立	117
昭和34年(1959)12月建立	117
昭和27年(1952)9月建立	117
昭和29年(1954)11月建立	117
昭和35年(1960)8月建立	117
昭和29年(1954)3月建立。美奈宜神社境内の一面に蟻城の戦没者106柱が合祀された(文献608は忠魂碑とする。p678)	117・608
昭和28年(1953)9月建立	117
美奈宜神社の拝殿前面右手にあり。日露戦争にかかる記念碑で、もとは上に戦利品の砲弾があったが今はない。明治40年(1907)3月の陸軍大臣寺内正毅の書判と同年9月21日の「戦利兵器奉納ノ記」がある(文献608の p800)	608
「秋月史考」(文献87)に「明治三七八年戦役の記念として、当時の松田町長は桜樹数百本を道の両側に植へしめたるもの今の桜なり。」とあり、日露戦争後に戦勝記念で植樹されたもの	87
(文献502の p422写真)	502
宮地嶽古墳群の中の湯の隈古墳(装飾古墳)の南側に、昭和27年(1952)5月に建立される。その近くには宮野地区遺族会館が建つ	117
昭和25年(1950)5月建立	117
平成6年(1994)4月1日建立	117
昭和22年(1947)建立。もと泰安殿	117
昭和37年(1962)4月建立	117
昭和33年(1958)7月建立	117
昭和40年(1965)10月10日建立	117
昭和27年(1952)4月建立。碑文に「講和記念」久喜宮農友会の記述あり。御祭神は日吉神社の氏子で国家公共に尽くした人の御霊。8月15日12時の全国戦没者慰霊祭式典に合わせて、遺族有志が黙祷する	
昭和57年(1982)9月建立。建設費奉納 志波生産森林組合	117
昭和43年(1968)4月建立。旧小石原小学校(喜楽来館)にある(文献582の p389写真)	117・582
井上光の書。明治39年(1906)6月27日の建立(文献675の p406写真)。破損等は見受けられないが、苔により銘文が読めないところあり	675
昭和3年(1928)11月10日の昭和天皇即位御大典記念としてその当日に帝国在郷軍人会宝珠山分会により建立された(文献675の p453写真)。社に向かって右側の石塔に建立者名の銘文有り。石塔は一部破損あり	675
昭和41年(1966)10月建立。旧大行司小学校敷地内にあり、日清・日露戦争～太平洋戦争の戦没者名が彫られている(文献675の p477写真)	117・675
昭和27年(1952)建立。東峰村福井にある西念寺の寺域内に建立されているお堂。現在でも慰霊祭が行われているとのこと	117
昭和7年(1932)2月15日建立?(現存しない)現在5基の墓石。S16(1941)9月。S17(1942)2月15日。S17(1942)3月22日。S20(1945)4月。S20(1945)11月2日	117
昭和30年(1955)3月建立	
第五航空教育隊東門横にある戦没者の忠魂碑で、第5教育隊長大刀洗衛戌司令官の高村経人書。この境域内に境界標柱あり。昭和42年(1967)3月27日建立。平成15年(2003)調査	
大刀洗公園にあり。昭和43年(1968)6月建立	117
昭和9年(1934)3月建立。「帝国在郷軍人会大刀洗村〇会」	
平成7年(1995)11月に建立された。この養成所は航空機整備技術者の育成を目的として昭和13年(1938)に航空廠内に第1期生が誕生し、同17年(1942)4月に開所した。7期生までが航空機整備の教育を受けた(文献683の p400写真)	683
昭和29年(1954)10月建立。大堰小学校内	117
昭和31年(1956)5月建立	117
昭和34年(1959)5月建立[新田隣組が管理]	117
昭和34年(1959)6月26日建立(江戸隣組が管理)	117
昭和29年(1954)10月建立	117
(中川天満神社)昭和33年(1958)8月建立	117
(龍門神社)昭和34年(1959)3月吉日建立	117
昭和31年(1956)4月建立。当地は、仏教徒とカトリック教徒が混在し、本碑は双方とも合祀されている	117
昭和33年(1958)4月建立。平成28年(2016)に「兵戈無用」碑に作り変える。	117
昭和28年(1953)4月建立。本郷小学校にあったものを、H24に現地(本郷ふれあいセンター)に移設	117
西光寺境内。昭和33年10月建立?	
明治42年(1909)3月15日建立	117
昭和31年(1956)9月建立。正面に「戦死者之墓」、背面に「昭和三十一年九月建之」、基礎には戦死者の氏名が刻まれている	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1499	立石国民学校奉安殿	小郡市	立石	公有地(市)	8その他	台座は、小郡市立立石小学校の東門の南側に現存。本体は、消防団倉庫の南側の敷地に現存
1500	立石平和の碑(三軒屋の森)	小郡市	立石	公有地(市)	8その他	小郡 IC 北交差点の西側の道路沿いに現存
1501	横隈忠魂碑(三国小学校忠魂碑)	小郡市	横隈(三国小学校)	公有地(市)	8その他	現存
1502	三国小学校出征記念碑	小郡市	横隈(三国小学校)	私有地	8その他	現存
1503	隼鷹神社瑞垣	小郡市	横隈	私有地	8その他	現存
1504	吹上忠魂碑(立石中学校前「忠魂碑建設費寄附人名標」及び忠魂碑)	小郡市	吹上	公有地(市)	8その他	消防団倉庫の北側の敷地に現存
1505	吹上神社奉納日露戦利兵器	小郡市	吹上	私有地	8その他	現存
1506	光行忠魂碑(「大東亜戦死者 忠魂碑」)	小郡市	光行	私有地	8その他	現存
1507	光養寺忠魂碑	小郡市	二森(光養寺)	私有地	8その他	不明
1508	光桂寺「威得無侶」の碑	小郡市	八坂(光桂寺)	私有地	8その他	納骨堂の前に現存
1509	頼了寺忠魂碑	小郡市	乙隈(頼了寺)	私有地	8その他	不明
1510	東町公園忠魂碑	小郡市	小郡字前伏	公有地	8その他	現存
1511	東町公園招魂所	小郡市	小郡字前伏	公有地(市)	8その他	現存
1512	東町公園日露戦没記念碑、マツ	小郡市	小郡字前伏	公有地(市)	8その他	現存
1513	縣境石	小郡市	小郡	公有地(市)	8その他	当時より少し移動している。今後移設される可能性あり
1514	普濟寺忠魂碑	小郡市	下西鰐坂字城ノ内	私有地	8その他	現存
1515	戦没者慰霊碑	小郡市	小板井	私有地	8その他	築地川にかかる尾形町橋の北西方向の道路脇に現存
1516	訓練中殉職した中尉の慰霊碑	小郡市	山隈字城山	公有地	8その他	花立山城山公園内に現存
1517	禪福寺戦没者墓地、納骨堂	小郡市	寺福童	私有地	8その他	現存
1518	応真寺戦没者供養碑	小郡市	福童	私有地	8その他	現存
1519	天満神社日清日露日独戦没記念碑	小郡市	二森	私有地	8その他	現存
1520	日独戦役記念碑	小郡市	津古	私有地	8その他	八龍神社横の敷地に現存
1521	日露戦没記念碑	小郡市	津古	私有地	8その他	八龍神社横の敷地に現存
1522	八龍神社海軍出身記念松永幸助	小郡市	津古	私有地	8その他	現存
1523	日吉神社日独記念碑	小郡市	三沢	私有地	8その他	現存
1524	諏訪神社出征記念・出征者碑	小郡市	古飯	私有地	8その他	現存
1525	御勢大霊石神社征露出征記念碑	小郡市	大保	私有地	8その他	現存
1526	老松神社奉献青島攻撃砲弾一個	小郡市	上岩田	私有地	8その他	現存
1527	姫治村日露戦役記念碑	うきは市	浮羽町	不明	8その他	不明
1528	小塩征清記念之碑、招魂塔	うきは市	浮羽町小塩	公有地	8その他	招魂塔は浄光苑敷地内に移設。記念碑の所在不明
1529	小塩日露戦役記念碑、招魂塔	うきは市	浮羽町小塩	公有地	8その他	記念碑及び招魂碑は浄光苑敷地内に移設
1530	小塩戦没者芳名録碑	うきは市	浮羽町小塩	私有地	8その他	現存
1531	田籠御大典日独交戦記念碑	うきは市	浮羽町田籠	私有地	8その他	現存する
1532	山北(山春村)征清記念之碑	うきは市	浮羽町山北	公有地	8その他	現存
1533	慰霊碑	うきは市	浮羽町山北		8その他	
1534	慰霊碑	うきは市	浮羽町山北		8その他	
1535	大石小学校忠魂碑	うきは市	浮羽町大字大石		8その他	

内容(年代・由来等)	文献
立石国民学校において、1935(昭和10)年に講堂が建設されると、これを記念して奉安殿建設資金1500円が寄贈され、建設されたそうである。この奉安殿は、戦後、本体を金庫として使用するために台座と分離された。台座は、正面の階段と方形の基壇のみであり、基壇を囲む枠上面には垣の柱を取り去った跡が残る。奉安殿の本体は戦後に当時の立石村役場の金庫として使用されるために当時立石村役場のあった現地へと移設された。その後、一度、火事にあっている。なお、立石小学校体育館の東側に奉安殿の基壇が残っている	90
昭和20年(1945)3月27日の74機のB29による大刀洗空襲において、三井郡立石国民学校児童3人など7人が犠牲となった場所。場所は井上三軒屋から東の旧今隈道で、雑木林の三軒屋の森には大刀洗飛行場の燃料が入ったドラム缶が多数隠されていた。近くには高射砲の木製模擬砲が5基据えられていた。戦後60年を過ぎ戦争の記憶を風化させないようにと立石区長会をはじめ有志により平和の碑が建立され、2005(平成17)年8月5日に除幕式が行われた	34・543
大正14年(1925)3月建立、昭和28年(1953)4月再建。自然石に「忠魂碑」、背面には「大正十四年三月 三國村在郷軍人分会」と刻まれ、石積みの最上段には「昭和二十八年四月再建 三國村」と刻まれている	117
三國村の出征(大正3年[1914])の青島出征と思われる)軍人が、学校の石門を寄贈した時のものであり、大正6年(1917)建立。この石門は当時の正門として使用されていたようである。碑の左右側面・背面には、150人ほどの寄贈者名が、軍所属・階級・叙勲等級と共に列記されている	80
神殿前に造られた瑞垣で、大正3・4年戦役(1914・1915;日独戦争)の出征記念に奉納されたものと考えられる	
大正15年(1926)春建立、昭和32年(1957)4月再建。立石村在郷軍人会が建立した忠魂碑である。干潟・乙隈等地域名と氏名が刻まれている。隣接して寄付者の名前を記した石碑もある	117
日露戦争の記念に砲弾が奉納されており、それを記念した碑と考えられる。第二次世界大戦で敗戦した時に神社の入口付近にあったのが倒れてそのままだったのを、その後現在地に建て直したそうである。明治40年(1907)に建立されている	
昭和28年(1953)5月建立。正面に「大東亜戦争忠魂碑」、背面に「昭和二十八年五月建立」と刻まれている。基礎の一段目には、正面と背面に戦没者の氏名が刻んである。基礎の二段目の背面には石工の氏名が刻まれている	117
昭和32年(1957)8月建立	117
昭和22年(1947)4月建立	4・117
昭和35年(1960)4.10建立	117
大正5年(1916)11月に建立。明治政府の成立以降日清戦争や日露戦争での戦死者の供養のために主に自治体で建立した碑の1つと考えられる	
日清戦争・日露戦争・太平洋戦争で戦病死した小郡出身の英霊220柱を小郡村として招魂所を設けて祀ってある。招魂所入口左側には招魂所建設の記念碑があり、小郡村長と遺族係代表者の氏名が刻まれており、昭和28年(1953)に建設されたことがわかる。招魂所の入口には灯籠が一對建てられており、昭和35年(1960)に建立されている	35
明治37年(1904)の日露戦争後に植えた記念樹とその記念碑。碑のすぐ横に松がある。碑文によると戦地より持ち帰った種子を植え、その苗を移植したとある。ただ、碑には左右両側面に穴をふさいだ跡があり、穴の跡のすぐ横に木があるので、この碑はもとは柵の一部で、少なくとも一度は移動されたと考えられる	37・105
現在の福岡・佐賀両県境から少し小郡市側に入った国道500号線の北側路傍に建っている。石柱の西面に「飛行隊」と文字が刻まれていることから、昭和11・12年(1936・1937)頃に現在の国道500号線が大刀洗飛行場のために拡幅工事された際に建てられたのではないかとされている。近年の道路拡幅工事のため東側に少し移動したが、道路拡幅工事が計画されており、今後移設される可能性がある	
昭和32年(1957)に建立	
明治40年(1907)3月建立	
城山下埋め立てが計画され、平成15年(2003)頃から用水路・側溝工事が行われていた。その際に、「中尉の碑」が半分の状態出土したことから堤下の公園に建立されている。この中尉とは、昭和8年(1933)10月28日「大刀洗の戦闘機空中衝突の椿事」に「狐奇大破石田少尉瀕死」と関係があると考えられている	76・90
納骨堂の左側面から後方にかけて戦没者墓石が並んでいる	
明治から昭和にかけて戦地において戦死した帝国陸軍・海軍の英霊の戦死の状況と死亡年月日が刻まれている。昭和32年(1957)に建立	
日清戦争(明治27年[1894])、日露戦争(明治37年[1904])、ドイツ軍の要塞があった青島に出兵(大正3年[1914])した戦役の記念碑である。建立は青島戦役の翌年の大正4年(1915)。背面に長文の銘があるが、文字がかなり薄くなっている。揮毫者は、久留米にあった歩兵第48連隊第7代連隊長で、久留米着任は明治43年(1910)、この連隊を率いて青島攻略に出征している	542
大正3年(1914)の日独戦役に出征した軍人たちのための記念碑。碑の建立は昭和2年(1927)。背面は未確認だが、基礎には出征軍人名や碑建設の関係者の名前が彫られている	
明治37年(1904)の日露戦争に出征した兵士の名を記した記念碑。明治42年(1909)建立。出征した兵士20人の所属・氏名などが刻まれている	
明治35年(1902)に個人によって寄進された碑。碑の上面に浅い円形の窪みがあり、区内の古老の方の話では、高さ30cm程の高射砲弾が載っていたが、戦時中の金属の供出で無くなったそうである。銘にある「船匠手」とは技術系下士官クラスの階級であり、松永氏が海軍軍人として立身したことを記念碑という形で残し、奉納したと推測される	542
建立されたのは日独開戦の翌年の大正4年(1915)である。高い四角柱状の碑の上に砲弾像を載せている。基礎側面の銘には、昭和7年(1932)改築とある。改築の銘には、出征軍人10人の名が刻まれている	542
正面に「出征記念」、背面には日清戦争・日露戦争・北清事変・第一次世界大戦の各年号が列挙されており、これらの4戦役に出征した地元兵士の記念碑である。この碑は、大正13年(1924)に建立されている	
ロシアへの出征、並びに神社への田の寄附を記した記念碑であり、建立は明治39年(1906)である。碑の背面にロシア出征の状況を、左側面に田4畝24歩の寄附を刻んでいる	542
大正3年(1914)8月にドイツに宣戦布告し第1次世界大戦に参戦した日本は中国でのドイツの拠点である青島攻略作戦を開始した。この戦争に陸軍歩兵として従軍した個人が大正5年(1916)に砲弾を奉納した記念に建てられたものと考えられる	
明治42年(1909)5月29日落成。「小塩日露戦役記念碑、招魂塔」と同一の可能性もある	513
征清記念碑は明治31年(1898)11月1日建立で、大山巖の書。碑の高さ3.26m。招魂塔は明治32年(1899)11月10日建立で、西南の役及び日清戦争での戦死者にかかるもの。建立場所は合所ダムに沈んでいる。現在、招魂塔は浄光苑(うきは市火葬場)敷地内に移設。記念碑の所在は不明。合所ダム底に沈んでいる可能性あり	512
日露戦役記念碑は建立年不明。千家尊福の書。碑の高さ3.19m。招魂塔は日露戦争戦病死者として5人の名前を刻む。建立場所は合所ダムに沈んでいる。現在、記念碑及び招魂碑は浄光苑(うきは市火葬場)敷地内に移設	512
昭和40年(1965)建立。小松堀の真美野神社にあり、小塩地区の日清戦争～太平洋戦争の戦没者80人の氏名が刻まれる	514
大正5年(1916)建立。田籠の馬場・諏訪神社にある。現存するが、台座がなく他の石碑の土台に寄り掛かっている状態	514
明治28年(1895)9月建立、29年(1896)6月落成で、陸軍中将黒木為禎の書。自然石を用いた碑で高さ4m、幅2.9m(文献514のp1041写真)	512・513・514
荒瀬・畑中公民館にあり。昭和22年(1947)10月建立	
賀茂神社にあり。詳細不明	
浮羽町朝田の朝田支石墓の上石を忠魂碑の台石とする(文献122のp32、第7図写真)。朝田支石墓は昭和27年発見で、その調査の際には長さ2.5m、幅1.27m、厚さ0.5mの上石は既に搬出されていたとされる。また上石の下の甕棺墓壇には立石と河原石を積み上げた部分もあった	122

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1536	靖国神社	うきは市	浮羽町高見		8その他	
1537	従軍記念碑	うきは市	浮羽町高見		8その他	
1538	護国神社	うきは市	浮羽町三春		8その他	
1539	忠魂碑	うきは市	浮羽町妹川		8その他	
1540	忠魂碑	うきは市	浮羽町新川		8その他	
1541	御幸神社英霊之碑	うきは市	浮羽町西隈上		8その他	
1542	福益の征清記念碑	うきは市	吉井町福益	公有地	8その他	現存
1543	吉井町の慰霊塔	うきは市	吉井町大字若宮	公有地	8その他	現存
1544	日露戦役従軍燈籠	うきは市	吉井町(延寿寺)	私有地	8その他	現存
1545	名馬・鷲城之碑	うきは市	吉井町下菅	私有地	8その他	現存
1546	旧陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地	久留米市	野中町	公有地(市)	6埋葬	現存
1547	旧陸軍歩兵連隊関係陸軍墓地ドイツ兵墓 慰霊碑	久留米市	野中町	公有地(市)	6埋葬	現存
1548	陸軍墓地の忠霊塔	久留米市	野中町(競輪場)	公有地(市)	6埋葬	現存
1549	水分の忠魂碑	久留米市	田主丸町常盤	公有地(市)	8その他	所在不明
1550	常磐忠霊塔	久留米市	田主丸町常磐	公有地(市)	8その他	平成28年度(2016)撤去、消滅
1551	軍人会記念碑	久留米市	田主丸町常盤	公有地(市)	8その他	現存
1552	忠魂碑	久留米市	田主丸町田主丸	公有地(市)	8その他	平成28年度(2016)撤去、消滅
1553	川会の忠魂碑	久留米市	田主丸町以真恵		8その他	所在不明
1554	石垣日露戦役記念碑	久留米市	田主丸町石垣	私有地	8その他	現存
1555	以真恵忠魂碑	久留米市	田主丸町以真恵		8その他	所在不明
1556	以真恵忠霊塔	久留米市	田主丸町以真恵		8その他	所在不明
1557	大慶寺忠魂碑	久留米市	田主丸町地徳	私有地	8その他	現存
1558	田主丸忠魂碑	久留米市	田主丸町田主丸		8その他	所在不明
1559	船越忠魂碑	久留米市	田主丸町船越	公有地(市)	8その他	現存
1560	船越芳名碑	久留米市	田主丸町船越		8その他	現存
1561	船越殉国者芳名碑	久留米市	田主丸町船越		8その他	現存
1562	豊城忠魂碑	久留米市	田主丸町豊城	私有地	8その他	現存
1563	石垣忠霊塔	久留米市	田主丸町石垣	不明	8その他	所在不明
1564	森部天満神社日露戦役碑	久留米市	田主丸町森部・天満神社	私有地	8その他	現存
1565	矢倉八幡宮戦役記念の標柱	久留米市	田主丸町益生田	私有地	8その他	現存
1566	矢倉八幡宮敷石寄進碑	久留米市	田主丸町益生田	私有地	8その他	現存
1567	矢倉八幡宮日獨戦役記念	久留米市	田主丸町益生田	私有地	8その他	現存
1568	殖木忠霊塔	久留米市	田主丸町殖木	私有地	8その他	現存
1569	竹松忠霊塔	久留米市	田主丸町八幡		8その他	所在不明
1570	三明寺忠霊塔	久留米市	田主丸町竹野		8その他	所在不明
1571	金島小学校忠魂碑	久留米市	北野町八重亀	公有地(市)	8その他	現存
1572	大城小学校忠魂碑	久留米市	北野町大城	公有地(市)	8その他	現存
1573	北野天満宮「日清日露戦役紀年之碑」	久留米市	北野町中	私有地	8その他	現存
1574	赤司慰霊碑	久留米市	北野町赤司	私有地	8その他	現存
1575	高良忠霊塔	久留米市	北野町高良	私有地	8その他	現存
1576	忠魂記念碑	久留米市	草野町矢作	公有地(市)	8その他	現存
1577	戦没者銘塔	久留米市	草野町矢作	公有地(市)	8その他	現存
1578	靖国碑	久留米市	小森野5丁目	公有地(市)	8その他	現存
1579	大東亜戦戦没者芳名碑	久留米市	小森野5丁目	公有地(市)	8その他	現存
1580	日清日露戦没記念碑	久留米市	善導寺町与田	公有地(市)	8その他	現存
1581	征清記念碑	久留米市	梅満町	公有地(市)	8その他	現存(移設か?)
1582	日露戦役記念碑	久留米市	梅満町	公有地(市)	8その他	現存(移設か?)
1583	日独戦役記念碑	久留米市	梅満町	公有地(市)	8その他	現存(移設か?)
1584	戦没者芳名碑	久留米市	大橋町合衆	私有地	8その他	現存
1585	忠霊塔	久留米市	大橋町合衆	私有地	8その他	現存
1586	英霊碑	久留米市	高良内町		8その他	所在不明
1587	征清軍記念碑	久留米市	高良内町	私有地	8その他	現存
1588	忠勇碑	久留米市	高良内町	私有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
弓立神社にあり。昭和26年(1951)3月建立	
弓立神社にあり。明治40年(1907)1月建立	
三春天満宮にあり。昭和22年(1947)10月建立	
集落墓地内にあり。昭和32年(1957)10月建立	
高御魂神社にあり。昭和31年(1956)12月建立	
隈上正八幡宮にあり。昭和50年(1975)1月建立	
明治31年(1898)8月建立で、高島軯之助の書。花崗岩の碑の高さ3m、幅1m	512
昭和35年(1960)5.1建立	117
日露戦争に従軍した地元出身者60数人の記念献籠2基1対	24
田中家墓地内に建立。裏面に五行程の漢文の刻みがあるが磨滅で判読不能。宮内庁生まれで天皇乗用とも目された馬は身体的な問題で久留米第24旅団長黒田周一の乗馬となる。その美しさから後に東條英機の所有となり、縁あって今の田中家の所有となった。亡くなった際、東條から馬を譲られた九州日報編集長の清水芳太郎の発起により碑が建てられた。揮毫は黒田周一旅団長と言われる	24
旧陸軍の墓地は、昭和14年(1939)7月に着工し、17年(1942)4月に完成した。敷地は約71,000㎡あり、幾つかの忠霊塔が残る。碑は昭和16年(1941)10月建立。平成15年(2003)調査	117・131・570・572
大正3年(1914)8月に参戦した第一次大戦における青島攻略で俘虜としたドイツ兵の一部が、同年10月に設置された久留米俘虜収容所に収容されたが、そのうち11人が死亡した。その墓は当初は山川陸軍墓地にあったが、のちに当地に移され、戦後になってさらに移転した後、平成9年4月に正源寺池畔の現在地に移転整備された(文献575の p257に写真あり)	572・575・677
正源寺山陸軍新墓地は昭和14年(1939)7月～17年(1942)4月に造成・整備され、その地に昭和18年(1943)3月に忠霊塔が建立されて、4月10日に竣工式及び鎮靈式が挙行された。基壇からの塔の高さ17m、幅3mの徳山産花崗岩に渡辺正夫中将が揮毫した「忠霊塔」の文字がある。納骨所には5,048柱が安置されている。(文献577は第8編[p181～p456]が「事変・戦災」で、その前のグラビアの中に当該写真あり)	55・577
水分小学校にあり。御大典記念で昭和3年(1928)11月10日の建設。「忠魂碑」の文字は陸軍大将一戸兵衛の書	512
水分小学校にあり。昭和29年(1954)10月建立。2016年撤去	117
水分小学校にあり。明治45年3月10日建立。帝国在郷軍人会水分分会	久留米市リスト
田主丸小学校にあり。建立年不明	
大正4年(1915)10月の建立で、陸軍中将高山公通の書。高さ3.6m	512
石垣神社にあり。明治40年(1907)冬建立(文献617の p677写真)	617
昭和20年(1945)7月建立	117
昭和31年(1956)10月建立	117
雲遊寺にあり。昭和21年(1946)頃建立	117
昭和15年(1940)3月建立〔皇紀2600年〕	117
昭和9年(1934)5月建立	117
昭和34年(1959)4月建立	
建立年不明	
昭和28年(1953)建立	117
建立年不明	117
「日露戦役従軍記念敷石寄進」碑。明治40年(1907)3月建立。27人の名を刻む。鳥居を入れて右側にある。砲弾形の石像物を乗せた四角柱の碑	
矢倉八幡宮(地徳古墳東側)の参道。二の鳥居前にあり。向かって左は「明治三十七八年戦役記念」、右は「明治四十六七〇秋八月」とある	
矢倉八幡宮にある「敷石奉寄進」の碑。矢倉八幡宮参道にあり。明治40年(1907)8月建立。砲弾形石造物に刻まれる	
矢倉八幡宮の「日露戦役記念」の碑。矢倉八幡宮参道にあり。大正5年(1916)5月建立。出征軍人11人の名を刻む	
諏訪神社にあり。昭和28年(1953)10月建立	117
昭和30年(1955)建立	117
昭和30年(1955)3月建立	117
金島小学校にあり。昭和12年(1937)5月建立	117
大城小学校にあり。昭和3年(1928)建立	
北野天満宮にあり。平成3年(1991)3月再建	117
納骨堂境内にあり。昭和33年(1958)10月建立	117
納骨堂境内にあり。昭和34年(1959)建立、平成4年(1992)再建	117
草野小学校にあり。明治43年(1910)7月1日建立	
草野小学校にあり。昭和27年(1952)8月再建	
小森野小学校にあり。平成9年(1997)8月再建	
小森野小学校にあり。建立年不明	
善導寺小学校にあり。建立年不明	
鳥飼小学校にあり。明治28年(1905)6月建立	
鳥飼小学校にあり。建立年不明	
鳥飼小学校にあり。建立年不明	
大橋校区コミセンにあり。建立年不明	
大橋校区コミセンにあり。昭和28年(1953)4月建立	
昭和14年(1939)5月に高良内遺族会が建立	
高良内八幡宮にあり。明治31年(1898)1月建立	
高良内八幡宮にあり。建立年不明。碑文から日露戦争に伴うものであることがわかる	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1589	雄健(おたけび)神社跡	久留米市	高良内町	公有地(国)	8その他	現存
1590	健軍之碑	久留米市	高良内町	公有地(国)	8その他	現存
1591	軍馬碑	久留米市	高良内町	公有地(国)	8その他	
1592	耕心園碑	久留米市	御井町(旧工兵隊作業場)	公有地(国)	8その他	現存(九州沖繩農業研究センター内)
1593	久留米工兵隊之跡碑	久留米市	御井町(旧工兵隊作業場)	公有地(国)	8その他	現存(九州沖繩農業研究センター内)
1594	御宴会場之碑	久留米市	御井町	私有地	8その他	現存
1595	玉座之跡	久留米市	御井町	不明	8その他	現存
1596	歩兵第四十八連隊跡之碑	久留米市	国分町	公有地(国)	8その他	現存
1597	戦車之碑	久留米市	国分町	公有地(国)	8その他	現存
1598	龍歩兵第百四十八連隊龍第6736部隊発祥之地の碑	久留米市	国分町	公有地(国)	8その他	現存
1599	久留米師団通信隊址	久留米市	国分町	公有地(国)	8その他	現存
1600	日独戦記念碑	久留米市	国分町	私有地	8その他	現存
1601	菊歩兵第五十六連隊碑	久留米市	篠山町	私有地	8その他	現存
1602	龍搜索第五十六連隊慰霊碑	久留米市	篠山町	私有地	8その他	現存
1603	東郷平八郎旧書齋	久留米市	篠山町	私有地	8その他	東郷記念館
1604	戊辰役従軍記念	久留米市	篠山町	私有地	8その他	現存
	明治44年陸軍特別大演習関係碑等					
1605	(1)明治天皇久留米大本営跡碑	久留米市	城南町(明善高校)	公有地(県)	8その他	現存
1606	(2)明治四十四年特別大演習駐?之地碑	久留米市	百年公園	公有地(市)	8その他	現存。但し、移設された可能性がある
1607	(3)明治天皇小森野御野立所碑	久留米市	百年公園	公有地(市)	8その他	現存。但し、移設された可能性がある
1608	(4)明治天皇親兵之迹碑	久留米市	南2丁目	公有地(国)	8その他	現存
1609	(5)明治天皇荒木行在所並御講評所碑	久留米市	荒木町荒木	公有地(市)	8その他	現存
1610	独立山砲兵第三連隊之跡碑	久留米市	南1丁目	公有地(市)	8その他	現存
1611	軍馬忠魂碑	久留米市	南1丁目	私有地	8その他	現存
1612	忠馬之碑	久留米市	南2丁目・南畑公園	私有地	8その他	現存、移設
1613	輻重兵聯隊之跡碑	久留米市	南2丁目・南畑公園		8その他	現存
1614	第十八師団記念碑	久留米市	諏訪野町・諏訪野公園	公有地(市)	8その他	現存
1615	日清日露日独戦役記念碑	久留米市	諏訪野町		8その他	現存
1616	久留米師団司令部碑	久留米市	諏訪野町	公有地(国)	8その他	現存
1617	号砲台記念碑	久留米市	天神町		8その他	現存
1618	小頭町戦災死者之霊碑	久留米市	小頭町	公有地(市)	8その他	現存
1619	(1)山川招魂社	久留米市	山川町茶白山	私有地	8その他	現存
	(2)山川招魂社爆弾三勇士之碑	久留米市	山川町茶白山	私有地	8その他	現存
	(3)山川招魂社大東亜戦慰霊碑	久留米市	山川町茶白山	私有地	8その他	現存
	(4)山川招魂社ビルマ派遣軍龍兵団工兵五十六連隊慰霊碑	久留米市	山川町茶白山	私有地	8その他	現存
1620	忠魂碑	久留米市	上津町		8その他	現存
1621	征清記念碑	久留米市	荒木町荒木	公有地(市)	8その他	現存
1622	陸軍第十八師団菊兵団記念碑、菊花の塔	久留米市	大善寺町宮本	私有地	8その他	現存
1623	誠忠之碑	久留米市	大善寺町宮本	私有地	8その他	現存
1624	日露戦役記念碑	久留米市	大善寺町宮本	私有地	8その他	現存
1625	従軍者	久留米市	大善寺町宮本	私有地	8その他	現存
1626	征清記念碑	久留米市	大善寺町宮本	私有地	8その他	現存
1627	三瀧町慰霊塔	久留米市	三瀧町玉満	公有地(市)	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
陸上自衛隊幹部候補生学校内にあり。昭和19年(1944)3.1建立	久留米市リスト
陸上自衛隊幹部候補生学校内にあり。第12師団長杉山元書だが、いつの揮毫か不明。昭和40年(1965)移設	久留米市リスト
陸上自衛隊幹部候補生学校内にあり。第3代校長樋口敬七郎書。昭和39年(1964)7.29建立	
御井町の農林水産省野菜試験場久留米支場の地(九州沖縄農業研究センター)はもと工兵隊の演習場であり、昭和8年(1933)に建立された「内弾三勇士」のレリーフがあったが金属供出により失われ、台座のみが残った。終戦後は国立園芸試験場九州支場となり、それが九州農業試験場園芸部と改称して10周年記念の昭和33年(1958)10月に「耕心園」の碑銘を刻んだ(文献677のp246)	5-571-677
明治42年(1909)10月17日に創設された工兵第18大隊及び昭和16年(1941)8月に設立された工兵第56連隊を記念して、その隊の出身者有志が昭和40年(1965)10月7日に建立した(文献5のp192写真)	5-571
明治44年(1911)特別大演習	久留米市リスト
碑文「明治44年11月15日」「御宴会場」「大正4年11月建立」「工兵第十八大隊」	久留米市リスト
陸上自衛隊特科連隊内にあり。明治29年(1896)11月14日に創設され、同30年4.20に久留米に移転してきた連隊を記念する碑で、昭和36年(1961)3月28日に第48連隊関係者有志により建立された。文献5のp126に写真あり	5-55
陸上自衛隊特科連隊内にあり。第一戦車隊は大正14年(1925)4月、歩兵学校から基幹要員を派遣して、本部、1個中隊、材料廠から発足した。同年5月1日に第12師団隷下となる。昭和6年(1931)以降、満州ほかに派遣される。その碑は現在は自衛隊第四特科連隊東側入口にある。昭和49年(1974)5月建立。文献5のp274写真	5
陸上自衛隊特科連隊内にあり。6736部隊は昭和15年(1940)9月編成開始、同16年12.20編成完結。碑は龍148戦友会が建立	久留米市リスト
陸上自衛隊特科連隊内にあり	久留米市リスト
日吉神社にあり。第一次世界大戦で日本がドイツと戦ったことの記念碑	513
篠山神社にあり。歩兵第56連隊は明治38年(1905)に創設される。大正14年(1925)に軍備縮小により軍旗は宮中に安置されたが、昭和12年(1937)に第18師団の主幹部隊として再編成された。碑は昭和40年(1965)5月建立	55
久留米城内の篠山神社にあり。捜索56連隊は昭和15年(1940)7月編成。連隊の生存者一同が建立	久留米市リスト
篠山神社にあり。久留米出身の実業家・小倉敬止が東京にあった東郷平八郎の書齋を買い受けて大正15年(1926)に篠山神社参道東側に寄贈し移築した。その後昭和35年(1960)に石橋正二郎により久留米城が整備された際に現在地に再移築された	
篠山神社にあり。昭和10年(1935)10月	
明治44年(1911)11月11～15日の陸軍特別大演習を記念した明善高校にある碑。昭和6年(1931)11月に東郷平八郎讀書で小倉敬止が建てた	55
百年公園にあり。明治44年(1911)11月13日の陸軍特別大演習において、明治天皇が駐したことを記念する碑。大正2年(1913)3月30日に建立された	55
百年公園にあり。昭和9年(1934)10月建設。明治44年(1911)11月に行われた陸軍特別大演習の際に明治天皇が統裁した所。これが昭和8年(1933)11月2日に明治天皇聖蹟として史跡に指定されたが、戦後の昭和23年(1948)6月29日に指定が解除された(文献644のp124写真)	644
牟田山住宅にあり。明治44年(1911)11月11～15日の陸軍特別大演習の最後の日の15日の建立銘がある	55
荒木小学校にあり。明治44年(1911)11月に行われた陸軍特別大演習の最終日に明治天皇が統裁を終えて講評を行った所。これが昭和9年(1934)11月18日に明治天皇聖蹟として史跡に指定されたが、戦後の昭和23年(1948)6月29日に指定が解除された(文献644のp147写真)	644
久商学園にあり。明治40年(1907)10月に小倉で創設された大隊が同41年(1908)に久留米に移転し、大正11年(1922)8月にこの名称となったが、軍縮で解散となった。昭和14年(1939)9月の建立。平成10年1月の「誌」あり	55
福岡教育大学附属中学校にあり。この地を兵営としていた騎兵科部隊が昭和16年(1941)6月に建立した。文献5のp190に写真あり	5-55
輻重兵第18大隊(明治40年[1907]10月25日創設、同41年[1908]3月31日に久留米に移転)の10代目隊長ほかが昭和8年(1933)11月に建立した	55
昭和53年(1978)3.10建立	久留米市リスト
明治44年(1911)10月編成の第18師団が軍縮により廃止されることとなったため(大正14年[1925]5月1日)、当時の師団長が4月30日に建立した。西国分小学校の南側にある	55-575
西国分コミュニティセンター駐車場にあり。大正4年(1915)11月建立	久留米市リスト
久留米税務署にあり。明治44年(1911)10月編成の第18師団司令部庁舎は戦後に税務署庁舎であったが、昭和36年(1961)2月に新庁舎完成で取り壊すこととなったために2月9日に記念の碑を建立した	55
明治43年(1910)建立。明治～大正期に正午の合図を知らせていた	久留米市リスト
小頭町公園にあり。昭和20年(1945)8月11日の久留米大空襲で死者212人、罹災家屋4,506戸の被害があった。講和条約締結を経て慰霊碑が昭和27年(1952)8月11日に小頭町公園の一角に建立され、慰霊祭が行われた	55-117-577
山川招魂社は明治2年(1869)2月に久留米藩主有馬頼咸の命で招魂所が設置され、真木和泉守以下38人の霊を合祀したことに始まる。明治6年(1873)8月、当地に高山彦九郎を祀る御楯神社が創建された。その後、招魂所には陸軍墓地が併設されて佐賀の乱(明治7年)と西南戦争(明治10年)の戦死者の墓が営まれた。さらにその後、御楯神社と招魂所祭神を合祀して招魂社となり、官祭招魂社・茶臼山招魂社・山川護国神社・南筑頭徳神社などと名称を替えてのち昭和34年に山川招魂社となって現在に至る。現在は西南戦争以降の久留米・三井郡出身の戦没英霊を含めて祭祀を行っている。境内には幾つかの碑がある。なお、併設の陸軍墓地は佐賀の乱・西南戦争関係を除いて昭和14年(1939)7月に野中町正源寺山(久留米競輪場)に移転した。	117-573-588
昭和56年(1981)2.22に久留米市郷友会が建立	久留米市リスト
「魂」は輻重兵第56連隊にかかる碑で、昭和42年(1967)10月吉日、ビルマ派遣軍龍兵団輻重兵第56連隊生存者一同が建立した。「慰霊之碑」は龍工兵第56連隊にかかる碑	久留米市リスト
良山中学校北隣の山川招魂社には幕末～西南戦争時の戦死者の墓のほか、爆弾三勇士之碑、大東亜戦慰霊碑もある。西部第54部隊(輻重部隊)内で編成された56連隊のことを記念して昭和42年(1967)10月11日に建立された	55-677
上津校区コミセンにあり。昭和13年(1938)4月建立	
荒木小学校にあり。明治30年(1897)12月	久留米市リスト
大善寺玉垂宮神苑に昭和51年(1976)12月に竣工した(文献678のp184写真)	678
大善寺玉垂宮にあり。明治16年(1883)4月15日	久留米市リスト
大善寺玉垂宮にあり。明治42年(1909)5月	久留米市リスト
大善寺玉垂宮にあり。時期不詳	久留米市リスト
大善寺玉垂宮にあり。明治30年(1897)5月	久留米市リスト
久留米市三瀨総合支所にあり。昭和44年(1969)4月建立	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1628	護国塔	久留米市	三瀧町玉満		8その他	所在不明
1629	三瀧町清露戦役記念碑	久留米市	三瀧町高三瀧	私有地	8その他	現存
1630	忠魂碑	久留米市	三瀧町高三瀧		8その他	所在不明
1631	忠魂碑	久留米市	三瀧町福岩	私有地	8その他	現存
1632	忠霊塔	久留米市	三瀧町田川		8その他	所在不明
1633	忠霊塔	久留米市	三瀧町西牟田		8その他	所在不明
1634	■清記念碑	久留米市	三瀧町西牟田	公有地(市)	8その他	現存(移設)
1635	明治三十七八年戦役記念碑	久留米市	三瀧町西牟田	公有地(市)	8その他	現存(移設)
1636	城島平和の塔	久留米市	城島町橋津	公有地(市)	8その他	現存
1637	城島の忠魂碑	久留米市	城島町城島	私有地	8その他	現存
1638	大木町忠霊塔(八町牟田忠霊塔)	三瀧郡大木町	八町牟田	公有地(町)	8その他	現存
1639	日露戦役記念碑	三瀧郡大木町	木佐木		8その他	現存しない
1640	前牟田軍人忠死碑	三瀧郡大木町	前牟田	公有地(町)	8その他	現存
1641	日露戦役記念碑	三瀧郡大木町	前牟田	公有地(町)	8その他	現存
1642	奥牟田忠魂碑	三瀧郡大木町	奥牟田	公有地(町)	8その他	現存
1643	明治天皇藤田御野立所碑	八女郡広川町	藤田国分寺	公有地	8その他	現存
1644	日独戦役記念碑	八女郡広川町	下広川	公有地	8その他	現存
1645	忠霊塔	八女郡広川町	広川	公有地	8その他	現存
1646	戦捷記念碑	八女郡広川町	広川	公有地	8その他	現存
1647	忠魂碑	八女郡広川町	広川・智徳区	公有地	8その他	現存
1648	広川町慰霊之碑	八女郡広川町	新代	公有地	8その他	現存
1649	忠霊碑	八女郡広川町	新代・扇島区	公有地	8その他	現存
1650	慰霊碑	八女郡広川町	新代・長徳区	公有地	8その他	現存
1651	殉国忠魂之碑	八女郡広川町	吉常	公有地	8その他	現存
1652	殉国者碑	八女郡広川町	吉常	公有地	8その他	現存
1653	戦捷記念碑	八女郡広川町	水原・逆瀬谷区	公有地	8その他	現存
1654	忠魂之碑	八女郡広川町	水原・鬼ノ瀨区	公有地	8その他	現存
1655	忠魂碑	八女郡広川町	水原・草場区	公有地	8その他	現存
1656	殉国者之碑	八女郡広川町	久泉・太原	公有地	8その他	現存
1657	忠魂碑	八女郡広川町	川上・増永区	公有地	8その他	現存
1658	〇〇〇碑	八女郡広川町	太田・太田区	公有地	8その他	現存
1659	前津英霊之墓	筑後市	前津		6埋葬	納骨堂に現存
1660	前津慰霊碑	筑後市	前津		8その他	現存。熊野神社境内
1661	鶴田忠魂之墓	筑後市	鶴田		6埋葬	
1662	八女工業高等学校学徒動員殉難之碑	筑後市	羽犬塚		8その他	現存。校门入って右側
1663	羽犬塚招魂社	筑後市	羽犬塚		8その他	未確認
1664	羽犬塚忠魂碑	筑後市	羽犬塚		8その他	現存
1665	和泉忠魂碑	筑後市	和泉		8その他	現存
1666	古島出征戦没記念碑	筑後市	古島		8その他	現存
1667	井田忠魂碑	筑後市	井田		8その他	現存
1668	井田上忠魂碑	筑後市	井田上		8その他	現存
1669	折地忠魂碑	筑後市	折地		8その他	現存
1670	島田忠魂碑	筑後市	島田		8その他	現存
1671	筑後市靖国神社	筑後市	水田		8その他	現存
1672	水田忠霊塔	筑後市	水田上町		8その他	未確認
1673	上北島忠霊塔	筑後市	上北島		8その他	現存
1674	久富戦没者手向塔	筑後市	久富		8その他	現存
1675	熊野忠魂碑	筑後市	熊野(納骨堂前)		8その他	現存
1676	蔵数忠魂之碑	筑後市	蔵数(納骨堂)		8その他	現存
1677	長浜英霊之墓	筑後市	長浜(長浜納骨堂前)		8その他	現存
1678	二本松忠魂碑	筑後市	二本松(公民館横)		8その他	現存
1679	寛元寺忠魂碑	筑後市	西牟田(寛元寺)		8その他	現存
1680	真光寺忠霊塔	筑後市	西牟田(真光寺)		8その他	未確認
1681	西牟田忠魂碑	筑後市	西牟田流区		8その他	未確認
1682	西牟田忠霊塔	筑後市	西牟田野中区		8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
建立年不明	
月読神社境内にあり。三浦村尚武会が建立。文献656の p155	656・久留米市リスト
昭和32年(1957)建立	
昭和32年(1957)2月建立	
建立年不明	
昭和38年(1963)4月建立	
十連寺公園にあり。上部欠損する。明治28年(1895)■月建立。日清戦争に伴うもの	
十連寺公園にあり。明治41年(1911)4月建立	
久留米市市民の森にある。平成2年(1990)5月建立 (文献599の p283写真)	117・599
善照寺境内にあり。大正4年(1915)10月建立 (文献599の p289写真)。陸軍中将柴勝三郎書	117・599
木佐木校区有志が発起人となり昭和32年(1957)5月に木佐木小学校校庭東側に忠霊塔を建立。揮毫者：元内務大臣山崎巖	117・518
終戦後(昭和20～21年[1945～1946]頃か)木佐木小学校校庭に建てられていた日露戦役記念碑を取り壊した	518
大溝小学校にあり。明治29年(1896)5.20建立	117
大溝小学校にあり。明治42年(1909)9月建立。揮毫者：陸軍中将木村有恒	
大正13年(1924)12月建立	117
明治44年(1911)11月の陸軍特別大演習の際に明治天皇が統裁した所の碑で「大元帥陛下駐蹕之處」(文献642の p155写真)。これが昭和8年(1933)11月2日に明治天皇聖蹟として史跡に指定されたが、戦後の昭和23年(1948)6月29日に指定が解除された(文献644の p152写真)	642・644
第一次世界大戦にかかる記念碑。下広川村からの出征者70人で戦死者は1人であった。建立年は大正11年(1922)2月(文献642の p158写真)。下広川小学校の東にある	642
下広川小学校校庭北側にあり。昭和28年(1953)建立	
明治45年(1912)3月建立。日露戦争関係	642
智徳区納骨堂敷地内にあり。昭和41年(1966)建立	
昭和61年(1986)5月建立	117
扇島区川上納骨堂にあり。昭和37年(1962)9月建立	
長徳区納骨堂入口にあり。昭和41年(1966)8月15日建立	
吉常八幡宮境内にあり。昭和29年(1954)6月建立	
吉常区納骨堂敷地内にあり。昭和52年(1977)12月建立	
逆瀬谷区公民館横にあり。明治40年(1907)3月建立。日露戦争勝利を記念した碑	642
鬼ノ瀨区納骨堂敷地内にあり。昭和23年(1948)5月建立。第二次世界大戦の戦没者	
草場区納骨堂敷地内にあり。昭和41年(1966)3月建立	
太原区納骨堂敷地内にあり。昭和41年(1966)12月建立	
増永区川上納骨堂敷地内にあり。平成7年(1995)5月吉日	
太田区一本松溜池北側にあり。詳細未確認	
昭和28年(1953)8月建立	117
熊野神社にあり。昭和41年(1966)8月建立	117
昭和28年(1953)7月建立	117
平成6年(1994)8月7日建立。昭和20年(1945)7月27日(1人)及び8月7日(2人)の米軍による大牟田空襲の際、勤労働員中に3人が被爆死亡した。8月7日にはほかに5人が被爆して死亡した。その計8人の名が碑の裏面に刻まれる	32
昭和42年(1967)4月吉日建立	117
宗岳寺にあり。昭和37年(1962)10月建立	117
了源寺にあり。昭和38年(1963)8月吉日建立	117
明治45年(1912)建立(老松神社に「出征記念碑」があるが大正11年建立とある)	117
昭和42年(1967)建立。納骨堂	117
昭和41年(1966)建立。井田上公民館敷地内にあり	117
昭和39年(1964)4月建立。正観寺の石塔の碑文石には昭和33年10月、台石には昭和21年4月30日建立とある	117
昭和31年(1956)8月建立。碑文石が新しくなっている	117
水田天満宮にあり。昭和31年(1956)10月13日創建。東京・九段の靖国神社に祀られた、明治維新～大東亜戦争の戦没英霊のうち筑後市関係の英霊1,275柱を分霊したもの	117・589
昭和23年(1948)建立	117
昭和36年(1961)10月建立。納骨堂	117
共同墓地にあり。昭和33年(1958)4月建立	117
昭和35年(1960)4月1日建立。坂東寺境内に「忠魂の碑」がある	117
昭和38年(1963)8月建立	117
昭和29年(1954)12月建立	117
昭和37年(1962)7月20日建立	117
昭和37年(1962)6月建立。平成30年に敷地内で移動している	117
昭和35年(1960)建立	117
昭和34年(1959)8月建立	117
昭和34年(1959)7月建立	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1683	光明寺忠魂碑	筑後市	津島西(光明寺)		8その他	現存
1684	津島東忠魂碑	筑後市	津島東(祖霊堂敷地内)		8その他	現存
1685	尾島忠魂碑	筑後市	尾島(尾島公民館前)		8その他	現存
1686	尾島忠霊塔	筑後市	尾島(祖霊廟前)		8その他	現存
1687	江口忠魂碑	筑後市	江口(万才墓地)		8その他	現存
1688	高江忠霊碑	筑後市	高江(高江墓地)		8その他	現存
1689	庄島忠魂碑	筑後市	庄島(庄島墓地)		8その他	現存
1690	四ヶ所忠魂碑	筑後市	四ヶ所(四ヶ所墓地)		8その他	現存
1691	若菜忠魂碑	筑後市	若菜(若菜神社)		8その他	現存
1692	上富久忠魂碑	筑後市	上富久(上富久墓地)		8その他	
1693	下富久忠霊碑	筑後市	下富久(下富久墓地)		8その他	現存
1694	地光寺忠霊塔	筑後市	中折地(地光寺)		8その他	現存
1695	一敷忠霊塔	筑後市	一敷(一敷共同墓地)		8その他	現存
1696	常用忠魂碑	筑後市	常用(常用天満宮)		8その他	現存
1697	下妻忠魂碑	筑後市	下妻(納骨堂)		8その他	現存
1698	富安忠霊塔	筑後市	富安(富安納骨堂)		8その他	現存
1699	馬々田日独戦没記念碑	筑後市	馬々田(福部神社)		8その他	現存
1700	馬々田靖国塔	筑後市	馬々田(納骨堂)		8その他	現存
1701	中牟田祖霊堂	筑後市	中牟田(西光寺)		8その他	現存
1702	中牟田靖国塔	筑後市	中牟田		8その他	未確認
1703	久惠靖国塔	筑後市	久惠(納骨堂)		8その他	現存
1704	新溝忠霊碑	筑後市	新溝(納骨堂)		8その他	現存
1705	溝口町英霊之墓	筑後市	溝口町(納骨堂)		8その他	現存
1706	溝口忠霊塔	筑後市	溝口1012(桑鶴納骨堂)		8その他	現存
1707	北長田慰霊碑	筑後市	北長田字川向		8その他	現存
1708	日露戦争記念碑	筑後市	常用(常用天満宮)		8その他	現存
1709	忠魂碑	筑後市	一条(納骨堂)		8その他	現存
1710	英霊の墓	筑後市	溝口南(溝口南納骨堂)		8その他	現存
1711	戦役記念碑	筑後市	高江(筑後市衛生センター内)		8その他	現存
1712	明治天皇岡山御野立所碑	八女市	室岡(岡山公園)	私有地	8その他	周辺は公園化されたが、碑は現存
1713	岡山公園招魂堂	八女市	室岡(岡山公園)	私有地	8その他	現存
1714	岡山公園征露記念碑	八女市	室岡(岡山公園)		8その他	現存
1715	八女公園招魂堂	八女市	本町(八女公園)	公有地	8その他	基壇部のみ残存
1716	八女市本町慰霊碑	八女市	本町(八女公園)	公有地	8その他	現存
1717	八女公園シベリア抑留の碑	八女市	本町(八女公園)		8その他	現存
1718	慰霊観世音	八女市	本(五社神社)	私有地	8その他	現存
1719	吉田忠魂碑	八女市	吉田字辻	私有地	8その他	現存
1720	戦捷記念碑	八女市	吉田 岩戸山古墳	公有地	8その他	現存
1721	飛形山慰霊碑	八女市	立花町白木	公有地	8その他	現存
1722	黒木町凱旋記念碑	八女市	黒木町本分	私有地	8その他	現存
1723	大淵忠魂之碑	八女市	黒木町大淵字長畑	未確認	8その他	
1724	大淵英霊之碑	八女市	黒木町大淵字長畑	未確認	8その他	
1725	田代征露記念碑	八女市	黒木町田代	私有地	8その他	現存
1726	田代日独戦争記念碑	八女市	黒木町田代	私有地	8その他	現存
1727	黒木町護国神社	八女市	黒木町今・築山公園	公有地	8その他	現存
1728	護国神社英霊碑	八女市	黒木町今	公有地	8その他	現存
1729	北川内招魂堂	八女市	上陽町北川内	公有地	8その他	現存
1730	北川内東公園招魂碑	八女市	上陽町北川内	公有地	8その他	現存
1731	北川内東公園慰霊碑	八女市	上陽町北川内	公有地	8その他	現存
1732	上横山忠霊塔	八女市	上陽町上横山字三川	未確認	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和44年(1969)9月建立	117
昭和34年(1959)10月建立	117
大正9年(1920)4月建立	117
昭和43年(1968)3月建立	117
昭和33年(1958)11月21日建立	117
昭和43年(1968)10月建立(文献117は昭和48年10月建立とする)	117
昭和40年(1965)4月建立	117
昭和36年(1961)8月建立	117
昭和28年(1953)3月建立。若菜八幡宮	117
昭和35年(1960)10月建立	117
昭和35年(1960)10月建立(上富久忠魂碑と同一か?)	117
昭和34年(1959)8月建立	117
昭和43年(1968)3月建立(文献117は5月とする)	117
昭和29年(1954)4月建立	117
明治43年(1910)4月建立	117
昭和35年(1960)4月建立	117
大正5年(1916)1月建立	117
昭和31年(1956)3月31日建立	117
文献117は昭和28年(1953)8月15日建立とするが、銘が見当たらない	117
昭和24年(1949)3月10日建立	117
昭和29年(1954)8月12日建立	117
昭和37年(1962)4月建立	117
昭和27年(1952)5月建立	117
昭和27年(1952)4月8日建立	117
昭和26年(1951)9月建立。納骨堂に「靖国塔」、老松神社に「戦勝記念碑」がある	117
昭和34年3月建立	
建立年月日不明	
陸軍歩兵大佐伊豆凡夫の書	
大正2年(1913)3月24日建立の碑(文献695のp233・234写真)。明治44年(1911)11月に行われた陸軍特別大演習の際に明治天皇が統裁した所。昭和8年(1933)11月2日に明治天皇聖蹟として史跡に指定されたが(史跡標柱は昭和10年5月建立)、戦後の昭和23年(1948)6月29日に指定が解除された(文献644のp152写真)。この碑の所の古墳は岡山公園整備事業に伴って平成4年(1992)4～6月に石室の調査が行われた	644・692・695
岡山公園にあり。昭和7年(1932)10月建立	117
岡山公園にあり。陸軍中將の名前があるが、不詳	
八女公園に明治40年(1907)4月建立の小碑(文献695のp229・230写真)	695
昭和44年(1969)8月1日建立。5段のうち3段目の四周に校区ごとの戦没者名を刻んだ銅板を嵌め込む。2段目背面には碑石寄贈者名と工事請負者名が記される。碑本体の扁平石は鶴見山古墳の石室天井石の転用であるとされている。正面階段下の燈籠2基は終戦50年記念で平成7年8.15に設置	117
終戦50年記念八女シベリヤ会一同が平成7年(1995)6月に建立。「幾年ぞ 飢餓極楽の重労働 シベリヤ抑留 永久に忘れじ 帰らざる六万の御霊の 御冥福を祈る」として、裏面に故人を含めて56人の名を刻む	
昭和63年(1988)3月27日建立	117
昭和42年(1967)建立	117
岩戸山古墳の前方部南側、旧石人石馬収蔵庫の東にある。日清・日露・日独の戦役従軍者名を刻した記念碑。周辺より一段高くした基壇上を六角形に区画し、その中央に方形切石を角錐状に6段に積み上げ、その上に方形扁平切石、扁平自然石、方柱状切石、扁平自然石の順番に乗せ、最上部が「戦捷記念碑」と刻んだ縦長の自然石碑石となる。全体としてはかなり高い碑となる。最下部の六角形区画外縁に碑を囲むように設置されていた8個の砲弾形コンクリート模造物のうち数個が残る。建立年は不詳	
飛形山にあり。昭和50年(1975)4月建立(文献616のp252写真)	117・616
本分天満宮にあり。日露戦争の際のもの(文献579のp421写真)	579
大正3年(1914)3月10日建立	117
昭和29年(1954)4月建立	117
八龍神社にあり。明治39年(1906)建立	117
八龍神社にあり。大正8年(1919)2月建立	117
昭和36年(1961)3月建設。明治10年の西南戦争から大東亜戦争までの黒木町出身の戦没英霊901柱を祀る。平成元年(1989)に改修工事がなされる	117・589
護国神社にあり。昭和47年(1972)に現在地に移設	117
虎尾山山上に木下学而が明治40年(1907)に建立した。昭和61年(1986)11月3日に招魂社が改築竣工した	601
北川内東公園にあり。昭和61年(1986)7月建立	117
北川内東公園にあり。北川内地区遺族会が昭和43年(1968)3月建立(文献601のp360)	117・601
昭和36年(1961)6月建立	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1733	平和の塔(火)、福岡県原爆死没者慰霊の碑	八女市	星野村	公有地	8その他	旧役場敷地内にて現存
1734	星野村忠霊塔	八女市	星野村麻生	私有地	8その他	現存
1735	旧仁田原小学校奉安殿	八女市	星野村浦	公有地	8その他	現存
1736	小野神社の砲弾	八女市	星野村内宮		8その他	
1737	矢部村戦没者慰霊碑	八女市	矢部村北矢部	私有地	8その他	現存
1738	矢部村護国神社	八女市	矢部村北矢部	私有地	8その他	現存
1739	高田村忠霊塔	みやま市	高田町岩津	不明	8その他	
1740	九糸神社の砲弾(碑)	みやま市	高田町岩津(九糸神社)		8その他	
1741	瀬高町忠霊塔	みやま市	瀬高町下庄	不明	8その他	
1742	宝満神社の機雷(碑)	みやま市	瀬高町小田(宝満神社)	不明	8その他	
1743	日独戦役之碑	みやま市	瀬高町河内(天満神社)		8その他	
1744	山川町忠霊塔	みやま市	山川町尾野	公有地	8その他	
1745	大川公園平和の塔	大川市	酒見(大川公園)	私有地	8その他	現存
1746	大川公園(風浪宮)忠魂碑	大川市	酒見(大川公園)	私有地	8その他	現存
1747	中古賀忠霊塔	大川市	中古賀	私有地	8その他	現存
1748	大野島村忠魂碑	大川市	大野島	公有地	8その他	
1749	田口小学校慰霊碑	大川市	三丸(田口小学校)	公有地	8その他	現存
1750	中古賀忠魂碑	大川市	中古賀	私有地	8その他	現存
1751	木室小学校忠魂碑	大川市	中木室(木室小学校)	公有地	8その他	現存
1752	則善寺忠魂碑	大川市	九綱(則善寺)	私有地	8その他	現存
1753	忠魂碑	柳川市	鷹ノ尾	私有地	8その他	現存
1754	旧垂見尋常小学校奉安殿	柳川市	白鳥・八幡宮境内社屋須多神社	私有地	8その他	現存
1755	伝習館の学徒動員殉難之碑	柳川市	本町(伝習館高等学校)	公有地	8その他	現存
1756	柳河小学校忠魂碑	柳川市	恵美須町	公有地?	8その他	現存
1757	村矢ヶ部忠魂碑	柳川市	矢加部字南屋敷	私有地	8その他	現存
1758	蒲池小学校忠霊塔	柳川市	金納字北光禪寺	私有地	8その他	現存
1759	野田忠霊塔	柳川市	西蒲池字野田	私有地	8その他	現存
1760	南浜武忠霊塔	柳川市	南浜武字内藤開	私有地	8その他	現存
1761	古賀忠霊塔	柳川市	古賀(共同墓地)	私有地	8その他	現存
1762	七ツ家忠霊塔 1	柳川市	七ツ家字鎧田	私有地	8その他	現存
1763	七ツ家忠霊塔 2	柳川市	七ツ家字東矢嶋	私有地	8その他	現存
1764	田脇忠霊塔 1	柳川市	田脇字村中西	私有地	8その他	現存
1765	田脇忠霊塔 2	柳川市	田脇字長久	私有地	8その他	現存
1766	間忠霊塔	柳川市	間字野村	私有地	8その他	現存
1767	久々原忠魂碑	柳川市	久々原字東八ツ家	私有地	8その他	現存
1768	久々原忠霊塔	柳川市	久々原字西一ノ口	私有地	8その他	現存
1769	久々原個人記念碑	柳川市	久々原字堀越	私有地	8その他	現存
1770	久々原出征記念碑	柳川市	久々原字長久	私有地	8その他	現存
1771	弥四郎町忠魂碑	柳川市	弥四郎町字萬全ノ一	私有地	8その他	現存
1772	弥四郎町忠霊塔	柳川市	弥四郎町字三籠一	私有地	8その他	現存
1773	有明町忠魂碑	柳川市	有明町字中間	私有地	8その他	現存
1774	下田町忠霊塔	柳川市	蒲生字下田町	私有地	8その他	現存
1775	中村忠霊塔	柳川市	東蒲池字中村[根葉]	私有地	8その他	現存
1776	本村靖国塔	柳川市	西蒲池字本村	私有地	8その他	現存
1777	西浜武忠魂碑	柳川市	西浜武字魚取園	私有地	8その他	現存
1778	西浜武殉国之碑	柳川市	西浜武字井戸口	私有地	8その他	現存
1779	西浜武忠霊塔	柳川市	西浜武字大坪	私有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和20年9月に広島原爆で焼かれた火を山本達雄が星野へ持ち帰り、その後昭和43年(1968)8月6日からは星野村役場の平和の塔で灯されてきた。そして平成7年(1995)の被爆50周年で整備された平和の広場において、福岡県原爆死没者慰霊の碑とともに新たに建立された平和の塔に灯され、合併と伴に八女市が引継ぎ、燃やし続けている(文献695のp254写真)。そして毎年、原子爆弾が投下された8月6日に平和記念式典が開催されている	694・695
昭和30年(1955)3月建立	117
奉安殿はもと正門前に建てられていたが、戦後講堂側に移築された。屋根部分に欠損が見られるがほぼ完全形で残っている。本来建っていた場所には、建設年月日、寄贈者等が記された記念碑が建っている	
境内にあり。由来等は不明	E
宮ノ尾の老松天満宮境内にある。275柱の戦没者名を刻む	641
老松天満神社境内にあり。昭和44年(1969)10月1日建立	117
高田中学校北側広場に昭和28年(1953)5月に竣工、文字は靖国神社宮司の筑波藤磨による(文献609のp460に記述あり)[文献117に大字岩津325に昭和27年[1952]5月建立の忠霊塔があるとされるが、年号は昭和28年が正しい]	117・609
境内の碑の上部に砲弾あり。日露戦争時のものらしいが、高い位置にあつて実測不可。もう1個は径15.5cm、高さ41cmで、満州事変に従軍した人が奉納したものらしい。ほかに、「明治三十七八年戦役記念」碑と大正3年日独戦役記念の手水鉢あり	E
昭和34年(1959)建立。文字は筑波藤磨によるもの	117
宝満神社境内にあり。径約70cm。日露戦争に従軍した人が戦勝記念に奉納したものらしい。隣接して忠魂碑と慈光廟という建物がある	E
天満神社境内にあり。大正8年(1919)建立。同じ境内に日露戦争に出征した兵士の名を記した灯籠もある	
昭和33年(1958)10月1日建立	117
昭和62年(1987)8月15日建立。大川公園内の昭和26年(1951)10月再建の忠魂碑の西側に建つ。碑文「祖国の繁栄と、世界の恒久平和は、人類の悲願である。今日の平和と繁栄の道をたどるまでに、わが国は、太平洋戦争をはじめ幾多の犠牲を払ってきた。戦後新しい日本の建設に廃虚の中から立ちあがったわれわれは、次の世代の人々に戦争の悲しみと、平和の尊さを伝えるべくこの塔を建立し、その悲願をここにする。」	
昭和2年(1927)[12年?]11月建立。昭和26年(1951)10月再建。忠魂碑の欄の外側正面左手に「殉国戦没者芳名塔」があり、びっしりと戦没者の氏名が刻まれている。その中には伝習館中学校生徒で勤労動員中に大牟田空襲により被爆死した3人の名もある。大川公園内北側に建つ。碑の傍に「殉国戦没者芳名塔」がある	32・117
昭和34年(1969)8月建立。中古賀の納骨堂前に建つ。下部に明治13年(1880)から昭和27年(1952)までの戦没者氏名が刻まれている	
昭和4年(1929)に大野島小学校校庭に建立したが、終戦後に撤去された。講和会議後に校区公民館正面に再建した(文献117では昭和3年[1928]5月建立、同39年[1964]4月再建とするが、同一かどうか不明)[昭和3年5月建設、昭和39年4月再建]の忠魂碑は大野島水防倉庫前に建つ。下部に「大野島戦没者芳名」が書かれている。(昭和4年に大野島小学校校庭に建立されたものと同一のものかは不明)	92・117
昭和50年(1975)[51年?]1月建立。田口小学校校庭の東側に建つ	117
昭和46年(1971)9月吉日建立。中古賀の納骨堂敷地内西側に建つ。傍に「殉国戦没者御芳名」の石があり、戦没者の名前が刻まれている	117
明治38年(1905)建立、昭和38年(1963)3月再建。木室小学校校庭の東側に建つ。「明治〇年5月吉日建立、昭和38年3月10日再建」の文字が刻まれている。建立の年は磨耗して確認できない。傍に「殉国戦没者芳名塔」がある	117
昭和29年(1954)3月建立。下部に戦没者氏名が刻まれている	117
市営鷹園団地北側にあり。昭和32年(1957)4月建立	
昭和13年(1938)建設。昭和22年に垂見小学校から現在地に移設。石造一部木造、一間柱入母屋造、銅版葺[文献691のp.73]	655-p251、691-p73
昭和20年(1945)8月7日の米軍の大牟田空襲の際に学徒勤労動員で染料・三池製作所・東庄で就労中に被爆死した17人及び同18年(1943)6月11日に大和町で勤労奉仕中に飛行機事故で死亡した1人の計18人の名を刻む。校舎改築のため現在は南門北西近くの広場に移設	32、657-p50-52
明治42年(1909)建立。柳河小学校校庭南端に所在。周囲をフェンスで囲まれ施錠されている	117
昭和37年(1962)6月建立。矢加部の旧久留米柳川往還(県道)付近の在町を町矢ヶ部と称し、農村部を村矢ヶ部と称する。本碑は村矢ヶ部共同墓地内に所在する	117
昭和36年(1961)2月2日建立。蒲池小学校の校庭南西隅にある「忠誠勇武」銘の碑で、周囲をフェンスで囲まれ施錠されている	117
昭和38年(1963)建立	117
共同墓地にあり。昭和40年(1965)建立	117
昭和37年(1962)7月建立	117
昭和33年(1958)5月建立	117
昭和34年(1959)3月建立。柳川農協昭代支所カントリー南側に隣接し所在	117
昭和29年(1954)4月建立。田脇地区の共同墓地。行満寺山門南向かいの田脇共同墓地に所在	117
昭和31年(1956)4月建立。地番は田脇であるが久々原住民が管理する共同墓地である。福法寺北東隅の共同墓地に所在	117
昭和37年(1962)10月建立。野村納骨堂(竜神社東隣接)に所在	117
昭和32年(1957)5.15建立。南福寺境内納骨堂正面に所在	117
共同墓地内にあり。昭和41年(1966)1月建立	117
「軍属井口直吉碑」。八ツ家新納骨堂の北に隣接し所在。記念碑、納骨堂、建立者銘碑	
天満神社にあり。「奉納 / 大正三年 / 日独乃役 / 出征記念 / 古賀安太郎」石製の模造砲弾は戦時供出後の措置か	
弥四郎町吉富町公民館東にあり。明治44年(1911)3.10建立	117
共同墓地内にあり。昭和34年(1959)7月建立	117
共同墓地内にあり。昭和10年(1935)10月吉日建立	117
共同墓地内にあり。昭和38年(1963)建立	117
共同墓地内にあり。昭和36年(1961)建立	117
共同墓地内にあり。昭和35年(1960)建立	117
浜武公民館・日吉神社南東近辺の共同墓地に所在	117
諸藤共同墓地内にあり(旧名称;西浜武忠霊塔1)。昭和37年(1962)6月建立(建立年は要再確認)	117
長藤共同墓地内にあり(旧名称;西浜武忠霊塔2)。昭和32年(1957)10月建立(建立年は要再確認)	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1780	吉原忠霊塔	柳川市	吉原字烏ノ内	私有地	8その他	現存
1781	間北忠魂碑	柳川市	間北字新坪	私有地	8その他	現存
1782	間殉国碑	柳川市	間字村内(金仙寺)	私有地	8その他	現存
1783	下宮永忠霊塔	柳川市	下宮永字野口分	私有地	8その他	現存
1784	佃町忠霊塔	柳川市	佃町字内田	私有地	8その他	
1785	佃町殉国忠霊塔	柳川市	佃町字三休	私有地	8その他	
1786	矢留本町忠魂碑	柳川市	矢留本町字宮筥	私有地	8その他	現存
1787	大和町忠霊塔	柳川市	栄	私有地	8その他	現存
1788	柳川護国神社	柳川市	高畑字宮の内	私有地	8その他	現存
1789	三橋町忠霊塔	柳川市	高畑字宮の内	私有地	8その他	現存
1790	磯島忠霊塔	柳川市	三橋町磯島	私有地	8その他	現存
1791	中棚町忠霊塔	柳川市	三橋町中棚町	私有地	8その他	現存
1792	稲荷町記念碑	柳川市	稲荷町	私有地	8その他	現存
1793	西浜武出征記念碑	柳川市	西浜武字大坪	私有地	8その他	現存
1794	隅町鎮魂碑	柳川市	隅町	私有地	8その他	現存
1795	中六十丁殉国之碑	柳川市	大浜町字中六拾町	私有地	8その他	現存
1796	西六十丁忠霊塔	柳川市	大浜町字中六拾町	私有地	8その他	現存
1797	西六十丁個人慰霊碑	柳川市	大浜町字中六拾町	私有地	8その他	現存
1798	田脇沖田靖国塔	柳川市	田脇沖田	私有地	8その他	現存
1799	柳河小学校国旗掲揚台	柳川市	恵美須町	私有地	8その他	現存
1800	柳河乃木大将詩碑	柳川市	中町 八剣神社	私有地	8その他	現存
1801	藤田町被爆戦没者之碑、芳名碑	大牟田市	藤田町743藤田天満宮内	私有地	8その他	現存
1802	延命公園慰霊塔	大牟田市	昭和町(延命公園)	公有地	8その他	現存
1803	四ヶ村忠霊塔	大牟田市	四ヶ字空の上	私有地	8その他	未確認
1804	東萩尾町忠霊塔	大牟田市	東萩尾町	私有地	8その他	未確認
1805	大牟田空襲碑	大牟田市	今山(普光寺公園)	私有地	8その他	現存
1806	笹林公園忠魂碑	大牟田市	笹林町(笹林公園)	公用地	8その他	現存
1807	笹林公園の機雷	大牟田市	笹林町(笹林公園)	公用地	8その他	
1808	明治三十七八年日露戦争記念碑	大牟田市	諏訪町2丁目(諏訪神社)	私有地	8その他	未確認
1809	諏訪神社の機雷	大牟田市	諏訪町 (諏訪神社)		8その他	
1810	旧三井化学工業(株)検査課殉職者之碑	大牟田市	一本町	私有地	8その他	現存
1811	甘木山徴用犠牲者慰霊碑	大牟田市	甘木山	公有地	8その他	現存
1812	大牟田北高等学校慰霊碑	大牟田市	吉野	公有地	8その他	未確認
1813	三池高等学校学徒勤労没学友碑	大牟田市	草木	公有地	8その他	未確認
1814	大牟田商業高等学校戦没学徒鎮魂之碑	大牟田市	吉野	公有地	8その他	未確認
1815	櫛野忠魂碑	大牟田市	櫛野	私有地	8その他	未確認
1816	櫛野日独戦役記念碑	大牟田市	櫛野(諏訪神社)	私有地	8その他	未確認
1817	明治三十七八年日露戦役従軍者	大牟田市	櫛野(諏訪神社)	私有地	8その他	未確認
1818	馬込町日露戦役記念碑	大牟田市	馬込町1丁目(路傍)	私有地	8その他	現存
1819	萩尾町第二次世界大戦戦没者慰霊碑	大牟田市	萩尾町 (萩ノ尾古墳西脇)	私有地	8その他	現存
1820	高泉慰霊塔	大牟田市	高泉(高泉天満宮)	私有地	8その他	未確認
1821	高泉日露戦役凱旋記念碑	大牟田市	高泉(高泉天満宮)	私有地	8その他	未確認
1822	明治三十七八年日露戦役記念碑	大牟田市	歴木(平野天満宮)	私有地	8その他	未確認
1823	普光寺日露戦役記念碑	大牟田市	今山(普光寺)	私有地	8その他	未確認
1824	三池公園日露戦役記念碑	大牟田市	三池(三池公園)	公有地	8その他	現存
1825	上白川町三大戦役記念の碑	大牟田市	上白川町(八幡神社)	私有地	8その他	未確認
1826	下白川町日露・日独戦役記念碑	大牟田市	下白川町(八幡神社)	私有地	8その他	未確認
1827	久福木日露戦役の碑	大牟田市	久福木(諏訪宮)	私有地	8その他	現存
1828	宮部日清・日露・日独戦役記念碑	大牟田市	宮部(早馬宮)	私有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
吉原共同墓地内にあり	117
間納骨堂にあり。昭和36年(1961)4月建立。手掘神社(宮下)西近接の共同墓地に所在	117
金仙寺山門東側の境内に所在にあり。昭和31年(1956)5月建立	117
東宮永小学校にあり。昭和29年(1954)10.23建立。プール改築のため校庭南東隅の現在地に移設	117
共同墓地内にあり。昭和38年(1963)2.20建立	117
共同墓地内にあり。昭和32年(1957)9.23建立	117
宮籠大神宮境内北西隅に所在。大正13年(1924)9月建立、昭和43年(1968)11.3移転建立	117
昭和14年(1939)建立。柳川市役所大和庁舎用地内に他の記念碑と合わせて再整備	117
明治2年(1869)4月に三柱神社境内に押武祠を創建して、奥州で戦没した柳川藩士の霊を奉祀し、同8年(1875)現在地に奉遷して高畑招魂社と称する。その後、佐賀の乱、西南戦争、日清・日露戦争、大東亜戦争での戦没英霊を合祀する。昭和14年(1939)4月に柳川護国神社と改称	117・589
三柱神社境内にあり。昭和30年(1955)1月1日建立	117
共同墓地内にあり	117
共同墓地内にあり。昭和36年(1961)6月建立	117
二宮神社にあり。明治40年(1907)11月建立。石造彫刻。軍人二人の人物像	117
天満神社にあり。明治39年(1906)12月建立。日露役出征記念碑	117
宮地獄神社社務所正面に所在。平成13年(2001)9月建立	117
中六十丁共同墓地内にあり	117
中六十丁共同墓地北に西六十丁共同墓地が隣接する	117
西六十丁共同墓地北隣にあり。「陸軍歩兵伍長 古賀有海」	117
共同墓地内にあり。昭和32年(1957)10月建立	117
柳河小学校校庭東端にあり。「市制二十周年 / 沖繩復帰」	117
昭和46年(1971)2月建立。明治9年に柳河に宿泊した乃木希典が祇園祭の献灯に描かれた絵を見て詠じた詩「題日本武尊図」を記念し建立された石碑。希典の詩には歴史に題するものは少ないという	
平成7年(1995)8月建立。昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田市への4回目空襲の際に、高射砲で撃墜された米軍爆撃機の1機が藤田町に墜落し、搭載していた爆弾が藤田町一円に落下して爆発し多数の住民が亡くなった。その米軍機に搭乗していた飛行兵数名とともに同年6月18日の空襲で亡くなった人を合わせて祀られている。芳名碑は平成9年(1997)8月建立	32
昭和50年(1975)4月8日建立	117
昭和27年(1952)建立	117
昭和26年(1951)建立	117
大牟田の空襲を記録する会が中心となって平成6年(1994)7月27日(大牟田大空襲の記念日)に建立された	32
建立年月日なし。海軍大将東郷平八郎書	32
台座の上に径約110cmの機雷が乗る。下付を申請していた帝国在郷軍人会三池分会海軍班へ機雷2個を下付するよう、昭和3年(1928)12.28付で佐世保鎮守府司令長官に訓令が出されている	E
諏訪神社境内にあり。4人の名が刻まれる	32
台座の上に径約100cmの機雷が乗る。台座には「御大典記念」の文字がある。昭和3年(1928)12.28付で佐世保鎮守府司令長官に、機雷2個を下付するよう訓令が出されたうちの1個であり、もう1個は笹林公園にある	E
昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲で、三井化学工業検査課(通称山の分析)の29人が亡くなった。その殉職者の碑が現在の三井東圧化学山の公会館のテニスコート近くにある	32
甘木山山頂の仏舎利塔の隣に平成7年(1995)3月に建立された。「第二次世界大戦下、この地に徴用され、労苦の果てに亡くなられた方々の御霊に対し、深甚なる哀悼の意を表すると共に、かかる不幸な出来事が二度と起らぬことを祈願し、戦後50年の節目の年に記念碑として、ここに慰霊碑を建立する」と建立碑文に記される	32
昭和51年(1976)4月25日、同窓会の藤蔭会による建立。昭和20年(1945)7月27日の米軍による大牟田空襲の際に、学校防衛の任務中に被爆死した1人及び同8月7日の三井化学工業検査課で勤労働員中に被爆死した3人の計4人が祀られる	32
昭和52年(1977)11月27日、三池中学昭和18年入学同期会による建立。昭和20年(1945)8月7日の米軍による大牟田空襲の際に、工場で勤労働員中に被爆死した7人が祀られている	32
平成5年(1993)8月9日、大牟田商業高等学校同窓会と各回の有志により50年忌の節目に建立された。12回生の4人及び13回生の1人の学徒出陣戦死者、16回生の学徒勤員中に被爆死した2人の計7人が祀られている	32
玉川小学校東側墓地にあり。昭和9年(1934)5月6日建立。満州事変・上海事変記念	32
大正5年(1916)7月建立。大正3～4年の従軍者11人	32
明治39年(1906)旧9月1日建立。狛犬の台座に24人の名が刻まれる	32
明治40年(1907)6月建立。19人の名が刻まれる	32
昭和45年(1970)4月1日建立。碑名は福岡県知事亀井光書。戦死者34人の名を記す	32
昭和57年(1982)5月建立。太平洋戦争の戦没者39人を慰霊する	32
明治42年(1909)10月建立。従軍者16人の名が刻まれる。陸軍中將木村有恒の書	32
昭和37年(1962)10月改築。8人の名が刻まれる	32
明治30年(1897)建立。昭和62年(1987)移転	32
記述はあるが、建立年月日、書人等判読不可	32
大正10年(1921)9月建立。81人と26人の名を刻む	32
大正年間の建立(文字欠)。出征軍人15人の名を刻む	32
明治43年(1910)5月建立。明治37・38年(1904・1905)の出征者16人の名を刻む。題字は陸軍大将大久保春野書	32
大正10(1921)12月建立。戦役参加者22人の名を刻む	32

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1829	橘日露戦役記念碑	大牟田市	橘(六社宮)	私有地	8その他	現存
1830	宮崎戦役記念碑	大牟田市	宮崎	私有地	8その他	現存
1831	上内日清・日露・日独戦役記念碑	大牟田市	上内字宮ノ後	私有地	8その他	現存
1832	手鎌日独戦役記念碑	大牟田市	手鎌字南友(綿積神社)	私有地	8その他	未確認
1833	甘木日清・日露・日独戦役記念碑	大牟田市	甘木東(路傍)	私有地	8その他	未確認
1834	唐船日露戦役記念碑	大牟田市	唐船(深倉天満宮)	私有地	8その他	未確認
1835	岬忠魂碑	大牟田市	岬(納骨堂)	私有地	8その他	未確認
1836	征清記念碑	飯塚市	(勝盛公園)	公有地	8その他	
1837	従軍記念碑	飯塚市	(勝盛公園)	公有地	8その他	
1838	国威碑	飯塚市	川津(水祖神社)	私有地	8その他	
1839	忠隈宝満宮忠魂碑	飯塚市	忠隈	私有地	8その他	
1840	津原公民館忠魂碑	飯塚市	津原	公有地	8その他	
1841	津原老松神社平和の塔	飯塚市	津原	私有地	8その他	
1842	安恒公民館忠魂碑	飯塚市	安恒	公有地	8その他	
1843	綱分八幡宮忠魂碑	飯塚市	綱分(綱分八幡宮)	私有地	8その他	
1844	忠魂塔	飯塚市	(秋松墓地)	私有地	8その他	
1845	忠魂義烈殉職碑	飯塚市	遠賀川中ノ鳥入口	公有地	8その他	
1846	鯨田畝割高台慰霊碑	飯塚市	鯨田	確認中	8その他	
1847	忠霊塔	飯塚市	鯨田		8その他	
1848	鯨田旌忠公園戦没者慰霊碑	飯塚市	鯨田字市の間	公有地	8その他	
1849	建花寺柱郷神社慰霊碑	飯塚市	建花寺	私有地	8その他	
1850	秋松龍應神社慰霊碑	飯塚市	秋松	私有地	8その他	
1851	天道大将陣慰霊碑	飯塚市	楽市	公有地	8その他	
1852	高田高祖神社慰霊碑	飯塚市	高田	私有地	8その他	
1853	舍利蔵本谷慰霊碑	飯塚市	舍利蔵	私有地	8その他	
1854	幸袋町慰霊塔	飯塚市	笠置ダム公園	公有地	8その他	
1855	西川津阿弥陀寺裏山慰霊塔	飯塚市	西川津	公有地	8その他	
1856	堀池貴船宮慰霊塔	飯塚市	堀池	私有地	8その他	
1857	忠霊塔	飯塚市	川津		8その他	
1858	忠霊塔	飯塚市	庄司		8その他	
1859	長尾慰霊塔	飯塚市	長尾	公有地	8その他	
1860	筑穂町合同慰霊塔	飯塚市	長尾	公有地	8その他	
1861	南横田公民館忠霊塔	飯塚市	南横田(公民館)	私有地	8その他	
1862	潤野下区戦没者慰霊碑	飯塚市	潤野字笠掛	確認中	8その他	
1863	大分鶯塚高台戦没者慰霊碑	飯塚市	大分	公有地	8その他	
1864	大分八幡宮境内記念碑	飯塚市	大分(大分八幡宮)	私有地	8その他	
1865	額田町慰霊碑	飯塚市	上勢田	公有地	8その他	
1866	柏の森平和の塔	飯塚市	柏の森(負立八幡宮)	私有地	8その他	
1867	糞祖八幡宮傷痍軍人碑	飯塚市	糞祖	私有地	8その他	
1868	鹿毛馬日露戦争従軍記念碑	飯塚市	鹿毛馬	私有地	8その他	
1869	西比利亜(シベリア)戦役記念碑	飯塚市		公有地	8その他	
1870	老松神社境内記念碑	飯塚市	長尾(老松神社)	私有地	8その他	
1871	老松神社境内記念碑	飯塚市	内野(老松神社)	私有地	8その他	
1872	山出入口記念碑	飯塚市	山口	確認中	8その他	
1873	大山祇神社境内記念碑	飯塚市	内住(大山祇神社)	私有地	8その他	
1874	老松神社境内記念碑	飯塚市	阿恵(老松神社)	私有地	8その他	
1875	西光寺横記念碑	飯塚市	馬敷	私有地	8その他	
1876	四郎丸記念碑	飯塚市	四郎丸	公有地	8その他	
1877	大隈町忠魂碑	嘉麻市	大字大隈町	公有地(市)	8その他	現存
1878	小野谷忠霊塔	嘉麻市	大字小野谷	公有地(市)	8その他	現存
1879	大力英霊之碑	嘉麻市	大力(天満宮)	私有地	8その他	現存
1880	稲築公園忠魂碑	嘉麻市	岩崎・稲築公園	公有地(市)	8その他	現存
1881	上山田慰霊塔	嘉麻市	上山田字西川	公有地(国)	8その他	現存
1882	上臼井忠魂碑	嘉麻市	上臼井門前(永泉寺)	私有地	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
明治39年(1906)3月建立。出征軍人11人(海軍1・陸軍10)の名を刻む	32
大正11年(1922)12月建立。県道93号脇にあり。日露戦役従軍者6人、日独戦役従軍者6人、題字は陸軍中將金谷範三書	32
上内八幡宮・宗祭神社境内にあり。大正年間(判読できず)4月建立。陸軍大将高山公通書	32
綿積神社境内にあり。建立年月日なし。台座に大正3・4年(1914・1915)戦役・日独戦役従軍者として31人の名を刻む	32
建立年月日なし。台座に明治27・28年(1894・1895)日清戦役、明治37・38年(1904・1905)日露戦役、大正3・4年(1914・1915)日独戦役の従軍者として31人の名を刻む	32
明治41年(1908)10月18日建立。明治37・38年(1904・1905)戦役に従軍した28人の名を刻む	32
昭和13年(1928)5月建立。碑名荒木満寿夫書。35人の名を刻む	32
	507・508
飯塚市・嘉穂郡内から日清戦争に84人が従軍した旨が記される(文献508のp446写真)	508
日清・日露の刻がある(文献507のp454写真)	507
「飯塚市史下巻」(文献509)第7編民俗の第7章石塔・石碑 第2節供養・慰霊・記念などの塔碑 3慰霊塔・碑(p243~244)(2)戦争・軍人慰霊碑に記載あり。昭和7年(1932)。師団長杉山元	509
9人の名あり。その中に昭和20年(1945)9月死去の人あり	509
終戦50周年記念。平成7年(1995)建立、戦没者13人	509
昭和40年(1965)建立。12人の名あり	509
昭和11年(1936)3月10日建立。日清・日露戦争以降の英霊が弔われている(文献600のp283写真)	117・509・600
	509
遠賀川の中ノ島入口にある。昭和6年(1931)6月1日に大刀洗飛行場を出発して、嘉麻川河畔で飛行演習中に殉職した2人の慰霊碑	509
13人の碑、2人の単独塔あり	509
昭和15年(1940)5月	
昭和15年(1940)建立。(文献117に昭和15年5月建立の忠霊塔があるが同一か?)	117・509
23人の名あり	509
戦没者氏名、戦死場所・年月日等の銘あり	509
中腹にある。昭和38年(1963)11月建立。穂波遺族会・市管理	117・509
穂波町長、18人の名あり	509
昭和59年(1984)建立。2人の名あり	509
昭和53年(1978)3月建立。幸袋遺族会・市の管理(文献584のp218写真)。幸袋中学校校庭横から平成27年11月25日に笠置ダム公園に移設	117・584
二瀬支所の裏山にある。昭和38年(1963)建立。二瀬遺族会・市管理	117・509
昭和45年(1970)建立。14人の銘あり	509
昭和35年(1960)11月	
昭和32年(1957)9月	
筑穂中学校近くにある。昭和57年(1982)建立。筑穂遺族会・市管理	509
昭和32年(1957)4月に「慰霊塔」が建立され、同年5月5日に合同慰霊祭が行われた(文献628のp475写真)	117・628
昭和12~20年(1937~1945)の13人の銘あり	509
昭和53年(1978)8月建立。裏に14柱の銘あり	99・509
昭和53年(1978)建立。27人の銘あり	509
「日清・日露・日独戦争記念碑」が大正13年(1924)10月に建立された(文献628のp475写真)	628
上勢田公民館前にある。昭和42年(1967)5月建立。額田遺族会・市管理(文献545のp598写真)	99・509・545
平成7年(1995)建立	509
八幡宮の石段踊り場。昭和61年(1986)建立。飯塚市傷痍軍人会・妻の会	509
旧額田町鹿毛馬の巖島神社境内にある日露戦争の「戦利兵器奉納ノ記」とした碑で、頂部に乗っていた砲弾は太平洋戦争の金属回収で供出した。明治38年(1905)の建立と思われる(文献545のp187写真)	545
大正7~11年(1918~1922)のシベリア出兵を記念した碑(文献545のp213写真)	545
「戦役記念碑」が大正9年(1920)6月に建立された(文献628のp475写真)	628
「日清・日露戦役記念碑」が大正4年(1915)11月に建立された(文献628のp476写真)	628
「明治二十七八年戦役記念碑」が山口の入り口の所に大正2年(1913)10月に建立された(文献628のp476写真)	628
「日露戦役記念碑」が明治42年(1909)12月に建立された(文献628のp476写真)	628
「奉納明治二十七八年戦役従事者」の碑が建立された(文献628のp476写真)	628
「日清・日露戦役記念碑」が西光寺横に大正6年(1917)10月に建立された(文献628のp477写真)	628
「凱旋記念碑」が明治31年(1898)に建立された(文献628のp477写真)	628
清正公園にあり。昭和23年(1948)3月23日建立。揮毫者は陸軍大臣荒木貞夫	117
高木神社にあり。昭和19年(1944 皇紀2603)建立。揮毫者は元帥陸軍大将杉山元	117
天満宮にあり。昭和54年(1979)7月建立。建立者：松岡喜太郎。同境内に、英霊之碑に平行して戦役記念碑がある	117
日清戦争から太平洋戦争以前までに戦病死した556柱の姓名を刻み、昭和15年(1940)11月に建立された〔文献117では昭和15年12.22の建立とする〕。揮毫者は陸軍大将杉山元	117・511
昭和32年(1957)12月1日建立。揮毫者は参議院員野田俊作	117
永泉寺にあり。昭和11年(1936)3月建立。8.15の終戦の日に確井町遺族会が慰霊祭を行っている(文献515のp405写真)揮毫者は陸軍大将鈴木大莊六	515

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1883	桂川町忠魂碑	嘉徳郡桂川町	土師	私有地	8その他	現存
1884	砲弾碑	嘉徳郡桂川町	内山田(天神社)	私有地	8その他	現存
1885	田川護国神社	田川市	大字伊田1545-1	私有地	8その他	現存
1886	春日神社忠魂碑	田川市	宮尾町(春日神社)	私有地	8その他	春日神社敷地内で移転建替
1887	川端町忠魂碑	田川市	川端町	私有地	8その他	
1888	猪位金戦没者慰霊塔	田川市	猪国	公有地	8その他	旧猪位金小学校裏山に残存
1889	凱旋記念碑	田川郡大任町	大行事安永(安永神社)	私有地	8その他	神社石段下の参道両側に一対で現存
1890	大任町征清記念碑	田川郡大任町	大行事字成光	公有地	8その他	長年風雨にさらされ、碑文が風化している
1891	大任町戦没者慰霊塔	田川郡大任町	大行事	公有地	8その他	
1892	方城町伊方慰霊塔	田川郡福智町	伊方	公有地	8その他	一部磨耗又は変色のため全文の確認ができていない
1893	日露戦争記念碑	田川郡福智町	伊方(赤坂八幡社)	私有地	8その他	一部磨耗・変色
1894	方城町伊方戦没者慰霊碑	田川郡福智町	伊方(赤坂八幡社)	私有地	8その他	現存
1895	方城町伊方古門慰霊碑	田川郡福智町	伊方(白髪神社)	公有地	8その他	現存
1896	方城町弁城戦没者慰霊碑	田川郡福智町	弁城	私有地	8その他	現存
1897	弁城区戦没者慰霊碑	田川郡福智町	弁城(上弁城集会所)	公有地	8その他	現存
1898	方城町弁城迫慰霊碑	田川郡福智町	弁城(定禅寺)	私有地	8その他	現存
1899	金田区戦没者慰霊碑	田川郡福智町	神崎	公有地	8その他	現存
1900	三役出征軍人記念橋碑	田川郡福智町	上野	私有地	8その他	現存
1901	赤池町忠魂碑	田川郡福智町	赤池	公有地	8その他	移建
1902	金田町忠魂碑	田川郡福智町	金田(稲荷神社)	私有地	8その他	一部磨耗又は変色のため全文の確認ができていない
1903	日露戦役記念碑	田川郡福智町	弁城(旧須佐神社)	私有地	8その他	現存
1904	香春町戦没者慰霊塔	田川郡香春町	山下町(旧光願寺)	私有地	8その他	現存
1905	香春町採銅所忠霊塔	田川郡香春町	採銅所(古宮八幡神社)	私有地	8その他	復元
1906	記念碑	田川郡香春町	高野(鶴ヶ岡八幡宮)	私有地	8その他	現存
1907	糸田町忠魂碑	田川郡糸田町	糸田(糸田小学校)	公有地	8その他	現在は宮床児童遊園地に移設
1908	大東亜戦争戦没者氏名碑	田川郡糸田町	(伯林寺)	公有地	8その他	現在は宮床児童遊園地に移設
1909	戸山原明治三十七八年戦役記念碑	田川郡川崎町	戸山原	公有地(町)	8その他	現存
1910	川崎町慰霊塔	田川郡川崎町	田原(川崎小学校)	公有地(町)	8その他	現存
1911	西田原平和の礎	田川郡川崎町	西田原	私有地	8その他	現存
1912	安真木殉国之碑	田川郡川崎町	大字安真木(納骨堂)	私有地	8その他	現存
1913	安真木平和の礎	田川郡川崎町	大字安真木	私有地	8その他	現存
1914	安真木?会一処碑	田川郡川崎町	大字安真木	私有地	8その他	現存
1915	下真崎太平洋戦争終戦記念碑	田川郡川崎町	大字安真木	私有地	8その他	現存
1916	安宅平和の礎	田川郡川崎町	大字安真木	私有地	8その他	現存
1917	上真崎戦没者慰霊碑	田川郡川崎町	大字安真木	公有地(町)	8その他	現存
1918	東川崎平和の塔	田川郡川崎町	大字川崎	私有地	8その他	現存
1919	米田戦没者慰霊碑	田川郡川崎町	大字川崎	私有地	8その他	現存
1920	添田町慰霊塔	田川郡添田町	添田(添田公園)	公有地(町)	8その他	現存
1921	二又トンネル爆発被害者慰霊塔	田川郡添田町	落合(昭光寺)	私有地	8その他	現存
1922	招魂社	田川郡添田町	英彦山神宮参道沿い	私有地	8その他	現存
1923	岩本常平君之碑	田川郡添田町	庄(岩瀬地区)	私有地	8その他	現存
1924	大内田慰霊碑	田川郡赤村	大字内田	公有地(区)	8その他	現存
1925	小内田慰霊碑	田川郡赤村	大字内田	公有地(村)	8その他	現存
1926	上赤忠魂碑	田川郡赤村	大字赤	公有地(村)	8その他	現存

内容(年代・由来等)	文献
昭和8年(1933)に桂川小学校プール横に建立、同18年(1943)に桂川中学校第1号舎横に移転した。戦後GHQから取り壊しを命ぜられてのち放置されていたが、昭和31年(1956)に現在地の小高い丘に再建された(文献580のp220写真) [文献117は昭和10年[1935]3.10の建立とする]	117・580
碑の銘文より当砲弾は、昭和7年(1932)の1月28日から3月3日にかけて中華民国の上海共同租界周辺で起きた日中両軍の衝突である上海事変で使用された砲弾である	
明治2年(1869)1月に明治維新の大業に参画して殉難した11人の義士を英彦山奉幣殿直下の招魂場に祀ったのを始まりとする。その後、日清・日露戦争、大東亜戦争の戦没英霊を合祀して現在に至る。同8年(1875)1月に招魂社と称する。昭和14年(1939)3月に田川護国神社と改称する。隣接する鎮西公園内に、「忠霊塔(大正9年[1920]5月・[上部]昭和24年[1949]10月2日建之)」、「八紘一宇(昭和17年[1942]8月建之)」「霊窓殉國之碑(明治29年[1896]4月25日)」「陸軍歩兵上等兵山本繁君碑(昭和4年[1929]10月)」がある	117・589
(文献611のp529写真)建立年は不明。昭和33年(1958)同場所で復旧。建立時は、霊壘を納め慰霊祭を行っていた(移転建替の際、別に移したが、移し先は不明)。平成14年(2002)に移転建替。元帥東郷平八郎書、現在の忠魂碑に再利用している。忠魂碑頭部のみは、現在の忠魂碑横に移転。霊壘を保管していないことから、モニュメントとしての役割が強い	117・611
昭和6年(1931)の満州事変以降太平洋戦争の戦没者の慰霊のため、昭和10年(1935)11月建立。昭和60年(1985)8月に破壊撤去されたため、市民有志が忠霊塔を守る会(後に忠魂碑建設委員会と改称)を組織し、昭和63年(1988)2月11日に再建した	117
昭和30年(1955)3月建立。「猪位金村公民館建之」「大東亜戦」の文字あり(旧猪位金小学校は廃校のち宿泊可能な複合施設「いいかね Palette」となり、平成29年(2017)から民間が運営)	117
日露戦争に従軍した村人が、無事凱旋を記念して建立。高さ約30cm。明治40年(1907)建立。地元産の安永石(砂岩)製。表面が風化し、文字が判読しにくい部分あり	広報おおとうH29年7月号に紹介。
日清戦争に従軍した村の25人を顕彰する記念碑。大行事の坂の北旧道の傍に明治32年(1899)建立。総高8尺8寸(文献520のp245写真・文献521のp630写真)	520・521
太平洋戦争にかかる大任村戦没者遺族会が役場の前庭に慰霊塔を建立し、昭和43年(1968)7月1日に除幕式と慰霊祭が行われた。碑の題字は鵜木享弘の揮毫で、日露戦争から太平洋戦争に至る232柱の芳名を刻している(文献520のp255写真)	117・520
福智町役場方城支所内にあり。忠魂碑：昭和11年(1936)5月建立。慰霊塔：昭和23年(1948)8月建立。平成12年12月三菱炭坑鉱害に依り移転復旧。側に「皇紀二千六百年記念 征郷軍人方城村々会」の石碑あり	117
明治40年(1907)建立。赤坂八幡社境内にある。道を挟んで反対側に慰霊碑の「方城町伊方戦没者慰霊碑」がある。一部磨耗又は変色のため全文の確認ができていない	117
昭和54年(1979)8月15日建立。赤坂八幡社境内にある。参道を挟んで反対側に石塔「日露戦争記念碑」がある。鷹洲謹書	117
昭和53年(1978)8月建立。「大東亜戦争終戦33年を迎えるにあたり、生還者一同発起人となり神社氏子の総意を得て建立」とある。福岡県知事 亀井光謹書	117
平成元年(1989)4月建立。第一保育所に隣接する広場にある。明治38年の日露戦争以降、太平洋戦争までの遺霊を合祀。安部晋太郎書	117
上弁城集会所にあり。昭和46年(1971)夏建立。支那事変、大東亜戦争戦没者の慰霊碑。慰霊碑のほかに「平和記念碑」あり。公民館敷地入り口は通常は車が入れないように施錠している	117
昭和52年(1977)11月建立。定禅寺境内にある。大東亜戦争戦没者の慰霊碑。傍に建立に至る解説牌がある。山本空外書	117
昭和62年(1987)8月建立。下神埼集会所敷地内にあり。第二次大戦戦没者慰霊碑	
熊野神社へ行くための橋付近に設置されている。大正6・7年(1917・1918)の戦没出征軍人功労の記念に橋が架設された記念碑で、橋の架設は大正13年(1924)。石碑には発起人、建立経緯、軍人名が彫られている	
大正15年(1926)12月に発電所北方台地麓に建立されたが、のちに猿田台地に移転した(文献501のp518写真)平成16年(2004)3月に赤池中央公民館の傍に移建した。日清戦争、日露戦争、各事変、大東亜戦争戦没者の慰霊碑。年に一度慰霊祭が行われている	117・501
稲荷神社にあり。大正3年(1914)9月建立(文献552のp155写真)ほかに大東亜戦争、支那事変戦没者一覧(いろは順)、寄付者一覧、平和記念(大正8年[1919]1月)の石碑あり。元帥陸軍大将伯爵奥保葦(おくやすかた)書	117・552
旧須佐神社の鳥居左手に残されている。裏面に大正元年中秋建立とある。台座裏面には建立者の氏名が彫られている。須佐神社は現在は鳥居と参道しか残っていないが、碑は移設されずに残されている	
旧光願寺の境内に昭和35年(1960)に建立(文献117は同一のもの(写真が同じ)を昭和30年(1955)5月建立とする)(文献554のp1192写真)	117・554
大正13年(1924)3月10日建立、昭和42年(1967)2月11日復元	117
大正2年(1913)11月建立	
昭和3年(1928)10月8日に糸田小学校校庭に建てられ、終戦後に伯林寺に移された。西南の役・日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦に従軍した人たちが建立したもの(文献510のp983写真)	117・510
昭和27年(1952)10.11に銅板製で伯林寺境内に建てられた。372人の戦死者名が刻まれる(文献510のp984写真)	510
明治39年(1906)建立(文献553のp544写真5-9)。日露戦争従軍記念碑を兼ねる。日清戦争を取り上げる住民もいるが、関連は不明	553
川崎小学校校庭に昭和37年(1962)8月1日に建立(文献553のp549写真5-11)大東亜戦争犠牲者慰霊碑。改修の際、現在の場所に移設	117・553
昭和25年(1950)4月5日建立。大東亜戦争までの合同慰霊碑。公民館改修時に現在の場所に移設	117
昭和58年(1983)5月建立。黒木地区の納骨堂敷地内に建立	117
昭和45年(1970)4月建立	117
平成3年(1991)12月建立	117
昭和31(1956)年建立。下真崎地区の須佐神社内に存在	
平成16年(2004)建立。安宅地区の戸山神社入口に存在	
平成17年(2005)8月15日建立。上真崎公民館敷地内に存在	
1995年8月建立。東川崎地区の須佐神社参道横に存在。終戦50周年を記念し建立されたもの	
昭和55年(1980)8月建立。米田地区の公民館敷地内に存在	
昭和33年(1958)6月建立	117
昭和23年(1948)建立。昭和20年11月12日に発生したトンネル爆発事故を悼む石碑。二又トンネルは大戦末期に軍の火薬庫として利用していた	607
明治2年(1869)建立。禁門の変等で処刑された義僧を祀る社(文献82)	82,566-p148~149
明治29年(1896)建立。日清戦争による戦没者記念碑	607
大内田研修センターにあり。昭和51年(1976)12月建立	117
小内田多目的集会所にあり。昭和59年(1984)8月建立	117
上赤集会所にあり。昭和35年(1960)3月建立	117

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1927	今川公園慰霊碑	田川郡赤村	(今川公園)	私有地	8その他	現存
1928	崎岡慰霊碑	田川郡赤村	崎岡	確認中	8その他	現存
1929	殉国勇士之碑	京都郡苅田町	小波瀬2丁目1番地	公有地	8その他	現存
1930	宇原神社の忠魂の碑	京都郡苅田町	大字馬場(宇原神社)	私有地	8その他	現存
1931	國光顕彰の碑・機雷	京都郡苅田町	大字馬場(宇原神社)	私有地	8その他	現存
1932	戦死の墓合同墓	京都郡みやこ町	犀川上高屋760念信寺	未確認	6埋葬	未確認
1933	戦没者之墓	京都郡みやこ町	勝山大久保小古野		6埋葬	
1934	大原八幡神社戦利品記念石台	京都郡みやこ町	勝山大久保	私有地	8その他	現存
1935	八景山護国神社	京都郡みやこ町	国作	私有地	8その他	八景山山頂に社殿があり周辺も整備されている
1936	有久忠霊廟	京都郡みやこ町	有久	私有地	8その他	現存
1937	徳永戦没者碑	京都郡みやこ町	徳永	未確認	8その他	未確認
1938	節丸忠魂碑	京都郡みやこ町	節丸	私有地	8その他	現存
1939	豊津校区忠魂碑	京都郡みやこ町	豊津(豊津小学校)	私有地	8その他	現存
1940	犀川校区忠魂碑	京都郡みやこ町	木山(生立八幡宮御旅所地内)	私有地	8その他	現存
1941	城井校区忠魂碑	京都郡みやこ町	犀川木井馬場	私有地	8その他	現存
1942	伊良原校区忠魂碑	京都郡みやこ町	犀川上伊良原(伊良原小学校)	私有地	8その他	現存
1943	犀川喜多良忠魂碑	京都郡みやこ町	犀川喜多良	未確認	8その他	未確認
1944	犀川久富戦没者勇士碑	京都郡みやこ町	犀川久富	未確認	8その他	未確認
1945	犀川柳瀬忠烈烈従軍之碑	京都郡みやこ町	犀川柳瀬	未確認	8その他	未確認
1946	勝山黒田鎮魂碑	京都郡みやこ町	勝山黒田	未確認	8その他	未確認
1947	勝山黒田忠魂碑	京都郡みやこ町	勝山黒田	未確認	8その他	未確認
1948	日清日露戦役従軍記念碑	行橋市	大字稲童	私有地	8その他	現存。平成12年現存確認
1949	旧仲津小学校奉安殿	行橋市	大字稲童727-10 稲童1号掩体号史跡広場	私有地	8その他	現存
1950	行橋市忠霊塔	行橋市	大橋1丁目	私有地	8その他	現存
1951	明治三十七八年戦役記念之碑	行橋市	大字糞島	私有地	8その他	平成12年現存確認
1952	殉國之英霊	行橋市	大字糞島(法泉寺)	私有地	8その他	平成20年現存確認
1953	護國之英霊	行橋市	大字沓尾(香円寺)	私有地	8その他	平成13年現存確認
1954	霊塔 南無阿弥陀仏(殉国戦歿英霊塔)	行橋市	大字今井(西福寺)	私有地	8その他	平成13年現存確認
1955	明治二十七八年戦捷記念之碑	行橋市	大字元永	私有地	8その他	平成13年現存確認
1956	手水鉢	行橋市	大字元永	私有地	8その他	現存
1957	今元小学校奉安殿台座	行橋市	大字元永		8その他	現存(台座のみ)
1958	日露戦役記念 戦利兵器奉納ノ記	行橋市	大字道場寺	私有地	8その他	平成12年現存確認
1959	兵農維一(第一次陸軍大演習記念碑)	行橋市	大字道場寺	私有地	8その他	平成13年現存確認
1960	忠魂碑	行橋市	大字道場寺	私有地	8その他	平成13年現存確認
1961	忠魂碑	行橋市	大字福富	私有地	8その他	平成12年現存確認
1962	日露戦役記念碑	行橋市	大字天生田	私有地	8その他	平成13年現存確認
1963	忠魂碑	行橋市	大字宝山	公有地(市)	8その他	平成12年現存確認
1964	平和塔	行橋市	大字宝山	公有地(市)	8その他	平成12年現存確認
1965	戦利兵器奉納ノ記	行橋市	大字大野井	私有地	8その他	平成13年現存確認
1966	日露戦利品記念	行橋市	大字津積	私有地	8その他	平成13年現存確認
1967	忠魂碑	行橋市	大字津積(御所ヶ谷)	私有地	8その他	現存
1968	日清・日露から大東亜戦病没者之碑	行橋市	大字津積	私有地	8その他	現存
1969	征露戦捷之記念	行橋市	大字下稗田	私有地	8その他	平成13年現存確認
1970	戦利兵器奉納ノ記	行橋市	大字下稗田	私有地	8その他	平成13年現存確認
1971	大東亜戦争戦没者慰霊碑	行橋市	大字下椋地	私有地	8その他	平成13年現存確認
1972	平和の礎	行橋市	大字吉国	私有地	8その他	平成13年現存確認
1973	軍人記念碑	行橋市	大字延永	私有地	8その他	平成12年現存確認
1974	ノモンハン□□品	行橋市	大字延永	私有地	8その他	平成21年現存確認
1975	嗚呼戦歿勇士	行橋市	大字下崎(善照寺)	私有地	8その他	平成13年現存確認
1976	明治三十七八年戦役記念碑	行橋市	大字椿市	私有地	8その他	平成12年現存確認
1977	奉納戦利兵器	行橋市	大字真菰	私有地	8その他	平成12年現存確認
1978	明治三十七八年役戦利品	行橋市	東泉	私有地	8その他	平成12年現存確認
1979	旧京都高等女学校奉安殿	行橋市	神田町	私有地	8その他	現存(恵美寿社として活用)

内容(年代・由来等)	文献
昭和55年(1980)9月建立	117
昭和57年(1982)3月建立	117
昭和36年(1961)大原八幡神社地(荻田町大字新津字恩塚)に建立。平成30年3月現在地(大熊公園)に移設	
昭和29年(1954)12月建立(昭和3年11月建立の再建か)	117
コンクリート製の台座の上に機雷が置かれている。機雷は径約110cm。昭和8年2.8に佐世保鎮守府司令長官に対して下付の訓令が出されている	E
昭和33年(1958)5月建立	117
昭和24年(1949)10月吉日	
大原八幡神社境内にあり。花崗岩製の石台の上に、戦利品と思われる各種の砲弾(炸裂弾も含む)が置かれている	
慶応2年(1866)の長州戦争以降、奥羽出兵、佐賀の乱、西南戦争、日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争までの京都郡と行橋市の戦没者3,590柱の霊を祀る。現在も遺族会による祭祀が行われる	632-699
昭和23年(1948)8月建立。元来は隣接する祇郷小学校内に設けられた御真影奉安殿であったものが、戦後校舎地内を離れて隣地へ移転し、地域で管理する霊廟とした模様	117
昭和25年(1950)8月15日建立	117
節丸児童公園にあり。昭和9年(1934)12月吉日建立	117
昭和18年(1943)建立	117
生立八幡神社前広場の横にある。昭和9年(1934)建立で、林銑十郎の揮毫である(文献591のp970写真)〔文献117は同一の碑を昭和6年[1931]4月建立とする〕	117・591
城井小学校内、ふるさと公園横にある。大正12年(1923)3月末日建立で、田中義一の揮毫である(文献591のp971写真)	117・591
伊良原小学校運動場の上段にある。昭和11年(1936)建立〔文献117は昭和12年[1937]建立とする〕。廣田弘毅の揮毫(文献591のp971写真)。終戦後、戦時遺物であることや広田の揮毫等を強く懸念した関係者により碑石が引き倒されて断裂したが、昭和30年代に復旧し現在に至る	117・591
四宮八幡宮にある。昭和3年(1928)11月10日建立	117
久富区八幡宮にある。昭和29年(1954)2月11日建立	117
柳瀬区八幡宮にある。昭和12年(1937)建立	117
勝山町大字黒田にあり。昭和51年(1976)3月建立	551
黒田小学校にあり。昭和11年(1936)2月11日建立	117
安浦神社の境内にある。明治43年(1910)10月建立。奥保葦書	699
もと仲津小学校にあった奉安殿を、戦後になって旧仲津村が観山中腹に移設し英霊廟として活用してきた。旧奉安殿として保存するため、平成30年(2018)に稲童1号掩体壕史跡広場に移設した	699
明治10年(1877)の西南戦争以降、日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争までの戦没者1,350柱の霊を祀る。昭和32年(1957)10月に、行橋校区の郷友会・婦人会・区長会・消防団により建立された	117・699
養島神社にあり。明治末期建立か。奥保葦書。昭和60年(1985)9月補修	市史資料編 近・現代
昭和28年(1953)5月建立	行橋市内石碑調査カード
昭和27年(1952)8月建立	市史資料編 近・現代
昭和52年(1977)正月建立	市史資料編 近・現代
須佐神社前にあり。山県有朋書	市史資料編 近・現代
須佐神社前にあり。正面に「国難克服」、側面に「大詔奉戴記念 / 対米英宣戦 / 昭和十六年十二月八日」と刻字。揮毫は杉山元	
今元小学校にあり。昭和8年(1933)建立の奉安殿を昭和21年(1946)に撤去した際、台座のみ残った。昭和43年(1968)に「平和塔」を建立	697-p204
北山神社にあり。明治40年(1907)3月建立	市史資料編 近・現代
大山山頂にあり。明治18年(1885)の陸軍特別大演習を記念し、大正13年(1924)に建立	市史資料編 近・現代
観山山麓にあり。奥保葦書	市史資料編 近・現代
福富バス停そばにあり。昭和28年(1953)5月建立	市史資料編 近・現代
清地神社にあり。明治41年(1908)7月建立	市史資料編 近・現代
今川小学校にあり。昭和3年(1928)11月建立	市史資料編 近・現代
今川公民館にあり。平成6年(1994)12月建立。終戦50周年記念	市史資料編 近・現代
王埜八幡神社にあり。明治40年(1907)3月建立。日露戦争戦勝記念	市史資料編 近・現代
大島神社にあり。大正13年(1924)5月建立	市史資料編 近・現代
昭和28年(1953)3月建立	市史資料編 近・現代
御所ヶ谷神籠石中門後方にあり。平成9年(1997)5月建立	市史資料編 近・現代
大分八幡神社にあり。明治40年(1907)3月建立	市史資料編 近・現代
大分八幡神社にあり。明治40年(1907)1月建立	市史資料編 近・現代
下検地共同墓地にあり。平成6年(1994)4月建立	市史資料編 近・現代
吉国公民館前にあり。平成9年(1997)3月建立	市史資料編 近・現代
延永公民館前にあり。明治32年(1899)3月建立	市史資料編 近・現代
春日神社にあり。昭和14年(1939)7月建立。碑の上部に砲弾が立っていたと推定されるが、太平洋戦争中に供出されたものと思われる	行橋市内石碑調査カード
昭和27年(1952)8月建立	市史資料編 近・現代
椿市小学校横にあり。明治44年(1911)建立	市史資料編 近・現代
菅原神社にあり。明治44年(1911)3月建立	行橋市内石碑調査カード
豊日別神社にあり	行橋市内石碑調査カード
正八幡神社にあり。京都高等女学校から移設(宮司より聞き取り)	

番号	名称	所在地(市町村)	所在地(詳細)	所有者	種別	現状
1980	椎田町越路の戦死者之墓	築上郡築上町	越路共同墓地内	私有地	6埋葬	現存
1981	椎田町坂本の戦死者之墓	築上郡築上町	坂本共同墓地内	私有地	6埋葬	現存
1982	戦没者墓地	築上郡築上町	湊上人堂墓地		6埋葬	
1983	奉安殿	築上郡築上町	本庄(大楠神社)	私有地	8その他	現存
1984	奉安殿	築上郡築上町	安武184番地(字善人)	私有地	8その他	現存
1985	慰霊塔	築上郡築上町	安武片山医院横		8その他	
1986	奉安殿	築上郡築上町	西八田	私有地	8その他	現存
1987	西八田聖殿	築上郡築上町	西八田	私有地	8その他	現存
1988	忠魂碑	築上郡築上町	本庄(大楠神社)	私有地	8その他	現存
1989	平和塔	築上郡築上町	寒田	私有地	8その他	現存
1990	山霊神社日露戦没記念碑	築上郡築上町	寒田	私有地	8その他	現存
1991	忠魂碑	築上郡築上町	(築城小学校)	公有地	8その他	現存
1992	太平洋戦争戦死者慰霊碑	築上郡築上町	(上城井小学校)	公有地	8その他	現存
1993	殉国勇士之碑	築上郡築上町	西八田(築城基地正面ゲート前)	私有地	8その他	現存
1994	神風特別攻撃隊之碑(神風特別攻撃隊 菊水部隊銀河隊出撃之地碑)	築上郡築上町	西八田(築城基地内)	公有地(防 衛省)	8その他	現存。築城基地内滑走路脇に移設
1995	築城海軍航空隊無名勇士之墓碑	築上郡築上町	高塚(共同墓地)	私有地	8その他	現存
1996	宇留津明治三七・八年戦没記念碑	築上郡築上町	宇留津(須佐神社)	私有地	8その他	現存
1997	水原慰霊塔	築上郡築上町	水原(公民館前)	公有地	8その他	現存
1998	上日奈古忠魂碑	築上郡築上町	上日奈古(公民館前)	公有地	8その他	現存
1999	下日奈古散華塔	築上郡築上町	下日奈古(共同墓地)	私有地	8その他	現存
2000	忠魂碑	築上郡築上町	上り松(上り松公園)		8その他	
2001	戦役記念碑	築上郡築上町	上り松(上り松公園)		8その他	
2002	八紘一字の碑	築上郡築上町	(赤幡八幡神社)	私有地	8その他	現存
2003	岩屋忠魂碑	豊前市	岸井	公有地	8その他	現存
2004	黒土忠魂碑	豊前市	岸井		8その他	現存
2005	合河忠魂碑	豊前市	下川底	公有地	8その他	現存
2006	角田忠魂碑	豊前市	松江(向陽荘)		8その他	現存
2007	山田忠魂碑	豊前市	四郎丸(大富神社)	私有地	8その他	
2008	八屋忠魂碑	豊前市	八屋(八屋小学校)	公有地	8その他	現存
2009	三毛門忠魂の碑	豊前市	三毛門	公有地	8その他	現存
2010	中川底大稗碑	豊前市	中川底		8その他	路傍に現存
2011	中川底大稗碑	豊前市	中川底		8その他	路傍に現存
2012	殉国尾家大佐碑	豊前市	三毛門		8その他	
2013	若桜鎮魂碑	豊前市	吉木	公有地	8その他	路傍に現存
2014	小松宮殿下台臨記念碑	豊前市	宇島	私有地	8その他	民家の庭に現存
2015	摂政宮御通過記念碑	豊前市	三毛門(折戸池畔)	公有地	8その他	池畔に現存
2016	摂政の宮御通過記念碑	豊前市	高田(千駄池畔)	公有地	8その他	池畔に現存
2017	小犬丸忠魂碑	築上郡吉富町	小犬丸 (古表神社)	私有地	8その他	現存
2018	広津慰霊塔	築上郡吉富町	広津(臥牛山上)	私有地	8その他	現存
2019	戦捷記念	築上郡吉富町	土屋(壺神社)	私有地	8その他	現存
2020	鶴駕登臨地碑	築上郡上毛町	大字八並字山の越	私有地	8その他	現存
2021	行啓記念碑	築上郡上毛町	大字八並	私有地(神 社地)	8その他	現存しているが、上部の記念碑は転倒した 状態である
2022	安雲忠魂義泊魄碑	築上郡上毛町	安雲	公有地(町)	8その他	現存
2023	垂水忠魂碑	築上郡上毛町	垂水	公有地(町)	8その他	現存
2024	大平村慰霊碑	築上郡上毛町	東下	公有地(町)	8その他	現存
2025	土佐井貴船神社の魚雷	築上郡上毛町	土佐井		8その他	

内容(年代・由来等)	文献
昭和24年(1949)3月建立	117
昭和31年(1956)4月建立	117
不明	
上城井国民学校(現上城井小学校)校庭にあったものを戦後移設。その際の石積みの高台が残存。現在「太平洋戦争戦死者慰霊碑」が建つ	94-p47-74, 629
下城井国民学校にあったものが戦後移設。石積基壇を除去後、奉安殿部分のみ敷地内の南側に移設(平成30年)	94-p47-74, 629
不明	
正八幡神社にあり。八津田国民学校にあったものが戦後移設	
正八幡神社にあり。昭和28年(1953)5月建立	117
	94-p46
公民館前にあり。大東亜戦争(太平洋戦争)復員者が建立。平成元年(1989)2月1日建立	94-p52
寒田の山霊神社にあり。(文献629上巻の p534写真)	629
昭和11年(1936)2月建立。明治時代以降、国の戦争で戦死した人を祀る。題字は荒木貞夫陸軍大将の筆	94-p94
昭和20年(1945)8月7日午前11時30分の米軍による空襲により犠牲となった教師及び児童の慰霊碑。平成22年(2010)に有志により建立	23
終戦後に何度か追悼の木碑が建てられたが、昭和53年(1978)に石碑が建立された(文献592の p276第1図写真)	117-592
昭和20年(1945)3月18日の海軍攻撃隊第262飛行隊の銀河11型5機が九州南方海上で体当たり攻撃を敢行し15人が殉職した(文献592の p289第3図)。昭和54年(1979)3月17日に建立。 ※航空自衛隊築城基地敷地内のため、立入許可を得る必要がある	592
昭和20年(1945)8月7日の米軍による築城基地への空襲で亡くなった兵士37人を弔う墓。8月9日に城井川の寺渡橋下流の河原で茶毘に付された	699
明治40年(1907)1月建立	117
昭和42年(1967)2月建立	117
昭和37年(1962)11月建立	117
昭和28年(1953)5月建立	117
昭和29年(1954)夏	
明治38年(1905)	
皇紀2600年(昭和15年/1940)社務所建築記念に建立。揮毫は陸軍中将「島 永太郎」	
釘丸池北側の神社跡、公民館にあり。昭和3年(1928)11月建立	117
釘丸池北側の神社跡、公園にあり。昭和8年(1933)4月建立	117
合河公民館にあり。昭和2年(1927)建立	117
昭和29年(1954)12月建立	117
昭和10年(1935)10月建立	117
昭和3年(1928)11月建立	117
三毛門小学校にあり。昭和2年(1927)建立	117
「特攻魚雷艇を偲ぶ」	668
「吾々特攻戦友は行く」	668
	668
昭和17年(1942)10月建立 「玉と砕け 華と散らばや 日の本の 大空護る若人 我ら」 築中甲飛会一同	
明治18年(1885)4月に宇島～行橋間で行われた日本陸軍初の大演習「明治拾八年四月 広島熊本両鎮台諸兵大演習」に明治天皇名代の小松宮彰仁親王が台覧した記念碑。かつては絵葉書にもなる名所だった	43
大正9年(1920)11月の陸軍特別大演習に大正天皇名代の皇太子(昭和天皇)が行啓した際の記念碑	667
大正9年11月の陸軍特別大演習に大正天皇名代の皇太子(昭和天皇)が行啓した記念碑。昭和35年(1960)4月29日建立。「為萬世開天下」	667
昭和4年(1929)建立	117
昭和45年(1970)5月建立	117
明治40年(1907)3月建立。「明治四十年三月寺内陸軍大臣ヨリ献納セラレタル明治三十七八年役戦利品」の銘	
大正9年(1920)11月に行われた陸軍特別大演習に際して摂政宮の皇太子裕仁親王(昭和天皇)が登攀したことを記念して、旧西吉富村が大正14年(1925)12月に建立した。昭和58年(1983)2月までは雄熊山南部高地にあったが、同年3月に現在地に移転した。大字八並所有地	603
大正9年(1920)11月に行われた陸軍特別大演習に際して摂政宮の皇太子裕仁親王(昭和天皇)が行啓したことの記念碑で、旧南吉富村有志が施主賛同者となり大正11年(1922)11月に建立した。貴船神社所有地	603
西吉富コミュニティセンターにあり。昭和3年(1928)11月建立	117
南吉富小学校にあり。昭和7年(1932)1.4建立	117
昭和34年(1959)1月建立	117
境内に置かれている。直径約45cm。昭和2年6.2に海軍省から佐世保鎮守府長官に「45種魚形水雷(頭部共)1個/浮標水雷缶(内機を除く)1個/鉄鏈20m 以内/ヒ式200馬力発動機用索進器2個」を築上郡友枝村小学校及び村社境内備付用として同村長に下付する旨の訓令が出されている。魚雷は当初は小学校に備え付けられたが、のちに神社に移動した	E

第2表 福岡県戦争遺跡等一覧表関係文献

番号	書名
1	浅川利一 1987.6 「第二次世界大戦中の遺跡を発掘する」 考古学ジャーナル 278 [特集・現代史と考古学]
2	朝日新聞テーマ談話室・編 1987.7 『戦争(上巻) -血と涙で綴った証言-』 朝日ソノラマ
3	朝日新聞テーマ談話室・編 1987.10 『戦争(下巻) -血と涙で綴った証言-』 朝日ソノラマ
4	味坂小学校記念誌事業実行委員会 1978.3 『あじさか 味坂小学校創立100周年記念誌』
5	案浦照彦(北部九州郷土部隊史料保存会編) 1976.8 『兵旅の賦 北部九州郷土部隊70年の足跡 第1巻 明治大正編』 西日本新聞社
6	案浦照彦(北部九州郷土部隊史料保存会編) 1978.7 『兵旅の賦 北部九州郷土部隊70年の足跡 第2巻 昭和編』 北部九州郷土部隊史料保存会
7	家京博・池田一郎・金井安子・菊池実 1999.9 『【展望】黒龍江省辺境要塞遺跡の踏査』 考古学研究 46-2 (182)
8	五十嵐彰・阪本宏児 1996.9 「近現代考古学の現状と課題 -新しい時代の考古学をめぐる-」 考古学研究 43-2 (170)
9	池田一郎 1994.12 『【展望】戦争遺跡・遺物、戦跡考古学について』 考古学研究 41-3 (163)
10	池田 拓 2016. 『第57師団の本土決戦準備』 [平成28年度福岡大学大学院修士論文]
11	池田 拓 2019.3 「垂見時の平射臨時砲台 -大島砲台の要塞砲を転用した本土決戦用砲台(1)-」 宗像市史研究 第2号
12	池田栄史 2019.8 「沖繩戦の発掘 -沖繩陸軍病院南風原壕群-」 シリーズ「遺跡を学ぶ」137 新泉社
13	石瀧豊美 2004.7.25 「福岡連隊の福岡城」 福岡地方史研究42
14	石瀧豊美 「まちの史跡めぐり」 [広報すえ] 連載
15	市原猛志 2019.3 「平和祈念像か、平和記念像か -小伊藤山・復興平和記念像の設置経緯について-」 特定非営利活動法人 北九州市の文化財を守る会会報153
16	伊藤厚史 1996.3 『【展望】戦争遺跡調査の実践記』 考古学研究 42-4 (168)
17	伊藤厚史 2016.10 「総論 要塞、沖繩戦、本土決戦陣地の考古学」 考古学ジャーナル 689 [特集・戦跡考古学 -沖繩・本土の防衛-]
18	伊藤玄三 1987.6 「現代史を掘る」 考古学ジャーナル 278 [特集・現代史と考古学]
19	伊藤慎二 2016.2 「福岡市中央区薬院の戦争遺跡：陸軍振武寮とその周辺」 西南学院大学国際文化論集 30-2
20	伊藤慎二 2018.2 「西南学院大学構内の戦争遺跡 -戦時下の松脂採取痕跡を中心に-」 西南学院大学国際文化論集 32-2
21	糸島魅力みつけ隊ネットワーク協議会歴史・文化グループ 2009 「H21年度 糸島魅力みつけ隊・歴史文化グループ活動成果報告書」
22	今津小学校創立百周年記念会 1975.12 『今津 今津小学校創立百周年記念誌』
23	今村和夫 1998. 「昭和20年8月7日上城井国民学校の被爆記」 [合本郷土誌つきき]
24	うきは郷土会編、今村武志著 2009.5 「うきは市郷土会報 第四号 歴史へのいざない(吉井町編) 特集吉井町金石文探訪」
25	牛島英俊 2011.8 「墜落B29と捕虜搭乗員」 西日本文化 2011年8月号
26	牛嶋英俊 2017 「村に戦軍隊が来た話 -戦手郡若宮町に駐屯した戦車部隊-」 地方史ふくおか 163
27	宇美八幡宮 1979.4 『宇美八幡宮誌』
28	梅原末治 1930.6 「筑後国一條石神山古墳の調査報告」 史学 第9巻第2号
29	浦辺 登 2009. 『太宰府天満宮の定遠館』 弦書房
30	江浜明徳 2012.8 「九州の戦争遺跡」 [2018.8.23に改裝新訂版]
31	大牟田市役所主査・主任会 2004.11 (第2刷) 『大牟田の宝もの100選』 海鳥社 (2002.2第1刷)
32	大牟田の空襲を記録する会 2000.6 『大牟田・荒尾の戦争遺跡ガイド』 (戦争遺跡ガイド編集委員会)
33	岡 崇 2016.3 「沖ノ島の戦時遺構」 沖ノ島研究 第2号
34	小郡市郷土史研究会 2008.3 「故郷の花」 31号
35	小郡市郷土史研究会 2010.3 「故郷の花」 33号
36	小郡三井医師会史編集委員会 2010. 『小郡三井医師会史』
37	小俣 啓 1913. 『三井郡人名辞書』
38	鶴陽会史編集委員会(代表:藤島正之) 1993.6 『鶴陽会史』
39	春日市郷土史研究会 1992.3 「春日の石の文化」 -福岡県春日市石造物調査報告書-
40	片山花御史 1983.2 『遠賀野散歩』 p92-94
41	株式会社NHKグローバルメディアサービス 2013.11 『平成25年度 全国の戦災の追悼施設・追悼式』
42	鐘崎漁業誌編集委員会 1992.3 『筑前鐘崎漁業誌』
43	平島並明 1936.11 『明治拾八年四月 廣島熊本兩鎮台諸兵大演習 一名「両屯対抗運動」雑記』
44	川口勝彦・首藤卓茂 2010.8 「福岡の戦争遺跡を歩く」 海鳥社
45	北九州地域史研究会[編] 2006.11 『北九州の近代化遺産』 弦書房
46	北九州平和資料館をつくる会(代表・古賀猛)編 2006.4 「戦争の語り部 北九州の戦争遺跡」 山福印刷(裏山書房)
47	菊池実 2008.6 「戦争遺跡の発掘 -陸軍前橋飛行場-」 シリーズ「遺跡を学ぶ」047 新泉社
48	菊池実 2015.2 「近代日本の戦争遺跡研究 -地域史研究の新視点-」 雄山閣
49	菊池実・池田一郎・金井安子・菊池誠一・伊藤厚史・大見元子 1997.12 『【展望】戦争遺跡調査の現状と課題 -第2回回頭要塞遺跡の調査-』 考古学研究 44-3 (175)
50	岸本圭 2003.3 「内ヶ磯空襲跡採集の要塞地区域について」 [内ヶ磯空襲跡3] 福岡県文化財調査報告書第181集
51	九州産業考古学会 2018.1 「福岡の近代化遺産」 弦書房
52	九州大学考古学研究室 1990.11 「山隈空襲跡の調査 -福岡県朝倉郡三輪町所在の初期須恵窯跡群-」 九州考古学65
53	空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会実行委員会 2018.11.17 「現地見学会資料」
54	久保静夫 2000.3 「旧海軍の防空壕(弾薬庫)とその周辺について」 郷土誌つきき35号
55	久留米碑誌刊行会 1973.3 『久留米碑誌』
56	桑原達三郎 1981. 『大刀洗飛行場物語』 華書房
57	古賀市史跡案内ボランティア 2011.3 『顕彰碑・記念碑探訪 路傍の石碑から古賀の近現代史が見えてくる』
58	古賀東小学校創立100周年記念事業実行委員会 1989.11 『幾千代かけて 古賀東小学校創立100周年記念誌』
59	古賀市立小野小学校創立130周年記念事業実行委員会 2003.10 『野幸山幸 古賀市立小野小学校創立130周年記念誌』
60	鹿野公民館 1984.2 『黎明の山河 『鹿野の戦記』』
61	坂井美彦・坂井ひろ子 2008.7 『筑紫れくいえむ 米機 西鐵電車銃撃を追う』 西日本新聞社
62	榊 正澄 2015.7 「戦時下の直方の記録 尺岳高射砲小隊などについて」 郷土直方直方郷土研究会会報40
63	坂詰秀一 1987.6 「現代史と考古学」 考古学ジャーナル 278 [特集・現代史と考古学]
64	佐々木俊輔 2019.9 「第十三照空隊元倉本部について」 北九州市の文化財を守る会 会報No.154
65	吉間信夫 1985.9 「直方 碑物語」 (続 直方のむかしばなし)
66	篠原義一 2009.2 「祖父チャンの防空壕とその後」 郷土直方直方郷土研究会会報34
67	下関重砲兵聯隊史刊行会(金富与志二代表) 1985.9 「下関重砲兵聯隊史」
68	社団法人日本郷友連盟遠賀中間地区郷友会 2011. 『軍神 古野繁實 海軍少佐 慰霊祭(仏式)七十周年記念』
69	社団法人日本郷友連盟遠賀中間地区郷友会 2016. 『軍神 古野繁實 海軍少佐 慰霊祭 七十五周年記念』
70	十斐駿武・菊池実編 2002.6 『しらべる戦争遺跡の事典』 柏書房
71	十斐駿武・菊池実編 2003.6 『続 しらべる戦争遺跡の事典』 柏書房
72	浄法寺朝美 1971.12 『日本築城史』 原書房
73	杉本 宏 1995.6 『【展望】戦争遺跡と埋蔵文化財』 考古学研究 42-1 (165)
74	杉本 宏 1997.9 『【展望】戦争遺跡と埋蔵文化財 -その2-』 考古学研究 44-2 (174)
75	鈴木裕和 1988.11 「福岡俘虜収容所第25分所について」 『大牟田の空襲』 第16集 大牟田の空襲を記録する会
76	『西部毎日新聞』 1933.10.28
77	瀬川貞太郎 1994. 7.22 「定点北九州の近過去民俗史序説」 小倉タイムス
78	瀬戸哲也 2016.10 「沖繩戦の砲台陣地」 考古学ジャーナル 689 [特集・戦跡考古学 -沖繩・本土の防衛-]
79	戦争遺跡保存全国ネットワーク 1999.8 「戦争遺跡は語る」 かもがわブックレット128 かもがわ出版
80	創立百周年記念実行委員会 1992.1 『三小小学校創立百周年記念誌』
81	太平洋戦争研究会 2006.4 「戦争遺跡が語る太平洋戦争 現在も残る太平洋戦争の痕跡を訪ねて」 日本芸文社パンドラ新書031
82	高千穂有英 1965. 『幕末秘史英彦山殉難録』
83	高槻市民センター郷土史委員会 2016.3 「国境のまち高槻」
84	高橋慎二 2004.10 「陸軍大刀洗飛行場跡 -サイパン島と福岡-」 福岡考古第21号 福岡考古懇話会
85	高橋信武 2017.1 「西南戦争の考古学的研究」 吉川弘文館
86	太宰府天満宮 1983. 『飛梅』 53号
87	田代政栄編 1951. 『秋月史考』
88	大刀洗空襲を語り継ぐ会 1991. 『大刀洗空襲を語る』 第1部
89	大刀洗空襲を語り継ぐ会 1999. 『大刀洗空襲を語る』 第3部

番号	書名
90	立石小学校記念誌事業実行委員会 2010. 『立石小学校創立百周年記念誌』
91	田中 琢 1995.12 『戦争と考古学』 考古学研究 42-3 (167)
92	武下一郎 1976. 3 『郷土 大野島村史-大川市大字大野島-』 村史出版大野島校区後援会
93	丹野 拓 2016.10 『本土決戦陣地の調査-和歌山・紀の川流域の防衛-』 考古学ジャーナル 689 [特集・戦跡考古学-沖縄・本土の防衛-]
94	築城ふるさと文化研究会 2008. 『築城の石造物』
95	出口 隆 2010. 5 『地図で見る近代の小倉室町と城内』
96	出原恵三 2016.10 『本土決戦陣地の調査-高知平野の防衛-』 考古学ジャーナル 689 [特集・戦跡考古学-沖縄・本土の防衛-]
97	寺西マリコ: 桑原達三郎註 1983. 4 『女子挺身隊甘木日記』 石風社
98	徳永博文 2012.6 『日本の石炭産業遺産』 葎書房
99	当真嗣一 1987. 6 『戦跡考古学と旧役場跡の調査』 考古学ジャーナル 278 [特集・現代史と考古学]
100	豊福ものがたり編集委員会 2018.12 『豊福ものがたり 村うちばさるく』
101	長藤太郎 1977. 4 『大川村郷土誌』
102	西川 宏 1995.12 『統一テーマ「戦争と考古学」をなぜかかげたか』 考古学研究 42-3 (167)
103	西川 宏 1996.12 『展望』 わが国の軍隊は空襲から市民を守ったか-いわゆる高射砲陣地の考古学的検討から- 考古学研究 43-3 (171)
104	? 西日本工業倶楽部 1983. 9 『重要文化財旧松本家住宅修理工事報告書』
105	西村延次郎 1932. 『筑後名鑑 三井郡の巻』
106	公財) 日本国防協会評議員 水崎勝彦 2017. 3 『日本の国防』 第76号 『古野繁實海軍少佐 七十五周年慰霊祭 追悼の辞』
107	野内秀明 2016.10 『史跡 東京湾要塞跡の調査-猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡-』 考古学ジャーナル 689 [特集・戦跡考古学-沖縄・本土の防衛-]
108	野間吉夫 1973. 9 『玄海の島々』 慶友社
109	花田勝広 2016. 8 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦-沖ノ島砲台と宗像-』 宗像考古刊行会
110	花立山調査実行委員会 1982. 6 『遺跡を民衆の手に 1982』
111	原 剛 2002. 『明治期国防衛生史』 錦正社
112	番場 征 1988. 9 『博多湾バリエード構築うらばな史』 丸 第41巻第9号 (506号)
113	日置英剛編 2005.10 『年表 太平洋戦争全史』 国書刊行会
114	深町純亮監修 1998. 『穂波町ものがたり 炭鉱編』
115	福岡大空襲体験を語る会 (代表者: 奥本千鶴子) 1985.12 『私の福岡大空襲体験 (戦争を知らない世代へ)』
116	福岡空襲を記録する会 (代表: 裏辻憲道) 1986. 6 『火の雨が降った 6.19福岡大空襲』
117	福岡県遺族連合会五十年誌編集委員会 1995.10 『英霊とともに-福岡県戦没者遺族の五十年-』
118	福林 徹 2003. 6 『第二次大戦時の国内の捕虜収容所』 『続しらべる戦争遺跡の事典』 柏書房
119	古川秀幸 2011.3.31 『第六三四海軍航空隊空襲基地の遺品』 糸島市立伊都国歴史博物館紀要 第6号
120	古牧昭三 2019. 7 『福岡第17分所と福岡第25分所』 『大牟田の空襲』 第30集 大牟田の空襲を記録する会
121	前南廣幸 2014. 3 『九州鉄道大蔵庫』 北九州産業技術保存継承センター
122	松尾禎作 1957 『北九州支石墓の研究』
123	松葉会 1988.3 『米多比の戦記』
124	宮武直人 2011. 3 『砲台要塞について-その戦略と兵備-』 長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第1号
125	村田秀石 1999. 6 『展望』 亀島山地下工場跡実測のとりくみ-高校生による戦争遺跡調査- 考古学研究 46-1 (181)
126	村田秀石 1999. 9 『展望』 戦争遺跡の保存・活用をめぐる現状と課題-99年夏、二つの集会に参加して- 考古学研究 46-2 (182)
127	師岡司加幸 2013. 9.10 『山家宿異聞-西部軍司令部壕 (筑紫野市宮地岳)』 福岡地方史研究51
128	安島太佳由 2010. 4 (第3刷) 『日本の戦跡を見る』 岩波ジュニア新書454 (2003.12第1刷)
129	八幡製鐵所OB会 1955. 3 『洞岡の五十年』
130	山口 浩 2009. 6 『ふるき三郎丸のすがた-福岡県宗像市三郎丸 (旧村・大字) -』
131	山辺昌彦 2003. 3 『調査研究活動報告』 全国陸海軍墓地一覽』 国立歴史民俗博物館研究報告 第102集
132	用松律夫 2003. 6 『全国戦争遺跡リスト-福岡県の戦争遺跡-』 『続しらべる戦争遺跡の事典』 柏書房
133	雷山空襲を記録する会 『村に火の雨が...-六月十九日雷山空襲の記録-』
134	雷山工区運営委員会 『雷山の歴史と文化』
135	歴史教育者協議会編 2007.12 『石碑と銅像で読む 近代日本の戦争』 高文研
136	『怡土・志摩の村を歩く』
137	『郷土史浮城の里』
138	『筑豊捕虜記』
139	『目で見る筑紫・大宰府の100年』
140	平山天満宮祭田記

【教育委員会等発行】

501	赤池町誌編集委員会 1977.11 『赤池町史』
502	朝倉町史刊行委員会 1986. 3 『朝倉町史』
503	芦屋町誌編集委員会 1991. 6 『新訂増補 芦屋町誌』
504	甘木市教育委員会 1998. 3 『屋永西原遺跡Ⅱ』 甘木市文化財調査報告書 第45集
505	甘木市教育委員会 2003. 3 『甘木市文化財年報 (平成13年度)』
506	甘木市史編さん委員会 1981.10 『甘木市史 下巻』
507	飯塚市誌編さん室 1975. 9 『飯塚市誌』
508	飯塚市史編さん委員会 2016. 3 『飯塚市史 中巻』
509	飯塚市史編さん委員会 2016. 3 『飯塚市史 下巻』
510	糸田町史編集委員会 1989. 1 『糸田町史』
511	稲築町 2004. 3 『稲築町史 上・下巻』
512	浮羽郡教育会史蹟調査部 1931.1 『浮羽郡金石文 (碑誌) 録資料 (乾巻)』 [孔版]
513	浮羽町史編集委員会 1988. 3 『浮羽町史 上巻』
514	浮羽町史編集委員会 1988. 3 『浮羽町史 下巻』
515	碓井町 (弥富義徳編集) 1982. 7 『碓井町誌』
516	宇美町誌編集委員会 1975.10 『宇美町誌』
517	大川市誌編集委員会 1977.12 『大川市誌』
518	大木町誌編さん委員会 1993. 3 『大木町誌』
519	大島村教育委員会 1985.3.1 『大島村史』
520	大任町誌編集委員会 1970. 5 『大任町誌』
521	大任町誌編集委員会 2004. 3 『ふるさと大任 (大任町誌) 上巻』
522	大野城市 2004. 『大野城市のいしぶみ』
523	大野城市教育委員会 2006. 3 『牛頭野添遺跡群Ⅲ〜第6・8次調査〜』 上大利南土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 大野城市文化財調査報告書 第69集
524	大野城市教育委員会 2008 『牛頭本堂遺跡群Ⅶ』 大野城市文化財調査報告書第81集
525	大野城市教育委員会 2013. 3 『乙金地区遺跡群7〜原口遺跡第1〜4次調査〜』 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書7 大野城市文化財調査報告書 第110集
526	大野城市教育委員会 2015. 3 『乙金地区遺跡群12〜古野遺跡第2・3・5次調査〜』 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書12 大野城市文化財調査報告書 第123集
527	大野城市教育委員会 2016. 3 『乙金地区遺跡群15〜王城山遺跡第1・2次調査〜』 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書15 大野城市文化財調査報告書 第139集
528	大野城市教育委員会 2017.10 『乙金地区遺跡群21〜古野遺跡第4次調査〜』 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書21 大野城市文化財調査報告書 第157集
529	大野城市史編さん委員会 2004. 3 『大野城市史 下巻 近代・現代編』
530	大牟田市史編さん委員会 1968. 6 『大牟田市史 下巻』
531	大牟田市史編さん委員会 2019. 3 『新大牟田市史 テーマ特講編』
532	岡垣町史編集委員会 1988. 3 『岡垣町史』
533	小郡市 1999. 3 『広報おごおり』 第412号
534	小郡市 1999. 8 『広報おごおり』 第417号
535	小郡市教育委員会 2005. 3 『力武前細遺跡3』 小郡市文化財調査報告書 第202集
536	小郡市教育委員会 2006. 3 『吹上二ツ塚遺跡2』 小郡市文化財調査報告書 第228集
537	小郡市教育委員会 2007. 3 『三沢北中尾遺跡4地点』 小郡市文化財調査報告書 第216集
538	小郡市教育委員会 2015. 3 『埋蔵文化財調査報告書6』 小郡市文化財調査報告書 第287集

番号	書名
539	小郡市教育委員会 2015.3 『伝承等文化資源調査報告書』 小郡市文化財調査報告書 第297集
540	小郡市教育委員会 2019.3 『寺福童開遺跡1 - 福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査報告 -』 小郡市文化財調査報告書 第322集
541	小郡市史編集委員会 1998.11 『小郡市史 第3巻 通史編 現代・民俗・地名』
542	小郡市史編集委員会 2002.5 『小郡市史 第6巻 資料編 現代・民俗・地名』
543	小郡市史編集委員会 2003.6 『小郡市史 第2巻 通史編 中世・近世・近代』
544	遠賀町誌編集委員会 1986.3 『遠賀町誌』
545	額田町史編集委員会 1984.7 『額田町史』
546	柏市教育委員会 2018 『空をつくる建物』 高射砲第二連隊防空予習室調査報告
547	春日市史編さん委員会 1994.3 『春日市史 中巻』
548	粕屋町教育委員会 1987. 『我が粕屋町の文化財』
549	粕屋町町誌編集委員会 1992.3 『粕屋町誌』
550	糟屋地区文化財担当者会編 2012. 『糟屋の宝』
551	勝山町史編集委員会 2006.3 『勝山町史 下巻』
552	金田町史編集委員会 1968.5 『金田町史』
553	川崎町史編集委員会 2001.3 『川崎町史 上巻』
554	香春町誌編集委員会 2001.3 『香春町史 上巻』
555	北九州市教育委員会 2009.3 『北九州市史跡ガイドブック』
556	北九州市史編さん委員会 1987.10 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』
557	(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997.3 『小倉城跡3 (勝山公園地下駐車場建設に伴う埋蔵文化財調査報告3)』 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第197集
558	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2010.3 『小倉城三ノ丸跡第7地点 - 都市計画道路大門木町線街路事業に伴う埋蔵文化財調査報告5 -』 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第428集
559	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2011.3 『小倉城三ノ丸跡第8地点 - 大門木町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告7 -』 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第452集
560	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2012.3 『小倉城三ノ丸跡第6地点5 (4区と5区の調査) - 思永中学校整備 PFI 事業に伴う埋蔵文化財調査報告 -』 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第473集
561	(公財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2016.3 『埋蔵文化財調査室年報32 (平成26年度)』
562	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2019.3 『小倉城御用屋敷跡 - (仮称) 平和資料館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -』 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第586集
563	北九州市立松本清張記念館 2002.1 『朝日新聞社時代の松本清張』
564	北九州市歴史博物館ほか編 1995.8 『北九州・戦時下の市民の暮らし - 戦後50周年記念・北九州平和資料展図録 -』
565	北崎村誌編集委員会 1961.3 『北崎村誌』
566	九州歴史資料館 2017.8 『霊峰英彦山 - 神仏と人自然と -』
567	郷土史馬田編委員会 1992.5 『郷土史 馬田』
568	久留米市教育委員会 2002.3 『久留米市の建造物』 久留米市文化財調査報告書 第176集
569	久留米市教育委員会 2018.3 『平成29年度 久留米市内遺跡群 (白川遺跡)』 久留米市文化財調査報告書 第400集
570	久留米市教育委員会 2004.3 『円形野外講堂』 久留米市文化財調査報告書 第202集
571	久留米市教育委員会 2005.3 『歴史散歩 No.22 平和への願い・久留米の戦争遺跡 (1)』
572	久留米市教育委員会 2005.3 『歴史散歩 No.23 平和への願い・久留米の戦争遺跡 (2)』
573	久留米市教育委員会 2016.3 『歴史散歩 No.41 平和への願い・久留米の戦争遺跡 (3) - 空襲遺跡編 -』
574	久留米市教育委員会 2018.3 『歴史散歩 No.43 平和への願い・久留米の戦争遺跡 (4) 軍都久留米編』
575	久留米市史編さん委員会 1985.3 『久留米市史 第3巻』
576	久留米市史編さん委員会 1996.11 『久留米市史 第11巻 資料編 (現代)』
577	久留米市役所 1955.12 『続 久留米市誌 上巻・下巻』
578	鞍手町誌編集委員会 1980.12 『鞍手町誌 下巻』
579	黒木町史編さん実務委員会 1993.11 『黒木町史』
580	桂川町 1967.8 『桂川町誌』
581	玄海町誌編集委員会 1979.9.1 『玄海町誌』
582	小石原村 2001.3 『小石原村誌』
583	航空自衛隊築城基地 1993.3 『築城基地開設50年史』
584	幸袋町編集委員会 1963.3 『幸袋町誌』
585	古賀町誌編さん委員会 1985.11 『古賀町誌』
586	古賀町文化財調査委員会 1980.10 『資料集』
587	古賀町文化財調査委員会 1982.3 『古賀市文化財調査 研究報告 (Ⅱ)』
588	古賀市 2007.10 『古賀市うるわし』
589	国立歴史民俗博物館 2003.3 『近現代の戦争に関する記念碑』 (『非文献資料の基礎的研究』報告書)
590	国立歴史民俗博物館 2005.3 『戦争体験の記録と語りに関する資料調査4』 (国立歴史民俗博物館資料調査報告書14)
591	犀川町誌編集委員会 1994.3 『犀川町誌』
592	権田町史編集委員会 2005.10 『権田町史 下巻』
593	志摩町史編集委員会 1972.8 『志摩町史』
594	『新修志摩町史』編集委員会 2009.3.31 『新修志摩町史 上巻』
595	志免町教育委員会 2000.3 『中山遺跡』 志免町文化財調査報告書 第10集
596	志免町教育委員会 2005.3 『志免鉱業所遺跡』 志免町文化財調査報告書 第15集
597	志免町教育委員会 2008.3 『志免鉱業所堅坑槽』 志免町文化財調査報告書 第17集
598	志免町誌編集委員会 1989.10 『志免町誌』
599	城島町誌編集委員会 1998.3 『城島町誌』
600	庄内町・庄内町教育委員会 1998.11 『庄内町誌 上・下巻』
601	上陽町教育委員会 1995.3 『上陽町郷土史年表』
602	新宮町誌編集委員会 1997.1 『新宮町誌』
603	新吉富村誌編集委員会 1990.12 『新吉富村誌』
604	須恵町誌編集委員会 1983.3 『須恵町誌』
605	須恵町教育委員会 2009.3 『須恵町文化財分布地図』
606	周船寺村誌編集委員会 1961.3 『周船寺村誌』
607	添田町史編集委員会 1992.3 『添田町史 上巻』
608	村誌「ひなしろ」編さん委員会 1999.3 『村誌 ひなしろ』
609	高田町 1958.10 『高田町誌』
610	田川市教育委員会 2019.3 『上本町遺跡 - 1・3・4次 -』 田川市文化財調査報告書 第17集
611	田川市史編集委員会 1976.3 『田川市史 中巻』
612	太宰府市教育委員会 2012. 『太宰府市文化遺産情報1』
613	大刀洗郷土誌編集委員会 1981.12 『大刀洗町史』
614	大刀洗町教育委員会 2000.3 『大刀洗飛行場 燃料庫 福岡県三井郡大刀洗町大字山隈所在旧大刀洗航空廠内燃料庫跡の調査』 大刀洗飛行場関係文化財調査報告書 第1集
615	大刀洗町教育委員会 2008.3 『大刀洗町内確認・試掘調査等報告書 本郷畑築地遺跡・本郷辰口遺跡・鶴木二塚遺跡ほか』 大刀洗町文化財調査報告書 第45集
616	立花町史さん委員会 1996.3 『立花町史 下巻』
617	田主丸町誌編集委員会 1996.10 『田主丸町誌 第3巻 ムラとムラ人下』
618	筑後市史編さん委員会 1995.3 『筑後市史 第二巻』
619	筑紫野市教育委員会 2000.3 『西部軍司令部跡』 ちくしの散歩68
620	筑紫野市教育委員会 2006.3 『長道遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書 第87集
621	筑紫野市教育委員会 2018.3 『西鉄筑紫駅銃撃事件の記録』 筑紫野市文化財調査報告書 第115集
622	筑紫野市史編さん委員会 1999.3 『筑紫野市史 下巻 近世・近現代』
623	筑紫野市歴史博物館 2016.3 『筑紫野市の戦役関係碑』
624	築上町教育委員会 2019.3 『築上町内遺跡等分布地図』 行橋市文化財調査報告書 第16集
625	筑前町史編さん委員会 2016.3 『筑前町史 下巻 近代・現代・民俗・年表』

番号	書名
626	筑前町教育委員会 2017.3 『朝倉古窯跡群 小隈窯跡・山隈窯跡・八並窯跡-福岡県朝倉郡筑前町下高場・山隈・三並所在の初期須恵器窯跡調査報告-』筑前町文化財調査報告書 第21集
627	筑前町立大刀洗平和記念館 2009.10 『筑前町立大刀洗平和記念館常設展示案内』
628	筑穂町誌編集委員会 2003.3 『筑穂町誌 上巻』
629	築城町誌編集委員会 2006.1 『築城町誌 上巻・下巻』
630	津屋崎町史編さん委員会 1999.3 『津屋崎町史 通史編』
631	戸畑市役所 1961.3 『戸畑市史 第二集』
632	豊津町誌編集委員会 1985.3 『豊津町誌』
633	那珂川町教育委員会 1976.10 『郷土誌 那珂川』
634	中間市史編集委員会 1992.3 『中間市史 中巻』
635	二丈町誌編集委員会 2005.11 『二丈町誌 (平成版)』
636	直方市教育委員会 2000.3 『直方市内遺跡群 直方市文化財調査報告書 第21集』
637	直方市教育委員会 2003.3 『津田町遺跡』直方市文化財調査報告書 第26集
638	直方市史編集委員会 1978.3 『直方市史 下巻』
639	久山町大東亜戦誌編集委員会 1970.9 『久山町の大東亜戦誌』
640	久山町誌編集委員会 1996.10 『久山町誌 下巻』
641	ひらけゆくふるさと矢部編さん委員会 1992.3 『矢部村誌 ひらけゆくふるさと矢部』
642	広川町史編さん委員会 2005.3 『広川町史 下巻』
643	福岡県三潁郡役所 1925.2 『福岡縣三潁郡誌』
644	福岡県 1927.4 『福岡縣名勝人物誌』(1916.11初版・1927.4訂正3版)
645	福岡縣碑誌保存会 1929.3 『福岡縣碑誌 筑前之部』大道学館出版部
646	福岡県警察史編さん委員会 1980.7 『福岡県警察史 昭和前期』
647	福岡県教育委員会 1964.3 『史跡福岡城跡 1963秋・1964春』福岡県文化財調査報告書 第31集
648	福岡県教育委員会 1982.3 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-1-』(甘木市西原遺跡)
649	福岡県教育委員会 1984.3 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-3-』(甘木市西原C遺跡)
650	福岡県教育委員会 1986.3 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-』(甘木市立野C遺跡)
651	福岡県教育委員会 1998.3 『下原遺跡 豊前市大字今市所在遺跡の発掘調査』福岡県文化財調査報告書 第134集
652	福岡県教育委員会 2003.3 『内ヶ磯窯跡3』福岡県文化財調査報告書 第181集
653	福岡県教育委員会 2008.3 『竹重遺跡2』(浮羽発真館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告) 福岡県文化財調査報告書 第217集
654	福岡県教育委員会 2016.3 『福岡県の中近世山城Ⅲ』福岡県文化財調査報告書 第254集
655	福岡県教育委員会 2018.3 『福岡県の近代和風建築-福岡県近代和風建築総合調査報告書-』福岡県文化財調査報告書 第269集
656	福岡縣三潁郡役所編 1925 『福岡縣三潁郡誌』(1973.2に名著出版が復刻)
657	福岡県立伝習館高校 1969.6 『七十五周年記念誌』
658	福岡県立有徳館高等学校創立250周年記念事業実行委員会記念誌編集委員会 2010.2 『福岡県立有徳館高等学校創立二百五十年史』
659	福岡市教育委員会 1977.3 『板付』(県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書) 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第39集
660	福岡市教育委員会 1979.3 『板付遺跡調査概報』(板付周辺遺跡調査報告書 (5) 1977~8年度) 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集 (板付F-6a区)
661	福岡市教育委員会 2000.3 『香椎B遺跡』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第621集
662	福岡市教育委員会 2001.3 『国史跡 元寇防塁 (生の松原地区) 復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第694集
663	福岡市史編集委員会 2013.3 『新修 福岡市史 特別編 福岡城-築城から現代まで-』
664	福岡市役所 1959.3 『福岡市史 第一巻 明治編』(市制施行七十周年記念刊行)
665	福岡市東区企画課 2008.9 『名島・多々良地区歴史ガイドマップ』
666	福岡町史編集委員会 2000.6 『福岡町史 通史編』
667	豊前市史編集委員会 1991.3 『豊前市史 下巻』
668	豊前市史編集委員会 1993.3 『豊前市史 文書資料』
669	文化庁による平成8~10年度の近代遺跡所在調査
670	防衛庁防衛研修所戦史室 1968.10 『戦史叢書 (19) 本土防空作戦』朝雲新聞社
671	防衛庁防衛研修所戦史室 1972.7 『戦史叢書 (57) 本土決戦準備 (2)-九州の防衛-』朝雲新聞社
672	防衛庁防衛研修所戦史室 1975.6 『戦史叢書 (85) 本土方面海軍作戦』朝雲新聞社
673	防衛庁防衛研修所戦史室 1979.7 『戦史叢書 (99) 陸軍軍戦備』朝雲新聞社
674	防衛庁防衛研修所戦史室 1980.1 『戦史叢書 (102) 陸軍年表 付 兵語・用語の解説』朝雲新聞社
675	宝珠山村誌刊行委員会 2010.6 『宝珠山村誌』東峰村
676	前原町 1941.8 『前原町誌 全』
677	御井小学校開校百周年記念事業特別委員会町誌部 1986.2 『御井町誌』御井小学校父母教師会
678	三潁町史編さん委員会 1985.9 『三潁町史』
679	水巻町郷土誌編集委員会 1962.12 『水巻町誌 全』
680	水巻町誌編集委員会 2001.6 『増補 水巻町誌』
681	みやこ町教育委員会 2010.3 『みやこ町内遺跡等分布地図』みやこ町文化財調査報告書 第6集
682	三輪町教育委員会 1970.1 『三輪町史』
683	三輪町史刊行委員会 2001.4 『三輪町史』
684	三輪町教育委員会・三輪町文化財研究会 1984.5 『三輪町碑誌』
685	宗像郡教育会 1928.10 『昭和御大典記念史蹟名勝写真集』
686	宗像市史編集委員会 1999.3 『宗像市史 通史編 第3巻 近現代』
687	宗像市教育委員会 1990.3 『平等寺原遺跡』宗像市文化財調査報告書 第27集
688	元岡村誌編集委員会 1961.3 『元岡村誌』
689	夜須町公民館 (金子正) 1970.8 『夜須町の太平洋戦誌』
690	夜須町史編さん委員会 1991.3 『夜須町史』
691	柳川市史編集委員会 (松岡高広) 2011.3 『柳川の社寺建築Ⅱ』(柳川文化資料集成 第4集)
692	八女市教育委員会 1993.3 『岡山公園古墳』八女市文化財調査報告書 第28集
693	八女市教育委員会 2009.3 『一般国道442号八女筑後バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』八女市文化財調査報告書 第84集
694	八女市教育委員会 2015.3 『八女ふる里学』
695	八女市史編さん専門委員会 1992.3 『八女市史 下巻』
696	行橋市 (北原謙敏) 1984.3 『行橋市史 -1町8村合併時』(昭和35年4月の贈写印刷を再刊)
697	行橋市 2004.10 『行橋市制50周年記念 ふると写真集』
698	行橋市史編集委員会 2006.3 『行橋市史 下巻 近代・現代・民俗・年表』
699	行橋市歴史資料館 2011.7 『平成23年度企画展 周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡 写真展』
700	行橋市教育委員会 2007.3 『稲童豊後塚遺跡1-第1次発掘調査報告書-』行橋市文化財調査報告書 第34集
701	行橋市教育委員会 2010.3 『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書 第38集
702	行橋市教育委員会 2014.3 『渡築紫古墳群 (渡築紫遺跡A区)』行橋市文化財調査報告書 第50集
703	行橋市教育委員会 2019.3 『渡築紫遺跡B区』(稲童工業団地関係埋蔵文化財調査報告4) 行橋市文化財調査報告書 第64集
704	若松市史第二集編集委員会 1959.4 『若松市史 第二集』

- A 『北九州市まちかど探検』 <http://sisekia.kitahistory.net/index.htm>
- B 『関門海峡周辺 (下関要塞)』 <http://www.l7.big.or.jp/~father/fortress/kanmon/kanmon.html>
- C 『P O W 研究会』 <http://www.powresearch.jp/jp/archive/camp/1st/>
- D 『福岡県軍事施設・戦争遺構 廃墟一覧』(『廃墟一覧』) <http://haikyo.info/pk/676.html>
- E 『帝國陸海軍現存兵器一覧』 <http://ki43.on.cocacn.jp/list.html>

第3表 史料調査表1：福岡県内自治体史等戦争関連記事集成

自治体名	自治体史名	内容	頁
戦史叢書	本土決戦準備 2 九州の防衛	熊本鎮台の創設、第12・18師団の発足、下関要塞などの建設。西部防衛司令部の設置と九州防衛。内地各軍司令部の創設から太平洋戦争開戦後の推移。本土決戦体制へ。九州の地誌	2～21
		西部軍司令部の創設。防空部隊の編成。独ノ開戦に伴う要塞戦備。下関要塞などの状況。西部軍隷下部隊について。太平洋戦争開戦後の防衛措置。本土初空襲後の西部軍の防空強化。下関要塞などの沿岸警備など	23～42
		連合軍反攻初期の防衛。西部防空集団の編成。絶対国防圏設定。北九州の防空飛行戦隊の南方への転用・交替。昭和19年4月頃の西部軍の状況。留守師団による第86師団等の編成。台湾や南西諸島の作戦準備について	42～57
		西部軍司令部の臨時動員、作戦態勢への移行。南九州を主眼とした作戦準備の構想。西部軍の防衛作戦指導。西部高射砲集団や第19飛行団の作戦準備。北九州へのB29初空襲	59～85
		本土守備兵団の準備。第86師団や留守第56師団の動員。本土沿岸要域防備の強化。要塞戦備、特設警備部隊など	85～97
		北九州などの民間防空強化。防空疎開、警防団による防空監視。地方行政協議会の機能強化。兵役対象の拡大	98～109
		マリアナ陥落と捷号作戦準備。大刀洗飛行場などの整備強化。福岡県内の部隊も参加した南九州の陣地構築	111～139
		捷一号作戦の頃までの防空作戦。昭和19年8月の第3～5次の九州空襲と防空部隊の動向。大隅諸島の防衛強化など	139～157
		レイテ決戦断念後の戦局と作戦計画。内地方面軍・軍管区司令部の設置。師管区司令部の設置。船舶部隊の動向など	159～189
		第16方面軍の発足。中国地方の移管。南九州での陣地構築や各地での簡易洞窟築城。地方行政協議会との調節	189～211
		本土決戦準備第一次兵備。100番台師団の新設、師管区部隊の臨時動員、満州駐留師団の内地転用など。本土空襲の激化。関東と九州への空襲と迎撃。昭和20年2月以降、邀撃戦闘は避け本土決戦に向け飛行機温存へ	211～228
		硫黄島と沖縄の戦い。内地総軍の新設、第56軍等の臨時編成などと決号作戦の準備。九州への兵力運用計画	229～277
		本土決戦準備第二次兵備。第212師団等の新設。本土決戦準備第三次兵備。第312師団等の新設	278～292
		決六号作戦発動の準備。南北九州上陸の場合は北九州で決戦を指導。第57軍による南九州の作戦準備	292～338
		第56軍の発足と北九州方面の作戦準備。第145師団・第57師団・下関要塞等による福岡県北部沿岸の防衛計画	338～350
		第16方面軍直轄管区の作戦準備。第40軍による薩摩半島の防衛準備。第16方面軍の防空指導と高射砲部隊の南九州への配置転換。北九州高射砲隊の設置。交通施設の対空掩護など	350～385
		昭和20年6月頃までの第16方面軍の兵站準備。作戦用資材等の集積と洞窟築城、輸送機構整備、現地自活計画など	385～406
		国内抗戦準備の指導。地区司令部の編成、国民義勇戦闘隊、軍民一体化と住民の扱い。憲兵の増強など	406～426
		沖縄戦後の戦局。国力の現状、大本営の情勢判断、米軍の九州侵攻作戦。第2総軍の作戦準備など	427～458
		第16方面軍の情勢判断と作戦構想。陸決号作戦での南九州、北九州方面での作戦構想	458～472
終戦までの第16方面軍の作戦準備指導。司令部の山家移駐、海上挺身部隊、防空部隊の転進、軍需品集積など	472～501		
終戦までの第57軍の南九州での作戦準備。第56軍の作戦準備。北九州沿岸防備の強化、兵站の準備など	501～565		
第16方面軍直轄区の作戦準備。久留米師管区部隊	565～575		
戦争最末期の戦局の推移。原爆投下、ソ連参戦、終戦	577～596		
陸軍軍戦備	鎮台の設置	4	
	要塞の築造	13～15	
	日清戦争前後の要塞の整備	33	
	日露戦争時の第12師団や下関要塞等。日露戦争後の6個師団（第18師団を含む）の増設とこれに伴う部隊の改編	43～58	
	第一次世界大戦の日独戦争とシベリア出兵など	72～79	
	大正時代後期の陸軍軍備整理	90～105	
	日中戦争中期の軍戦備。第12・18師団の派遣、台湾への敵機来襲と西部防衛司令部の動きなど	202～208	
	昭和13年末の陸軍兵力配備。第12・18師団を含め、ほとんどの師団は大陸へ出動中	232～233	
	昭和14年秋の陸軍兵力。第12師団、留守第12師団、第18師団等の配置	266	
	昭和15年軍備改変要領による平時編制部隊の改編。西部軍司令部や50番台師団の設置など	284～289	
	要塞地帯法の改正	300	
	日中戦争後期の軍戦備。福岡県関連部隊・官衙等も記述（以下同）	301～331	
	太平洋戦争開戦初期の軍戦備	334～350	
ガダルカナル島撤退頃までの軍戦備。昭和17年度中心	351～367		
昭和18年度の軍戦備	368～412		
捷号作戦ごろまでの軍戦備。昭和19年度中心	413～454		
昭和20年の軍戦備。第16方面軍・西部軍管区の設置など	455～500		
福岡県	福岡県史資料 第一輯	【資料】徴兵年期中ノ者罷名称取調ノ事	761～762
	福岡県史資料 第四輯	【資料】福岡県権中風水島均による「秋月騷擾記事」（秋月の乱の顛末記）掲載	686～709
	福岡県史 通史編 近代 産業経済（一）	海軍炭鉱のはじまり、福岡県における海軍炭鉱の状況について	755～757
	福岡県史 通史編 近代 産業経済（二）	海軍探炭所の設置、組織の変遷、鉱区指定、鉱害の発生など。「新原第二坑」写真、「年度別生産量」表	763～767
	福岡県史 近代史料編 筑豊石炭鉱業組合（一）	小倉市の陸軍造兵廠東京工廠移転誘致、門司市の建設制限緩和運動など、福岡県内各都市の軍施設誘致活動についての記述あり	1360～1363
	福岡県史 近代史料編 筑豊石炭鉱業組合（二）	【資料】小倉陸軍予備病院収容傷病人慰問ノ件	91
		【資料】 联合国傷病兵罹災者慰問会寄付金ノ件	64
		【資料】 軍楽隊招致費留守第12師団へ寄付ノ件	130

自治体名	自治体史名	内容	頁	
北九州市 近代・現代 行政社会	北九州市 近代・現代 行政社会	明治4年4月、鎮台設置の布告で小倉に西海道鎮台を設置。同年8月、鎮西鎮台に再編され、熊本へ。佐賀の乱と小倉	108～112	
		明治7年12月、歩兵第26大隊が熊本から小倉に移駐。明治8年4月、歩兵第14連隊が編成。第1・2大隊が小倉に。明治9年4月、福岡に第3大隊を編成し、歩兵第14連隊の編成は完結	113	
		小倉県の徴兵表及び徴兵検査の実施、徴兵忌避者の記述	116～120	
		秋月の乱における歩兵第14連隊の行動。西南戦争に派遣された歩兵第14連隊の行軍（軍旗喪失など）	120～128	
		壬午軍乱、甲申事変で歩兵第14連隊が派遣。明治18年、小倉城内に第12旅団開設、明治21年、熊本鎮台は第6師団へ。明治8年、小倉営所病院を小倉城内に設置。明治32年に北方移駐、小倉陸軍病院へ。明治15年、小倉衛戍監獄設置	343～344	
		明治19年10月、陸軍省は臨時砲台建築部を置き、以降下関・門司に砲台・堡壘を設置。明治28年3月、正式に下関要塞に	345～347	
		明治27年6月、日清戦争開戦。小倉歩兵第14連隊と福岡歩兵第24連隊も動員。7月には歩兵第14連隊補充隊や後備歩兵第23大隊も編成。11月、門司に兵器修理場、後に大阪砲兵工廠門司兵器製造所に。その他の軍事施設も多数設置	347～350	
		明治29年、第12師団の設置を明示。企救郡北方で各部隊の兵営建設。同年8月、西部都督部を設置も明治37年廃止。明治31年11月、第12師団が正式開庁。前後して隷下部隊次々に編成。明治31年10月、小倉陸軍兵器支廠を設置	350～355	
		明治37年2月、日露戦争で第12師団に動員令、一部を臨時韓国派遣隊として仁川に上陸。本隊も同月に朝鮮に上陸し、鴨緑江を超え、満洲各地を転戦。奉天の会戦にも参加。また日露戦争中、八幡製鐵所は軍需工場として砲弾を製造	355～359	
		明治38年1月以降、門司（大里）や小倉（日明）に捕虜収容所を建設。明治37年2月、留守第12師団編成下令、30部隊を動員編成し派遣。門司兵器支廠・門司兵器工場・八幡製鐵所の増産、軍用薬品の価格高騰、小倉裏線の利用など	360～364	
		日露戦争時における市民の動向。戦勝祝賀行事。戦争景気の浸透	365～373	
		明治40年10月、久留米に第18師団新設、小倉第12師団は編成替（直屬部隊・隷下部隊・衛戍病院の編成替、部隊名記載）	373～375	
		大正7年8月、第12師団はシベリア出兵。ウラジオストクからルフロフ、沿海州・黒龍江省へ。米騒動時の軍隊の出動	375～378	
		山梨軍縮と宇垣軍縮。大正14年5月、第18師団など廃止され、第12師団司令部は久留米に移駐。隷下部隊は大改編。北方の歩兵第47連隊は大分へ、小倉城の歩兵第12旅団は廃止、福岡の歩兵第35旅団が、歩兵第12旅団に改称。北方の野砲兵第12連隊、工兵第12大隊や輜重兵第12大隊は廃止。野戦重砲兵第2旅団などが下関から北方に移駐	378～380	
		明治31年、小倉に小倉兵器支廠設置（大正7年8月、城野に移駐）。大正5年4月には、小倉城内に小倉兵器製造所も開設、門司での兵器管理と修理は廃止。大正12年、関東大震災で、陸軍砲兵廠東京工廠が壊滅、昭和2年10月に小倉への移駐設置が決定。小倉城内の部隊や官衙は移駐。昭和8年10月、小倉工廠発足（小倉兵器製造所も合併）	380～385	
		昭和に入ると、北九州では土地区画整理の組合認可に、工場地帯防衛のための防空陣地造成を義務づけたものも	415～416	
		関門北九州防空演習、満州事変以後の軍隊への慰問と援助。門司市での出征部隊の歓送迎。八幡での反戦運動。爆弾三勇士の慰霊祭。市民の国防協力と兵器献納。小倉工廠の建設促進。市民の国防思想高揚など	569～584	
		戦争激化に伴う門司での送迎激増。軍事援護機関。新体制運動と大政翼賛会。日中戦争開戦後、各市では兵事課や軍人援護課、振興課を新設。物資の統制と配給。軍需経済と北九州経済界。戦時下の国民生活	585～619	
		民間の防空・防衛訓練。警防団の結成。防空壕の建設と問題点。日米開戦後の北九州における市民の動き	620～631	
		民間防衛体制の強化。昭和19年、各市で国土防衛隊結成。戦技訓練や国防修練も、北九州空襲に対してはほとんど無力	633～636	
		北九州での軍需工場労働者について。徴用、勤労報国隊、学徒動員と女子挺身隊など	641～647	
		昭和6年12月の満州事変、昭和7年2月の上海事変に小倉の一部部隊が出動。昭和11年4月、第12師団と歩兵第14連隊は満洲へ（歩兵第14連隊は後に第25師団に）。昭和12年の日中戦争開戦後、小倉の各部隊も出動。留守隊も多くの部隊を編成し戦場へ送る。昭和12年9月、第18師団復活、小倉に歩兵第114連隊新設、同年11月に杭州湾に上陸し、以降各地転戦。昭和12年8月、西部防衛司令部が小倉城内に設置。昭和15年8月、西部軍司令部に改組、12月に福岡移駐	647～649	
		昭和16年の太平洋戦争開戦後、小倉駐屯の部隊・留守隊は大量の動員編成を行う。昭和18年8月、下関要塞司令部が第12師団司令部跡に移転し、関門防衛を担任。これ以外にも西部高射砲集団なども編成。防空は飛行第4戦隊・59戦隊などが担当。昭和20年2月、本土決戦即応体制のため第16方面軍・西部軍管区司令部が発足。3月、北部九州の防衛として第16方面軍の下に第56軍設置。他にも部隊の新設・改編多数記載	656～661	
		昭和20年3月、米軍が関門海峡に機雷投下。4月、対馬海峡防衛強化のため、第七艦隊編成、司令部は門司に	667～668	
		昭和15年4月、小倉工廠は「小倉造兵廠」、城野の小倉兵器支廠は「小倉兵器補給廠」に改称。昭和17年、小倉造兵廠に春日と糸口山（宇佐）の2製造所を新設。その他にも工場多数。軍需施設の現住所等。小倉造兵廠での風船爆弾の製造	668～673	
		昭和19年6月、北九州にB29による初空襲。小倉造兵廠などに被害。昭和19年の間に第2次～5次の空襲。昭和20年に入ると、空襲はさらに頻繁に。北九州は中心部の3分の1を焼失し、壊滅的打撃	673～684	
		昭和18年、北九州五市は疎開地区に指定。人員や建物疎開へ。本土決戦体制と北九州。戦意高揚と言論抑圧、決戦非常措置、小倉工廠への勤労動員など。国民義勇隊・国民義勇戦闘隊の結成と北九州の状況、憲兵隊などについて	685～699	
		小倉が原爆投下目標になったことについて。長崎投下までの経緯と想定被害	699～704	
		戦災被災地域、被災建物の記載あり	883～885	
		北九州市史 近世	明治4年4月、太政官布告で小倉に西海道鎮台を設置、博多と日田に分管。小倉本営には熊本藩兵、博多分営は佐賀藩兵、日田分営には小倉藩兵二個中隊が出駐。明治4年8月に兵制を改正、西海道鎮台を鎮西鎮台と改めた	926～928
		北九州市史 近代・現代 教育・文化	戦時下の教育。昭和16年、小学校を国民学校に改編。昭和19年から勤労動員本格化。同年7月、北九州五市は学童疎開の対象に。北九州への空襲と学校の被害。ある国民学校長の記録。中等教育の戦時体制への移行	231～253
			映部隊・久留米工兵隊による学校校舎の使用。学校の軍需工場転用。西南女学院への圧迫と軍学校への進学。中等学校生徒の工場動員。昭和14年8月、小倉師範学校に傷痍軍人小学校教員福岡養成所設置など	254～268
			北九州地区は終戦まで、下関要塞地帯の特別区。第一区として最重要視。写真撮影等には要塞司令部の要許可	622～623
			昭和9年10月、関門北九州防空演習が二日間にわたって小倉局屋上から実況放送された	750
			日露戦争征軍帰還者による神社への石玉垣寄進、甲宗八幡神社（門司区）では奉幣殿と楼門と回廊が新築	802
		シベリア出兵に伴って、北九州の神社でも郷土部隊将兵の武運長久祈願。枝光八幡宮（八幡東区）には戦役の碑	804	
軍都小倉のはじまり。小倉鎮台の熊本移駐、歩兵第14連隊設置。明治34年には第12師団司令部が開庁、小倉と郊外の北方には歩・騎・砲兵の各連隊や、工兵・輜重兵などの大隊、病院その他の軍施設が設置。兵器工場も誕生	22～25			
北九州市史 五市合併以後	北九州は明治以降、軍隊や要塞。八幡製鐵所や小倉陸軍造兵廠などで一大軍需生産基地に。北九州の罹災状況	26～28		
北九州防空演習の記述あり	40～42			
第12師団の設置で北方に新設部隊、小倉との交通機関として明治39年、香春口～北方に小倉軌道の馬車鉄道開通	959～960			

自治体名	自治体史名	内容	頁
北九州市	北九州市史 産業経済 I	軍港としての門司港。陸軍も門司に兵器修理場、陸軍火薬庫、軍需品倉庫設置。明治29年2月、小倉が師団誘致に乗り出し軍都小倉が出発。軍事施設建設は「軍義的統制」の必要も生み、明治32年の要塞地帯法公布と下関要塞地区指定へ	118～120
		陸軍は関東大震災の修理費捻出の為、下関要塞地帯を整理し、不要用地を払い下げへ。また被害を被った東京工廠は移転となり、全国で誘致運動が展開。昭和2年、東京工廠の小倉移転が発表され、昭和8年10月に小倉工廠開庁	692～696
		工廠移転と用地買収での陸軍の強硬姿勢	714～715
		昭和12年、東京工廠から「陸軍造兵廠小倉工廠」への移転が完了。移転直後に日中戦争が勃発し、工場増設へ	839
		「北九州における官営工場労働者」表、陸軍造兵廠小倉兵器製作所、小倉陸軍兵器支廠	856
		小倉造兵廠の管理監督による軍需工場は14あり、この内、北九州では安川電機築地工場（弾丸）、東洋製罐戸畑工場（保弾子）、今村製作所若松工場（弾丸）、浅野重工業小倉製鉄所（弾丸など）であった	862
		北九州の機械工業として小倉造兵廠。門司の兵器修理場から小倉兵器製造所へ、造兵廠設置と地域的関連の乏しさ	967～968
		日清戦争に伴う軍備増強で、明治27年門司に陸軍兵器修理場を開設させ、明治31年には小倉に陸軍師団司令部を開庁	979
	第一次大戦前後の中央資本の進出による工場設立や陸軍小倉造兵廠の開設で、小倉は北九州工業地帯の一翼へ	989	
	軍事都市としての小倉の記述あり	1026～1027	
	八幡製鐵所の空襲被害状況の記述あり	1042～1044	
	北九州市史 産業経済 II	八幡製鐵所の製品取引先一覧。東京砲兵工廠や呉海軍工廠、海軍省艦政本部、門司兵器製造所など	413
		八幡製鐵所の空襲被害、北九州地域の被害状況の記述あり。敗戦時の八幡製鐵所	530～534
		軍都小倉の成り立ち。門司兵器製造所の沿革。「大阪砲兵工廠門司兵器製造所、小倉兵器製造所の人員推移」表など	632～638
		戦時経済期の陸軍造兵事業。小倉造兵廠の拡張、内部組織等の記述。各造兵廠が主に生産した兵器の種類一覧あり	689～706
	戸畑市史	昭和18年8月、小倉造兵廠汚職事件。風船爆弾計画と小倉造兵廠における風船爆弾製造と製造過程など	719～745
		【年表】 関門北九州防空演習	515
	戸畑市史 第二集	西南の役に従軍した戸畑村竹内松吉などの記録あり	323～328
		大正7年の米騒動と軍隊出動の件。大正7年8月、米騒動鎮圧のため、第12師団出動	638～642
		満州事変と上海事変。戸畑市の防空演習について。「防空演習」写真あり。戸畑市防護団と各地の分団について	747～751
		戸畑市の防衛施設についての記述あり。美祿山に横穴式防空壕を建設など	762～763
		戦時体制下の戸畑について。戦況の推移。戸畑市の貯水槽や防空壕施設一覧あり。戦時下の教育や生活など	764～776
	門司市史	戸畑市における空襲被害地及び被害状況。爆弾投下場所などの記載、「被害状況」表あり	777～787
		終戦直前の決戦体制。家屋・工場・学童疎開、国民義勇隊と国民義勇戦闘隊、戦況の推移、終戦まで	787～802
		陸軍運輸部門司出張所、門司憲兵分遣隊についての説明あり	413～414
	八幡市史	【年表】 陸軍特別大演習御統監、門司陸軍兵器支廠、小倉陸軍兵器支廠門司出張所、老松町元兵器支廠跡地、在郷軍人会門司市連合分會建設に係る忠魂碑、関門北九州国防協会	898～932
		【年表】 八幡憲兵分遣所	672
八幡市史 続編	昭和19年から4回にわたって家屋疎開実施。八幡市の空襲被害。爆弾による被害地など記載あり	335～343	
	中等学校生徒による勤労動員について	732～733	
小倉市誌 下編（下巻）	【年表】 第14連隊、小倉大隊司令部、小倉衛戍病院、第12旅団本部、第12旅団司令部、第12師団、小倉兵器支廠小倉派出所、第12師団監督部、旧小倉城天守台号砲、輜重兵第12大隊、第12師団憲兵隊、第12師団糧餉部・経営部、歩兵第47連隊、歩兵第14連隊、憲兵隊、憲兵隊本部、小倉衛戍病院、小倉陸軍兵器支廠小倉派出所、小倉陸軍兵器支廠。小倉在郷軍人会発会式、陸軍特別大演習、小倉青年会発会式	586～609	
	西海道鎮台（本営小倉、分営博多、日田）の記述あり	266	
小倉市誌 続編	野戦重砲兵第2旅団司令部、野戦重砲兵第5連隊、野戦重砲兵第6連隊、歩兵第14連隊、小倉連隊区司令部、西部防衛司令部、陸軍小倉工廠、小倉陸軍兵器支廠、小倉衛戍病院、小倉憲兵本部、小倉衛戍病院の概説	331～350	
	第12師団司令部、歩兵第47連隊、騎兵第12連隊、野砲兵第12連隊、工兵第12大隊、輜重兵第12大隊の概説	350～354	
	【年表】 昭和8年4月、満州上海事変に於ける小倉部隊ならびに小倉連隊区管内戦死者合同墓碑成り、合祀祭を挙げる	1034	
若松市史 全	若松市における徴兵状況（明治・大正・昭和）の記述あり。「徴兵人員状況」表あり	624～626	
	昭和6年7月、関門6市による防空演習の実施と若松市の取り組みについて。「高塔山道路開鑿記念碑」写真あり。高塔山に高射砲施設を設置するため、道路を久留米工兵隊が開鑿した時の記念碑	626～631	
若松市史 第二集	高塔山公園の忠霊塔について。日清・日露戦争から太平洋戦争までの若松市戦死者二千百柱の霊が祀ってある	969	
	「横穴式防空壕」（小石字神側、他2ヶ所）、「防空道路」（小石字大岩谷、他2ヶ所）、「防空障地」（石峰山、弥勒山、その他10ヶ所）記載。昭和19年6～8月の空襲による若松市の被害状況について。	979～992	
	昭和19年6月の機雷投下、8月の空襲について。8月8日の空襲では石峰障地火災発生2ヶ所、八幡製鐵所に白煙など	994～1000	
	敵機来襲一覧表（昭和19年6月16日より20年8月15日まで）。北九州地区、門司、下関、八幡（若松）など記載	1001～1011	
	谷治良（元若松憲兵分駐所）、森英雄（元下関要塞司令部）、伊藤英行（元船舶輸送隊晩部隊）他による太平洋戦争座談会	1012～1017	
若松市史 第二集	気球隊について。昭和16年7月、気球隊が小倉北方で編成、若松童子丸に本部、藤木国民学校にも駐屯、昭和19年に要地防空気球隊に。晩部隊について。若松恵比寿通り野上鉦業を本部とし、船舶運営会社と連携して輸送作業などを一本化	1013～1014	
	昭和30年6月、戦争犠牲者の記念塔建立計画開始。昭和32年9月、高塔山に建設	1041～1043	
	明治27年11月、日清戦争の凱旋祝賀会を祇園社境内で挙げる。日露戦争時の木屋瀬について	229～231	
木屋瀬町誌	木屋瀬では深田の字宮堂の丘陵に照空部隊の障地構築、敵機を照射。第一回空襲での爆弾投下、第二回でのB29撃墜。終戦直前には特攻隊基地建設のため海軍部隊が学校校舎に駐屯。銃後奉公会結成や金属回収への協力など	232	
	明治10年から昭和21年までの木屋瀬地域出身戦没者一覧	233～247	
企救郡誌（全）	歩兵第14連隊の沿革。野戦重砲兵第5連隊および第6連隊の沿革、戦役記述あり。歴代連隊長の記述あり	324～331	
	明治31年10月小倉陸軍兵器支廠を熊本陸軍兵器廠内に設け、同時に小倉陸軍兵器支廠小倉派出所を小倉城（小倉兵器分廠廃止に付、其跡を使用）に設置した。小倉衛戍病院の沿革	331～340	
	歩兵第47連隊の沿革、大正15年に軍制改革で第6師団に属し、大分に移転。騎兵第12連隊の沿革、大正15年に軍制改革で第12師団と共に久留米に移転。野砲兵第12連隊の沿革、大正15年に廃止。工兵第12大隊の沿革、大正15年に廃止	345～355	

自治体名	自治体史名	内容	頁
福岡市	新修 福岡市史 特別篇 福岡城－築城から現在まで	近代の福岡城と陸軍部隊駐屯の概要。城下町と軍隊との関係。福岡は城や町の大きさに比して部隊は小規模	5～6
		歩兵第24連隊、福岡衛戍病院など地図から見る福岡城の軍用地について。各施設の所在と地図上での表記について	39～40
		歩兵第24連隊の新設と編成過程、福岡の城を中心とした軍事施設の記述あり。「日本陸軍の編成」表。所属師団や旅団について。日清・日露戦争とシベリア出兵前後の歩兵第24連隊の出征。日露戦争時の捕虜収容所について。大正9年、歩兵第24連隊の城外移転論が新聞紙上に発生	42～46
		満州事変から太平洋戦争までの歩兵第24連隊他、福岡衛戍部隊などの戦歴、西部軍司令部と福岡大空襲について	50～51
		福岡衛戍病院の設立経緯、武具櫓や本丸裏御門の払い下げ。「福岡衛戍病院正門」「昭和初期の福岡衛戍病院」写真	92～96
		旧福岡城二の丸への陸軍部隊の設置と、城の建物の変化について	119～123
		鎮台設置と歩兵第14連隊の福岡分駐。歩兵第24連隊の創設・編制、福岡城への駐屯、日清戦争への出征等について。福岡城内の連隊施設の記述と「福岡衛戍歩兵第廿四連隊全景」あり。歩兵第24連隊の日露戦争出征	174～181
		福岡の各俘虜収容所の開設と設置経緯について。福岡収容所は明治38年1月14日に開設	181～182
		第18師団新設に伴う再編と、福岡城への歩兵第35旅団司令部設置について。福岡連隊区司令部について	182～183
		徴兵制、福岡城内における歩兵第24連隊の兵営生活について	184～186
		歩兵第24連隊の満州移駐と福岡における諸部隊編成について。「福岡連隊記念碑」写真（昭和38年5月福岡連隊跡記念碑建設会により建立）。本土防衛部隊の編成と西部軍司令部・西部軍管区司令部について。福岡大空襲について	186～189
		城内練兵場について。「城内練兵場での射撃訓練」など写真。明治28年11月、日清戦争の鎮魂記念碑（慰霊碑）が城内練兵場に設置。以降の鎮魂祭・招魂祭について。大正5年11月、陸軍特別大演習では城外練兵場で大観兵式	194～197
		福岡城外練兵場の概要、第三回九州青年陸上運動会など城外練兵場での諸行事、福岡県護国神社など。「大正5年陸軍特別大演習観兵式」写真。城外練兵場、城内練兵場、歩兵第24連隊兵舎等などの写真	264～267
		【年表】歩兵第48連隊、福岡大隊区司令部、福岡連隊区司令部、須崎砲台、歩兵第24連隊、臨時韓国派遣隊、俘虜収容所（東中洲共進会）、福岡収容所、俘虜収容所（武具櫓・南の丸南櫓）、俘虜収容所本部（上之橋収容所）、箱崎収容所、歩兵第35旅団司令部、陸軍特別大演習、シベリア出征福岡連隊、歩兵第24連隊城外移転論	301
	新修 福岡市史 資料編 民俗編一 春夏秋冬・起居住来	冷泉公園の戦災記念碑（福岡市社会福祉協議会）。昭和20年6月の福岡大空襲と海外からの引揚の死没者を追悼	325
		谷公園の福岡県陸軍墓地（福岡県郷友連盟）	384
		圓應寺で仏教式の「福岡市福岡大空襲追善慰霊祭」、簀子公民館で「簀子校区戦災死没者並びに物故者追悼式」を行う。昭和22年6月19日「戦災死者供養塔」が簀子公園の赤煉瓦堀近くに建立。供養塔、戦災地蔵等の写真	102～105
		黒田稲荷神社境内の戦災地蔵。昭和25年5月に建立。須崎町の恵比寿神社境内、古門戸町の沖濱稲荷神社境内に戦災地蔵尊。西区今宿の栄昌寺に「じゅうご地蔵尊」、東区馬出の宗攻寺の「洲崎地蔵尊」などについて	740～742
		福岡市中央区城内のヤマモモの木は、かつて歩兵第24連隊営所の正門脇のシンボルだった。「陸軍」標柱4本あり	791～792
	新修 福岡市史 特別篇 自然と遺跡からみた福岡の歴史	歩兵第24連隊（通称福岡連隊）は、1886年6月、小倉の歩兵第14連隊を母体に編成、本部は福岡城内に設置。「福岡聯隊の跡」写真。昭和38年5月3日、福岡聯隊跡記念碑建設会により建立。そのほか福岡城関連部隊（連隊・師団等）の記載	792～794
		西公園には「日清戦役碑」「日露役記念碑」「古岡友愛大佐銅像」があったが、戦中に供出。1976年の公園整備で再建	906～907
		福岡市内の空襲状況についての記述あり。「空襲前後の福岡市中心」航空写真あり	388～389
	新修 福岡市史 資料編 近現代①	【資料】佐賀の乱の原因、郡季親・大庭弘佐賀の乱見聞のあらまし	751～753
		【資料】佐賀県征韓派土族の動向、旧福岡藩土族の動向	758～760
		【資料】軍糧・広島鎮台兵福岡着艦	764
		【資料】内務卿大久保利通肥前連池本陣設置	766～767
		【資料】長崎県土族帆船清華屈書（佐賀の乱の形勢）	776～778
		【資料】福岡県土族死傷者氏名	781～783
		【資料】戊辰戦争戦没者招魂場官費支給、招魂社行幸の御製、佐賀の乱に関する後記	791
		【資料】明治十 南薩征討概略上 自序	795～798
		【資料】西郷軍人名簿	831～832
		【資料】西郷軍逃走の様（大阪日報）	840～842
		【資料】熊本県土族上田休の処分、泣き上戸の桐野利秋、西郷隆盛面会の大尉某談話、新聞報道偏向の所感、西南戦争出陣将校等帰京	862～867
【資料】招魂大祭式執行	874～875		
【資料】鹿児島県在勤警視官某書状（西南戦争後の状況）	887～889		
新修 福岡市史 資料編 近現代②	【資料】戦争と福博商業家（論説）	929～931	
福岡市史 第一巻 明治編	福岡藩旧土族の反乱（明治10年2月）、発生、参加土族、処罰などについて。「旧福岡藩事蹟談話会山中立木筆録」	955～972	
	日清戦争に伴う歩兵第24連隊の動員・出征地について。「予備後備軍出兵者家族救助の件」などあり。福岡の俘虜収容所（共進会跡、福岡城内練兵場）、柳町の俘虜登楼拒絶、明治三十七年市民事務報告（抄）など	1035～1047	
	歩兵第24連隊、福岡連隊区司令部の概要	1100～1102	
	【年表】福岡連隊臨時派遣編成、歩兵第23旅団、歩兵第24連隊、後備第24連隊軍旗授与式、小倉陸軍予備病院、歩兵第24連隊、満州義勇軍、旅順捕虜（城内南櫓武具櫓に収容）、福岡憲兵分隊、小倉憲兵分隊福岡分遣所、奉天会戦、日本海海戦。この他に戦勝祝賀会、招魂祭・戦死者葬儀等、日露戦争当時の福岡関連事項あり	1581～1586	
福岡市史 第二巻 大正編	シベリア出兵に伴う福岡歩兵第24連隊、臨時編成第12師団の動員、出征、凱旋などの記述あり	840	
	第一次世界大戦におけるドイツ軍の福岡俘虜収容所、福岡収容所独逸俘虜大尉ザルデン夫人殺害事件について	774～787	
	【年表】歩兵第35旅団、福岡連隊区司令部、福岡憲兵分隊、鶏知憲兵分遣所、青島陥落祝賀会、福岡俘虜収容所、日本赤十字社福岡支部（第84救護班）、独立第18師団	1406～1412	
【年表】第12師団、第18師団、城外練兵場、福岡連隊シベリア出兵、歩兵第24連隊、軍艦八雲博多入港、留守師団長、陸軍音楽隊、歩兵第24連隊、シベリア出兵福岡連隊博多駅凱旋、歩兵24連隊凱旋祝賀会（九州劇場）、シベリア出征戦病死者官祭臨時招魂祭、連合艦隊、福岡連隊区司令部管区表改正、久留米連隊区、歩兵第35旅団、特別大演習（中津）	1419～1429		

自治体名	自治体史名	内容	頁
福岡市	福岡市史 第三巻 昭和前編 (上)	軍需工場への勤労働員や学生の軍事訓練、福岡空襲の被害などについて、写真多数あり	11～16
		昭和戦時期の福岡の動き。防空対策、北九州地区の防護対策年表あり。「防空施設工事」表あり。福岡連隊、戦死者慰霊祭、対英断交断絶促進市民大会（公会堂）、南京陥落祝賀会、市内警報サイレン、警防団、西部軍司令部福岡移転など	208～216
		海軍予備航空隊福岡支部の設置経緯、福岡地方局による甘藷栽培計画、煙草空き箱回収、福岡市の節米計画、福岡地方産業報国会の活動、自転車統制配給についての記述、新聞記事あり	216～224
		動物の殺処分・慰霊祭、福岡市の分散疎開、博多湾への機雷投下など。昭和20年6月19日の福岡大空襲の様子	228～236
		昭和20年6月19日の福岡空襲における戦災状況、戦災被害額などの記述。福岡市中心部は繁華街を始め、主要な地域は殆ど焦土に。東は御笠川より、西は樋井川、北は海岸線から、南は柳田神社、大濠公園までの区域は殆ど焼失	247～251
		福岡連隊跡記念碑建設会が昭和38年5月3日に建立した「福岡連隊の跡」の碑文記載あり。歩兵第24連隊の沿革など	252～253
		「貯蓄奨励」、「非指定施設並びに一般家庭金属回収」など	341～342
	福岡市史 第四巻 昭和前編 (下)	日本航空輸送会社の福岡・大連線開通についての記述あり	311～312
		上海事変について、福岡24連隊の出征、戦死者慰霊祭、凱旋などの記事	329～332
		福岡県護国神社の建設について。西部軍司令部の移転（小倉市から福岡市舞鶴城へ）、福岡地方海軍人事部開庁	366～372
		福岡軍需管理部の開庁式（福岡県庁西別館三階）。昭和初期における福岡市所在の官公庁、福岡連隊区司令部など	385～395
		【年表】 英国軍艦ヘリック号入港、軍艦由良・長良・川内・迅鯨博多湾入港、軍艦鬼怒外駆逐艦12隻博多港入港	776
		【年表】 特別大演習（熊本県下）、福岡第24連隊、満州軍慰問団、満州事変戦死者、臨時第五赤十字救護班	780
		【年表】 福岡陸上飛行場「雁ノ巣」、福岡市警防団結団式	790
	福岡市史 第八巻 昭和編後編 (四)	【年表】 海軍艦艇の博多湾入港、雁ノ巣飛行場、防空演習、出征部隊の折願祭・歓送会	804～805
		【年表】 高宮国民学校、福岡地方海軍人事部開庁式、パーモ・ビルマ行政府長官一行来福、福岡軍需監理部開庁、福岡市国民義勇隊結成準備大会、神潮特攻生産学徒総進撃大会、B29博多湾機雷投下、空襲殉職者合同警防団葬	816～819
	福岡市史 第九巻 昭和編続編 (一)	【年表】 戦災記念除幕式・福岡市戦災死没者慰霊祭（冷泉公園）	762～763
	福岡市史 明治編資料集	板付基地の概況、板付飛行場の歴史（戦前・戦中期）	142
		雁の巣空軍施設の沿革（戦前・戦中期）。「旧雁の巣飛行場」写真あり	165～166
	福岡市史 昭和編資料集 前編	歩兵第35旅団長、歩兵第24連隊長、福岡連隊区司令官、各就任・退任年月日の記載あり	253～254
		【資料】 軍人軍属遺家族に特別税戸数割賦課減免の件	20～21
		【資料】 福岡市疎開指導所設置規程制定の件、福岡県都市疎開事務所設置の件	183～184
		【資料】 陸軍に市有上屋専用貸与の件	269
		【資料】 西部軍司令部に中央埠頭土地建物賃貸の件	282
		【資料】 陸上飛行場を名島に移転併置に関する建議案、福岡市に陸上飛行場設置に関する建議案、航空標識灯（航空灯台）に関する件	433～438
		【資料】 飛行場拡張事業準備のための土地立入測量	442
		【資料】 福岡連隊区司令部の位置に関する件	464～465
		【資料】 満州事変出動軍人戦死傷者等に関する件、第一艦隊博多港入港の件	470～472
		【資料】 福岡爆撃に関する米軍記録（原文：英語、邦訳あり）。戦災被害神社調査に関する件。「戦災神社調査（抄記）」あり	491～500
		【資料】 金属類非常回収第一次実施に関する件	544～547
		【資料】 福岡県女子勤労働員協議会規程制定の件	550
【資料】 戦局の急迫に伴い県知事告諭の件		553～554	
【資料】 繊維製品配給消費統制規則施行に関する件、家庭用物資の配給に関する手数料条例改正の件		572～575	
【資料】 出動又は応召軍人に関する軍事扶助等の件、出征軍人遺家族職業輔導所の位置に関する件		596～599	
【資料】 日華事変の推移に対処し通牒の趣旨徹底の件、非常時局下における物資の消費節約に関する件		696～699	
【資料】 福岡県学徒勤労働員実施要綱に関する件、陸海軍人を配属する学校指定の件		707～718	
【資料】 寺院・教会等に対する金属類回収に関する件	789		
【資料】 防空思想の普及並びに防空訓練徹底に関する件、防空演習に関し連合防護団長論達、北九州及南朝鮮防空演習	818～821		
福岡市史 別巻 生活の構造と変遷をみる福岡都市圏の地図帳	疎開地図（福岡市強制疎開図）、郷土部隊終戦時配置図（郷土隊の足跡）あり。歩兵第24連隊、第113連隊、第124連隊、第226連隊の戦役・足跡について	98	
福岡市史	戦災図・福岡市復興図など	99	
	福岡市の兵員数一覧表、福岡市の徴兵人員数一覧表あり	32	
香椎町誌	徴兵参事員、磯野七平ほか記載あり	135	
周船寺村誌	香椎町出身の戦没者・未帰還者一覧あり	222～231	
元岡村誌	周船寺町の忠霊塔は、昭和28年3月、丸隈山古墳の東方に建立。「忠霊塔」写真。周船寺町出身戦没英霊名簿	140～147	
	回天を操縦して西カリリン群島ウルシー環礁内に停泊中の敵艦に特攻した福田斉（神潮特別攻撃隊水隊員）について	162～168	
	昭和26年9月に竣工した元岡村出身戦死者慰霊塔「澄霊塔」について。「戦死者一覧」あり。「澄霊塔」写真あり	170～178	
	徴兵令、西南戦争、日清戦争、日露戦争の概要と元岡村との関係（戦死者など）	181～185	
警弥郷の歩み・ふるさと絵史	満州事変から第二次世界大戦までの概要、福岡地域への空襲。福岡海軍航空隊の用地買収と建設について	187～191	
	【年表】 今出地区海軍用地、今出航空隊、田尻区海軍用地、澄霊塔	217	
北崎村誌	福岡大空襲、敗戦と食糧不足について。警弥郷の戦死者一覧。寄せ書き、千人針、竹槍訓練、防火演習などについて。「寄せ書き」、「千人針」、「竹槍訓練」、「防空演習」、「防空壕」等の写真・絵あり	31～35	
田大市牟	北崎村の忠霊塔について、津上崎の山下風光明媚の地に建立、昭和27年除幕式。「忠霊塔英霊二百四十一柱」記載	179～190	
大牟田市史 下巻	太平洋戦争時に空襲を受けた学校施設。戦災全焼校（三川国民高等科、三里国民他）、戦災半焼校（手鎌国民、大牟田市立商業）など	716	

自治体名	自治体史名	内容	頁
久留米市	久留米市史 第三卷	佐賀の乱、秋月の乱、西南戦争について	92～108
		近代陸軍の創設と鎮台設置、徴兵令の発布と施行について	220～231
		明治29年11月、歩兵第48連隊が福岡で創設準備開始。明治30年4月、福岡から移転。明治31年11月、歩兵第48連隊編成完結。軍旗写真。明治30年10月、歩兵第24旅団司令部も久留米に開庁。明治37年、歩兵第48連隊は日露戦争へ出征	414～417
		明治40年12月、第18師団司令部開庁。師団設置経緯と久留米市の協力、諸部隊の久留米移駐。第18師団司令部写真。明治44年11月、久留米市付近で特別大演習実施。高良台演習場。師団設置に伴う国分村と久留米市の変貌	417～422
		大正3年、第一次世界大戦勃発。第18師団を中心に独立第18師団が編成、山東半島へ出発、青島要塞陥落。大正3年10月、俘虜収容所設置、ドイツ人捕虜が到着。当初は市内に分散したが、翌年に久留米俘虜収容所に転収	765～770
		山梨軍縮と宇垣軍縮。久留米の第18師団は廃止、小倉の第12師団司令部が久留米へ移転。隷下部隊は改編や移動	770～774
		民需工場の軍需転換。日本・つちや岡ゴム会社は、防毒マスクや軍服。プリヂストーンタイヤも軍用トラックタイヤなど生産	795～796
		第一次上海事変での肉弾三勇士について、久留米市は三勇士を表彰して公会堂前に銅像を建設した。銅像写真あり	1027～1033
		昭和12年、日中戦争勃発。同年、第18師団が復活、11月に杭州湾敵前上陸。昭和16年、太平洋戦争開戦当日、市役所から臨時ニュース。第18師団佐美支隊はコタバル上陸、シンガポール攻撃へ。翌年2月、医専グラウンドで戦勝祝賀大会	1034～1046
		戦時下の久留米市行政。行政組織の戦時体制化。市の財政負担。兵器献納。警防団、防空対策。翼賛選挙実施	1049～1069
		戦時下の教育と文化。昭和20年の久留米空襲による学校被害。学校の戦時体制化と勤労動員。戦時下の美術と文学	1077～1100
大政翼賛会。経済統制。昭和19年、爆弾三勇士の銅像回収。戦時下の市民生活。久留米における兵力動員、徴用者状況、勤労報国等。戦時下の農村荒廃と農産物の供出。久留米市議会における防空への危機感。市民生活の深刻化	1100～1128		
高良大社や篠山神社での武運長久祭、全国一斉に軍事援護行事。市公会堂で久留米市民総決起大会。金属供出、防空対策と市民、昭和20年2月には重要施設地下移転のための洞窟調査。建物疎開と工場疎開、物資保護。人員避難について	1128～1135		
九州への空襲と久留米。8月11日の久留米空襲の状況。空襲における死傷者数、罹災戸数、焼失建物など。「学校区別罹災戸数ならびに人員」「焼失した主な建築物」表（日華ゴム株式会社、陸軍兵器事務所など）。「被災焼失区域図」地図	1136～1144		
久留米市史 第四巻	第12師団司令部、久留米偕行社、久留米連隊区司令部、歩兵第48連隊ほか、旧兵営・軍用地の位置図、戦後の転用	19～24	
	久留米国民学校、金丸国民学校、京町国民学校など戦災復興。「第14回 戦災当時の久留米市街」写真	55～61	
久留米市史 第五巻	山川招魂社、嘉永6年以降の国事殉職者の神霊、明治6年、御楯神社を創建、その後各事変、戦後の殉職者を合祀	1298	
久留米市史 第六巻	【年表】 山川町茶臼山招魂社（明治2年2月29日）	190	
	【年表】 歩兵第24旅団司令部、大機動演習、久留米衛戍病院（国分町）、久留米憲兵屯所（櫛原町）	264～265	
	【年表】 歩兵第47連隊、歩兵第48連隊、俘虜収容所（国分町）、この他に日露戦争の久留米関連事項	276～280	
	【年表】 高良台演習場、第18師団、陸軍大演習、明治四十四年特別大演習駐蹕之地碑	292～296	
	【年表】 第18師団記念碑除幕式・解隊式（諏訪野公園）、第12師団、第1戦車隊、歩兵第56連隊跡、久留米騎兵第22連隊、小倉騎兵第12連隊、新師団歓迎ドンタク（第12師団）	325	
	【年表】 爆弾三勇士銅像・除幕式、爆弾三勇士第一回慰霊祭、防空訓練、この他に昭和戦中期の久留米関連事項	345～351	
	【年表】 久留米予備士官学校（山砲隊跡）、陸軍墓地忠霊塔竣工式・鎮霊式、この他に昭和戦中期の久留米関連事項多数	367～377	
	【年表】 日本タイヤ（軍需工場指定）、正源寺山陸軍墓地参道道路拡張、この他各種大会、慰霊行事、団体等	385～386	
	【年表】 防空課、復興課、戦時生活課、戦没者・戦災死亡者慰霊祭（梅林寺）	393	
	【年表】 久留米市慰霊会解散	426	
久留米市史 第十巻 資料編近代	【資料】 旧久留米県解兵の内、熊本鎮台入隊志願者について	108	
	【資料】 下士官・兵卒埋葬の方法について、徴兵調査を陸軍へ提出する件	313～316	
	【資料】 エンヒル銃等所持者は戸長へ至急差出の件、佐賀の乱で戦死した出征者に対する祭祀料について	336	
	【資料】 陸軍省御入用夫の雛型	350～351	
	【資料】 熊本鎮台常備欠員に付、壮兵120名召集の事	374	
	【資料】 徴兵臨時調年齢計算の件	392	
	【資料】 柳坂村他2村から3名熊本鎮台へ出発の件	394	
	【資料】 歩兵二大隊、熊本鎮台管轄の三瀨県へ屯在の件	414	
	【資料】 佐賀の乱で借り上げた小銃の返却について	486	
	【資料】 吉井町の徴兵検査廃止、徴兵検査出張の件	493	
	【資料】 旗崎招魂所について	594	
	【資料】 陸軍省の弾薬、日田から筑後川筋の下船場まで運搬する件	631	
	【資料】 国民軍調査について	645	
【資料】 徴兵令免役出願について	694		
【資料】 国民軍名簿進達について	745		
久留米市史 第十一巻 資料編現代	【資料】 「旧軍施設の規模一覧」表。各軍施設の所在地、面積など。第12師団司令部、久留米偕行社、久留米陸軍病院等	11～17	
	【資料】 師団配属部隊の兵舎等平面図及び部隊概要。久留米師団司令部庁舎、久留米陸軍病院、高良台演習場など。工兵、輜重兵、戦車隊などの編成・概要の記載あり	18～33	
	【資料】 軍用財産引継ぎ・処分。「軍事施設建造物調査」ほか表あり。第18師団、第56師団などの関連不動産一覧あり	34～40	
	【資料】 終戦時郷土編成部隊の所在地について。第12師団、第18師団、第56師団、第86師団、第96師団、第212師団、第312師団、第16方面軍ほか、隷下部隊と創設年月日、終戦時所在地の記載あり	41～47	
	【資料】 久留米空襲のこと（小川初子）	832～833	
【資料】 同 隣組回覧板による周知（昭和20年3月）、久留米憲兵隊久留米憲兵分隊	839～840		
久留米市誌 上編	明治天皇および皇族の久留米市への行幸、陸軍特別大演習（明治44年）などの記述あり	189～256	
	明治44年陸軍特別大演習において明治天皇が統督した場所について。「明治天皇御野立所」写真あり	442～443	
		陸軍糧兵部、海軍経理局	742

自治体名	自治体史名	内容	頁
久留米市	久留米市誌 中編	熊本鎮台管区から第12師団設置までの久留米市における陸軍管区の変遷について	518～519
		秋月の乱と久留米地域の状況などについて。西南の役における久留米出身従軍者について	618～619
		日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦までの概況、久留米市の状況など	623～624
		日露戦争以後における久留米市の軍人慰問、救護活動についての記述あり	632～633
		大正4年1月、青島出征戦死者の久留米市葬。日独戦役後のドイツ軍兵士捕虜と俘虜収容所について	636～640
		第18師団廃止と第12師団の設置について。師団と各部隊の概要。諏訪野町国分小学校東側の第18師団記念碑について	642～656
		輜重兵第18大隊、飛行第4連隊、騎兵第12連隊、第1戦車隊、久留米衛戍病院の沿革	661～665
		歩兵第56連隊の部隊変遷、概要など	668～669
		久留米における陸軍簡閲点呼について。山川村宇旗崎茶臼山招魂社官祭について。「官祭人名（戦死ノ事故）」あり	674～680
		昭和6年10月調査の久留米市内死没軍人遺族について	682～697
	続 久留米市誌 上巻	昭和6～30年の久留米市沿革。久留米師団、久留米戦車隊、混成旅団、久留米工兵第18大隊、肉弾三勇士など	19～53
		久留米市と御井町の合併祝賀会に際しての久留米師団長祝辞 戦死者と慰霊について。山川南筑嶺徳神社（山川招魂社）、正源寺忠霊塔。陸海軍の復員数、未帰還者状況について	292～293 760～763
	続 久留米市誌 下巻	満州事変、上海事変における郷土久留米部隊の出征、戦歴、凱旋、久留米市の防空活動や市民大会について	183～191
		広東並びに武漢三鎮攻略後の久留米市における銃後活動、遺家族援護、市長年頭の辞などについての記述あり	213～217
		昭和16年12月、皇威宣揚米英撃滅市民大会（医専グラウンド）。食糧増産決戦大会など	251～252
		太平洋戦争中の久留米。戦局の概略、金属回収、警戒警報、防空訓練、戦没者慰霊、農繁期勤労奉仕などについて	258～269
		昭和18年末～昭和19年までの米軍本土襲撃、戦争完遂祈願祭などの記述あり	276～278
		サイパン島陥落後の本土空襲一覧、久留米市の防空施設強化について。デパート旭屋横広場ほか防空施設一覧。久留米市における太平洋戦争時期の企業整備、市葬、軍隊慰問、軍事援護、戦没軍人慰霊祭などの記述あり	283～288
		昭和20年における主な空襲一覧あり	290～293
		「重要工場の疎開」一覧あり。日華ゴム、日本ゴム、日本タイヤの疎開先記載あり	302～303
		戦局の急迫で113個の掩蓋式防空壕を急増。篠山城跡・日隈権現山にも横穴式避難壕。また防火用貯水槽も増強	307～308
		久留米市空襲の概況、市役所屋上監視哨・消防署員の証言などの記述あり	427～432
		久留米空襲による罹災者、焼失建築物、戦没死者の調査結果について	437～442
		小頭公園内に建立された戦没死者之霊碑、除幕式・慰霊祭についての記述あり	451～453
		【年表】後備歩兵第48聯隊、日露戦争戦死者、第18師団司令部、久留米憲兵隊本部、この他に久留米の軍事関連事項	94～95
		【年表】御野立所跡「明治四十四年特別大演習駐蹕之地の碑」、第18師団、独立第18師団、俘虜収容所	98～101
		【年表】久留米師団、戦死者の葬儀、防空演習。この他各種大会、団体など戦時下の久留米関連事項	111～113
【年表】陸軍墓地忠霊塔竣工式・鎮靈式、牟田山練兵場、新設陸軍墓地忠霊塔、この他に戦時下の久留米関連事項	117～118		
【年表】戦没者の市葬・遺骨伝達式・追悼会、久留米戦没者遺族会・久留米遺族会、師団偕行社	123～124		
【年表】戦没者慰霊祭、福岡県久留米市共催忠霊塔、戦没者之霊碑除幕式	134～135		
田主丸町誌 第三巻 ムラとムラびと 下	北部九州の部隊配置、日清戦争の概要、田主丸関係の戦死者、大熊鵬（通役として従軍）の概歴などについて	666～667	
	田村左二郎（小倉12師団第1野戦病院の輜重兵）の『征露陣中日誌』について。「林田守隆より桂太郎首相への手紙」	670～673	
	日露戦争の戦死者、田主丸出身の校区别戦死者、廃兵・傷痍軍人問題。絵馬「鐵峯占領之光景（南峰画）」の写真。日露戦後の体制。「日露戦争で砲兵として死亡したムラ人の墓」「日露戦役の碑（田主丸町石垣）」などの写真あり	673～679	
善導寺町誌	第一次世界大戦後の軍縮、日中戦争の勃発。太平洋戦争期における12師団、18師団、56師団の各戦役について。「水繩村軍人家族各機関写真帳」あり。戦時下の田主丸の各学校の状況（空襲対策など）。軍人家族などの写真あり	680～689	
	日清・日露戦争、第一次世界大戦、満州事変から太平洋戦争まで。善導寺町の空襲。善導寺町の戦死者一覧あり	151～161	
御井町誌	【年表】歩兵第48連隊（三井郡国分兵営）、日清日露戦争記念碑（善導寺小学校内）、第18師団司令部（久留米設置）、久留米師団、爆弾三勇士、久留米工兵隊（奉安殿建設）、防空演習、広島陸軍需品廠支所、太刀洗飛行場	14～20	
	招魂社・御橋神社について。久留米藩主有馬頼咸が山川村旗崎に招魂社を建立、後に御橋神社と改称、陸軍墓地となる	29	
北野町史誌 （平成版）	山川招魂社（山川町良山中学校北隣）、見取園から碑文記載あり。「爆弾三勇士之碑」あり。252柱の碑文あり	302～335	
	【年表】歩兵第48連隊、久留米衛戍病院、工兵第18大隊、陸軍特別大演習、ドイツ俘虜久留米到着、国分俘虜収容所	423～424	
	日清戦争勃発の情勢、戦争経緯、条約締結、北野町からの出征者についての記述あり。「日清戦争」図あり	442～444	
	日露戦争開戦の背景、各地の戦闘、日本海海戦、条約締結までの概要、第48連隊の動員などについての記述あり	444～446	
	第一次世界大戦の日本参戦、青島要塞攻略、ドイツ人俘虜などについて。ドイツ人俘虜は梅林寺日吉町教務所に収容したが、後日、人員が増加したので、篠山町、日吉町、高良台町の三ヶ所に収容所を設けて収容	447～448	
三瀧町史	上海事変の概要、爆弾三勇士について、日支事変の概略、南京虐殺事件の概要などについての記述あり	452～454	
	開戦前の日米関係、開戦、沖中戦における特別攻撃隊について。「太平洋戦争」図、「太平洋戦争の経過の概要」あり	460～466	
	「銃後の生活年表」。「護国の英霊」（校区别）一覧	470～479	
	日清戦争、日露戦争、日中戦争、第二次世界大戦の概要、久留米師団、菊兵团、竜兵団など、郷土部隊の出征について	179～181	
城島町誌	三瀧町地域における第二次世界大戦戦没者名簿。「昭和59年3月23日アンチボロ慰霊祭風景」「陸軍第18師団菊兵团記念碑菊花の塔（大善寺玉垂宮神苑 竣工昭和51年12月吉日）」「昭和54年1月菊部隊ビルマ戦跡巡拝慰霊団」写真	181～184	
	「太平洋戦争中の犬塚女子義勇隊」写真、「戦時中郷土祈願祭（於大善寺）」写真あり	407	
	【年表】高良台、陸軍特別大演習（明治44年）	632	
城島町誌 補遺	西南戦争で戦死した鐘ヶ江儀十郎の碑（城島町下青木の氏神境内、現下青木公民館敷地内）について。写真あり	263～264	
	昭和初期の内外情勢。久留米工兵隊「肉弾三勇士」、菊兵团、竜兵団の出征、北部九州の空襲、ボツダム宣言受諾まで。城島町浮島の久留米師団工兵隊の演習地について。戦時下の耐乏生活、勤労動員や防火訓練。久留米空襲の証言	277～282	
	昭和初期から敗戦後までの証言。城島町戦没者名簿一覧。明治10年以降本町出身戦死者数、「忠魂碑」等写真あり	282～288	
	【資料】「福岡県史稿二九騒擾事変二」抜萃、「佐賀暴動一件」（佐賀の乱）資料記載	55～75	

自治体名	自治体史名	内容	頁
直方市	直方市史 下巻	国民学校、青年学校の設置、学徒動員、直方の状況について。「戦時中の生徒の行進」「小学校の難刀練習」写真あり 戦没者の合同市葬（公会堂）、西部防衛司令部管下防空訓練、陸軍簡閲点呼、家庭防空総合結成式、軍工廠の記述など 戦時下の直方について。国民勤労働員署、北九州空襲、炭山挺身隊、国民義勇隊、義勇戦闘隊、高射砲陣地（山部）など	643～648 1146～1147 1155～1157
	直方市史 補巻 石炭鉱業編	選定鉱区・海軍予備炭田の設定、海軍予備炭田の開放などについての記述あり。「選定鉱区図」「石炭選定鉱区表」あり	100～111
	直方市史 資料編 下巻	【資料】農兵心得書、農兵調軍夫志願ニ関スル心得などの資料。明治三年徴兵規則控、鎮台の設置などについて、資料あり 【資料】山部西徳寺山上軍陣地構築、国民義勇隊。第五連合町内会内戦没者遺家族弔問。植木町役場当直日誌、徴用援護会家族懇談会、郡義勇隊、福岡連隊区、松根油釜築打合会（植木町役場）、宮田松根油打合会 【資料】海軍予備炭田の指定、他資料掲載	55～62 381～384 460～466
飯塚市	飯塚市誌	物備等統制令施行後における飯塚市配給係の事務報告、労働統制など。「出征見送り 新飯塚駅」などの写真。福岡県の隣組について。昭和15年12月、在郷軍人会の忠霊塔寄付を機に、旌忠公園が立岩の高雄山の丘陵地に建設 朝鮮人・華人労働者、俘虜の炭鉱労働。少年飛行兵、飯塚市の軍隊駐在について。「戦時下中国人労働者数」表あり。「少年飛行兵の墓」あり。飯塚市で掘られた横穴式防空壕について。「飯塚市より戦場へ出ていった人、戦死した人」表あり 旌忠公園の概略。西南の役に降の本市出身戦死者顕彰のため、高雄山頂に忠霊塔を建設し、公園も造営へ	680～683 688～694 980
	飯塚市史 中巻	日清・日露戦争の概要、飯塚からの出征者、第12師団森嶋外軍医部長の飯塚来訪。勝盛公園内の征清記念碑、従軍記念碑などについて。飯塚での状況（石炭産業や通信関係）など。「日清・日露戦争における戦病死者数」表。写真あり	445～449
		嘉穂郡の徴兵検査（飯塚市の公会堂）、志願兵制度について。惣門秀男氏（海軍上等飛行兵曹）の「回想録」。二瀬町「動員実施業務書」から見る動員業務。「元海軍航空兵の回想録」「動員実施業務書」写真あり。飯塚市の慰問派遣団について	506～509
		勤労働員、女子挺身隊の概要。外国人労働者、俘虜について（筑豊炭田など）。飯塚、直方の空襲、建物疎開計画について	509～512
		『昭和十七年度山笠記録帖 東町東町内会』、『徳波町誌』（町民の日記）から抜粋	512～522
	飯塚市史 下巻	青年学校、太平洋戦争下の教育、学徒勤労働員など。『國福第七〇一工場勤務日誌』による学徒動員の事例など	522～536
		飯塚市出身者戦死者顕彰のための旌忠公園忠霊塔（昭和15年竣工、立岩・鯉田）と、昭和20年8月8日、B29に撃墜された第343海軍航空隊所属一等兵曹久世龍郎君の碑（昭和48年竣工、鯉田）について	687～688
		慰霊碑について。忠魂塔（秋松墓地）、忠魂義烈殉職者（遠賀川中ノ島）、慰霊塔、戦没者慰霊碑（鯉田旌忠公園など）、海軍戦没者（内野老松神社）、平和の塔（柏の森立八幡宮・柏の森津原老松神社）、傷痍軍人の碑（飯塚義祖八幡宮）など	243～244
	庄内町誌 (昭和版)	独立山砲兵第2連隊第3中隊山砲隊に入隊した兵員の記録、出征から敗戦、帰還まで。関連写真あり	331～336
		日露戦争以降の戦争。満州事変、日華事変の従軍者、慰問、戦死者村葬、太平洋戦争時の学徒動員などの記述あり	115～119
		日華事変開始と「赤紙」送達、応召者や戦死者について。出征者への千人針、戦死者村葬など。戦時下の生活について。本土空襲の状況、福岡県の空襲、終戦の詔書、終戦時の庄内村の状況の記述も。附録年表「太平洋戦争概記」あり	354～371
		徴兵令、徴兵検査、血税一揆、土族反乱、西南戦争について。「明治6年6鎮台の設置」「甘木検査場区割」などの表あり	262～272
		日清戦争の概要、歩兵第14連隊、歩兵第24連隊の従軍についての記述あり	281～282
		日露戦争の概要、庄内村からの従軍者、銃後などについて。昭和11年、網分八幡宮境内に忠魂碑が建設。「忠魂碑」写真	282～284
		日中戦争開始、庄内村の出征者。忠魂碑前の招魂祭。『庄内村婦人会山倉支部記録簿』による出征兵・戦死者一覧	318～320
		太平洋戦争、勤労奉仕、学徒動員、戦時下の炭鉱、空襲下の生活などの記述あり	323～329
		福岡県の出征軍人及び留守家族援護についての記述あり	520～521
庄内町誌 下巻		鉱業報国会、石炭挺身隊、勤労学徒などの記述あり。昭和13年7月、各炭坑に鉱業報国会が結成された	244～246
筑穂町誌 (昭和版)	筑穂町における援護団体。昭和31年5月、筑穂町は寄附金を財源に筑穂町宇風呂谷に慰霊塔建設、合祀者名簿あり	375～380	
筑穂町誌 上巻	徴兵制施行後の福岡県における徴兵状況、西南戦争について。明治6年、全国に6鎮台、小倉に歩兵第14連隊を配置	263～268	
	日中戦争、太平洋戦争の概略、銃後活動、学徒動員、弥山村常会の記録などの記述あり	317～320	
	日清・日露戦争における戦没者、筑穂町の記念碑・慰霊塔について。筑穂町合同慰霊塔をはじめ記念碑などの写真	474～478	
	日中戦争・太平洋戦争の概要、戦没者について。筑穂町の戦没者一覧あり。戦没者慰霊塔が昭和31年に長尾に建立	478～483	
筑穂町誌 下巻	福岡連隊差別事件糾弾闘争、「福岡連隊爆破事件」デッチ上げ、松本治一郎他11人逮捕騒動について	177	
	戦時下の朝鮮人労働者の状況について。「内地人・朝鮮人等労働者推移表」、「上穂波坑朝鮮人寮所在地」などの写真	182～187	
穂波町誌	【年表】福岡24連隊	521	
	福岡県傷痍軍人会徳波分会、傷痍軍人遺族会などについて	302～303	
	戦時下・戦後における穂波町の生活状況についての記述あり。「穂波町人の日記」あり	327～334	
穂波町ものがたり	日中戦争以降の学校教育（国民学校）下における学校生活（食糧増産や日鉄二瀬鉱での勤労作業）について	188～189	
幸袋町誌	昭和35年10月1日、幸袋遺族会発足。「慰霊塔（幸袋中学校校庭）」写真あり	218	
瀬田町史	佐賀の乱、秋月の乱、西南の役などの土族反乱についての記述あり	138～139	
	徴兵令、徴兵検査、徴兵忌避者など。「徴兵検査場区割並招集日割」写真。小倉鎮台第14連隊、熊本鎮台	159～164	
	日清・日露戦争での瀬田村からの従軍者。出征軍人留守家族の救護。戦死者の一覧。「日清・日露戦争の被害」表	180～184	
	シベリア出兵の概要、シベリア出兵に従軍した瀬田村戦死者。西比利亞戦役記念碑（下勢田貴船神社境内）、写真あり	212～213	
	日中戦争時の出征者、戦死者、村葬。昭和11年の戦死公報一覧。学徒動員、女子挺身隊、軍需工場徴用。空襲など	231～236	
昭和20年8月8日、米軍大編隊に突入し戦死した久世龍郎君の石碑について。「故久世龍郎君之碑」写真あり	237～238		
田川市史 中巻	秋月の乱の発端、豊津戦、田川での状況など。秋月土族戦死墓などの写真あり	37～49	
	田川における日露戦争の徴兵、銃後対策。田川郡の出征戦死者一覧、戦役賜金者一覧、日露戦争関連の祈願祭など	510～522	
	シベリア出兵に伴う田川での充員召集についての記述あり。伊田町の凱旋祝賀会、金川村での祝賀会などの記述あり	522～525	
	日中戦争に伴う伊田町での召集状況、戦争関連行事など。日中戦争での後藤寺・伊田町の出征戦死者一覧。写真あり	527～536	
田川市史 下巻	田川市の戦時市制について。大政翼賛体制、隣組、節米運動、切符制度、金属供出。防空訓練、北九州空襲など	57～69	
	英彦山錬成会、田川市田川国民学校学徒隊	76	
	太平洋戦争における田川市からの出征戦死者について	88～90	

自治体名	自治体史名	内容	頁
柳川市	柳川市史 史料編VI 山門郡行政・上	【資料】 徴兵下検査のため戸籍簿差出の件	49～50
		【資料】 海軍召集事務取扱手続、馬匹徴発計画に関する件	277～279
		【資料】 兵事統計に関する件、徴兵適齢人名調調達の件、徴兵処分後兵役証書交付不能の場合報告方の件	285～287
	大和町史 通史編 上巻	徴兵令公布、徴兵令反対一揆、鎮台の設置、佐賀の乱の経緯、「佐賀の乱戦況図」「佐賀の乱戦況図」の復元図あり。西南戦争勃発から終結まで。「米良信實の墓碑」写真あり	667～685
大和町史 通史編 下巻	昭和期における国民の生活状況、大和村の生活状況、出征兵士、物資統制・経済統制における国民の生活状況など 大和村の在郷軍人会では、3月には日露戦争の戦没追弔会、5月には招魂会など催した	16～21 31～33	
八女市	八女市史 下巻	西南戦争の概要、西南戦争に従事した軍夫、八女地方の軍人死亡者（13人）記載あり	220～223
		日清戦争の概要、福島尋常小学校の「学事日誌」から見る戦後の様子などの記述あり	224～225
		八女公園に建立された招魂堂について。日清戦争、義和団の乱、日露戦争にて戦死した八女郡将兵の英霊を祀る	229～230
	八女市史 年表編	明治44年の陸軍特別大演習（筑肥の野）について。岡山御野立所と記念碑、演習内容など。大本営は県立中学校明善校	231～235
		岡山飛行場（陸軍筑後地方航空機乗員養成所）の建設経緯、飛行場建設における学徒動員作業について。「学徒動員腕章」あり。八女遷都論について、企画院「中央計画素案・同要綱案（第一部基本方針 第一項首都）」記載あり	237～245
	立花町史 下巻	広島・長崎への原爆投下、星野村の「平和の塔」（広島原爆の火種を持ち帰り、星野村で燃やし続けている）について	253～255
		【年表】 日露戦争戦没者52人、第18師団司令部開庁、岡山御野立所、陸軍特別大演習、第18師団青島攻略参加	142～150
	立花町史 年表	鎮台条例による西海道鎮台の廃止。日清戦争後の軍備拡張による第12師団の創設など、福岡県における部隊編成	23～24
		日清・日露戦争について。戦争の背景、郷土部隊の戦い、条約締結、戦後の状況まで。八女郡と立花町の戦没者について	248～254
	立花町史 年表	第一次世界大戦と日本の参戦、第18師団の動員など。立花町の戦死者。ドイツ軍捕虜を篠山・日吉町・高良台に収容	270～272
		戦時中の学校教育について。太平洋戦争開戦からの戦局の推移。学徒動員や農産物供出。立花町関係戦没者一覧	309～335
	星野村 行政・教育編	終戦時の立花町地域の状況や立花町出身戦没者について。「立花町地区別戦没者数」「立花町の戦争別戦没者数」あり	339～341
		【年表】 久留米第18師団青島攻略	73
	星野村史 年表編	【年表】 岡山飛行場建設（八女市亀ノ甲）、八女遷都案、風船爆弾（八女市柳瀬）、久留米予備士官学校速射砲隊、八女郡内各町村義勇隊、福岡市大空襲、大牟田大空襲、B29撃墜、米軍艦載機八女地方来襲、久留米市空襲	80～83
徴兵令の概要。「兵役免役者」あり		62～63	
矢部村誌 ひらけゆくふるさと矢部	日清・日露戦争について、星野村出征戦没者。池ノ山公園に日清戦争の征清記念碑と忠魂碑、日露戦争の忠魂碑	99～101	
	爆撃機献納、金属供出、松根油採集、防空演習、空襲など。昭和20年7月の大牟田大空襲時、B29が横山村（上陽村）に墜落	145～150	
上陽町 郷土史年表	星のふるさと公園「平和の塔」について。星野村出身の山本達雄氏が広島原爆の焼跡から持ち帰った火を燃やし続ける	192～193	
	【年表】 第18師団、青島攻略	111	
黒木町史	満州事変から日中戦争までの記述。「在満家族慰問」写真。隣組の活動、物価統制、配給制度など。太平洋戦争の開始から経過、敗戦まで、矢部村の状況など。「招魂社」「慰霊祭」写真。老松天満宮に戦没者慰霊碑。「矢部村出身戦没者」一覧	107～119	
	【年表】 歩兵第48連隊	280	
筑後市史 第二巻	【年表】 陸軍特別大演習御統監（明治44年11月11日）	291	
	【年表】 久留米戦車隊、岡山飛行場、女子挺身隊、横山松根油工場、久留米予備士官幹部候補生教育隊、大刀洗飛行場	315～327	
筑後市史 第三巻	徴兵制度の成立、常備軍の設置、徴兵免役条項などの記述あり。「全国鎮台配置」表、「兵役免役者」あり	407～409	
	西南戦争の概要、従軍した軍夫などについての記述あり。「早川栄三郎の墓」写真あり。黒木町戦死者3人記載あり	416～419	
筑後市史 第二巻	北支事変、日露戦争勃発からポーツマス条約。仁田原重行大将（黒木町出身）について。黒木町戦死者、出征人員数	420～422	
	第一次世界大戦勃発、日本参戦、終結、戦後景気、黒木町内への出征・戦死者などについて	537～539	
筑後市史 第二巻	日中戦争勃発と第二次上海事変などについて。第6・第18・第114師団で第10軍を編成し、昭和12年11月、杭州湾に上陸	571～573	
	戦時下における黒木町内の防空活動について。日本ゴム工場、小倉工廠、岡山飛行場などの勤労奉仕について	576～581	
筑後市史 第二巻	黒木町護国神社の設立経緯、戦没者慰霊祭など。護国神社の写真。毎年4月初めに黒木町戦没者合同慰霊祭を実施	639～640	
	徴兵令公布と徴兵告諭（記載）、軍管の区分と鎮台の設置についての記述あり。「全国鎮台配置」表あり	111～113	
筑後市史 第二巻	佐賀の乱の経緯。「佐賀の乱戦死者の墓（旗崎招魂場）」写真。星野村から戦死者1名。山川招魂社に戦没者6人追記	130～134	
	西南戦争の勃発、戦争の推移、結果、意義、筑後との関わりについて	136～143	
筑後市史 第二巻	日清・日露戦争について。開戦前の状況から講和後まで。「日清戦争戦況経過図」。韓国併合、台湾統治などについて	212～219	
	羽太塚における軍馬購買部、屠場など、軍馬、競走馬飼育について。「軍馬購買会出場馬の育成地区及び馬の産地表」	388～399	
筑後市史 第二巻	上海事変における久留米第12師団の出動、「爆弾三勇士」、出征軍人家族の援護活動など。「上海事変戦況経過図」あり	451～453	
	満州事変と郷土部隊の出征・部隊編成について。太平洋戦争の戦局、本土空襲、郷土部隊の出征と転戦、防空演習、出征軍人の歓送、英霊の出迎えなど	476～483	
筑後市史 第二巻	八女郡岡山に建設された岡山飛行場について	515～516	
	戦死者の増加・戦死者の通知、郷土部隊の出征地の状況など。「八女郡古川村戦死者数・年次・場所一覧表」	524～527	
筑後市史 第三巻	本土決戦準備と久留米編成部隊。若菜公会堂などに小部隊駐屯。空襲の激化など	528～531	
	【年表】 船小屋温泉（日露戦争による陸軍転地療養地指定）、騎兵第22連隊、野砲兵第24連隊、独立山砲第3連隊、歩兵第56連隊、工兵第18大隊、陸軍大学校演習、歩兵第24連隊、久留米第18師団、第12師団、第56連隊跡、第1戦車隊	1098～1117	
大川市	【年表】 野戦重砲兵第6連隊、第12師団、南朝鮮・北部九州防空演習、満州派遣部隊、武漢三鎮戦捷報告祭	1132～1136	
	大川市誌	明治初年の軍制改正、徴兵令施行までの概要。佐賀の乱の概要、戦役について。「佐賀の乱地図」あり	517～527
大野島村史	郷土大野島村史 －大川市大字大野島－	大野島村における太平洋戦争までの戦死者一覧あり。大野島村の忠魂碑は日露戦役後、昭和4年小学校校庭に建立された。終戦後、連合軍に撤去を命じられたが、日本の主権回復後に校区公民館正面に再建された	158～179
	大野島村史	日露戦争における大野島村出身戦没者、渡辺水哉（北海道旭川第7師団第25連隊長）についての記述あり	124～125
大野島村史	大野島村の忠魂碑、戦没者について。忠魂碑は昭和4年小学校に建立。戦後GHQにより撤去、後に校区公民館前に再建	158～179	

自治体名	自治体史名	内容	頁
行橋市	行橋市史 一町八村合併時	大正9年11月、大分県中津町を中心に陸軍特別大演習を挙行。第6師団、第12師団、第18師団の対抗演習。福岡県は大演習の経費2,700余円、道路の特別修繕費5,735円を臨時県会で議決。陸軍大演習時の行橋町の状況について 北九州の防空整備、行橋防護団の結成、防空演習について	284～285 369～370
	行橋市史 下巻 近代・現代 民族・年表	国家総動員法。金属回収、勤労奉仕、学徒出陣、学徒勤労員など。京都高等女学校、豊津中学校の勤労員など	284～290
		昭和14年12月、仲津村、築城村、八津田村一帯にかけて築城飛行場が着工。昭和18年4月、築城海軍航空隊として開設。築城海軍航空隊の概要、空襲（昭和20年8月7日）、学徒動員、終戦まで。「攻撃を避けるための掩体壕（稲童）」写真	290～293
		行橋市における終戦、戦没者についての記述あり。（行橋市）「戦没者地域別調査表」	293
		戦時下の教育体制下の状況。学徒動員などについて、安川航空電機行橋工場、築城飛行場、九州飛行機など 【年表】 築城飛行場、築城海軍航空隊、岡野バルブ製造行橋工場、安川航空電機株式会社	318 826
行橋市史 資料編 近・現代	行橋市の碑石、行橋市の碑石説明、戦争関連碑についての記述あり。行橋市の戦争関連碑は22基 【資料】 明治三十七八年戦役記念之碑（箕島神社）、護国之英靈の碑（香円寺）、日露戦役記念「戦利兵器ノ記」（北山神社）、兵農維一之碑（道場寺大山上山頂）、日清日露戦役従軍記念碑（稲童安浦神社）、日露戦役記念碑（天生田清池神社）、戦利兵器奉納ノ記（南大野井王塙八幡神社）、忠魂碑（津積御所ヶ谷神籠石中門の後方）、日清日露から大東亜戦病者之碑（御所ヶ谷神籠石中門の後方）、戦利兵器奉納ノ記（下種田大分八幡神社）、大東亜戦争戦没者慰霊碑（下檢地共同墓地）、平和の礎（吉国公民館前）、軍人記念碑（延永公民館）、嗚呼戦歿勇士「大東亜戦争従軍戦没者芳名」（下崎善照寺）、明治三十七八年戦役記念碑（椿市小学校横）	10 105～109	
豊前市	豊前市史 下巻	明治政府の軍制改正と徴兵制について	44～45
		角田在郷軍人会は松江鶴迫に「松江射撃場」を設置し、在郷軍人、青年会、中等学校生徒の射撃訓練に供していた	149～150
		大正9年11月の特別大演習について、演習経路など。三毛門の折戸池畔・黒土の千駄池畔に「摂政官御通過記念碑」	201～202
		入営・応召軍人の見送り、戦勝祈願祭、慰問袋送送など。「出征兵士を送る」「日ノ丸」への寄せ書き「持ち寄られた慰問品」写真。昭和7年3月7日横武小学校で武運長久の祈願祭。横武村の村葬。「戦没者村葬遺骨入場」写真	219～225
		豊前地区の空襲について（体験談）。昭和20年4月26日、八屋、千東地区に大空襲。被災状況、被爆体験記。昭和18年、築城海軍航空隊所属の零戦が接触事故を起こし、山田地区平原の路に墜落。戦死者等の記述あり。写真多数あり。	257～269
		児童生徒の勤労教育。山田弾薬庫の勤労動員、築上高等女学校学徒動員、北海道報国動員、他県からの勤労動員など 仏教界の戦争協力、仏具・梵鐘などの金属供出、戦争による寺院の罹災などの記述あり 【年表】 陸軍大演習（明治18年、宇島・行橋間） 【年表】 陸軍大演習（大正9年、築上・下毛・宇佐） 【年表】 角田在郷軍人会、松江射撃場	328～338 872～874 1564 1578 1580
中間市	中間市史 中巻	歩兵第14連隊、第12師団の簡単な説明。北部九州・南朝鮮地方総合防空演習。中間町事務報告から見る戦時体制など	920～923
		昭和44年、垣生公園に戦没者慰霊塔建設、西南戦争より太平洋戦争までの戦死者の名前。「西南戦争以降の戦没者数」表	958～959
		出征軍人遺家族後援会、中間町女子挺身隊、大正鉱業中鶴捕虜収容所分所など	1058
小郡市	小郡市史 第二巻 通史編 中世・近世・近代	大刀洗航空隊新設とそれに伴う鹿児島本線分岐新駅設置について	1025～1032
		大正5年に大刀洗飛行場の建設が開始。大正8年、航空隊第4大隊の第1中隊が大刀洗に赴任。大正14年に大刀洗飛行場第4連隊が結成。北原白秋の芸術飛行。秩父宮の大刀洗飛行場第4連隊入隊について	1033～1034
		昭和4年4月、日本航空輸送株式会社は大刀洗支所を設置、大刀洗～大阪～東京間の郵便飛行開始。同年9月、同社は大刀洗から岡山～京城～平壤～大連まで路線を伸ばし、大刀洗は国際空港に。昭和11年6月、民間航空は雁ノ巣移転	1035～1036
		昭和3年より大刀洗から大陸に飛行機出動。昭和15年、大刀洗陸軍飛行学校設置。昭和13年、第五航空教育隊（西部第百部隊）発足。昭和15年、大刀洗航空隊設置、技能者養成所も。平成7年、北鶴木公民館前に「大刀洗陸軍航空隊技能者養成所跡」碑が建立。昭和12年、大刀洗航空機製作所操業開始。昭和18年、大刀洗北飛行場の新設計画。写真多数	1037～1042
		昭和20年3月、二回の大刀洗空襲。児童など民間人の被害。その後の大刀洗付近への空襲。小郡へのB29墜落について	1043～1048
		戦時下の生活（横領区を例に）。戦時国策への協力、配給など。三国村の防空、疎開について、戦死者遺骨の出迎え方などの戦時中の儀礼。国民義勇隊について。戦時中の小郡の特徴（大刀洗飛行場などへの協力と食糧増産への模範農村）	1049～1061
	小郡市史 第三巻 通史編 現代・民俗・地名	小郡市の戦没者・傷痍軍人。昭和22年、小郡市で遺族会結成、毎年戦没者追悼式開催。「空襲の傷跡（小郡市内）」図 「戦没者・傷痍軍人調べ」表、「小郡市民の戦没地調べ」「戦没者追悼式」写真、「慰霊の歌」あり	8～10 10～13
		小郡市史 第五巻 資料編 中世・近世・近代	【資料】 海軍協会、航空機増産特別貯金実施要綱、管理米（責任供出数量）供出ニ関スル件、軍用保護馬普通鑑録日通知
	【資料】 村葬等協議会通知、作業場奉仕者人名調査方ノ件依頼、遺骨出迎ニ関スル件通知		1268～1273
	【資料】 防空ニ関スル件、兵役免除後ノ死没者其ノ他調査ニ関スル件		1275～1279
【資料】 戦死者ニ関スル件通知、遺骨埋骨ニ付出迎参列方ノ件通知	1280～1284		
【資料】（飛行機献納奉告祭案内状）、必勝祈願祭並ニ出征軍人武運長久祈願祭執行ノ件、大東亜戦勝祈願祭並ニ出征軍人軍属武運長久祈願祭執行ノ件	1288～1291		
【資料】 防空ト吾々農民ノ心構へ	1323～1326		
【資料】 国民義勇隊編成協議会開催ノ件	1332		
【資料】 疎開者慰問懇談会開催ノ件、空襲等戦時災害ニ因リ孤独トナリタル者ニ関スル調査方ノ件	1341～1344		
小郡市史 第六巻 資料編 現代・民俗・地名	【資料】 軍緊急要員出動ニ関スル件、国民総武装兵器調査ニ関スル件	1355～1359	
	【資料】 戦死者ニ関スル件通知、戦災者家具入用ノモノ調査ノ件、大豆特配ニ関スル件、〔戦災保護法手続き通知〕	1368～1371	
小郡市史 第七巻 年表・総索引	小郡市戦没者名簿	23～55	
	三井郡の明治維新以来の戦役戦死者氏名	56～60	
	【年表】 陸軍特別大演習（明治44年、久留米）、大刀洗飛行場	194～196	
小郡市史 補遺編	【年表】 第12師団、第18師団、大刀洗航空隊引込線、日本航空輸送会社大刀洗支所、雁之巣飛行場、大刀洗製作所（渡辺鉄工所野町工場）、立川航空廠大刀洗支廠、大刀洗航空廠、大刀洗北飛行場、大刀洗飛行場、大刀洗飛行学校	202～218	
	【年表】 陸軍被服支廠（大保）	224	
戦時中の小郡（周辺）のできごと、潜水艦での日々、一人一つの「タコツボ」と防空壕 三軒屋で爆撃に遭った、空襲で全ての家が焼けた花立、家の近くに落ちたB29、犠牲になった朝鮮の家族、松脂採りで見たロッキード（松根油）、学校帰りに受けた機銃掃射、西鉄沿線への機銃掃射、久留米空襲、鳥栖で遭った空襲	463～473 477～495		

自治体名	自治体史名	内容	頁
筑紫野市	筑紫野市史 下巻	松尾光昌日記からみる土族反乱の記事。西南戦争と筑紫野地域の関係。西南戦争における病院設置。福岡の変の概要	599～608
		戦時期における筑紫村の歳入、歳出についての記述あり。「戦時期の筑紫村歳出」「戦時期の筑紫村歳入」表	867～869
		戦時下における筑紫郡の農業状況、法令改正等の影響などについての記述あり	945～948
		昭和20年6月25日、山家地区に急造の洞窟陣地に西部管区司令部が移転。原田地区には、臨時動員された戦車第46連隊、筑紫地区は高射第4師団が移行、二日市地区には、第36航空情報隊の超短波警戒機が配備。その他、山家地下西部管区司令部の建設経過、内部構造の記述あり。「山家の西部軍司令部「地下壕」跡」写真	1010～1012
		昭和20年8月8日、西鉄電車筑紫駅にて米軍機が車両を襲撃。詳細記述あり。筑紫駅待合室等の写真あり	1012～1016
	筑紫野市史 年表	松下金属九州工場（二日市町）、九州飛行機分工場（筑紫町原田）、東洋空機の部品工場などの移転、学徒動員など	1016～1018
		二日市温泉は、日露戦争から太平洋戦争を通して戦傷病者の治療と湯治場。同温泉と軍・戦争について	1027～1029
		【年表】陸軍爆撃機御笠吉木に不時着、陸軍大刀洗飛行隊、愛国婦人会武蔵保養所、満州事変記念式（1934年9月18日）、防空予行演習（二日市小学校庭）、陸軍福岡連隊軍事演習（二日市）、武蔵温泉・二日市の旅館（軍需工場宿舎転業）、米軍機福岡空襲（二日市など救助・避難）、被災者用簡易住宅建築講習会、米軍機の筑紫駅襲撃事件	55～60
		藩兵から国民皆兵へ。明治初年の福岡における徴兵状況、徴兵忌避など。「兵役関係書類の例 補充員編入証書」あり	41～45
		日本軍の海外での武力行使の推移。軍の国民との協力および不信の関係。明治17年、熊本鎮合の野砲隊が春日原で露営演習、明治20年の大演習、明治21年の旅団演習、明治27年の連隊演習など、春日における軍への協力事例	45～51
春日市史 中巻	春日出身で福岡第24連隊所属の白水信吉の従軍記録（日露戦争）。「春日村からの出征者」表など。シベリア出兵・尼港事件と春日出身の師団長、白水淡について。大正8年、白水は鶴我山に於て仕えた乃木希典の遺品軍服収納碑を建立	52～59	
	世界大恐慌から太平洋戦争までの海外および日本国内の動向について	71～74	
	盧溝橋事件からソ連軍侵攻までの陸海軍の戦況の推移。春日村からの応召者	199～204	
	昭和15年、春日競馬場付近一帯が小倉陸軍造兵廠春日製造所工場用地として買収、春日原、中の原を渡辺鉄工所が買収。春日村の純農村から軍需工業地への変化。戦時下の物資統制、工場や病院への動労奉仕、資源回収など	211～218	
	昭和18年、春日原総合運動場にて、春日原総合戦技訓練を実施。「九州飛行機・九州兵器青年学校生徒分列行進」写真	227～228	
	小倉陸軍造兵廠春日製造所、九州飛行機、九州兵器株式会社などに動員学徒や女子挺身隊が出動した。昭和20年4月には、九州飛行機が緊急疎開のため、近郊の牛馬車に出勤要請。6月には動労報国隊により洞窟壕内の土運び	229～230	
	春日村での資源回収・供出と隣組や警防団、海軍による松根油採取・製造について。「松や二採取痕（大土居八幡宮）」など写真あり。九州飛行機疎開地での坑木切り出し問題。春日に布陣していた歩兵第117連隊による農作業の手伝い	230～234	
	学徒出陣など国民総武装化。福岡近郊での特設警備大隊（中隊）設置。防空壕の築造。防衛隊や国民義勇隊結成など	234～240	
	春日村への軍需工場進出。昭和5年以降、渡辺鉄工所が福岡市から当時の筑紫郡那珂町に工場移転。昭和11年には春日村にも工場拡張（後に九州飛行機と九州兵器に分社）。軍需省発足で福岡軍需管理部設置、九州飛行機株式会社・九州兵器株式会社が管理下に。昭和20年、九州飛行機は山林や下請工場に疎開。昭和15年、小倉陸軍造兵廠は春日村大字春日字駿河の春日原競馬場を買収して春日製造所開設、後に大分県日田市に疎開。女子動労挺身隊と学徒動労動員など	241～246	
	九州飛行機株式会社について。工場は雑限工場など。昭和20年4月、工場疎開、疎開先は春日村内や大野村の半地下式工場、筑紫郡原田、山門郡瀬高町など。生産機数・機種など。九州飛行機への動労動員について、各種図面・写真あり	247～263	
	九州兵器株式会社について。工場は九州飛行機の北側。魚雷などの水中兵器を製造。後に一部の工場は糟屋郡篠栗町に疎開。動労動員について。「九州兵器工場見取り図および製造した兵器」「動労動員学校名」あり	264～266	
	九州飛行機株式会社の生産と管理・監督機構。昭和18年には、大刀洗製作所を別会社に。「九州軍需管理部位置図」	267～268	
	小倉陸軍造兵廠春日製作所の沿革。昭和16年着工、翌年製造開始。小銃などを製作。昭和20年2月より、大分県日田市への移転に着手。8月には工場に歩兵第117連隊が移駐。動労動員について。製作した兵器など各種図面・写真あり	269～278	
	九州飛行機など軍需工場への動労動員・女子挺身隊の資料提供者等	278～279	
	西部管区司令部と第16方面軍の発足。第57師団の第16方面軍転用について。「春日村および付近に配備になった部隊位置」図、「博多湾岸に配備された師団位置図」、「博多湾岸に配備された師団」表あり	280～284	
	歩兵第117連隊・野砲兵第57連隊について。編成から渡満、内地帰還など戦役と、福岡県への布陣。各隊の配備や洞窟壕築造、軍民の交流について、野砲兵第57連隊等の資料提供者等	284～310	
	独立照空第21大隊について。昭和19年11月、芦屋の高射砲第135連隊の照空大隊は、照空第21大隊に改編され、春日村小倉に配置された。「大隊の編成および布陣地」「兵舎・陣地・医務室の位置」「協力者・資料提供者一覧表」等あり	311～313	
	海軍春日原航空特別攻撃隊基地は一般には公表されず、秘匿航空基地「牧場」として佐世保鎮守府内に11か所新設された基地のひとつ。練習機の特攻基地に。未完成のまま終戦か。「特別基地配置図」「協力者・資料提供者一覧表」等あり	313～315	
	海軍佐世保警備隊福岡派遣隊について。海軍の民間軍需工場を警備。本部は九州飛行機雑限工場。武装は機銃	315～316	
	春日村からの従軍者について。兵役関連法令の概要	317～322	
	春日村の戦（病）没者公葬について。春日村の「戦（病）没者芳名」一覧表、春日村の従軍「生還者氏名」一覧表	322～338	
	歩兵第24連隊の戦歴。明治の編成からヤップ島・台湾での終戦まで	339～343	
	歩兵第72連隊第2大隊の戦歴。昭和13年の編成から第23師団隷下として渡満、ノモンハン事件での壊滅、終戦まで	343～349	
	歩兵第124連隊の戦歴。「広東攻略図」、「ガダルカナル島全般図」、「コヒマ付近図」、「歩兵第124聯隊戦死者数」あり	349～359	
	歩兵第226連隊の戦歴。昭和14年の編成から大陸上陸、大陸打通作戦、仏印、マレー半島移駐まで	359～365	
	歩兵第113連隊の戦歴。昭和15年の編成から、ビルマ、中国雲南での戦い。復員の際の博多駅での出迎えの情景	365～374	
	独立歩兵第227大隊の戦歴。昭和18年の編成から、中国山西省での戦い、終戦まで	374～377	
	歩兵第187連隊の戦歴。昭和19年の編成から志布志湾沿岸の防衛、終戦まで	377～380	
	歩兵第453連隊・歩兵第517連隊の戦歴。昭和20年の編成から宮崎海岸の防衛、終戦まで	380～383	
	歩兵第359連隊の戦歴。昭和20年の編成から前原地区の防衛。前記以外の福岡編成の歩兵連隊・大隊	383～384	
春日市の戦没者追悼式は、昭和21年4月に春日国民学校講堂で青年団が行った慰霊祭が最初。昭和30年8月には「忠霊塔建設顕彰会」が結成され、岡本の熊野神社隣地に忠霊塔を建立。その他慰霊祭等の記述、慰霊塔等の写真	713～720		
【年表】歩兵第24連隊、渡辺鉄工所、大刀洗北飛行場、小倉陸軍造幣廠春日製造所、九州飛行機、九州兵器	876～886		
【資料】春日区の白水信吉の日露戦争従軍日記。明治37年9月7日から明治38年12月まで	320～379		
【資料】「昭和二十年女子学徒の日記」、「薬上高女、学徒動員の記録」、「花も蕾も」（松根油の記述あり）、「挺身隊について記憶していること」記載	619～658		
春日町郷土誌	春日村から春日町までの沿革・変遷について。渡辺鉄工所（航空・兵器工場）、陸軍小倉兵器廠の記述あり	1～3	

自治体名	自治体史名	内容	頁
大野城市	大野城市史 下巻 近代・現代編	株式会社福岡精工所の軍需工業化、中央兵器株式会社について。昭和18年9月に日本自動車株式会社は海軍管理工場の指定を受け、工場資本は大倉に移って「中央兵器株式会社」に改称し、航空用魚形水雷を製造する軍需工場へ	266～271
		九州飛行機雑限工場の大野城疎開工場について。昭和20年、工場は乙金唐山を買収、地下工場壕を建設して疎開	272～274
		大野村の徴兵状況などについて。「大野城の徴兵検査実施状況一覧表」「番号割符の表」「免役証書」あり	513～530
		大野村などの軍事召集について。「大野村の日支事変から太平洋戦争までの召集令状接受一覧」などあり	530～542
		大野村から出征して戦死された英霊数について。昭和27年5月、大野町瓦田字井尻に「戦没者哀頌碑」(忠魂碑)が建立された。大野村の村葬などについて。戦役軍人家族会や村葬の開催場所の変遷について。昭和15年に忠魂碑を建立。昭和16年、大野村尋常高等小学校西北側に戦没者の英霊堂として、流芳館建設(昭和20年に小学校図書館、後に解体)	547～561
		日露戦争時における福岡県・大野村の状況、出征者の死亡数、農業、経済状況など。出征者の凱旋歓迎、個別訪問で感謝状など。大野村では明治39年、大野村尚武会主催で招魂祭が行われた。その他招魂祭の記述あり	571～587
		満州事変による各部隊の出動、大野村の動員召集、大野村処女会の実弾射撃。国防映画、爆弾三勇士の記事など	605～612
		大野村での大政翼賛会、国民生活の新体制、隣組など。太平洋戦争、衣料切符制など記述あり	623～631
		西鉄筑紫駅襲撃事件、福岡市空襲、大野村への疎開について。敗戦時における大野村の状況	637～643
		本土防衛「決号」作戦と部隊の配置。歩兵第117連隊・野砲兵第57連隊の概要や配置場所。「歩兵第117連隊の大野村周辺に配備状況」表、「陣地建物配置図」あり。陣地構築のための資材提供、村民出役、空襲に伴う村民避難計画について	656～668
宗像市	宗像市史 通史編 第三巻 近現代	福岡県の徴兵令について。徴兵検査、徴兵反対一揆、国民軍人表などの記述あり	17～20
		雑誌「宗像」の記事「露艦に荒らされた玄海灘」について。沖ノ島付近を通過していた陸軍運送船がロシア艦隊に撃沈	168
		「日露戦争で戦死した陸軍軍人の墓(河東地区で)」写真あり	170
		戦時下における福岡県・宗像の教育状況についての記述あり。宗像における学徒動員について	353～361
	宗像市史 通史編 第四巻 美術と建築・民族	昭和14年5月、警防団が結成。宗像における学徒動員、金属強制供出について。昭和20年4月から第145師団が若松から福岡に至る海岸防衛のため、赤間厳蔵寺の正法寺に師団司令部を置き、近くの高樹山に大規模な地下壕を掘った	372～373
		【年表】日中戦争の宗像郡出身戦没者114柱の合同慰霊祭(昭和15年11月28日)	616
	宗像市史 史料編 第四巻 近現代	宗像郡津屋崎町出身画家、熊野礼夫の戦時中の活動について。「兵器整備(焼失)」絵画あり	178～180
		戦没者の葬儀について。「英霊の墓碑(赤間)」「戦没者慰霊塔(武丸)」写真。久原に英霊供養塔。田熊、光岡に英霊墓碑	450～454
		【資料】陸海軍徴兵現役に志願する宗像郡本籍者を慰勞する為の規定条文	499～502
		【資料】征討軍及び各旅団輻重部より召集の軍夫志願者についての概則(軍夫召集概則)	831～833
大島村史	日露戦争、日本海海戦の経緯。第12師団と第18師団の沿革。下関要塞設置について。明治33年、下関要塞設置完了。明治37年4月、佐世保鎮守府は沖ノ島の一ノ獄に灯竿、望楼を建設。明治39年4月、沖ノ島灯台設置申請を宗像神社承諾	353～356	
	小倉第12師団、久留米第18師団の戦歴、陸海軍の区画について。大島での防空演習、北部九州の空襲被害について	527～532	
	昭和15年3月に大島村沖ノ島砲台、9月には角島砲台が竣工。下関要塞の各砲台配備一覧。「大島砲台跡」、「板木砲台跡」写真あり。第145師団による連合軍本土上陸防衛作戦、若松から宗像郡福岡付近までの沿岸防衛を担当	532～537	
	大島に来島した将官・将校。昭和14年10月、沖ノ島砲台に防空施設構築、昭和17年7月、沖ノ島海軍防衛施設完了	538～541	
	大島村出征者の「戦死公報」「戦死者遺留品目録」写真。戦死病没した大島出身者(戦死場所記載)の一覧	546～554	
	「沖ノ島回顧録」による沖ノ島の戦況、野砲兵第12連隊及び山砲兵第18連隊の連隊史「砲声」による各地戦場の記述あり	555～557	
玄海町誌	西南戦争から大東亜戦争までの戦没者一覧あり	392～408	
	高射砲実弾射撃場及び兵舎について。旧岬村鐘崎の深浜、海岸一帯が高射砲の実弾射撃場になった	527	
ふるき三郎丸のすがた	宗像郡尚武会について。三郎丸尚武会の日露戦争戦捷記念碑建立、日露戦争から太平洋戦争までの戦死者について。尾降神社拝殿内の壁面にあるシベリア出征記念の板書き、日露戦役戦捷記念の石碑(石の砲弾)について。写真あり	195～199	
	【年表】日露戦争出征者15人、三郎丸尚武会、尾降神社境内に日露戦争戦捷記念碑建立、シベリア出兵8人出征、日中戦争2人の戦没者、ビルマ・西南ニューギニアで2人の戦没者、マニラ・ビルマ・ニューギニア・内地で4人の戦没者	204～205	
太宰府市	太宰府市史 通史編Ⅲ	福岡県の徴兵統計、徴兵忌避、徴兵署移転。明治18年、徴兵署は県庁から太宰府神社に移転。明治27年、太宰府町で第6師団第一充員・後備分の召集実施。明治28年、太宰府天満宮本殿の裏に「日清戦役碑」建立、刻まれた戦死者の一覧	338～343
		太宰府町と水城村での日清戦争凱旋祝賀会や軍人慰勞会について。軍用金・軍需品の献納について	344～345
		日露戦争の凱旋歓迎行事、国債募集、献金・献品について。明治40年、日露戦争の戦利品が龍門神社、太宰府神社に下賜。明治41年には陸軍省から太宰府神社に重砲奉納。明治43年、水城村尚武会によって「明治三十七年戦役記念碑」が現在の学院中学校裏の軍人墓地に建立。「旅順大勝利之図」(戦争絵馬)は龍門神社北谷遺拝所に奉納	351～358
		第一次世界大戦と太宰府。大正7年、太宰府町では充員召集で45人が応召、馬匹も徴発。大正3年11月、青島陥落祝賀会、奉告祭。大正8年には平和克服祝賀会、出征軍人凱旋祝賀歓迎会、戦病死者の慰霊祭などを行った。大正10年、太宰府天満宮菖蒲池畔に第一次世界大戦・シベリア出兵の記念碑建立。戦争絵馬「シベリア出征図」(大佐野地祿神社)	359～361
		太宰府町・水城村の動員数、戦死者、留守家族などの統計について。水城村、太宰府町の戦没者葬儀について	553～562
	太宰府市史 近現代資料編	【資料】徴兵令十八～四十歳の者書上雛形通り提出のこと	12
		【資料】佐賀県賊魁搜索捕縛の上届出のこと	47
		【資料】海軍水火夫徴募に付募集希望者取調期限内申出のこと	70
		【資料】徴兵使官員巡回日割のこと	94～95
		【資料】海軍水火夫、工兵志願者取調期限内申出のこと	106
【資料】徴兵取調期限内提出のこと、官有地調及徴兵令等に関する相談のため出頭のこと		125	
【資料】明治七年徴兵入営者名元取調期限内提出のこと		130～131	
	【資料】徴兵当年廻の者呼返のこと	145	
太宰府市史 年表編	【年表】太宰府神社(日清戦争での勝利・国威隆盛祈願)、日清戦争記念碑(太宰府神社)	366～367	
	【年表】戦捷祈願祭(太宰府神社)、日露戦争戦利品龍門神社へ下賜、日露戦争戦利品太宰府神社に奉納・祭典執行	374～377	
	【年表】筑紫郡出征軍人戦病死者慰霊祭(筑紫会・筑紫郡神職会)	391	
	【年表】武運長久祈願祭(太宰府神社)	411	
	【年表】連合艦隊、第16方面軍(軍指揮所は二日市山家の洞窟内)、福岡市大空襲	417～418	

自治体名	自治体史名	内容	頁
古賀市	古賀町誌	日清・日露戦争前後の学校教育について。「日露戦争の思い出「水上卯助さんのこと」」記載あり	452～454
		古賀・小野・青柳国民学校の発足。勤労奉仕、食糧増産について、小野国民学校教師の証言など。昭和20年、古賀町内の各国民学校へ軍隊が駐屯。赤城兵団の師団司令部、第1・第3大隊、噴射推進部隊（ロケット）が国民学校に	456～460
		明治・大正・昭和（終戦前後）までの古賀町地域の社会・政治・経済・軍事関連の変遷について。「九州独立政府」構想	803～810
福津市	福岡町史 明治編	西南の役の発生から鎮圧までの記述あり	242～297
	福岡町史 通史編	上西郷に建設された弾薬庫（陸軍航空隊大刀洗航空補給廠支所）の建設経緯等。福岡町の馬事訓練場について	691～695
	福岡町史 資料編 一 中世・近世 近代・現代	【資料】「弾薬庫始末記」の解説。上西郷の弾薬庫運搬のため国鉄福岡まで引込線が引かれた	775
		【資料】上田年見氏資料「弾薬庫始末記」（上西郷村役場職員手記）。「上西郷の弾薬庫跡」写真。弾薬庫の建設経緯と閉鎖後の払い下げ。正式名称「陸軍航空隊北九州弾薬庫福岡出張所」、鉄道引込線（福岡駅から弾薬庫補給廠入口まで）	779～782
	福岡町史 資料編 二 美術・建築・民俗	【資料】昭和十五年度の部落集会協議録（以下同）。「在郷軍人ノ補助金」、「戦時貯金」ほか記載	400～401
		【資料】昭和十六年度。「武運長久祈願」、「在郷軍人軍支会青年会費」、「南町戦死者英霊」ほか記載	406～412
		【資料】昭和十八年度。「家庭防空演習実施」「忠霊塔ノ件」「大刀洗少年航空兵宿舎」ほか記載	428～442
		【資料】昭和十九年度。「宗像号飛行機献納割当」「宮地嶽神社に於武運長久の祈願」「軍事援護強化期間」ほか記載	443～454
	福岡町史 資料編 四 宮座関係資料	【資料】明治四十一年九月十八日。帝国軍艦松島号沈没（30日に沈没）の記述あり	40～41
		【資料】大正参年拾月五日。第一次大戦期における日本のドイツへの参戦、戦勝祈願祭典など。陸軍大演習（大正5年11月3日）。シベリア出兵について。日吉神社にて出征軍人の武運長久祈願祭	48～50
		【資料】明治廿八年旧九月十七日。日清戦争について。明治廿八年申九月十七日。戦死者を弔う忠魂記念碑について	109～111
		【資料】明治三十三年九月十八日。義和団の乱について。明治三十三年旧九月十八日。陸軍大演習についての記述あり	117～119
		【資料】大正参年十二月二日。ドイツへの参戦についての記述あり	127
		【資料】大正五年十一月三日。陸軍大演習敢行について。大正七年十二月貳拾六日。シベリア出兵についての記述あり	129～130
		【資料】明治三十三年九月十六日。義和団の乱についての記述あり	193～194
		【資料】明治三十七年旧九月十五・六日。日露戦争開戦について、明治三十八年九月十六日。日本海会戦について	222～223
		【資料】明治三十九年九月十六日。日露戦争出征者凱旋祝賀会（上西郷尋常高等小学校）についての記述あり	225～226
		【資料】昭和五年十月十六日。日清・日露戦争戦死者招魂祭についての記述あり	231
		【資料】明治三十七年八月十二日。日露戦争に伴う予備後備補充員募集の記述あり	257
		【資料】大正七年九月二十二日。シベリア出兵についての記述あり	261
		【資料】昭和七年三月十八日。満州事変、上海事変などの記述あり。	267
		【資料】昭和五年十月二十五日。日清・日露戦争出征戦死者招魂祭（上西郷小学校庭）の記述。北九州防空演習	389～390
	【資料】昭和拾七年拾月拾四日。太平洋戦争開始、第一次戦捷祝賀式についての記述あり	397	
	【資料】明治三十八年九月四日。日露戦争講和条約についての記述あり	424～425	
	津屋崎町史 通史編	西南戦争と津屋崎での軍夫志願者についての記述あり。「軍夫百人長願」（資料）あり	687～691
		宗像郷友会「郷友雑誌」から見た日清戦争。宗像郡の戦死・戦病死者17人は戦後、東郷村の宗像高等学校前に鎮魂碑。ロシア艦隊に攻撃された陸軍輸送船「常陸丸」「和泉丸」「佐渡丸」の遭難と救助について。「常陸丸のさし絵」あり	735～741
		宗像における日本海海戦の様子。津屋崎町渡半島の大峰山頂に陸軍の哨戒場（後に東郷神社）。ロシア装甲海防艦「アブラキシン」捕獲、後に「沖ノ島丸」として日本艦隊籍、昭和には展示艦として津屋崎港に。東郷高等学校に彰忠碑	741～746
日本海海戦記念保存会・津屋崎町による東郷公園建設、沖ノ島艦払い下げ、日本海海戦記念碑建立など、写真あり		831～835	
真光寺北側一帯は九州国防訓練場で、戦前は陸軍の秘密飛行場。福岡上西郷には陸軍航空補給廠（上西郷弾薬庫）九州国防訓練場の設置経緯、戦後の跡地利用（津屋崎中学校など）について		920～922	
うきは市	浮羽町史 上巻	徴兵令施行、福岡県での徴兵令反対一揆、徴兵忌避などの記述あり。「徴兵帳簿」「徴兵のがれの心得」写真あり	809～812
		佐賀の乱・西南の役などの土族反乱について。「西南の役戦没者慰霊塔（田原坂）」写真あり	819～823
		浮羽での徴兵召集、出征軍人家族救助及び慰問その他優待に関する規定など。明治42年、日露戦役記念碑が建立	861～866
		盧溝橋事件、南京陥落、徐州攻略作戦、ノモンハン事件などの概要、浮羽からの動員召集、山春村の事例など	984～988
		翼賛会浮羽支部の活動、伏敵挺身隊の結成式などの記述あり。「翼賛会事例」「伏敵挺身隊員辞令」写真あり	993～997
		大石地区東高見出身、盛岡市北部45部隊に配属された石井不二郎の陣中日記「ルソン戦記」について。写真あり	1009～1014
		太平洋戦争の終結までの概要、北部九州の空襲について。「戦争の終結を伝える新聞」写真、「原爆と空襲」表など	1014～1017
浮羽町史 下巻	福岡県の戦役者などの記述あり。「戦役者地域別数」表、「ビルマ地区戦役者市郡別数」表あり	1019～1020	
	日清・日露・太平洋戦争の概要、浮羽町の戦死者について。浮羽町では毎年9月において慰霊祭を開催	11～13	
	浮羽町の戦役者記録一覧あり	13～30	
吉井町誌 第二巻	石井不二郎母、石井ムツヨと「ルソン戦記」について。「ルソン日記」「在りし日の石井不二郎」「休憩のひとつとき」写真あり	761～764	
宮若市	吉井町誌 第二巻	戦時下における教育状況、勤労働員などの記述あり	153～156
		西南戦争、福岡県の軍夫募集、軍夫の死傷者について。第五大区（鞍手郡）の軍夫募集について。写真あり	68～71
		徴兵令の概要、福岡県の徴兵令について、「徴兵異動届」、「徴兵現役兵報労規約」あり。	235～238
		日清・日露戦争の動員、援護団体、凱旋軍人歓迎、戦病死者の合同葬儀について。陸軍通訳山崎羔三郎の略歴・葬儀、軍用干草供給（日吉村の事例）、戦時国債募集について。各種写真あり	238～244
		米の供出・配給、どんぐり・野生芋麻採集、切符制度など。「米配給制の消費基準」「衣料品点数」表などあり	276～282
		中村での英霊出迎、村葬、若宮町にある慰霊塔・忠霊塔の記述あり。「自宅までの行進団」、「奉迎所整列所」、「忠霊塔・顕彰塔」あり（5ヶ所記載）。戦没者慰霊碑（昭和52年5月、黒丸）	283～287
		学校教育の戦時、青年訓練所の設置、勤労奉仕など。「木炭運びの勤労奉仕」写真。奉安殿の設置・撤去など。「中尋常小学校の奉安殿」写真	347～357
		学徒動員、集団疎開、終戦の状況など	361～364
		英霊、出迎え、村葬についての記述あり。「英霊の村葬（山口小学校にて昭和7年3月26日 福丸）」写真あり	916～917

自治体名	自治体史名	内容	頁
嘉麻市	嘉穂郡誌	帝国在郷軍人会嘉穂連合会。「現役将校及相当官」「在郷軍人将校」「軍人戦病死者」「嘉穂郡壮丁甲乙種合格人員」表などあり	720～729
	嘉穂町誌	大隈町の国道322号線の小丘に慰霊の森、大隈町出身の戦没者（611柱）を祀った忠魂碑が建っている。毎年4月に慰霊祭	968
	山田町誌	満州事変から終戦までの山田地域における中小工商业者の状況についての記述あり	228～229
	山田市誌	【年表】海軍八尺層露頭部を露天堀（古河下山田・二松）、席田飛行場	503～504
	稲築町誌	国家総動員法発布後、稲築では、隣組制度が実施され、昭和14年には稲築村警防団が結成された	272
		満州事変から太平洋戦争までの稲築町における生活実態。岩崎小学校（稲築中央国民学校）には「暁部隊」の衛生隊駐屯。稲築高等学校の校舎や農家の倉庫には軍の糧秣が貯蔵。稲築第一国民学校の学校日誌からみる空襲・終戦の状況	274～280
		太平洋戦争までの戦没者の遺族会	376
	稲築町史 上巻	鎮台の設置、徴兵令と兵役について。鎮台から師団への改編と連隊や旅団の設置。一兵士の履歴書。西南戦争と人馬の徴集	271～275
		日清・日露戦争の概要、混成第12旅団の出兵、山野村からのわらじ献納など。稲築公園にある忠魂碑に戦死者1人を祀る。日露戦争に出征した稲築村出身者、嘉穂郡各村から旅順に巡拝慰霊した記録など。稲築公園の忠魂碑に戦死者名あり	276～279
		昭和の戦争と戦時下の町政。昭和15年11月、稲築公園に忠魂碑建立。日清戦争から太平洋戦争までの戦没者を刻む。軍需景気による石炭産業の活況と稲築村の発展。銃後活動、配給制、物資統制について、戦時下の住民生活や勤労動員など	294～304
稲築町史 下巻	勤労奉仕、戦勝祈願などの記述あり。昭和19年4月～10月の稲築第二国民学校の記録。防空壕・学校日誌の写真あり	244～248	
確井町誌	満州事変から太平洋戦争までの記述あり。大政翼賛会や学徒出陣。写真多数。終戦時の記述	189～196	
朝倉市	甘木市史 下巻	秋月町からみる秋月の乱及び西南戦争について。「秋月の乱参加状況」表あり。その他、写真・表あり	29～39
		甘木における徴兵について。日清戦争、日露戦争の概要及び朝倉郡の戦死者など。「日清戦争記念絵馬」写真などあり	90～98
		満州事変による甘木朝倉郷土部隊の動員、満州国成立による甘木朝倉入植者、日華事変による動員など。写真あり	251～257
		戦時下の甘木朝倉。金属回収・米の供出、銃後の耐乏生活などについて	257～267
		太平洋戦争の概要、戦局の推移など。「太平洋戦争戦死者調」表などあり。	267～270
	朝倉町史	大刀洗陸軍飛行場の設立経緯、概要、空襲など。「大刀洗飛行場」「高射砲隊正門」「高射砲隊監視あと」などの写真あり	270～278
		甘木における戦時体制下の教育。銃後活動、勤労動員、学徒兵などについて	535～549
		【年表】大刀洗航空隊、大刀洗飛行場、航空第四大隊、福岡二四連隊、久留米独立山砲三連隊、甘木防空演習	839～841
		秋月の乱の概要、西南戦争と朝倉からの政府軍参加者などについて。「田原坂」写真あり	398～400
		日清戦争からシベリア出兵の概要と朝倉地方からの従軍者の状況など。「戦争絵馬」「戦役記念碑」。明治36年、工兵隊の架橋演習場として、筑後川河畔に兵舎設立。小倉工兵第12大隊、久留米工兵第18大隊の演習に。昭和12年解体	420～425
杷木町史	満州事変での大刀洗飛行場第4連隊出兵、上海事変や日華事変の概要。甘木朝倉地方の召集、戦死者などについて	529～533	
	戦時下の朝倉。金属回収・米の供出、隣組活動など。「終戦で供出後帰って来た梵鐘（万徳寺）」「隣組の活動」写真あり	534～537	
	太平洋戦争の推移、大刀洗飛行場と空襲、終戦まで。「昭和12年以降地区別戦死者数」表などあり。	538～543	
	西南戦争から太平洋戦争までの甘木朝倉出身戦死者名簿（地区別）	544～551	
	国民学校の成立、宮野国民学校の空襲状況、勤労奉仕活動など。	753～755	
【年表】上寺工兵隊架橋演習場、航空第4大隊大刀洗兵舎、立石高射砲隊	915～917		
村誌ひなしろ	佐賀の乱、秋月の乱、西南の役の概要と杷木地域。日本の対外戦争について。杷木町地域出身戦死者一覧	129～135	
	戦時下の教育。出征軍人の見送り、戦死者の遺骨迎え、国民学校での錬成、杷木地域の空襲。勤労作業などについて	312～316	
	太平洋戦争時における召集・徴用、食糧供出、金属回収など。隣組・門内制度、防空演習。敗戦の状況について	347～359	
	戦争の概要と戦局の推移。大刀洗飛行場の設置、飛行第4連隊・飛行学校など、大刀洗空襲について。「大刀洗飛行場」等写真あり。福岡市、大牟田市、久留米市への空襲や原爆投下、終戦について	431～436	
	戦没者一覧。年度別・年齢別戦死者数のグラフ、「昭和12年以降地区別戦死者数」	437～445	
【年表】朝倉郡内戦争従事者、日露戦争越城戦死者、外征記念碑（美奈宜神社）	706～708		
【資料】戦争記念碑 明治四十年九月廿一日 戦利兵器奉納ノ記	800～801		
みやま市	郷土史 馬田	大刀洗飛行場の用地買収。大刀洗飛行場の開設、航空第4大隊の移設、大刀洗飛行場第4連隊の出兵など。各種写真あり	205～212
		満州事変、上海事変の概要、上海事変における第12師団の出兵、馬田村出身戦死者・村葬などについての記述あり	213～214
		日中戦争勃発。第二次上海事変で安川出身者が戦死。徐州攻略作戦、武漢地区攻略作戦など中国戦線について	217～222
		戦時下の郷土。戦時下の教育や兵役について。戦時下の国民生活。朝倉中学が大刀洗飛行場でグライダー練習	222～241
		大刀洗飛行場の概要と各部隊、大刀洗製作所や大刀洗航空支隊、飛行学校等の概要について。「昭和18年当時大刀洗飛行場とその周辺」図あり。	241～244
		戦時期の農家のくらし	244～247
		大戦の経緯。当時の国民生活。学徒動員の概要、朝倉郡地域の学徒動員の状況、太平洋戦争末期の戦況など	248～268
		防空と空襲について。昭和20年3月27日の大刀洗空襲と被害状況、当時の証言など。「大刀洗陸軍飛行学校鳥瞰図」など	268～289
		日中戦争・太平洋戦争戦没者一覧表	296～303
		特攻基地大刀洗飛行場の寄舎として利用された馬田国民学校の爆撃被害とその後について	325～326
米軍の空襲によって馬田村各所に投下された時限爆弾の穴の埋設についての記述あり	335		
占領期の戦没者遺族に関する指令、馬田村の遺族会について。忠魂碑（大正13年建立、東田西の甘木堤防）について	524～528		
忠勇義烈の碑について。熊野神社境内に明治39年建立。忠霊の碑について。上馬田の北端に納骨堂と並列して建立	792～793		
忠魂碑について。小石原川の東田橋下流の左岸堤防上に大正13年建立。昭和34年に2本の円筒柱に戦没者の氏名を刻む。刻まれた馬田校区戦没者一覧表と馬田校区戦没者数。また入営軍人芳名の碑、日露戦争記念の碑の概要と写真あり	801～804		
【年表】忠魂碑建立（東田）、秩父宮殿下大刀洗飛行隊入隊、高射砲隊、忠霊塔、大刀洗陸軍飛行学校、大刀洗飛行場猛爆	819～820		
瀬高町誌	日露戦争に出征して戦死した瀬高町出身者一覧あり	465～466	
高田町誌	高田村の遺家族援護、忠霊塔建設、忠霊塔に合祀した英霊数について。高田村の未帰還者数、留守家族の援護など	447～449	
みやま市史 資料編 下巻	【資料】昭和三年度山川村事務報告、昭和四年度山川村事務報告。昭和十七年度山川村事務報告。兵事関連記載あり	449～468	

自治体名	自治体史名	内容	頁
糸島市	前原町誌 全	佐賀の乱、神風連の乱などの記述あり。西南戦争の勃発から鎮圧までの記述あり	188
		日露戦争の概要。前原町出征犠牲者、日本海海戦、常陸丸の遭難について。深江片山の鼻に監視所	190～193
		盧溝橋事件から日中戦争、太平洋戦争開始前までの変遷。前原町出征戦死者などの記載あり	197
		防空団の設置。警防団、在郷軍人会。前原町出身戦没者一覧、明治39年から昭和14年までの勲章受領者一覧あり	218～227
	前原町誌	日中戦争、勤労奉仕、満州開拓移民など。太平洋戦争の勃発から終戦まで、戦時下の生活について。篠原には軍需工場、小富士と元岡には飛行場が作られ航空隊が設けられ、糸島街道を軍用車が行きかう。漫画説明あり。写真多数あり	66～71
		深江、一貫山村からの日清戦争出征者、二丈町地域の戦死・戦病者一覧あり	148～149
	二丈町誌	二丈町各校区からの出征者、戦没者、勲章受領者、凱旋祝いなどについての記述あり	149～153
		シベリア出兵の概要、二丈町地域の出征戦死者、金鶏勲章受領者など	153～155
		太平洋戦争前の出来事、戦時中の生活（防空訓練、婦人会の竹槍訓練、奉仕活動、学徒動員）、興亜奉公日など。太平洋戦争末期における二丈町地域の防衛体制。深江海岸の松原に偵察機が格納。鹿家海岸には監視隊の配置	163～168
	二丈町誌 平成版	盆踊りの歌詞「忠霊塔」掲載あり	523～527
		日露戦後の大陸進出。戦時体制強化、太平洋戦争の推移。昭和20年6月、福岡市空襲では前原市の雷山地区も焼夷弾の直撃	200～202
		第634海軍航空隊空母基地の設立経緯、松末基地（二丈町）、船越・周辺基地（志摩町）、「空母基地鎮魂記念」建碑について。船越の司令部跡に平成15年、空母基地記念碑建立。「船越海岸より望む松末基地」写真ほかあり	246～247
	二丈 その魅力と歴史	第2河和海軍航空隊深江基地の概要、雷山などの焼夷弾被害。海軍航空隊の基地は、船越・松末基地と隣合せの深江海岸にも。寺山の陸軍兵器補給所、小富士の海軍航空基地、元岡・横浜（今津）など、糸島半島には数カ所の基地	248
		「松末の水上爆撃機「瑞雲」などの秘匿格納所」写真、「第634海軍航空隊空母基地」写真あり。「奉公袋と中身の軍隊手帳、大東亜戦争海軍作戦写真記録」写真、「明治37年陸軍省辞令」写真、「出征兵士に贈る寄せ書き国旗」あり	24～25
	志摩町史	決戦非常措置要綱の決定。食糧増産、学徒出陣、勤労奉仕など戦争末期における小中学校生徒の奉仕活動について	478～481
		徴兵制度について。西南戦争の背景、福岡の状況、物価上昇・インフレの発生など	843～845
		日清戦争から大東亜戦争までの概説。日清戦争における志摩町地域、可也村共同会の「ワラジ」1万足献納、日清戦争従軍戦死者4人の記載。日露戦争に従軍したト部平民陸軍歩兵軍曹（野北出身）、志摩町出身戦死者（村別）について	849～853
		第一次世界大戦の日本参戦、青島・山東省の占領、シベリア出兵の概要、志摩町出身の戦死者についての記述あり	853～854
		満州事変以来の戦争の概要。志摩町出身戦没者一覧（村別）あり。「可也忠霊塔」写真ほか写真多数あり	857～869
		小富士海軍航空隊基地の設置概要。昭和18年春、小富士の農地が航空隊用地として買収、海軍航空隊基地建設	869～871
		寺山補給廠について。昭和初期より海岸に陸軍工兵隊船舶部の演習場、昭和16年には寺山に陸軍燃料補給廠設置	871～872
		海軍特別攻撃隊船越基地について。昭和20年頃、小富士村内船越湾はその中間基地として海軍の特別攻撃隊が配置され菊水隊103部隊等の特攻隊員が次々と移駐、特攻隊員は香月・久家・船越などの民家に分宿し、待機していた	872～873
		徴兵令と兵役の義務、怡土郡での血税一揆について。鎮台と歩兵第14連隊・第24連隊、第12師団の設置	786～789
		佐賀の乱、秋月の乱、西南戦争、福岡の変の背景、経過、福岡県から出兵した士族中からの戦死者などの記述あり	798～802
	新修志摩町史 上巻	日清戦争の概要、可也村「事務報告書」から見る兵事活動（召集動員や草鞋1万足献納）、怡土・志摩地域戦死者など。日露戦争の概要、可也村役場の兵事活動（充員補充と馬匹徴発など）、糸島郡における戦死者一覧など	844～850
		第一次世界大戦とシベリア出兵。シベリア出兵の戦死者の葬儀についての記述あり	859～860
		日中戦争下の生活。国民精神総動員運動、物資統制、勤労奉仕、翼賛体制など	926～932
太平洋戦争の推移と小富士海軍航空隊。昭和18年、航空隊用地のため可也村大石の土地買収、用地造成・兵舎建設		932～936	
海軍飛行予科練習制度創設の沿革、「若鷲の歌」、映画「決戦の天空へ」など。「若鷲の歌」楽譜・歌詞あり。小富士航空隊における甲飛予科練生の沿革。小富士空甲飛第14期・16期生の回想録。小富士航空隊弾薬庫の爆発事故		936～942	
久留米陸軍工兵隊船舶部演習場（小富士村久家地内寺山地区の加布里湾に面した小浜）、久留米船舶工兵隊の部隊変遷と戦歴について。独立工兵連隊として運用し、太平洋戦争開戦後に船舶工兵連隊に。糸島半島の海岸が訓練場に		946～948	
竹ノ越の防空監視哨について。昭和13年頃に建設。防空監視の姿		948～950	
小倉陸軍兵器補給廠小富士常駐班（小富士集積所、寺山補給廠）の設置経緯、施設概要など。昭和16年頃に完成、戦車用モービルやガソリンを貯蔵し、戦線への補給基地に。「小浜の石油荷揚げ用栈橋のコンクリート基礎」など写真あり		950～952	
第634海軍航空隊、空母基地（当初は小富士基地）の設立から部隊・施設概要、周辺施設などについて。第634海軍航空隊は水上機部隊で、昭和20年に後方基地として空母基地を使用、訓練中に終戦。関係者の証言。写真各種あり		952～963	
第312師団の糸島配置について。昭和20年7月、久留米で編成。糸島半島に配備され、前原地区隊など4地区隊を配置		963～967	
コラム、空母「飛龍」と真珠湾攻撃の思いで	968～969		
新修志摩町史 下巻	糸島郡の戦災援護活動、郷土部隊（第12師団、第18師団）の戦地配属などについて。戦死者公葬・慰霊祭など	32～34	
	【年表】歩兵第24連隊、第12師団、福岡名島飛行場、肉弾三勇士、第12師団工兵第18大隊演習場、寺山補給廠、雁ノ巣飛行場、西部防衛司令部防空演習、竹ノ越防空監視哨、西部軍司令部、鹿児島海軍航空隊小富士分遣隊、福岡海軍航空隊、小富士海軍航空隊、空母基地、第634海軍航空隊、第312師団、前原地区隊、席田飛行場	750～757	
那珂川市	郷土誌 那珂川	中寺の池ノ谷に建立された忠魂碑についての記述あり。昭和11年3月4日、佐伯海軍航空隊が大刀洗に向けて飛行中、天候不良により墜落し、搭乗3人が殉死。墜落現場に忠魂碑を建立。「忠魂碑」写真あり	154～155
宇美町	宇美町誌	瀬戸地域の民家への爆撃（昭和20年6月19日）について	362
		昭和27年、宇美町遺族会により神苑（公園山）に慰霊塔建設、横には「植樹記念碑」なども建設されて英霊を慰めている	542～543
篠栗町	篠栗町誌	兵事・事変の年表	545～549
		明治初期に発生した一揆、士族反乱（神風連の乱、西南戦争）などの簡単な記述あり	251～252
志免町	志免町誌（昭和版）	唐津の大瀬炭坑から須恵村新原炭坑へと海軍炭鉱の選定と予備炭山指定についての記述あり	262～263
		【年表】須恵村新原炭坑、日本国海軍炭鉱、海軍予備炭坑	290
		応召軍人者の家族・遺家族の援護活動についての記述あり。志免町の忠霊塔に合祀されている英霊一覧	85～96
		志免町「忠霊塔」写真。昭和27年10月26日に除幕式を開催。志免町大字志免字浦園に建立。昭和42年に小公園が建設	224
【年表】海軍採炭所	244		
【年表】志免町忠霊塔建設用地（昭和18年10月、志免在郷軍人会より寄贈）	251		

自治体名	自治体史名	内容	頁
志免町	志免町誌（平成版）	徴兵、徴兵検査について。対外戦争の概略、関連新聞記事。志免婦人会誌からみる日中・太平洋戦争下の志免町など	496～501
		福岡県・志免村の戦没者について。忠霊塔祭納者氏名の一覧。忠霊塔（大字志免字浦園）は昭和27年に除幕式。写真あり	501～515
		海軍管轄時代の志免鉱業所の前史と概要。「新原工場（第二坑）」「海軍燃料廠採炭部第五坑正門」などの写真あり	602～606
		志免鉱業所の付属施設について、鉱員住宅、病院など。海軍炭鉱の米騒動について 【年表】海軍採炭所、海軍燃料廠採炭部堅坑、志免町忠霊塔	613～623 981～989
須恵町	須恵町誌	海軍採炭所・海軍燃料廠採炭部（新原採炭所、志免鉱業所など）の沿革と概要。写真あり	173～184
		新原炭鉱の米騒動について、その経緯と鎮圧まで	252～260
		須恵町の戦没者について。須恵町遺族会は、昭和15年建立の忠霊塔の横に、昭和27年に忠霊塔を建てた 戦時中の須恵村の生活状況・銃後活動。須恵村村政。須恵国民学校の米軍機米襲（機銃掃射）について。写真あり	1232～1236 1237～1247
町新宮	新宮町誌	新宮町の戦没者、戦災者、慰霊祭など。昭和25年、立花小学校近くに平和塔、昭和27年に粕屋新光園横に忠霊塔建立 主婦会の戦死者遺骨迎え、応召者見送りなど	606～614 703～704
久山町	久山町誌 下巻	徴兵制の概要。粕屋郡の徴兵検査、動員、西南戦争時の出征者、陸軍の小機動演習、士官候補生志願者の募集など	148～161
		日清戦争について。金品の納入、軍事公債、鎮魂記念碑の建設、戦没兵士の葬儀、出征軍隊の復員など。歩兵第24連隊の鎮魂記念碑建設について。「日清戦争に出征した山田村出身者」表。糟屋郡の日清戦争追悼会・凱旋式について	162～171
		明治30年の軍事演習、明治33年の軍事演習について。「明治33年の軍事演習に山田村が準備した品物」表あり	171～177
		日露戦争について。戦時動員（山田村役場の対応）、軍隊の見送り、兵営生活など。明治38年1月、村社若宮八幡宮にて旅順戦勝祝賀会。出征軍人家族慰問、糟屋郡出身戦没者慰霊、靖国神社への合祀など	180～192
		福岡県の徴兵忌避について。「郡市別の所在不明の徴兵処分未済者人員表」あり	197～199
		シベリア出兵に伴う山田村・久原村などの動員、戦死者・帰還者などについて	200～203
		徴兵制度の変遷、山田村・久原村の徴兵検査、徴兵忌避者、入退営の歓迎など。海軍志願兵の志願状況・募集状況	204～220
		山田村・久原村の召集令状・兵事の召集や簡閲点呼について。「軍隊手帳・召集令状」写真、「簡閲点呼実施状況」表あり	227～234
		昭和2年の兵役制度改革、改革後の徴兵検査と兵役などについて。第24連隊の演習に伴う山田村の対応などについて	235～242
		満州事変勃発に伴う山田村での動員、家族・遺族への軍事援護などについて。昭和7年3月、姪浜の愛宕神社は武運長久のお守りと家族参拝券を山田村役場に10個送付。爆弾三勇士、金品・兵器献納など。防空演習などについて	243～254
		昭和7年度の徴兵検査、徴兵署は香椎村香椎高等女学校、山田村などの徴兵検査の記述あり。徴兵検査合格者の入営・退営など。山田村からの海軍志願兵、海軍関係の軍工廠の労働募集などの記述あり。勤務演習や簡閲点呼について	254～266
		昭和11年、第12師団の満州出動、歓迎、慰問活動、日中戦争勃発に伴う充員応召などの記述あり 「忠霊之碑」、「戦没者芳名碑」、昭和46年3月、久山町。明治維新から大東亜戦争までの町出身戦死者240余人	267～271 1067
粕屋町	粕屋町史	大正5年の陸軍特別大演習の概要、各部隊の配置、進路などの記述あり。「長者原大演習を報じる新聞記事」などあり 大正7年8月26日に起こった海軍採炭所新原坑の米騒動について	331～333 333～335
	小・中学生のための粕屋町の歴史	昭和6年7月、九州における防空演習、大川村の警防団などの記述あり 大正5年11月11日の陸軍特別大演習と「御野立所」について。「長者原にある御野立所」写真あり。粕屋高校の敷地内に演習記念の石碑あり	567～568 276～277
	大川村郷土誌	海軍歩兵大尉長武連、海軍技手松永太郎の略歴。陸軍中將長勇の手記。戦没者名簿。「長者原御野立所忠霊塔」写真	363～376
芦屋町	芦屋町誌	日清・日露戦争での芦屋町の出征者。明治33年、第12師団衛生隊の演習で森岡外が芦屋へ。日本海海戦の概要など	408～412
		常陸丸沈没および慰霊碑建立について。「常陸丸遭難六〇周年供養慰霊祭」写真あり	457～459
		満州事変から終戦までの概要、芦屋飛行場の建設、北九州防空演習についての記述あり 昭和6年の北九州防空演習と芦屋町における大規模演習。参加部隊は久留米野砲兵第24連隊や大刀洗航空隊など	504～506 510～511
	増補改訂 芦屋町誌	芦屋飛行場の建設経緯	512～517
	第12師団の軍事演習など、軍事演習地としての芦屋。昭和7年、芦屋には北九州工業地帯防衛のための陸軍飛行場が設けられ、さらに本土決戦に備えた第145師団司令部が置かれた。日清・日露戦争における芦屋町出身戦死者は10余人 常陸丸の沈没について。明治37年、常陸丸は沖ノ島あたりでロシア艦隊に砲撃され沈没。「常陸丸殉難勇士の碑」写真 昭和20年4月以降の九州の部隊配置、6月下旬以降の九州防衛部隊の編成、芦屋に司令部を置いた第145師団（護国部隊）について。芦屋陸軍飛行場格納庫の空襲（昭和20年5月14日）、神武天皇社の被爆炎上についての記述あり 芦屋町の戦没者慰霊塔の概要。昭和37年7月、戦没者をしのぶ慰霊施設が建設。「戦没者慰霊塔」写真あり	468～469 470～471 491～493 501	
水巻町	水巻町誌	日華事変後の水巻村の村内（戦時）機構統制、警防団など。戦時体制下から敗戦まで水巻町の状況など。各種写真あり	339～345
	増補 水巻町誌	福岡県における俘虜収容所分所と強制労働について。昭和17年8月、日本政府は俘虜派遣規則によって、全国に7ヶ所の管轄区と76分所を設置した。福岡には18の分所が設置され、最初の捕虜移送は福岡俘虜収容所第三分所（八幡製鉄所） 戦時期的水巻村政・村の状況、本土空襲と敗戦、明神ヶ辻山射撃高射砲陣地について。「陣地の地図（明神ヶ辻山）」あり 水巻町古賀の多賀山中腹にある「十字架の塔」について。「十字架の塔」は、太平洋戦争期にオランダ兵をはじめとした捕虜を日本軍が日炭高松炭鉱で強制的に労働させ、病氣や過労、事故で死亡した人々を慰霊するために建立された	265～269 280～282 495～496
岡垣町	岡垣町史	徴兵制度の導入、福岡県の徴兵制度についての記述あり	291～293
		日清・日露戦争における矢畑村・岡垣村の出征・銃後活動（国債・戦時徴発・慰問・凱旋・村葬など）記録	404～408
		関門北九州防空演習、北九州南鮮防空演習、「岡垣村空襲防護計画」など岡垣村に関する防空体制・訓練について	430～434
		芦屋飛行場について。遠賀川河口の三里松原北端の芦屋の国有松林地に昭和17年完成。福岡県が建設し、陸軍に献納 歓迎、慰問袋、武運長久祈願祭、軍人互助、援護組織など吉木区における銃後活動。「入営退役軍人の支給額」あり	434～435 436～439
		軍用敷地貸借、陣地構築、資源回収と農産品の供出、航空機献納など、岡垣駐屯部隊への協力奉仕について図表あり 北部九州における守備隊の配置、岡垣地域の駐屯部隊と米軍本土上陸作戦の防衛体勢。「郷土の守備隊配置図」あり	439～445 445～446
終戦時の岡垣と駐屯部隊の姿。「岡垣町の戦没者」表、「戦没者忠霊塔」写真あり。満州事変から太平洋戦争終戦までの岡垣出身将校について（出征先・戦病死者などの統計）。「今次大戦による岡垣の戦没者」グラフあり	446～450		
町遠賀	遠賀町誌	遠賀町の戦没者慰霊塔の建立についての記述あり。「慰霊塔（別府区遠賀中学校横）」写真あり。「戦没者芳名」あり	959～964

自治体名	自治体史名	内容	頁
小竹町	小竹町史	土族反乱、明治維新と軍事年譜	355～359
		昭和初期の学校教育。「勝野小学校奉安殿」など写真。戦時中の思い出－「飯野次男・春公重・井沢豊先生談話」より－ 【年表】西部防衛司令部、忠霊塔建設	1281～1288 1400
鞍手町	鞍手郡史 下巻	兵役証書、軍隊手帳など、鞍手郡の兵事資料記載あり。明治17年秋期陸軍機動演習、明治21年鞍手郡内参謀旅行、明治30年11月鞍手郡内第5師団・第6師団対抗機動演習について	1295～1305
		西南の役、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦における鞍手郡出身戦没者。戦没者、勲章授受者、徴兵検査等表あり	1310～1325
		鞍手郡内の忠魂碑、8ヶ所記載あり。直方町福地、笠松村、中村、宮田町、他に所在	1333～1340
	鞍手町誌 下巻	戦時統制における食料統制、衣料・家庭用品配給制など	151～153
		徴兵令と徴兵検査、土族反乱、鎮台廃止から師団設立、徴発令、軍馬の徴発、鞍手郡尚武会などについて	692～697
		日清戦争の経緯、戦病死者と下賜金、台湾征討、郷土部隊への入退営と出征、鞍手地域で行われた機動演習について。明治17年の秋には若宮の都市原で機動演習、大正5年には、筑豊から筑後にかけて大演習が実施された	697～701
		日露戦争における鞍手郡出征者の概要、軍事公債、寺院の奉公会、戦勝祝賀会・凱旋祝、日本海海戦など	701～707
		第一次世界大戦、シベリア出兵、杭州湾上陸、満州事変、日華事変と鞍手郡の関わり、戦後活動について	708～713
		菊部隊（第18師団牛島部隊）、烈部隊（第18師団）、龍部隊、鞍手郡出身者が所属している郷土部隊について。決六号作戦と鞍手町の関わりについて。決六号作戦の概要、第16方面軍と鞍手町駐屯部隊について。北九州の空襲について	713～720
		鞍手郡における隣組の防空訓練と灯火管制について。「新北防空監視哨」写真あり。戦時経済統制、戦後活動について	720～728
終戦時の様子。戦没者慰霊について。室木区の六ヶ岳神社の忠魂碑（大正14年）、西川校の忠魂碑（昭和9年）、招魂祭	728～731		
「鞍手町英霊名簿」、「大東亜戦出征地別出征者」、「満州、日華事変出征地別出征者数」あり	732～739		
【年表】西海道鎮台、歩兵24連隊、西川校庭忠魂碑除幕祭、西川村軍人後援会、その他戦争・軍事関連事項多数	893～904		
鞍手郡郷土史	神風連の乱と西南戦争について、鞍手郡での軍夫徴収など。「西南戦役軍夫名簿写」、「西南戦役従軍日記」写真あり	232～241	
	太平洋戦争、鞍手郡から出征した郷土部隊の戦役（第18師団など）について。「(鞍手郡)太平洋戦戦没者数」一覧あり	245～248	
桂川町	桂川町誌	国民学校令施行、桂川国民学校、福岡第一師範学校「決戦教育研究協議会」などについての記述あり	324～325
筑前町	三輪町史（昭和版）	佐賀の乱、西南戦争について、三輪村からの軍夫などの記述あり	154～155
		日清・日露戦争時の大三輪村・栗田村の状況、出征者など。大三輪村では明治30年に在郷軍人記念碑建設を議決	164～166
		大刀洗飛行場の設置経緯、概要、空襲について。「大刀洗憲兵分遣隊跡」写真、「原地蔵付近の地図（太平洋戦争中）」あり	182～187
		三輪町における太平洋戦争、終戦の状況、勤労奉仕など。「戦病没者芳名簿」、「忠魂碑（三輪中学校前）」写真あり	193～202
	三輪町史（平成版）	【年表】日露戦役記念碑建立（大三輪）、大刀洗飛行場、大刀洗製作所、太平洋戦争出征応召軍人1483人（戦病死者362人）、忠魂碑（久光）、慰霊碑（原地蔵）	273～276
		徴兵令施行、徴兵制度の概説。「徴兵免役の条件」、「徴兵令の兵役義務」あり	356～357
		佐賀の乱、秋月の乱、西南戦争について。軍夫としての参加者、従軍者について	364～369
		日清戦争の概要、三輪町地域の出征者、祝勝会、凱旋兵士の出迎えなど。明治27年、戦勝を祈念し新町公会堂「祝勝館」が建築。日露戦争の概要、大三輪村・栗田村の尚武会による援護事業、朝倉郡の凱旋軍人の出迎えなどの記述あり	370～373
		大三輪村・栗田村における日清・日露戦争戦没者について。「日清戦争記念碑建設の議案」、「日露戦役記念碑」写真あり。大己貴神社入口鳥居横、大己貴神社本殿の裏、栗田バス停留所前、依井八幡宮境内の戦役記念碑について。写真あり	373～375
		第一次世界大戦とシベリア出兵について。大刀洗飛行場の建設経緯、工事経過、航空第四大隊の設置など。「飛行場略図」、「モーリス・ファルマン機」写真、「久留米憲兵隊甘木分遣所跡」写真、「大刀洗飛行場第4連隊の跡」写真あり	376～380
		満州事変と上海事変について。日中戦争の開戦。「郷土部隊の戦功と戦死の報道」など写真あり。太平洋戦争勃発、戦線拡大、本土空襲まで三輪町地域の状況。日中・太平洋戦争の推移。昭和20年3月27日の大刀洗飛行場付近航空写真	380～391
		昭和4年、日本航空輸送株式会社大刀洗支所の設置と国際旅客の開始、昭和11年に雁の巣飛行場へ移転。各種写真あり	392～394
		大刀洗飛行場第4連隊、大刀洗陸軍飛行学校の沿革。「九二式戦闘機」「セメント式掩体壕」など写真多数。大刀洗航空機製作所、大刀洗航空廠、第五航空教育隊、技能者養成所の沿革。「第五航空教育隊（西部百部隊）正門」あり	394～400
		大刀洗空襲について。空襲の状況と体験者の証言。B29の墜落。「散乱したB29の残骸」などの写真あり	401～410
		戦後に建立された慰霊碑、忠魂碑について。慰霊祭と村葬について。忠魂碑に祭ってある戦没者名簿	410～417
		海底から発見された九七式戦闘機について、大刀洗平和記念館への保管・展示について。平和の碑について	444～449
		戦時下の教育。国民学校の設置。青年学校の軍事教育化・兵役動員体制など。「戦時訓練中の小学生」など写真あり	486～491
		勤労奉仕と学徒動員。大刀洗北飛行場建設、大刀洗航空機製作所などへの動員。「大刀洗航空機製作所平面図」など	491～494
		大刀洗爆撃と児童・生徒。誤爆の森について。「小中学生と大刀洗飛行体との協力行事」あり	494～496
【年表】日露戦争従軍戦死者、旅順陥落記念楠植樹、日露戦役記念碑、大刀洗飛行場建設、シベリア出兵、第五航空教育隊、大刀洗航空廠、大刀洗飛行隊、熊谷飛行学校（大刀洗陸軍飛行学校）、大刀洗北飛行場、大刀洗製作所工具寮、大刀洗製作所・第百部隊空襲、大刀洗北飛行場、大刀洗北飛行場・航空廠空襲	14～22		
夜須町史	秋月の乱、福岡の変、西南戦争について	665～668	
	戦時下の国民生活。北大刀洗飛行場の建設（朝鮮からの徴用や学徒動員）と施設概要、大刀洗空襲。戦時中の生活体験談	672～678	
	夜須町出身の戦没者について。毎年8月15日は慰霊碑の前で追悼祭、10月には敬老会館で慰霊祭。地域別の戦没者名簿	683～690	
【年表】北大刀洗飛行場の用地買収、完成。大刀洗空襲	1025		
夜須行政史	昭和の戦争について。昭和18年、安野一帯に北大刀洗飛行場の建設、防衛隊が小学校などに駐屯	30～31	
	援護団体、戦後の遺族会について。夜須町における慰霊塔の設置、慰霊祭の開催。戦没者慰霊塔写真あり	334～336	
【年表】航空第四大隊、甘木憲兵分遣所、飛行第4連隊、日本航空輸送会社大刀洗支所の民間輸送、大刀洗飛行場の竜巻被害、大刀洗製作所設立、北大刀洗飛行場用地買収、神風特攻隊、北大刀洗飛行場完成、大刀洗空襲	363～370		
夜須の歴史	「日露戦役記念碑（三並）」、「大刀洗飛行場跡（安野）」、「自衛隊夜須通信所（下高場）」写真あり	101～105	
	大刀洗飛行場の沿革、大刀洗北飛行場の建設（勤労動員など）、夜須町の出征軍人記録、西部軍司令部の横穴基地建設、大刀洗空襲、戦時中の経済と国民生活などについて	137～141	
	【年表】大刀洗北飛行場建設	186	

自治体名	自治体史名	内容	頁
筑前町	筑前町史 下巻	大刀洗飛行場・大刀洗北飛行場関連写真、戦没者慰霊碑・平和の碑の写真	(口絵) 2～6
		大刀洗飛行場への輸送と朝倉軌道、国鉄甘木線の開通	111～112
		大刀洗飛行場の概説、開設の背景、大刀洗選定の理由。「大刀洗飛行場」初期の飛行機(サルムソン機)など写真あり	116～118
		飛行場の建設について。大正7年、陸軍は大刀洗飛行場の用地買収開始、大正8年10月完成。昭和20年2月に大刀洗北飛行場完成。大刀洗東飛行場は完成と同時に終戦。工事には学徒動員、朝鮮人労働者が従事	119～120
		大正7年、所沢飛行場で航空第4中隊開設、翌年大刀洗へ。同年に航空第4大隊、大正11年に飛行第4大隊、大正14年に飛行第4連隊に。昭和3年より大陸にも出動。昭和13年、飛行第4戦隊に改編、昭和15年、熊本県菊池に移駐	120～123
		飛行第98戦隊、飛行第62戦隊、飛行第66戦隊、特攻299、300、303、304振武隊の戦歴	123～125
		施設部隊について。大刀洗陸軍航空廠、久留米憲兵隊大刀洗分遣隊、通信所、高射砲第4連隊、大刀洗陸軍病院の概略	125～127
		教育部隊について。第五航空教育隊(西部第百部隊)、大刀洗陸軍飛行学校、大刀洗航空廠・技能者養成所の概略	128～131
		民間施設について。日本航空輸送株式会社と大刀洗における民間航空。大刀洗航空機製作所株式会社。国鉄甘木線について	131～133
		大刀洗関連以外の軍事施設について、第16方面軍司令部兼西部軍管区司令部、被服廠福岡支廠	134
		大刀洗空襲について。昭和20年3月、2度にわたる空襲があり、大刀洗飛行場や関連施設の多くは壊滅、児童など民間人にも被害が出た。4月以降にも5度の空襲。日本軍機の迎撃について。終戦時の大刀洗飛行場について	134～139
戦時下の教育について。勤労奉仕や学徒動員で大刀洗北飛行場の建設や大刀洗製作所へ。大刀洗空襲での被害	150～152		
瀨上宗重氏(朝倉市)による私設大刀洗平和記念館の設立。旧三輪町「平和の碑」について。筑前町大刀洗平和記念館について	278～280		
東峰村	小石原村誌	小石原の戦死者、慰霊塔など。昭和43年4月、旧小石原中学校に慰霊塔建立。戦死者葬儀・慰霊塔写真。戦死者一覧	389～392
	宝珠山村誌	秋月の乱、西南戦争についての概要、宝珠山村・福井村から6名が従軍	377～379
		日清戦争・日露戦争について。高木神社の戦没者慰霊塔によると、両戦争で5人戦死。高木神社の戦捷記念碑について	403～406
		宝珠山村(兵事事務)における徴兵、現役兵・予備兵役・後備兵役、在郷軍人・簡閲点呼について。日露戦後の軍備拡張について	411～412
		第一次世界大戦の日本と宝珠山村への影響。明治36年、陸軍は軍隊の管轄区域(連隊区)を定める	423～424
		高木神社の忠魂社の概要、「日露戦争戦捷記念碑」についての記述あり。「忠魂社祠の内部」「高木神社の忠魂社」写真あり	452～453
		満洲事変、十五年戦争、上海事変などの経緯。高木神社の海軍陸戦隊の絵馬について。「高木神社の絵馬」写真あり	455～457
日中戦争、第二次上海事変の勃発。小銃弾百万陸軍献納運動、中国国民党軍の空襲と昭和13年の防空演習などについて	459～463		
宝珠山村の防空演習(昭和13年6月、9月)について。徴兵、出征兵士と戦死者の取り扱い、村葬、戦死者遺族について	463～467		
第二次世界大戦勃発から太平洋戦争緒戦までの概説。第18師団を中心としたインパール作戦の記述あり。戦時下の生活や空襲について。太平洋戦争における宝珠山村出身戦没者について。「昭和41年10月建立の戦没者慰霊塔」写真あり	470～477		
宝珠村誌資料	宝珠山小学校校庭に戦没者(142柱)の慰霊塔がある。「戦没者慰霊塔」あり	101	
大刀洗町	大刀洗町史	日清・日露戦争時期の学校教育、兵式体操、軍歌行進など。太平洋戦争期の学校教育、学徒動員、国民学校化など	309～312
		大刀洗飛行場の建設、記念式典など。飛行機の発達と航空隊の拡張について。秩父宮の大刀洗飛行第4連隊入隊。日本航空輸送会社による民間飛行機について。昭和6年4月4日、大刀洗飛行場に龍巻が発生。「大旋風遭難之碑」について	321～325
		日中戦争勃発以降の大刀洗航空基地の利用、拡張、変遷など。施設や教育部隊が設置され、軍都となった大刀洗について	325～327
		大刀洗空襲について。昭和20年3月、2度の空襲で大刀洗は壊滅。民間人にも被害。4月以降にも空襲	327～332
		石炭調査(麻生太吉の土地購入)、戦時中の状況など大刀洗航空基地周辺、山隈・十文字地域の状況について	335～337
		大堰地区、本郷地区、大刀洗菊池地区戦没者一覧あり。「大堰地区慰霊塔(大堰小学校地内)」写真など写真多数	387～402
大木町	大木町誌	佐賀の乱勃発の経緯と鎮圧まで、三瀬県の状況などの記述あり	287～288
		秋月の乱、佐賀の乱、神風連、西南の役、日清戦争から第二次世界大戦までの概説	320～325
		戦時下の教育、学徒動員、学童疎開など、第二次世界大戦前後の教育状況についての記述あり	881～887
広川町	広川町史 下巻	佐賀の乱について。西南の役勃発から終結まで、広川出身の戦死者は2人、山川招魂社(久留米市)には戦死者190人が合祀	32～37
		日清・日露戦争の宣戦から講和まで、八女郡の出征戦死者と広川町関係戦死者。明治44年の陸軍特別大演習の概要	148～155
		第一次世界大戦について。下広川村に「日独戦役記念碑」建立。出征者70人、戦死者1人	156～159
		軍部台頭と日中戦争について。千人針の作成や銃後の生活。「千人針」写真、「武運を祈って寄せ書きした日章旗」写真などあり	187～182
		太平洋戦争の開始。金属回収や学徒動員。昭和17年頃から岡山村(現八女市)で飛行場の拡張。航空機搭乗員養成のため「筑後地方航空機乗員養成所」設置、昭和19年初頭には練習機の発着訓練。終戦近くには機材を分散疎開	190～193
		風船爆弾の製造、爆弾発射基地、爆弾被爆者の慰霊訪問など。企画院の首都遷都計画について。企画庁保存資料(企画院第一部第三課計画書)にある昭和18年「中央計画素案・同要綱案」で、候補地の一つに福岡県八女郡福岡町中心地区	195～198
広川町史 資料編	広川町史 資料編	本土空襲、久留米空襲、原爆投下について。玉音放送一部抜粋、敗戦時の広川地域の状況、広川地域の戦死者数について	198～204
		【資料】陸軍特別大演習(明治44年11月11日から14日)において明治天皇が統監した記念の碑	444～445
		【資料】日露戦争戦死者10人の慰霊碑。明治40年3月建立。「戦捷記念碑(逆瀬谷区)」写真あり	480～481
広川町史 年表	広川町史 年表	【資料】正面壁「広川町戦没者消防殉職者御芳名」。昭和61年建立。広川村出征戦死者(西南戦争から太平洋戦争まで)の慰霊碑。「忠霊塔(下広川小学校敷地内)」写真、「広川町慰霊之碑(町役場敷地内)」写真あり	506～507
		【年表】陸軍大演習、第18師団、爆弾3勇士、筑後地方航空機乗員養成所、八女遷都案、松根油、久留米市空襲、大牟田市空襲	106～115
香春町	香春町史 上巻	国民学校、戦時下の学校行事、田川地域の勤労動員などの記述あり	1134～1136
		歩兵第14連隊創設、西南の役、日清戦争、台湾出兵に動員。香春町出身の戦死者について。日露戦争の概要、第14連隊は第12師団は第1軍に編制されて日露戦争に従軍。町内出身戦死者一覧など。第一次世界大戦とシベリア出兵について	1190～1196
		満洲事変から太平洋戦争までの経緯。ノモンハン事変と日中戦争。ビルマ方面作戦、菊兵团の進軍、歩兵第14連隊の本土移動・解散まで。真珠湾攻撃、マリナ沖海戦、レイテ沖海戦など海軍の戦況。各戦域での戦死者一覧あり	1197～1225
		北九州の空襲により小倉陸軍病院は、収容患者の一部を田川へ疎開し、これを小倉陸軍病院田川分院と称した(田川中学校が本部)。県立田川中学校、添田・香春・勾金・採銅所などに疎開	1225～1227
		英霊の出迎えについて。昭和14年3月15日、田川官祭招魂社を田川護国神社と改称した。香春町出身戦死者葬儀について	1228～1229
		歩兵第14連隊の飛行機監視所(鏡山寺内)、牛斬山々頂の航空灯台について、終戦後海軍が光願寺に駐留	1229～1231
香春町史 下巻	香春町史 下巻	【年表】鎮西鎮台	1271

自治体名	自治体史名	内容	頁
添田町	添田町史 上巻	佐賀の乱、秋月の乱について概説。佐賀の乱戦死者、伊川伴蔵の戦死記念碑が下落合にある	444～447
		小倉歩兵第14連隊の創設について。日清・日露戦争、第一次世界大戦、シベリア出兵、上海事変と添田町関係戦死者について	634～639
		満州事変から太平洋戦争終結まで。郷土部隊小倉歩兵第14連隊の戦績について。「(添田)町内戦死者」一覧あり	640～663
		昭和20年6月、小倉陸軍病院の傷病兵、軍医など計600名が田川に転送され、田川中学校を本部とし、これを小倉陸軍病院田川分院に改称。香春や勾金の国民学校にも分遣隊。小倉造兵廠の田川疎開計画について	664～666
		西部第6799部隊（筑豊鉱山地带特別警備部隊本部）について。部隊の組織と任務。大峯二坑の事件での出動について	668～672
	添田町史 下巻	太平洋戦争下の添田町の状況（教育など）。「金の原で見つかった不発弾」写真あり	1194
ふるさと いばる	徴兵制導入から日清・日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争から太平洋戦争までの概要と伊原町の状況（徴兵忌避、銃後活動、徴用、配給制度、空襲）など。「伊原戦死者並びに遺族」一覧あり	16～18	
		陸軍歩兵上等兵高橋廣吉氏の石碑について。高橋廣吉はシベリア出兵で伊原出身最初の戦死者。石碑は大正10年に建立	60～63
			76
福智町	金田町史	日清戦争と日露戦争の概要、金田町からの戦没者について。「出征軍人を送る金田駅頭」写真。第一次世界大戦から太平洋戦争までの概要と金田町の状況について。金田町戦没者について。忠魂碑（稲荷神社）写真、戦没者一覧表あり	152～168
	金田町誌	徴兵制度の概要、田川郡の徴兵検査についての記述あり。「全国募兵ノ詔」、「徴兵告諭」記載あり	217～219
		明治維新後における日本の対外戦争の概略、郷土部隊（小倉歩兵第14連隊）の簡単な足跡についての記述あり	231
		日清戦争・日露戦争の概要、金田町からの戦死者などの記述あり。「日清・日露戦争戦没者」あり	233～234
		第一次世界大戦から太平洋戦争までの概要、松根掘作業、勤労奉仕など、戦時期における金田町の状況についての記述あり。「軍事郵便」資料写真あり。明治以降の対外戦争における金田町出身者の戦死者の状況について。「忠魂碑（稲荷神社境内）」写真、「戦没者名碑（忠魂碑前）」写真あり。「第一次世界大戦戦没者」「日中戦争・太平洋戦争戦没者」あり	234～241
		戦時体制時期の商工業者統制についての記述あり	377
		昭和7年から昭和24年までの金田村の石炭産業について。勤労報国隊、農業協力隊等について。箱崎浜の埋立て地で装甲車と戦車の献納式を行う	576～587
		金田町東金田稲荷神社境内にある忠魂碑について。「忠魂碑（稲荷神社境内）」写真。碑の前では毎年秋分の日に慰霊祭	814～815
	赤池町史	土族反乱、田川一揆、筑前竹槍一揆の発生から鎮圧までの概要、田川郡の状況などの記述あり	289～295
		佐賀の乱、歩兵第14連隊の創設。明治8年4月1日、小倉に歩兵第14連隊が創設され、軍旗授与。西南戦争における戦歴	512～513
		日清戦争における歩兵第14連隊の出征、各郷土部隊の配属などの記述あり。「徴兵国民軍名簿」写真あり	514
		日露戦争における郷土部隊（歩兵第14連隊など）の戦線、日本海海戦、要塞地帯の設置など。「旅順要塞攻撃の感状」写真あり	514～515
		赤池町地域における戦没者について。「徴兵検査状況」表あり	517
		上野村徴兵状況、簡閲点呼、招魂祭（田川護国神社）、青年学校など、上野村各年次報告における軍事関係についての記述あり。大正15年12月、北方台地麓に忠魂碑が建立され、後に猿田台地現在地上に移転した。「忠魂碑」写真あり	517～520
		郷土部隊（歩兵第14連隊、歩兵第225連隊、歩兵第114連隊など）の配属・転戦（フィリピン・ガダルカナル・硫黄島・沖縄など）、戦死者についての詳細な記述あり。「歩兵連隊の編成（1列）」あり	523～525
	日清戦争から太平洋戦争における戦死傷者、民間人死亡者等の人数。「方面別戦没者数（陸軍）」「方面別戦没者数（海軍）」表。「田川郡護国神社沿革史」による赤池町域戦没者名簿。「陸軍戦没者」「海軍戦没者」「郷土兵戦死地分布図」あり	526～554	
	三菱重工兵器工作所勤務者の被爆体験談。ノモンハン従軍兵士の体験談。第114連隊所属兵士体験談など	561～575	
	準戦時体制における石炭産業界の動向。明治鉱業の飛行機献納などの記述あり	701～707	
	八幡製鉄および筑豊炭鉱における俘虜収容所分所についての記載あり	712	
方城町史	徴兵令施行から日清・日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦の簡単な概説	278～279	
	方城町出身戦死者名一覧、方城町の戦没者遺族会についての記述あり	279～290	
上野村誌	上野村在郷軍人分会の事業内容などについて、赤池瀬ヶ谷に射撃場を設置、大正12年には忠魂碑を建設した	20～21	
糸田町	糸田町史	日清・日露戦争の概要。日清・日露戦争の忠魂碑が伯林寺に、個人の征露記念碑は原に建立。「日露戦争戦死者名」一覧表	359～363
		第一次世界大戦の概要、大戦後の経済についての記述あり	363～366
		シベリア出兵について。糸田村の兵事について	373～376
		満州事変から太平洋戦争までの概要。戦時経済について。太平洋戦争の戦局。銃後の生活。根こそぎ動員について	386～395
		田川護国神社沿革史による糸田町出身戦死者一覧。「支那事変戦没者」、「太平洋戦争戦没者」あり	400～424
		日清戦争の慰霊碑（伯林寺、明治28年建立）、忠魂碑（八幡神社、明治44年建立）、忠魂碑（昭和3年、糸田小学校に建立、終戦後伯林寺に移転。戦死者名を刻む）、大東亜戦争戦没者氏名碑（伯林寺、昭和27年建立）。それぞれの碑の写真あり	982～985
		【年表】海軍予備炭坑構築坑	1150
【年表】忠魂碑（伯林寺）	1161		
【年表】 蓆田飛行場、福岡女子挺身隊	1170		
川崎町	川崎町史 上巻	田川郡の徴兵、徴兵検査などの記述あり	459
		鎮台の概要・創設過程、小倉第14連隊の概要・創設過程についての記述あり。「小倉城南 歩兵第14連隊の跡」写真あり	535～537
		日清戦争の概要、歩兵第47連隊の創設について。「元第12師団司令部正門 小倉城内」写真あり。川崎町出身戦死者2人	542～543
		第一次世界大戦、シベリア出兵、大戦後の軍縮（第14連隊の改編など）について	545～547
		日中戦争、太平洋戦争について、川崎町出身戦死者について。戦後、川崎町出身戦死者の慰霊塔を川崎小学校校庭に建立	548～552
	古川大峰鉱業所俘虜収容所についての回顧録。福岡俘虜収容所第五分所は福岡県田川郡古河鉱業所大峰炭坑宝町に設置	553～557	
海軍予備炭田の封鎖、封鎖解除、選定坑区の範囲についての記述あり	588～589		
川崎町史 下巻	川崎町における英霊の出迎え方について	926	
郷土読本 われらの川崎	隣組制度、松根油とり、学徒動員など、戦時期における川崎町の様子についての記述あり	87～88	
	労務者の出征、報国隊員の導入、朝鮮人労働者、捕虜労働など、戦時期における川崎町内の炭坑状況についての記述あり。伊田の三井田川鉱の中国人暴動事件。「最盛期の町内の炭坑」図あり	203～208	

自治体名	自治体史名	内容	頁
大任町	大任町誌	日清戦争、日露戦争の概要、香春町、上今任の凱旋祝賀会など。征清記念碑について。「征清記念碑」写真と日露戦争従軍兵士一覧（征清記念碑裏に記載）あり。日露戦争における叙勲者・戦死者の一覧	243～248
		第一次世界大戦、満州事変、太平洋戦争までの概要、上今任の「豊前御坊祭帳」からの記録抜粋。大任村出身者が所属した郷土部隊、菊兵团、第56師団（竜兵团）と所属部隊の戦歴。出身軍人3人の事蹟	249～254
		昭和25年7月、大任村戦没者遺族会結成。昭和43年には役場前に戦没者慰霊塔が建立。大任町地域の戦没者一覧	255～265
		【年表】中津町・築上地方で陸軍特別大演習（大正9年）	700
	大任町誌 ふるさと大任 上巻	西南の役概要、中津支庁長馬淵清純（上大任）について。「馬淵清純寄進の狛犬」「馬淵清純の遺稿」「馬淵清純の碑と墓」写真	530～535
		小倉第14連隊の創設過程、日清・日露戦争の概要と歩兵14連隊の動員、大任村からの出征戦死者について	629～632
		第一次世界大戦からシベリア出兵までの概要、歩兵第14連隊の従軍過程について。「戦没者慰霊塔」写真あり	633～634
		満州事変・上海事変・太平洋戦争の概要、歩兵第14連隊及び歩兵第114連隊を中心とした郷土部隊の戦歴（菊兵团・龍兵团含む）。ノモンハン、中支・南支戦線、ビルマ、フィリピンなど各戦線での戦死者と、戦病死者の一覧。「慰霊祭」写真あり	634～645
大任町誌 ふるさと大任 下巻	小倉市の一般疎開、大任町への疎開状況、学童疎開船「対馬丸」撃沈などについての記述あり	177～179	
大任町史資料集	日清戦争戦勝記念碑。従軍兵士記載あり。所在地、大字大行寺宇成光、大行寺坂北旧道の道添	105	
町田	町田町誌	町田ゆかりの軍人として、広瀬正経（海軍中將、呉工廠長）、守房太郎（陸軍少將）、伊森重雄（砲術研究者）についての記述あり	345
みやこ町	勝山町史 下巻	平尾台。明治45年、演習地として強制買上、終戦まで要塞地帯として軍管理。開墾地耕作や山林利用は旧所有者に留保	52
		黒田村村会会議資料の大正3年徴兵事務について	58～59
		戦没者慰霊祭の協力、村葬経費、黒田村役場編纂の慰問写真帳などの記述あり。「下黒田軍人家族」写真あり	65～70
		戦時下における黒田・久保・諫山などの国民学校の様子。空襲、北九州から勝山町域内への疎開、終戦など。写真あり	357～360
	犀川町誌	軍事関連標柱について。陸軍演習場（表面に「陸軍用地」とあり）を勝山町と他市の境で2本確認。「陸軍用地標柱」写真あり	525
		【年表】小倉北方砲弾工場、芦屋飛行場	966
		犀川町、城井村、井原村における戦死者数について。犀川町補助飛行場の概説。昭和20年、犀川町木山に築城海軍航空隊の補助飛行場である犀川補助飛行場建設。「着艦訓練塔」「犀川補助飛行場の所在略図」図あり	546～547
		生立神社の犀川忠魂碑について、旧犀川町戦死者の氏名が刻字（昭和9年建設）。城井小学校の城井忠魂碑は大正12年建設	970～971
豊津町誌	【年表】歩兵第14連隊、歩兵第12旅団本部、第12師団司令部、第18師団、陸軍造兵廠東京工廠、小倉工廠、犀川補助飛行場	1146～1150	
	【資料】戦没者名簿。西南の役から太平洋戦争までの戦没者427柱の名簿。また忠魂碑3基。犀川地区（生立八幡神社前広場横、昭和9年）、城井地区（城井小学校内、ふる里公園横、大正12年）、伊良原地区（伊良原小学校運動場、昭和11年）	1174～1178	
	戦時下における小学校（国民学校）、中学校、青年学校の教育、児童の状況（防空訓練、勤労奉仕、学徒出陣など）について	383～385	
	八景山護国神社について。幕末から太平洋戦争までの戦没者を祀る。昭和14年招魂社から改称。祭神としての戦没者一覧	551～567	
豊津町史 下巻	秋月党の豊津襲来事件について。「豊津戦地ノ図」あり	948～988	
	土族反乱勃発の背景、土族反乱の歴史的評価について。秋月党の挙兵、鎮台兵と豊津藩士の動き、豊津戦争、秋月の乱の終結。「秋月党戦闘要図」「電文」「秋月土族の墓」写真あり	166～183	
吉富町	吉富町誌	国民学校令の公布、小学校の国民学校への改称、教科内容、軍事教育体制についての記述あり	389～391
		日清戦争における吉富町出身戦死者について	123
		日露戦争における吉富町出身戦死者について	126
		大正9年11月8日に敢行された特別大演習（豊前東部築上、下毛、宇佐三郡）についての記述あり	136
	吉富町史	防空対策について。昭和20年の米軍機の襲来について	147～148
		昭和3年12月21日、在郷軍人会東吉富村分会が建立した忠魂碑（西南・日清・日露・第一次世界大戦の戦死者追悼）について	314～315
上毛町	大平村誌	薩摩軍に呼応して挙兵した中津隊、軍夫志願などの記述あり	345～349
		太平洋戦争において吉富町から出征し戦死した英霊について。「戦没者氏名一覧」表あり。「武運長久祈願祭」写真あり	406
		【友枝村日清日露両戦役事蹟】による友枝村の日清・日露戦争時の事蹟について、応召状況、戦死病者数など。統計あり	222～224
		原井隧道（友枝東上と唐原原井に通じる道）の建設経緯（工兵隊・友枝村在郷軍人会などの協力による）について	254～256
築上町	築城町誌 上巻 原始、古代、中世、近世、近・現代	資料「戦没者葬儀等二関スル件依命通牒」や戦死知らせの電文など記載。戦後の村葬・忠霊塔建設禁止の通知などについて。戦時下の教育や生活について。勤労動員や金属回収、軍用通信確保の依頼、軍病院慰問計画など	271～281
		満州事変から太平洋戦争までの教育体制。「奉安殿（友枝尋常高等小学校・昭和4年建立）」写真あり	308～309
		佐賀の乱から日露戦争までの明治の戦争の概要。郷土部隊（第14連隊や第24連隊）の出征と部隊編成など。「日露戦役記念碑（築城町寒田）」写真あり。明治18年の陸軍の演習に関する福岡日日新聞の記事抜粋	532～536
		シベリア出兵の概要、第12師団の出征、郷土の戦死者の葬儀について。「出征兵士大字別一覧表（大正9年9月1日）」	633
		満州事変の勃発、背景、満州国成立。盧溝橋事件から日中戦争への概要。太平洋戦争の開始から本土空襲までの概略。図あり	634～637
	椎田町史 下巻	築城飛行場の設置経緯、飛行場建設など。昭和14年八津田村役場に飛行場計画通知、同年に飛行場建設開始。航空隊の転出・改編後の昭和19年には第2代築城海軍航空隊が開隊。特攻訓練や特攻出撃、隊員の下宿について。写真あり	637～640
		本土空襲、北九州空襲。「防空並ニ火災警報」表あり。昭和20年3月と8月の築城基地・国民学校への空襲について	644～645
		築城海軍航空隊関係の各施設について。弾薬庫や発電室、航空隊司令部などについて。各施設の配置図、写真あり	646～648
		戦時下の教育や生活について。農家の供出、松ヤニ集めなどの記述あり	691～699
		兵隊の送迎の仕方、上城井村での出征者送迎について。「出征記念写真」「送迎門」写真あり。日中戦争、太平洋戦争における第18師団や第56師団の戦い、各地の戦闘と戦死者について。「ビルマ戦線概要図」あり。村葬について	711～717
昭和恐慌から太平洋戦争までの北九州の状況、弾薬庫や軍需工場の設置、勤労動員、空襲などの記述あり	12～14		
築城基地について。築城海軍航空隊基地設置の経緯、用地買収や予算調達、基地建設など。築城海軍航空隊の開隊、訓練生の生活、特攻隊など。「殉国勇士之碑」写真などあり。「築城海軍航空隊軍備の変遷」「米軍への引き渡し目録」などあり	275～294		
戦時下の教育について。八津田国民学校、勤労動員などについて。中等学校の学校工場化、学徒勤労動員など。写真あり	410～419		
戦時下の生活について。金属回収、焼夷弾等に対する防火対策、女子挺身隊などの記述あり	423～425		
椎田町（旧町村）出身の戦没者名簿あり	1120～1131		

第4表 史料調査表2：福岡県関連部隊等記事集成

年次	概要	自治体史頁①
歩兵第十四連隊		
明治8年	明治8年4月、熊本鎮台から移駐の歩兵第26大隊を基礎部隊として新たに歩兵第14連隊が小倉城内に創設され、軍旗が親授された。徴兵区域は、旧豊前6郡、遠賀郡、大分県北部8郡と山口県の一部であった。福岡編成の第24連隊と2個連隊で歩兵第12旅団が編成され、司令部は小倉に置かれた	北現-111, 113 / 北五市-22 / 小倉統-335, 336, 337 / 企-324 / 新福城-42, 119, 175 / 田主三-664 / 庄上-265 / 立花下-23, 26, 27 / 筑後二-113 / 豊下-44 / 稲葉上-273, 274 / 新志上-789 / 香上-1190, 1191, 1192 / 金誌-231, 232 / 川上-536, 537, 538 / 赤-510, 511 / 大任上-629, 630 / 豊津下-178 / 築城上-532
明治9年～10年	明治9年10月、連隊長乃木希典少佐に率いられ豊津で秋月藩士と戦う。同時に起こった萩の乱に対して、第14連隊は下関に出勤した。明治10年2月14日、西南戦争で熊本に出勤。22日には植木の戦いで連隊の軍旗を西郷軍に奪われる。同年4月に再授与された。熊本城攻撃の後、14連隊は九州東部戦線に移動し、中津反乱隊を攻撃。竹田、豊後・日向境の激戦の後、宮崎に入り、延岡を経て鹿児島城山からの総攻撃に参加した。同年9月24日の城山落城後、小倉へ凱旋（10月23日）。また西南戦争中に発生した福岡の変では、福岡城に残留した一個小隊が阻止。明治9年から17年まで一個大隊を断続的に福岡に分駐	北現-121, 124, 125, 126, 127, 128 / 企-325 / 福一-957 / 新福城-42 / 久三-104, 107 / 筑穂上-265 / 庄上-268, 270 / 頼史-164, 165, 166 / 田川中-45 / 大和上-681 / 立花下-26, 27 / 筑紫下-601 / 福岡明-298, 303, 304 / 新志上-800 / 岡-293 / 鞍町下-692 / 夜町-667 / 香上-1192 / 添上-446, 447 / 金誌-233 / 川上-538, 539, 540, 541, 542 / 赤-512, 513 / 大任上-630, 631 / 豊津-959, 977, 978, 988 / 築城上-533
明治15年～21年	明治15年、壬午軍乱に伴い朝鮮に出勤。明治17年、甲申事変に伴い朝鮮へ出勤。明治18年6月、歩兵第12旅団新設でその隷下に。明治21年5月、所属している熊本鎮台が第6師団に改編	北現-343 / 小倉統-336, 337 / 企-325 / 田主三-666 /
明治27年～28年	明治27年、歩兵第14連隊は混成第12旅団に編成されて、日清戦争に動員された。遼東半島作戦に参加し、次いで旅順要塞攻撃に参加。後備兵の一部は澎湖島占領へ。明治28年6月、小倉に凱旋	北現-347, 348, 349 / 小倉統-338 / 企-325 / 新福城-43 / 庄上-281 / 筑後二-214 / 津通-735 / 浮上-858 / 稲葉上-277 / 香上-1193 / 添上-635 / 川上-542, 543 / 赤-514 / 大任上-630, 631
明治31年	明治31年、第12師団新設、歩兵第14連隊は第12師団隷下に	北現-353 / 新福城-43 / 川上-543 / 赤-514
明治37年～38年	明治37年2月、日露戦争開始により所属の第12師団、第12旅団とともに従軍。2月に小倉を出発し、仁川上陸。鴨緑江を渡河し、九連城の戦いに参加。さらに遼陽城外の戦闘、周山堡、沙河会戦にも参加し多数の犠牲者を出す。明治38年3月、奉天の戦い。同年12月小倉に凱旋	北現-355, 356, 357, 358, 359 / 企-325 / 香上-1194, 1195 / 添上-637 / 川上-543 / 赤-514, 515 / 大任上-631, 632
明治40年	明治40年7月から、第14連隊は第12旅団とともに韓国へ派遣された（明治42年6月まで）。同年10月、第18師団新設に伴う再編により、第12師団第35旅団の隷下に	北現-373, 374 / 企-326 / 新福城-182 / 赤-515
大正3年～8年	大正3年10月、青島攻略作戦に第18師団が動員。歩兵第14連隊には動員はなかった。大正7年8月、シベリア出兵により歩兵第35旅団所属の歩兵第14連隊は、ウラジオストクに上陸。各地の戦闘に参加し、大正8年7月12日に凱旋した	北現-375, 376, 377 / 企-326 / 鞍町下-712 / 香上-1196 / 添上-638 / 川上-546 / 赤-516 / 大任上-633, 634
大正14年	大正14年5月、宇垣軍縮による再編で、新たな歩兵第12旅団（歩兵第35旅団が改称）の隷下に	北現-380 / 企-327 / 川上-547 / 赤-517
昭和3年	昭和3年1月、小倉工廠設置のため、小倉城内から北方の歩兵第47連隊隊に移転	北現-382 / 小倉統-347 / 企-327 / 赤-518
昭和7年	昭和7年、第一次上海事変で、第2大隊が混成第24旅団に編入され出勤	小倉統-338, 339 / 久三-1032 / 筑後二-451 / 添上-639
昭和11年～20年	昭和11年4月より、第12師団の下で満洲に派遣、昭和14年には速射砲中隊がノモンハン事件に参加。昭和15年7月、第25師団隷下に移り、満洲第180部隊を通称号に。昭和19年2月、第3大隊が調2552部隊としてサイパン島に出勤、7月に玉砕。昭和20年3月、第25師団は本土決戦部隊とされ、第14連隊も東郷から釜山を経て博多に上陸。4月、宮崎県小林地区に集結。5月以降、高鍋付近の陣地を構築、終戦を迎えた。9月1日、解隊後、霧島山麓で軍旗を焼却	北現-648, 649, 650 / 新福城-50 / 筑後二-525 / 中間中-922 / 鞍郷-246 / 鞍町下-712 / 香上-1197, 1198, 1199, 1201, 1202, 1205, 1206, 1207, 1209, 1210, 1229, 1230 / 添上-640, 641, 642 / 川上-549 / 赤-519, 520, 521, 523 / 大任上-634, 635, 636, 639, 640
【自治体史頁②】北現-655, 657, 659, 708, 735, 818 / 北教-277 / 北産Ⅰ-714, 1026 / 北産Ⅱ-633, 634, 700, 740 / 北五市-31 / 門司-885, 930 / 小倉下-586, 587, 595, 596, 602, 609 / 小倉統-344, 345, 352, 1003, 1004, 1005, 1006, 1011, 1012, 1018, 1025, 1031, 1036 / 小倉福-959, 960, 961, 962 / 企-328, 335, 345, 350, 353 / 戸二-641 / 福一-1100, 1101, 1507, 1509, 1532 / 新福現一-802, 828 / 新福俗一-792 / 新福城-5, 93, 175, 194, 300 / 久中-663 / 直下-1079 / 飯中-497 / 田川中-402, 527 / 黒-407 / 中間中-921 / 春中-339, 340 / 春資-342 / 大野下-536 / 確井-171 / 宇-546 / 芦屋-409 / 芦-469 / 鞍郡下-1304 / 鞍町下-894 / 稲八-6 / 添上-1182 / 糸-1129 / 川下-1080, 1081 / 赤-580, 581 / 築城上-712		
歩兵第二十四連隊		
明治17年～21年	明治17年7月、小倉城の第14連隊内に第24連隊第1大隊が新設。明治19年5月に小倉から福岡に移転、8月に軍旗が親授された。小倉で増設の第2大隊も12月に福岡に移転、明治21年12月に第3大隊が増設され編成完了した。明治21年5月の師団設置で、熊本第6師団・小倉歩兵第12旅団隷下となる。同月福岡城内が正式な連隊衛戍地となる	北現-343 / 福一-1100 / 新福城-39, 42, 93, 175, 176 / 立花下-23 / 豊下-45 / 春中-339 / 稲葉上-273 / 新志上-789 / 金誌-232 / 川上-542
明治27年～28年	明治27年7月25日、日清戦争のため、第24連隊に動員が指令される。混成第12旅団が編成され、第2軍隷下となる。10月までに仁川に上陸、旅順攻撃に参加し、二龍山攻撃にも参加。旅順警備を行い。明治28年6月に凱旋	北現-347 / 福一-1035, 1036, 1101 / 新福城-43, 176, 177 / 田主三-666 / 庄上-281 / 筑後二-214 / 春中-340 / 津通-735 / 稲葉上-277 / 三-164 / 三町-371 / 赤-514 / 築城上-533
明治29年～36年	明治29年、第24連隊は第6師団から新設の第12師団へ移設。明治30年には、久留米の歩兵第48連隊と共に第24旅団に編成。明治36年、第23旅団に再編成	北現-355 / 福一-1101 / 新福城-42, 43, 177, 181 / 久三-414 / 立花下-24 / 川上-543 / 赤-514
明治37年～38年	明治37年2月、日露戦争で一部が韓国臨時派遣隊として仁川に上陸、漢城守備に。その後、第24連隊の本隊も仁川に上陸して合流、第一軍に入る。鴨緑江の戦いで三分の一の死傷者を出す。遼陽、本溪湖の激戦を経て、明治38年3月の奉天会戦に参加。12月12日に福岡凱旋	福一-1038, 1039, 1047, 1101 / 新福城-43, 181 / 元岡-184 / 田主三-671 / 頼史-184 / 春中-52, 53, 341 / 前全-191 / 久山下-186 / 鞍町下-708
明治40年	明治40年10月、第18師団新設に伴う再編で、歩兵第24連隊は第12師団の第35旅団に編入される	北現-374 / 福一-1101 / 新福城-42, 182
大正7年～8年	大正7年8月、米騒動鎮圧に出勤。同年、シベリア出兵に参加し、14日ウラジオストクに上陸、クラエスフキー駅を占領。ウスリ鉄道、ハバロフスク兵営付近を警備し、大正8年7月に凱旋	北現-375, 378 / 福二-840 / 新福城-43 / 春中-341 / 新志上-860 / 久山下-200, 201, 202,
大正9年	大正9年、新聞紙上で福岡城からの移転論	新福城-45, 46
大正14年	大正14年5月、宇垣軍縮による再編で、新たな歩兵第12旅団（歩兵第35旅団が改称）の隷下に。同年、中国軍閥の争いに応じて、混成一個大隊が派遣されるも、到着前に騒動終結	北現-380 / 新福城-43, 44, 183
昭和7年～8年	昭和7年2月、第一次上海事変勃発により第24連隊も第1大隊が動員下令された。上海派遣混成第24旅団に編成され参戦。昭和8年3月に凱旋	福四-330 / 久三-1032 / 新福城-50, 186 / 筑後二-451 / 春中-341 / 確井-189 / 久山下-245
昭和11年～20年	昭和11年4月、第12師団に満洲国警備の動員下令。第24連隊も満洲に移駐し、ソ連国境警備に当たる。昭和14年8月、速射砲中隊がノモンハン事件に派遣。昭和19年2月、第3大隊が第4派遣隊（後の独立混成第49旅団）に編入され、カロリン諸島のヤップ島へ。その後、他の部隊は第10方面軍に編入されて台湾に移駐（編第8703部隊）し、翌年終戦を迎えた	福昭後-206 / 新福城-50, 186, 187 / 春中-342, 343 / 大野下-607 / 久山下-267, 269 / 鞍郷-245, 246 / 鞍町下-712 / 大任-252
【自治体史頁②】門司-885 / 小倉統-1011 / 福-11, 12 / 福一-1528, 1532, 1533, 1535, 1539, 1555, 1556, 1557, 1558, 1559, 1565, 1577, 1579, 1581, 1582, 1584, 1585, 1587, 1588, 1592 / 福二-1423, 1425, 1443 / 福三-252, 253 / 福四-387, 770, 780, 781, 785, 801, 803 / 福明-253 / 福別-98 / 新福俗一-792, 793, 895 / 新福城-5, 40, 48, 177, 184, 185, 189, 194, 195, 260, 263, 264, 265, 300, 301, 302 / 北崎-107 / 早全-259, 309 / 久中-656, 668 / 続久下-91, 96 / 久六-264 / 久十一-21 / 飯中-497, 498 / 筑穂下-177, 521 / 筑後三-1078, 1112 / 中間中-922 / 春中-349, 362, 876, 877, 879, 881, 883 / 春資-344 / 大野下-534, 535, 536, 563, 569, 581 / 太Ⅲ-360, 361 / 甘下-841 / 馬-232 / 糸島全-375, 376 / 三平-199 / 新志上-918, 952 / 新志下-545, 750, 755 / 槽-571 / 宇-546, 547 / 久山下-155, 159, 195, 207, 208, 209, 210, 211, 213, 224, 231, 237, 238, 241, 242, 250, 258, 259, 265 / 岡-427 / 鞍郡下-1304 / 鞍町下-699, 700, 701, 894, 898, 902 / 三-19 / 香上-1192		

年次	概要	自治体史頁①
歩兵第四十七連隊		
明治29年～大正8年	明治29年9月、歩兵第12旅団に編入、同年11月に歩兵第14連隊内で編成完結。明治31年3月に軍旗親授。第12師団隷下として小倉に駐屯。大正7年8月、シベリアに出兵、翌年7月凱旋	北現-353 / 小倉統-352 / 企-334, 337, 345, 346 / 新福城-42, 43 / 久三-414 / 立花下-24 / 赤-514
大正14年	大正14年、宇垣軍縮に伴う師団再編で、大分県に移駐。第6師団の隷下に	北現-380 / 久三-773
	【自治体史頁②】北現-353, 355, 374, 376, 378, 382, 653, 817, 818 / 北産Ⅱ-634, 700 / 小倉下-596, 602, 603, 609 / 小倉統-338, 347, 352, 1012, 1018, 1019, 1025, 1029 / 小倉補-961, 964 / 企-334, 337, 345 / 戸二-641 / 新福城-42, 43 / 久六-276, 277, 279 / 田主三-670 / 立花下-24 / 春中-362 / 春資-355 / 稲築上-273 / 稿八-6 / 川上-543 / 川下-1075 / 赤-518 / 築城上-533 /	
歩兵第四十八連隊		
明治29年～36年	明治29年11月、福岡城内で歩兵第48連隊が創設された（第12師団隷下）。明治30年4月、久留米の新兵営に移転し、翌年編成完結。明治30年10月、久留米に歩兵第24旅団司令部が開庁すると、歩兵第24連隊とともに同旅団の隷下に入ったが、明治36年には第6師団隷下に移った	北現-355 / 新福城-42, 95, 119, 121, 180, 181 / 久三-414, 415, 416, 426 / 立花下-24 / 川上-543 / 赤-514 / 築城上-533
明治37年～40年	明治37年、日露戦争により第6師団に動員令。大石橋付近の戦闘、遼陽の会戦、沙河の戦い、奉天会戦等に参加。明治39年2月から凱旋。明治40年、第18師団設置に伴いその隷下へ	久中-633, 634, 668 / 久三-416, 417, 419 / 田主三-670, 673 / 北野町-446 / 立花下-252
大正7年～14年	大正7年、シベリア出兵に従軍。大正14年、第18師団廃止に伴って第12師団へ移動	久十一-21
昭和7年～20年	昭和7年、第一次上海事変で第1大隊が混成第24旅団に編入され動員。昭和11年4月、満洲警備に従事。昭和19年11月、台湾へ移動。そのまま終戦となる	久三-1032 / 筑後二-451 / 大野下-607
	【自治体史頁②】新福城-300, 301 / 久上-246, 252 / 久中-664, 665, 666 / 続久下-91, 94 / 久四-18, 20, 28 / 久六-273, 309, 394, 400 / 久十一-21, 27, 41, 42, 90, 112, 214, 231, 238, 244 / 御井-423, 424 / 善導-14 / 八年-181 / 上陽郷-280 / 筑後三-1092, 1110 / 小郡補-493 / 大野下-535, 536, 537, 538, 539, 540, 541 / 大島-543 / 大川村-363 / 三瀧復-642, 643 /	
歩兵第五十二連隊		
昭和20年	第57師団の隷下として大陸から内地に帰還し、福岡県内に配置	戦本-223
歩兵第五十六連隊		
明治38年～41年	明治38年、九州各地の連隊補充隊で編成。当初は第14師団に属し日露戦争に出征、姫路に一時駐屯後、明治41年10月、新設の第18師団隷下に所属変更。兵営場所は三井郡高良内村	戦備-58 / 久中-668, 669 / 久三-419, 420
大正3年～13年	大正3年、第一次世界大戦の青島攻略に参加。大正13年、宇垣軍縮により廃止	久三-767, 773, 774
昭和12年～20年	昭和12年、第18師団の復帰により、第56連隊も再び創設され、同年10月、杭州湾上陸作戦に参加した。昭和16年12月、マレー半島攻略作戦では、佯美支隊としてコタバルに一番乗りで上陸。昭和17年4月、ビルマに転戦。その後各地の戦闘に参加し、終戦を迎えた	久三-1043, 1044 / 筑後二-481 / 春中-349 / 鞍郷-246 / 鞍町下-712 / 添上-641 / 大任-252 / 築城上-714
	【自治体史頁②】福一-1046 / 久中-664 / 続久下-96 / 久四-20 / 久六-286, 325 / 久十一-21, 22, 42, 238 / 筑後三-1092, 1110	
歩兵第七十二連隊 (第2次)		
昭和13年～20年	昭和13年4月、新設の熊本第23師団の隷下として歩兵第72連隊が創設。久留米に本部を設置、第1大隊を小倉、第2大隊を福岡、第3大隊を大村で編成した。昭和14年、第1大隊と第2大隊はノモンハン事件で全滅に近い大打撃（小松原兵団）。昭和15年以降、補充担任は歩兵第23連隊（都城）に。昭和19年10月、動員下令でルソン島へ移動、第14方面軍の隷下に入る	北現-655 / 新福城-50, 186 / 春中-343, 344, 345, 346, 347, 348, 349
歩兵百十三連隊 (西部第四六部隊)		
昭和15年～20年	昭和15年7月、新設の第56師団の隷下として歩兵第113連隊が福岡で編成、城内練兵場や大濠公園で訓練をおこなった。昭和16年11月に動員が発令され、昭和17年2月にビルマ戦線へ出向。同年3月、ビルマのラングーンに到着。さらに中国雲南省に進み、拉孟を中心にその周辺の警備（拉孟守備隊を担当）にあたった。昭和19年6月に中国雲南遠征軍の攻撃を受け、守備隊は全滅。昭和19年末からシャレン地区、カレンと転戦し、終戦を迎えた	北現-652 / 福三-252 / 福昭後-206 / 福別-98 / 新福城-50, 186, 302 / 春中-284, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 380 / 鞍町下-715 / 大任-252 / 大任上-637 / 築城上-714
歩兵百十三連隊補充隊 (目達原作業隊)		
昭和19年～20年	留守第56師団の隷下。昭和19年7月～8月には目達原作業隊を編成し、地元民の協力も得て目達原飛行場の整備強化を行う。昭和20年2月の第156師団編成では、歩兵第453連隊を編成	戦本-35, 88, 109, 133, 219
歩兵百十四連隊		
昭和12年～20年	昭和12年、歩兵第14連隊出身の予備兵により小倉で編成。復活した第18師団に編成され、11月に杭州湾上陸、昭和13年10月にはバイアス湾に上陸し南支作戦に従事した。昭和16年12月、マレー半島に上陸。翌年4月、ビルマのラングーンに至り、各地で戦闘。昭和18年12月、ビルマのミトキイナに移転。以降各地を転進し、ラングーン東シントン川河口で終戦を迎えた	北現-651, 655 / 新福城-50 / 春中-349 / 鞍町下-712 / 香上-1201 / 添上-641 / 赤-521, 523, 573, 574, 575 / 大任-252 / 大任上-636, 637, 638, 639 / 築城上-712, 714, 715
歩兵百十七連隊		
昭和15年～20年	昭和15年8月、秋田市で臨時編成され第57師団に編入。翌年9月に満洲へ渡りソ連国境を警備。昭和20年3月、本土決戦部隊として第57師団と共に北部九州警備のため、満洲から移動。筑紫郡の日佐国民学校に連隊本部を置き、第1大隊本部を福岡市東部の坂瀬、第2大隊本部を筑紫郡大野村上大利字野添、第3大隊本部を福岡市西南の花畑国民学校、歩兵砲大隊本部を日佐村下日佐に配置し、隷下各隊をその周辺に配置した。筑紫郡春日村春日と大野村牛頭にまたがる丘陵地帯を戦闘陣地に選定し、洞窟壕築造に着手、警備のまま終戦となった	戦本-223 / 春中-234, 235, 239, 276, 281, 282, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 307, 308, 309, 390 / 大野下-657, 658, 662, 663, 664
歩兵百二十三連隊 (西部六六部隊)		
昭和15年～20年	昭和15年7月、小倉の第14連隊跡に設置。第66独立歩兵団の隷下。昭和18年6月、第46師団隷下となり、熊本に移動	北現-653, 659
歩兵百二十四連隊		
昭和12年～15年	昭和12年9月、第18師団の再設置に伴い、第18師団第35旅団隷下に歩兵第124連隊が旧福岡城で編成された。11月に第10軍の杭州湾上陸作戦に参加、昭和13年2月には中支那派遣軍に編入。昭和15年2月に第22軍、7月には第23軍に編入され、9月には仏印進駐に参加	北現-651 / 福三-252 / 春中-349, 350 / 鞍郷-246 / 鞍町下-712 / 香上-1199 / 添上-641
昭和16年～20年	昭和16年11月、18師団が第25軍へ編入されると、124連隊（通称号「菊8906部隊」）は、第35旅団（川口支隊）の指揮下に入り、以後18師団とは別行動をとる。昭和17年8月、川口支隊としてガダルカナル島へ上陸、壊滅状態になる。同年5月、連隊は新編の第31師団（烈兵団）に編入のため、ラバウルを出港、補充部隊を合わせて北部ビルマで再編成した。昭和19年3月、インパール作戦に参加。昭和20年3月にはサルウィン河を北上、カバリ村に入り、終戦を迎えた	福昭後-206 / 筑後二-482, 526 / 春中-350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359 / 鞍町下-714 / 赤-524 / 大任上-636 / 築城上-714, 715, 716 /
	【自治体史頁②】福別-98 / 新福俗-793 / 新福城-50, 186, 302	

年次	概要	自治体史頁①
歩兵第三百三十二連隊		
昭和16年～20年	昭和16年7月、秋田で臨時編成され、満洲北部の警備を担当。昭和20年3月、本土決戦に備えて第57師団に配属。福岡県篠栗で終戦となる	戦本-223 / 春中-284
歩兵第四百四十八連隊		
昭和16年～19年	昭和16年12月、久留米で編成され、第56師団の隷下となる。昭和17年3月、ラングーンへ上陸。ビルマ作戦で北上し、ビルマ国境の雲南省騰越付近の警備、掃討作戦を担当。昭和19年夏頃、重慶軍に包圍され、9月に全滅となる	北現-652 / 久十一-21, 35, 36, 37, 38, 42, 93, 216, 219 / 春中-366, 371 / 赤-575, 576, 577 / 築城上-714 / 大任-253
歩兵第四百四十八連隊補充隊 (大刀洗作業隊)		
昭和19年～20年	留守第56師団の隷下。昭和19年7月～9月には大刀洗作業隊を編成し、地元民の協力も得て大刀洗飛行場の整備強化を行う。昭和20年2月の第156師団編成では、歩兵第455連隊を編成	戦本-35, 89, 133, 219
歩兵第百八十七連隊 (西部四六部隊・積15102)		
昭和19年～20年	昭和19年4月、留守第56師団を母体に第86師団編成、隷下として第187連隊が福岡で編成された。同年7月、師団とともに志布志湾沿岸に配備、米軍の上陸に備える中で終戦を迎えた	戦本-52, 87, 184, 336, 337 / 新福城-50, 120, 121, 122, 187, 302 / 春中-377, 378, 379, 380
歩兵第百八十九連隊 (西部四八部隊・積15104)		
昭和19年～20年	昭和19年4月、第86師団新設時に隷下として久留米で編成された。その後、鹿児島県北方の防衛任務に従事した。そのまま終戦となる	戦本-53, 88, 184, 337 / 久十一-43 / 春中-378
歩兵第二百二十五連隊		
昭和14年～20年	昭和14年4月、久留米で編成。5月に博多出港。北支那方面第1軍の第37師団に属した。昭和19年3月、守備隊地を離れ、中国大陸を横断し、タイで終戦を迎えた	北現-655 / 赤-523
歩兵第二百二十六連隊		
昭和14年～16年	昭和14年3月、熊本第37師団の隷下の連隊として福岡で編成完結。第1大隊と第2大隊を福岡歩兵24留守隊、第3大隊を久留米歩兵48留守隊で編成した。同年4月、第1軍に編入され、5月に博多埠頭から中国大陸へ。昭和16年10月には通称号「冬第3544部隊」と呼称	福三-252 / 春中-359, 360, 361, 362
昭和18年～20年	昭和18年11月、大陸通打作戦 (一号作戦) に参加。その後、第37師団に従い、昭和20年1月にハノイに進駐、5月以降はタイ、マレーに南進した。マレーケダ州クリム付近にて終戦	福昭後-206 / 春中-362, 363, 364, 365
【自治体史頁②】 福別-98 / 新福俗一-793 / 新福城-50, 186		
歩兵第二百四十六連隊		
昭和19年	昭和19年7月、第112師団隷下の歩兵第246連隊が福岡で編成された。編成後、南満州へ出征	新福城-50, 187 / 春中-384
歩兵第二百九十二連隊		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備で福岡に新設の第96師団隷下として編成。済州島防衛へ	新福城-189 / 春中-384
歩兵第三百五十八連隊		
昭和20年	昭和20年5月、本土決戦第三次兵備により編成された第312師団の隷下として、第358連隊が久留米で編成された。伊万里～糸島半島間の海岸に配備され、陣地構築中に終戦	戦本-286 / 久十一-45 / 春中-384 /
歩兵第三百五十九連隊		
昭和20年	昭和20年5月、本土決戦第三次兵備で編成された第312師団隷下として、第359連隊の一部が福岡で編成。糸島半島西部、前原地区に配備され、連隊本部を可也山東側の師吉に置く	戦本-286 / 春中-383, 384 / 新福城-189 / 新志上-964, 965, 966 / 新志下-757 /
歩兵第三百六十四連隊		
昭和20年	昭和20年5月に中部軍管区司令官の動員管理で臨時動員、第86師団の編成に	戦本-292, 328, 336, 338, 522, 523
歩兵第四百十七連隊		
昭和20年	昭和20年2月、第56軍隷下の第145師団の右地区隊として、若松市・八幡市の守備を担当	戦本-217, 344, 345 / 北現-664
歩兵第四百十八連隊		
昭和20年	昭和20年2月、第145師団新設時に編成。同師団の中地区隊として、北部九州沿岸に配備	戦本-217, 344, 345
歩兵第四百十九連隊		
昭和20年	昭和20年2月、第145師団新設時に編成。同師団の左地区隊として、北部九州沿岸に配備	戦本-217, 344, 345
歩兵第四百二十連隊		
昭和20年	昭和20年2月、第145師団新設時に編成。同師団の大島守備隊などとして北部九州沿岸に配備	戦本-217, 344, 346
歩兵第四百五十三連隊		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備により、福岡で歩兵第113連隊補充隊を基幹に編成され、第156師団の隷下となった。宮崎において沿岸防衛にあたり、終戦を迎えた	戦本-219, 319, 320 / 新福城-189 / 春中-380, 381, 382
歩兵第四百五十五連隊		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備により、久留米で歩兵第148連隊補充隊を基幹に編成された。編成後、第156師団と共に宮崎において沿岸防衛にあたり、終戦を迎えた	戦本-219, 321 / 久十一-44, 春中-381
歩兵第四百五十六連隊		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備により、臨時動員により久留米で編成された。編成後、第156師団と共に宮崎において沿岸防衛にあたり、終戦を迎えた	戦本-219, 293, 321 / 久十一-44 / 春中-381
歩兵第五百十六連隊		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦第二次兵備による第212師団新設時に久留米で編成。宮崎県に配置	戦本-281 / 久十一-44 / 春中-382
歩兵第五百十七連隊		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦第二次兵備による第212師団新設時に福岡で編成。宮崎県に配置	戦本-281 / 春中-382, 383
第六十六・六十七・六十八要塞歩兵大隊 (独立歩兵第三百十二・三百十四大隊)		
昭和19年～20年	昭和19年2月、福岡で編成。小笠原諸島へ派遣された後、硫黄島へ渡る。後に独立歩兵第312・314大隊と改編され、第109師団に属した。昭和20年の硫黄島の戦いで壊滅	新福城-50, 187 / 春中-384
独立歩兵第二百二十七大隊 (固第6794部隊)		
昭和18年～20年	昭和18年12月、歩兵第113連隊において予備役兵を中心に編成。昭和19年1月に編成完結、独立歩兵第10旅団の隷下に入り、中国山西省へ	春中-374, 375, 376, 377
独立歩兵第六百三十七・六百三十八大隊		
昭和20年	昭和20年3月、離島防衛のため五島に設置された混成第107旅団隷下として、福岡に独立歩兵第637・638大隊が編成された。独立歩兵第637連隊は宍岐・対馬を防衛	戦本-354 / 新福城-189 / 春中-384
対馬要塞歩兵第四・五・六大隊 (福岡歩兵第二補充隊)・迫撃砲第二十六大隊		
昭和20年	昭和20年5月に宍岐・対馬の歩兵部隊増強のため、対馬要塞歩兵第4～6大隊が福岡歩兵第2補充隊から編成され、6月には迫撃砲第26大隊が編成された	戦本-214, 356 / 新福城-189

年次	概要	自治体史頁①
歩兵第十二旅団		
明治18年～28年	明治18年6月、小倉城内に第12旅団本部を設立。歩兵第14連隊と歩兵第24連隊（翌年福岡に創設）を指揮。熊本鎮台の指揮管轄下に置かれる。明治21年5月、鎮台条例廃止で熊本鎮台から第6師団隷下になり、本部は第12旅団司令部と改称された。明治27年、日清戦争に参戦	北現-343, 344, 348 / 北産Ⅱ-634 / 小倉統-336, 351 / 新福俗Ⅰ-794 / 新福城-42, 43, 176 / 久三-414 / 立花下-23 / 豊下-45 / 芦-469 / 金誌-232 / 築城上-533
明治29年	明治29年、西部都督部開庁に伴い、歩兵第12旅団司令部は旧花畑に移転。同年、第12師団新設に伴う再編	北現-352, 353 / 小倉統-341 / 企-345 / 新福城-177 / 鞍町下-708 / 赤-514
明治40年	明治40年、第18師団創設に伴う再編で、歩兵第47連隊と歩兵第72連隊を隷下に。大正7年8月、シベリア出兵に参加	北現-374, 376, 377 / 赤-515
大正14年	大正14年5月、宇垣軍縮に伴う再編により、小倉の歩兵第12旅団は廃止。福岡の歩兵第35旅団が歩兵第12旅団と改称し、歩兵第14連隊と歩兵第24連隊を隷下に	戦備-101 / 北現-380 / 小倉統-352 / 企-327 / 新福城-43, 182 / 久三-773
	【自治体史頁②】小倉下-592, 595, 603, 609 / 小倉統-332, 1006, 1011, 1018, 1019, 1025, 1029 / 小倉補-961, 964 / 福二-1443 / 福四-387, 392 / 新福城-6, 40, 48, 184, 187 / 宇-547 / 芦屋-409 / 芦-469	
混成第十二旅団		
明治27年	明治27年、歩兵第12旅団を基幹に、第6師団指揮下の特科部隊を加えて編成。日清戦争で第2軍に編入され、朝鮮半島から旅順へ。旅順占領後の同年12月、解隊	北現-347, 348 / 福一-1035, 1101, 1556 / 新福城-43, 176, 177, 194, 300 / 久上-209, 210 / 久三-421 / 八下-231 / 筑後二-214 / 浮上-858 / 稲築上-277 / 稿八-31 / 香上-1193 / 添上-635, 1183 / 大任上-630, 631
歩兵第二十三旅団		
明治36年～大正3年	第6師団隷下として大村に創設。明治36年、第12師団隷下に。明治40年、新設の第18師団に移管。大正3年、独立第18師団に加わり、青島攻略に参加。	北現-355 / 新福城-42, 181, 182 / 久三-767 / 春中-340 / 築城上-533
大正13年	大正13年、宇垣軍縮に伴い廃止	久三-773, 1043 /
昭和16年	復活した第18師団の一部として佐美支隊を編成。昭和16年12月8日、コババル上陸作戦を敢行	久三-1043, 1044 / 筑後二-481
	【自治体史頁②】福一-1579, 1581	
歩兵第二十四旅団		
明治29年～40年	明治29年10月、第12師団隷下として久留米に設置。明治30年10月、司令部開庁。歩兵第24連隊と歩兵第46連隊を隷下に。明治36年に再編が行われ、歩兵第48連隊と共に第6師団に移動。明治40年、新設の第18師団に移管	北現-355 / 新福城-42, 177, 181, 182 / 久中-634, 655, 665 / 続久下-91 / 久三-414, 416 / 久四-23 / 久十一-11, 16 / 築城上-533
昭和7年	昭和7年2月、混成第24旅団として、第一次上海事変に出勤	久中-655 / 久三-1032, 1098 / 新福城-50 / 筑後二-451 / 浮上-983
	【自治体史頁②】久六-264	
混成第二十四旅団		
昭和7年	昭和7年の第一次上海事変勃発に伴い、第12師団から1個旅団を派遣。歩兵第24旅団に特科部隊も加えて混成旅団を編成し、2月に上海へ。3月に帰還	北現-648, 649 / 小倉統-339 / 福四-330 / 久三-1032, 1098 / 黒-569 / 春中-341 / 大野下-610 / 福岡四-267 / 添上-639
歩兵第三十五旅団		
明治40年～大正8年	明治40年10月、第18師団創設に伴う再編に合わせて福岡城に設置。歩兵第14連隊と歩兵第24連隊を隷下に。大正7年8月、シベリア出兵に参加し、先遣隊に	北現-374, 375 / 企-353 / 福一-1101 / 新福城-42, 182, 183 / 久山下-202 / 赤-516
大正14年	大正14年5月、宇垣軍縮に伴う小倉歩兵第12旅団廃止により、福岡歩兵第35旅団が歩兵第12旅団と改称。歩兵第14連隊と歩兵第24連隊を隷下に	戦備-101 / 北現-380 / 新福城-43, 183 / 小倉統-336 / 企-327 /
	【自治体史頁②】福一-1040, 1592, 1594, 1595, 1602 / 福二-1406, 1408, 1409, 1417, 1428, 1429, 1443 / 福明-253 / 新福城-301	
歩兵第三十五旅団（第二次歩兵第三十五旅団・川口支隊）		
昭和12年	昭和12年、歩兵第114連隊と第124連隊で再編成。昭和16年以降、歩兵第124連隊等は旅団長の指揮下に川口支隊として編成され、第18師団主力とは別行動をとる。ボルネオ、ミンダナオ攻略後、ガダルカナル島に上陸するが作戦に失敗し、川口支隊長は解任	戦備-348, 356, 359, 372, 373 / 小倉統-336 / 企-327, 353 / 新福城-50, 186 / 春中-350, 351 / 久山下-202 / 赤-516
独立混成第二百二十四旅団		
昭和20年	昭和20年5月、本土決戦準備第三次兵備で臨時動員。第59軍に隷属とされるが、6月には第56軍に転属し、下関要塞守備隊に配属され、藍島など関門地区の戦備強化に当たる	戦本-284, 462, 559, 560
第六十六独立歩兵団（西部六五部隊）		
昭和15年～18年	昭和15年7月、西部軍直轄の第66独立歩兵団（西部65部隊）が設置され、司令部を小倉城の元第12師団司令部跡に置いた。隷下は小倉の歩兵第123連隊（西部66）、佐賀の歩兵第145連隊（西部67）、大分の歩兵第47連隊（西部68）と歩兵第147連隊（西部69）。昭和18年6月に廃止され、隷下の歩兵連隊は第46師団（留守第6師団編成管理に係る）編成に充当	戦本-35, 49, 50 / 戦備-288, 303 / 北現-653, 655, 656
久留米師管区歩兵第一補充隊（西部第四百四十六部隊）		
昭和20年	昭和20年2月に発足。6月には大刀洗飛行場附近の陣地構築と甘木平地への移駐準備が下令	戦本-221, 566
久留米師管区歩兵第二補充隊（西部第四百四十七部隊）		
昭和20年	昭和20年2月に発足。6月には日達原飛行場附近の陣地構築と佐賀平地への移駐準備が下令	戦本-221, 566
久留米師管区歩兵第三補充隊（西部第四百四十八部隊）		
昭和20年	昭和20年2月発足。6月には岡山飛行場附近の陣地構築と大牟田付近での陣地構築準備下令	戦本-221, 566
第二十一警備大隊		
昭和18年～20年	昭和18年5月編成。6月、熊本に移動の小倉歩兵第123連隊跡（旧歩兵第14連隊営舎）に熊本から移駐、八幡製鐵所等を警備。翌年1月、下関要塞司令部に動員され、北九州地区隊に	戦本-51, 94, 146, 147, 148, 149, 150, 193, 347, 560 / 戦備-376 / 北現-659, 661, 664
特設警備第二百五十一大隊		
昭和20年	下関兵団（下関要塞守備隊）の隷下に。下関所在	戦本-560
特設警備第二百五十二大隊（宗六七九六部隊）		
昭和19年～20年	防衛召集による特設警備大隊として福岡市で編成され、隷下に古賀中隊と那珂中隊。昭和19年4月には、第86師団隷下に、昭和20年4月には、久留米師管区司令官隷属部隊に	戦本-53, 95, 221, 560 / 春中-235
特設警備第二百五十四大隊		
昭和20年	昭和20年、下関兵団（下関要塞守備隊）の隷下に。下関所在	戦本-51, 193, 347, 560 / 北現-664
特設警備第二百五十五大隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、特設警備大隊として、下関要塞司令部により動員。小倉所在	戦本-193, 348 / 北現-661, 664

年次	概要	自治体史頁①
特設警備第二百五十六大隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、特設警備大隊として、下関要塞司令部により動員。小倉所在	戦本-193, 348 / 北現-661, 664
特設警備第二百五十七大隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、特設警備大隊として、下関要塞司令部により動員。戸畑所在	戦本-193, 348 / 北現-661, 664
第二百一特設警備工兵隊		
昭和20年	昭和20年、下関兵団（下関要塞守備隊）の隷下に。下関・門司に所在	戦本-51, 149, 193, 348, 560 / 北現-665
第二百二特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、特設警備工兵隊として、下関要塞司令部により動員。小倉に配備	戦本-51, 149, 193, 348, 560 / 北現-661, 665
第二百三特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月～20年、特設警備工兵隊として、下関要塞司令部により動員。八幡に配備	戦本-51, 149, 193, 348, 560 / 北現-661, 665
第二百四特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、特設警備工兵隊として、下関要塞司令部により動員。戸畑・若松に配備	戦本-51, 149, 193, 348, 560 / 北現-661, 665
第二百八特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年9月、臨時編成。留守第56師団の隷下として、芦屋に配置。昭和20年4月には、久留米師管区司令官隷属部隊に	戦本-150, 221
第二百九特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年9月、臨時編成。留守第56師団の隷下として、福岡、雁ノ巣に配置。昭和20年4月には、久留米師管区司令官隷属部隊に	戦本-151, 221
第二百十特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年9月、臨時編成。留守第56師団の隷下として、大井洗に配置。昭和20年4月には、久留米師管区司令官隷属部隊に	戦本-151, 221
第二百十一特設警備工兵隊		
昭和19年～20年	昭和19年9月、臨時編成。留守第56師団の隷下として、目達原に配置。昭和20年4月には、久留米師管区司令官隷属部隊に	戦本-151, 221
騎兵第十二連隊		
明治29年～大正7年	明治29年に熊本第6師団で創設。明治30年9月1日、第6師団から新たに創設された第12師団に移設した。明治37年、日露戦争に出征。明治40年の第18師団創設時も第12師団隷下にとどまる。大正7年、シベリア出兵に出征	北現-353, 374, 375 / 北産Ⅱ-634 / 小倉統-352 / 企-347, 348 / 久中-663 / 久十一-23 / 桶榮上-273 / 岡-427 / 赤-514
大正14年	大正14年、宇垣軍縮に伴う再編で第12師団とともに久留米に移動し、騎兵第22連隊跡に移駐	北現-380 / 小倉統-353 / 企-349 / 久三-773, 774
昭和11年～19年	満州へ移駐。昭和19年に復員	久十一-23
【自治体史頁②】小倉下-595, 596 / 小倉統-1012, 1036 / 小倉補-961 / 早全-298 / 久四-20 / 久六-325, 387 / 筑後三-1092 / 大野下-534 /		
騎兵第二十二連隊		
明治41年～大正3年	明治41年2月、第18師団隷下として、東京および習志野から三井郡高良内村へ移駐。大正3年、青島攻略に参加。	久中-663, 669 / 続久下-96 / 久三-419, 420, 766
大正14年	大正14年、宇垣軍縮に伴い廃止され、騎兵第12連隊と編合された	久三-773, 774 /
【自治体史頁②】久六-285, 325 / 久十一-23 / 筑後三-1102		
騎兵第二十二大隊		
昭和12年	昭和12年9月に編成。中南支、マレー、ビルマ作戦に従い、昭和18年復員	久十一-23
捜索第五十六連隊		
昭和16年	昭和16年11月、第56師団と共に久留米で編成。フィリピン、ジャワ、マレー、ビルマ、雲南を転戦	戦本-35, 89 / 春中-366 / 久四-20 / 久十一-23
騎兵第八十六連隊（西部五〇部隊）		
昭和19年	昭和19年4月の第86師団編成時に、隷下部隊として久留米で編成	戦本-53
第一戦車隊（戦車第一大隊）・戦車第一連隊		
大正14～昭和12年	大正14年以降、宇垣軍縮に伴い新設され、軍縮で廃止された歩兵第56連隊跡に駐屯。第12師団に所属。昭和6年、満州事変に出動。昭和8年、戦車第1大隊より戦車第1連隊に改編	戦備-100 / 久中-664 / 久三-774, 1031 / 久四-20 / 久十一-22
昭和16年	昭和12年、第二次上海事変へ。昭和16年9月、補充隊が久留米に復帰。本隊は昭和17年2月、シンガポール作戦に参加し、ビルマから満州へ。昭和20年3月、東京に移駐し、佐野市で終戦	戦本-24, 35, 90 / 戦備-246 / 久三-1040 / 久十一-22, 28, 46
戦車第十八連隊		
昭和17年～20年	昭和17年6月、戦車第1連隊補充隊を基幹に西部軍直轄部隊として久留米で編成。昭和20年2月、第16方面軍の戦闘序列に。昭和20年4月には、独立戦車第5旅団に編合	戦本-51, 90, 192, 197, 283 / 戦備-438
独立戦車第三十二大隊		
昭和19年～20年	昭和19年7月、久留米の戦車第18連隊の在営基幹人員などを充当して臨時動員。昭和20年2月、第16方面軍の戦闘序列に。昭和20年4月、戦車第40連隊に改称	戦本-90
戦車第四十連隊		
昭和20年	昭和20年4月、独立戦車第32大隊から改組。独立戦車第6旅団に編合	戦本-90, 283
戦車第四十六連隊		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦準備第二次兵備で西部軍管区により臨時動員され、第16方面軍、次いで第56軍の戦闘序列に編入。原田・甘木付近に展開し、陣地構築と訓練に	戦本-278, 282, 283, 340, 352, 353, 469 / 戦備-484 / 久十一-22, 45
独立戦車第四旅団		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦準備第二次兵備で中部軍管区により臨時動員。第16方面軍、次いで第56軍の戦闘序列に編入。福丸・福岡付近に配備	戦本-278, 282, 283, 340, 344, 352, 353, 469, 514, 515, 516, 517, 518, 536, 554 / 戦備-484
独立戦車第五旅団		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦準備第二次兵備で西部軍管区により臨時動員。第16方面軍、次いで第57軍の戦闘序列に編入され宮崎付近へ	戦本-90, 278, 282, 283, 309, 352, 353, 469, 506, 515, 516, 517, 518, 520, 521, 525, 536 / 戦備-484 / 久十一-46
独立戦車第六旅団		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦準備第二次兵備で西部軍管区により臨時動員。第16方面軍、次いで第57軍の戦闘序列に編入され霧島付近へ。6月には第40軍の指揮下に入り、薩摩半島へ移動	戦本-90, 278, 282, 283, 309, 352, 353, 469, 471, 515, 517, 522, 536, 539 / 戦備-484 / 久十一-46

年次	概要	自治体史頁①
山砲兵第三大隊・山砲兵第三連隊・独立山砲兵第三連隊		
明治41～大正11年	明治41年3月、第十八師団隷下として、小倉より三井郡国分村へ移駐。大正6年12月、山砲兵第3連隊と改称、大正11年8月、山梨軍縮に伴う再編で、独立山砲兵第3連隊に改組	戦備-91 / 久中-659 / 久三-419, 420 / 久六-285 / 久十一-29 / 筑後三-1102
昭和7年	昭和7年2月、第2大隊が混成第24旅団に編入され、第一次上海事変に出動	小倉統-332 / 久中-659 / 久三-1032 / 久四-23 / 久十一-29, 47 / 久山下-263 / 甘下-841
山砲兵第二百十二連隊		
昭和20年	昭和20年4月、第212師団に臨時動員時に、独立山砲兵第10連隊から称号変更して編入	戦本-281
野戦砲兵第十二連隊・野砲兵第十二連隊・山砲兵第十八連隊		
明治29年～38年	明治29年11月、熊本野戦砲兵第6大隊を基幹に、野戦砲兵第12連隊として創設。第12師団隷下に。明治30年7月、小倉北方に移駐。明治32年に編成完結。明治37年、日露戦争に出動	北現-353 / 北産Ⅱ-634 / 小倉下-595, 5961 / 新福城-43 / 北野町-452 / 赤-514 / 大平-255
明治40年～大正7年	明治40年10月、野砲兵第12連隊に改称。同年の第18師団創設時も第12師団隷下にとどまる。大正7年のシベリア出兵に参加。大正11年8月、野戦重砲兵第2旅団の隷下に	北現-374, 375 / 小倉統-331 / 久中-659 / 岡-427 /
大正14年	大正14年5月、宇垣軍縮に伴い廃止。	小倉統-332, 334 / 久三-773, 774
昭和12年～20年	昭和12年10月、第18師団隷下として再編成。同年11月以降、中南支作戦へ。昭和14年8月、山砲兵第18連隊に改編。昭和16年12月、マレー半島上陸、ビルマなどへ転戦	久三-1043 / 久十一-24, 42 / 大島-556
【自治体史頁②】小倉統-353, 1012, 1029 / 小倉補-961, 964 / 企-349, 350 / 勝下-59		
野砲兵第十八連隊		
昭和12年	昭和12年、第18師団の再編成に合わせて発足（上記の野砲兵第12連隊=山砲兵第18連隊の誤記か）	春中-349
野砲兵第二十四連隊		
明治41年	明治41年2月、第18師団隷下として、熊本より三井郡国分村へ移駐。大正3年、青島攻略戦に出動。大正14年、第18師団廃止により第12師団の野戦重砲兵第2旅団の隷下へ。昭和11年渡満、昭和19年台湾へ	小倉統-332 / 統久下-96 / 久中-658, 659 / 久三-419, 420 / 久四-23 / 久六-285 / 久十一-24, 41 / 筑後三-1102 / 芦屋-510 / 芦-476 /
野砲兵第五十六連隊		
昭和16年	昭和16年11月、第56師団とともに久留米で編成。フィリピン、ジャワ、マレー、ビルマ、雲南を転戦	戦本-35, 89 / 久四-23 / 久十一-12, 24, 35, 38, 43, 192, 197, 198, 203 / 春中-366
野砲兵第五十七連隊（〔奥〕第七二二部隊）		
昭和15年	昭和15年7月、弘前で編成。翌年大陸へ。昭和20年3月、第57師団と共に福岡県に。本部は久山村の龍興寺。5月、大野村瓦田の大野国民学校に移駐。洞窟壕陣地築造に当たり、終戦	戦本-223 / 春中-281, 282, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 309, 368 / 大野下-664, 658, 659 /
野砲兵第八十六連隊		
昭和19年	昭和19年4月の第86師団編成時に、隷下部隊として久留米で編成	戦本-53, 88, 337, 338 / 久十一-43
迫撃砲第二十七大隊		
昭和20年	昭和20年7月、第145師団の指揮下に入り、福岡県北部沿岸要域に配備。赤間町で終戦	戦本-344 / 久十一-45
野戦重砲兵第五連隊（西部七二部隊）		
明治40年～大正8年	明治40年、重砲兵第5連隊として下関に創設、大正8年11月、小倉北方に移駐	北現-374, 380 / 小倉統-331, 332 / 企-329, 330 /
昭和12年～20年	昭和12年、野戦重砲兵第2旅団に動員下令となり、中国北部に出動。北方で補充隊発足。昭和14年9月に復員、翌年西部軍の隷下に。昭和16年に再び東満洲に出動。後にビルマに転戦	北現-651 / 小倉統-333 / 北現-652, 653, 655
野戦重砲兵第五連隊補充隊		
昭和12年～20年	昭和12年、野戦重砲兵第5連隊の出動に伴い、補充隊として北方に発足。西部軍砲兵隊に属する。5号野戦砲兵廠、野戦重砲兵第13連隊など25個以上の部隊を動員編成	戦本-35, 89, 197 / 北現-651, 659, 662
野戦重砲兵第六連隊		
明治40年～大正14年	明治40年、重砲兵第6連隊として下関に創設、大正14年5月、宇垣軍縮に伴う再編により、小倉北方に移駐	北現-374, 380 / 小倉統-331, 334, 335 / 企-330, 331 / 久三-773, 774
昭和6年～20年	昭和6年12月より第2大隊が満洲事変、第一次上海事変に派遣。昭和12年7月、野戦重砲兵第2旅団に動員下令、中国北部に出動。北方に補充隊。北支第12軍直轄として終戦まで留まる	北現-648, 649 / 北現-651 / 北現-652
野戦重砲兵第六連隊補充隊（西部七三部隊）		
昭和12年～20年	昭和12年、野戦重砲兵第6連隊の出動に伴い、補充隊として北方に発足。西部軍砲兵隊に属する。野戦重砲兵第14連隊など13個以上の部隊を動員編成	戦本-35, 197 / 北現-651, 653, 659, 662
野戦重砲兵第十三連隊		
昭和19年～20年	昭和19年7月7日、野戦重砲兵第5連隊補充隊で編成。主力は西部軍の隷下に。有明湾（志布志湾）沿岸で陣地構築。昭和20年2月、第16方面軍、4月には第57軍の戦闘序列に編入	戦本-89, 90, 138, 192, 201, 309, 511 / 戦備-431 / 北現-651, 657, 662
野戦重砲兵第二十九連隊		
昭和20年	昭和20年4月頃、第145師団の指揮下に。福岡県北部沿岸要域に配備	戦本-343, 344, 345
野戦重砲兵第五十四連隊		
昭和19年～20年	昭和19年7月7日、野戦重砲兵第6連隊補充隊で編成。昭和20年2月、第1次兵備下令に伴い、第16方面軍の戦闘序列に。4月には第57軍の戦闘序列に編入	戦本-90, 192, 309, 511 / 戦備-431 / 北現-658, 662
野戦重砲兵第二旅団		
明治42年～大正14年	明治42年、重砲兵第2旅団として創設、大正14年5月、宇垣軍縮に伴う再編により、小倉城内の歩兵第12旅団司令部跡に移駐	北現-374, 380 / 小倉統-331 / 久三-773
昭和3年～14年	昭和3年、小倉工廠設置のため、小倉城内から第12師団司令部跡に移駐。昭和12年7月、日中戦争で動員下令、中国北部に出動し各地を転戦。昭和14年5月に帰還、後に西部軍に編入	北現-382, 651, 652 / 小倉統-332
野戦重砲兵第六旅団		
昭和12年～14年	昭和12年8月、野戦重砲兵第5連隊・第6連隊の補充隊により編成。野戦重砲兵第13連隊・第14連隊を隷下に、中国北部に出動。昭和14年10月に復員	北現-651, 652 / 久三-1036
第三十三野戦勤務隊本部（西部一二五〇）		
昭和20年	昭和20年3月、野戦重砲兵第5連隊補充隊で編成。第16方面軍の下で本土と中国の輸送業務	北現-657, 662
第三十四野戦勤務隊本部		
昭和20年	昭和20年3月、野戦重砲兵第6連隊補充隊で編成。第16方面軍の下で本土と中国の輸送業務	北現-658, 662
西部軍砲兵隊・西部軍管区砲兵隊（西部七一部隊）		
昭和15年～18年	昭和15年7月、野戦重砲兵第2旅団を改編し、西部軍砲兵隊司令部を設置。昭和18年8月には、壱岐・対馬・長崎・豊予・下関の各要塞重砲兵連隊を含めた各種砲兵部隊を指揮監督	戦本-24, 35, 51 / 北現-653, 656, 659
昭和19年～20年	昭和19年7月より野戦重砲兵第13連隊も加え、志布志湾で陣地構築。昭和20年2月、西部軍管区砲兵隊に。司令部は小倉。野戦重砲兵第5・第6連隊や下関重砲兵連隊の補充隊を指揮	戦本-135, 138, 139, 197, 199, 201, 202, 398

年次	概要	自治体史頁①
機関砲第三大隊 (西部八〇八八部隊)		
昭和16年	昭和16年11月、西部防空旅団の隷下として、枝光に設置	戦本-44 / 戦備-376 / 北現-654
機関砲第二十一大隊 (西部八〇八八部隊)		
昭和19年 ～20年	昭和19年6月に枝光に設置。西部高射砲集団隷下。昭和20年4月、高射第4師団隷下に。5月に一部が北九州高射砲隊編入、北九州・関門の防空に。一部は第56軍に配属、博多港や大刀洗飛行場、鳥栖機関庫、山家の司令所の防空に。第57軍や熊本師管区にも一部が配属	戦本-367, 369, 370, 371, 511, 512 / 北現-659
第一機関砲教育隊		
昭和19年 ～20年	昭和19年11月、小倉北方に設置。昭和20年2月、西部軍管区に編合	戦本-197 / 北現-657, 659
高射砲第一連隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として設置	戦本-28 / 北現-654
高射砲第四連隊		
昭和13年 ～20年	昭和13年7月、大刀洗飛行場防空のため対空砲火部隊として、朝倉郡立石村一ツ木に高射砲第4連隊が開隊。後に西部軍直轄部隊となる。昭和18年6月、南方戦線防空のため補充隊を中心に「野戦高射砲第64大隊」を編成、7月にニューギニアへ。その後、南方各地を転戦し終戦	戦本-51 / 戦備-143 / 甘下-272 / ひ-435 / 朝-541 / 三町-396 / 筑前下-127, 129 / 大刀-325
防空第二十一連隊・高射砲第三十一連隊 (西部八〇六一部隊)		
昭和16年 ～20年	昭和16年11月、西部防空旅団隷下として若松・八幡に設置。昭和19年6月、西部高射砲集団への改編で高射砲連隊に。昭和20年4月、高射第4師団隷下に。5月、北九州高射砲隊へ編入	戦本-29, 43, 79, 193, 367, 369, 380 / 北現-654, 659
防空第二十二連隊・高射砲第三十二連隊 (西部八〇六二部隊)		
昭和16年 ～20年	昭和16年11月、西部防空旅団隷下として小倉・戸畑に設置。昭和19年6月、西部高射砲集団への改編で高射砲連隊に。昭和20年4月、高射第4師団隷下に。5月、北九州高射砲隊へ編入	戦本-29, 44, 79, 193, 367, 368, 369 / 北現-654, 659
防空第二十三連隊・高射砲第三十三連隊 (西部八〇六三部隊)		
昭和16年 ～20年	昭和16年11月、西部防空旅団隷下として下関・門司に設置。昭和19年6月、西部高射砲集団への改編で高射砲連隊に。昭和20年4月、高射第4師団隷下に。5月、一部が北九州高射砲隊へ編入され北九州の防空に。一部は第56軍に配属、大刀洗飛行場や山家の司令所を防空	戦本-29, 44, 79, 193, 367, 369, 370 / 北現-654, 659
防空第二十四連隊・高射砲第三十四連隊		
昭和18年 ～20年	昭和18年8月、西部防空旅団編成時に長崎に設置。昭和19年6月、西部高射砲集団への改編で高射砲連隊に。昭和20年4月、高射第4師団隷下。5月、第56軍に配属、引き続き長崎を防空	戦本-44, 79, 193, 367, 371, 567, 569, 582 / 北現-654, 659
防空第二十五連隊		
昭和16年 ～19年	昭和16年11月、広島防空のため、独立高射砲第1大隊と独立照空第1大隊を合わせて編成。昭和19年4月、福岡県の芦屋に移駐。6月、高射砲第135連隊と改称、11月に解散。	戦本-29 / 春中-311
高射砲第三十五連隊		
昭和19年	昭和19年6月、防空第25連隊より改称。若松並びに遠賀川流域に配置。11月には解散し、独立高射砲第22大隊(広島)と、独立照空第21大隊(福岡県春日村)に改編	戦本-143 / 春中-311
高射砲第三十六連隊		
昭和20年	昭和20年4月、高射第4師団新設に伴い臨時動員。後に第57軍防空隊に配属	戦本-367, 512 / 北現-659
独立高射砲第二大隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として、若松・八幡に設置	戦本-28 / 北現-654
独立高射砲第三大隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として、小倉に設置	戦本-28 / 北現-654
独立高射砲第二十一大隊		
昭和19年 ～20年	昭和19年10月、西部高射砲集団の隷下として臨時編成下令。昭和20年4月、高射第4師団の編成でその隷下に。5月には久留米師管区に配属、久留米や大牟田などの防空に当たる	戦本-143, 193, 367, 371
独立高射砲第二十二大隊		
昭和19年 ～20年	昭和19年10月、西部高射砲集団の隷下として臨時編成下令。昭和20年5月には一部が北九州高射砲隊へ編入され、北九州・関門附近の防空に当たる	戦本-143, 369
独立高射砲第二十三大隊 (西部八〇七五部隊)		
昭和19年 ～20年	昭和19年6月、西部高射砲集団の隷下として八幡に設置。昭和20年4月、高射第4師団の編成でその隷下に。5月には北九州高射砲隊へ編入され、北九州・関門附近の防空に当たる	戦本-79, 193, 367, 369 / 北現-659
独立高射砲第二十四大隊		
昭和19年 ～20年	昭和19年10月、西部高射砲集団の隷下として臨時編成下令。昭和20年4月、高射第4師団の編成でその隷下に。5月には北九州高射砲隊へ編入され、北九州・関門附近の防空に当たる	戦本-143, 193, 367, 369
独立高射砲第四十三大隊		
昭和20年	昭和20年4月、高射第4師団新設に伴い臨時動員	戦本-367
野戦高射砲第九十八大隊		
昭和20年	昭和20年4月、高射第4師団新設に際し、その隷下に	戦本-367
第二十一防空気球隊・第二十一要地気球隊 (西部八〇六九部隊)		
昭和16年 ～20年	昭和16年11月、西部防空旅団隷下として童子丸に設置。昭和19年6月、西部高射砲集団への改編で要地気球隊に再編。昭和20年4月、高射第4師団隷下に。5月、北九州高射砲隊へ編入	戦本-29, 44, 79, 193, 367, 369 / 北現-654, 659
独立照空第一大隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として、小倉に設置	北現-654
独立照空第二大隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として、若松・八幡に設置	北現-654
独立照空第三大隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉防空隊の隷下として、小倉に設置	北現-654
独立照空第二十一大隊		
昭和16年 ～20年	昭和16年7月、広島要塞地防空のため独立高射砲第1大隊と独立照空第1大隊が編成され、両大隊で防空第25連隊が編成された。昭和19年4月、芦屋飛行場援護のため福岡県に移駐し、連隊本部を芦屋海水浴場に設置。同年6月、高射砲第135連隊と改称、高射砲大隊と照空大隊に。高射砲大隊本部は芦屋の連隊本部に同居、照空大隊本部は遠賀郡岡垣町海老津に設置。また第五中隊(照空中隊)を一時期博多附近に配置している。昭和19年11月、連隊は解散し、独立高射砲第22大隊(広島へ移駐)と独立照空第21大隊に改編。独立照空第21大隊は春日村小倉に転進した。昭和20年4月、高射第4師団の隷下に。5月には第56軍に配属され、福岡市の防空に当たった	戦本-143, 193, 367, 371 / 春中-281, 311, 312, 313 / 大野下-659, 660, 661 /

年次	概要	自治体史頁①
小倉防空隊		
昭和16年	昭和16年7月、小倉に防空隊が設置され西部軍に編入。隷下部隊は小倉防空隊司令部（現西南女子短期大学）、高射砲第1連隊、独立高射砲第2・第3大隊、独立照空第1・第2・第3大隊、聴測第4・第5中隊、第4防空気球隊（若松・野戦重砲兵第6補充隊）、防衛通信隊（小倉）など	戦本-27、28 / 北現-653、654、659
西部防空旅団・西部防空集団・西部高射砲集団（西部八〇六〇部隊）		
昭和16年	昭和16年11月、北九州工業地帯、特に造船廠・兵器補給廠の防空強化のため小倉防空隊を改編して西部防空旅団（西部8060部隊）設置。12月に編成完結し西部軍に編入、広島や鹿児島等の防空部隊も指揮。北部九州の隷下部隊は防空第21連隊（西部8061）、同第22連隊（西部8062）、同第23連隊（西部8063）、第21防空気球隊（西部8069）、機関砲第3大隊（西部8088）など	戦本-29 / 戦備-377 / 北現-654
昭和18年	昭和18年8月15日、西部防空集団と改称。到津に司令部を置き、防空第21・第22・第23連隊、独立高射砲第21・22・23中隊、機関砲第3大隊、第21防空気球隊などを指揮下に	戦本-43、44、51、68、71、77 / 戦備-379 / 北現-659
昭和19年	昭和19年6月1日、西部高射砲集団に改編、北九州（および長崎・広島・福岡・大牟田）の防空強化を図る。隷下部隊は、高射砲131連隊（西部8061）、高射砲132連隊（西部8062）、高射砲133連隊（西部8063）、独立高射砲第23大隊（西部8075）、機関砲第21大隊（西部8088）、第21要地気球隊（西部8069）など。福岡や大牟田にも、独立高射砲中隊を配置	戦本-78、79、83、141、143、145、193 / 戦備-424、456 / 北現-659
昭和20年	昭和20年2月、第16方面軍の戦闘序列に入る。昭和20年4月28日、高射第4師団に改編	戦本-179、293、366、367 / 戦備-486 / 北現-662
【自治体史頁②】 戦本-39		
高射第四師団（彗）		
昭和20年	昭和20年4月、高射第4師団が臨時動員。西部高射砲集団の部隊に他の部隊も編入された。指揮下には高射第131・132・133・134・136連隊、独立高射砲第21・23・24・43大隊、野戦高射砲第98大隊、独立照空第21大隊、第21要地気球隊など。動員完結後の5月8日、師団司令部と主力は第57軍の指揮下に入り南九州に配備された（一部は北九州高射砲隊へ）	戦本-353、359、366、367、368、370、374、375、376、377、379、380、381、382、383 / 戦備-487 / 北現-665 / 筑紫下-1011 / 玄-527 /
昭和20年	通信網障害で各地区高射砲部隊の指揮・運用が難しくなって8月7日に第16方面軍直轄となり、司令部の南九州から福岡県筑紫村への転進が下令、転進中に終戦を経つ17日に完了	戦本-470、477、478
第四高射砲隊司令部（北九州高射砲隊）		
昭和20年	昭和20年5-6月、高射第4師団主力の南九州展開後、北九州地区防空の指揮統一のため、昭和20年5月に動員。高射第4師団の一部などで編成。小倉に位置し、第16方面軍の指揮下で北九州の防空に当たる。また関門海峡防空強化のため、小倉・八幡の部隊を移動	戦本-368、369、373、374、375、376、377、379、479 / 北現-665 / 北総-457 /
工兵第十二大隊		
明治29年～40年	明治29年11月、熊本に工兵第6大隊を基幹に工兵第十二大隊第1中隊を創設。第12師団隷下に。明治30年6月、小倉北方に移設。明治31年11月に第3中隊まで編成完結。明治37年、日露戦争に出動。明治40年の第18師団創設時も第12師団隷下にとどまる。	北現-353、374、375、380 / 北産Ⅱ-634 / 小倉下-595、596 / 小倉統-347、353 / 企-334、351、352、353、354、355 / 新福城-43 / 久中-659 / 善導-19 / 稲築上-273 / 朝-424 / 赤-514 / 大平-255
大正14年	大正14年、宇垣軍縮に伴う軍制改革にて廃止	久三-773 /
【自治体史頁②】 小倉下-595、596 / 小倉統-1012、1029 / 小倉補-961、964 / 久十一-25 /		
工兵第十二連隊		
昭和12年～16年	昭和12年9月、第18師団の隷下で工兵第十二連隊が編成。昭和16年12月、第2中隊がコタバル上陸作戦に参加	久三-1043 / 久十一-25、42
工兵第十八大隊・工兵第十八連隊 / 爆弾三勇士（肉弾三勇士）		
明治42年～大正3年	明治42年、第18師団の隷下として、小倉より三井郡御井村に移駐。大正3年、第一次世界大戦で青島攻略へ	北教-254 / 久中-660、661 / 久三-419、421、422、766 / 久四-22 / 御井-424 / 朝-424、425
昭和初期	糸島の加布里湾で上陸演習、後の船舶工兵に。北九州防空演習では山上に道路建設	若松全（後編）-629 / 志摩-871 / 新志上-946、947
昭和7年～11年	昭和7年2月、第2中隊が混成第24旅団に編入され、第一次上海事変に出動。爆弾三勇士も。昭和11年4月に満州へ。同年6月、連隊に改編。昭和19年台湾に移駐し、翌年終戦【爆弾三勇士】 昭和7年2月の第一次上海事変に工兵第十八大隊は第2中隊を派遣。上海派遣混成第24旅団に編入された。工兵隊は鉄条網破壊による突撃路の開闢に奮戦した。爆弾筒の爆裂に身を投じて開闢したのは、工兵第二中隊の爆弾三勇士だった。昭和8年、多くの義援金により、久留米市公会堂前に三勇士の銅像を建設、石橋正二郎の寄贈により三勇士記念館が建てられた	続久上-20、645 / 続久下-95、183、184、109、110 / 久三-1032、1033、1097、1098、1099、1100 / 北野町-452 / 城島-278、279 / 筑後二-451 / 大野下-610 / 碓井-190 / 鞍町下-712、717 / 福四-781 / 久六-344、349、384 / 善導-18 / 春中-341、342 / 浮上-983 / 馬-820 / 新志下-755 / 宇-547 / 久山下-248 / 添上-639
【自治体史頁②】 久上-211 / 久六-288、397、414 / 久十一-25 / 善導-19 / 筑後三-1102、1127 / 大野下-534 / 新志下-755 / 久山下-260 / 稿八-32		
工兵第五十六連隊		
昭和16年	昭和16年11月、第56師団とともに久留米で編成	戦本-35、89 / 久十一-12、25、34、36、38、43、93、113 / 春中-366、372
工兵第五十七連隊		
	第57師団の隷下として大陸から内地に帰還し、福岡県内に配置	戦本-223 / 春中-284
工兵第八十六連隊		
昭和19年	昭和19年4月の第86師団編成時に、隷下部隊として久留米で編成。終戦時は鹿児島川東	戦本-53、88、337、338 / 久十一-43
独立工兵第十一連隊・船舶工兵第二連隊（丁・曉一六〇六）		
昭和12年～20年	昭和12年7月、第12師団留守部の工兵第十八連隊補充隊で動員。昭和17年8月、シンガポールで船舶工兵第二連隊に改組。南方各地を転戦し、全滅寸前で終戦を迎えた	新志上-947
独立工兵第二十六連隊・船舶工兵第六連隊		
昭和15年～20年	昭和15年2月、久留米工兵第十八連隊補充隊で編成。昭和16年にマレー半島上陸。昭和17年6月、北方に転戦。8月、船舶工兵第六連隊に改組。一部はアッツ島で玉砕。その後南千島を警備し終戦	新志上-947
独立工兵第七十一大隊		
昭和20年	昭和20年4月頃、第145師団の指揮下に。北部九州の沿岸要域に配備	戦本-343
海上輸送第二十七大隊（曉一五一四〇）		
昭和20年	終戦時、門司に所在	北現-666
特設海上輸送団司令部（曉二九四〇）		
昭和20年	終戦時、若松に所在	北現-666
海上挺身第三十三戦隊		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。水上特攻艇部隊。7月に第16方面軍編入。玄界灘沿岸などに配備	戦本-474、475

年次	概要	自治体史頁①
海上挺身第三十四戦隊 (暁一九八四九)		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。水上特攻艇部隊。7月に第16方面軍の戦闘序列編入。玄海灘沿岸などに配備。終戦時、若松または折尾に所在	戦本-474, 475 / 北現-666
海上挺身第三十八戦隊		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。水上特攻艇部隊。7月に第16方面軍編入。玄海灘沿岸などに配備	戦本-474, 475
第三海上挺身整備隊		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。挺身戦隊の整備部隊。7月に第16方面軍に編入。玄海灘沿岸などに配備	戦本-474, 475
第四海上挺身整備隊 (暁一九八六九)		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。海上挺身戦隊の整備部隊。7月に第16方面軍の戦闘序列編入。玄海灘沿岸などに配備。終戦時、若松または折尾に所在	戦本-474, 475 / 北現-666
第八海上挺身整備隊		
昭和20年	昭和20年5月に臨時動員。整備部隊。7月に第16方面軍編入。玄海灘沿岸などに配備	戦本-474, 475
船舶兵団司令部 (宇品)		
昭和17年 ～20年	昭和17年7月、船舶兵団司令部 (暁6167) を広島県宇品に設置し、船舶輸送を統一。船舶部隊は通称号「暁」で「暁部隊」として知られる。門司港で編成の船舶部隊は、第1船舶輸送司令部 (暁6168)、船舶砲兵第2連隊 (暁2954)、終戦時に北九州所在の船舶部隊は、第67碇泊場司令部 (暁16756)、第1船舶輸送司令部北九州支部 (暁6169)、第4機動輸送隊本部、陸上勤務第204中隊 (暁19890)、海上輸送第27大隊 (暁15140)、船舶機関砲第2連隊 (暁6179) など	北現-666
船舶砲兵第二連隊 (暁二九五四)		
昭和17年	昭和17年7月7日、門司港で編成	戦本-188 / 北現-666
船舶機関砲第二連隊 (暁六一七九)		
昭和20年	昭和20年3月時点で、門司港に所在。船舶砲兵団 (宇品) の隷下。終戦時、小倉に所在	戦本-188 / 北現-666
第一機動輸送隊本部		
昭和20年	昭和20年3月時点で、門司港に所在。船舶司令部 (宇品) の隷下	戦本-188
第四機動輸送隊本部		
昭和20年	終戦時、門司に所在	北現-666
第一船舶輸送司令部 (暁六一六八)		
昭和17年 ～20年	昭和17年7月、門司港で編成。昭和19年10月より、門司中学校や門司高等学校の校舎を使用。北九州船舶隊や朝鮮船舶隊を指揮し、朝鮮からの輸送や南西諸島への突入輸送を指揮	戦本-187, 401, 402 / 戦備-358, 382 / 北現-666 / 北教-253, 254
第六十七碇泊場司令部 (暁一六七五六)		
昭和20年	終戦時、門司に所在	北現-666
北九州船舶隊		
昭和20年	第1船舶輸送隊の隷下として、北九州支部や三角支部、特設水上勤務第134中隊などを指揮	戦本-187, 188
第一船舶輸送司令部北九州支部 (暁六一六九)		
昭和20年	終戦時、門司に所在	戦本-188, 189, 401 / 北現-666
輜重兵第十二大隊		
明治29年 ～大正14年	明治29年、熊本第6師団の輜重兵第6大隊を基幹に創立された。第12師団隷下となる。明治31年10月、第2中隊まで編成完結し、11月に小倉・北方に移転。明治37年に日露戦争に出動。明治40年の第18師団創設時も第12師団隷下にとどまる。大正3年の青島出征、大正7年のシベリア出兵に参加。大正14年、宇垣軍縮に伴い廃止	北現-354, 374, 376, 380 / 北産Ⅱ-634 / 小倉下-595, 597 / 小倉統-354, 1012, 1013, 1029 / 小倉補-961, 964 / 企-334, 355, 356 / 新福城-43 / 久中-661 / 久三-773 / 久十一-26 / 稲築上-273 / 芦-469 / 赤-514
輜重兵第十二連隊		
昭和12年 ～20年	昭和12年9月、輜重兵第12連隊が編成され、第18師団の隷下として中南支・マレー・ビルマ・雲南で戦う	久十一-26, 42
輜重兵第十八大隊・輜重兵第十八連隊		
明治41年	明治40年10月、小倉で編成。明治41年3月、第18師団の隷下として三井郡国分村に移駐。大正14年5月、第12師団所属に。昭和11年4月、渡満。6月に連隊に改編。昭和19年に解散	久上-252 / 久中-661 / 統久下-96 / 久三-419, 421 / 久四-23 / 久六-285 / 久十一-26, 41 / 星行-147
輜重兵第五十六連隊		
昭和16年	昭和16年11月、第56師団とともに久留米で編成	戦本-35, 89 / 久四-23 / 久十一-26, 35, 38, 43, 192, 193, 194, 203 / 春中-366
輜重兵第五十七連隊		
昭和20年	第57師団の隷下として大陸から内地に帰還し、福岡県内に配置	戦本-223 / 春中-284
輜重兵第八十六連隊 (西部五四部隊)		
昭和19年	昭和19年4月の第86師団編成時に、隷下部隊として久留米で編成	戦本-53, 88, 133, 134, 336, 338, 523
独立自動車第六十八大隊		
昭和20年	昭和20年4月、名古屋で編成された後、第56軍の戦闘序列に入り、折尾に位置	北現-664
マルト部隊		
昭和19年	昭和19年、ルソン島を防衛する第14方面軍 (尚武集団) 要員として福岡と久留米でマルト部隊 (秘匿名) 編成。正式名は第二次南方総軍緊急補充要員部隊。昭和19年11月、マニラに上陸し、マッキンレー、ルソン、レイテ島へと転戦し、米軍の大攻勢により大半が戦死した	新福城-187 / 赤-523
下関憲兵隊分隊		
明治32年	明治32年、門司の老松町に下関憲兵隊分隊出張所を設置	北産Ⅰ-119 / 門司-414
久留米憲兵隊		
昭和19年	憲兵司令官に隷属。昭和19年4月の時点で存在	戦本-53
久留米憲兵隊大刀洗分遣隊 (甘木憲兵分遣所)		
大正8年	大正8年11月、大刀洗飛行場に航空第4中隊が所沢から移駐と同時に、久留米憲兵隊から分遣隊長を含む2～3名が派遣。終戦まで、将兵の素行取り締まりや周辺の治安維持に努めた	戦本-42 / 甘下-271 / 馬-207 / 三-183, 184 / 三町-380 / 夜行-363 / 筑前下-口絵2, 126
西部憲兵隊		
昭和20年	昭和20年3月、軍管区ごとに憲兵隊を臨時動員。西部憲兵隊は憲兵司令官に隷し、九州・沖縄を担当。隷下に県単位 (および小倉・佐世保) の地区憲兵隊と憲兵分隊。福岡市に司令部	戦本-423, 425, 426 / 北現-698
小倉地区憲兵隊		
昭和20年	昭和20年、北九州五市五郡を管轄。各市に憲兵分隊や憲兵分駐所を置き、直接国民を動員へ	戦本-425, 426 / 北現-698
飛行第一戦隊		
昭和19年	四式戦 (疾風) を装備し、柏で京浜地区の防空に当たっていたが、昭和19年8月、雁ノ巣に移動。第12飛行師団の指揮下に。しかし9月にはフィリピンへの転用準備のため、柏に帰還	戦本-142 / 戦備-444, 447

年次	概要	自治体史頁①
飛行第二戦隊		
昭和20年	昭和20年7月頃の第6航空軍の作戦計画で、軍直轄偵察機部隊として福岡飛行場に配置予定	戦本-495
飛行第四連隊・飛行第四戦隊（太刀洗航空隊）		
大正8年～昭和6年	大正8年11月、太刀洗飛行場の完成とともに所沢より航空第4中隊が移駐。12月に航空第4大隊に昇格。大正11年8月、飛行第4大隊と改称され、大正14年には宇垣軍縮に伴う改編で飛行第4連隊に昇格。昭和3年5月、第二次山東出兵による出動要請があり、初出動する。昭和5年8月に秩父宮、翌年8月に閑院宮が飛行第4連隊に入隊。昭和6年11月、満州事変に出動	戦備-91, 101 / 久中-651, 661, 662 / 小郡二-1033, 1034, 1037 / 甘下-270 / 馬-207, 208, 209, 212 / 朝-530 / 朝四-120 / 朝七上-129 / 三-182, 183 / 三町-378, 379, 380, 394, 395 / 夜町-674 / 筑前下-120, 121 / 大刀-321, 322, 323
昭和7年～12年	昭和7年1月、第一次上海事変に独立飛行第3中隊を編成し派遣。昭和10年、ソ連空軍大尉がスパイ容疑で憲兵に逮捕。昭和12年7月、日中戦争勃発で飛行第8大隊を編成して派遣	小郡二-1037 / 甘下-251 / 三町-395 / 筑前下-122 / 大刀-325, 326
昭和13年～15年	昭和13年8月、空地分離の大改編で、飛行第4連隊は飛行第4戦隊へ改称。昭和15年9月、飛行第4戦隊は戦闘三箇中隊へ拡張され、本拠地を太刀洗から菊池（花房）飛行場へと移した	戦備-156, 249 / 小郡二-1037 / 朝-541 / 三町-396 / 筑前下-122, 123
昭和16年～20年	昭和16年7月、防空専任部隊として西部軍に隷属し、小月に配備され北九州の防空に。さらに1箇中隊を雁ノ巣に派遣、待機させる。昭和17年8月には、第19飛行団（のち第12飛行師団）の隷下となる。屠龍を装備。昭和19年6月、北九州へのB29初空襲以来、迎撃に出撃。	戦本-27, 29, 38, 39, 45, 67, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 141, 228, 384, 494 / 戦備-493 / 北現-661 / 小郡二-1047, 1048 / 筑前下-136 / 馬-242
	【自治体史頁②】 戦備-143 / 久上-241, 244, 252 / 続久下-101 / 田川中-527 / 小郡二-1026, 1028, 1029, 1031 / 小郡七-208, 214 / 筑紫年-55 / 久山下-260 / 甘下-840 / ひ-434 / 朝-916 / 芦屋-510, 511 / 芦-476 / 三町-399, 411, 18 / 夜行-363, 364, 365 / 筑前下-口絵2, 125, 128, 129, 139, 417 / 大刀-442, 443	
飛行第二十四戦隊		
昭和18年	ニューギニアで活動していた昭和18年11月、飛行第248戦隊と交替して北九州の防空へ。第19飛行団の指揮下に入り、芦屋に配備。一式戦（隼）を装備	戦本-45 / 戦備-392, 450, 470, 493
飛行第五十一戦隊・飛行第五十二戦隊		
昭和19年	昭和19年4月に編成。四式戦（疾風）を装備。第16飛行団（後に第12飛行師団）に属し芦屋に所在	戦本-83, 84, 141 / 戦備-404
飛行第五十六戦隊		
昭和19年	三式戦（飛燕）を装備し、伊丹で阪神地区の防空に当たっていたが、昭和19年8月、太刀洗飛行場に移動。第12飛行師団の指揮下に。9月には要地侵入前の捕捉を目指し、済州島に移動	戦本-142 / 戦備-404
飛行第五十九戦隊		
昭和19年	外地から帰還後、昭和19年5月に第19飛行団（のち第12飛行師団）の隷下として芦屋に配備され、北九州の防空に当たる。飛燕を装備	戦本-67, 79, 80, 81, 83, 84, 141, 384 / 戦備-425 / 北現-661 /
飛行第六十二戦隊		
昭和19年～20年	昭和19年11月以降、内地へ招致。昭和20年4月、菊水作戦で特攻隊に編入され太刀洗飛行場へ移動したが、前線基地で奇襲を受け出撃不能に。太刀洗に帰還後、立石国民学校や民家に分宿して夜間訓練。5月、沖縄に出撃。6月、本土防衛のため西筑波飛行場（茨城県）へ移動	戦備-448, 451, 470, 476 / 三町-397 / 筑前下-123, 124
飛行第六十六戦隊		
昭和19年～20年	昭和19年11月、内地へ招致。昭和20年7月、飛行第66戦隊は機種改編のため鹿児島万世飛行場から太刀洗北飛行場へ移動。以来、根拠地とし終戦を迎えた	戦本-494 / 戦備-448 / 筑前下-124
飛行第七十一戦隊		
昭和19年	昭和19年5月に亀山で編成。四式戦（疾風）を装備。昭和19年9月、第12飛行師団に編入され、防府に位置して北九州の防空を担当。10月にはフィリピン戦線に派遣	戦本-142, 143, 384, 494 / 戦備-404, 447, 466
飛行第九十八戦隊		
昭和19年～20年	昭和19年1月、南方より内地へ帰還。太刀洗を拠点に、鹿屋でも海軍から雷撃訓練を受け、4月には海軍の第1航空艦隊の指揮下に。7月、四式重爆撃機「飛龍」へ改編し、海軍攻撃708飛行隊と合同で第762海軍航空隊が発足。10月、台湾沖航空戦で壊滅。12月、第6航空軍隷下。昭和20年3月、沖縄へ出撃。7月、海軍の指揮を脱し、一部を太刀洗に残して埼玉県児玉へ	戦本-170, 270, 271 / 戦備-424, 493 / 三町-397 / 筑前下-123, 138
飛行第百七戦隊		
昭和19年	昭和19年8月に浜松で編成。四式戦（疾風）を装備。昭和19年10月、第12飛行師団に編入され、防府に位置して北九州の防空を担当。11月にはフィリピン戦線に派遣	戦本-142, 143
芦屋飛行第百二十四部隊		
昭和17年	昭和17年12月、芦屋飛行隊第124部隊が編成され、入隊式が挙行された	芦屋-512 / 芦-477 / 岡-435
飛行第二百四十四戦隊		
昭和20年	昭和20年2月、太刀洗に飛来	三町-397
飛行第二百四十八戦隊		
昭和17年～18年	昭和17年8月10日、北九州地区に新編成。芦屋と雁ノ巣に駐屯。飛行第4戦隊とともに第19飛行団に編入。昭和18年10月、ニューギニアに派遣。戦力を失い、昭和19年7月に復員	戦本-38, 39, 44, 45 / 戦備-344, 436
第八練習飛行隊		
昭和20年	昭和20年2月、太刀洗飛行学校閉鎖と同時に開設されるが、直ちに本州や朝鮮へ移動	三町-397 / 筑前下-130
特別攻撃隊第三十六・三十七・三十八振武隊		
昭和20年	昭和20年1月、太刀洗飛行学校の教官・助教により編成され、沖縄へ特攻出撃	筑前下-130
特別攻撃隊二百九十九・三百・三百三・三百四振武隊		
昭和20年	昭和20年6月、児玉飛行場（埼玉県）で出陣式が挙行され、太刀洗に向かう。7月に第299隊と第300隊は太刀洗北飛行場へ移動。第303振武隊は8月15日に攻撃命令を受けるが終戦に	筑前下-124, 125, 138
福岡航空隊		
昭和期	福岡市西区と糸島市（旧前原市）を横断する形で、陸軍の福岡航空隊が建設運用	新志下-28, 31
第五航空教育隊（西部百部隊、空五七三部隊）		
昭和13年～20年	昭和13年、飛行第4連隊内部に航空技術の訓練中隊として2箇中隊が開設、訓練を開始した。昭和14年12月、飛行第4戦隊本部の北西に兵舎を建設し、正式に第5教育隊が開隊。航空技術兵を教育し、さらに60以上の部隊から修学兵が派遣され、常時4000名、最大6000名が在籍した。隊長は衛戍司令官も兼務し、岐阜飛行師団長隷属・西部軍司令官の区外で周囲の防衛や動員・召集も担当。昭和20年2月、高村部隊長の判断で朝倉山系の麓、三輪村栗田の釜寺などに、中隊ごと疎開。3月、太刀洗空襲で施設壊滅。8月20日、兵器返納命令が出された	北野町-467 / 小郡二-1038, 1039, 1045 / 小郡七-219 / 甘下-273, 274 / ひ-435 / 馬-242, 244, 274, 276 / 朝-542 / 三-184, 185, 186, 204 / 三町-391, 400, 403, 404, 405, 411, 448, 496, 21, 22 / 夜町-675 / 筑前下-125, 126, 128, 129, 133, 135, 136, 139, 419 / 大刀-325, 328, 331, 335, 337, 443
第十航空教育隊		
昭和19年	昭和19年10月、太刀洗に飛来する	三町-396
陸軍航空路部太刀洗保安区（通信所）		
～昭和20年	太刀洗に所在し、西部軍司令部（福岡）と太刀洗間を唯一直通電話で結ぶ。日本の軍事情報を太刀洗の部隊へ伝達する、大本営直轄の通信隊。太刀洗空襲以前から、地下通信所に分散	筑前下-126, 127

年次	概要	自治体史頁①
北海道鎮台・鎮西鎮台		
明治4年～6年	明治4年4月、太政官布告第200号により、東山道鎮台（石巻）と北海道鎮台の設置が決められた。北海道鎮台は小倉を本営に、分営を博多と日田に設置することになった。明治4年8月、兵部省が全国に4鎮台を置くことを決定すると、北海道鎮台は廃止され、代わって鎮西鎮台が小倉（当面熊本）に置かれた。明治6年1月、六鎮台の軍管区を設定。鎮西鎮台は熊本鎮台と改組され、明治6年5月には熊本鎮台隷下の歩兵第11大隊が小倉に置かれた	戦本-2 / 戦備-4 / 北現-108, 109, 110, 111 / 北近世-926, 927, 928 / 北産Ⅰ-1026 / 北産Ⅱ-633 / 北五市-21 / 北総-428, 465 / 小倉統-266, 336, 1001 / 新福城-42, 174, 175 / 続久下-77 / 久三-221, 222, 226 / 城島-261 / 城島補-60 / 直資下-60 / 大和上-672 / 立花下-23, 26 / 星行-62 / 筑後二-110 / 筑後三-1062, 1063 / 大川-517 / 行合-568 / 豊下-44 / 春中-42 / 大野下-516, 517 / 大島-354 / 浮上-810 / 稲葉上-271 / ひ-703 / 新志上-789 / 小竹-356 / 鞍町下-692 / 三町-356 / 広下-19 / 香上-1191 / 香下-1271 / 添上-634, 635 / 金誌-232 / 川上-535, 536 / 赤-511 / 大任上-629 / 豊津下-177, 178 / 椎下-7
第十二師団		
明治29年～31年	明治29年、第12師団設置が明示され、明治30年9月、第12師団が誕生。翌年に偕行社で事務開始、11月に小倉城本丸の新築庁舎で正式開庁。隷下部隊は歩兵第12旅団（小倉）、歩兵第14連隊（小倉）、歩兵第47連隊（小倉）、歩兵第24旅団（久留米）、歩兵第24連隊（福岡）、歩兵第48連隊（久留米）、騎兵第12大隊、野戦砲兵第12連隊、工兵第12大隊、輜重兵第12大隊（以上小倉）など。明治36年、歩兵第24旅団を第6師団に移管し、歩兵第23旅団を編入	北現-350, 351, 352, 353, 354, 355 / 北五市-24, 25, 959 / 小倉統-336, 350, 353 / 新福城-177, 181 / 田主三-670 / 立花下-23, 24 / 春中-339, 340 / 大島-527 / 稲葉上-273 / 新志上-789 / 川上-542, 543 / 赤-514 / 築城上-533
明治37年～38年	明治37年2月、日露戦争で第12師団（2万1818人）動員、先遣師団として朝鮮の平壤を確保し、第1軍の上陸支援の任務を与えられた。明治37年には朝鮮から満州へ渡り、奉天会戦まで満洲各地を転戦。明治38年12月、第12師団は福岡に凱旋した	戦備-44, 45, 46, 47 / 北現-355, 356, 357, 358, 359, 361, 362, 363, 364, 369, 370, 371, 372 / 企-332, 349 / 福一-1038 / 田主三-673 / 頼史-182, 184 / 春中-341 / 津通-741 / 二-151 / 久山下-180 / 宝-404 / 香上-1194 / 添上-637 / 大任上-632
明治40年	明治40年10月1日、久留米の第18師団新設に伴い、第12師団は再編。直属部隊は、歩兵第12旅団司令部、歩兵第47連隊、歩兵第72連隊、歩兵第35旅団司令部（福岡）、歩兵第14連隊、歩兵第24連隊、野砲兵第12連隊、工兵第12大隊、輜重兵第12大隊、第12師団衛生隊など	北現-373, 374, 375 / 新福城-182
大正7年～8年	大正7年8月、シベリア出兵へ臨時派遣軍を動員。大正8年7月までシベリア各地を転戦。大正7年8月、米騒動発生で福岡県知事が第12師団留守隊に鎮圧を依頼し、各連隊が出動	戦備-78, 79 / 北現-375, 378 / 企-326, 348, 350 / 戸二-641 / 福二-840 / 頼史-212 / 田川中-522, 525 / 福岡四-261 / 二-153 / 久山下-201 / 岡-428 / 宝-424 / 糸-374 / 築城上-633
大正11年～14年	大正11年8月15日、山梨軍縮により第12師団では將校20人、上等兵以下2042人の兵員を整理。大正14年5月1日、宇垣軍縮により第12師団は小倉から久留米に移動した。隷下部隊は、歩兵第35旅団司令部（福岡）が歩兵第12旅団に改称されるなど大改編	県産二-1360, 1361 / 北現-378, 379, 380 / 北五市-39 / 企-334 / 新福城-183 / 久中-646, 650, 651, 660, 663, 667 / 久三-772, 773, 774 / 宝-427
昭和7年	昭和7年1月、上海事変で一個旅団派遣。昭和7年2月、師団長から第24旅団及び隷下各歩兵連隊と工兵隊、師団通信隊に動員下令、混成旅団が編成され上海へ出動。同年3月帰還	北現-648, 649 / 田川中-527 / 筑後二-451 / 福岡四-267 / 甘下-252 / 馬-214 / 久山下-244, 248 / 宝-456
昭和7年～昭和20年	昭和11年4月、ソ連国境に面した東満国境警備派遣が下命。昭和14年8月、ノモンハン事件に所属歩兵連隊の速射砲中隊を応急出動。昭和15年7月、師団改編により平時の満洲派遣駐留部隊から戦時の満洲駐屯部隊に変貌、留守第12師団とも分離され歩兵第14連隊は第25師団へ編入。第3軍指揮下で東寧に移駐。満洲国内で対ソ連訓練と治安維持に従事。昭和19年11月 台湾派遣。第10方面軍戦闘序列編入。新竹に在駐し台湾西部方面を警備し終戦を迎えた	戦備-176, 177, 208, 232, 242, 266, 287, 290, 303, 314, 449, 456 / 北現-649, 650 / 福昭前-475, 476 / 新福城-50 / 田主三-681, 682 / 春中-342, 344 / 久山下-267 / 鞍郷-247 / 三-381 / 大任上-635, 640
【自治体史頁②】 戦本-4 / 県筑二-130 / 北現-365, 366, 381, 382, 587, 622, 653, 654 / 北産Ⅰ-119, 695, 714, 979, 989, 1026, 1027 / 北産Ⅱ-634, 699, 740 / 北総-455 / 小倉下-597, 599, 600, 601, 602, 604, 609 / 小倉統-331, 332, 342, 343, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 350, 1012, 1013, 1014, 1025, 1026, 1027, 1029 / 小倉補-961, 962, 963, 964 / 企-331, 337, 338, 340, 345 / 若松全-629 / 戸二-749 / 福一-1101, 1605 / 福二-774, 1419, 1443 / 福三-3, 209, 253, 278 / 福岡四-337, 369, 788, 791 / 福昭前-480, 819 / 新福裕一-792, 794 / 新福城-42, 43, 119 / 北崎-107 / 早全-287, 299 / 久上-209, 210, 238, 241 / 久中-519, 652, 654, 662, 665, 668 / 続久上-21, 23 / 続久下-186, 187, 203, 209, 219, 109 / 久三-414, 421, 416, 1057 / 久四-21 / 久六-273, 325, 341, 344, 356 / 久十一-11, 14, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 41, 214, 835 / 飯中-447, 456 / 筑穂下-518 / 田川中-458, 515 / 田川下-87 / 八下-231 / 黒-576 / 筑後三-1100, 1117, 1126, 1132 / 行合-285, 370, 591 / 行資-44 / 中間中-922 / 小郡七-202 / 小郡補-483 / 春中-50, 204, 339, 882 / 大島-355, 528 / 太三-360 / 福岡四-51 / 新志上-946, 947, 967 / 新志下-33, 753, 756 / 糟-568 / 宇-547 / 久山下-155, 174, 176, 178, 185, 209, 213, 214, 237, 242, 250, 254, 265 / 粕町-331, 332 / 大川村-363 / 芦屋-409, 410 / 芦-469 / 岡-406, 427 / 鞍町下-696, 700 / 三瀧復-638 / 稿八-3 / 香上-1209 / 糸-1143, 1155 / 川下-1075 / 大任-699 / 犀-1148, 1149 / 築上上-502 / 築上中-440 / 椎下-7 / 吉富誌-136 / 吉富-490 / 築城上-708, 712		
留守第十二師団		
明治37年	明治37年2月、留守第12師団の編成が下令され、留守師団および各連隊・大隊を守る補充隊が編成された。留守第12師団も30部隊を動員編成し外地へ派遣（第12師団よりも、第3軍や第4軍、鴨緑江軍の補充部隊に）	県筑二-130 / 北現-361, 362, 369, 378, 650 / 北総-455 / 早全-317 / 久十一-19, 21 / 田主三-682 / 春中-57, 204, 343 / 若宮下-243 / 新志上-967
昭和13年～15年	第12師団の満洲派遣に伴い、昭和13年8月、第12師団留守部隊を改称して、留守第12師団を編成。第37師団などの編成管理を担当。昭和15年7月に第56師団に改組	戦本-4, 7, 49 / 戦備-236, 237, 266
第十八師団（第一次第十八師団）		
明治38年～44年	明治38年、第18師団の設置決定。明治40年、第18師団が久留米に設置される。隷下部隊は、歩兵第23旅団、歩兵第46連隊（大村）、歩兵第55連隊（佐賀）、歩兵第24旅団、歩兵第48連隊、歩兵第56連隊、騎兵第22連隊、野砲兵第24連隊、山砲兵第3連隊、工兵第18大隊、飛行第4大隊、輜重兵第18大隊など。明治44年、久留米付近で実施の特別大演習に参加	戦備-58 / 久中-519, 651, 652 / 久三-418, 419, 420, 421, 422, 425, 426 / 立花下-24 / 大島-528 /
大正3年～大正7年	大正3年11月、独立第18師団の中心として第一次世界大戦に出動し、青島要塞を陥落、一部を青島守備軍として残留させ帰国。大正7年8月、米騒動発生により第18師団が出動、佐賀方面の炭鉱の騒動を鎮圧した	戦備-72 / 北現-378 / 久中-624, 651, 658 / 久三-766, 767, 768, 770 / 北野町-448 / 庄上-294 / 頼史-211 / 星行-102 / 鞍町下-708 / 広下-157 / 香上-1196 / 糸-364 / 築城上-633
大正13年～14年	大正13年8月、宇垣軍縮により第18師団が廃止。翌年、第12師団が久留米に移動	戦備-101 / 久中-646, 647, 648, 650, 652, 653, 659, 663, 667, 669 / 久三-772, 773, 774 / 宝-427
【自治体史頁②】 戦本-4 / 北現-374 / 北産Ⅱ-699 / 北総-455 / 企-338 / 福二-1412, 1419, 1437 / 新福裕一-792, 793 / 新福城-5, 42, 43, 182, 183 / 久上-209, 210, 211, 252 / 久中-660, 665, 666 / 続久下-95, 98, 99, 104, 105 / 久六-292, 300, 301, 320, 325 / 久十一-19, 20, 24, 25, 26, 27, 31, 42, 186, 229 / 善導-15, 16 / 八下-231 / 八年-142, 150 / 上陽郷-290 / 立花年-73 / 星年-111 / 筑後三-1100, 1117 / 行合-285 / 小郡二-1026 / 小郡七-202 / 春中-50, 882 / 大島-355, 528 / 浮上-1041 / 糟-568 / 久山下-237 / 粕町-331, 332 / 岡-429 / 三-183 / 大川-441 / 三瀧復-649 / 稿八-31, 32 / 広下-152 / 広年-105 / 築上上-502 / 吉富誌-136		

年次	概要	自治体史頁①
第十八師団 (第二次第十八師団・菊)		
昭和12年～16年	昭和12年9月、第18師団が再編成。隷下部隊は歩兵第55連隊(大村)、歩兵第56連隊(久留米)、歩兵第114連隊(小倉)、歩兵第124連隊(福岡)、山砲兵第18連隊、工兵第12連隊、輜重兵第12連隊、師団通信隊、師団衛生隊、師団第1～4野戦病院、師団病馬廠など。昭和12年11月、杭州湾に上陸し、その後中国南部に転戦	戦備-176, 192, 193, 206, 208, 214, 232, 266, 303, 307 / 新福城-50, 186 / 久三-1036, 1037 / 久十一-42 / 筑後二-478, 479, 480, 481 / 春中-202, 349, 350, 351 / 鞍町下-712 / 宝-460 / 大任-252
昭和16年～20年	昭和16年12月8日、第18師団の佐美支隊によってコタバル上陸作戦が敢行された。昭和17年1月、第18師団はシンガポール島に進出、シンガポール陥落後は、ビルマ攻略戦に参加した。昭和18年、歩兵連隊は3個に改編。その後インパール作戦支援のため、フーコ渓谷で死闘を演じ、終戦を迎えた	戦備-348, 354, 373 / 北現-652 / 久三-1043, 1044, 1045 / 田主三-682, 683 / 黒-572, 593, 594 / 筑後二-482, 525 / 春中-368 / 鞍郷-246, 247 / 鞍町下-714, 715, 717 / 宝-472, 473 / 香上-1206 / 川上-549 / 赤-573, 574 / 築城上-712, 714, 715, 716
【自治体史頁②】 戦本-4 / 北現-651, 652, 655 / 福三-252, 253 / 新福城-302 / 久六-359, 374 / 久十一-21 / 筑後三-1134 / 大島-355, 528 / 新志下-33 / 添上-638, 1187		
第二十三師団		
昭和13年～20年	昭和13年4月、熊本で編成。旅団を持たず3連隊を1歩兵団とする師団。隷下に歩兵第72連隊(久留米)など。昭和13年7月、門司出港、ハイラルに進駐。興北省を防衛。昭和14年5月、ノモンハン事件で壊滅。10月、ハイラルに帰還。後にフィリピンのルソン島に派遣、壊滅的な被害を受ける	戦備-442, 443, 446 / 新福裕一-792 / 新福城-50, 186 / 筑後三-1137 / 春中-343, 344, 347, 348 / 鞍町下-715 / 赤-521, 568
第三十七師団		
昭和14年～20年	昭和14年2月、久留米で編成。隷下は歩兵第226連隊など。昭和14年4月、中国山西省へ。中原会戦、大陸打通作戦に参加。昭和19年7月、第12軍から第11軍に編入。12月、第38軍に編入され南進。昭和20年1月にハワイ、5月にはタイ・マレーシアに南進。終戦を迎えた。なお補充は留守第12師団から、後に留守第6師団に管轄替えになり、衛戍地も福岡から都城へ移る	戦備-236, 282, 392, 451 / 福三-252, 253 / 新福裕一-792, 793 / 新福城-186 / 春中-359, 361, 362 / 赤-523
第五十六師団 (龍)		
昭和15年～昭和20年	昭和15年7月、第12師団の残存部隊を基幹に第56師団が久留米で編成され、その隷下に歩兵第113連隊(編成地:福岡)、歩兵第146連隊(大村)、歩兵第148連隊(久留米)、搜索第56連隊(久留米)、野砲兵第56連隊(久留米)、工兵第56連隊(久留米)、輜重第56連隊(久留米)が編成された。兵団文字は「龍」。当初は西部軍の基幹部隊となるが、昭和16年12月、第25軍隷下に入る。昭和17年3月には第15軍に編入され、ビルマに従軍した。同年4月にはビルマ北東部と中国雲南省の国境警備を担当。第113連隊を拉孟守備、第148連隊を騰越守備にあてた。昭和19年4月、第33軍に編入、6月には拉孟・騰越の戦いに敗退。11月、雲南地区からビルマ領へ撤退。昭和20年6月、モーチへ転進し、そこで終戦となる	戦本-23, 33, 49 / 戦備-288, 303, 307, 322, 325, 423, 431 / 北現-652 / 福三-252 / 新福裕一-792 / 新福城-50, 186 / 久四-21 / 久十一-19, 23, 26, 34, 37, 38, 42, 43, 192, 198, 201, 203, 216, 223, 225 / 田主三-682, 683, 684 / 黒-594 / 筑後二-525 / 春中-365, 366, 368, 369, 372, 373 / 大島-532 / 新志下-33 / 宇-548 / 鞍郷-247 / 鞍町下-715 / 香上-1201 / 添上-641 / 赤-575 / 大任-253 / 大任上-637 / 築城上-713, 714
留守第五十六師団		
昭和16年～20年	昭和16年12月、第56師団の第25軍編入に伴い編成。司令部は久留米、西部軍に隷属。隷下に第56師団所属連隊の補充隊など。昭和19年4月、臨時動員で第86師団を編成し、人馬や兵器のほとんどを充当。ただし留守第56師団も動員され、相当の欠員のまま7月に動員完結。留守師団として第86師団の職責を継承し、特設警備部隊と第86師団各連隊の補充隊、各連隊区司令部や陸軍病院も統率。昭和19年9月より宮崎平野の陣地構築。昭和20年1月以降、特設警備工兵隊を招集し、福岡や名島、大刀洗で簡易洞窟築城。2月、久留米師管区司令部に改組	戦本-33, 34, 35, 47, 49, 50, 52, 86, 88, 89, 133, 135, 138, 150, 152, 180, 195, 196, 199, 200, 202, 209, 210, 219, 315, 595 / 戦備-341, 474 / 新福城-50, 187
久留米師管区司令部 (筑後集団)		
昭和20年	昭和20年2月9日、内地防衛軍設置に伴う改編で留守師団司令部は師管区司令部と改称され、留守第56師団司令部も久留米師管区司令部に改称。師管区歩兵第1・2・3補充隊、師管区砲兵補充隊などを隷下とし、西部軍管区司令官に隷属。兵站輸送の支援や国民義勇戦隊の編成などの指導にも当たる。第156師団、第212師団の編成も。6月には作戦任務も付与され、大分地区司令部とその隷下の地区特設警備隊などを指揮下に入れて、長崎や島原、豊予海峡の戦備強化も担う。簡易洞窟の構築なども実施。7月には兵団文字「筑後集団」となる	戦本-180, 183, 194, 197, 200, 214, 219, 220, 221, 315, 339, 348, 349, 352, 354, 368, 371, 374, 375, 377, 380, 388, 392, 393, 398, 404, 408, 413, 415, 417, 460, 461, 463, 464, 470, 476, 480, 484, 502, 565, 566, 567, 568, 569, 589, 594, 595 / 戦備-469, 474 / 久四-17, 21, 29 / 久十一-19, 36
第五十七師団 (奥)		
昭和15年～20年	昭和15年7月、弘前第8師団の満洲駐屯に伴い、留守第8師団を改編して編成。隷下部隊には、歩兵第52・第117・第132連隊、野砲兵第57連隊、工兵第57連隊、輜重兵第57連隊など。昭和16年夏、関特演で満洲へ派遣され、対ソ訓練に従事した。昭和20年4月、本土決戦のため第16方面軍隷下の第56軍に編入され、九州へ配置。師団司令部は糟屋郡篠栗町篠栗国民学校に置かれた。宗像郡福岡町から糸島郡前原町の間に各部隊を配置し、洞窟壕陣地構築を行った。なお7月には第351師団増強に伴い、作戦地域を香椎以南に縮小	戦本-222, 223, 224, 340, 341, 342, 346, 347, 350, 351, 352, 462, 467, 468, 469, 506, 514, 515, 516, 517, 518, 536, 554, 555, 556, 558, 564 / 戦備-288, 314, 315, 343, 466 / 筑後二-529 / 春中-281, 283, 284, 303, 307 / 大野下-656, 657, 664 / 芦-492
第八十六師団 (積)		
昭和19年～20年	昭和19年4月、留守第56師団を母体に久留米で編成された。マリアナ方面の状況変化に対応するため、在内地大本営略予備兵団として、昭和19年7月12日動員を完結し、九州最初の内地配備の野戦兵団として発足した。兵団文字は「積」。師団の補充隊は、歩兵第187連隊(福岡)、歩兵第188連隊(大村)、歩兵第189連隊(久留米)、騎兵第86連隊、第86師団連射砲隊、野砲兵86連隊、工兵第86連隊、輜重兵第86連隊(久留米)などから構成された。昭和19年9月以降、都城・志布志方面の陣地構築に着手。昭和20年4月に新設された第57軍戦闘序列に編入され、鹿児島県の志布志沿岸の陣地構築などにあたり、そこで終戦となった	戦本-9, 47, 52, 53, 72, 85, 86, 87, 88, 96, 132, 133, 134, 135, 138, 179, 184, 185, 192, 195, 196, 199, 201, 202, 207, 209, 210, 211, 292, 302, 306, 307, 308, 311, 327, 328, 329, 336, 337, 338, 416, 467, 469, 476, 505, 510, 521, 522, 523, 524, 532, 591, 592, 593, 594, 595 / 戦備-423, 431, 456 / 久十一-43 / 福三-253 / 新福裕一-793 / 新福城-187 / 築紫下-1011 / 春中-377, 378, 379 / 鞍町下-717
第九十六師団		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備により福岡で編成。済州島防衛の任務に付き終戦	新福城-189 / 久十一-43
第一百十二師団		
昭和19年～20年	昭和19年7月、瓊春にて第9独立守備隊を基幹に編成。第3軍に編入されソ満国境付近を警備。昭和20年8月のソ連侵攻により多くの犠牲を出した。隷下部隊は、歩兵第246連隊(福岡)、歩兵第247連隊(大村)、歩兵第248連隊(久留米)、野砲兵第112連隊など	戦備-466 / 福三-253 / 新福裕一-793 / 新福城-50, 187
第一百四十五師団 (護州)		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備で第56軍隷下として広島で編成され、赤間に位置した。隷下部隊は、歩兵第417・第418・第419・第420連隊、第145師団噴進砲隊、第145師団連射砲隊、第145師団輜重隊、第145師団通信隊、第145師団兵器勤務隊、第145師団野戦病院など。要塞火砲の配属も受け、4月より若松・八幡から福岡に至る海岸防備に従事。赤間陵厳寺の正法寺に師団司令部を置き、近くの高樹山に大規模な地下壕を掘りながら、終戦を迎えた	戦本-217, 218, 292, 339, 341, 343, 344, 345, 346, 352, 416, 468, 469, 555, 556, 557, 558 / 戦備-477 / 北現-664 / 北総-456 / 筑後二-529 / 春中-283 / 宗通三-373, 380 / 大島-534, 535, 536, 537, 667 / 津通-900, 903 / 芦-468, 492 / 岡-445 / 鞍町下-717
第一百五十六師団 (護西)		
昭和20年	昭和20年2月、本土決戦第一次兵備により福岡で編成。任務は洞窟壕を拠点に敵の上陸を沿岸で迎撃し内陸部への侵攻を阻止することで、沿岸配備師団と呼ばれた(第16方面軍は拘束師団と呼称)。隷下は歩兵第453連隊(福岡)、歩兵第454連隊(大村)、歩兵第455連隊(久留米)、歩兵第456連隊(久留米)、第156師団連射砲隊など。4月、第57軍の戦闘序列に。留守第65師団が構築した陣地を継承して宮崎で沿岸防衛にあたり、終戦を迎えた	戦本-214, 217, 218, 219, 302, 309, 311, 312, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 417, 467, 469, 505, 510, 511, 516, 519, 532, 565, 594, 595 / 戦備-477 / 福三-253 / 新福裕一-793 / 新福城-189 / 久十一-44 / 筑後二-529 / 春中-380, 381, 383 / 芦-492

年次	概要	自治体史頁①
第二百十二師団 (菊地)		
昭和20年	昭和20年4月、本土決戦第二次兵備により、久留米で臨時動員。任務は、上陸した敵を迎撃することで、機動力が強められたので機動師団とよばれ、本土決戦兵団の骨格兵団とされた(第16方面軍では決戦師団と呼称)。隷下は、歩兵第516連隊(久留米)、歩兵第517連隊(福岡)、歩兵第518連隊(大村)、追撃第212連隊、第212速射砲隊、山砲兵第212連隊などが編成されていた。編成完結未了のまま、宮崎平地に進出、終戦を迎えた	戦本-278, 280, 281 , 317, 323, 324, 325, 326, 352, 353, 417, 461, 462, 467, 468, 469, 505, 511, 516, 517, 518, 519, 520, 526, 529, 532, 536, 553, 554, 555, 565 / 戦備-483 / 福三-253 / 新福城-189 / 久十一-44 / 筑後二-529 / 春中- 382, 383 / 芦-492
第三百十二師団 (千歳)		
昭和20年	昭和20年5月、本土決戦第三次兵備により久留米で編成。第56軍に属し、隷下は歩兵第358連隊(久留米)、歩兵第359連隊(福岡)、歩兵第360連隊(大村)、師団噴進砲隊、師団工兵隊など。指揮下部隊に野戦重砲兵第19大隊、佐世保重砲兵連隊や杵岐要塞の集成中隊、海上挺身隊第33戦隊などもある。伊万里・唐津方面の守備にあたり、糸島半島から伊万里までを四区分し、それぞれ前原・唐津・松浦・伊万里地区隊を配置した。陣地構築などを行い、終戦を迎えた	戦本-284, 286, 287 , 307, 416, 419, 462, 468, 469, 552, 561, 562 / 戦備-490 / 福三-253 / 新福俗一-793 / 新福城-189 / 久十一-44 / 筑後二-529 / 春中-281, 383, 384 / 新志上-963, 964, 965, 966 / 新志下-757 / 芦-492
第三百五十一師団 (赤城)		
昭和20年	第351師団は昭和20年5月23日、宇都宮で編成され、6月19日に第312師団と共に第56軍の配属となり、九州北部沿岸の配備となった。歩兵第328連隊、第329連隊、第330連隊、師団噴進砲隊、師団工兵隊などが配属。小野国民学校(古賀町)に師団司令部が設置された	戦本-284, 287, 343, 344, 346, 399, 462, 468, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558 / 戦備-490 / 筑後二-529 / 春中-281, 283 / 古賀- 459, 460, 885 / 津通-900, 901, 903, 904 / 芦-492
第十六飛行団		
昭和19年	昭和19年5月、飛行第51・52戦隊で編成。主力は芦屋に駐屯。6月、第19飛行団長の指揮下に入り、北九州西方に求襲する敵機の攻撃を任務に。昭和19年7月、第12飛行師団の指揮下に。9月には北九州の防空任務を解かれ、フィリピンへ。11月には戦力回復のため内地へ	戦本-83, 84, 141, 142 / 戦備-425, 447, 449, 474, 476
第十九飛行団		
昭和17年~19年	昭和17年8月に編成、西部軍の指揮下。小月に司令部を置き、北九州の防空を担当。麾下に飛行第4戦隊(小月)、飛行第59戦隊(芦屋駐屯、なお戦史叢書には記載無)、飛行第248戦隊(芦屋・雁ノ巣)。昭和18年10月、飛行第248戦隊は南方に向かい、代わりに飛行第24戦隊が北九州に	戦本- 38, 39 , 44, 45 / 戦備-344, 349, 392 / 北現-659, 661
昭和19年	昭和19年5月、防衛総司令官の隷下に入り、西部軍の指揮を受ける。昭和19年6月、B29初空襲の迎撃に8機が出動。同月飛行第246戦隊も指揮下に。昭和19年7月、第12飛行師団に改組	戦本-62, 67, 71, 76, 77, 79, 80 , 81, 83, 84 / 戦備-425, 433 / 北現-676
第十二飛行師団		
昭和19年	昭和19年7月、第19飛行団を改組して編成。第19飛行団の他に第16飛行団や飛行第246戦隊も指揮下に。同年8月20日の空襲では、出動可能な87機すべてで迎撃。その後、飛行第56戦隊や飛行第1戦隊も一時指揮下に入るが、多くはフィリピン戦線へ。12月に第6航空軍に編入	戦本- 84, 85, 128, 141, 142, 143, 144, 145, 170, 179, 227, 228 / 戦備-433, 437, 448 / 北現-678, 679
昭和20年	昭和20年4月、第6航空軍隷下かつ、本土概要部と重要施設掩護では第16方面軍の指揮を受けることに。司令部は小月、戦闘序列に飛行第4戦隊(小月)、飛行第59戦隊(芦屋)、飛行第71戦隊(防府)、第51航空地区司令部(芦屋)、飛行場大隊8個など。7月には航空総軍の指揮下に	戦本-383, 384, 478, 494, 496 / 北現-665
第三十二軍司令部要員 (福岡県内関係分)		
昭和19年~20年	昭和19年3月、福岡市立第一高等女学校で編成された第32軍司令部要員は、那覇に上陸。軍司令部は首里に置かれた。昭和20年の沖縄戦により、6月23日までに玉砕した	戦備-403 / 新福城-187 / 赤-525
第五十六軍 (宗)		
昭和20年	第16方面軍隷下に2個の軍司令部、第56軍(宗)と第57軍(鋒)が設置された。北部九州の防衛は第56軍が担当することになり、その区域は、東は山口県の吉見から西は佐賀県の伊万里の間とされた。司令部は桂川に所在。4月21日に戦闘序列が発令され、下関要塞守備隊、第145師団などが北九州に展開。6月には戦闘序列が更改され、本土決戦準備第三次兵備で動員された第312師団、第351師団が編入され、福岡地区司令官とその隷下の地区特設警備隊などを指揮下に入れた。8月に策定した「福岡会戦指導方策」では、主決戦正面を福岡~新宮間と概定	戦本-12, 217, 219, 223, 224, 238, 239, 278, 282, 284, 286, 289, 290, 292, 293, 298, 306, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 358, 370, 371, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 387, 388, 389, 392, 393, 394, 395, 398, 399, 401, 403, 415, 416, 460, 461, 462, 465, 466, 470, 475, 476, 478, 480, 552, 556, 561, 563, 564, 565, 590, 591 / 戦備-478, 487, 488, 502 / 北現-663, 664 / 北総-455 / 春中-280, 281 / 大野下-656, 664 / 大島-533 / 津通-901 / 新志上-963 / 芦-492 / 岡-445 / 鞍町下-717 / 香上-1206
第六航空軍		
昭和19年~20年	昭和19年12月、教育と作戦を担当した教導航空軍に代わって新設、防衛総司令官の隷下に入る。昭和20年3月、九州に前進し、軍司令部を福岡に置く。3月以降、南西諸島の作戦に関して連合艦隊司令官の指揮下に入る。4月、航空総軍の隷下に編入(連合艦隊指揮下も継続)。5月、海軍の指揮下を脱し、航空総軍指揮下に復帰、鈴鹿以西の本州・四国・九州を担当	戦本- 169, 170, 179, 181, 190, 227, 383, 435, 482, 491, 492, 493, 494, 495, 496 / 戦備-451, 469, 470, 474, 476, 479, 480, 495, 496, 502
第十六方面軍		
昭和20年	昭和20年2月、野戦軍である第16方面軍(および防衛と軍政業務をつかさどる西部管区司令部)が九州担当部隊として、昭和20年2月11日、旧西部軍司令部に編成完結した。2月28日、第16方面軍の第1次兵備が下令され、野戦重砲兵第13連隊、野戦重砲兵第54連隊、下関要塞司令部、警備第21大隊、特設警備諸隊、西部高射砲集団が北九州関連部隊として配備された。3月31日には隷下に第56軍と第57軍が設置され、4月2日には第二次兵備の臨時動員令が下った。4月、陸決号作戦を遂行し、以降逐次増補修正を加える。5月23日には第3次兵備	戦本-11, 12, 177, 179, 181, 184, 185, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 199, 202, 206, 207, 222, 223, 224, 234, 238, 239, 248, 261, 266, 273, 274, 278, 280, 282, 284, 285, 287, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 296, 297, 298, 299, 302, 306, 307, 308, 313, 314, 323, 327, 328, 338, 343, 347, 348, 349, 350, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 362, 366, 368, 372, 373, 374, 378, 379, 380, 381, 383, 386, 387, 388, 401, 402, 403, 404, 405, 414, 419, 420, 422, 442, 443, 445, 446, 447, 449, 453, 458 / 戦備-468, 469, 478, 479, 481, 483, 485, 486, 487, 488, 493, 496, 498, 502 / 北現-661, 662, 663, 664 / 筑紫下-1011 / 春中-280, 281, 382 / 大野下-656, 657 / 大島-534 / 新志上-963 / 鞍町下-717
昭和20年	陸軍は本土決戦に備え、第16方面軍司令部兼西部軍管区司令部を福岡市内から筑紫郡山家へ移設する計画がすめられ、地下壕の建設が開始した。昭和20年6月26日、地下壕が完成し、司令官・方面軍首脳部が移動。終戦までそこで指揮を執った。7月には、第16方面軍部隊と西部軍管区部隊とを総称して「鎮西集団」と呼称。なお、南九州決戦のため9月以降は熊本県豊後府付近に移り、霧島山付近に戦闘指揮所を設置する計画もあった	戦本-460, 464, 465, 466, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 481, 482, 483, 484, 485, 502, 519, 521, 522, 524, 525, 533, 539, 543, 544, 551, 556, 558, 565, 566, 570, 571, 572, 573, 582, 587, 588, 589, 591, 597, 598 / 北現- 663 / 新福城-51, 189 / 筑紫下-1012 / 春中-281 / 筑前下-134
【自治体史頁②】北総-455 / 久十一-45 / 太年-417 / 芦-491, 492 / 岡-445		
西部都督部		
明治29年~37年	明治29年8月、東部(東京)、中部(大阪)とともに西部都督部の設置が決定し、12月に小倉城内に開庁した。天皇に直属して、所管内の防衛計画と中国・四国・九州の4個師団の共同作戦の計画策定に任じ、各師団を錬成して練度を高めるのを任務とした。明治37年1月に廃止	北現- 352 / 北産I-119 / 小倉統-1012, 1013 / 小倉補-961 / 稲築上-273 / 赤-514

年次	概要	自治体史頁①
西部防衛司令部・西部軍司令部		
昭和10年～13年	昭和10年8月、本土防衛、特に防空計画を担当する防衛司令部新設が決まり、中国・四国・九州は西部防衛司令部の所管に。昭和12年8月、西部防衛司令部が小倉城内の旧第12師団司令部に設置される。同月、陸相より下関要塞司令部との応急通信網架設が下令。昭和13年2月、台湾への敵機来襲で初の警戒警報を発令、その後大本営が送った臨時飛行中隊を指揮下に置く	戦本-6、7 / 戦備-143, 177, 205, 246 / 北現-623, 624, 625, 653 / 小倉統-343, 1037 / 若松全-630 / 新福城-51, 187 / 続久下-216, 224 / 田川中-531 / 新志上-927 / 新志下-756 / 筑前下-122
昭和15年～19年	昭和15年8月、西部防衛司令部は西部軍司令部に改編され、中国・四国・九州の軍管区の防衛を任務とし、防空・治安警備・動員編成などを主業務にした。12月には小倉市から福岡市へ移転し、司令部の庁舎は福岡城内の第12旅団跡の敷地を拡張して設置。民間防空演習もたびたび実施し、指導に当たる。昭和18年1月には福岡庁廃収所本部事務所を西部軍司令部内に開設（のちに移転）、昭和19年4月には福岡市立第一高等女学校を接収し、航空通信隊の本部・兵舎として使用。また護国神社の外苑に予定されていた広場を高射砲陣地として使用した。昭和19年3月には西部軍司令部の下に第32軍司令部が編成され、沖繩戦に参加した	戦本-7, 8, 9, 23, 24, 25, 26, 27, 30, 33, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 192, 327, 347, 349, 355, 356, 589 / 戦備-287, 303, 315, 335, 344, 349, 350, 403, 406 / 北現-652, 653 / 北教-741 / 戸二-749, 750 / 福四-370, 371 / 福昭前-282, 481 / 新福城-6, 50, 51, 187, 188, 252, 267, 302 / 春中-243 / 大島-532 / 新志上-949 / 新志下-756 / 筑前下-126, 128 / 川上-553
昭和19年	昭和19年5月、内地部隊の統帥機構改変に伴い、西部軍は臨時動員されて作戦軍としての統帥を発動させる。また天皇直隸から防衛総司令官の隷下に編入。昭和19年7月頃には、南九州の中で有明湾（志布志湾）沿岸正面を敵の上陸侵攻地点と予想するように。	戦本-50, 59, 60, 62, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 81, 82, 83, 85, 89, 90, 92, 93, 95, 96, 104, 111, 129, 131, 132, 133, 134, 135, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 150, 151, 152, 157, 170, 190, 193, 199, 201, 202, 313 / 戦備-425, 430, 432, 436, 438, 443, 444, 448, 453 / 北現-677 / 新福城-189
昭和20年	昭和20年1月頃から、沿岸築城と並行して軍需品を収容する簡易洞窟の築城作業を開始。1月22日、西部軍司令部閉鎖、翌月西部軍管区司令部と第16方面軍の戦闘序列を下令	戦本-11, 177, 209, 294 / 戦備-455 / 北現-661 / 春中-280
【自治体史頁②】小倉統-1037 / 若松二-1012 / 福三-210, 212 / 福四-385, 395, 812, 814 / 福八-525, 526, 528, 529, 535, 537, 538, 540 / 福昭後-799, 803 / 久三-1096 / 直下-1146, 1147 / 小竹-1400		
西部軍管区司令部（西部・鎮西集団）		
昭和20年	昭和20年2月11日、西部軍司令部に代わり、西部軍管区司令部（西部128）が編成完結し、九州を作戰地域とする第16方面軍が編成された。西部軍管区司令部は第16方面軍の作戰任務が円滑に遂行できるように、平時業務に関する警備・補充・補給、地方機関との連携調整などを行うことを任務とした。昭和20年6月、本土決戦に備えて西部軍管区司令部も移転が計画され、移転先として、宮地岳南麓の本谷（筑紫野市山家）と夜須村大字二（朝倉郡筑前町）の接収、工事が開始され、筑紫郡山家村の洞窟付近に司令部を設置、付近に兵舎も建てられた。6月19日の福岡大空襲の後、司令部は移転を完了した。7月には、西部軍管区部隊と第16方面軍部隊を総称して「鎮西集団」と呼称	戦本-177, 180, 181, 182, 183, 189, 192, 194, 196, 197, 198, 199, 219, 220, 238, 239, 243, 255, 256, 258, 259, 260, 262, 263, 274, 299, 307, 327, 353, 386, 401, 403, 407, 408, 414 / 戦備-468, 469, 472, 473, 474, 475, 478, 483, 582, 587 / 戦備-502 / 北現-661, 694 / 福三-232, 245 / 福八-522, 528, 529 / 福昭後-795 / 新福城-51, 54, 189, 198, 262, 302, 303 / 続久下-428, 432, 433 / 久三-1139 / 久十一-842 / 筑紫下-1011, 1011, 1012 / 春中-272, 280, 281, 299, 300 / 大野下-632, 634, 635 / 戸-491 / 夜-139 / 筑前下-134
下関要塞司令部・下関重砲兵連隊・下関要塞重砲兵連隊		
明治19年～29年	明治19年10月、陸軍省は臨時砲台建築部を置き、砲台や堡塁の設置を開始。明治20年4月、下関要塞起工。明治23年5月、第4要塞砲兵連隊発足。明治28年3月、要塞司令部条例で下関要塞と正式に呼称。4月、下関要塞司令部が発足。明治29年5月、第4要塞砲兵連隊は下関要塞砲兵連隊に。明治33年12月、下関要塞建設完了。明治37年、日露戦争で警戒戦備下令	戦本-5, 6 / 戦備-14, 15, 30, 33, 50 / 北現-346, 347 / 北産Ⅰ-119 / 北産Ⅱ-634 / 小倉統-332 / 企-329, 330 / 大島-355, 528 /
明治40年～大正13年	明治40年、第18師団創設に伴う再編で、下関要塞司令部と要塞砲兵連隊は第12師団の隷下に。大正11年、下関重砲兵連隊と改称。これらの部隊は下関要塞地帯と呼称。大正13年の関東大震災後、要塞地帯を整理し、不要用地を払い下げへ。門司市などが払い下げを要望	北現-346, 347, 374 / 北産Ⅰ-692, 693 / 小倉統-333, 334
昭和12年～15年	昭和12年8月、陸軍大臣より西部防衛司令部との応急通信網架設が下令。昭和13年1月には他機関と八幡市防空講習会を実施。昭和15年3月には大島村沖ノ島砲台、9月には角島砲台が竣工。同年、要塞地帯法の改正で要塞地帯内の要許可行為が増加	戦備-177, 300 / 北現-623 / 大島-532, 533
昭和16年～18年	昭和16年7月、対馬要塞や老岐要塞と共に準戦備実施・臨時編成が下令され、要塞司令部や要塞重砲兵連隊、陸軍病院を編成。昭和17年、備砲射界を対潜・対上陸双方に拡張。関門地区警備のため、廃止された小倉の第66歩兵団司令部（旧第12師団司令部跡）に昭和18年8月移転。対馬要塞や老岐要塞と連携し、朝鮮海峡系要塞として九州北方海上交通の擁護に当たる	戦本-29, 30, 31, 40, 41, 93 / 戦備-315, 376, 377 / 北現-656, 657
昭和19年～20年	昭和19年1月、下関要塞司令部は第21警備大隊、特設警備大隊（第255～257大隊）、特設警備工兵隊（第202～204大隊）を動員し、北九州を警備。昭和20年2月、第16方面軍の戦闘序列に入る。補充隊は西部軍管区の編成に。4月、下関要塞守備隊が第56軍の戦闘序列に編入、関門各市を担任。2月～5月、要塞守備隊は砲台強化として大島・玄界島・地島・蓋井島・杖坂山に十五加農砲二門の洞窟陣地を構築。6月には山口県内の作戰地域を下関市内に縮小、独立混成第124旅団の部隊が配属。7月、下関要塞守備隊は下関兵団（兵団長は下関要塞司令官）と通称し、下関要塞重砲兵連隊や第21警備大隊を隷下に。防衛地域は吉見・石・中・左地区隊に分割	戦本-51, 94, 146, 147, 148, 149, 152, 179, 192, 193, 197, 203, 265, 269, 339, 340, 341, 342, 344, 347, 348, 352, 460, 462, 469, 558, 559, 560, 561 / 北現-661, 662, 663, 664 / 北産Ⅱ-740 / 若松二-1012, 1013 / 大島-537 / 津通-900, 903 /
【自治体史頁②】北教-253, 623 / 門司-887 / 小倉統-1037 / 企-333 / 戸二-776 / 新福城-43 / 庄上-294 / 田川中-459 / 立花下-24 / 春中-57 / 大野下-534 / 大島-538, 540, 541, 666 / 稲築上-273 / 久山下-238 / 芦屋-502, 510 / 芦-476 / 鞍町下-699 / 赤-514		
陸軍特別大演習・陸軍大演習		
明治18年	明治18年4月、広島鎮台と熊本鎮台で行われる。御不例の明治天皇に代わり、小松宮彰仁親王が統監のために宇島へ	行資-106 / 豊下-201, 1564 / 築上上-486, 487 / 築城上-534
明治44年	陸軍は、特別大演習を、明治44年11月11日より、久留米付近を舞台に実施した。南軍が第6師団、第18師団。北軍が第12師団、後備混成第12旅団。大演習統監のため、同月10日、明治天皇が久留米市に到着。大本営には県立中学明善校が当てられた。天皇は大演習の状況を岡山村（現八女市）の岡山御野立所、櫛原村（現久留米市）の小森御野立所、下広川村の藤田御野立所、佐賀県基山村（現基山町）の長ノ原御野立所の4ヶ所で統監。14日に演習終了、15日午前、幸田山練兵場において観兵式を敢行	門司-898, 903, 911 / 小倉下-605 / 福一-1605, 1606 / 久上-190, 209, 210 / 久中-666 / 続久下-98 / 久三-421 / 久六-292, 293, 296 / 御井-424 / 三藩-632 / 八下-231, 232, 233, 234 / 八年-146 / 上陽郷-291 / 筑後三-1105 / 小郡七-194 / 福岡四-46 / 浮上-1041 / 久山下-265 / 三-378 / 夜行-366 / 大刀-441 / 橋八-1 / 広資-444, 445 / 広年-106 / 築上上-441
大正5年	大正5年11月の陸軍特別大演習は、筑前・筑後・肥前で11日から14日まで実施された。第5師団と第12師団が北軍、第6師団、第18師団が南軍となる。御野立所は大川村大字新長者原、御講評所は糟屋郡立農学校。演習の間、席内村大字古賀に飛行場が設置された。大観兵式は11月15日に福岡城外練兵場で挙行	門司-903 / 福二-1416, 1417, 1418 / 新福城-197, 301 / 福岡四-50, 129 / 馬-205 / 糟-568, 569, 570 / 粕町-331, 332, 333 / 岡-427 / 水城-400 / 筑前下-415
大正9年	大正9年11月の陸軍大演習は、8日から10日の3日間で実施、演習地は上・下毛・宇佐の三郡。大正天皇の名代として皇太子が行啓。第12師団（小倉）、第18師団（久留米）を主力とする北軍と第6師団（熊本）及び同師団予備混成旅団を主力とする南軍が対抗演習を行った。福岡県は大演習の警備その他の経費27,000余円、道路の特別修繕費5,735円を臨時県会で議決	門司-911 / 福二-1429 / 久上-250, 251, 253, 254, / 続久下-102 / 行合-284, 285, 584 / 行下-824 / 豊下-201, 202, 1578 / 築上上-502, 503, 504 / 築上下-441 / 吉富誌-136

年次	概要	自治体史頁①
高良台演習場		
明治44年	明治44年8月、陸軍省は、関係官庁および地主と交渉し、三井郡上津荒木（こうだらぎ）村一帯の山地約100万坪を買収し、明治44年8月、第18師団諸部隊の演習地（高良台演習場）とした	新福城-185 / 久上-252 / 久中-637 / 久三-421 / 久四-22 / 久六-292, 394 / 久十一-11, 13, 16, 33, 37, 40, 52, 62, 63, 70, 71, 72, 76, 77, 78, 80, 81, 83, 84, 86, 87, 88, 89, 91, 93, 96, 106, 108, 109, 110, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 123, 124, 125, 126, 127, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 136, 140, 141, 142, 146, 150, 151, 152, 155, 156, 159, 160, 161, 164, 166, 168, 172, 237, 242, 263 / 三瀧-632 / 広年-105
岡山御野立所		
明治44年	明治44年11月の陸軍大演習時において天皇が統監した場所の一つ。岡山村（現八女市）に設置され、現在は岡山公園となっている	久上-209, 442 / 八下-233, 234 / 八年-146, 166 / 上陽郷-317 / 広下-152
上寺工兵隊演習場		
明治36年～昭和6年	工兵隊の架橋演習場として、筑後川河畔に兵舎を設置し、小倉工兵第十二大隊、久留米工兵第十八大隊の演習を行う。後に熊本第六師団の演習場となり、昭和6年まで架橋訓練を実施	久十一-11, 13, 15, 30, 202 / 朝-424, 425, 915 /
久留米陸軍工兵隊船舶部演習場		
昭和初期	昭和初期、小富士村久家地内寺山地区の加布里湾に面した小浜に久留米から上陸演習に来るようになる。第12師団工兵第十八大隊の演習場が昭和8年頃、小富士寺山地区にできていた	北教-254 / 志摩-871 / 新志上-946, 947, 948, 950
大刀洗（太刀洗）飛行場		
大正7年～14年	大正7年、陸軍により朝倉郡三輪町、馬田村、三井郡大刀洗村の用地が買収され、大刀洗飛行場の建設開始。同年10月完成。大正8年11月、航空第4中隊が所沢から移転。12月に航空第4大隊に昇格、大正11年に飛行第4大隊へ改称。大正14年4月に飛行第4連隊に昇格	小郡二-1033 / 甘下-270 / ひ-434 / 馬-205, 206, 207, 208 / 三-182 / 三町-378, 379, 380, 394 / 夜町-674 / 筑前下-116, 119, 121 / 大刀-321
昭和4年～12年	昭和4年4月、日本航空輸送会社大刀洗支所設立。昭和5年8月に秩父宮、昭和6年に閑院宮が飛行第4連隊入隊。昭和6年4月、竜巻が直撃し格納庫や戦闘機が大破。昭和12年1月、西部防衛司令部管轄となり、傘下保有機数180機の本部となる。同年7月開始の日中戦争から大陸への中継基地となり、また戦闘機・軽爆撃機の戦技基本教育部隊にもなる	戦備-177 / 小郡二-1035, 1036 / 馬-210, 211, 212 / 三-182 / 三町-395 / 筑前下-121, 122, 123, 131 / 大刀-323, 324, 325
昭和13年～15年	昭和13年、立川航空廠大刀洗支所、第五航空教育隊が設置、また三輪町野町に大刀洗航空機製作所建設。昭和14年には国鉄甘木線が開通、航空支廠や大刀洗製作所に引込線が引かれ軍需物資が輸送された。昭和15年9月、飛行第4戦隊は熊本県の菊池に移駐、10月には大刀洗陸軍飛行学校が開校。昭和16年には陸軍航空輸送部大刀洗支部が臨時編成	戦備-318 / 小郡二-1037, 1038, 1039, 1040 / 三町-396 / 夜町-675 / 筑前下-123 / 大刀-325, 326, 327
昭和19年～20年	昭和19年4月以降、門司商業学校より勤労動員。また周囲の生徒・学生による学徒動員・勤労奉仕で掩体の堤防を建設。また昭和19年7月以降、捷三号航空作戦準備として、留守第56師団（歩兵第148連隊補充隊＝大刀洗作業隊）等による、掩体建設などの飛行場の整備強化を実施。大戦末期になると、大刀洗飛行場には飛行第56戦隊など、海軍も含め様々な飛行戦隊や航空隊が飛来。昭和20年2月、大刀洗飛行場は大刀洗陸軍航空廠の指揮下に入る。3月以降、米軍による大規模空襲を7回受けて、壊滅状態になり、そのまま終戦をむかえた	戦本-131, 142, 151, 228, 270, 370, 417, 419, 494, 495, 566 / 北教-259 / 田三主-686 / 善導-152 / 北野町-467 / 小郡二-1044, 1056, 1057 / 筑紫下-1013 / 春中-272 / 吉二-155 / 浮下-575 / 甘下-274 / 馬-271, 272, 273, 274, 275, 276, 285, 288, 290, 291, 306 / 朝-541, 542, 754 / 芦-476 / 三-186, 187, 198, 204 / 三町-390, 391, 397, 401, 404, 408, 411, 418, 495 / 夜町-675, 676, 1025 / 宝-475 / 筑前下-124, 125, 126, 133, 134, 135, 137, 138, 139, 151, 152 / 大刀-312, 327, 328
【自治体史頁②】 戦本-56, 57 / 北教-259 / 福四-311 / 福昭前-433, 440 / 久上-238 / 善導-20 / 田川下-75 / 小郡二-1061 / 小郡五-1294 / 小郡七-196, 218 / 小郡補-483, 488 / 甘下-839 / ひ-707, 710 / 馬-224, 241, 242, 818, 820 / 郷那-155 / 三-196, 274 / 三町-494 / 夜-137, 139, 186 / 夜行-364, 367, 369, 370 / 筑前下-111, 112, 416, 418, 419, 420 / 大刀-442, 443, 444 / 樵下-417, 418		
大刀洗北飛行場		
昭和19年	昭和19年3月、陸軍は朝倉郡夜須村四三嶋の雑木林を切り開き、重爆撃機、重戦闘機用のコンクリート滑走路の建設を開始した	春中-215 / 甘下-274 / 三-184 / 三町-396, 494 / 夜-137, 138 / 筑前下-119, 120
昭和20年	昭和20年2月、学徒動員などにより大刀洗北飛行場完成。飛行機隠蔽のためコンクリート製を含む掩体が高場、大久保、高上、野町に40～50基造られた。立花山には高射砲陣地が設置	戦本-494 / 馬-271 / 三町-397, 492, 493 / 夜行-31, 370 / 夜町-674, 675, 1025 / 筑前下-120, 151, 152
【自治体史頁2】 小郡二-1042 / 小郡七-218 / 春中-885 / 夜-186 / 筑前下-口絵5, 124, 139, 419, 420		
大刀洗東飛行場		
昭和20年	昭和20年春から、朝倉郡三奈木村の荷原川西側の平野部に滑走路建設。完成と同時に終戦	筑前下-120
芦屋陸軍飛行場		
昭和14年～20年	現地調査の結果、三里松原に飛行場が建設されることになり、福岡県が施工に当たった。昭和15年から着手し、昭和17年に完成。拡張工事は引き続き行われた。昭和17年5月29日、芦屋飛行場の開成式が挙行された。同年12月13日、芦屋飛行隊第124部隊の入隊式が挙行された。昭和19年、北九州の空中での防空戦闘は、小月に司令部を置く第19飛行師団（のち第12飛行師団）が当たり、隷下の飛行第4戦隊は小月、飛行第59戦隊は芦屋に配備された。また昭和19年4月以降、門司商業学校などから勤労動員。同年夏以降、広島留守第5師団による整備強化を実施。昭和20年4月には、陸海軍の協定により海軍のロケット機「秋水」の基地に設定される	戦本-67, 133, 150, 271 / 北教-259 / 福八-520 / 福昭後-836 / 新福城-55 / 行下-289 / 中間中-955 / 大野下-660 / 芦屋-505, 506, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 773 / 芦-468, 474, 475, 476, 477, 486, 493, 497, 498, 499, 503, 504, 506, 509, 510, 511, 512, 514, 515, 517, 518, 519, 889 / 岡-434, 435, 537, 539, 1084, 1086 / 三町-399 / 勝下-966 / 樵下-295
曾根飛行場		
昭和18年～20年	航空基地増強のため、昭和18年に陸軍が着工。昭和19年4月以降、門司商業学校などから勤労動員。昭和20年2月から第170独立整備隊（靖19055）、4月には第82飛行中隊（靖19545）が学生の勤労動員などを得て設営したものの終戦までに完成しなかった。戦後、米軍が完成	戦本-494 / 北現-665 / 北教-259 / 小倉補-305 / 直下-646 / 田川下-79 / 行下-289 / 樵下-417, 418
直方飛行場		
大正13年～昭和20年	大正13年、直方飛行場、検査に合格し、5ヶ年間の正式使用許可を受けた。大刀洗より祝賀飛行。その後、昭和20年の佐世保鎮守府の特攻基地配置図上でも存在	戦本-489 / 直下-1133
福岡第一飛行場（雁ノ巣飛行場）		
昭和11年～20年	昭和11年に旧通信省が雁ノ巣に飛行場を建設。正式名称は福岡第一飛行場。それまであった名島飛行場は福岡第二飛行場となった。当初は日本航空輸送株式会社が使用していたが、第二次世界大戦中は施設が軍事用に拡張されていった。昭和13年5月、福岡第一飛行場に海軍予備航空隊福岡支部が結成され、終戦まで海軍により使用された。また陸軍の飛行第4戦隊も、昭和16年8月に1個中隊が派遣されたほか、飛行第1戦隊も一時期飛来。昭和20年4月の大刀洗への空襲では、「屠龍」1機が迎撃に撃墜して体当たり攻撃で墜落	戦本-29, 67, 142, 151 / 福三-3, 217, 218, 272, 273 / 福四-380, 382, 790, 799, 805, 812 / 福八-520, 522, 523, 527, 528, 540, 543, 547 / 福九-140, 143, 144, 146, 152, 161, 163, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 174, 175 / 福昭前-432, 433, 438, 439, 440, 441, 442 / 福昭後-830, 831, 836 / 新福城-55, 58 / 小郡二-1036 / 小郡七-212 / 春中-268 / 春資-688 / 浮上-986 / 馬-211 / 新志下-756 / 郷那-155 / 夜-137 / 筑前下-131, 136 / 大刀-324 / 樵下-295
福岡飛行場（名島水上飛行場、福岡第二飛行場）		
昭和5年～11年	昭和5年、名島に水上飛行場が完成。昭和11年、雁ノ巣に大規模の飛行場が完成すると名島飛行場は福岡第二飛行場となった	福四-320, 321, 329, 772, 779 / 福昭前-431, 432, 433, 434, 439 / 新志下-755

年次	概要	自治体史頁①
福岡飛行場		
昭和20年	戦史叢書に陸軍飛行場とあるも位置等不明。昭和20年4月には、陸海軍の協定で海軍のロケット機「秋水」の基地に設定。同年7月頃の第6航空軍の作戦計画では、飛行第2戦隊が使用	戦本-151, 271, 495
蓆田(蓆田) 飛行場(板付基地・福岡国際空港)		
昭和19年～20年	昭和19年2月、陸軍が北九州の防衛基地として蓆田地区の用地を買収し、同年5月に蓆田飛行場を完成させた。米軍の沖縄上陸とともに偵察第1戦隊が配属され、沖縄に上陸した敵軍の偵察に活躍した。終戦後、米軍に接収され、板付空港となり、雁ノ巣の航空施設などと合わせて板付基地となった	戦本-370 / 福八-519, 520, 522, 525, 527, 528, 538, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 554, 556, 558, 559, 561, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 570, 571, 572, 727, 728, 739, 740, 743, 747, 749, 750, 751, 758, 760 / 福九-140, 142, 143, 144, 145, 146, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 163, 164, 167, 170, 174, 175, 178, 180 / 福昭後-93, 94, 806, 831, 835 / 新福城-55, 58 / 田川下-82 / 八年-181 / 春中-238, 256, 258, 268, 396, 397, 402, 403 / 大野下-672, 673, 681, 682 / 古賀-807 / 山田市-504 / 新志下-757 / 宇-549 / 筑前下-116, 139 / 糸-1170 / 椎下-295 / 築城上-730
元岡飛行場(大日本飛行協会福岡飛行訓練所)		
昭和16年	福岡飛行訓練所に元岡飛行場が建設	新志上-926, 931
岡山飛行場(筑後地方航空機乗員養成所・筑後陸軍飛行場)		
昭和17年～20年	逓信省航空局により、筑後地方航空機乗員養成所として、昭和17年頃から岡山村(現八女市)で工事が始まるも、陸軍が接収。昭和19年初頭には飛行機の発着訓練を実施。飛行場の範囲は今福の南西から西日本短大付属高校の辺りで、境界には深い溝あり。終戦近くには飛行機機材は分散疎開で立花町兼松や広川町六田の火山灰洞窟を整備して保管	戦本-494, 566 / 久三-1084 / 城島-453 / 八下-238, 239, 240 / 八年-181 / 黒-579, 580 / 上陽郷-320, 325 / 立花年-80 / 筑後二-515 / 筑後三-1144 / 広下-192, 193, 204, 210
門司兵器製造所		
明治28年～38年	三井八郎右衛門が古城山の北西麓を埋め立てて軍器製造所用地として献納。東京砲兵工廠から大尉以下職人80人が移動。明治28年5月、野戦首砲廠門司兵器修理場として正式命名。明治30年、大阪砲兵工廠門司兵器製造所(製造機関)と改称。日露戦争時には兵器を各方面に急送した	北現-349, 350, 363, 380, 381 / 北産I-119 / 北産II-413, 634, 635, 636, 637 / 小倉統-345, 346, 347
大正5年	大正5年、門司兵器製造所は小倉に移転、大阪砲兵工廠小倉兵器製造所と改組	北現-381 / 小倉統-346
大正13年	関東大震災後の軍用地払い下げ時、門司市が跡地の払い下げを要望	北産I-692, 693
【自治体史頁②】北産I-967, 979 / 門司-903 / 小倉下-607 / 小倉統-1011, 1024		
門司兵器本廠・門司兵器支廠		
明治28年～38年	明治28年、門司に砲兵第三方面本署を開設し、明治29年9月、門司兵器支廠(兵器管理・修理)と改称。日露戦争時には、兵器を各方面に急送。明治末年には、門司兵器本廠も設置	北現-350, 363, 380 / 小倉下-607 / 小倉統-345, 346, 347, 1011, 1024 / 新福城-95
大正2年～5年	大正2年、門司兵器本廠・門司兵器支廠が廃止され、小倉兵器支廠門司出張所に改組。大正6年、門司出張所は廃止。門司での兵器管理・修理は廃止され、小倉に集約された	北現-381 / 北産I-1026 / 企-333, 334
大正13年	関東大震災後の軍用地払い下げ時、陸軍用地として現存	北産I-693
【自治体史頁②】門司-900, 904, 906		
小倉兵器支廠・小倉兵器補給廠		
明治31年～大正7年	明治31年、第12師団設置と同時に小倉兵器支廠が設置。大正2年には門司兵器本廠・門司兵器支廠が廃止され、小倉兵器支廠門司出張所に改組、その後門司出張所は廃止され、兵器管理・修理は小倉に集約される。大正7年、城野に移転。兵器の補給業務を担当	北現-354, 381, 382, 668, 670, 北産I-856 / 小倉統-346, 347 / 企-331, 332, 333, 334, 335 / 新福城-95
昭和12年	昭和12年、日中戦争で動員下令、支那駐屯軍第2野戦砲兵廠や工兵廠を編成して出動させる	北現-651
昭和15年～20年	昭和15年、小倉兵器補給廠と改称。昭和17年10月、陸軍兵器行政本部長に直属。昭和20年2月には第16方面軍の兵器廠となり、6月には西部軍管区司令官に隷属。小倉や山田など7か所に分廠、門司と福岡に出張所、小富士、羽犬塚、鹿見島など12か所に集積所を設置し、戦時補給体制確立を図った。同年「決戦補給給」を制定。山門郡瀬高町に移転準備中に終戦	戦本-53, 386, 387, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 401, 481, 483, 484, 513, 551 / 戦備-338 / 北現-653, 668, 670, 673, 692 / 北教-259, 278 / 北産II-738, 740 / 春中-215
【自治体史頁②】北現-710, 711, 731, 735, 819 / 小倉下-609 / 小倉統-342, 1013, 1014 / 久十一-20 / 新志上-951		
小倉兵器製造所・小倉工廠・小倉造兵廠		
明治31年～大正12年	大正5年4月、小倉兵器製造所(小倉城内東側)開設。門司兵器製造所は小倉移転、大阪砲兵工廠小倉兵器製造所と改組。大正12年、陸軍造兵廠設置で小倉兵器製造所はその直轄に	北現-354, 381, 北産I-119 / 北五市-38 / 小倉統-343, 345
大正12年～昭和12年	大正12年、関東大震災で陸軍造兵廠東京工廠が壊滅。その後、誘致運動の末に昭和2年に小倉工廠の設置を決定。昭和15年竣工、小倉兵器製造所を合併して昭和18年、小倉工廠が正式発足。小倉城内や周辺に設置。昭和10年、東京から移転完了。日中戦争突入で工場増設	北現-382, 383, 384, 385, 575, 582 / 北産I-692, 693, 694, 695, 714, 715, 839 / 北産II-700, 701, 705 / 小倉統-344, 345, 346 / 続久上-33 / 添下-94
昭和15年～20年	昭和15年4月、陸軍造兵廠が陸軍兵器本部に改組、小倉工廠が「小倉造兵廠」に改称。城野の小倉兵器支廠は「小倉兵器補給廠」に改称。小倉造兵廠は小倉兵器補給廠とともに陸軍兵器本部の直属となる。同年、小倉造兵廠春日製造所の用地を買収。昭和17年、陸軍兵器本部は陸軍兵器行政本部に改組され、小倉造兵廠に春日・糸山(宇佐市)の2製造所が新設された。14の軍需工場も管理監督。昭和18年には、大規模な汚職事件が発生。昭和19年以降、勤労動員が始まり、女子挺身隊も動員され風船爆弾を製造。同年以降、空襲時の民家の延焼から守るため、周辺の民家を取り壊す強制疎開。昭和19年6月16日のB29初空襲では、女子挺身隊など80名以上の犠牲者。空襲後、日田・宇佐の山中に工場の一部を疎開。昭和20年8月9日には、原爆第二号の当初投下目標に	戦本-53, 148, 149 / 戦備-338 / 北現-645, 654, 668, 669, 671, 672, 675, 680, 687, 688, 692, 701, 702 / 北教-257, 258, 259, 261, 264, 277, 424, 686, 744 / 北産I-862 / 北産II-689, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 719, 720, 721, 722, 723, 727, 729, 731, 732, 733, 738, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 755 / 北五市-26, 28 / 企-331, 332, 333, 334 / 久三-1119 / 春中-211, 212, 241, 270, 272 / 大野下-681 / 広下-196 / 添上-666 / 勝下-357
【自治体史頁②】北現-711 / 北産I-668, 669, 856, 967, 968, 979, 989, 1027 / 北産II-637, 692, 694 / 北総-421 / 門司-900, 904, 906 / 小倉下-598 / 小倉統-343, 1034, 1035 / 小倉補-306, 307 / 戸二-794 / 直下-1147 / 田川中-532 / 田川下-79 / 黒-579 / 豊下-329 / 春郷-2 / 若宮下-275 / 稲築上-298 / 古賀-885 / 犀-1149 / 椎下-417		
小倉陸軍造兵廠春日製造所		
昭和15年～20年	昭和15年、小倉造兵廠春日製造所の用地を買収。銃器製造工場に。周辺学校より勤労動員で多数が動員される。昭和20年4月には大分県日田市に疎開	北現-669 / 福八-527, 529 / 福昭後-799, 803, 835 / 新福城-58 / 久三-1086 / 春中-211, 212, 229, 241, 242, 244, 268, 269, 270, 271, 272, 274, 276, 299, 300, 302, 388, 390, 391, 396, 397, 398, 884, 886 / 春資-640, 642 / 春郷-2 / 大野下-675, 676, 681
曾根製造所(東京第二陸軍造兵廠曾根製造所)		
昭和8年～12年	昭和8年に着工。昭和12年に曾根製造所開設。公表上は火薬製造所としていたが、秘密裏に毒ガスを生産。昭和11年新設の東京工廠に所属。正式には東京第二陸軍造兵廠曾根製造所	北現-669, 670, 721, 816 / 北五市-31 / 北六-18 / 行合-419

年次	概要	自治体史頁①
長谷弾薬庫 (門司弾薬庫)・軍用倉庫		
明治28年	明治28年3月、門司丸山に長谷弾薬庫・軍用倉庫が設置された	北現-350 / 北産Ⅰ-119 / 北産Ⅱ-634
大正13年	大正13年、関東大震災後の軍用地払い下げ時、門司市が跡地の払い下げを要望	北産Ⅰ-692, 693
富野弾薬庫		
昭和16年	昭和16年に竣工。足立山北側の独立丘の谷間に、下関砲台用ならび朝鮮海峡系要塞砲台用の総予備弾薬庫として洞窟式弾薬庫を設置した	戦本-148 / 北現-670, 711, 735, 818 / 北総-519
山田墳塲所 (山田弾薬庫・小倉兵器支廠山田分廠)		
昭和13年～20年	終戦直前に竣工。ただし昭和13年頃から、女子連合青年団の勤労奉仕による火薬の袋詰め作業は実施。小倉兵器支廠山田分廠として開設した。主に小倉工廠用の弾薬塲塲所として使用され、「山田弾薬庫」と通称された。終戦後は米軍に接収され、朝鮮戦争やベトナム戦争の前線用の弾薬庫として利用された	戦本-148, 149 / 北現-670, 北産Ⅱ-738, 740 / 北五市-965, 966 / 北一-59, 79 / 北二-73 / 北三-84 / 福昭後-836 / 豊下-329, 330, 331, 337, 338 / 春中-215 / 勝下-357 / 樺下-417, 424
寺山補給廠 (正式：小倉陸軍兵器補給廠小富士常駐班)・小富士集積所		
昭和15年	小倉兵器補給廠が九州に開設していた7分所、2出張所12集積所の一つ〔志摩町史〕は、寺山の才木地内に陸軍燃料補給廠設置と記載。久家地内寺山地区から久家・香月地区に至る農地、山林等に、小浜の工兵隊船部出張所の跡地を含む敷地に、昭和16年初頭に完成した。戦車用モーターやガソリンを貯蔵し、戦線への補給基地となる。昭和20年1月、空襲に備え貯蔵用の壕の掘削を開始、8月には艦砲射撃に備え、ドラム缶は山門郡瀬高町付近に移転	二平-248 / 志摩-871, 872 / 新志上-950, 951, 952 / 新志下-756
陸軍衣料廠		
昭和18年	福岡市堅粕に所在。昭和18年以降、女子連合青年団が軍衣縫製を行う	春中-215
被服廠福岡支廠		
昭和20年	昭和20年4月、三井郡小郡のゴルフ場跡地に、陸軍被服廠福岡支廠が開設。生産が始まったが、すぐに終戦となった	戦本-387, 393, 483 / 久十一-865 / 小郡二-1047 / 小郡三-14, 17 / 小郡七-223, 224 / 筑前下-134, 137
大刀洗陸軍航空廠		
大正14年～昭和13年	大刀洗陸軍航空廠は、大正8年赴任の飛行第4中隊の整備兵を嚆矢とする。大正14年、飛行第4連隊昇格時に、連隊付属の「材料廠」として正式に確立。昭和10年、陸軍航空本部の編成が改正され、陸軍航空廠は本廠を東京に置き、順次支廠を設置した。昭和13年7月、飛行第4連隊の材料廠は「立川航空廠大刀洗支廠」とされ、飛行機の資材部門が航空廠の管轄となる	小郡二-1039, 1040 / 甘下-273 / 馬-241, 244 / 三町-391, 399 / 筑前下-125 / 大刀-325
昭和15年～19年	昭和15年2月、大刀洗航空支廠が発足。同年7月、大刀洗航空廠に昇格。材料廠時代の敷地に加え、第五教育隊の西から小郡・松崎に至る広大な土地に、30棟に及ぶ施設と2棟の大格納庫を持つ巨大組織となった。昭和17年10月、芦屋、菊池、新田原、小月、知覧の各飛行場に五つの分廠を設置。昭和19年10月、平時編制から臨時編成部隊としての航空廠を編成	戦本-53 / 戦備-337, 442 / 甘下-273 / 馬-242, 267 / 三町-399 / 筑前下-125, 126
昭和20年	昭和20年2月、大刀洗飛行学校の閉鎖により、大刀洗飛行場全体を指揮下に取め、南進する飛行部隊の中継、整備、補給基地としての機能を果たす。同年3月、米軍の大刀洗空襲により大きな被害。大崎・大保(小郡)、金川、堤、馬田(甘木)などへ工場機能を分散。その後終戦を迎えた	北野町-467 / 小郡二-1044 / 甘下-274 / ひ-435 / 馬-271, 274, 275, 276 / 朝-542 / 芦-498 / 三町-391, 399, 401, 402, 403, 448, 495 / 筑前下-126, 127, 134, 135, 137, 139 / 大刀-328, 337
	【自治体史頁②】久三-1116 / 小郡三-14 / 小郡七-215, 217, 219 / 春中-212 / 福岡通-693 / 浮下-411, 493 / 夜町-675 / 筑前下-130, 419 / 大刀-327, 335, 443	
上西郷弾薬庫 (陸軍航空廠北九州弾薬庫福岡出張所)		
昭和19年～20年	昭和19年、大刀洗航空隊への補給物資集荷所(陸軍航空隊大刀洗航空補給廠支所)を担うため、陸軍の要請で突貫工事で建設されたが、北九州や大刀洗の空襲を受け、弾薬庫は本来の役目を果たせないまま終戦を迎えた	福岡通-691, 692, 693, 694, 695 / 福岡一-779, 780, 781, 782 / 津通-904
渡辺鉄工所		
昭和5年～18年	海軍指定工場。昭和5年、飛行機部門を福岡市千代町から筑紫郡那珂町へ移転。翌年には水中兵器部門も移転し、魚雷発射管や爆雷を製造。昭和11年には隣接する春日村にも工場を拡張。昭和18年10月、九州兵器と九州飛行機に分離	豊下-331 / 小郡七-213 / 春中-211, 212, 214, 228, 239, 241, 884 / 春郷-2 / 大野下-525, 675, 676, 684 / 馬-241 / 三-398 / 筑前下-131, 132
九州兵器株式会社 (旧渡辺鉄工所)		
昭和18年	昭和18年、渡辺鉄工所は水中兵器部門と飛行機部門を分離し、水中兵器部門は別会社の九州兵器となる。魚雷発射管などを製造したが、戦争末期には大砲分野にも進出。後に一部の工場は糟屋郡篠栗村へ疎開	直下-646 / 豊下-331 / 小郡七-213 / 春中-211, 228, 229, 233, 239, 241, 242, 243, 244, 247, 248, 249, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 260, 262, 263, 264, 265, 267, 268, 316, 390, 391, 396, 397, 885, 886 / 大野下-272, 273, 274, 525, 634, 675, 676 /
九州飛行機株式会社 (旧渡辺鉄工所)		
昭和18年	昭和18年、渡辺鉄工所の分離で航空機製造部門は九州飛行機へ。昭和20年4月には工場の緊急疎開のため、近郊の荷馬車に出動を要請し、製作機械を疎開地へ。疎開先は春日村内や大野村の半地下式工場、筑紫郡原田のセメント工場、山門郡瀬高町など各地。なお春日村内の山林地区の疎開地が坑木増産で切り出され、迷彩疎開の効果を減じたため、県知事に伐採中止を依頼	福八-526, 527 / 福昭前-730 / 久三-1084, 1116 / 田川下-78 / 行下-289, 318 / 小郡二-1047 / 小郡五-1279 / 筑紫下-1016 / 春中-211, 228, 229, 233, 239, 241, 242, 243, 244, 247, 248, 249, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 260, 262, 263, 264, 265, 267, 268, 316, 390, 391, 396, 397, 885, 886 / 大野下-272, 273, 274, 525, 634, 675, 676 /
大刀洗航空機製作所株式会社		
昭和11年～20年	昭和11年12月上旬、福岡にあった航空機メーカー渡辺鉄工所株式会社が朝倉郡三輪村野町に工場を建設し、渡辺鉄工所野町工場とした。昭和12年10月、車輪などの部品製造を始め、同年12月12日には渡辺鉄工所から「大刀洗航空機製作所株式会社」として独立。昭和16年、三輪村依井区内「朝影」に員工住宅を建設。昭和18年10月より、飛行機生産も開始。昭和20年2月から3月にかけて朝倉郡安川村下洞、朝倉郡朝倉村山後、三井郡本郷村の三か所へ工場疎開。同年3月31日、米軍の空襲により壊滅する(『春日市史 中巻』では、昭和18年の渡辺鉄工所分離の際に別会社として大刀洗製作所を発足と記載)	続久上-38 / 北野町-467 / 小郡二-1040, 1045 / 小郡七-213 / 春中-267 / 浮下-572 / 甘下-273 / ひ-435, 710 / 馬-241, 242, 243, 267, 273, 277 / 朝-542 / 三-180, 184, 187, 196, 204, 275 / 三町-390, 398, 399, 404, 405, 448, 493, 496, 20, 22 / 夜行-368, 370 / 夜町-675 / 筑前下-131, 132, 133, 135, 136, 139, 151, 152, 419 / 大刀-325, 331, 337, 443
日本航空郵送株式会社		
昭和4年～11年	昭和4年4月、大刀洗飛行場の一角に日本航空郵送株式会社大刀洗支所が開設。大刀洗～大阪(『小郡市史第二巻』のみ大刀洗～大阪～東京)の郵便飛行開始。同年旅客輸送も開始し、路線も東京～大刀洗～大連などに延長。昭和11年6月、糟屋郡雁ノ巣へ移転	小郡二-1035, 1036 / 小郡七-207, 212 / 甘下-272 / 馬-211 / 三-183 / 三町-392, 393, 394 / 夜-137 / 夜行-366 / 筑前下-131 / 大刀-324
久留米第一陸軍予備士官学校		
昭和15年～20年	昭和15年、久留米の高良内町に戦車第1連隊東側に着工。翌年8月「久留米第一陸軍予備士官学校」として発足。教育總監部の管下。満州・奉天から移転の第6期から第12期までが卒業した。教育組織は歩兵生徒隊で開始されたが、昭和20年7月には工兵・通信生徒隊を増加	戦本-53 / 戦備-406 / 久四-23, 24 / 久十一-11, 12, 16, 28, 35, 38
久留米第二陸軍予備士官学校		
昭和14年～20年	昭和14年11月、独立山砲第3連隊の跡地に「久留米陸軍予備士官学校」として設置。教育總監部の管下。昭和16年、久留米第二陸軍予備士官学校に改称。後に自動車三個中隊、鞍馬一個中隊に改編。人員増で八女郡広川に分校開設、特別幹部候補生を教育	戦本-53 / 戦備-246, 406 / 久四-23 / 久十一-11, 13, 17, 29, 35

年次	概要	自治体史頁①
大刀洗陸軍飛行学校		
昭和15年	昭和15年9月、飛行第4戦隊の転出跡に、熊谷陸軍飛行学校の「大刀洗分校」が開校、同年10月には大刀洗陸軍飛行学校として独立・本校とし、西日本に点在する飛行学校教育隊の中心的役割を果たした。分校（大刀洗陸軍飛行学校分教場）は、大刀洗、筑後、日達原、健軍、玉名、菊池、黒石原、隈庄、新田原、木脇、都城、知覧、京都、岡山、大邸、大田、群山、京城に	戦備-285, 338 / 小郡二-1037, 1038 / 甘下-272 / ひ-434 / 馬-243, 244 / 朝-541 / 三-184 / 三町-396 / 筑前下-129, 133 / 大刀-325, 326
昭和18年～20年	昭和18年10月、高射砲第4連隊の転出跡地に甘木生徒隊が発足。昭和19年以降、空襲の危険が迫ると三奈木、荷原、屋形原など山麓に仮兵舎を造り分駐。昭和20年1月、本校で教官・助教による特攻隊を編成。2月、学校は戦争激化で閉鎖。大刀洗飛行場の管理は大刀洗陸軍航空廠が引き継いだ。同時に第八練習飛行隊が開校されたが、直ちに本州や朝鮮に移動	戦備-382, 383 / 馬-271 / 三町-396, 397, 398, 495, 496 / 筑前下-129, 130, 278
	【自治体史頁②】 戦本-53 / 小郡二-1048 / 小郡七-218 / ひ-709 / 馬-287, 360, 820 / 三町-400, 411, 448, 493, 21 / 夜町-675 / 筑前下-419 / 大刀-327, 335, 442, 444	
甘木生徒隊		
昭和18年	昭和18年10月、大刀洗陸軍飛行学校は高射砲第4連隊の転出跡地に甘木生徒隊を発足させる。少年飛行兵15期生約2200名が入校。後に陸軍特別幹部候補生も	戦備-382 / 北野町-467 / 馬-286 / 三-187 / 夜行-370 / 筑前下-129, 130, 139 / 大刀-325, 332, 444
大刀洗技能者養成所		
昭和15年～20年	昭和15年、陸軍は航空整備兵教育のため航空廠内に「技能者養成所（別名、陸軍航空工業学校）」が発足。昭和17年4月、大刀洗航空技能者養成所が正式開設。大刀洗航空廠の西側に三棟の養成所を建設。昭和19年以降、発動機工場は本廠の分工場となり、学徒動員も。昭和20年3月、本土決戦体制のため陸海軍の諸学校はすべて閉鎖となり、技能者養成所も閉校	小郡二-1040 / 三町-391, 400, 401, 448 / 筑前下-130, 131, 139 / 大刀-325, 326, 335
福岡衛戍・陸軍病院		
明治7年～10年	明治7年の佐賀の乱や、明治10年の西南戦争において、福岡城内などに病院が設けられる	新福城-92, 93 / 筑紫下-603, 604
明治20年～大正4年	明治20年、歩兵第24連隊の衛戍病院が、福岡城本丸などに入る。明治31年より建物を新築。大正4年、第一次世界大戦時のドイツ人捕虜が、福岡衛戍病院に入院	新福城-93, 94, 95
昭和11年～20年	昭和11年11月11日、「衛戍病院令」が「陸軍病院令」に改正。衛戍病院は陸軍病院と称し、福岡衛戍病院は福岡陸軍病院となる。昭和19年3月には福岡第2陸軍病院を臨時編成	戦本-53, 88 / 戦備-402 / 新福城-94 / 赤-575
	【自治体史頁②】 新福城-39, 40, 46, 54, 55, 59, 97, 121 / 飯中-508 / 春中-215 / 宝-477	
小倉衛戍・陸軍病院		
明治8年～40年	明治8年、歩兵第14連隊の医療機関として「小倉営所病院」が小倉城三の丸に開設。明治21年5月、衛戍条例により「小倉衛戍病院」と改称。明治32年4月、企救郡北方に移転し「小倉陸軍病院」と通称された。日清・日露戦争時には小倉陸軍予備病院が開設され、その他、分院・野戦病院・兵站病院などが編成された。明治40年の師団再編では第12師団隷下に	県筑一-91 / 北現-344, 368, 375 / 北産Ⅱ-634 / 小倉統-348 / 企-335, 336, 337, 338, 339 / 福一-1581 / 田主三-670 / 吉富-406 /
昭和17年～20年	昭和17年5月、芦屋陸軍病院（分院）が開院。太平洋戦争中は西部軍直轄部隊となり、兵站病院などの動員を担当。昭和20年6月、一部患者を田川に疎開。田川中学校を本部として小倉陸軍病院田川分院と称し、各国民学校への分遣隊を田川分院何々病棟と呼んだ	戦本-35, 52, 94, 148 / 北現-658 / 飯中-508 / 田川中-531, 532 / 香上-1225, 1226, 1227 / 添上-664, 665, 666 / 添下-94 / 芦屋-512 / 芦-477
	【自治体史頁②】 北教-424, 425 / 北総-421, 480 / 小倉下-592, 598 / 小倉統-1008, 1011, 1013 / 戸二-751, 752 / 豊下-223 / 新志上-848 /	
久留米衛戍・陸軍病院		
明治7年～10年	明治7年の佐賀の乱で、福岡の病院が遠いため、久留米にも病院が設けられる。明治10年の西南戦争でも設置	新福現一-764 / 筑紫下-603, 604 /
明治30年～大正14年	明治30年5月、歩兵第48連隊医務室の一部を仮病院に新設。11月、歩兵第24旅団司令部付近の新築病院に移転。明治36年3月、第12師団から第6師団に移管。12月には熊本衛戍病院久留米分院の名称で予備病院開設。明治40年に第18師団、大正14年5月に第12師団に移管	新福城-94 / 久中-664, 665 / 久三-416, 769 / 久十一-228
昭和11年～20年	昭和11年11月11日、「衛戍病院令」が「陸軍病院令」に改正。衛戍病院は陸軍病院と称し、久留米衛戍病院は久留米陸軍病院となる。昭和20年、久留米陸軍病院が朝倉中学に疎開	戦本-53, 88 / 久十一-229, 230 / 御井-423 / 小郡二-1047 / 小郡補-464 / 筑前下-137 / 香上-1225
	【自治体史頁②】 早全-297 / 続久上-38 / 続久下-188, 216, 238, 246, 256, 265, 275, 288, 91, 113, 117, 118 / 久四-23 / 久六-265, 356, 364, 373, 376, 380, 395 / 久十一-11, 12, 16, 27, 35, 37, 228, 229, 230 / 飯中-508 / 大和下-28 / 大野下-538 / 甘下-271 / 宝-476 / 大平-281	
久留米陸軍病院二日市武蔵臨時転地療養所・二日市（陸軍病院）保養所		
昭和8年～14年	昭和8年4月、二日市の温泉保養所が完成。愛国婦人会福岡支部幹部が寄贈した木造二階建て医療施設で前身は別荘。昭和14年以降、春日村などの婦人会や女子青年団も慰問に	春中-214, 215 / 筑紫下-1022, 1027 / 筑紫年-55
大刀洗陸軍病院		
大正8年～昭和20年	大正8年10月、大刀洗飛行場管内東側に久留米陸軍病院大刀洗分院として開院。昭和15年、朝倉郡立石村来春に新築移転し、大刀洗陸軍病院へと昇格。昭和20年3月の大刀洗空襲では、負傷した児童を治療。空襲を受けて、病院は朝倉郡大福村の大福国民学校へ疎開した	続久下-275 / 甘下-271, 273 / 朝-754 / 朝他-不明 / 三-187 / 三町-407 / 筑前下-127
小倉連隊区		
明治29年	明治29年、第12師団設置。小倉・大分・久留米・佐賀の各連隊区を置き、小倉連隊区の管轄は福岡県・大分県・山口県のそれぞれ一部	北現-351 / 小倉統-340, 341 / 築城上-618
明治40年～昭和3年	明治40年、第18師団創設に伴う再編では、第12師団隷下にとどまる。昭和3年、小倉工廠設置のため、小倉城内から第12師団司令部跡に移転	北現-374, 382 / 小倉統-342 / 福昭前-465 / 行合-370 / 行下-322 / 中間中-921
昭和14年	昭和14年、留守第12師団隷下として、小倉に所在	戦本-7
	【自治体史頁②】 小倉統-1012, 1034 / 田川中-401 / 行資-43, 44 / 春中-204 / 岡-429 / 朝七上-128 / 豊下-227, 314 / 宝-424	
福岡（久留米）大隊区・連隊区		
明治21年～30年	明治21年、福岡市大名町に福岡大隊区司令部を設置。明治29年の第12師団設置時には一時廃止され久留米連隊区に。明治30年、福岡連隊区司令部。翌年須崎裏町砲台跡に移転	北現-351, 355 / 福一-1101, 1102 / 久中-654
明治40年	明治40年の第18師団創設に伴う再編では、福岡連隊区として第12師団隷下（第12師管）にとどまる	戦本-5 / 北現-374 / 小倉統-341, 342 / 福一-1102
昭和2年～15年	昭和2年、福岡城内に新庁舎を建設して移転。昭和14年、留守第12師団（後に第56師団）隷下として、福岡に所在。昭和15年、一府県一連隊区制となる	戦本-7 / 戦備-288, 338 / 北現-374 / 福昭前-464, 465
昭和19年～20年	昭和19年4月の第86師団（旧留守第56師団）編成時でその隷下に。7月、留守第56師団動員でその隷下に編入。昭和20年3月、平時編制から臨時編成部隊としての連隊区司令部に改編	戦本-53, 88, 107, 108 / 戦備-480
	【自治体史頁②】 福一-1561, 1562, 1566, 1592 / 福二-1408, 1416 / 福明-254 / 新福城-40, 42, 43, 183, 300, 301 / 早全-287 / 春中-234, 333, 339, 470 / 大野下-526, 527, 529, 530, 610 / 甘下-252 / 馬-214 / 志-501 / 久山下-154, 155, 262, 263, 264, 265, 266 / 宝-424	
久留米連隊区		
明治40年	明治40年、第18師管の連隊区として、久留米に所在。師団司令部と同一敷地	戦本-5 / 久十一-19
昭和14年	昭和14年、留守第12師団隷下として、久留米に所在	戦本-5

年次	概要	自治体史頁①
福岡地区司令部		
昭和20年	昭和20年3月、連隊区の防衛を担う地区司令部設置の下令で設置。師管区司令官に隷属し地区特設警備隊を隷下に。6月には隷下の地区特設警備隊などと共に、第56軍の指揮下に	戦本-406, 407, 415, 461 / 戦備-480
福岡俘虜収容所		
明治37年～38年	日露戦争時の捕虜を全国各地で収容する中、福岡市でも福岡城や東中洲共進館、筥崎宮前などに収容所を設置。後に戦利兵器格納所にも	福一-1040, 1041, 1042, 1071 / 新福城-43, 95, 119, 181, 182, 196 / 久山下-186
大正3年	大正3年11月、第一次世界大戦の青島攻略戦後、福岡にドイツ人捕虜を収容。須崎と柳町に収容所を設置	福一-1042, 1043 / 福二-774, 775, 776, 779 / 新福城-94, 183, 196 / 川上-553, 554, 555, 556
昭和18年～20年	昭和18年1月、西部軍司令部内に福岡俘虜収容所本部事務所を開設。その後福岡俘虜収容所本所と改称され、昭和20年5月に中央高等青年学校に移転	戦本-51, 197 / 新福城-188
【自治体史頁②】 福二-1412 / 新福城-301		
福岡俘虜収容所分所		
昭和17年	昭和17年、俘虜派遣規則によって、全国に7ヶ所の管轄区と76分所が設置された。福岡には18の分所が設置され、最初の捕虜移送は福岡俘虜収容所第三分所（八幡製鉄所）であった	水補-266, 267, 268, 269 / 赤-712
門司（大里）捕虜収容所・小倉捕虜収容所		
明治38年	明治38年1月10日、門司（大里）捕虜収容所開設、旅順降伏兵などを収容。同年3月には奉天会戦捕虜受入で、小倉の日明に捕虜収容所を建設。将校の捕虜収容所に小倉の陸軍借行社を充てる。講和条約成立後、捕虜の送還が始まり、明治38年11月までに両収容所は閉鎖	北現-360, 361 / 北産Ⅱ-635 / 北総-457 / 福一-1041, 1043 / 水補-266, 267
久留米俘虜収容所		
大正3年～9年	大正3年10月6日、第一次世界大戦に伴う俘虜収容所の久留米設置を告示、10月9日に最初のドイツ人捕虜が到着。当初は市内4か所に分散したが、大正4年6月に久留米俘虜収容所に転収、全国で最大の人員に。戦後順次送還し、大正9年3月12日閉鎖	久中-637, 638, 640, 641 / 続久下-98, 99, 101 / 久三-768, 769, 770 / 久六-279, 300, 311 / 御井-424, 425 / 北野町-448 / 田川下-81
小倉衛戍監獄・小倉陸軍刑務所		
明治15年	明治15年12月、創設に入るも急遽中止。明治31年10月、第12師団新設と共に企救町に開設。大正12年4月、小倉陸軍刑務所に改称	戦本-51 / 小倉統-349, 350, 1013 / 企-340
陸軍運輸部門出張所		
明治29年	明治29年に門司の東町港に設置。太平洋戦争開戦時も存在	戦備-337 / 北産Ⅰ-119
門司兵站部		
昭和16年	昭和16年6月、作戦資材の対南方推進等に関連し、門司棧橋通に門司兵站部設置	戦本-35, 51, 197 / 戦備-310 / 北現-653
陸軍航空輸送部大刀洗支部		
昭和16年	昭和16年8月、航空資材空輸を目的とする陸軍航空輸送部が編成、大刀洗などに支部を有した	戦本-484
博多兵站事務所		
昭和20年	第16方面軍の指揮下。昭和20年7月30日、主力は二日市に移動	戦本-484
陸軍航空本部福岡事務所		
昭和期	陸軍の軍需工場監督官庁として、大濠公園に所在	春中-267, 268
門司陸軍軍需輸送統制部		
昭和18年～20年	昭和18年2月8日、臨時編成。昭和20年1月、福岡へ	戦備-367, 458
福岡陸軍軍需輸送統制部		
昭和20年	昭和20年1月13日、門司陸軍軍需輸送統制部より改編。陸軍省管下	戦本-53 / 戦備-458
門司陸軍輸送統制部		
昭和20年	昭和20年2月、陸軍輸送統制部令改正で西部軍管区に隷属。第16方面軍の参謀1人も部員を兼任	戦本-190, 398, 401, 404
門司地区鉄道司令部		
昭和20年	昭和20年4月設置。第16方面軍の鉄道輸送を運営。5月、局地軍事鉄道輸送に関し、方面軍司令官の区処を受ける。6月、司令官は方面軍交通部長に。広島への原爆投下時は救援に協力	戦本-401, 402, 403, 404, 479, 579, 589 / 北現-666
航空本部出張所（風29651）		
昭和20年	昭和20年4月12日、黒崎に開所	北現-665
下関防備隊（海軍）		
昭和20年	昭和20年の時点で、呉鎮守府所属。関門防備を担当	北現-667
佐世保海軍警備隊福岡派遣隊		
昭和19年	海軍の民間軍需工場の機密秘守と対空掩護のため設置。本部を九州飛行機雑餉工場に置き、志免・香椎・大牟田・若松の各工場に分屯。武装は機銃。昭和19年2月、春日村の須玖・小倉にも配備	春中-281, 282, 315, 316
第七艦隊（海軍）		
昭和20年	昭和20年4月10日編成、佐世保鎮守府所属。本土と大陸間の対馬海峡防衛に当たる。兵力は下関防備隊、海防艦2隻、第41駆逐隊（駆逐艦冬月と夏月）、第4監視艇隊、門司港湾警備隊などで、特設駆潜艇や漁船も多数	北現-667, 668
築城飛行場・築城海軍航空隊		
昭和14年～20年	昭和14年12月、仲津村、築城村、八津田村一帯にかけて築城飛行場が建設開始。昭和17年10月に築城海軍航空隊が創設。昭和18年秋、航空隊所属の零戦が編隊訓練中、2機が接触事故を起こし、山田地区平原（現：豊前市）に墜落。昭和19年3月から第2代築城海軍航空隊となる。昭和19年4月から門司商業学校より勤労働員。昭和20年に沖繩戦が始まると、築城航空隊は特攻隊編成基地となる。特攻機は鹿児島県の鹿屋基地に集結して、沖縄に出発した	北教-259 / 行下-289, 290, 291, 826 / 豊下-267, 269 / 犀-546, 547 / 椎下-275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 297, 299, 300, 301, 302 / 築城上-637, 638, 639, 640, 645, 646, 647, 648, 692, 730, 731
西戸崎海軍飛行場		
昭和期	海軍機の試験飛行場として、九州飛行機の「東海」など陸上機の試験飛行などを実施	福八-527, 529, 538 / 福九-166 / 福昭後-798 / 春中-267, 268
和白飛行場（海軍）		
昭和20年	海軍機の試験飛行場として、水上機の試験飛行などを実施	春中-267, 268
福岡海軍航空隊		
昭和18年	昭和18年11月から福岡海軍航空隊と飛行場の建設開始、昭和19年7月頃にほぼ完了（開隊は6月）。収容人員は海軍予科練習生その他軍関係者1万人で、周船寺川以東は飛行場に	戦本-489 / 元岡-190, 191 / 新志上-936 / 新志下-757
春日原海軍飛行場（海軍航空隊春日原特攻基地）		
昭和20年	佐世保鎮守府内に11か所新設された基地の一つ。一般には公表されず秘匿航空基地「牧場」として設置。練習機の特攻基地として建設されるが、離着陸の記録はなく未完成で終戦か	戦本-489 / 春中-281, 282, 313, 314, 315

年次	概要	自治体史頁①
小富士海軍航空隊		
昭和17年～19年	昭和17年、航空兵力増勢計画のため飛行予科練習生が大量採用され、航空練習隊を結成。小富士海軍航空隊も一練習航空隊として結成された。昭和18年末、小富士村辺田の波止場から加也村大石落石におよぶ広大な土地の用地買収を実施。昭和19年5月15日、鹿児島海軍小富士分遣隊として発足。昭和19年7月1日、福岡海軍航空隊の小富士分遣隊として所属変更。同年10月、小富士海軍航空隊として独立し、第19練習連合航空隊に編入。福岡海軍航空隊は糸島郡元岡村に昭和19年6月に開隊	志摩-869, 870, 871 / 新志上-932, 933, 934, 935, 936, 938, 940, 941 / 新志下-544
昭和20年	昭和20年3月1日、練習連合航空隊により第22練習連合航空隊に編入される。昭和20年5月、本土決戦態勢の中で、飛行予科練習生の教育中止。練習生は一部を除き本土決戦要員として配備される。昭和20年6月1日、小富士航空隊は水上中特攻要員の基礎教育の航空隊となる。昭和20年7月12日、弾薬庫の爆発事故。昭和20年7月19日、小富士航空隊予科練習生のほとんどを佐世保海兵団（相浦海兵団）へ転属。昭和20年8月1日、第12特別陸戦隊に編入（長崎県北松浦郡の海岸地帯に分散派遣）	新志上-938, 939, 940, 941, 942, 943, 945, 957, 966, 967 / 新志下-29
【自治体史頁②】 福八-521 / 二平-248 / 志摩-484 / 新志下-757		
第六三四海軍航空隊・玄界基地		
昭和19年～20年	昭和19年5月、航空部隊の増強で第634海軍航空隊が岩国で編成。同年7月には瑞雲の部隊である偵察301飛行隊も横須賀航空隊で編成された。10月、第801海軍航空隊所属の偵察301飛行隊が第634航空隊の指揮下に入る。第634航空隊はフィリピンの航空戦で飛行機が全滅し、再編へ。12月、横浜航空隊で偵察302飛行隊が編成された。昭和20年2月、第801空所属となった偵察302飛行隊の瑞穂（水上偵察機）隊が指宿基地に進出（沖繩戦が始まる頃、634空の指揮下）し、後方基地の選定に入る。基地は後方基地として開発されていた頃は、小富士基地、小富士水上基地と呼ばれていたが、やがて玄界基地、玄界航空基地、玄界水上基地などと呼ばれ、634航空隊が主基地として本隊本部を置き、水上機の最大の秘匿海軍航空基地となる。昭和20年5月、634航空隊は、玄界基地を主基地として移転。桜島に分隊、玄界・桜島両基地から古仁屋基地を中継基地として沖繩艦船攻撃を再び開始した。6月 沖繩守備軍の玉碎、九州上陸を想定して、634航空隊は古仁屋基地から玄界基地へ移転完了。その後訓練を行い、終戦へ	二平-246, 247, 248 / 新志上-952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 967 / 新志下-757 /
松末基地（海軍）		
昭和20年頃	昭和20年頃、二丈町の松末に設置された秘匿基地。平時には「瑞雲」数機が奄門海岸周辺に遮蔽格納されていた	二平-246
船越基地（海軍）		
昭和20年頃	昭和20年頃、第634海軍航空隊玄海基地の司令部が置かれた。また特攻機の中継基地として、菊水隊103部隊などが次々と移駐	二平-247 / 志摩-872, 873
第二河和海軍航空隊深江基地		
昭和20年頃	昭和20年頃、知多半島東岸基地から、神風隊零式観測機と乗組員が深江海岸の松林に上陸。本土決戦に備えて飛行訓練を実施	二平-248
田野浦石炭庫・門司石炭置場（海軍）		
明治前期	明治10年代に海軍省が設置し、日清戦争を契機に本格的なものに	北産I-119
門司在勤武官府（海軍）		
昭和16年	昭和16年9月に設置。関門防備を担当	北現-667
福岡海軍監督官事務所		
昭和期	艦政本部に属し、軍需省福岡軍需監理部と共に九州飛行機工場内に所在。同社や九州兵器を監理・監督	春中-265, 267, 268
海軍探炭所・海軍燃料廠探炭部・第四海軍燃料廠（新原探炭所・志免鉱業所など）		
明治21年～大正7年	明治21年、海軍予備炭山指定。明治22年、新原に第1第2堅坑開坑。明治23年、新原探炭所は佐世保鎮守府に所属。明治26年、桜原に第3坑開坑、明治33年、新原探炭所は廃止、海軍探炭所と改称され、海軍艦政本部所属となる。明治34年11月、新原に第4坑、明治39年9月、志免に第5坑、明治43年7月、志免に第5坑補助坑（二重坑）、明治44年11月、須恵村旅石に第6坑、大正7年4月、志免に第7坑を開坑した。大正7年8月、海軍探炭所新原坑にて米騒動が発生	県産一-763, 764, 767 / 糟-380, 381 / 志-602, 603, 604, 605, 621, 622, 634, 635, 644, 645, 979, 980, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988 / 須-173, 174, 175, 176, 177, 180, 181, 182
大正10年～昭和16年	大正10年4月、海軍燃料廠新設、海軍探炭所は海軍燃料探炭部と改称され、呉鎮守府所属となる。昭和4年、海軍燃料廠探炭部本部を新原から志免（第5坑）に移動。昭和16年4月、海軍燃料廠の制度を改めて5燃料廠を設置。海軍燃料廠探炭部は第4海軍燃料廠と改称	糟-381 / 志-605, 606, 644, 645 / 須-182, 183, 184
【自治体史頁②】 篠-262, 290 / 志-979, 980, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988 / 志誌-14, 224, 244 / 須-241, 242, 244, 245, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258 / 久山下-261 / 粕町-333, 334, 335		

自治体史等略号凡例

自治体史等名	略号	自治体史等名	略号	自治体史等名	略号
戦史叢書57 本土決戦準備（2） -九州の防衛-	戦本	北九州市史 年表2	北二	福岡市史 第八巻 昭和編後編（四）	福八
戦史叢書99 陸軍軍戦備	戦備	北九州市史 年表3	北三	福岡市史 第九巻 昭和編統編（一）	福九
福岡縣史資料 第一輯	縣一	北九州市史 年表6	北六	福岡市史 明治編資料集	福明
福岡縣史資料 第四輯	縣四	北九州市史 総目次・総索引	北総	福岡市史 昭和編資料集 前編	福昭前
福岡県史 近代史料編 筑豊石炭鉱業組合（一）	県筑一	門司市史	門司	福岡市史 昭和編資料集 後編	福昭後
福岡県史 近代史料編 筑豊石炭鉱業組合（二）	県筑二	小倉市誌 下編（下巻）	小倉下	福岡市史 別巻 生活の構造と変遷を みる福岡都市圏の地図帳	福別
福岡県史 通史編 近代 産業経済（一）	県産一	小倉市誌 続編	小倉続	新修 福岡市史 資料編 近現代①	新福現一
福岡県史 通史編 近代 産業経済（二）	県産二	小倉市誌 補遺	小倉補	新修 福岡市史 資料編 近現代②	新福現二
北九州市史 近代・現代 行政社会	北現	若松市史 全	若松全	新修 福岡市史 資料編 民俗編一 春夏秋冬・起居往来	新福俗一
北九州市史 近代・現代 教育・文化	北教	若松市史 第二集	若松二	新修 福岡市史 特別篇 福岡城-築城から現在まで	新福城
北九州市史 産業経済Ⅰ	北産Ⅰ	八幡市史	八幡	新修 福岡市史 特別篇 自然と遺跡から見た福岡の歴史	新福遺
北九州市史 産業経済Ⅱ	北産Ⅱ	八幡市史 続編	八幡続		
北九州市史 五市合併以後	北五市	戸畑市史	戸		
北九州市史 年表1	北一	戸畑市史 第二集	戸二		
		福岡市史	福		
		福岡市史 第一巻 明治編	福一		
		福岡市史 第二巻 大正編	福二		
		福岡市史 第三巻 昭和前期（上）	福三		
		福岡市史 第四巻 昭和前期（下）	福四		
		元岡村誌	元岡		
		周船寺村誌	周		
		北崎村誌	北崎		
		早良郡志 全	早全		

自治体史等名	略号	自治体史等名	略号	自治体史等名	略号
大牟田市史 下巻	大牟下	小郡市史 第六巻 資料編	小郡六	久山町誌 上巻	久山上
久留米市誌 上編	久上	現代・民俗・地名		久山町誌 下巻	久山下
久留米市誌 中編	久中	小郡市史 第七巻 年表・総索引	小郡七	小・中学生のための粕屋町の歴史	粕小
続 久留米市誌 上巻	続久上	小郡市史 補遺編	小郡補	粕屋町史	粕町
続 久留米市誌 下巻	続久下	筑紫野市史 下巻	筑紫下	大川村郷土誌	大川村
久留米市史 第三巻	久三	筑紫野市史 年表	筑紫年	芦屋町誌	芦屋
久留米市史 第四巻	久四	春日市史 中巻	春中	増補改訂 芦屋町誌	芦
久留米市史 第五巻	久五	春日市史 資料編	春資	水巻町誌	水
久留米市史 第六巻	久六	春日町郷土誌	春郷	増補 水巻町誌	水補
久留米市史 第十巻 資料編近代	久十	大野城市史 下巻 近代・現代編	大野下	岡垣町史	岡
久留米市史 第十一巻 資料編現代	久十一	宗像市史 通史編 第三巻 近現代	宗通三	遠賀町誌	遠
御井町誌	御井	宗像市史 通史編 第四巻 美術と建築・民族	宗通四	鞍手郡史 下巻	鞍郡下
田主丸町誌 第三巻 ムラとムラびと 下	田主三	宗像市史 史料編 第四巻 近現代	宗史四	鞍手郡郷土史	鞍郷
善導寺町誌	善導	ふるき三郎丸のすがた	三郎	小竹町史	小竹
北野町史誌 (平成版)	北野町	玄海町誌	玄	鞍手町誌 下巻	鞍町下
城島町誌	城島	大島村史	大島	幸袋町誌	幸
城島町誌 補遺	城島補	太宰府市史 通史編Ⅲ	太Ⅲ	桂川町誌	桂
三瀧町史	三瀧	太宰府市史 近現代資料編	太近	朝倉郡誌原稿 第4 行政篇	朝四
直方市史 下巻	直下	太宰府市史 年表編	太年	朝倉郡誌原稿 第7上 防衛賑恤篇・兵事	朝七上
直方市史 補巻 石炭鉱業編	直補	古賀町誌	古賀	朝倉郡誌 原稿 その他	朝他
直方市史 資料編 下巻	直資下	福岡町史 明治編	福岡明	三輪町史 (昭和版)	三
飯塚市誌	飯塚	福岡町史 通史編	福岡通	三輪町史 (平成版)	三町
飯塚市誌	飯	福岡町史 資料編一 中世・近世 近代・現代	福岡一	夜須の歴史	夜
飯塚市史 中巻	飯中	福岡町史 資料編二 美術・建築・民俗	福岡二	夜須町行政史	夜行
飯塚市史 下巻	飯下	福岡町史 資料編四 宮座関係資料	福岡四	夜須町史	夜町
筑穂町誌	筑穂	津屋崎町史 通史編	津通	小石原村誌	小
筑穂町誌 上巻	筑穂上	吉井町誌 第2巻	吉二	宝珠山村誌	宝
筑穂町誌 下巻	筑穂下	浮羽町史 上巻	浮上	宝珠山村誌 資料編	宝資
穂波町誌	穂波	浮羽町史 下巻	浮下	筑前町史 下巻	筑前下
穂波町ものがたり	穂波も	浮羽郡史	浮	大刀洗町史	大刀
庄内町誌	庄	福岡県浮羽町郡案内	浮郡	福岡県三瀧郡誌 1925年版の復刻版	三瀧復
庄内町誌 上巻	庄上	若宮町誌 下巻	若宮下	大木町誌	大木
庄内町誌 下巻	庄下	山田市誌	山田市	稿本八女郡史	稿八
瀬田町史	瀬田	稲築町誌	稲築	広川町史 下巻	広下
田川市史 中巻	田川中	稲築町史 上巻	稲築上	広川町史 資料編	広資
田川市史 下巻	田川下	稲築町史 下巻	稲築下	広川町史 年表	広年
柳川市史 史料編Ⅵ 山門郡行政・土	柳Ⅵ	確井町誌	確井	香春町史 上巻	香上
大和町史 通史編 上巻	大和上	嘉穂町誌	嘉	香春町史 下巻	香下
大和町史 通史編 下巻	大和下	嘉穂郡誌	嘉郡	添田町史 上巻	添上
八女市史 下巻	八下	甘木市史 下巻	甘下	添田町史 下巻	添下
八女市史 年表編	八年	村誌ひなしろ	ひ	ふるさと いばる	い
黒木町史	黒	郷土史 馬田	馬	金田町史	金
上陽町 郷土史年表	上陽郷	杷木町史	杷	金田町誌	金誌
立花町史 下巻	立花下	朝倉町史	朝	糸田町史	糸
立花町史年表	立花年	みやま市史 下巻資料編	み下	郷土読本 われらの川崎	郷川
矢部村誌 ひらけゆくふるさと矢部	矢部	瀬高町誌	瀬	川崎町史 上巻	川上
星野村 年表編	星年	高田町誌	高	川崎町史 下巻	川下
星野村 行政・教育編	星行	糸島郡誌 全	糸島全	上野村誌	上野
筑後市史 第二巻	筑後二	前原町誌 全	前全	赤池町史	赤
筑後市史 第三巻	筑後三	二丈町誌	二	方城町史	方
郷土大野島村史 -大川市大字大野島-	大野島	二丈 その魅力と歴史	二歴	大任町誌	大任
大川市誌	大川	二丈町誌 平成版	二平	大任町史資料集	大任資
行橋市史 一町八村合併時	行合	志摩町史	志摩	大任町誌 ふるさと大任 上巻	大任上
行橋市史 下巻 近代・現代 民族・年表	行下	新修志摩町史 上巻	新志上	大任町誌 ふるさと大任 下巻	大任下
行橋市史 資料編 近・現代	行資	新修志摩町史 下巻	新志下	荇田町誌	荇
豊前市史 下巻	豊下	郷土誌 那珂川	郷那	犀川町誌	犀
中間市史 中巻	中間中	糟屋郡誌	糟	勝山町史 下巻	勝下
小郡市史 第二巻 通史編 中世・近世・近代	小郡二	宇美町誌	宇	豊津町誌	豊津
小郡市史 第三巻 通史編 現代・民俗・地名	小郡三	篠栗町誌	篠	豊津町史 (下巻)	豊津下
小郡市史 第五巻 資料編 中世・近世・近代	小郡五	志免町誌 (昭和版)	志誌	福岡県築上郡史 上巻	築上上
		志免町誌 (平成版)	志	福岡県築上郡史 下巻	築上下
		須恵町誌	須	椎田町史 下巻	椎下
		須恵村勢要覧	須村	吉富町誌	吉富誌
		新宮町誌	新宮	吉富町史	吉富
				築城町誌 上巻 原始、古代、中世、近世、近・現代	築城上
				大平村誌	大平